

中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書12

—東筑摩郡坂北村・麻績村内—

むかいろっ く
向 六 工 遺 跡
じゅう に
十 二 遺 跡
の ぐち
野 口 遺 跡
こ し
古 司 遺 跡
ね お いら
子 尾 入 遺 跡

1993

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(助)長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書12

—東筑摩郡坂北村・麻績村内—

むかいろっ く
向 六 工 遺 跡
じゅう に
十 二 遺 跡
の ぐち
野 口 遺 跡
こ し
古 司 遺 跡
ね お いり
子 尾 入 遺 跡

1993

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター



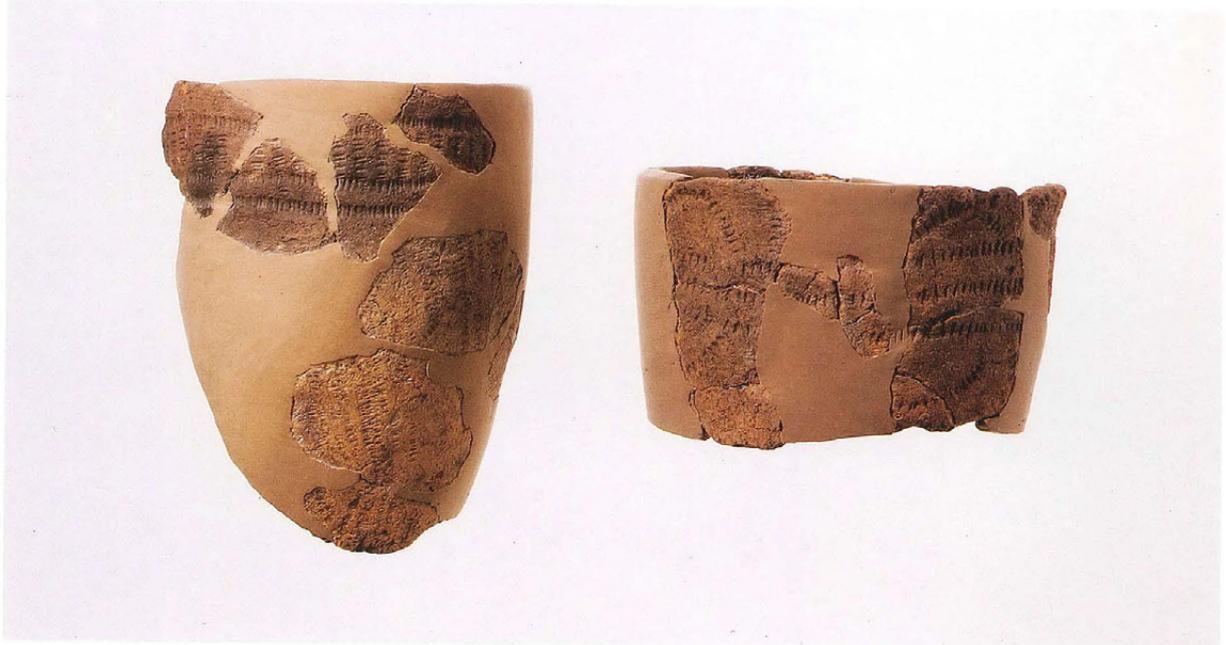
向六工遺跡 全景（南上空より）



向六工遺跡 SK1030出土陶器



向六工遺跡出土貿易陶磁・瀬戸美濃系陶器



同 縄文土器



野口遺跡 SB02



同 オンドル状施設

序

諏訪湖を眼下にのぞむ岡谷JCで中央自動車道西宮線より分かれ、更埴JCで上信越自動車道と合流する長野自動車道は、長野県の南北を結ぶ交通の大動脈として200万県民から期待され、本年3月に開通いたしました。本道路の開通に際しては、道路建設工事に先だって数多くの埋蔵文化財が調査されました。すでに東筑摩郡明科町までは、その整理作業も終了し、11冊の報告書を刊行してきており、善光寺平については、現在鋭意整理作業が続けられています。

今回報告する5遺跡は、長野自動車道が左手に北アルプスを眺めながら松本平を北進し、田沢付近で筑摩山地にトンネルで入り、それを抜けた、筑北盆地の坂北村・麻績村に所在しています。この一帯は、松本平と善光寺平・越後を結ぶ古代の東山道の支道が通過し麻績駅が置かれたとされ、古くから交通の要所として栄えたところとして知られています。その名残として、山岳仏教の代表的寺院である岩殿寺・福満寺には藤原時代の仏像がのこされており、国から重要文化財に指定されております。

調査は、道路建設工事の工程との調整上、昭和62年から平成2年の4カ年にわたり、実施しました。調査成果の概要については、現地説明会・出土遺物展示会・長野県埋蔵文化財センター年報等によって公開してまいりました。ここに報告書が完成しましたが、いずれも縄文時代から中世にかけての比較的小規模な遺跡とはいいながら、当時代の筑北盆地の歴史を理解する上で、重要な資料を与えてくれたと思われまます。

最後になりましたが、調査開始より本書発刊に至るまで、記録保存の遂行に深いご理解とご協力をいただいた、日本道路公団名古屋建設局・同豊科工事事務所・長野県高速道局・同筑北高速道事務所・坂北村・同教育委員会・麻績村・同教育委員会・地区高速道対策委員会・地区被買収(者)組合等、ならびに発掘現場や記録整理作業に従事された多くの方々、直接のご指導・助言を賜った長野県教育委員会文化課、発掘調査から整理作業に携わった(財)長野県埋蔵文化財センター職員に対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成5年12月20日

(財)長野県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤善處

例 言

- 1 本書は、中央自動車道長野線建設工事にかかわる、長野県東筑摩郡坂北村向六工遺跡・十二遺跡、麻績村野口遺跡・古司遺跡・子尾入遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 上記遺跡の概要については、すでに当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』4～8、『長野県埋蔵文化財ニュース』No.22・31で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 3 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図（1：1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：50,000）を使用した。
- 4 写真図版PL1・2の航空写真（著作権国土地理院）は日本地図センターから提供を受けたものである。
- 5 巻首図版1および写真図版PL3の航空写真は（株）写真測図研究所に委託したものである。
- 6 本報告書には次の方々から玉稿を賜り、付章に掲載した。記して謝意を表する。（順不同）
黒曜石の分析……………立教大学一般教育部 鈴木正男氏、同原子力研究所 戸村健児氏
炭化材の樹種同定……………金沢大学教養学部 鈴木三男氏、農水省森林総合研究所 能城修一氏
人骨鑑定……………獨協医科大学第一解剖学教室 茂原信生氏
鉄滓・砂鉄の分析……………川鉄テクノロジー株式会社 総合検査・分析センター千葉事業所
- 7 執筆分担は次のとおりである。（五十音順）
小口 徹 第6章第2節
関 全寿 第2章第1節、第3章第2節1、第4章・第5章・第7章の各第2節の一部
原 明芳 第3章第4節3・4・第5節2・3、第5章第4節2・3
町田勝則 第3章第4節1(2)・第5節1(3)・(4)
三上徹也 第6章第1・3・4節
綿田弘実 上記以外
- 8 遺構番号は、時代にかかわらず種別ごとに付けたが、原則として発掘調査時の番号を変更しなかったため欠番がある。遺物番号は、縄文土器は通し番号、石器は器種ごとの通し番号、古代土器は遺構ごとの通し番号、中世以降の遺物は種別ごとの通し番号とした。この番号は挿図・挿表・写真図版のいずれにも符合する。
- 9 注・参考文献は各章あるいは節の末尾にまとめたが、第3章第5節は執筆者ごとに適宜まとめた。
- 10 本書の編集・校正は、7に記した町田担当分以外を綿田が行い、樋口昇一が全体を校閲・校正した。なお、付章は原則として原稿のままとした。
- 11 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、(財)長野県埋蔵文化財センターが保管している。
- 12 発掘調査・報告書作成に当たり、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご援助頂いた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、五十音順）
会田 進 青山 均 赤羽義洋 阿部芳郎 石井 寛 石坂 茂 磯部幸雄 伊藤正人 上原 茂
大沢 哲 大塚真弘 小口達志 小坂英文 奥川弘成 金子直行 木村有作 郷道哲章 小林康男
塩見真康 重松和男 島田哲男 下平博行 新谷和孝 杉浦 知 関根慎二 竹原 学 谷口康浩
谷藤保彦 田村陽一 趙 現鐘 塚本師也 中沢道彦 藤巻幸男 宮井英一 宮本長二郎 百瀬忠
幸 守矢昌文 山下歳信 山口逸弘 領塚正浩
刈谷市郷土資料館 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 塩尻市平出遺跡考古博物館 知多市歴史民俗資料館 茅野市尖石考古館 名古屋博物館 南山大学人類学博物館 横須賀市人文博物館

凡 例

1 本書に掲載した実測図の縮尺は下記のとおりで、該当箇所のスケールの上に記してある。

1) 主な遺構実測図

遺構分布図 1 : 800、1 : 400 縄文時代・中世遺構群 1 : 125、1 : 100

竪穴住居址 1 : 60 住居址内施設 1 : 30 土坑・集石 1 : 40

2) 主な遺物実測図

縄文土器 1 : 4 縄文土器拓本 1 : 2 石屑・剥片・石鏃・刃器・石錐 1 : 1

石匙 2 : 3 原石・石核・打製石斧・磨製石斧 1 : 2 磨石・凹石・敲石 1 : 3

古代・中世土器・陶磁器 1 : 4 土製品・鉄製品・石製品 1 : 2 石臼等 1 : 6

銭貨 2 : 3

2 本書に掲載した主な遺物写真の縮尺は、下記のとおりである。

図上復原した縄文土器 1 : 3 拓本図化した縄文土器 1 : 2 石器 実測図と同一

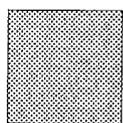
古代・中世土器・陶磁器(杯・椀・皿・小型甕等) 1 : 2.5 古代・中世土器・陶器(甕) 1 : 3

銭貨 1 : 1 その他の古代・中世遺物 実測図と同一

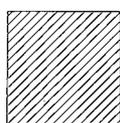
3 遺物の出土地点の表記は、縄文時代の石器と中世の銭貨は一覧表により、古代土器は実測図中に出土遺構を示した。その他は番号のわきに表記した。

4 実測図中のスクリーン等々は、下記のように用いた。これら以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。

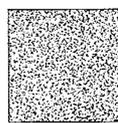
1) 遺構実測図



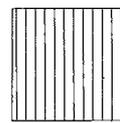
焼土・火床



礫の断面



炭化物



攪乱

2) 遺物実測図

①古代土器

実測図の断面は、黒色土器・土師器は白ヌキ、須恵器は黒ヌリ、灰釉陶器は網点とし、黒色処理部分は網点で表現した。

②中世以降の土器・陶磁器

実測図の断面は、土器は白ヌキ、国産陶器は黒ヌリ、輸入陶磁器は網点とし、釉の種類は鉄釉は濃い網点、鎳釉は砂目で表現した。

5 古代土器の器種分類は、(財)長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本平総論編』(1990)に準拠した。

本文目次

卷首図版	
序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 序説	1
第1節 調査の契約	1
1 発掘調査委託契約	1
2 契約業務の経過	1
(1) 昭和62年度	2
(2) 昭和63年度	2
(3) 平成元年度	2
(4) 平成2年度	3
(5) 平成3年度	3
(6) 平成4年度	4
3 調査に参加した補助員	4
第2節 調査の方法	5
1 発掘調査の方法	5
(1) 遺跡名称と記号	5
(2) 調査区設定の原則	5
(3) 遺跡調査の手順	6
(4) 遺構記号	6
(5) 遺構の調査方法	7
(6) 測量	7
(7) 写真	7
2 整理作業の方法	7
(1) 発掘記録の整理	7
(2) 遺物の整理	8
(3) 報告書の記述と編集	8
第2章 遺跡群の環境	9
第1節 筑北山地の地形と気候	9
1 地形の概要	9
2 地形区分	11
3 気候	12
第2節 歴史的環境と周辺の遺跡	14

第 3 章 向六工遺跡	22
第 1 節 遺跡の概観と調査の概要	22
1 遺跡の概観	22
2 調査の概要	22
3 調査の経過	24
第 2 節 地形と基本層序	29
1 地形	29
2 基本層序	30
第 3 節 遺構	32
1 縄文時代の遺構	32
(1) 竪穴住居址	32
SB11 <32> SB12 SB13 <33> SB26 SB29 <34>	
(2) IVA区縄文時代遺構群	35
① 焼土址 SF28・29・42～47 <35> ② 集石 SH09・10・13～15 <35>	
(3) 土坑	37
SK329 SK333 <37> SK330 <38>	
2 平安時代の遺構	38
(1) 竪穴住居址	38
SB02 <38> SB03 SB04 SB05 <39> SB06 <40> SB07 SB08 <41>	
SB09 <42> SB14 <43> SB16 <44> SB17 <45> SB18 SB19 <46>	
SB20 <47> SB21 SB22 <47> SB23 <49> SB25 SB28 <50>	
3 中世以降の遺構	52
(1) IIG区中世遺構群	52
① 掘立柱建物址 SA11 SB24 ST11・01・12・14 <52> ② 柵址 SA12 <52>	
③ 集石 SH11 <54>	
(2) IIL区中世遺構群	55
① 掘立柱建物址 ST04 SA03・02 <55> ② 竪穴建物址 SB10 <55>	
③ 集石 SH01～06 <57> ④ 焼土址 SF18～27 <60>	
⑤ その他の遺構 SQ01～06 <60>	
(3) IIM・Q・R区中世遺構群	61
① 掘立柱建物址 ST02・03 <61> ② 焼土址 SF02～17・48 <61>	
③ 井戸址 SK151 <61>	
(4) IIU区中世遺構群	63
① 掘立柱建物址 ST13 SA12 <63> ② 柵址 SA12 <65>	
③ 焼土址 SF32～41 <65> ④ 土坑 SK1030 <65>	
⑤ 竪穴状遺構 SX01 SB27 <65>	
(5) その他の遺構	67
① 掘立柱建物址 ST09 <67> ② 柵址 SA15 <67> ③ 火葬施設 SK1048 <68>	
④ 家屋址 SB01 <68> ⑤ 野溜め SK285・289・302・1047 <68>	
第 4 節 遺物	69

1 縄文時代の遺物	69
(1) 土器	69
① 土器分類の概要 <69> ② 土器の分布と出土量 <71> ③ 第II群土器の分布 <71>	
④ 遺構出土の土器 <76> ⑤ 下段分布帯出土の土器 <76>	
⑥ 中段分布帯出土の土器 <78> ⑦ 上段分布帯出土の土器 <81>	
⑧ 表面採集の土器 <89> ⑨ 第II群土器の編年的位置付け <89>	
(2) 石器	92
① 概論 <92> ② 原石 <92> ③ 石核 <92> ④ 剥片・碎片 <95> ⑤ 石槍 <98>	
⑥ 石鏃 <98> ⑦ 打製石斧 <103> ⑧ 磨石・凹石・敲石 <104> ⑨ 台石 <108>	
⑩ 石匙 <108> ⑪ 刃器 <111> ⑫ 磨製石斧 <117> ⑬ 石錐 <120>	
⑭ 石錘 <122> ⑮ 加工痕跡を留める石屑 <122>	
2 弥生時代の遺物	131
(1) 土器	131
(2) 石器	131
3 平安時代の遺物	131
(1) 焼物	131
(2) 石製品	139
(3) 土製品	140
(4) 鉄製品	140
4 中世以降の遺物	141
(1) 焼物	141
① 遺構出土の焼物 <142> ② 土器皿 <142> ③ 輸入陶磁器 <143>	
④ 瀬戸・美濃系陶器 <143> ⑤ 内耳鍋・ほか <143> ⑥ 近世陶磁器 <143>	
(2) 鍛冶道具	143
(3) 石製品	143
(4) 鉄・銅製品	145
(5) 銭貨	149
第5節 成果と課題	150
1 縄文時代	150
(1) 第II群縄文早期末葉の土器群	150
(2) 縄文早期末葉の遺構と集落	155
(3) 石器群の個別的な研究	158
① 原石と石核 <158> ② 剥片A類 <158> ③ 石鏃 <158> ④ 打製石斧 <158>	
⑤ 磨石・凹石・敲石 <159> ⑥ 台石 <159> ⑦ 石匙 <159> ⑧ 刃器 <162>	
⑨ 磨製石斧 <162> ⑩ 石錐 <163> ⑪ 石錘 <163>	
(4) 石器群の総合的研究	164
① 製作技術 <164> ② 器種の形態と時期 <164> ③ 使用場と廃棄場 <165>	
④ 石器の組成 <166> ⑤ まとめ <167>	
2 平安時代	170
(1) 焼物	170

① 時期 <170> ② 焼物の種類と組成 <170>	
(2) 集落	174
(3) 集落の盛衰	176
3 中世以降	176
第6節 小 結	178
第 4 章 十二遺跡	180
第1節 遺跡の概観と調査の概要	180
1 遺跡の概観	180
2 調査の概要	180
3 調査の経過	180
第2節 基本層序と地形形成	182
第3節 遺 物	183
第4節 小 結	183
第 5 章 野口遺跡	184
第1節 遺跡の概観と調査の概要	184
1 遺跡の概観	184
2 調査の概要	184
3 調査の経過	186
第2節 基本層序と地形形成	186
第3節 遺 構	188
1 平安時代の遺構	188
(1) 竪穴住居址	188
SB01 <188> SB02 <189>	
(2) 土 坑	190
SK01・02・03 <190~192>	
第4節 遺 物	192
1 縄文時代	192
2 古代・中世	194
第5節 成果と課題	194
1 オンドル状施設をもつSB02について	194
2 SK01・02・03について	198
第6節 小 結	199
第 6 章 古司遺跡	201
第1節 遺跡の概観と調査の概要	201
1 遺跡の概観	201
2 調査の概要	201
3 調査の経過	201

第2節	表層地質と地形形成過程	202
1	地形・地質の概観	202
2	遺跡の表層地質	203
(1)	各土層の性質	203
(2)	堆積環境	204
3	地形形成過程	206
①	最終氷期から縄文早期ごろまで <206>	
②	縄文前期から中世初頭まで <206>	
③	中世から現在 <206>	
第3節	遺物	206
第4節	小結	206
第7章	子尾入遺跡	207
第1節	遺跡の概観と調査の概要	207
1	遺跡の概観	207
2	調査の概要	207
3	調査の経過	207
第2節	基本層序と地形形成	208
第3節	遺物	210
第4節	小結	210
第8章	結語	211
付 章	自然科学的分析	213
第1節	向六工遺跡出土の黒曜石の分析	215
第2節	向六工遺跡出土炭化材の樹種	224
第3節	向六工遺跡出土の中世火葬骨	226
第4節	野口遺跡出土炭化材の樹種	228
第5節	野口遺跡出土の骨片	230
第6節	野口遺跡出土鉄滓・砂鉄の分析調査	231

挿 図 目 次

序 説

第1図 大・中・小地区割付図

遺跡群の環境

第2図 筑北・更埴地区位置図

第3図 筑北・更埴地区切峯面図

第4図 筑北地域の地質図

第5図 筑北地域の遺跡分布図

向六工遺跡

第6図 地形・配点図

第7図 トレンチ設定図

第8図 遺構割付図

第9図 全体遺構分布図

第10図 遺構分布図(1)

第11図 遺構分布図(2)

第12図 遺構分布図(3)

第13図 遺跡付近地形図

第14図 土層図

第15図 SB11・12・13実測図

第16図 SB26実測図・遺物分布図

第17図 SB29実測図

第18図 IVA区縄文時代遺構群実測図

第19図 IVA7・8区土層図

第20図 SH09・10実測図

第21図 SK329・333・330実測図

第22図 SB02実測図・遺物分布図

第23図 SB03実測図

第24図 SB04実測図

第25図 SB05・カマド実測図

第26図 SB06実測図

第27図 SB06遺物分布図

第28図 SB07実測図

第29図 SB08・カマド実測図

第30図 SB09実測図

第31図 SB09カマド実測図

第32図 SB14実測図・遺物分布図

第33図 SB16実測図

第34図 SB17実測図

第35図 SB17カマド実測図

第36図 SB18実測図

第37図 SB19実測図・遺物分布図

第38図 SB20実測図

第39図 SB21実測図・遺物分布図

第40図 SB22実測図

第41図 SB22遺物分布図

第42図 SB23実測図

第43図 SB25実測図

第44図 SB28・カマド実測図・遺物分布図

第45図 IIG区中世遺構群実測図

第46図 ST12・SF31・32実測図

第47図 SH11実測図

第48図 IIL区中世遺構群実測図

第49図 IIL11～13土層図

第50図 ST04・SA03断面図

第51図 SB10実測図・遺物分布図

第52図 SA02・SF33・34実測図

第53図 SH01・02・03・06実測図

第54図 SF18～27実測図

第55図 SQ01・02・03・06実測図・遺物分布図

第56図 IIM・Q・R区中世遺構群実測図

第57図 SF07・09・13・16実測図

第58図 ST02実測図

第59図 SK151実測図

第60図 IIU区中世遺構群実測図

第61図 SK1030実測図

第62図 SB27実測図

第63図 ST09実測図

第64図 SA15・SK1060実測図

第65図 SK1048実測図

第66図 SB01実測図

第67図 SK285・289・302・1047実測図

第68図 縄文早期土器分布図

- 第69図 II U・IV A区縄文早期土器分布図
- 第70図 縄文中・後期土器分布図
- 第71図 縄文土器実測・拓本図(1)
- 第72図 縄文土器実測・拓本図(2)
- 第73図 縄文土器拓本図(3)
- 第74図 縄文土器拓本図(4)
- 第75図 縄文土器拓本図(5)
- 第76図 縄文土器拓本図(6)
- 第77図 縄文土器拓本図(7)
- 第78図 縄文土器拓本図(8)
- 第79図 縄文土器拓本図(9)
- 第80図 縄文土器拓本図(10)
- 第81図 縄文土器拓本図(11)
- 第82図 原石・石核出土分布図(黒曜石)
- 第83図 原石・石核法量相関図
- 第84図 原石・石核出土分布図(チャート・頁岩)
- 第85図 原石・石核実測図
- 第86図 剥片A類法量相関図
- 第87図 剥片A類出土分布図
- 第88図 剥片B類分布図(チャート)
- 第89図 その他分布図(チャート)
- 第90図 剥片B類・その他分布図(頁岩)
- 第91図 剥片B類出土分布図(黒曜石)
- 第92図 その他出土分布図(黒曜石)
- 第93図 剥片・碎片実測図
- 第94図 石鏃法量相関図(材質別)
- 第95図 石鏃法量相関図(製品と失敗品)
- 第96図 石鏃製品分布図(チャート)
- 第97図 石鏃失敗品分布図(チャート)
- 第98図 石鏃製品・失敗品分布図(頁岩・安山岩)
- 第99図 石鏃製品分布図(黒曜石)
- 第100図 石鏃失敗品分布図(黒曜石)
- 第101図 石鏃実測図(1)
- 第102図 石鏃実測図(2)
- 第103図 打製石斧法量相関図
- 第104図 打製石斧出土分布図(欠損別)
- 第105図 打製石斧出土分布図(形態別)
- 第106図 打製石斧実測図(1)
- 第107図 打製石斧実測図(2)
- 第108図 磨石・凹石・敲石法量相関図
- 第109図 磨石・凹石・敲石出土分布図
- 第110図 敲打痕の長さ・幅・深さ
- 第111図 磨石・凹石実測図(1)
- 第112図 磨石・凹石(2)・敲石・台石実測図
- 第113図 石匙・刃器法量相関図
- 第114図 石匙出土分布図
- 第115図 刃器法量相関図
- 第116図 刃器2種出土分布図
- 第117図 石匙・刃器実測図(1)
- 第118図 石匙・刃器実測図(2)
- 第119図 石匙・刃器実測図(3)
- 第120図 刃器1種出土分布図(黒曜石)
- 第121図 刃器1種出土分布図(チャート・頁岩・安山岩)
- 第122図 磨製石斧法量相関図
- 第123図 磨製石斧出土分布図
- 第124図 磨製石斧実測図
- 第125図 石錐法量相関図
- 第126図 錐部の法量相関図
- 第127図 石錐・石錘実測図
- 第128図 石錐出土分布図(材質別)
- 第129図 石錐出土分布図(形態別)
- 第130図 遺構出土石器実測図(1)
- 第131図 遺構出土石器実測図(2)
- 第132図 遺構出土石器実測図(3)
- 第133図 弥生土器・石器実測図
- 第134図 古代土器実測図(1)
- 第135図 古代土器実測図(2)
- 第136図 古代土器実測図(3)
- 第137図 古代土器実測図(4)
- 第138図 古代土器実測図(5)
- 第139図 古代土器実測図(6)
- 第140図 古代石製品・土製品・鉄製品実測図
- 第141図 中世遺物分布図
- 第142図 中世土器・陶器実測図
- 第143図 中世以降土器・陶磁器・鍛冶道具実測図
- 第144図 中世以降石製品実測図(1)
- 第145図 中世以降石製品実測図(2)
- 第146図 銭貨拓本図

- 第147図 中世以降鉄・銅製品実測図
- 第148図 長野県の絡糸体圧痕文系土器(1)
- 第149図 長野県の絡糸体圧痕文系土器(2)
- 第150図 石器の本体および付着物の元素分析グラフ
- 第151図 石器組成グラフ
- 第152図 遺構別食膳具出土量
- 第153図 遺構別食膳具組成
- 第154図 吉田川西遺跡時期別食膳具組成
- 第155図 遺構別杯A種別組成
- 第156図 吉田川西遺跡時期別杯A種別組成
- 第157図 黒色土器A杯A法量分布(口縁180度以上)
- 第158図 黒色土器A杯A法量分布(口縁180度以下)
- 第159図 遺物量別古代遺構分布図
- 第160図 遺構別遺物出土量
- 第161図 中世遺構分布図

十二遺跡

- 第162図 調査区全体図
- 第163図 土層図
- 第164図 石器実測図

野口遺跡

- 第165図 調査区全体図

- 第166図 土層図
- 第167図 遺構分布図(西地区・東地区)
- 第168図 SB01・カマド実測図・遺物分布図
- 第169図 SB02実測図・遺物分布図
- 第170図 SB02カマド・溝実測図
- 第171図 SK01・02・03実測図
- 第172図 縄文土器拓本・石器実測図
- 第173図 古代土器・土製品実測図
- 第174図 古代・中世土器・陶磁器実測図
- 第175図 オンドル・関連遺構
- 第176図 SK01推定復原図

古司遺跡

- 第177図 調査区全体図
- 第178図 土層柱状図
- 第179図 パネルダイヤグラム
- 第180図 遺跡周辺の地形形成過程
- 第181図 石器実測・銭貨拓本図

子尾入遺跡

- 第182図 調査区全体図
- 第183図 土層図
- 第184図 石器実測図

挿表目次

遺跡群の環境

- 第1表 筑北地区の地質層序区分
- 第2表 筑北地区時代別遺跡数一覧表
- 第3表 筑北地区遺跡地名表(1)
- 第4表 筑北地区遺跡地名表(2)

向六工遺跡

- 第5表 地区別縄文土器出土点数一覧表
- 第6表 石器組成表
- 第7表 剥片A類形態別出土数
- 第8表 剥片A類属性表
- 第9表 石鏃属性表

- 第10表 打製石斧属性表
- 第11表 磨石・凹石・敲石属性表
- 第12表 石匙属性表
- 第13表 磨製石斧属性表
- 第14表 石錐属性表
- 第15表 石器観察表(1)
- 第16表 石器観察表(2)
- 第17表 石器観察表(3)
- 第18表 石器観察表(4)
- 第19表 石器観察表(5)

第20表 錢貨一覧表
 第21表 第II群土器模式分類表
 第22表 長野県の縄文早期後葉住居址一覧表
 第23表 縄文早期石器組成変遷表

第24表 遺構別煮炊具組成表
 第25表 遺構別焼物一覧表
 第26表 遺構別食膳具種別組成表
 第27表 群別中世遺構一覧

写真図版目次

卷首図版 1	向六工遺跡全景、同SK1030出土陶器	
卷首図版 2	向六工遺跡出土縄文土器、貿易陶磁・瀬戸美濃系陶器	
卷首図版 3	野口遺跡SB02、同オンドル状施設	
P L 1	筑北地区全景	面、SH02、SH06、SQ01・SQ02)
P L 2	調査遺跡航空写真(野口遺跡、古司・子尾入遺跡、向六工・十二遺跡)	P L 12 中・近世遺構(3) (ST03、SF02~17、SK151・礫出土状態、ST02ほか、SA12、ST13、SK1030・遺物出土状態)
向六工遺跡		P L 13 中・近世遺構(4) (SB01・カマド、SA02、SK285・断面、SA15・SK1062、SK302、SK1048、SK1047)
P L 3	遺跡全景(東から、北東から)、空撮全景	P L 14 縄文土器(1) (SB26、上段分布帯、下段分布帯)
P L 4	縄文時代遺構(1) (SB11・12・13、SB13、SB11、SB12、SB29、SB26・遺物出土状態)	P L 15 縄文土器(2) (上段分布帯、SB26)
P L 5	縄文時代遺構(2) (平成2・元年度IVA区全景、IIU区全景、SH09・10、SF43~47、IVAF12土器出土状態)	P L 16 縄文土器(3) (下段分布帯)
P L 6	古代遺構(1) (SB02・遺物出土状態、SB03・炭化材出土状態、SB04、SB07、SB05・遺物出土状態、SB06・カマド)	P L 17 縄文土器(4) (中段分布帯、上段分布帯)
P L 7	古代遺構(2) (SB08・遺物出土状態・カマド、SB09・カマド・P ₁ 、SB14・遺物出土状態)	P L 18 縄文土器(5) (上段分布帯)
P L 8	古代遺構(3) (SB14カマド1・2・遺物出土状態・炭化材出土状態、SB16・西壁、SB17・カマド・遺物出土状態)	P L 19 縄文土器(6) (上段分布帯)
P L 9	古代遺構(4) (SB19・遺物出土状態、SB21、SB22・遺物出土状態、SB22・遺物出土状態)	P L 20 石器(1) (SB11・12・13・26・29、SK330)
P L 10	中・近世遺構(1) (SB24・SA11、SH11、ST04・礎石、SH01、6トレンチ断面)	P L 21 石器(2) (原石・石核、剥片)
P L 11	中・近世遺構(2) (SA03・SF18~27、SF25・断面、SB10・遺物出土状態、SF26・断	P L 22 石器(3) (石鏃)
		P L 23 石器(4) (打製石斧)
		P L 24 石器(5) (磨石・凹石・敲石)
		P L 25 石器(6) (石匙・刃器)
		P L 26 石器(7) (磨製石斧・石鏃)
		P L 27 古代土器(1) (SB02・04・05)
		P L 28 古代土器(2) (SB06・07・08・16・17・19・20)
		P L 29 古代土器(3) (SB19・22・28・遺構外)
		P L 30 中世土器・陶磁器(1) (SK1030、土器皿、白磁杯)
		P L 31 中世土器・陶磁器(2) (貿易陶磁、瀬戸

- 美濃系陶器、内耳鍋、鍛冶道具)
- P L 32 近世陶磁器 (SB01・遺構外)
- P L 33 古代石製品・土製品・鉄製品 (砥石、土
錘・羽口、鉄鍬・刀子ほか)、中・近世
石製品(1) (砥石・温石、石鉢・台石)
- P L 34 中・近世石製品(2) (石臼)、中・近世鉄
・銅製品
- P L 35 銭 貨

十二遺跡

- P L 36 遺跡全景 (東から・西から)、風倒木痕、
第 5 トレンチ断面、トレンチ掘削、第 4
トレンチ断面

野口遺跡

- P L 37 遺跡全景 (西から)、西地区全景 (西か

- ら、東から)、東地区全景 (西から)
- P L 38 遺構(1) (SB02・カマド・溝と蓋石・遺物
出土状態・カマド付近遺物出土状態)
- P L 39 遺構(2) (SB01・遺物出土状態・カマド、
SK01、SK02、SK03・断面)
- P L 40 古代土器 (SB01・02、SK01)
- P L 41 SK02鉄滓・羽口、SK01土器埋設状態推
定復原、縄文土器・石器、中世陶磁器

古司遺跡

- P L 42 遺跡全景 (南東から)、調査区全景 (北
東から)、H 0 断面、H-2 断面

子尾入遺跡

- P L 43 遺跡全景 (南西から、北東から)、A ト
レンチ断面、C トレンチ断面

第1章 序 説

第1節 調査の契約

1 発掘調査委託契約

財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）の業務運営規程によれば、埋蔵文化財の調査および研究に関して、埋文センターは長野県および国または国の機関が実施する公共開発事業について、事業のため調査を行う必要があるものの委託を受けて、埋蔵文化財の調査を行うほか、埋蔵文化財の保護のための必要な調査および研究を行うこととされている。また、埋文センターが委託を受けて行う調査は、あらかじめ長野県教育委員会（以下「県教委」という）が行政上の調整をすませた上、埋文センターにおいて受託して行うことが適当であると認めたものについて行われる。

高速自動車道用地内にある埋蔵文化財の発掘調査については、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に準じて実施されている。それによれば、日本道路公団（以下「公団」という）は事業施工前に県教委の意見を聴取の上、文化庁との間で協議し、その結果、記録保存と決定し発掘調査が必要となった場合、公団は県教委に委託して調査を実施することが決定されている。長野県の場合、県独自の調査体制や機関が設置されていないので、公団と県教委との契約後、あらためて埋文センターに県教委が再委託する方式がとられている。

中央自動車道長野線（以下「長野線」という）は、昭和57年3月の起工式から岡谷市で本格的な工事が開始された。そこで県教委も同年4月から長野線の事業に対応すべく埋文センターを発足させた。この結果、公団→県教委→埋文センターという委託契約の図式ができ上がり、以降の調査が実施されることとなった。この際取り交わされた契約書および計画書の書式は、『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1—岡谷市内—』に掲載してあるので省略し、以下に公団豊科工事事務所管内の東筑摩郡坂北村・麻績村関係分の、年度別の遺跡と調査契約面積および調査実施面積を掲げておく。

（年 度）	（遺 跡）	（調査契約面積）	（調査実施面積）	（備 考）
昭和62年度	麻績村 野口遺跡	9,700㎡	9,700㎡	
	同 古司遺跡	14,500㎡	280㎡	
	同 子尾入遺跡	12,800㎡	1,400㎡	
昭和63年度	坂北村 向六工遺跡	13,600㎡	（試 掘）	用地未買収
	同 十二遺跡	26,000㎡	1,500㎡	
平成元年度	坂北村 向六工遺跡	14,500㎡	11,700㎡	当初契約面積より増加
平成2年度	坂北村 向六工遺跡	（14,500㎡）	2,800㎡	前年度の継続

2 契約業務の経過

前項に、年度別の調査実施面積を示したので、以下に年度を追って調査体制と遺跡別の調査期間および

担当者名を掲げる。発掘調査経過の詳細は、個々の遺跡の報告に譲ることとする。この間、発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るすべての業務は、長野調査事務所が管轄した。

(1) 昭和62年度

○調査体制	事務局長（兼長野調査事務所庶務部長）	半田順計
	同 総務部長	堀内計人
	同 調査部長（兼長野調査事務所調査部長）	樋口昇一
	長野調査事務所長	塚原隆明

○遺跡と調査期間・担当者（◎：班長、以下同じ）

- ・古司遺跡 4月20日～5月11日
調査研究員 ◎三上徹也、斉藤伸介、田川幸生、福島厚利
- ・子尾入遺跡 4月23日～5月27日
調査研究員 ◎綿田弘実、伊藤友久、春日文彦、宮尾栄三
- ・野口遺跡 7月8日～10月13日
調査研究員 ◎綿田 ほか上記7名

この間、麻績村公民館報・筑北農協広報に大きく取り上げられるなど、地元の関心は高まった。野口遺跡では9月7日に発掘調査と並行して現地説明会を行い、平日にもかかわらず115名の見学者が訪れた。また、調査終了後には、麻績村教育委員会の要請により、11月3日に野口遺跡の出土品等を村民文化祭に展示し、450名の見学者があった。発掘調査の合間と調査終了後には、図面・写真の点検、所見整理、遺物洗浄・注記・接合など、基礎的な整理を行った。



長野調査事務所開所式(昭和62年4月)

(2) 昭和63年度

○調査体制	事務局長兼総務部長（兼長野調査事務所庶務部長）	半田順計
	同 調査部長（同 調査部長）	笹沢 浩
	同 技術参与	佐藤今雄
	長野調査事務所長	塚原隆明

○遺跡と調査期間・担当者

- ・十二遺跡 4月14日～4月28日
- ・向六工遺跡 4月26日～4月28日
調査研究員 ◎綿田弘実、白居直之、斉藤伸介、中村敏生

十二遺跡は重機によるトレンチ調査で少量の遺物を採集して終了、向六工遺跡は用地未買収のため試掘にとどまり、5月以降は長野市内の遺跡の調査に従事した。

(3) 平成元年度

○調査体制	事務局長兼総務部長（兼長野調査事務所庶務部長）	半田順計
	同 調査部長（同 調査部長）	笹沢 浩
	同 技術参与	佐藤今雄

長野調査事務所長	塚原隆明
同 庶務部長補佐	松本忠巳
同 調査課長	白田武正
同 総括	宮下健司

○遺跡と調査期間・担当者

・向六工遺跡 4月18日～9月13日

調査研究員 ◎綿田弘実、飯島明孝、入沢昌基、下島章裕

調査期間中、地元教育委員会関係者・小中学生の見学があいついだ。9月10日に現地説明会を行い、162名の見学者が訪れた。向六工遺跡の本年度分の調査終了後、更埴市・長野市内の遺跡調査を経て、平成2年1月以降、図面・写真点検、所見整理など基礎的な整理の一部を行った。

(4) 平成2年度

○調査体制	事務局長	塚原隆明
	同 総務部長(兼長野調査事務所庶務部長)	塚田次夫
	同 調査部長(同 調査部長)	小林秀夫
	同 技術参与	佐藤今雄
	同 総務部長補佐(同 庶務部長補佐)	松本忠巳
	長野調査事務所長	峯村忠司
	同 調査2課長	宮下健司

○遺跡と調査期間・担当者

・向六工遺跡 4月5日～9月17日

調査研究員 ◎綿田弘実、飯島明孝、下島章裕

住宅移転の都合から、調査は4月と7～9月の2回にわたり、夏場は最近50年間はないという早魃に見舞われ難航した。9月7日には約1時間の現地説明会を行い、50数名の見学者があった。

長野市内の遺跡調査を経て、12月下旬以降基礎的な整理を行った。平成3年2月17日から1週間、長野市立博物館を会場とした速報展に出土品を展示した。

(5) 平成3年度

○整理体制	事務局長	塚原隆明
	同 総務部長(兼長野調査事務所庶務部長)	塚田次夫
	同 調査部長(同 調査部長)	小林秀夫
	同 総務部長補佐(同 庶務部長補佐)	山崎今朝寛
	長野調査事務所長	峯村忠司
	同 整理課長代理 原 明芳	
	同 調査研究員 綿田弘実、町田勝則	

長野市内の遺跡調査を終了した6月以降、更埴市鳥林・小坂西遺跡、長野市鶴萩七尋岩陰遺跡・赤沢城跡の4遺跡とともに、向六工・十二・野口・古司・子尾入の5遺跡の、報告書刊行に向けた整理に着手した。本年度は遺構カードの完備と遺構実測図のトレース用版下作成、遺跡・遺構写



土器接合作業(平成3年8月)

真の選定・レイアウト、遺物の洗浄・注記、土器の接合・石膏復原と分類・計量・実測・採拓、金属器の仮保存処理を行った。

(6) 平成4年度

○整理体制	事務局長	峯村忠司
	同 参 事	樋口昇一
	同 総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	同 総務部長補佐(兼長野調査事務所庶務課長)	山寄今朝寛
	同 総務係長 (同 庶務係長)	羽生田博行
	長野調査事務所長	岡田正彦
	同 整理課長	原 明芳
	同 調査研究員	綿田弘実、西嶋力、町田勝則

本年度は遺跡全体図類・遺構実測図のトレース、石器・金属製品などの実測、遺物実測図の版組み・トレース、遺物写真撮影、原稿執筆と編集等を行った。

発掘調査報告書の印刷・製本、および校正にかかわる業務は平成5年度に行った。

3 調査に参加した補助員

坂北村・麻績村分の5遺跡のうち、昭和62年度の古司・野口遺跡と平成元・2年度の向六工遺跡の発掘調査、および平成3・4年度の整理作業には、作業従事員として参加された多くの方々の協力があった。お名前のみ記して、感謝の意にかえさせていただく。(敬称略・順不同)

○発掘調査 町田徳男、吉野文敏、高野源成、塚原広保、木藤祐夫、青木哲夫、石井喜久子、伊藤公郎、岩渕花子、岩渕守、太田喜代人、太田好子、窪寺弘明、倉下静子、黒岩一男、嶋田弥生、高野キワ子、高野博久、高春保子、田口教男、轟しのぶ、中尾保子、西沢淑子、野尻真治、野尻千枝子、待井市子、丸茂松江、宮入元晴、宮腰真幸、宮沢よう子、宮下きみ、宮下公一、柳沢たか子、柳沢登代子、山崎絢子、田中国夫、宮下愛子、滝沢廣幸、滝沢シゲ子、宮下千恵、宮下正治、宮下幸夫、吉原基治、若松俊江、渡会留治、小林正枝、荒田浩明、関森貴紀、洞 智彦、増田正弥、伊藤孝子、白井景佐浩、鎌田なが子、桐山みとし、小林清寿、小山百江、関崎清春、関 宗利、林 健吾、日詰しげ子、前川ふみ、峰村甲子美、飯森昌寿、飯森 満、山岸秀樹、青柳文彦、太田美幸、城山美恵子、平田公江、藤原伸子、根石 聡、平松潤子、藤沢健司、待井裕之、宮嶋徹也、山岸香澄、山本美佳、山崎朱実、山本郁夫、横山利昭、五十嵐裕美、飯森拓也、窪田剛次、犬飼理恵、白井幸一、白井正二、上野孝仁、城山奈緒、中沢ゆきえ

○整理作業 小山丈夫、名取さつき、山岸隆男、小林由香、橋本信子、青木明美、近藤朋子、立岩洋子、半田純子、西村はるみ、古平道子、宮下孝一、西田君子、西村美登子、北島康子、小出紀彦



平成元年度向六工遺跡発掘調査団(平成元年9月)

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

当埋文センターの受託事業は広範囲を対象とし、継続的な調査となることが予想された。このためセンター発足当初より、調査に当たっては一定の方針に従い、共通した方法をとる必要があるとの認識が強く、昭和57～59年に実施した岡谷地区調査の経験を基に「遺跡調査の方針と手順」を作成し、以後これに沿った発掘調査が行われてきている。しかし、さまざまな遺跡の内容、調査の状況に照らして必ずしも十分なものとはいえ、実際の調査を通して検討が重ねられている。ここに報告する5遺跡も、基本的にこの「方針と手順」ののっとり調査を行った。本項では、調査報告をまとめるに当たって必要な事項についてのみ、概述する。

(1) 遺跡名称と記号

遺跡名は県教委作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、記録の便宜を図るために、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を与えた。3文字の1番目は長野県内を9地区に分けた地区番号で、A：北信地区、B：長野地区、C：上小地区、D：佐久地区、E：松本地区、F：大北地区、G：諏訪地区、H：上伊那地区、I：飯伊地区、J：木曾地区、(K：予備)と区分している。2・3番目は遺跡名をローマ字表記した場合の2文字で、遺跡記号が重複しないように調整している。

ここに報告する東筑摩郡は松本地区（ほかに南安曇郡、塩尻市、松本市を含む）に属し、地区記号Eが冠される。向六工遺跡はMUKAIROKKUでEMR、十二遺跡はJUUNIでEJU、野口遺跡はNOGUTIでENG、古司遺跡はKOSIでEKS、子尾入遺跡はNEOIRIでENOを遺跡記号とした。この記号は当該遺跡に関する図面、写真、遺物およびその整理箱等すべての資料に注記され、今後の情報処理にも用いられるものである。

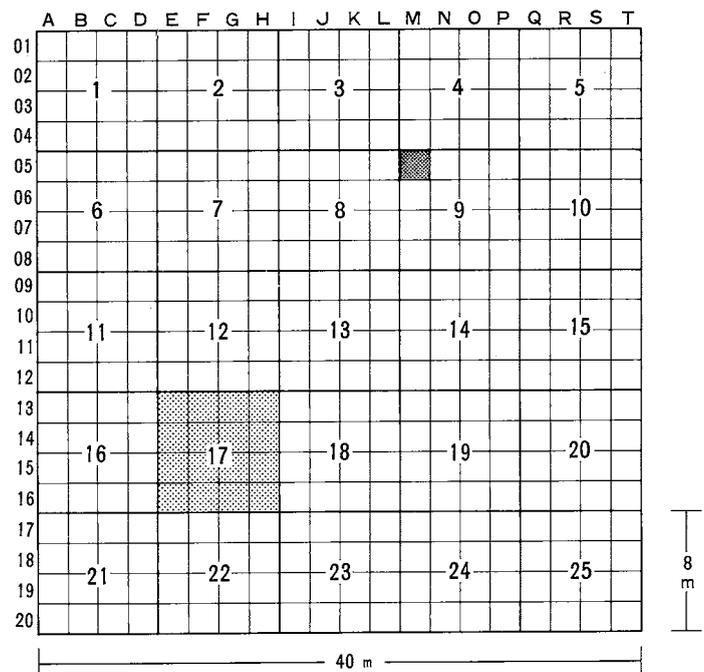
(2) 調査区設定の原則

調査区(グリッド)の設定は、国土座標のメッシュに従うことを原則とした。測量基準点は、国土地理院の平面直角座標系の原点(長野県は第VIII系、X=0,0000、Y=0,0000)を基点に200の倍数値を選んで調査範囲内の1点に設け、測量基準線はX軸・Y軸とした。

グリッドはこの基準点を基に設定し、大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。

まず調査範囲が最小限にかかる200m×200mの区画を設定し、これを大々地区とした。大々地区の呼称は、原則として北西から南東へ向かって、I・II・III……のローマ数字とした。

大々地区を40×40mの25区画に分割し、



(例) この大地区がL区の場合  は中地区L17  は小地区LM05

第1図 大・中・小地区割付図

大地区とした。大地区の呼称は、北西から南東へA・B・C……Yの大文字アルファベットとした。

大地区を8×8mの25区画に分割し、中地区とした。中地区の呼称は、北西から南東へ1・2・3……25のアラビア数字とした。

大地区を2×2mに分割し、これを小地区とした。小地区は、大地区の北西隅を起点とし、X軸上に西から東へA・B・C……Tのアルファベット、Y軸上に北から南へ01・02・03……20の数字を付して400区画し、両者を併せて「A02」のように小地区名とした。

これらの呼称を組み合わせ、例えば向六工遺跡の大々地区「II区」のうち、大地区「L区」の中の中地区「17区」は、「EMR IIL17」と表記される。また、大地区「L区」を小地区に分割した「M05」の場合は、「EMR IILM05」と表記される（第1図）。

現場における調査区およびベンチマークの設定は、公団設置の引照点または座標値の明らかな工事用杭を利用した。調査用の基準杭は中地区（8×8m）を基本とし、業者委託によって設定したが、一部は調査研究員が設定した。

（3） 遺跡調査の手順

坂北村・麻績村はもともと考古学的な調査が少なく、調査対象となった遺跡も既知の情報は乏しかった。また、野口遺跡の一部を除いて試掘調査が行われていないため、遺跡の範囲や内容は不詳であった。このため、いずれの遺跡も試掘調査から着手することとなった。

試掘は用地買収の条件や地目、上物のあり方に応じて、人力によるテストピットまたはトレンチ、重機によるトレンチ掘削の方法をとり、遺構・遺物の分布状態、土層の堆積状態の把握を試みた。この調査で、遺構・遺物が認められないか、きわめて少量のため面的調査が不要と判断された場合は、土層断面のみを記録し、この段階で調査を終了した。向六工遺跡と野口遺跡西地区以外はこのケースであった。

面的調査は試掘の成果をもとに、重機（油圧式シャベル）で表土を除去した後、前項のとおりグリッドを設定し、人力で遺構検出を行った。この際に出土した遺物は小グリッドあるいは中グリッド単位で取り上げた。遺構面が2面以上の部分は重機・人力の作業を繰り返すか、遺物包含層の場合は2mグリッド単位で掘り下げながら遺構検出につとめた。

なお、発掘現場から室内の作業に至るまで、埋文センターの「発掘調査に関する安全基準」を遵守し、危険防止につとめた。

（4） 遺構記号

遺構名称は記録・注記等の便宜を図るため記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は基本的に検出時に決定するため、主として平面的な形態や分布の特徴を指標とし、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。混乱を避けるため原則として遺構記号の変更は行わず、最終的な遺構名称の決定は整理作業の段階で行われる。本書で用いた遺構記号には、次の種類がある。

- ・SB：2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。竪穴住居址、竪穴状遺構。
- ・SK：単独もしくは他の掘り込みと関係が認められない、SBより小さな掘り込み。土坑（塹）、陥し穴、貯蔵穴、井戸等。
- ・SA：SBより小さな落ち込みや石が、列として配置されるもの。柵、築地。
- ・ST：SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置されるもの。これ以外の落ち込みと関係が認められるものがある。掘立柱建物址、礎石を使用した建物址。
- ・SF：単独で存在し、火を焚いたあとが面的に広がるもの。火床、炉址。

- ・SH：石が面的に集中するもの。集石、焼石炉。
 - ・SQ：遺物が面的に集中するもの。ごみ捨て場、祭祀址等。
 - ・SX：以上の遺構記号およびSD（溝等）、SL（水田・畑址）、SC（道路）、SM（古墳・墳墓）の諸記号に該当しない、不明遺構。
- SB・ST内の掘り込み（柱穴等）にはPを付した。

（5）遺構の調査方法

検出された遺構の調査については、竪穴住居址を例にとる。まず、おおよその平面形を確認した後、主軸や付属施設を考慮しながら先行トレンチをあけて埋土や床・壁を確認する。そして土層観察のために、埋土を十字形のベルトに残して掘り下げる。その際、埋土内から出土する遺物の取り上げの便宜を考えて、北東を1区、南東を2区、南西を3区、北西を4区と呼んだ。ベルトは断面記録後除去し、遺物は先の区割りと同層単位に取り上げたが、完形およびそれに準ずるものや床面密着遺物は原位置を記録したものがある。この後床面精査を行って炉・カマド・柱穴などを検出する。これらの施設も必要に応じて先行トレンチをあけるか半割して記録しながら掘り下げた。その他の遺構もこれに準じて調査し、住居址より規模の小さい土坑・小ピットなどは半割して埋土や柱痕を確認して掘り下げた。なお、土層観察の際、土色の記録は原則として『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）によった。

（6）測量

遺構の測量は簡易遣り方測量により、調査研究員およびその指導のもとに作業従事員が行った。この場合中地区の8m杭を基準とし、必要に応じてこの間を2mに区切ってメッシュを設定した。住居址や一部の大型土坑、集石などは個別遺構図として実測し、その他の遺構は中地区単位に区切った割付図として実測した。地形測量は同じメッシュを基準に1mまたは2m間隔で水準測量し、比例配分によって等高線を導き出した。

遺構測量の縮尺は、個別遺構図と割付図が1：20、住居址の付属施設（カマドなど）や遺物分布図、集石などは必要に応じて1：10とした。

（7）写真

遺跡の景観や遺構などの撮影には、マミヤRB6×7とニコンFM2を併用し、ともにモノクロプリント（ネオパン）とカラーリバーサル（フジクローム）で撮影した。35mmの場合はすべての遺構についてモノクロプリントとカラーリバーサルで撮影した。6×7のモノクロプリントはほぼこれに準じ、カラーリバーサルはとくに必要と思われる場合に限った。撮影はすべて調査研究員が行い、撮影後の現像とベタ焼きは業者委託とした。航空写真は向六工遺跡で1回撮影した。

2 整理作業の方法

（1）発掘記録の整理

発掘調査終了後の冬季の整理作業では、現場で作製された図面類と写真の整理を最優先した。図面類は記載事項（遺跡名、遺構名、地区名、実測担当者、実測年月日、標高、縮尺など）の点検を行い、住居址など主な遺構については平面図、断面図、部分図などを相互に照合・補筆し、第2原図を作成した。あわせて調査経過、遺構の構造所見等を「遺構所見整理カード」へ記載し、第2原図等とともに「遺構カード」へ

貼り込んだ。この作業は遺構の調査担当者が行った。写真の整理は、モノクロプリントについては撮影順にアルバムへ、カラーリバーサルは当面は撮影順にスライドファイルへ収納し、記録簿と照合して必要事項の注記をすませた。時間的な制約から、発掘と同一年度内の整理はここまですべてを最低目標とし、発掘現場での遺物洗浄・注記作業を除いて遺物の整理、遺構・分布図との照合などは報告書作成に向けた整理にゆだねることとした。

報告書作成にかかわる作業は整理課が担当し、その内容は第1節2の末尾に記した。製版・原稿執筆等を経て、遺跡全体および遺構実測図・遺物実測図・遺構カード・写真は永年保存資料として台帳に登録し、将来的な収納・検索に備えた。

(2) 遺物の整理

出土遺物への注記は、遺跡記号、遺構記号・番号または地区名、取り上げ番号を記し、石鏃など小形石器、金属製品には観察・保存の支障とならないよう、直接注記しなかった。土器・石器は分類・選別の後、接合・石膏復原を経て実測・採拓を行った。石器の実測には業者委託によるスリット写真を用い、その他は手測によった。また、金属製品は実測・撮影に耐えるよう、埋文センター保存処理室で応急保存処理を施した。遺物の写真撮影は埋文センター写真室が担当し、カメラはマミヤRB6×7、フィルムはTMAX100を用い、現像・焼き付けまで行った。これらの作業を経た遺物は台帳登録し、テンバコへ仮収納した。理化学的な分析・鑑定は整理期間中に委託し、本書の付章に報告した。

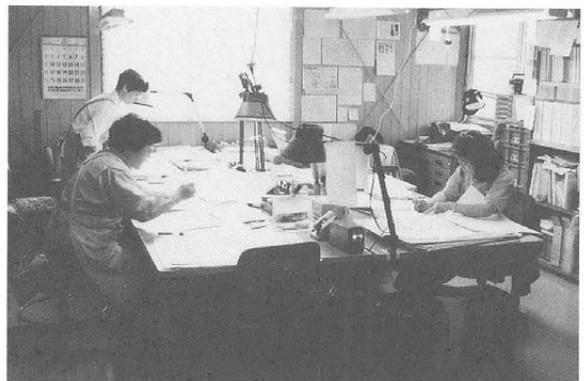
(3) 報告書の記述と編集

遺跡の掲載順序は、高速道路線の南から北とした。個々の遺跡の報告は遺構・遺物に節を分け、それぞれ時代別・種類別に項目を分けた。遺構の記述については調査担当者の所見に基づいて整理担当者が行い、住居址は位置、検出、埋土、規模・形態（主軸方向・床面積）、床・壁、柱穴、炉・カマド、諸施設、遺物分布の諸項目の順序で記述し、他の遺構もこれに準じた。床面積はプランメーターで計測し、3回の平均値をとった。遺物分布図については、掲載された遺構の深さがいずれも20cm前後と浅く基本的に単層だったため、垂直分布図は省略してもよっぽ文章記述によった。なお、時期・性格の不明な土坑やピット（遺構記号SKを付した）は全体図に分布を示すのみとし、記述は省略した。

遺物については例言にある分担執筆者が整理から担当し、「成果と課題」の各時代の項で考察を行った。遺物分類や記述の観点については、それぞれの項目を参照されたい。、なお、報告に当たっては例言に記した指導者と分担執筆者のほかにも、長野調査事務所内外の多くの調査研究員から、整理担当者に指導・援助があった。



石器実測作業



石器集計作業(平成5年2月)

第2章 遺跡群の環境

第1節 筑北山地の地形と気候

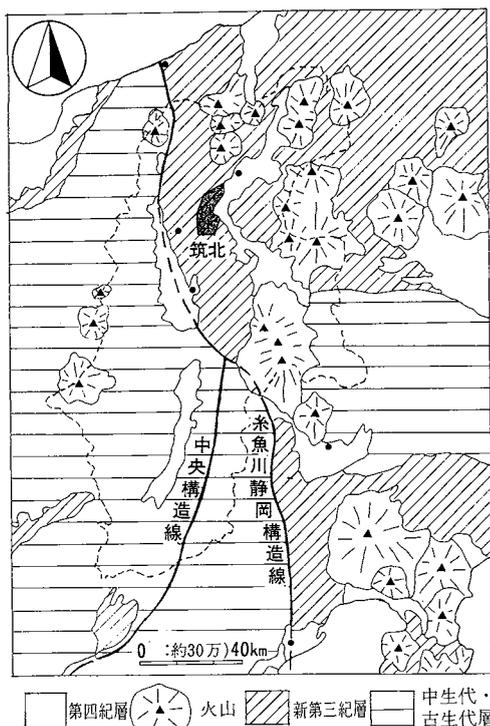
1 地形の概要

筑北山地は、松本盆地の東側、長野盆地と松本盆地を隔てる筑摩山地のほぼ中央部に位置しており、更級郡・小県郡と境する東筑摩郡の最北端に所在する。長野と松本を結ぶ中間的位置にあり、いわゆる筑北地方と呼ばれ、本城・坂北・麻績・坂井の4カ村が含まれる。筑摩山地の山間地であるが、犀川上流の麻績川およびその支流に沿って谷底平野や河岸段丘の発達した盆地状の低地が開けており、古くから開発が進み、峰々の間を抜ける峠道が開削され、重要な街道筋であった。

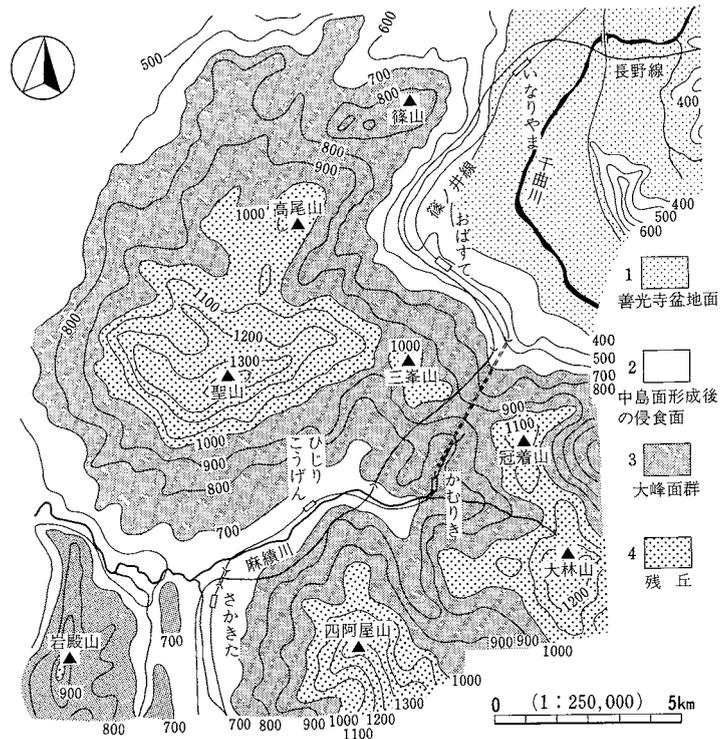
この地域の地形は、大きく谷底平野の盆地とそれ以外の山地とに分けられる。山地はさらに盆地の東側と西側で地質構造や侵食などによって大きな違いが認められ、いくつかの山地に分けることができる。

盆地は、構造性を加えた侵食盆地で、西条盆地と麻績盆地に分けられる。いずれも山頂部を火山岩類によって覆われたり、また、貫入岩によって貫かれている聖山(1,447m)・冠着山(1,252m)・四阿屋山(1,387m)の筑北三山に代表される一段と急峻な山や、中央隆起帯(飯島1962)に属する山地、および700~1,000m内外の比較的平坦な山々に囲まれている。

これらの地形面は、海成の第三紀を基盤として、長野盆地や松本盆地が形成される以前の、更新世前期末(およそ80~100万年前)につくられた高位侵食小起伏面(隆起準平原)で、北安曇郡池田町地籍の大峰付近を模式地とした大峰面群〔小林・平林1955、仁科1972〕と呼ばれており、侵食によって削られてできた侵食面である。この大峰面群より高い聖山・冠着山・四阿屋山・大洞山・岩殿山など郡境や地域を分ける山々は、この大峰面が形成されていた当時侵食から免れていた山々で、このような山を残丘と呼んでいる。



第2図 筑北・更埴地区位置図



第3図 筑北・更埴地区切峯面図

また、700~1,000mの山地は、大峰面が更新世中期以降（およそ70万年前）隆起しながら侵食を受けてきた山地で、侵食面が局部的な平坦面や、やせ尾根となって残っており、猿が番場峠・一本松峠など各所に見られるウインドギャップ（風の通り道）は、古くからの峠道として利用されている。

一方、河川沿いには段丘・扇状地や氾濫原などが発達している。段丘は、その形成の古い方から中位段丘Ⅰ・中位段丘Ⅱ・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱ・沖積段丘Ⅰ・沖積段丘Ⅱの6段に区分される。段丘面は古いものほど標高の高い所に残り、その後の侵食を受けて地形面の明瞭さを欠く傾向が見られる。

2 地形区分

筑北地方は、山地・低地・河川などの特徴に基づいて、地形を細分することができる。谷底平野は麻績盆地と西条盆地に分け、山地は聖山山地・中央隆起帯の山地・岩殿山地の3つに細分される。

聖山山地は、檜原山—聖山—三峰山を結ぶ東西方向に延びる尾根を主稜とするため、北斜面と南斜面が発達する。ケスタ地形（差別侵食によってできた非対称の山の背地形）を呈し、北斜面側に緩く傾く。これに対し、南斜面の標高1,100m以上の地域には300mにおよぶ断崖が連続する。この断崖は聖山の溶岩からできている。その下位の標高1,000m以下の南斜面は、大峰面群の侵食面で、地層面が延びる方向に直交して南へ流れる河川が数多く発達しており、これらの河川は上流から押し出された大量の土砂によって埋められている。この地域に集落が多い。また、河川と河川の間には小川累層からなる尾根が延びている。

中央隆起帯の山地は、冠着山—大林山—四阿屋山—大沢山—御鷹山に続く標高1,200~1,600mにおよぶ最も高い郡境をしきる山地である。山地の主稜はほぼ南北に延び、斜面はきわめて急峻で、これに直交する

る南西方向の河川が発達している。河川は、上流からの押し出し堆積物に埋められ、末端部に小規模な扇状地をつくり、扇端部は麻績川や東条川に削られて段丘地形を形成する。

なかでも四阿屋山は、この地域のほぼ中央部を占め、頂上には筑北4カ村の境界が集まる。山頂は安山岩で、これが差別侵食によって残丘地形を形成した。地層は小川層の砂岩・礫岩で、これを貫く玢岩の岩脈や岩床が各所に見られ、硬い尾根筋や頂を形成するとともに、山全体の安定化に役立っている。西斜面はなだらかで大峰面群が発達しており、山腹にはローム層に覆われた平坦面が残され、また盆地に向かって幾筋もの尾根が延びている。北西へ延びる尾根の先端には、戦国時代の土豪青柳氏の山城が存在した。ここ

第1表 筑北地区の地質層序区分

地質時代		地層名	岩 相		
新 生 代	第 四 紀	完新世	万年前 湿地・氾濫原堆積物	泥・砂・礫。麻績川およびその支流の堆積物。支流の小規模な谷底平野では腐植物を伴う泥が主。	
		更新世	後期	崩積土・押し出し堆積物	淘汰の悪い亜角礫を含む砂質の泥土を基質とする。地すべり、土石流、扇状地堆積物。
			中期	縄文段丘堆積物	砂を基質とした亜円礫。向六工遺跡を含む。標高600m以上の地域では、地表に河岸段丘としては露出しない。
				低位段丘堆積物	砂を基質とした亜円礫が主。標高640~680mに分布し、向原団地を含み、上流域では谷底平野面が対比される。
				中位段丘Ⅱ堆積物	標高750m前後の平坦なやせ尾根を構成。砂を基質とした亜角礫が主。開析が進んでおり、堆積物の観察はできない。
				中位段丘Ⅰ堆積物	標高850~950mの緩傾斜山地を構成。東山開拓地の平坦面を含む。礫・砂・シルトからなり、クリスタル・アッシュをのせる。
	前期	70			
	鮮新世	猿丸層	180		
		柵層	300	四阿屋山火山岩—麻績—西条盆地東側の四阿屋山など山頂や尾根に点々と分布する緻密な輝石安山岩。	
			三峰山火山岩	三峰山火山岩—復輝石安山岩溶岩と同質の凝灰角礫岩からなり、シルト・凝灰岩の薄層をはさむ。	
			聖山火山岩	聖山火山岩—復輝石安山岩溶岩と同質の凝灰角礫岩。溶岩は多孔質。山頂は玄武岩質安山岩溶岩。	
			冠着凝灰角礫岩層	凝灰角礫岩—凝灰岩。火山角礫岩や軽石凝灰岩層をはさむ。一部は水中堆積。	
長砂岩礫岩層			砂岩・泥岩およびその互層が主。礫岩や炭化度の低い石炭層をはさむ。また、軽石凝灰岩がはさまる。		
500	最上部	泥岩・砂岩が主。炭化度の低い石炭層や礫岩層・凝灰岩層をはさむ。シジミ・タニシなど淡水性化石を含む。			
第 三 紀	小川層	上部	角閃石黒雲母流紋岩質凝灰岩。一部に溶結凝灰岩がみられる。輝花凝灰岩に対比される。		
		高桑凝灰岩層			
		中部	塊状砂岩・礫岩を主とし、何枚かの薄い石炭層・炭質泥岩層または泥岩層をはさむ。植物化石を含む。		
		下部	塊状砂岩を主とし、礫質砂岩に移化する。礫岩・泥岩の薄層をはさみ、縫痕目立つ。カキ化石・砂管含む。		
		900	上部	横への変化に富み、泥勝ち互層、砂勝ち互層、砂質泥岩からなり、スランプ構造や堆積構造が発達している。	
		下部	砂質泥岩・泥勝ち互層が主で、葉理の発達した厚い砂岩をはさむ。海底地すべりの異常堆積層がみられる。		

は標高905mで、盆地との標高差は300m、玢岩のピークにある要害の山城であった。この尾根筋は、屏風のように麻績川と東条川合流点まで延び、麻績盆地と西条盆地とに分けている。

岩殿山地は、岩殿山を主峰とする東条川と犀川に挟まる山地を呼び、標高700~900m内外の大峰面群の平坦な山嶺が広がる山地である。河川は地層面の延びる方向に沿い縦谷が発達して深く刻み、生坂・岩殿・富蔵の小山脈を分ける。小山脈は、南北方向に延び、斜面は急崖の岩壁となって谷に落ちている。麻績川は、この南北方向の地層に直交して、赤松以西で横谷となりV字谷をうがって差切峡谷をつくっている。岩質が硬いため侵食がはばまれ、盆地部への下方侵食をおくらせている。ここの主峰岩殿山は、独立した残丘を形成していない。それは残丘をつくりやすい火成岩が分布しないからである。

谷底平野は、麻績川沿い中流部の上永井や中安坂から麻績・下田を経て竹場・仁熊にかけた地域と、東条川沿い下流部の竹の下から西条を経て中村にかけた地域とに、比較的広い谷底平野や段丘が発達する。前者は麻績盆地、後者は西条盆地と呼ばれる。また、小仁熊川・別所川上流部にも小規模な盆地地形が見られる。これらの低地は、周辺を聖山・四阿屋山・岩殿山地などの山々に囲まれて盆地状の地形をなしている。この地域の水を集めているのは麻績川である。その横谷部の差切峡谷が川床の下刻をはばんでいるために、盆地部では側方侵食が進み、谷幅を広げて谷底平野をつくっていった。その後、間欠的隆起運動によって小規模な河岸段丘を形成した。麻績盆地の場合、沖積世に入って地形交換点（遷急点）が盆地内部に届かなかつたため、河川の下刻が全域まで及ばず、沖積段丘は目立たない。押し出し堆積物の閉塞による一時的な湛水を含め、河川堆積物による堆積が進み、沖積層の比較的広い分布が見られる。また、盆地周辺の河川は、押し出し堆積物が顕著で、緩やかな斜面をつくり谷底平野を覆っている。

一方、西条盆地は、東条川の流路に沿って沖積層が広がる。段丘や押し出し堆積物は、右岸に発達が顕著である。これは、四阿屋山を含め中央隆起帯に属する山々の隆起量が西側山地より大きく、盆地との比高も高いために多量の崩積堆積物が押し出され、これが河川堆積物として堆積し厚さを増したことによる。沖積世の地形変換点が内部まであがっているため、河床勾配は急で、小規模な沖積段丘をつくる。

3 気候

気候は、全般的に降水量が少なく、日較差・年較差の大きい中央高地式（内陸性）を示す特徴をもつ。県内の最寡雨地である上田・更埴地方に隣接しており、降水量は年平均1,000mm前後と寡雨地域の一部で、降水型は太平洋型を示し、冬少なく、夏多い。日本海へ70kmと近い位置にあるため、冬季の積雪は北の影響を受けやすい。しかし、聖山―三峰山―冠着山の山列が東西方向に延びていて、地域の北側の屏風となり、冬の季節風をさえぎるため、山列の北側地域に比べて降雪量・積雪量とも少ない。降水量の少なさ、谷の浅いこともあり、用水確保のための溜池や貯水ダムが目立つ。

気温は、麻績（標高632m）の年平均気温が10.2℃を示しており、長野より約2℃、松本より1.5℃前後低い。秋冬の訪れが早く、1・2月は零下となり、春秋の期間は短い。日較差は、月別平均で5月が最も高く13.9℃を示し、春夏秋冬の順となり、低地ほど大きい。年較差は、長野26.3℃、松本25.3℃に対して麻績は26.5℃と大きく、冬低く夏高い特徴をもつ。これは、盆地性と冬の季節風の吹き抜けることが原因する。また、高さによる気温差は、麻績の年平均気温を基準にして垂直減率（100mにつき0.5~0.6℃）によって算出すると、700m-9.8℃、800m-9.3℃、900m-8.6℃、1,000m-8.3℃、1,100m-7.8℃、1,447m（聖山山頂）-6.1℃となり、この値は地域の観測値と近似している。したがって、気温減率による年平均気温差を等高線に沿って広げていけば、この値が地域の年平均気温の水平分布と見なせる。桜前線や紅葉前線も高さによる気温差に左右されており、紅葉前線は最低気温が8℃以下に下がる日が数日続くと紅葉が始まるといわれ、9月末に聖山や四阿屋山などの山頂にあった紅葉前線は、10月上旬の後半には一

気に標高750mの線まで下り、10月の半ばには、全地域が紅葉に包まれるのが一般的である。

一方、風は、地形が複雑なため局地風が多いが、一般的には北ないし北東風が卓越する。この卓越風は、冬季には季節風と重なり、長野側から吹き上げて雪を伴うことが多い。また、山を越えて乾燥した空風となり、この地域に厳しい寒気をもたらす。夏季は乾燥した風となるので、内陸性の気温の高さに対して、さわやかさを運んでいる。一本松峠や猿が番峠など聖山山地の鞍部は、この風の通り道（ウインドギャップ）で、この卓越風は、聖おろし・番場おろし・冠着おろしとか呼ばれており、聖山や三峰山山頂・聖湖畔などに、南または南西に傾く風障樹をつくっている。

参考文献

- 木村純一・林義隆 1988 「長野県聖山地域の鮮新・更新統」（『地球科学』vol42、No.2）
- 小林国夫 1953 「フォッサ・マグナ西部における洪積世侵食面群」（『地理評』vol26）
- 下平真樹 1989 「地形と地質」『麻績村誌上巻』麻績村誌編纂会
- 下平真樹 1990 「地形と地質」『坂北村誌上巻』坂北村編纂会
- 関 全寿 1966 「松本市北部の地質構造」（『信大教育学部松本分校科学教室研究報告』No.8）
- 関 全寿 1984 「自然編」『明科町史上巻』明科町史刊行会
- 関 全寿 1989 「松本盆地東縁河岸段丘面における埋積過程の一様相
—北村遺跡の発掘を通して—」（『田中邦雄教授退官記念論文集』）
- 関 全寿 1992 「地形・地質」『生坂村誌上巻』生坂村誌編纂会
- 田中邦雄 1953 「長野県中部第三紀層の諸問題」（『信大教育学部研究論集』No.3）
- 田中邦雄・関全寿 1966 「松本市北方の第三紀層」（『信大教育学部研究論集』No.18）
- （財）長野県埋蔵文化財センター 1987 『長野県埋蔵文化財センター年報』4
- （財）長野県埋蔵文化財センター 1988 『長野県埋蔵文化財センター年報』5
- （財）長野県埋蔵文化財センター 1989 『長野県埋蔵文化財センター年報』6
- 仁科良夫 1972 「大峰面の形成過程」（『地質学論集』No.7）
- 本間不二男 1931 『信濃中部地質誌』古今書院
- 森下 晶他 1957 「長野県聖山南麓の地質—いわゆる東筑タイプ小川層の層序—」（『地質雑』vol63）



聖山（麻績村側）

第2節 歴史的環境と周辺の遺跡

今回調査の対象となった5遺跡が分布する西条・麻績盆地には、坂北村・麻績村のほか、本城村・坂井村の4カ村がある。これまで筑北4カ村で行われた考古学的な調査には、1962年の坂井村安坂古墳群の発掘、1970年の本城村コクサギ（唐前）遺跡の発掘、1979年の麻績村武士塚古墳の発掘、1990年の本城村番場遺跡の発掘のほか、1940年代の安坂古墳群の調査、『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』編纂に伴う調査が知られるのみである。ここでは筑北山地の遺跡の消長を概観してみる（第2表、第5図）。なお、麻績村の遺跡数が多い理由には、1989年刊行の村誌編纂事業に伴って既存の遺跡分布図が見直されたことも関係し、近い将来他の3カ村についても、分布調査によってより正確に把握されることが期待される。

旧石器時代 現在筑北最古の遺跡は、石刃を出土した坂北村東山遺跡と思われる。このほか本城村南平遺跡から神子柴型石斧、麻績村蔵次郎遺跡（第5図96、以下番号のみとする）から神子柴型尖頭器、山吹堂遺跡（90）から槍先型尖頭器が出土し、旧石器時代末期の人跡がうかがえる。

縄文時代 早期の遺跡は、特殊磨石を含む石器のみを出土した遺跡も含めると16カ所に上り、聖湖岸、大沼池周辺、一本松峠周辺など、筑北山地でも最も標高の高い、聖高原一帯に集中している。これに属す遺跡としては、麻績村聖山山頂（103）・大沼（104）・雀木（105）・聖湖西（107）・聖湖（108）・一本松（109）・坂井村蟹沢（131）・蔭清水（133）・強清水（134）の諸遺跡があり、押型文・条痕文土器が出土している。更埴市大池南（144）・古屋敷A・B（149・150）・八幡林（151）・大岡村シャレー聖ヶ岡（141）・聖山（142）・鍋久保（143）遺跡も高原立地の遺跡群で、鍋久保遺跡では押型文土器を伴う住居址や、貝殻沈線文土器を伴う土坑群が調査されている。一方、盆地内では絡条体圧痕文土器を出土した本城村上手山遺跡、ごく少量の遺物を出土した坂北村十二（2）・麻績村仏岩岩陰（91）遺跡がある。東条川の河岸段丘にある坂北村向六工遺跡（1）は最も低位の立地を示し、少量の押型文土器を除けば、絡条体圧痕文が盛行する末葉の単純な集落址である。

前期の遺跡は、石匙を含む石器のみを出土した遺跡を含めると11カ所を数え、筑北全域に拡散して分布している。比較的高所の山腹に立地する本城村矢塚（9）・麻績村野田沢上（52）・坊平（82）・北山（102）遺跡と、山麓から河岸段丘に立地する本城村八木（10）・坂北村東畑（41）・麻績村和合（46）・清水（102）遺跡が知られ、和合・野田沢上遺跡からは諸磯C式が出土し、後葉段階の遺跡が多いといわれる。

中期の遺跡は15カ所を数え、前期の約3倍増という長野県全体の動向ほど顕著な増加は見られないものの、石斧・石鏃など石器のみを出土した遺跡のかなりの部分は中期に属すと推定される。東条川の段丘に立地するコクサギ（唐前）遺跡（22）からは唯一住居址が検出され、勝坂式・加曾利E式の出土が知られている。町裏遺跡（23）もこれに近い。麻績川の河岸段丘に立地する麻績村和合遺跡（46）は初頭段階、下井堀遺跡（58）は後葉段階のまとまった土器を出土した。下井堀遺跡の土器は唐草文系第Ⅲ段階を主体に、千曲川流域と犀川流域北部に多い圧痕隆帯文土器が伴い、彼我の交流がうかがえる。これらの支流に立地する本城村上手山・堂畑・坂北村東畑（41）・菖蒲田（42）・麻績村夜舟（99）・市野川（100）遺跡や、より高所に立地する坂北村清長寺裏（38）・東山・麻績村北山（102）・坂井村蟹沢（131）・あわら平（132）遺跡もある。

後期は前葉の土器が麻績村野口（3）・坂北村向六工（1）遺跡でわずかに出土しているのみで、晩期は遺跡が知られていない。

弥生時代 土器の出土が知られるのは中期1・後期6遺跡を数える。東条川・麻績川の段丘に立地する遺跡が多く、本城村町裏（23）・坂北村向六工（1）・麻績村寺裏（60）・ツヅネ森（70）・砂田（85）・

立石(92)・坂井村古司(4)遺跡がある。これらの支流に立地するのが麻績村宮本(93)・梶浦上(98)・夜舟(99)・坂井村崎平(115)遺跡、高所の山腹に立地するのが麻績村北山(102)・頭無(106)・坂井村強清水(134)遺跡である。立石遺跡からは箱清水式土器、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁、炭化米が出土し、麻績川の沖積地で稲作を行っていたことは確実といわれる。このほかに磨製石器を出土した遺跡としては、寺裏・宮本・梶浦上・古司・崎平・強清水遺跡から太形蛤刃石斧、向六工・北山遺跡から石鏃の出土が知られ、これらを中期とすれば10遺跡となり、後期を上回ることになる。長野県では磨製石器は弥生後期には消滅するといわれ、筑北の諸例の帰属時期が問題となるとともに、高冷地への稲作の波及期を考えるうえで見逃せない資料である。

古墳時代 筑北最古の古墳は坂井村東山中腹に立地する安坂1・2号墳(117-1・2)である。いずれも一辺10mの方墳の積石塚で竪穴式石室を備え、5世紀代の築造である。1号墳からは剣、直刀、銚、きさげ、砥石が出土し、剣の地金は朝鮮半島渡来といわれる優品である。安坂古墳群は7基が登録されているが(現存4基)すべて方墳で、山麓に立地する3・4号墳は後期古墳である。「安坂」の地名は『日本後紀』の延暦16年(797)の条の「賜姓安坂」に見られ、安坂古墳群の被葬者は高句麗からの渡来氏族と考えられている。後期古墳は筑北各地に分布するが、麻績盆地に集中している。坂井村では安坂3～7号墳(117)のほか、塚畑古墳(118)・積石塚方墳の追沢古墳(121)・山秋古墳(125)・山崎1～3号墳(127～129)の11基、麻績村では砂原古墳(47)・塚原1・2号墳(53・54)・天王西原古墳(65)・塚田古墳(68)・叶里塚古墳(71)・武士塚1～5号墳(72・73)・王塚(ブス塚)古墳(76)・宮本古墳(94)・梶浦古墳(97)の14基、坂北村では武士塚古墳(29)・高塚古墳(30)の2基、本城村では小仁熊の塚田古墳(15)・塚田添古墳(20)・東条の塚田古墳(21)・竹の下古墳の4基が知られる。このうち武士塚1号墳は発掘調査され、1次埋葬後、7・8世紀にかけて横穴式石室を改修して2次埋葬し、さらに、11世紀に3次埋葬が行われた状況が明らかになった。これら33基の古墳が知られている反面、集落址はほとんど不明で、わずかに後期に属する遺物が採集されているにすぎない。

古代 古代の筑北は更級郡麻績郷に属していた。更級郡の境域は、北は犀川以南の川中島から南は本城村に及び、現在の更埴市八幡^{こおり}の郡に郡衙が置かれていたことはほぼ確実といわれる。麻績郷はその中でも最大の面積を占め、その範囲は現在の東筑摩郡麻績村を中心に坂井・坂北・本城村の4カ村が該当し、一部は犀川流域に達していた。ここには、松本平から越後へ通ずる東山道の支道が通っていた。この支道は四賀村の錦織駅で分岐し、麻績駅を過ぎて冠着山の古峠を越えて善光寺平へ通じていた。このため都の文化にも直結して、貞観8年(866)には定額寺の安養寺が麻績郷内に置かれたのをはじめ、岩殿寺や福満寺など山岳仏教が栄え、姨捨の月の名所として名をはせた。平安後期には郷内も荘園化が進み、11世紀には伊勢神宮(内宮)に寄進され、麻績御厨という荘園となった。伊勢神宮へは毎年、鮭300尾、筋子1桶、搗粟1斗、干粟1斗を貢進している。

筑北の古代遺跡はすべて平安時代とされ、本城村8・坂北村5・麻績村18・坂井村7カ所の集落遺跡が知られている。これらの大部分が東条川・麻績川の河岸段丘付近に集中する一方、麻績村屋敷平(101)・坂井村竹原(130)・蟹沢(131)・落清水(133)遺跡など、峠道に通ずる遺跡も見られる。本城村藤塚窯跡(18)・麻績村松倉窯跡(57)は須恵器窯である。坂北村長者原経塚(31)は近世末に掘られ、経筒外容器は12世紀代の常滑系甕である。本城村鏡平遺跡出土の

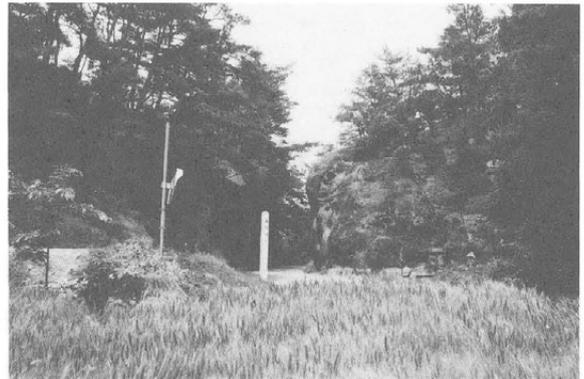


安坂1号墳

八稜鏡もこのころに属する。文献に華々しく語られているわりには遺跡の実態は明らかになっておらず、麻績村野口(3)・坂北村向六工(1)遺跡の調査によって、9・10世紀の山村のありさまが初めて語られることとなった。

中世 鎌倉時代初期に、麻績郷は筑摩郡に移ったらしく、東山道支道も一本松峠を通るようになった。承久の変後、服部伊賀守が新補地頭として麻績に入部した。このころ、岩殿山は12坊・4支院を有する修験道場として栄えた。建武3年(1336)には宮本の十日市場付近の戦いで村上信貞が北条軍を破り、筑北地方は村上氏の領有となった。応永7年(1400)の大塔合戦では、在地領主麻績山城守が反守護軍に属して戦った。戦国の動乱期を迎え、寛正5年(1465)を最後に麻績御厨は退転したらしい。永正の初め(1508ころ)、服部清信が麻績に入部し、中町裏付近に居館を構え、虚空蔵山城(88)に拠り、麻績城(89)を築いた。甲越戦争は筑北地方も戦乱に巻き込み、天文22年(1553)武田晴信が筑北地方に侵攻すると青柳氏はこれに降り、服部氏は越後の長尾景虎のもとへ走って、麻績は青柳氏の支配するところとなった。天正10年(1582)武田氏が滅びた後、上杉景勝と小笠原貞慶の影響力の間で麻績城・青柳城(36)の城主は目まぐるしく代わり、天正15年(1587)青柳頼長が小笠原貞慶に滅ぼされた後、青柳城は小笠原氏の領有となった。天正18年(1590)、小笠原氏に代わって松本へ入封した石川数正が筑北地方を領有して以来、近世前半は松本藩の歴代藩主が筑北を統治することとなった。

中世遺跡としてはここにふれたような城館跡が盆地にのぞむ要所に築かれ、本城村5・坂北村4・麻績村5・坂井村3カ所を数える。このほかに陶磁器や内耳鍋などの出土が知られる遺跡は筑北全体で18カ所に上る。麻績村古屋敷遺跡(86)からは瀬戸美濃系陶器灰釉小皿10枚が内耳鍋、石臼などと出土し、居館跡の可能性が高いという。坂北村向六工遺跡(1)は、筑北で度重なる攻防が繰り返された16世紀半ばを中心とする集落址である。麻績村野口遺跡(3)は青柳城の北麓に位置し、城に関係した伝承地でもある。



青柳の切通し(1582年開削)

第2表 筑北地区時代別遺跡数一覧表

種別 地区	一般遺跡																				古墳					窯 址	寺院 址	経塚	城跡	館跡	遺跡 総数				
	縄文時代								弥生時代				古墳時代				古墳																		
	旧石器	草創	早期	前期	中期	後期	晩期	不詳	計	前期	中期	後期	不詳	計	前期	中期	後期	不詳	計	奈良	平安	中世	近世	後方	後円							円墳	方墳	不詳	計
本城村	1		1	3	4			7	15		1	1		2							8	5				3		1	4	2			5	27	
坂北村	1		2	1	4	1		7	15		1	1		2							5	2	1			2		2	1	1	1	3	1	17	
麻績村	2		7	6	4	1		14	32		4	3		7						3	18	8	1			13	1		14	1		5	61		
坂井村			6	1	3			16	26		4	1		5						2	7	3				5	8		13			3	44		
松本地区計	14	1	62	137	415	122	21	315	1073	0	35	100	60	135	0	0	1	52	53	18	513	80	3	1	0	307	22	19	349	20	5	1	23	13	1595
長野県合計	330	40	515	998	3158	904	231	2124	7970	12	341	1314	432	2099	17	34	54	779	884	128	3078	604	176	5	47	3359	50	70	3531	90	13	13	184	26	12604

- ・この表は『長野県史考古資料編全1巻(1)遺跡地名表』(1981)の「長野県市町村別・時代別遺跡数一覧表」をもとに作成した。
- ・ただし『県史』は地名表のみのため、第5図筑北地区遺跡分布図および遺跡地名表に掲載したのは、市町村遺跡台帳・分布図に登録された遺跡、あるいは郡誌・村史等の遺跡分布図に記載があるものに限り、地図上で位置が確認できなかった遺跡は省いた。
- ・筑北4カ村の遺跡数については、『麻績村誌上巻』(1989)に記載のある遺跡を増補し、今回の調査成果を加味した。ただし、麻績村以外の3カ村の遺跡総数と、松本地区(北・南安曇郡、東筑摩郡、松本市、塩尻市)および長野県の合計は『県史』のままとした。
- ・筑北4カ村の遺跡には城館跡を含め、さらに、時期不詳の遺跡については、土器が確認されていない場合でも特徴的な石器を指標に、次のとおりに時期区分した。縄文時代については、特殊磨石は早期、石匙は前期として扱った。弥生時代については、磨製石器は中期として扱った。

第3表 筑北地区遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生				古墳	奈良	平安	中世	近世	文献		
			草・早	前・中	後・晩	不詳	中	後	不詳	前・中							後	不詳
1	向六工遺跡	◎	○	○	○							◎	◎	28・29				
2	十二	○											◎	27				
3	野口			○									◎	26				
4	古司			○									○	26				
5	子尾入			○									○	26				
6	鼠屋敷城跡												○					
7	高登屋物見												○					
8	たかうちば物見												○					
9	矢塚遺跡			○														
10	八木			○														
11	舞台			○									○					
12	琵琶平												○	○				
13	番場												○	33				
14	白久保			○														
15	塚田古墳									○								
16	西条窯跡												○					
17	西條城跡												○					
18	藤塚窯跡												○					
19	先達村遺跡												○					
20	塚田添古墳									○								
21	塚田									○								
22	唐前(コノサギ)遺跡	◎												31				
23	町裏	○			○	○							○					
24	東條城跡												○					
25	草塩遺跡			○									○					
26	日影遺跡			○									○					
27	日影北			○														
28	北山												○	○				
29	武士塚古墳									○								
30	高塚									○								
31	長者原経塚												○	7、35				
32	入道窪窯跡												○	7				
33	山寺遺跡			○														
34	丁田												○					
35	天神山			○														
36	青柳城跡												○	39				
37	青柳氏館跡												○	39				
38	清長寺裏遺跡	○											○					
39	竹場城跡												○	7				
40	湖平遺跡			○														
41	東畑	○	○															
42	高蒲田		○															
43	仁熊城跡												○	7				
44	岩殿寺奥の院												○	35				
45	下田遺跡			○									○					
46	和合																	
47	砂原古墳									○								
48	日向小学校敷地遺跡			○														
49	桂												○	18				
50	高城跡												○	5				

(番号は第5図と符合する。◎は遺構のある時期)

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生				古墳	奈良	平安	中世	近世	文献		
			草・早	前・中	後・晩	不詳	中	後	不詳	前・中							後	不詳
51	上の平遺跡					○												
52	野田沢上			○											5			
53	塚原1号古墳									○								
54	塚原2号									○								
55	狐屋敷遺跡					○							○	○				
56	立石							○			○		○	○	5			
57	松倉窯跡												○					
58	下井堀遺跡		○											○	5			
59	矢倉城跡													○	5			
60	寺裏遺跡								○									
61	寺の前					○								○				
62	小丸山					○								○	○			
63	口城跡														○			
64	月夜山遺跡													○				
65	天王西原(西平)古墳										○							
66	天王大畑遺跡										○				5			
67	塚田遺跡													○				
68	塚田古墳										○							
69	新井遺跡					○								○				
70	ツツネ森					○	○							○				
71	叶里塚古墳												○					
72	武士塚1号					○					○		○	○	5、21			
73	武士塚5号												○					
74	武士塚遺跡					○							○					
75	才蔵坊													○				
76	王塚(ブス塚)古墳												○					
77	天王遺跡					○												
78	中田					○												
79	上ノ原					○												
80	丸山					○								○				
81	西光寺														○			
82	坊平		○											○				
83	清水					○					○		○					
84	小学校敷地		○										○	○	5			
85	砂田								○					○				
86	古屋敷														○	5		
87	古卵塔														○			
88	虚空蔵山(古城山)城跡													○	○	5		
89	麻績														○	5、39		
90	山吹堂遺跡	○														5		
91	仏岩岩陰		○													5		
92	立石								○				○					
93	宮本									○								
94	宮本古墳												○					
95	梶浦西遺跡					○												
96	蔵次郎	○														5、34		
97	梶浦古墳												○					
98	梶浦上遺跡									○						5		
99	夜舟		○						○					○	5			
100	市野川		○															



第5図 筑北地域の遺跡分布図

引用・参考文献(五十音順)

- 1 大岡村教育委員会 1972 『長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡緊急発掘調査概報』
- 2 大場 磐 雄 1947 「信濃国坂井村の積石塚について」(『信濃』II-7)
- 3 大場磐雄・原嘉藤他 1964 「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査(1)」(『信濃』III-16-4)
- 4 大場磐雄・原嘉藤他 1964 「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査(2)」(『信濃』III-16-6)
- 5 麻績村誌編纂会 1989 『麻績村誌上巻(自然編・歴史編)』
- 6 金子浩昌・米山一政他 1965 「長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告(2)」(『長野県考古学会誌』2)
- 7 坂北村教育委員会 1986 『坂北村の文化財と史跡』
- 8 笹沢浩・森嶋稔他 1966 「長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告」(『信濃』III-18-6)
- 9 笹沢浩・森嶋稔他 1967 「長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告(3)」(『信濃』III-19-3)
- 10 笹沢浩・森嶋稔他 1976 「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」(『長野県考古学会誌』23・24)
- 11 佐藤 信 之 1987 「更埴市・大池南遺跡出土土器について」(『長野県考古学会誌』53)
- 12 更級埴科地方誌刊行会 1978 『更級埴科地方誌 第二巻 原始古代中世編』
- 13 信濃教育会東筑摩部会 1919 『東筑摩郡誌』
- 14 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料 第一巻(上・下)』
- 15 信濃史料刊行会 1956 『信濃考古綜覧(上・下)』
- 16 須佐安登・森嶋稔他 1972 「更埴市鍋久保遺跡の押型土器を伴う住居址について」(『長野県考古学会誌』14)
- 17 関 孝 一 1965 「長野県埴科郡戸倉町蝶葉遺跡の調査」(『信濃』III-18-4)
- 18 土屋 長 久 1971 「長野県東筑摩郡麻績村日柱出土の錫杖頭について」(『長野県考古学会誌』11)
- 19 戸倉町教育委員会 1990 『円光房遺跡』
- 20 戸倉町教育委員会 1990 『三島平遺跡』
- 21 鳥羽英継・原明芳 1979 「麻績村武士塚古墳発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』33)
- 22 長野県教育委員会 1974 『昭和48年度中央自動車道長野線建設予定地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』
- 23 長野県教育委員会 1983 『長野県の中世城館跡—分布調査報告書—』
- 24 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全1巻(1)遺跡地名表』
- 25 長野県史刊行会 『長野県史 考古資料編 全1巻(3)主要遺跡(中南信)』
- 26 勸長野県埋蔵文化財センター 1988 『長野県埋蔵文化財センター年報4』
- 27 勸長野県埋蔵文化財センター 1989 『長野県埋蔵文化財センター年報5』
- 28 勸長野県埋蔵文化財センター 1990 『長野県埋蔵文化財センター年報6』
- 29 勸長野県埋蔵文化財センター 1991 『長野県埋蔵文化財センター年報7』
- 30 勸長野県埋蔵文化財センター 1992 『長野県埋蔵文化財センター年報8』
- 31 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第二巻歴史上』
- 32 文化財保護委員会 1967 『全国遺跡地図 長野県』
- 33 本城村教育委員会 1990 『円満院跡(番場遺跡)』
- 34 宮下 健 司 1986 「長野県東筑摩郡麻績村蔵次郎遺跡出土の種子柴型尖頭器」(『長野県考古学会誌』52)
- 35 宮下 健 司 1986 「信濃国岩殿山・岩殿寺を中心とする修験道と別所開発」(『信濃』III-38-10)
- 36 森 島 稔 1981 「信濃経塚資料にみる二・三の課題—埴科郡戸倉町経ヶ峯経塚資料を中心に」(『信濃』III-33-12)
- 37 矢口 忠 長 1979 「戸倉町羽尾郷嶺山出土の須恵器小壺」(『長野県考古学会誌』33)
- 38 屋代高校地歴班 1964 「埴科郡巾田遺跡第一次調査—特に立石を伴う配石址について—」(『長野県考古学会誌』1)
- 39 湯本軍一編 1980 『日本城郭大系 第8巻 長野・山梨』

第3章 向六工遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は、東筑摩郡坂北村字向六工5,846ほかに所在し、JR篠ノ井線坂北駅の西300mの位置にある。高速道路線としては六工高架橋の南側で、高速バス坂北停留所に当たり、中心枕512・513を含む。

本遺跡は東条川左岸にあり、東に張り出した台形の段丘全面を占め、標高590~600mの地点である。この段丘は面積約20,000㎡を測り、緩傾斜面で日照は良く、筑北山地の遺跡立地としては好適な条件を備えている(第6図)。地元では古くから石鏃や銭貨の出土地として知られ、岩殿寺山門のあったという伝承地でもある。遺跡として登録されたのは昭和56年が初めてのこのように、縄文時代の石器と平安時代の土器が記載され、内容は不詳であった。

現況は一部宅地を含む蔬菜畑で、かつては全面が桑畑であったという。昭和50年代に本遺跡の西側の上位段丘面にある柳原団地の造成に伴って、六工橋から遺跡北東部を通過する村道が建設された。

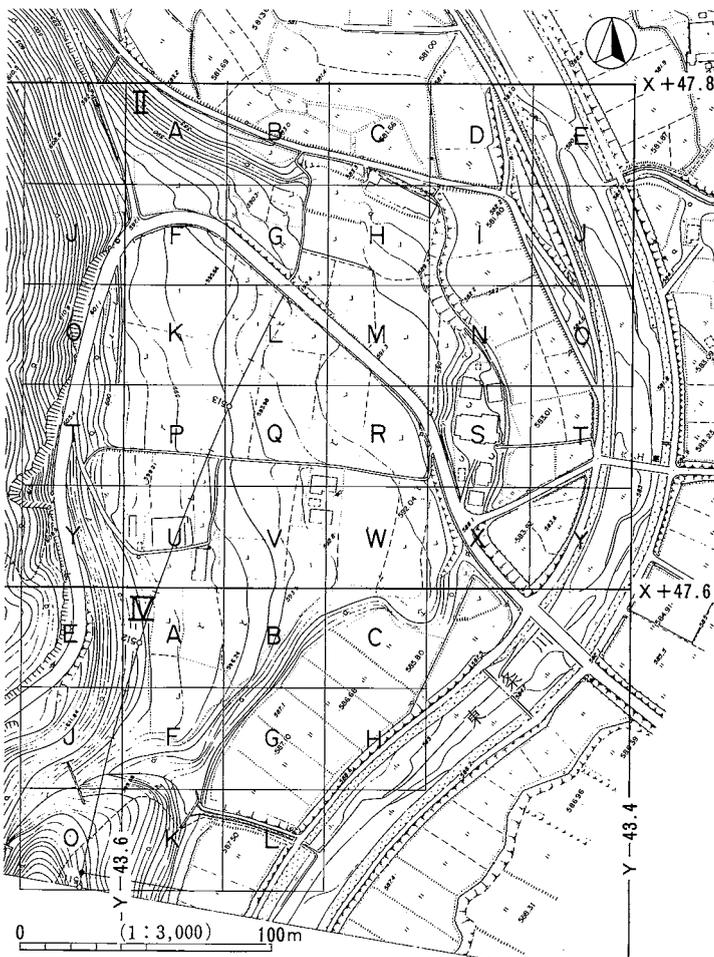
2 調査の概要

本遺跡の発掘調査は、昭和63年度に13,600㎡を対象面積として計画されていたが、年度当初には未買収

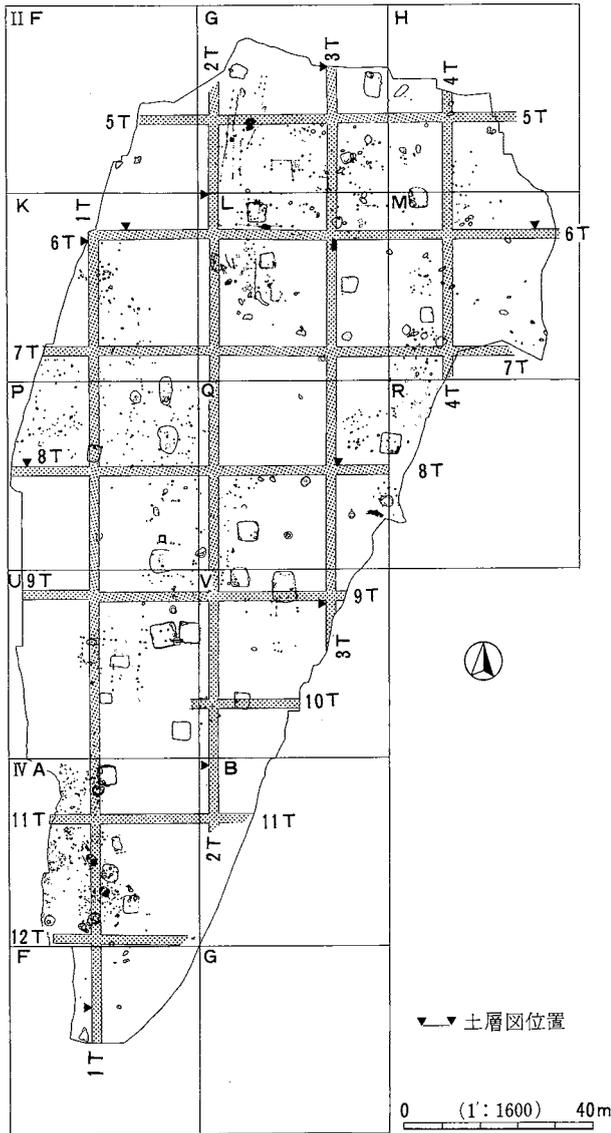
地が過半分を占めていた。このため、坂北村十二遺跡の調査後、4月26日から28日に調査研究員4名が1m四方のテスト・ピット16カ所を掘り下げる試掘を行った。この結果、縄文早期の条痕文土器、石鏃、弥生時代の磨製石鏃、平安時代の土師器・灰釉陶器、中世の銭貨などを検出し、遺物包含層と遺構の一部を確認した。その後、7月に至っても用地買収の進捗が見られないため、次年度に延期することとした。

平成元年度には調査研究員4名が担当し、4月18日から9月13日まで、未買収の宅地と切り回しの必要な村道部分を残して全面的な発掘調査を行った。トレンチ調査によって調査地北端にも遺物包含層が延びていることが判明したため、対象面積は14,500㎡となり、この内前述の部分を除く11,700㎡を調査した。

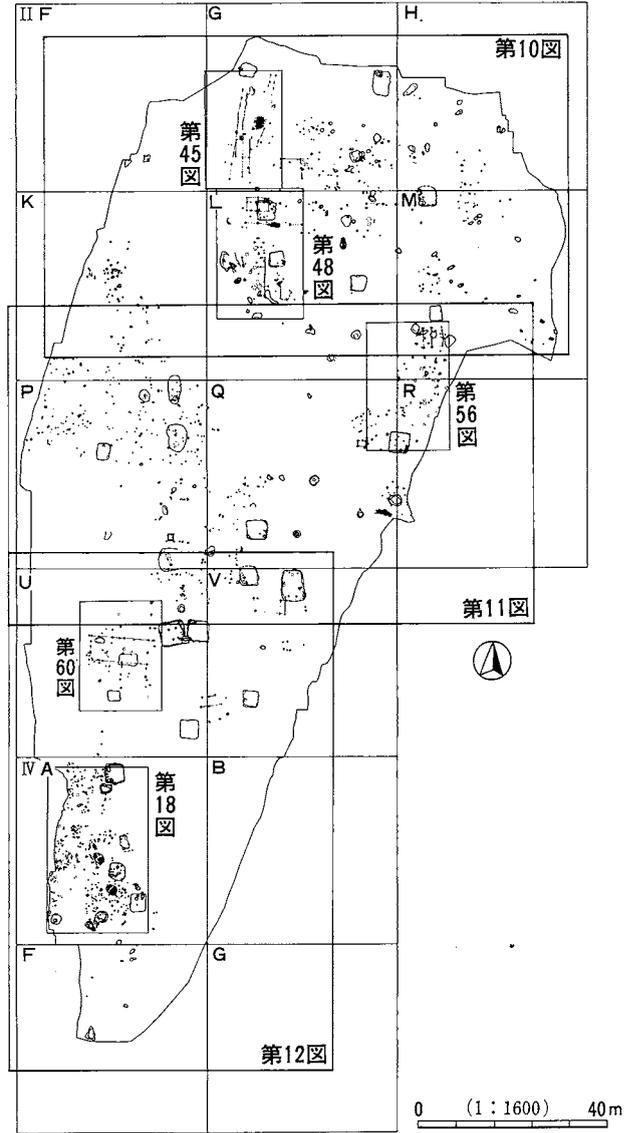
平成2年度には調査研究員3名が、村道部分を4月5日から20日、宅地部分周辺を7月24日から9月17日まで調査した。対象面積は2,800㎡で、2カ年の発掘で本遺跡全体の7割以上が調査されたと推定される。残存部分



第6図 地形・配点図(1:3,000)



第7図 トレンチ設定図 (Tはトレンチ)



第8図 遺構割付図

はIIM・R・V地区の東側のみとなった。

面的調査の手順としては、本調査当初に重機により25m間隔で南北4本(1~4T)・東西8本(5~12T)のトレンチをあけて遺物包含層を確認した後、北側から表土剥ぎを行い、測量基準杭と簡易貫板を設定した(第7図)。

測量基準杭は第1章の原則により、日本道路公団の工事用杭の座標から業者が算出して8mグリッド杭まで設定し、水準測量もこれによった。調査予定地には200mの大々グリッドI~IV区がかかったが、西側急斜面に当たるI・II区は結果的に調査区からはずれ、南端のIV区は40mの大グリッド3地区、大半を占めるII区は同じく11地区を調査した。大々グリッド基点のIVA A01の座標は(X=47,600,000、Y=-43,600,000)で、X軸は遺跡の長軸、Y軸は遺跡の短軸と一致する(第6図)。

遺構測量には適宜2m方眼を設定して手測した。地形測量もこれに準じて記録し、後に比例配分によって地形図を作成した。航空撮影は平成元年度調査の終了時に行った。

遺構実測図の報告書掲載は、縄文早期・中世遺構については、局地的に同一調査面で各種の遺構が集中する部分が見られるため、これを遺構群ととらえ、割付図として抜き出した(第8図)。その他は個別遺構の挿図とした。

3 調査の経過

平成元年度

- 4月12日 重機でトレンチ掘り下げ。土層分層。
- 4月18日 発掘開始式。表土剥ぎ。II G・H区遺構検出。
- 5月8日 II L・M区で中世らしい焼土・ピット多数検出。
- 5月19日 最初の平安時代住居址の掘り下げ。遺構実測。
- 6月2日 II L区中世遺構精査。埴塙出土。
- 6月20日 2回目の表土剥ぎ。平安・中世遺構の掘り下げ・実測。道路公団豊科工事事務所水間所長視察。
- 6月29日 II G・H区調査終了。L・M区平安・中世遺構調査。坂北村太田教育長・文化財調査員視察。
- 7月5日 坂北村老人学級90名見学。
- 7月19日 II L区黒色土層で黒曜石片多出。平安住居址掘り下げ。道路公団小栗庶務課長視察。
- 7月21日 聖南中学1年生60名見学。
- 8月1日 重機でII V・IV区表土剥ぎ。IV A区西側で崖錐堆積下の遺物包含層を確認。
- 8月8日 表土剥ぎ終了。II V・IV A区で平安住居址5軒以上検出。聖南中学郷土クラブ員12名見学。
- 8月18日 平安住居址精査。IV A区では絡条体圧痕文を伴う条痕文系土器多出。
- 8月29日 IV A区で縄文早期の焼土址・集石土坑精査。
- 9月7日 空撮準備し、午後実施。
- 9月10日 現地説明会開催。見学者162名。
- 9月13日 機材撤収し本年度分の調査を終了。

平成2年度

- 4月4日 現地へ機材搬入。重機で表土剥ぎ。
- 4月5日 発掘開始式。II G・L区で中世遺構検出。
- 4月11日 中世遺構・平安住居址の精査・実測。
- 4月17日 重機による2回目の排土。遺構検出。
- 4月20日 関調査員、地形・地質について現地指導。
- 7月24日 重機で通学道路の付け替えとII U区表土剥ぎ。
- 7月27日 作業従事員参加し遺構検出開始。晴天で乾燥。
- 8月7日 II P・V区で縄文・平安住居址検出。雨なし。
- 8月24日 IV A区で縄文早期の住居址・焼土址を検出。II U区にかけて遺物多出。実測開始。
- 8月29日 II U区の土坑から瀬戸美濃系丸皿11枚が出土。
- 8月31日 平安住居址の掘り下げ中、中世火葬施設を検出。
- 9月3日 調査開始以降8月10日以外に雨がなく、数十年ぶりの早魃。作業難航しタンクで給水。
- 9月7日 作業と並行して午後現地説明会。50数名見学。
- 9月12日 道路公団豊科工事事務所土手本副所長視察。
- 9月17日 作業を終えて機材撤収。筑北4カ年の調査終了。



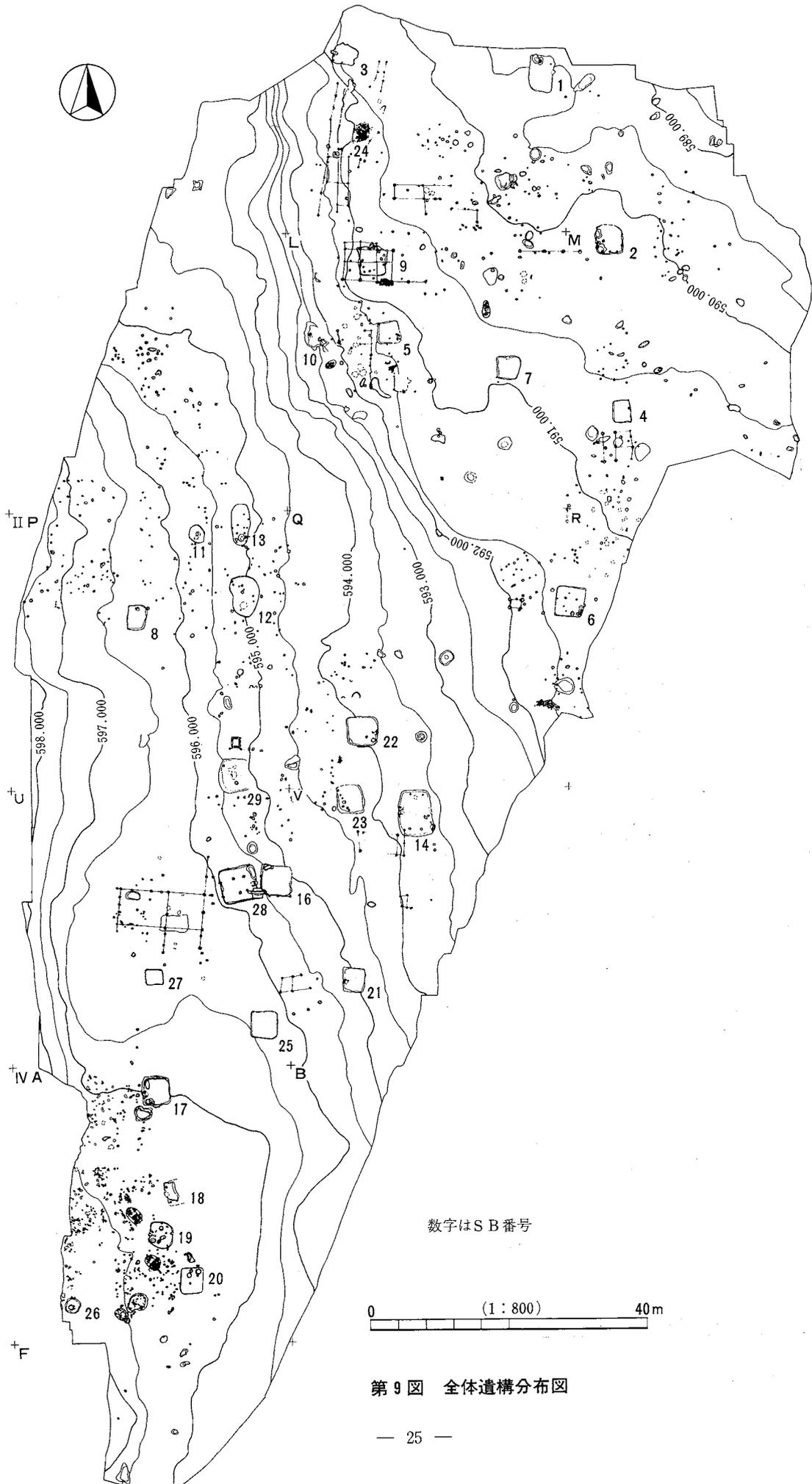
遺構検出作業(平成元年4月)



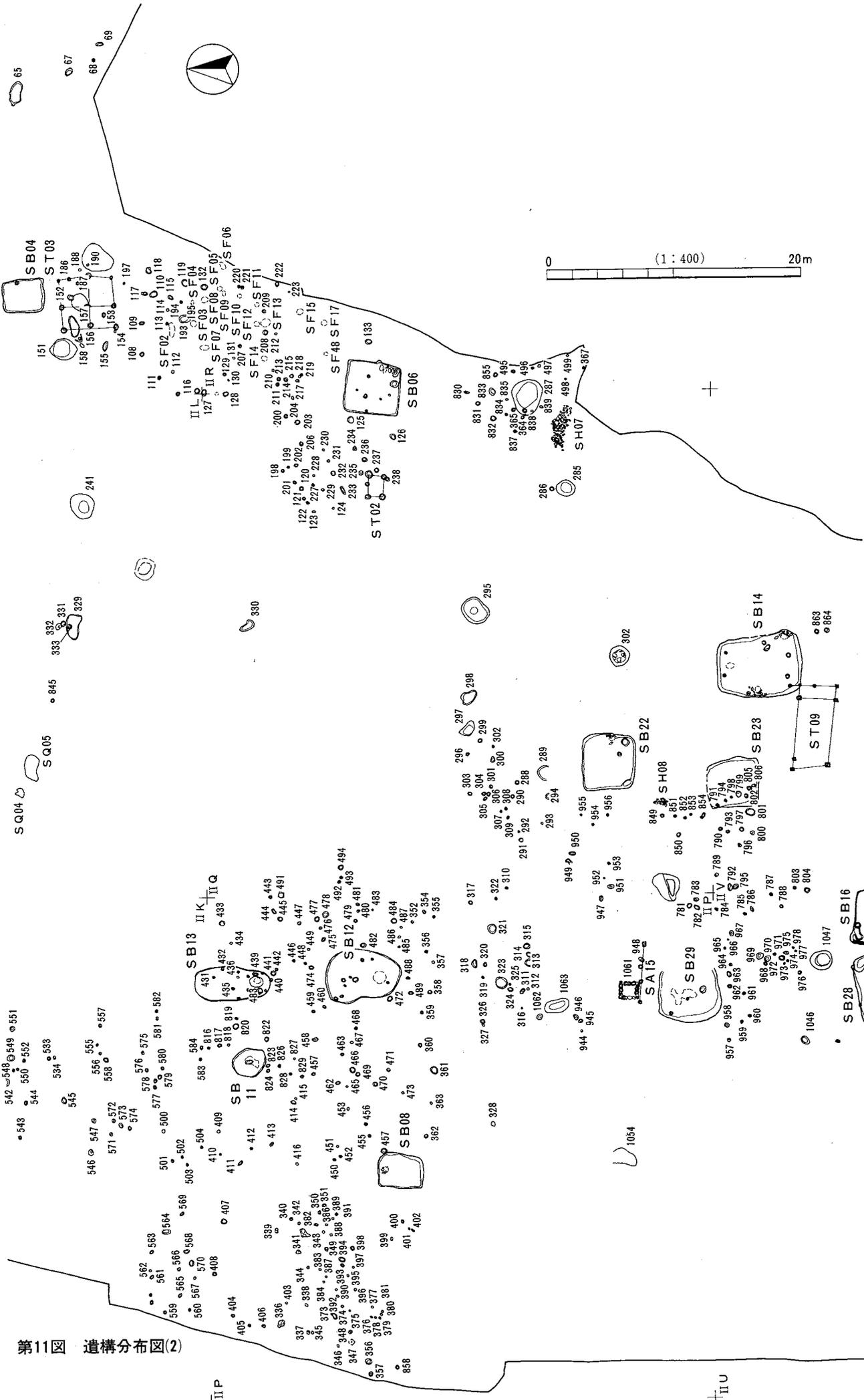
坂北村老人学級の見学(平成元年7月)



早天下での水播き(平成2年9月)



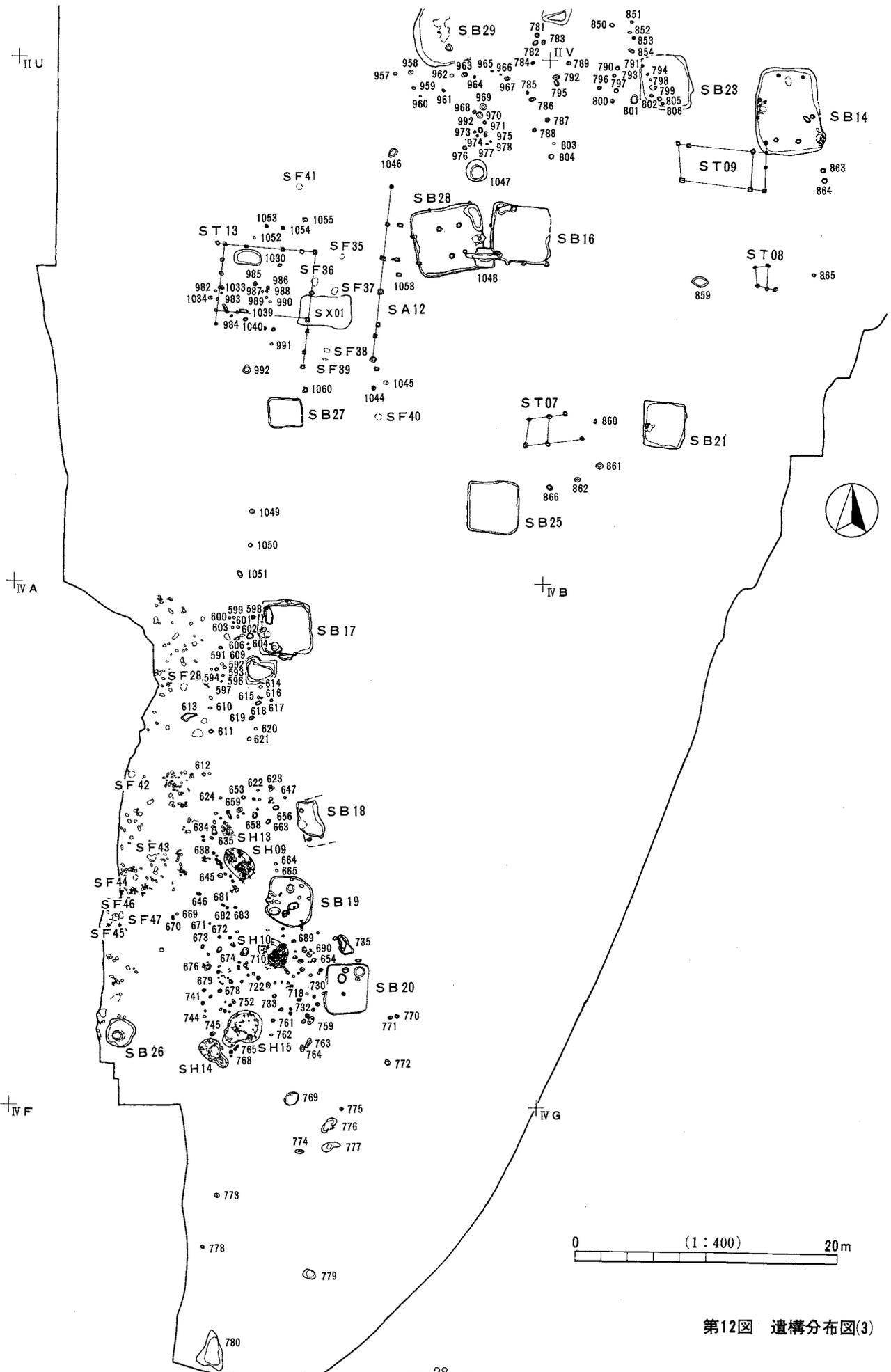
第9図 全体遺構分布図



第11图 遺構分布图(2)

II P

II U



第12図 遺構分布図(3)

第2節 地形と基本層序

1 地形

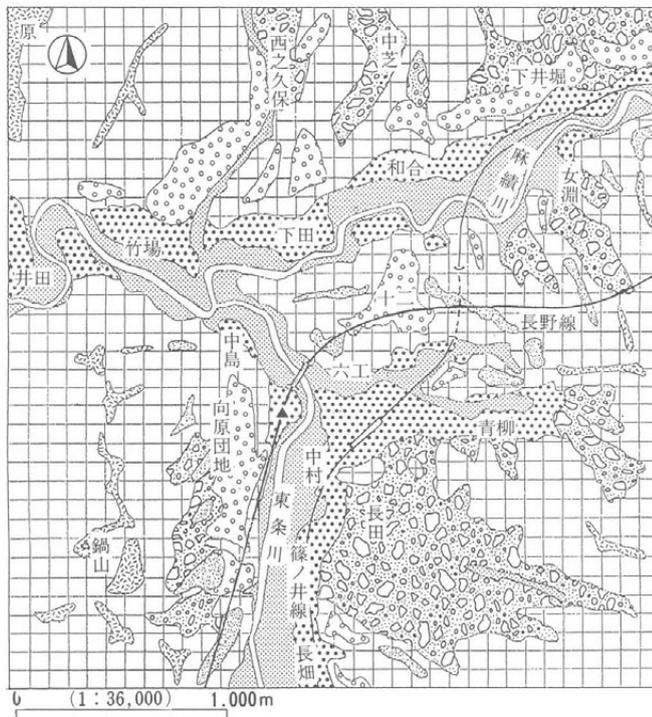
向六工遺跡は、JR篠ノ井線坂北駅西方約350mの、坂北村向六工地籍に所在し、西条盆地の西端部近くを北流する東条川合流地付近の左岸、標高590mほどに存在する小段丘上に位置する。

西条盆地は、更新世中期（約70万年前）以降、大峰面群を侵食して発達した山間部としては、比較的広い谷底平野である。これは、西側の山地に比べて、隆起量の大きい東側の中央隆起帯の山々から運ばれた河川堆積物や、土石流堆積物に覆われている。その後の間欠的隆起に伴い、これらの堆積物は、河川の侵食によって先端部付近を削られて、河岸段丘を形成している。また、東条川の流路に沿って狭小な沖積平野が分布するが、沖積層は薄く、基盤岩の露出するところも見られる（第13図）。

遺跡の立地する小段丘は、東条川の地形変換点に当たり、氾濫原からの比高約6m、薄い河床礫に覆われた緩い傾斜をもつ基盤岩の堆積面となっている。背後は、比高約30mの青木層の砂質泥岩砂岩互層の露出した段丘崖を隔てて、10m前後の河床礫をのせた更新世の段丘が広がる。

小段丘は、背後からの崖錐性堆積物や、南側からの小溪流が運んだ腐植物を含む堆積物に覆われており、堆積物の礫種が同じ河川系のため、段丘堆積物と二次的堆積物との区別を困難にさせている。

小段丘は、東条川の下位段丘であるが、これは犀川沿いでは下位から二番目の縄文段丘（北村遺跡の分布する段丘）に対比される。沖積世に入ってから形成されたもので、その形成過程の違いは、差切峡谷の横谷部が侵食をさえぎっているためである。



遺跡全景(南から)

1. 縄文時代以降の氾濫原堆積物 2. 押し出し堆積物（土石流・扇状地性堆積物）
 3. 縄文段丘堆積物 4. 低位段丘堆積物 5. 中位段丘II堆積物
 6. 大峰面群の残存山嶺 7. 山地 ▲印 向六工遺跡

第13図 遺跡付近地形図

2 基本層序

本遺跡の基本層序を、南北方向は1・2・3トレンチ、東西方向は6・8トレンチの概念図で表示した(第14図)。基本的には背後からの崖錐性堆積物や、南側の小溪流が運んだ腐植物からなる二次堆積物である砂混じり壤土のI層：耕作土層、II層：遺物包含層、段丘堆積物の砂礫からなるIII層：地山(写真左)となり、次のように分層した。

I 層：にぶい黄褐色土。小礫を多量に含む。耕作されたII層。

II A層：灰黄褐色土。小礫を多量に含み、I層とII層の中間的な土質。

II B層：暗褐色土。小礫を多量に含み、硬くしまる。部分的に多量の中・大礫を含む。最も広く分布する標準的なII層。

II C層：黒褐色土。黒みが強く、挟雑物の少ない軟質の土で、堆積する部分は限定されている。

III A層：黄褐色砂。細粒砂と壤土が混じり、層厚は薄い。III B層の上部に部分的に堆積している。

III B層：黄褐色礫。小～大礫層で、遺跡の地山の大部分を占める。土壌化した暗色の部分もある。

本遺跡の立地する小段丘上の等高線は、ほぼ南南東から北北西の走行を示し、調査区内で最も高いIVA区が調査面の海拔標高約598m、最も低いII H区が約589mを測る。この中間に当たるII F M01からII V Q01あたりにかけて、小規模の段差が見られる。このため、この部分は多少地形の改変を被っている。

遺物包含層であるII層の層厚の厚い部分は等高線と平行して帯状に分布し、上段のII UからIVA区、中段のII P・Q・V区、下段のII G・L・R区に大きく分かれ、縄文時代遺物の分布範囲と強い相関性が見られる。この3帯の中間部分は耕作の影響を被ったためかII層の層厚が薄いか、I層から直接III層へ変わる部分もある。

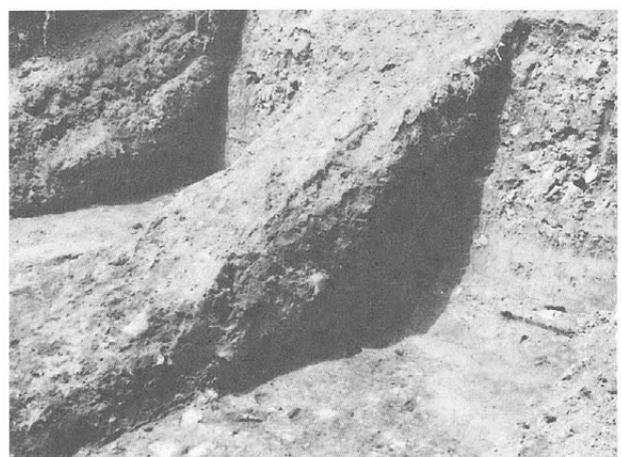
II層中の分層は、主に土壌化の程度や腐植物の多少を要因とする土色の差を指標としており、必ずしも年代差を示すものではないが、およそ次のような傾向は認められる。

II C層は背後の急傾斜の段丘崖直下に位置するIVA区西端(写真右)と、II U区とII L区に認められる東条川の旧流路のくぼ地状部分に分布し、縄文早期の遺物を含む層である。II B層は縄文時代遺物を含み、平安時代住居址の埋土の基調をなし、また中世遺構の検出面となる部分もある。II A層は中世以降の遺構に特徴的な埋土で、またこの時期の遺物包含層となる部分もある。

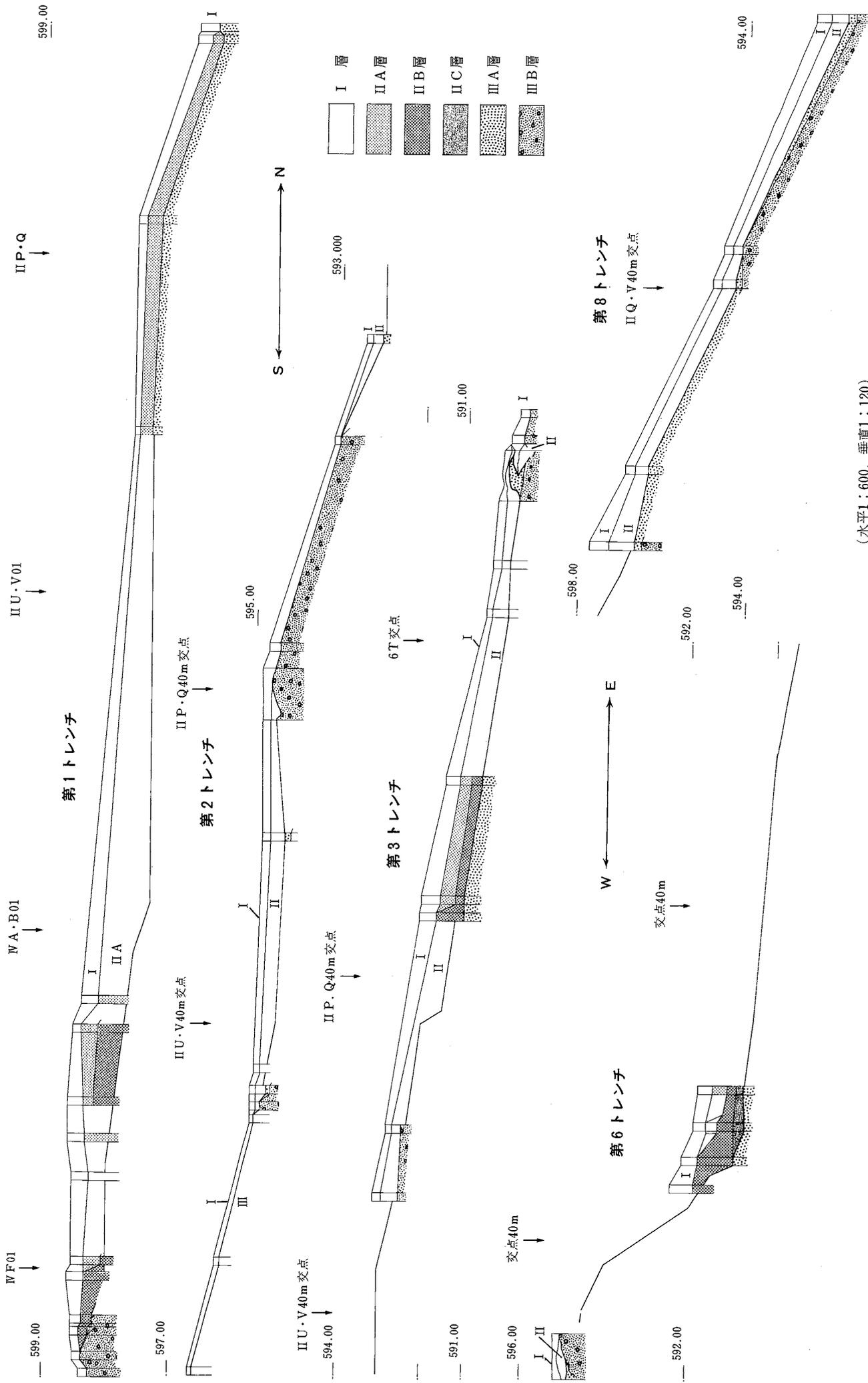
前項では本段丘が犀川沿岸の縄文段丘に比定される点が指摘されているが、本遺跡最古期の縄文早期押型文期には東条川の下刻は進行しておらず、南側の小溪流も段丘上を流れ、遺跡全体が水辺の集落といった観を呈していたと推定される。



遺跡の地山層



IVA区の崖錐堆積層



第14図 土層図

(水平1:600、垂直1:120)

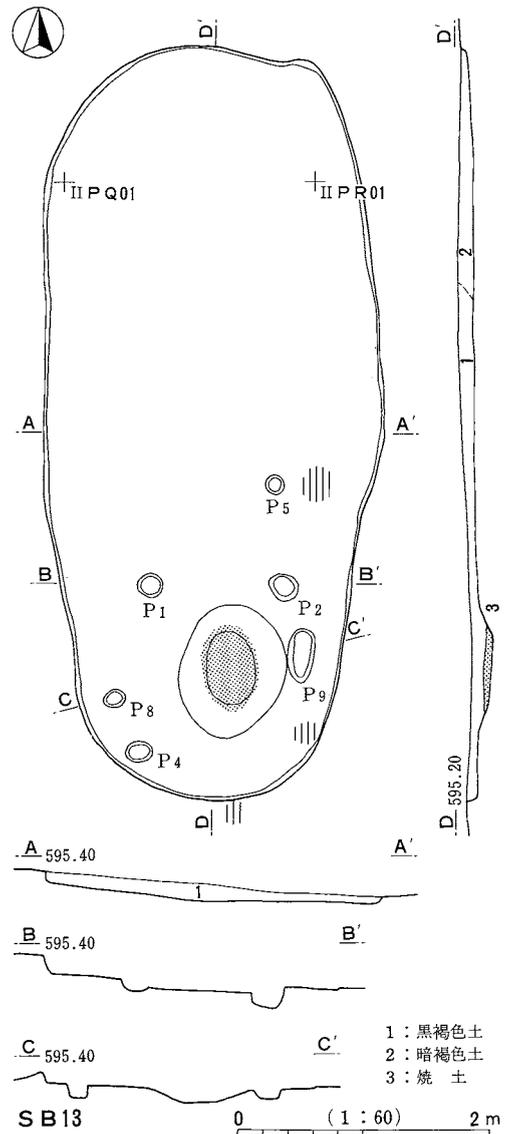
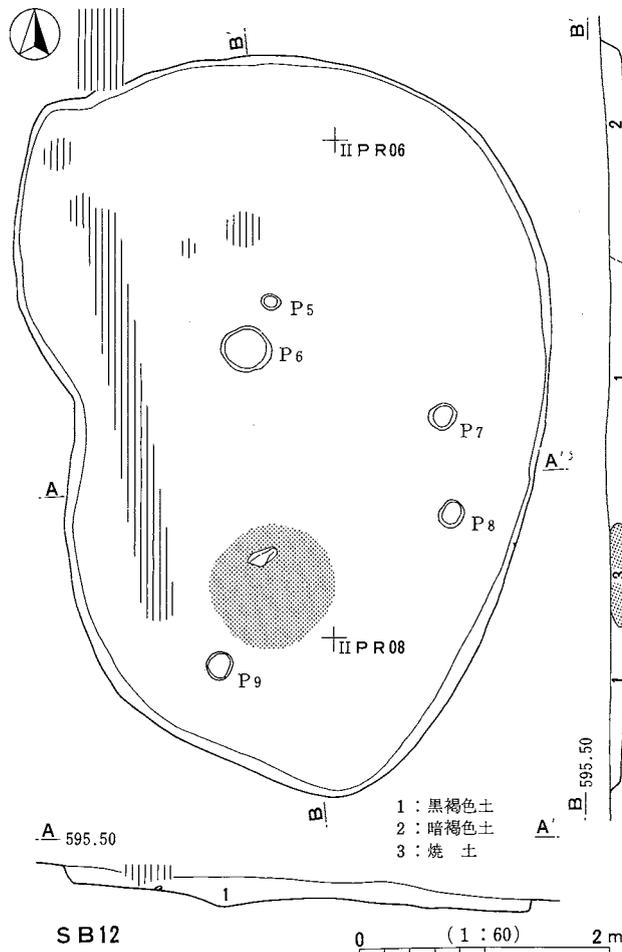
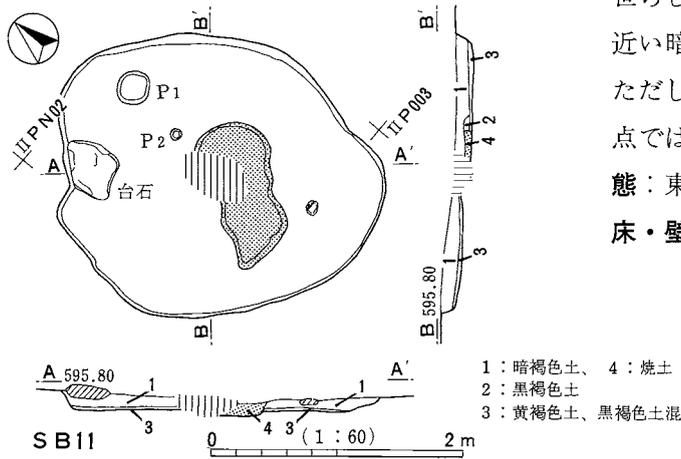
第3節 遺構

1 縄文時代の遺構

(1) 竪穴住居址

SB11 (第15図、PL4)

位置：II P14にある。検出：II B層下部で、焼土を伴う円形の暗褐色土の落ち込みを認めた。中央部に中世らしいピットが掘り込まれている。埋土：II B層に近い暗褐色土（1層）の単層であるが、層厚は薄い。ただし後述する台石が原位置を保つとすれば、検出時点ではほとんど埋土がなかったことになる。規模・形態：東西2.0m・南北2.5mの楕円形。面積は4.26㎡。床・壁：掘り込んだIII A層とII C層の混じる貼床（2・



第15図 SB11・12・13実測図

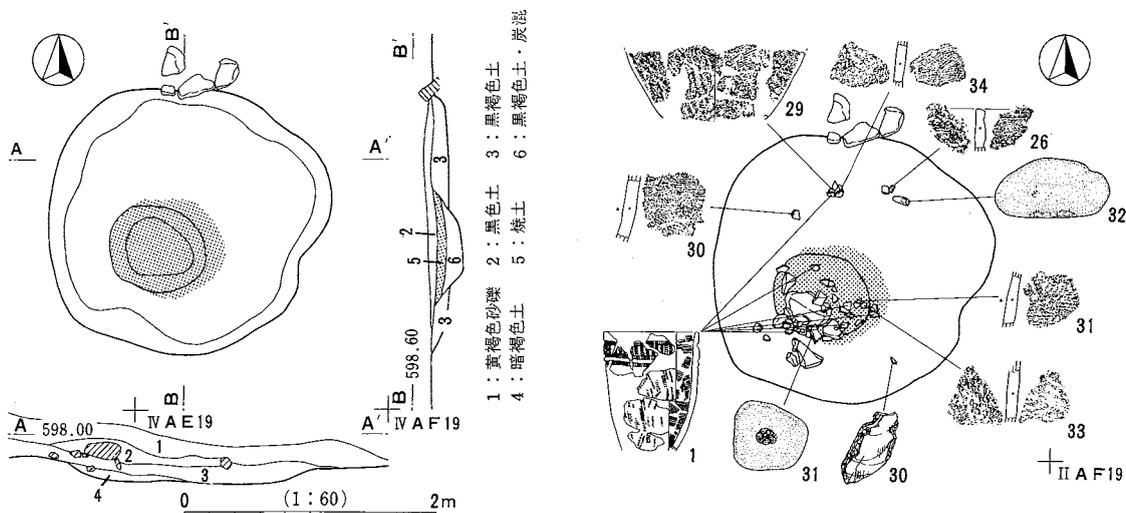
3層)をもつらしい。壁は外傾して立ち上がり、壁高は10cm程度である。**柱穴**：北壁にあるP₁は直径25cm・深さ10cm、やや中央寄りのP₂は直径・深さとも10cm程度で柱穴の可能性ある。**炉**：中央部に径100×70cm・層厚10cm弱の焼土がある。下部は床面よりわずかに低く、1層上面から認められた。**遺物分布**：1層上面に、北西壁に接して長径57cm・重量36kgの扁平な安山岩の台石がある。そのほか、ごく少量の土器片と多数の石器が1層全体から出土した。土器は、絡条体圧痕文を含む条痕文系土器の小破片12である。石器の内訳は、石鏃15、磨石1、台石1、石匙2、刃器13である。石鏃およびその失敗品、石匙を含めた石核・剥片・碎片等の石屑類は総重量567.19gを測り、黒曜石が89%、チャートが6.9%、頁岩が4.1%を占める。

SB12 (第15図、PL4)

位置：II P10にある。**検出**：II B層下部で一部に焼土を伴う楕円形の黒色土の落ち込みを認めた。プランが多少不明瞭のため、サブトレンチで確認した。暗渠の集石と内耳土器の出土から中世と思われるピットが掘り込まれている。**埋土**：南側はII C層に近い黒褐色土、北側はわずかに暗褐色に近い埋土であるが、層厚はともに15cm前後と薄く、漸移的な分層である。この土色の差と西壁線のゆがみから2軒の重複も疑われるが、床面に段差等が認められないため1軒とした。**規模・形態**：南北5.5m・東西3.5mの不整楕円形。面積は18.29m²。**床・壁**：床は掘り込んだIII A層である。壁高は低く、立ち上がりは不明瞭である。**柱穴**：1層を埋土とする南側部分に直径15~40cm・深さ10~20cmのピット5個が不規則に並ぶ。**炉**：長軸上の南に片寄って直径1mの焼土がある。掘り込みはなく、1層上面から認められた。**遺物分布**：P₅・P₆の北側から多数の黒曜石片が集中的に出土した。そのほかに少量の土器片・石器が1・2層全体から出土した。土器は、絡条体圧痕文を含む条痕文系土器の小破片10である。石器は、石鏃10、刃器5である。石鏃製品と石屑の総重量は123.11gを測り、黒曜石が84.3%、そのほかはチャートである。

SB13 (第15図、PL4)

位置：II K25・P05にある。**検出**：II B層下部で黒褐色土の楕円形の落ち込みを認めた。北・東壁のプランが不明瞭だったためサブトレンチで確認を試みたが、北側はやや不明瞭である。中世と思われるピットが掘り込まれている。**埋土**：南側はII C層に近い黒褐色土、北側はわずかに暗褐色に近い埋土であるが、ともに層厚は10cm前後と薄く、漸移的な分層である。この土色の差と南北にかなり長いプランのため、2軒重複も疑われるが、床面に段差等が見られないため1軒とした。**規模・形態**：南北5.94m・東西2.66mの長楕円形。面積は13.06m²。**床・壁**：床は掘り込んだIII A層である。壁高はきわめて低い。**柱穴**：1層



第16図 SB26実測図・遺物分布図

を埋土とする南側部分に直径15～30cm、深さ10cm前後のピット6個が炉址を囲むように並ぶ。炉：長軸線上の南に片寄って80×100cmの浅い掘り込みがあり、底面に焼土がある。遺物分布：ごく少量の土器片と石器が1・2層全体から出土した。土器は条痕文系土器の小破片7、石器は石鏃2、刃器1である。石鏃製品と石屑の総重量は37.7gを測り、黒曜石が42.2%、そのほかはチャートである。

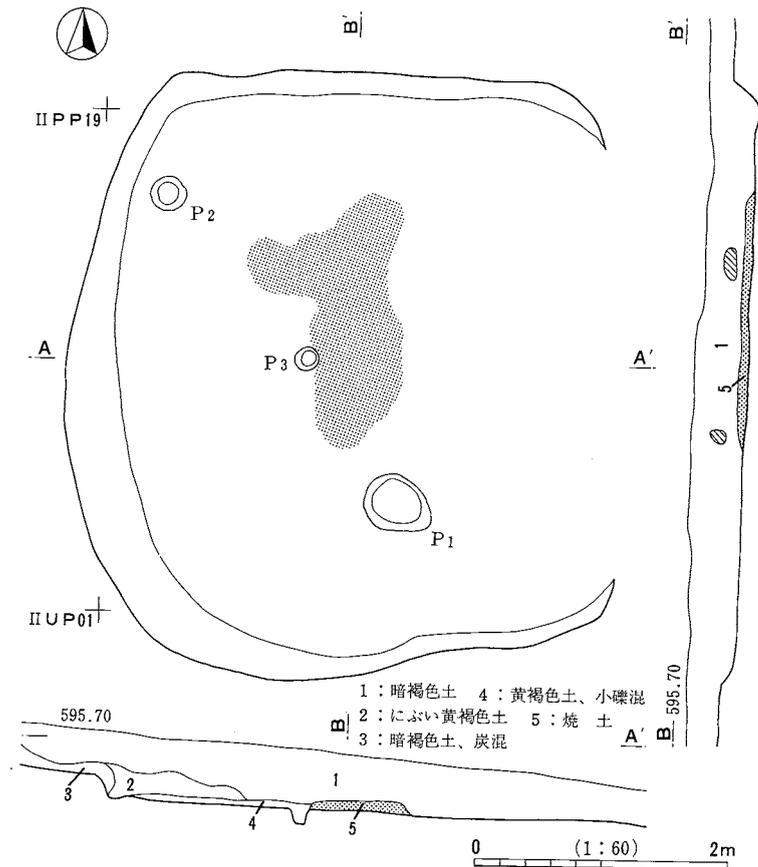
SB26 (第16図、PL4)

位置：IVA21・22にある。検出：崖錐性堆積物に厚く覆われたII層の下にあり、IIIA層上面で黒褐色土の円形の落ち込みが確認された。埋土：IIC層に近い黒褐色土を基調とし、5分層できた。規模・形態：長径2.2mの円形。面積は検出面の輪郭では3.63㎡、掘り込まれた床面では2.76㎡を測る。床・

壁：掘り込んだIIIA層が最初の床面と思われる。5層の焼土がより高い位置にあり、5層と同じ面にある3層、5層下の6層とも遺物を含むため、住居使用中に黒色土が流入したか、3・6層を貼床とし、廃棄時の床面は3層上面と思われる。壁は不明瞭である。炉：中央よりやや南に片寄ってIIIA層を直径75cm・深さ10cmの円形に掘りくぼめ、黒色土の6層を挟んで上部に層厚5cm前後の焼土がある。遺物分布：2・3・6層から出土した。炉の上部は礫と遺物が多く、絡条体圧痕文をもつ尖底土器1個体(1)の破片が12cm以内のレベル差の中に集中していた。これを含めた条痕文系土器は破片にして45点に上り、7点は縄文が施されている。石器の内訳は石鏃15、石匙3、刃器3。石鏃製品・石匙と石屑の総重量は230.6gを測り、黒曜石が79%、チャートが10.6%、頁岩が10.4%を占める。

SB29 (第17図、PL4)

位置：IIP24・25にある。検出：IIB層下部からグリッド掘り下げを行い、焼土と多量の黒曜石片を含む黒色土の落ち込みを確認した。プランは不明で、サブトレンチにより床面を確認した後、壁へ掘り進んだ。埋土：IIB層にIIIA層が混じった暗褐色土の1層を基調とし、西壁下にはいわゆる三角堆土の2・3層が見られる。規模・形態：東向きの斜面にあるため東壁は認められない。南北4.45m・東西4m以上の隅丸方形。面積は15.55㎡。床・壁：掘り込んだIIIA層を平坦な床面とする。山側の西壁は外傾して立ち上がり、壁高30cmを測る。柱穴：北西隅のP₂は直径30cm、中央のP₃は直径15cmで、ともに深さ15cm足らずであるが、柱穴の可能性はある。炉：中央部床面上の1×2mの範囲に薄い焼土(5層)がある。遺物分布：1層下半部から床面直上で多数の石器が出土した。石屑類は焼土の南側に多く、P₁には黒曜石破片が集中していた。土器は条痕文系土器の小破片10点と少ない。石器の内訳は石鏃42、磨石1、石匙4、刃器8、磨製石斧1である。石鏃製品・石匙と石屑は総重量715.5gを測り、黒曜石が77.6%、チャートが19.9%、頁岩が2.5%を占める。



第17図 SB29実測図

(2) IVA区縄文時代遺構群 (第18~20図、P L 5)

本遺跡の縄文時代遺構は、粗密の差はあれ調査区全体から遺物が出土しているのに反して、前述の住居址のほかにはこれと認定できるものは少数であった。IVA区は調査区南西端に位置し、西側半分は崖錐性堆積物に覆われて、縄文時代遺物包含層が後世の攪乱を被る部分は少ない。

IVA E07からIVAM07の土層断面図から本地区の層序を概観する(第19図)。現在の段丘崖裾部は、III A層を地山とし(6層)、この上面から5層下部で遺構が検出された。II C層相当の黒褐色土(4・5層)が遺物包含層であり、大礫を多量に含んでいる。このうち、層厚20cm前後で腐植物を多く含む4層が主たる遺物包含層をなし、6層と漸移的な5層は遺物が少ない。IVAG01からIVAG20あたりが現状の段丘崖裾部となるが、これ以西は崖錐性堆積物(2・3層)に厚く被覆され、調査区の西端部が遺物包含層のとだえる範囲である。

この地区からはSB26のほか、集石5、焼土址8の各遺構が検出された。土器は少量の押型文土器のほか、絡条体圧痕文を伴う条痕文系土器のみが多量に出土し、石器も豊富であった。このため、遺構の時期も縄文早期末葉に限定されると思われる。ただしSB26以外には各遺構に伴う遺物を特定することは困難である。

① 焼土址 (第18図)

IVA07にSF28・29・42、IVA12にSF43・44、IVA17西端にSF45・46・47がある。SF45・46・47は1カ所の焼土址とみなしてよく、これらは2~6m前後の間隔で段丘裾部に南北に散在している。いずれも掘り込みは認められず、焼土面は長径40~80cmの円形または楕円形を呈し、赤化部分の層厚は5cm以内である。全面に礫が多く、人為的な配置は認められない。焼土址の周囲はきわめて遺物量が多かった(第69図)。

② 集石 (第18・20図)

IVA13にSH09・13、IVA18にSH10、IVA23にSH14・15がある。SH09と13、SH14と15はそれぞれ近接し、SH10を中心に弧状に分布する観がある。6層上面で掘り込みを確認したが、4・5層中に礫が多かったため、SH13・14・15は大部分の礫を取り上げた状態で遺構と認められた。大形で浅い掘り込みの中に礫が集中する遺構であるが、SH13は掘り込みが不明瞭で、遺構と認めてよいか疑問が残る。集石の周囲には多数の穴が分布するが、規模・形態や配列に規則性が見いだせず、柱穴とする積極的な根拠は認めがたい。ここでは比較的良好に検出できたSH09・10を代表例とする。

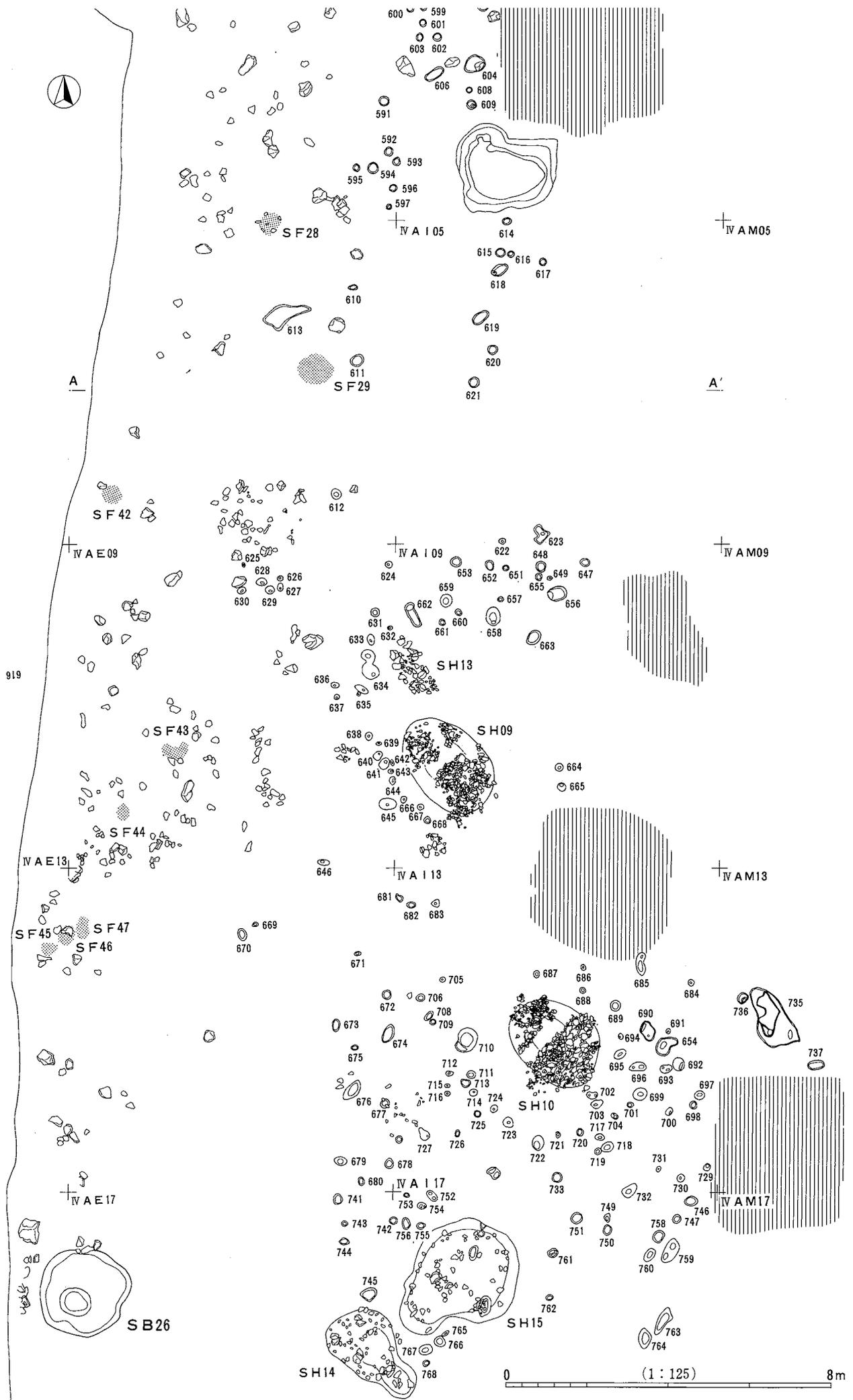
SH09は1.75×2.65mの楕円形を呈し、深さ約20cmの緩やかな掘り込みの中に、長径5~10cm前後を中心とした亜角礫が集中している。礫は火熱による赤化やひび割れは認められず、埋土の黒色土中にも炭化物は認められなかった。遺物は出土していない。

SH10は1.80×2.35mの楕円形を呈し、深さ約25cmの緩やかな掘り込みの中にSH09同様の礫が集中している。中央にはやや大形の礫が目立つ。やはり火熱の痕跡や炭化物は見いだせず、遺物も伴っていない。

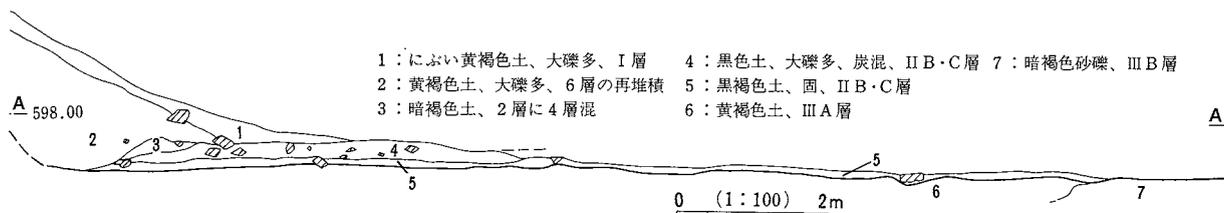
SH09と10は約5mの間隔をもち、ともに長軸は北西から南東を通る。

SH13は0.80×1.60mの範囲に、やや散漫に礫が集中している。SH14は1.55×2.65m・深さ12cm前後、SH15は2.70×3.35m・深さ10cm前後の不整楕円形の落ち込みをもち、これらの位置するグリッドからは土器片と黒曜石片少量が出土した。

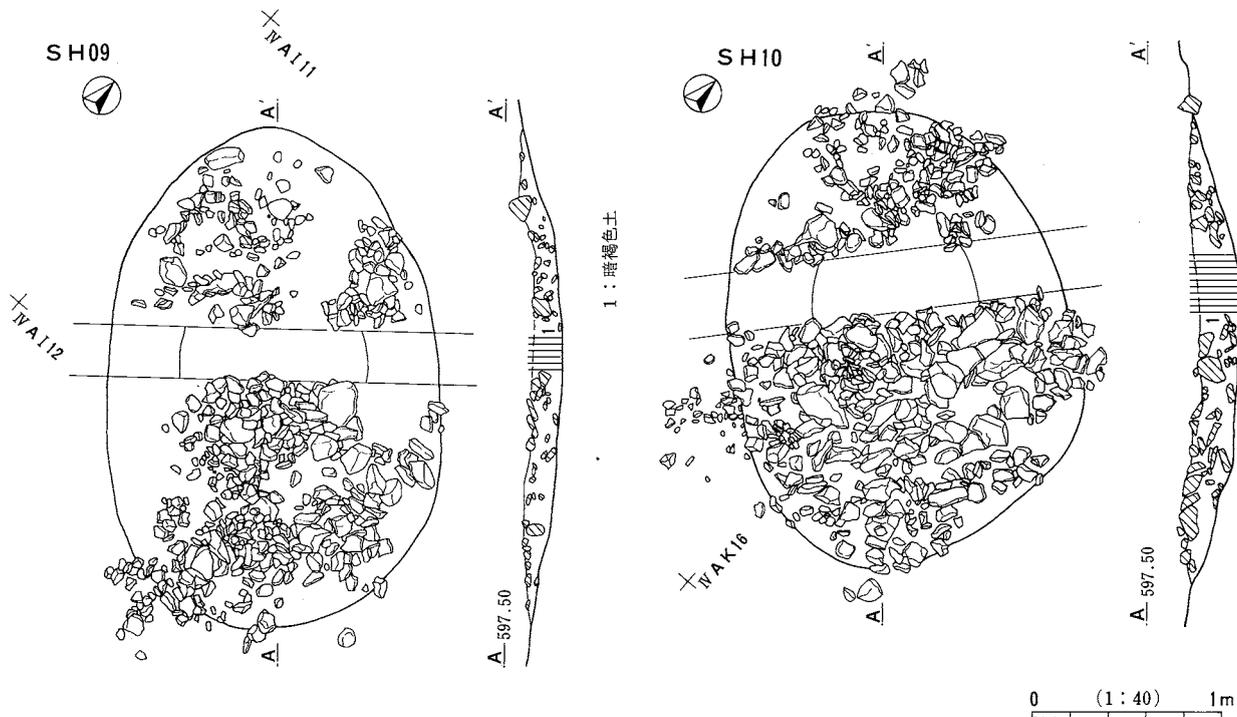
これらは直接遺物を伴わないため時期決定の根拠に乏しいものの、SB26や焼土址群と同じ検出面にあり位置も近いこと、平安時代にこの種の遺構が見られないことから、縄文早期と考えるのが妥当であろう。火熱の痕跡や炭化物を見いだせなかったが、しいて機能を推定するならば一種の集石炉の可能性があり、低火度で使用されたものであろうか。



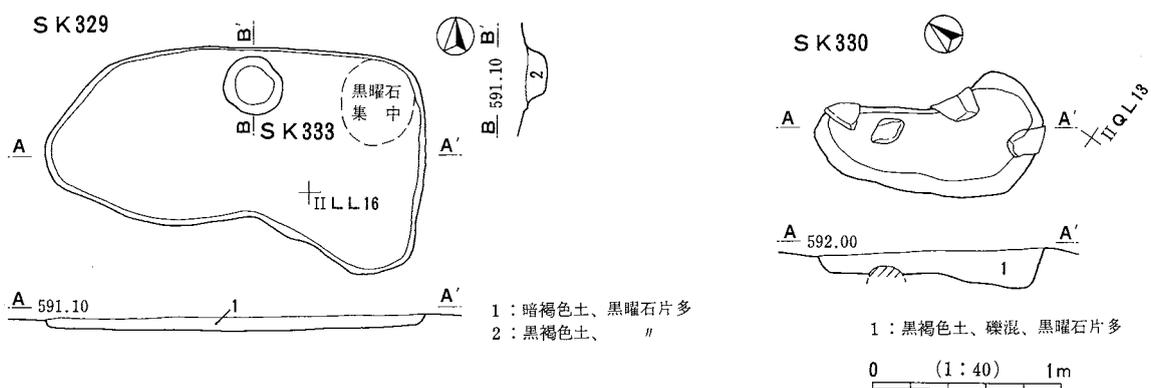
第18図 IV A区縄文時代遺構群実測図



第19図 IVA 7・8区土層図



第20図 SH09・10実測図



第21図 SK329・333・330実測図

(3) 土坑 (第21図)

埋土から縄文土器片や黒曜石破片などが出土した土坑は10数基数えられるが、縄文時代に帰属すると認められるものは少数に限られる。これらのうち、多数の剥片・破片を出土したSK329・330・333は確実に縄文時代の遺構と見られる。SK329・333はII L 18、SK330はII Q 03にあり、縄文遺物の分布範囲の中では下段に位置し、旧流路のくぼみに近い。

SK329・333は重複しており、II C層上面で検出された。埋土はややII B層に近い暗褐色土である。SK329は径90×203cm・深さ8cmの不整楕円形を呈する。遺物には黒曜石の石鏃2点、剥片・破片が75.8g

(3,851点)、チャートの碎片2g(96点)があり、特に北東隅から集中的に出土した。SK333は329の底面で検出され、直径30cm・深さ12cmの円形を呈す。遺物は黒曜石の碎片2.6g(116点)、チャートの石核・碎片23.6g(196点)、頁岩の碎片0.1g(4点)である。

SK330はII C層上面で検出され、土色では不明瞭ながら、礫の混入や硬度の差から識別した。径が50×120cm・深さ20cmの不整楕円形を呈す。内部には地山の礫が露出している。内部には絡条体圧痕文を伴う条痕文系土器4点、黒曜石の剥片・碎片78.9(220点)、チャートの碎片9.1g(39点)がある。

この3基の土坑の位置するグリッドからは、ごく少数の五領ケ台式や堀之内式が出土しているものの、

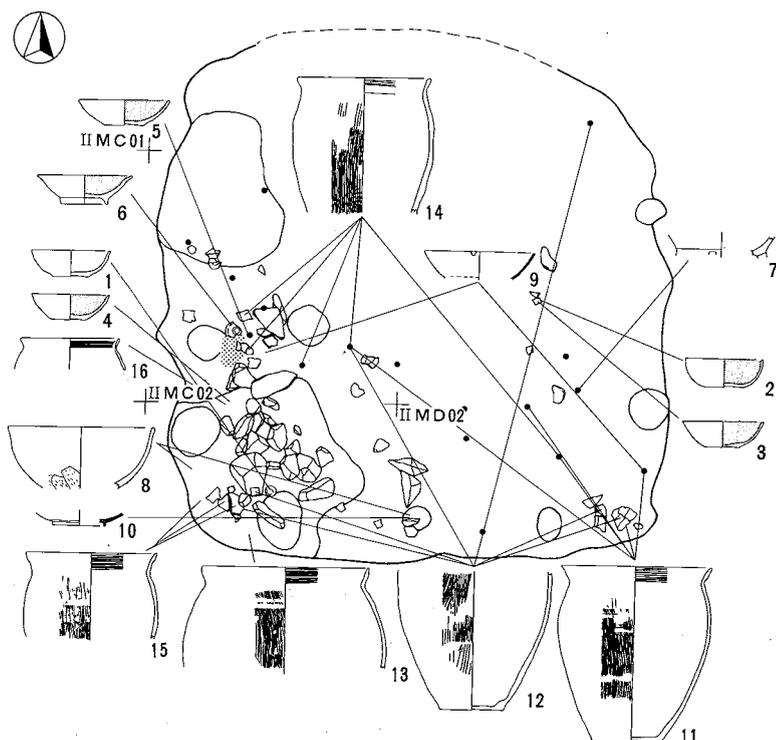
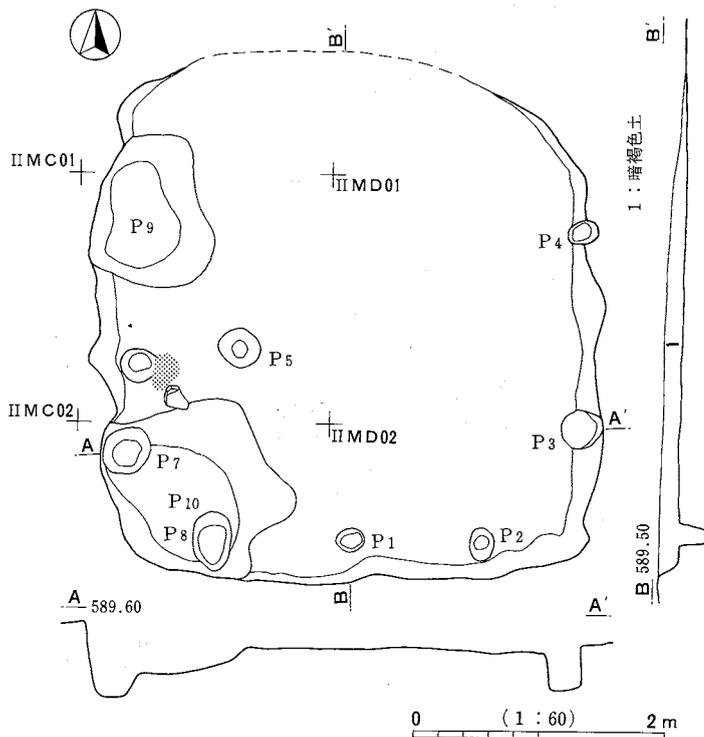
条痕文系土器がやや密に分布する地区であり、帰属時期は縄文早期末葉と考えられる。また、ほとんど製品を含まず、石屑が集中的に出土したことから、この地区は石鏃製作の場であった可能性が高い。

2 平安時代の遺構

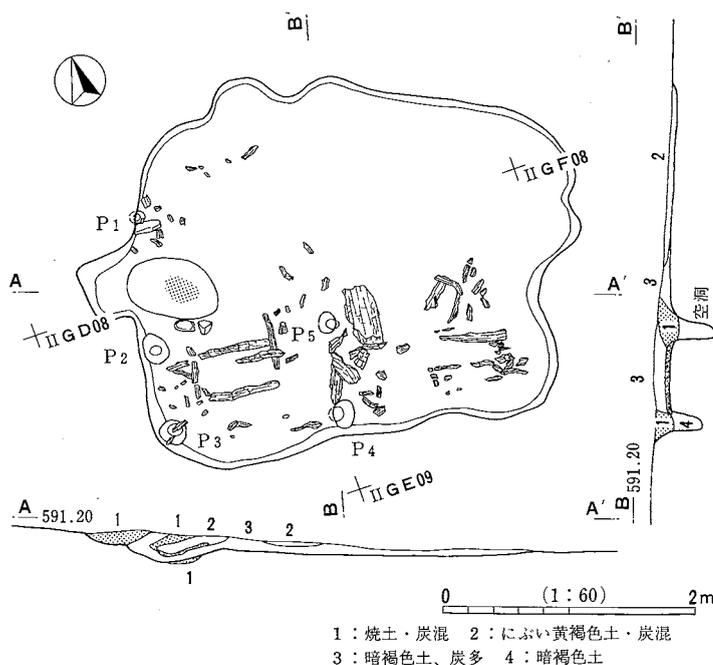
(1) 竪穴住居址

SB02(第22・134図、PL6)

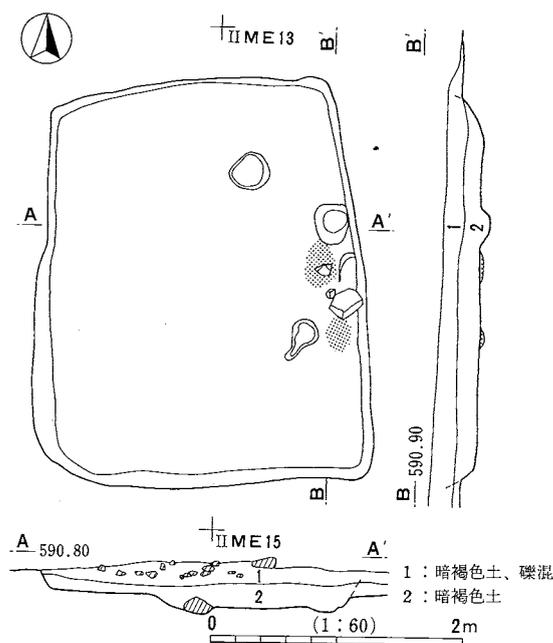
位置：II M01にある。**検出：**II B層下部で古代土器を伴う暗褐色土の落ち込みを確認した。**埋土：**暗褐色土(1層)の単層で、層厚は薄い。**規模・形態：**南壁は削平のため不明で、東西4.00m・南北4.22m以上の隅丸方形。床面積は13.55㎡。主軸はN90°W。**床・壁：**掘り込んだIII A層を床面としている。壁高は12cm前後と低く、やや外傾して立ち上がるらしい。**柱穴：**東壁上から掘り込まれたP₃・P₄、南壁下のP₁・P₂・P₈、西壁のP₇の6個が柱穴と考えられる。これらは直径15~30cm・深さ23~30cmを測る。P₇・P₈は灰溜めと思われるP₁₀の中にある。カマド前にあるP₅は浅い。**カマド：**西壁中央よりわずかに西に片寄った位置にある。支脚の抜き取り痕と火床が認められ、煙道下部はわずかに壁外へ張り出す。ほぼ原位置にある袖石は、左袖の1個だけである。諸施



第22図 SB02実測図・遺物分布図



第23図 SB03実測図



第24図 SB04実測図

設：カマドの右にあるP₉、左の南西隅にあるP₁₀は灰溜めと思われる。P₁₀にはカマド石と思われる多数の礫と遺物が投棄されたような状態で出土した。遺物分布：遺物は多量で南半分が多く、ほぼ床面直上と思われるが、土師器甕Bの11・12・13は分散して出土した。カマドからは黒色土器A杯A(5)・椀(6)、土師器甕B(14)が、灰溜めのP₁₀からは土師器杯A(1)・鉢A(8)・甕B(12・13・15・16)・黒色土器A杯A(4)、灰釉陶器椀(10)が出土した。

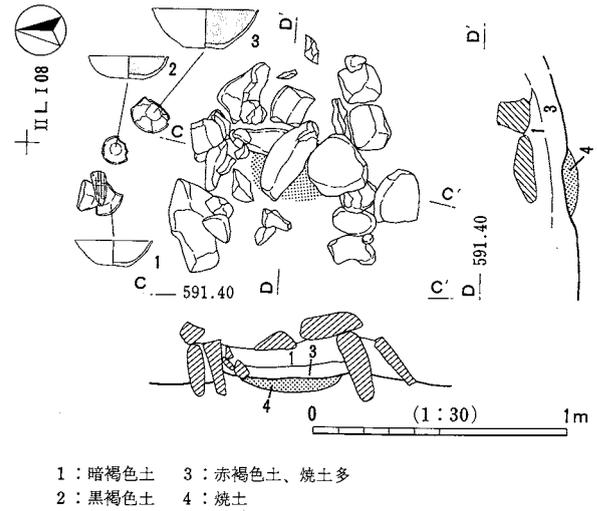
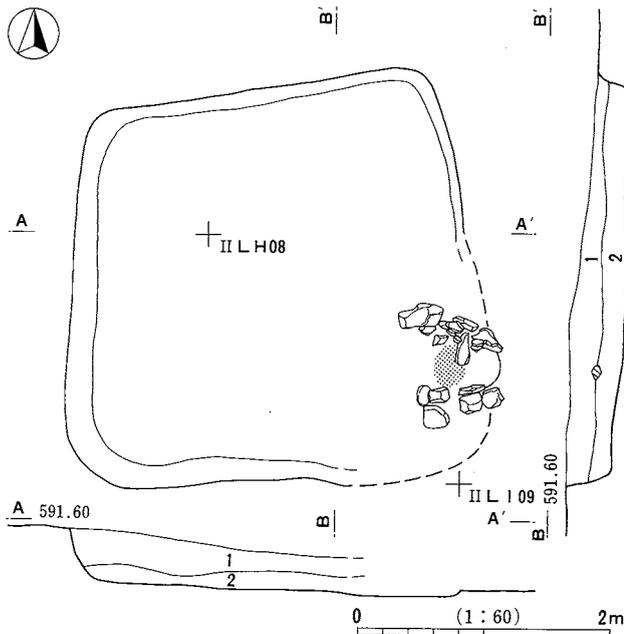
SB03 (第23図、PL6)

位置：II G 6・7にあり、南北方向の段差の下に当たる。検出：地表下約20cmで焼土と多量の炭化物の集中が観察されたが、ただちに古代の遺構とは思われず、II B層下部での遺構検出により方形の落ち込みを確認した。埋土：II B層を基調とし、南半部には炭化材と焼土が多量に分布する。後述のように、焼却後の人為的埋没と推定される。規模・形態：谷側の東壁が不明瞭で、東西3.58m以上・南北2.82mの不整長方形を呈す。主軸はN20°W。床面積は8.09m²。床・壁：掘り下げた地山を床面としている。南壁は5～10cmを測るが、他は不明である。柱穴：西・南壁に接するP₁～P₄と中央付近のP₅は直径15～25cm・深さ20～40cmを測る。P₁・P₃・P₅は大部分が空洞で、他も埋土はしまりがない。カマド：西壁中央に長径75cmのくぼみがあり、煙道下部が壁外へ突出している。遺物分布：P₂底面から土師器杯、埋土中から甕の小破片が各1点出土したのみである。土器等を搬出し、柱を抜き取った後に焼却した可能性がある。

SB04 (第24・134・135・140図、PL6)

位置：IIM16・17にある。検出：II B層中で土器が出土したが、面的な検出は不可能なためサブトレンチで床・壁を確認した。埋土：II B層を基調とし3分層できたが、自然埋没であろう。規模・形態：東西2.70m・南北3.25mの長方形を呈す。主軸はN90°E。床面積は6.85m²。床・壁：II B層中から掘り込んでIII A層を床面としている。壁高は20cm前後で、外傾して立ち上がる。カマド：東壁中央に焼土があり、カマドの痕跡と推定される。遺物分布：遺物は少量で、黒色土器A杯A(第134図1～3)・皿B(4)などがあり、散在していた。なお、須恵器甕A(第135図5)の大部分は表土剥ぎの際に本址南側から出土し、本址の破片が接合した。このほかに鉄製品(第140図10)がある。

SB05 (第25・135図、PL6)

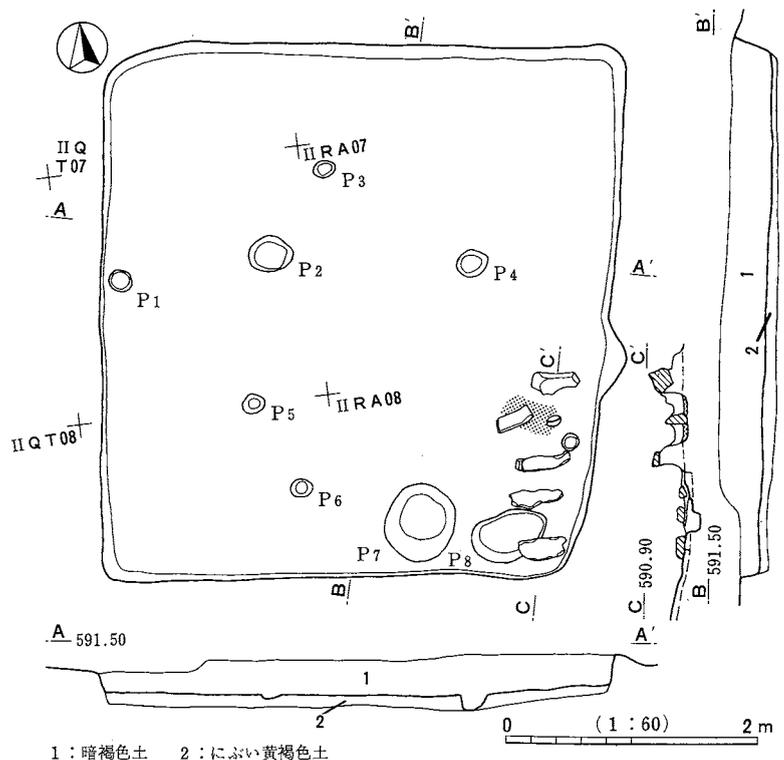


第25図 SB05・カマド実測図

位置：II L07にある。**検出：**グリッド掘り下げの際II B層中で土器とカマドらしい石組みが露呈し、住居址を想定した。黒色土の堆積が厚い部分のためサブトレンチで床を確認し、II C層上面でプランを確認した。埋土上部には中世の柱穴が掘り込まれている。**埋土：**II B層に近い1層とII C層に近い2層に分層したが、水平堆積のため自然埋没らしい。**規模・形態：**東西3.07m・南北3.22mの隅丸方形を呈す。主軸はN85°E。面積は8.04㎡。**床・壁：**掘り込んだII C層下部を床面としている。西・南壁は壁高約40cmを測り、わずかに外傾する。**カマド：**東壁の南隅寄りにあり、燃焼部が壁外へ突出するらしい。左袖の袖石は下部を埋め込まれ、大小7・8個ずつがほぼ原位置を保つと思われ、天井石も一部残る。火床は床面と同レベルで、煙道に向かって緩く立ち上がる。**遺物分布：**埋土全体に散在し、黒色土器A杯A(第135図2)・鉢A(3)、軟質須恵器杯A(1)、灰釉陶器皿(4・5)、土師器甕D(6)がある。カマド左わきの1・2・3はほぼ原位置と思われる。

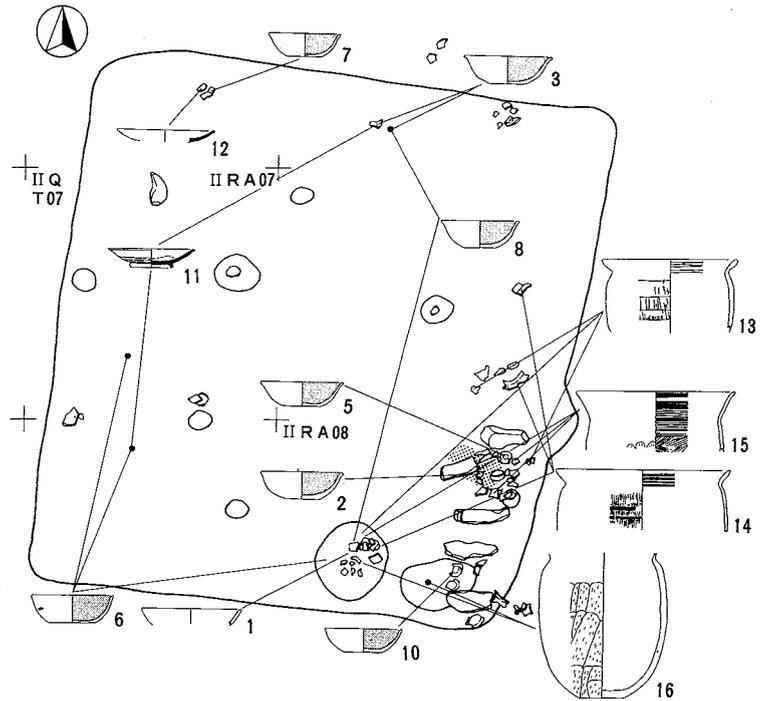
SB06 (第26・135図、PL6)

位置：II R06にある。**検出：**II A層下部でカマドらしい石組みを検出した。平面観察ではプランが不明瞭のため、サブトレンチで床面と壁を確認した。**埋土：**II B層を基調とする単層である。**規模・形態：**東西4.10m・南北4.25mの方形を呈す。主軸はN98°E。面積は15.72㎡。**床・壁：**掘り込んだIII A層とIII B層の混じった2層を、厚さ10cm程度の貼床としている。壁高は30cm前後でやや外傾している。**柱穴：**P₁～P₆が柱穴と考えられる。P₁が西壁下で、他は中央寄りに位置



第26図 SB06実測図

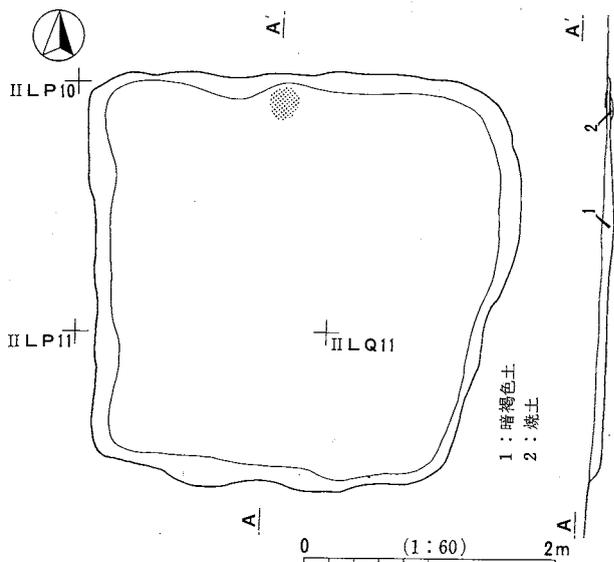
し、不規則である。直径18~33cm、深さはP₂・P₃が14cm前後、他は7cmと浅い。**カマド**：東壁中央よりやや南に片寄った位置に火床があり、支脚石が原位置を保つ。両袖の石は浮いた状態にあるが、原位置をとどめないのか、土を主体に構築されているのか明らかではない。右わきにあるP₈の中にも火熱を受けた同大の礫が並んでいるが、カマド石が投棄されたものであろう。**諸施設**：南東隅にあるP₈は長径60cm・深さ10cmの楕円形で、灰溜めであろう。その西にあるP₆は直径65cm・深さ10cmの円形で、数個体分の土器片が出土したことから同様の施設と思われる。**遺物分布**：遺物量は多い。カマド内からは黒色土器A杯A(2・5)、土師器甕C(15)、P₈・P₉内からは黒色土器A杯A(10)、土師器杯A(1)・甕(16)が出土した。このほか土師器甕B(13・14)はカマド周辺にあり、黒色土器A杯A(3・6・8)、灰釉陶器皿(11・12)は散在していた。



第27図 SB06遺物分布図

SB07 (第28図・136図、PL6)

位置：II L14・15にある。**検出**：暗褐色土のIII B層上面で焼土とともに土器が多少まとまって出土したため住居址を想定し、III A層が地山となる明瞭な西壁線からプランを確認した。**埋土**：II B層に近い土質の単層である。**規模・形態**：東西3.42m・南北3.22mの方形を呈し、東壁線がゆがんでいる。主軸はN0°。面積は8.40m²。**床・壁**：III A層上面あたりが床面となる。著しく削平され深さは10cm足らずで、壁の状態は不明である。

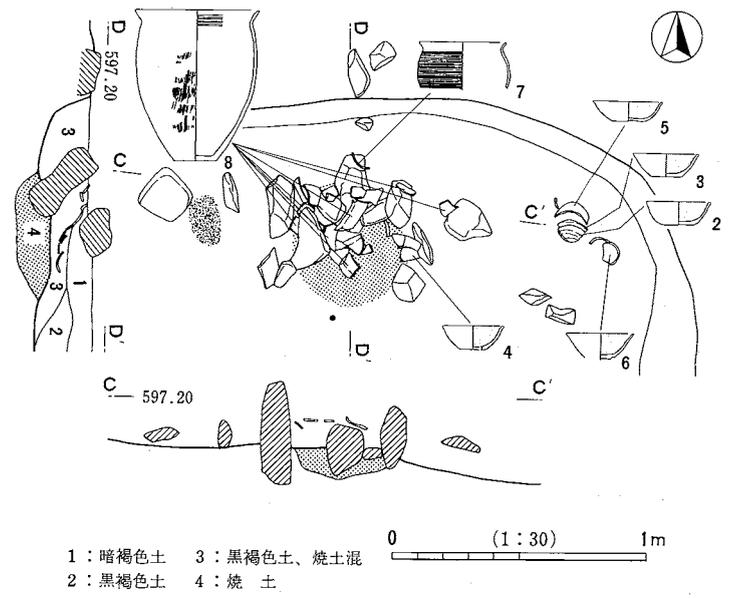
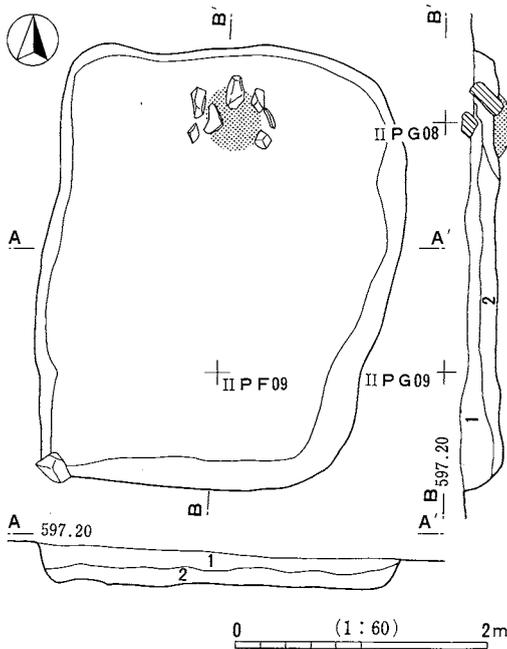


第28図 SB07実測図

カマド：北壁中央にあり、火床のみ残存する。**遺物分布**：少量の出土で、すべて床面直上である。カマドと北西隅からは土師器甕が出土し、ここからやや中央に寄って黒色土器A杯A(第136図1)・椀(2)、灰釉陶器小椀(4)、土師器甕(5)が集中していた。

SB08 (第29・136・140図、PL7)

位置：II P07にある。**検出**：II B層中でカマドらしい礫と炭化物を含む落ち込みを検出したがプランは不明で、サブトレンチで床面と東西壁を確認した。しかし南北壁が確認できず重複も考慮されたが、炭化物の多い床面を掘り広げてプランを把握した。**埋土**：II A層に近い暗褐色土の1層と、II C層に近く、多量の炭化物を含んで床面直上に堆積する2層に分層できた。焼却後の埋没と思われるが、人為が加わっているかどうか明らかではない。**規模・形態**：東西2.84m・南北3.50mの隅丸長方形を呈し、東壁線はややゆ



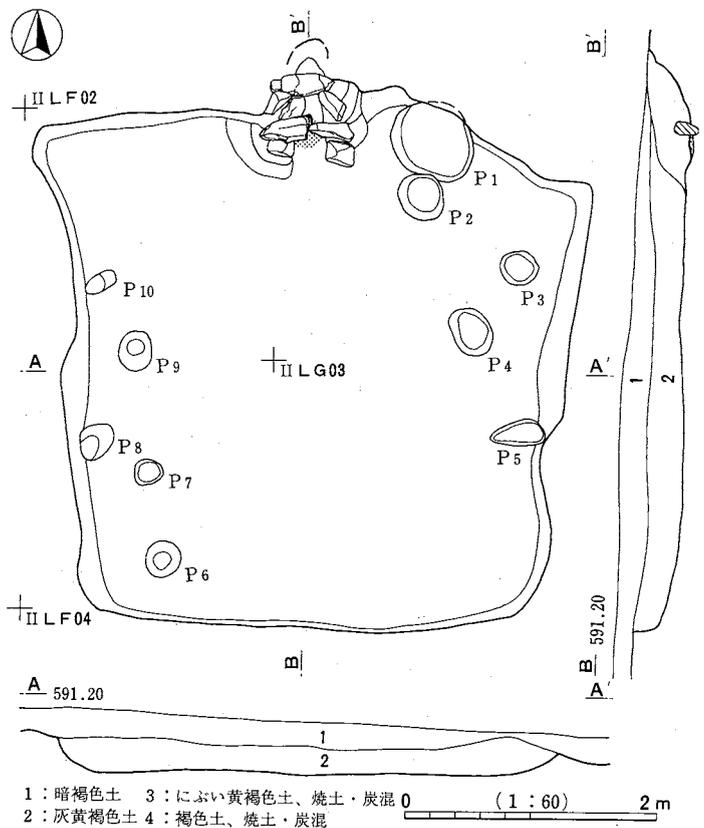
1: 暗褐色土 3: 黒褐色土、焼土混
2: 黒褐色土 4: 焼土

第29図 SB08・カマド実測図

がんでいる。主軸はN2°E。床面積7.41㎡。床・壁：掘り込んだII B層下部を床面としている。壁はわずかに外傾し、壁高30cm前後である。カマド：南壁中央にある。袖石は、左右とも下部を埋め込んだ2・3個が原位置を保ち、カマドの両わきへ2・3個が転落している。支脚石はやや傾きながら原位置にある。遺物分布：比較的遺物量は多く、カマドと北東隅に集中していた。カマド石組みからは、火床からわずかに浮いて土師器甕B(8)・小型甕D(7)、黒色土器A杯A(4)が出土した。そのほかに土師器杯A(第136図1)、須恵器長頸壺A(同9)がカマド周辺から出土した。北東隅からは黒色土器A杯A(2・3・5)がほぼ完形で3枚重なり横転した状態で遺存し、これに接して黒色土器碗(6)が出土した。この出土状態は食器の保管場所を示唆しているようである。ほかに砥石と刀子(第140図1・7)がある。

SB09 (第30・31・136図、PL7)

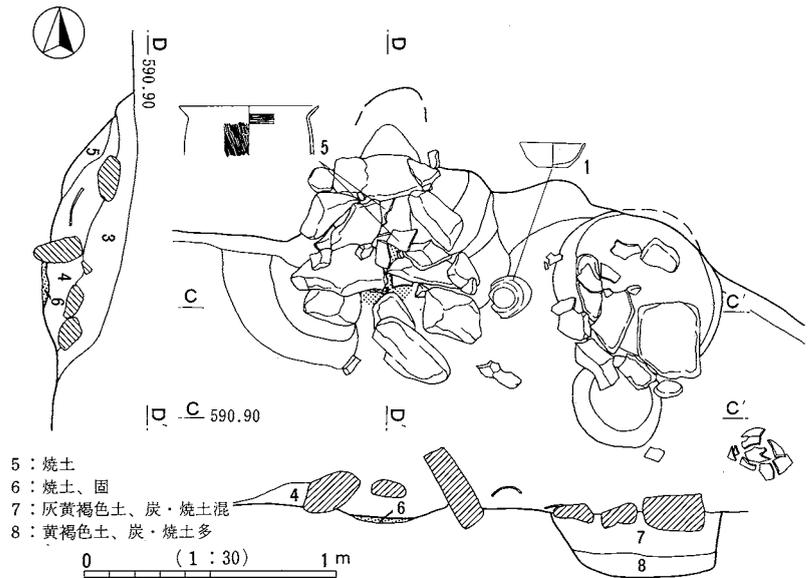
位置：II L02にある。**検出**：II B層上部で中世遺構を調査後、厚い黒色土を2mグリッド単位で掘り下げたところ、II C層下部で完形の土師器杯を検出し、古代住居址を想定した。II B層中の検出は困難なため、グリッド壁を带状に残してII C層上面でプランを確認した。断面観察ではII B層下部から掘り込みがわかる。**埋土**：II B層に近い1層と、II C層と同じ土質で黒色の淡い2層に分層できた。人為的な埋没とする根拠はない。**規模・形態**：東西4.00m・南北4.67mのやや不整な方形を呈し、北東隅と東壁線がゆがんでい。主軸はN3°W。面積は13.86㎡。床・壁：掘り込んだ



1: 暗褐色土 3: にぶい黄褐色土、焼土・炭混
2: 灰黄褐色土 4: 褐色土、焼土・炭混

第30図 SB09実測図

IIIA層上面を床としている。壁高は30cm前後で南・北壁は垂直に近く、東・西壁はやや外傾している。**柱穴**：東壁側のP₂～P₅、西壁側のP₆～P₁₀の9個が柱穴と思われる。直径25～30cmで、深さはP₈・P₁₀が20cmのほか、10cm前後と浅い。**カマド**：南壁中央にあり、燃焼部がわずかに壁外へ突出する。両袖石は砂岩を主体とし、左右各3個が崩れて内傾するものの、ほぼ原位置を保っている。煙道部の天井石も1個残存している。火床の奥に支脚石が立

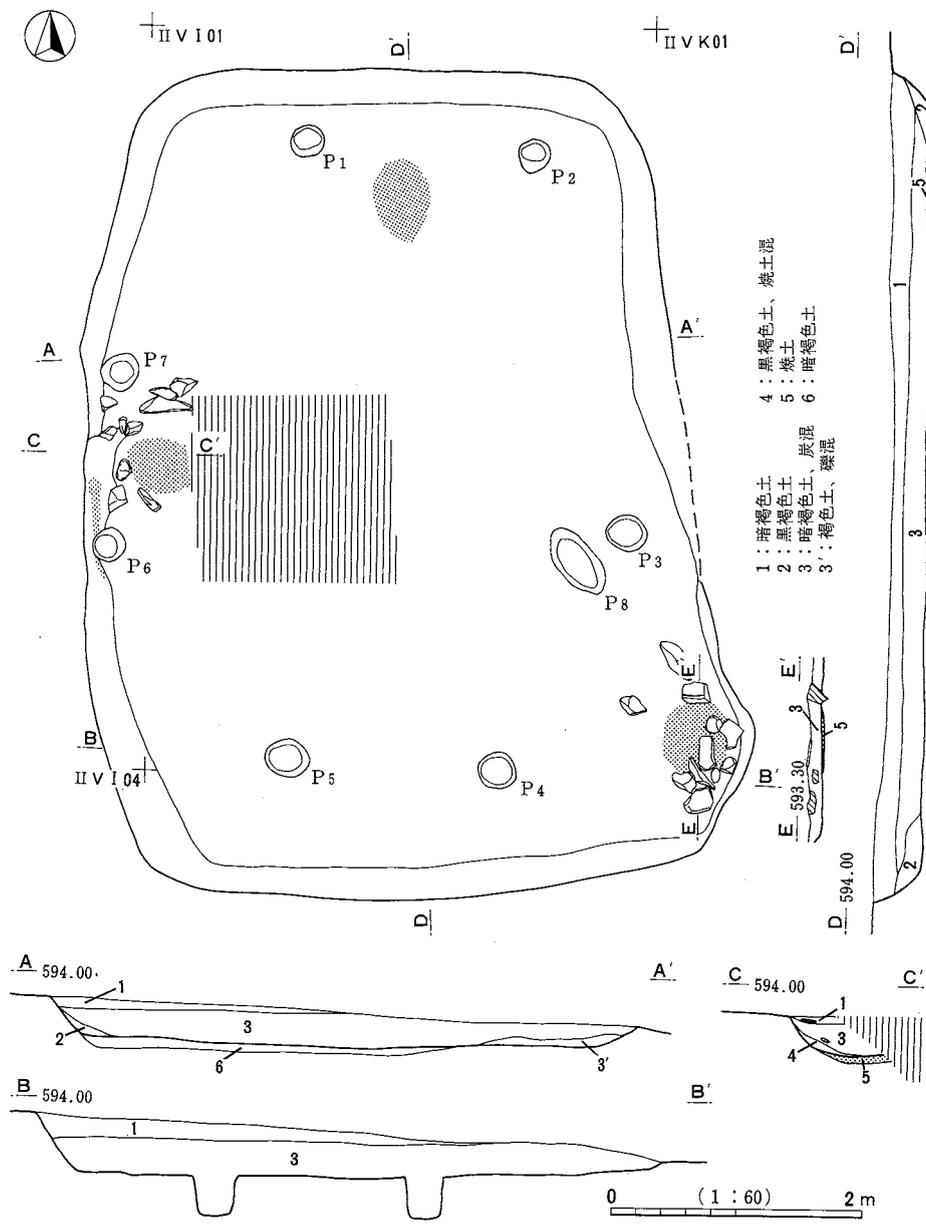


第31図 SB09カマド実測図

ち、燃焼部から煙道部へは約40度の傾斜で立ち上がる。**諸施設**：カマドの右わきにあるP₁は、直径が約70cm・深さ26cmの円形で灰溜めであろう。下部には焼土と炭が多く混じり、上部からはカマド石と土器が投棄されたような状態で出土した。**遺物分布**：遺物量は少なく、カマドとP₁に集中していた。カマド内からは土師器甕B(第136図5)・小型甕D(4)、須恵器甕の破片、右袖に接して黒色土器A杯A(1)が出土した。P₁の上部には5の破片が散在し、北東隅には黒色土器A杯A(2・3)があった。

SB14(第32・136・137・140、PL7・8)

位置：II V03にある。**検出**：重機によるトレンチでカマドの火床らしい部分が確認され、住居址を想定した。II B層上面では平面的なプラン確認は困難なため、東西・南北にサブトレンチをあけたところ、新たに2カ所の焼土が確認され、掘り込みの規模も大きなことから3軒程度の住居址の重複が予想された。しかし断面観察でも埋土に差異がなく、床面も段差のない平坦面であること、壁線にも食い違いがないことから1軒の住居址と考えるに至った。さらに2カ所のカマドから同一個体の土器片が出土したこともこれを裏付ける。ただし重機によるトレンチが床面を削平した部分があり、重複をまったく否定することはできない。**埋土**：基本的にはII B層に近い1層と、これに炭化物がやや多く混じった3層に2分層され、挟雑物と土色の差から、部分的にさらに2分層された。**規模・形態**：東西5.04m・南北6.60mの隅丸長方形を呈し、本遺跡中最大規模の住居址である。西壁カマドを主体とすれば主軸はN90°W。面積は24.76㎡。**床・壁**：掘り込んだII B層下部を床面とし、西壁カマド北側は部分的に暗褐色土を約10cm貼っている。谷側の東壁はやや不明瞭であるが、他は外傾して立ち上がり、西壁高は約45cmを測る。**柱穴**：ピット8個が床面および床下から検出され、北壁側のP₁・P₂、東壁側のP₃、南壁側のP₄・P₅、西壁に接してカマドの両側にあるP₆・P₇の7個が柱穴と思われ、整然とした対応関係にある。直径30cm前後、深さはP₆が46cmを測るほか、35cm前後である。P₄・P₆・P₇の埋土の中心部は空洞であった。**カマド**：3カ所の焼土のうち、石組みを残す2カ所がカマドと考えられる。その1は東壁の南隅にあり、わずかに壁外へ突出する。火床は比較的良く残るが、火熱を受けた礫が周囲にある。その2は西壁中央にある。火床は良く残り、焼土は層厚6cmを測る。芯材らしい礫が周囲にあり、壁際にわずかに煙道が確認できた。カマド左側の壁は赤く焼けている。ほかに北壁のP₁・P₂の間に長径60cmの楕円形、層厚8cmの焼土があるが、礫は伴わない。**遺物分布**：遺物は多量で土器の種類・器種も多いが、特定の位置に集中しない。東壁のカマド1の周囲からは黒色土器A杯A(5)、軟質須恵器杯A(2)、土師器甕B(16)・D(18)、また西壁の

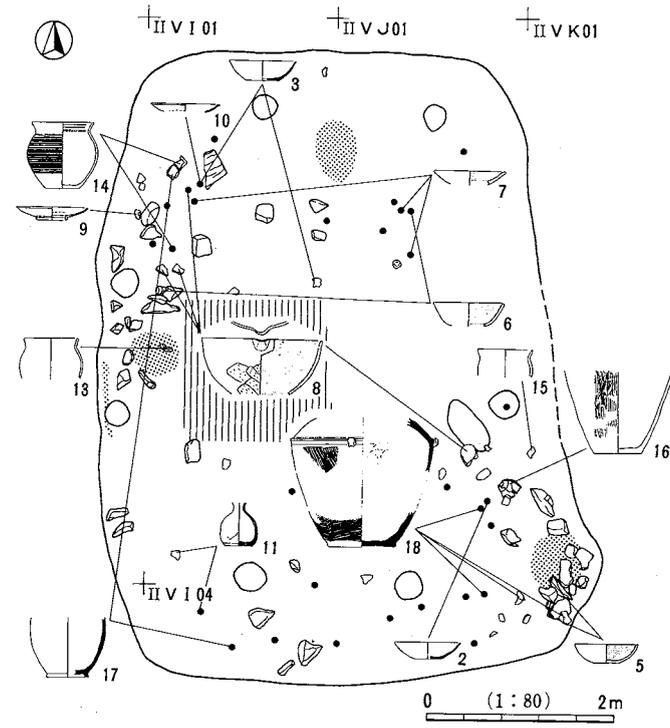


カマド2の北側からは軟質須恵器杯A (3)、須恵器長頸壺A (17)、土師器小型甕A (13)・D (14)、黒色土器A杯A (8)、灰釉陶器皿 (9・10) が出土した。このほかに鉄鏝 (第140図8) がある。

S B 1 6 (第33・137 図、P L 8)

位置：II V 05にある。

検出：西側が盛り土した宅地にかかっているほか、地表下30cm足らずの深さにあり、表土剥ぎにより北東4分の1ほどを削平してしまった。この際にカマドの火床を検出したため、面的にプラン確認を行った。II層上部で埋土との土色の差は明瞭であった。平成2年度に西壁を検出し、南西隅を中世火葬施設S K1048が切ることと、西側に隣接してS B28の東壁カマドが位置することから、直接重複はしないものの、本址と同時存在はし得ないことを確認した。**埋土：**II B層に近い暗褐色土を基調とし、焼土と炭化物を多量に含む部分を分層した。焼却して人為的に埋めた可能性がある。**規模・形態：**東西4.40m・南北4.44mの方形を呈し、東壁線がゆがんでいる。主軸はN 4° E。面積は16.72㎡。**床・壁：**掘り込んだIII A層を床面としている。壁高は20~30cmで、垂直に立ち上がる。西壁下には幅10cm・深さ6cmの周溝が沿っている。**柱穴：**壁上から掘り込まれた南壁のP₅~P₇、西壁のP₄は確実に柱穴であろう。直径20~30cm



第32図 S B14実測図・遺物分布図

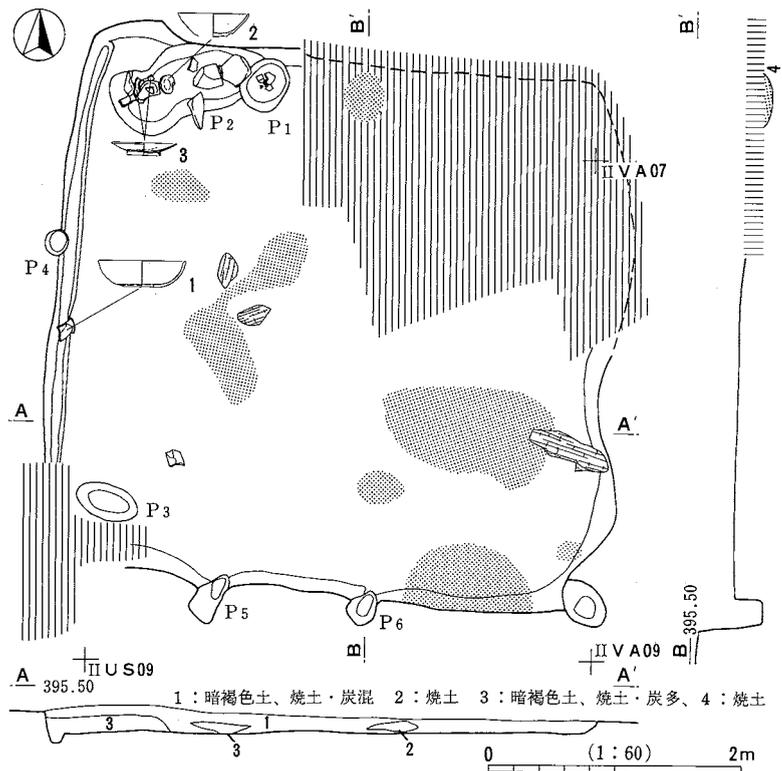
ながらP₄は床面下50cmに達し、他も深さ20cmを測る。**カマド**：北壁にあり、火床のみ残存した。**諸施設**：北西隅に2個接続するP₁は直径約40cm・深さ10cmの円形、P₂は長径124cm・深さ20cmの楕円形で、ともに土器を出土したことから灰溜めと思われる。**遺物分布**：P₁からは土師器甕の破片が出土した。P₂からは礫数個と黒色土器A椀(第137図2)と灰釉陶器皿(3)、周溝上からは黒色土器A杯A(1)がそれぞれ出土した。このほかにはほとんど遺物がなかった。

S B 1 7 (第34・35・137図、P L 8)

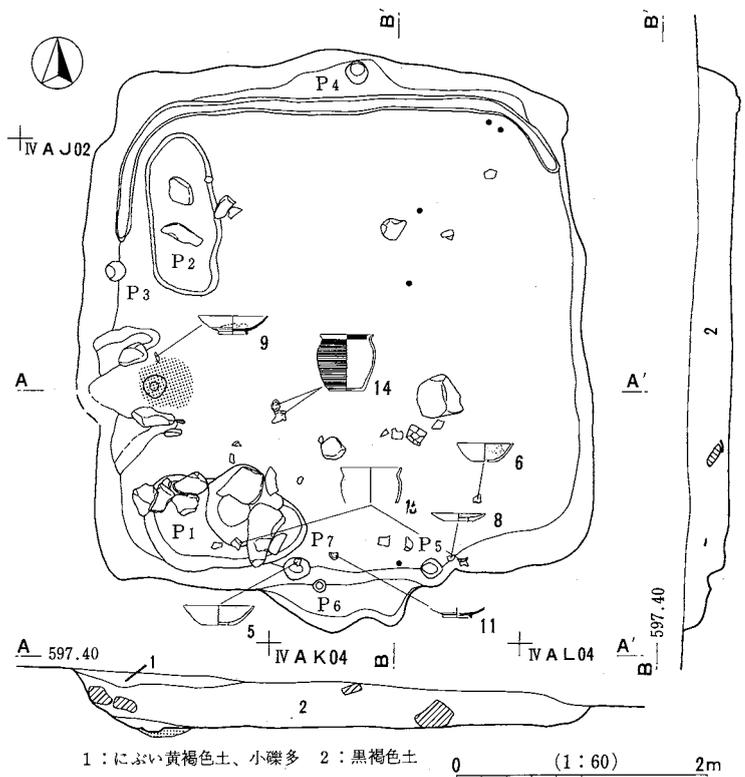
位置：IVA03にある。**検出**：昭和63年度の試掘坑が本址床面に当たったことから所在がわかってきた。大礫を多量

に含むII B層中から掘り込まれているため、面的なプラン確認は不可能であった。東壁は地山がIII B層となり壁線が確認できたので、東西・南北方向のサブレンチで床と他の壁を確認した。**埋土**：基本的にはII C層に近い2層の単層である。**規模・形態**：東西4.10m・南北4.45mの方形を呈する。主軸はN90°W。

面積は12.56㎡。**床・壁**：掘り込んだIII A層、東壁際のみIII B層を床面としている。西壁の北端から北壁に沿い、東壁の北端まで、幅10cm・深さ3cm前後の周溝がめぐっている。壁高は30cm前後で、外傾して立ち上がる。**柱穴**：北・西壁のほぼ中央にあるP₃・P₄、南壁に並ぶP₅～P₇の5個が柱穴と思われる。P₃・P₄は斜めにうがたれている。いずれも壁上から掘り込まれ、直径10～20cmと小さいが、P₆以外は床面下15～30cmに達している。P₅・P₇の間は壁の傾斜が緩やかで、外側へやや張り出している。**カマド**：西壁中央からわずかに南に寄った位置にある。左右の袖石各1個が下部を埋め込まれて原位置にあり、これにかけた天井石の砂岩数個が残存していた。袖石の基部にはIII A層を基調とする袖土

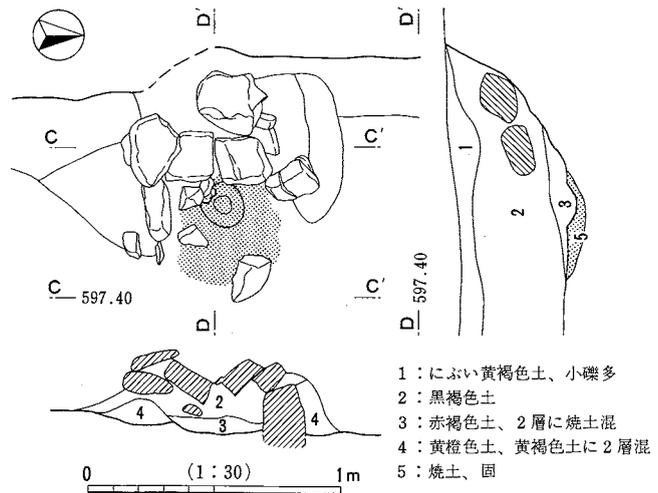


第33図 S B 16実測図



第34図 S B 17実測図

(4層)が見られた。火床は床面と同レベルで、支脚の痕跡がある。燃焼部から約30度の傾斜で煙道部へ立ち上がっている。**諸施設**：カマド左側の南西隅にあるP₁と、右側の西壁下にあるP₂は灰溜めと思われる。P₁は80×54cm・深さ23cmの楕円形を呈し、埋土中には炭化物・焼土が多量に混じり、上部にはカマド石らしい大礫約10個が投棄されている。P₂は130×80cm・深さ9cmの楕円形を呈し、やはり埋土中に炭化物・焼土が混じり、上部に礫数個がある。**遺物分布**：遺物量は多いが比較的散在し、南半部に多い。カマドからは



第35図 SB17カマド実測図

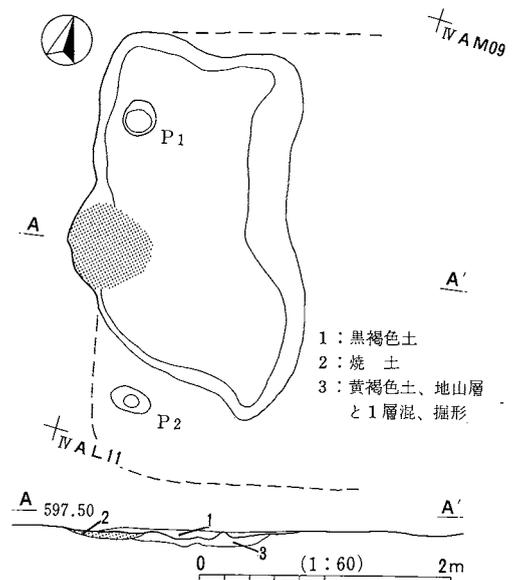
黒色土器A杯A (第137図1・3・4)、灰釉陶器皿(17)が出土した。南壁に沿って土師器小型甕A(15)、黒色土器A杯A(5・6)・皿(8)、灰釉陶器皿(11)などが出土した。

SB18 (第36図)

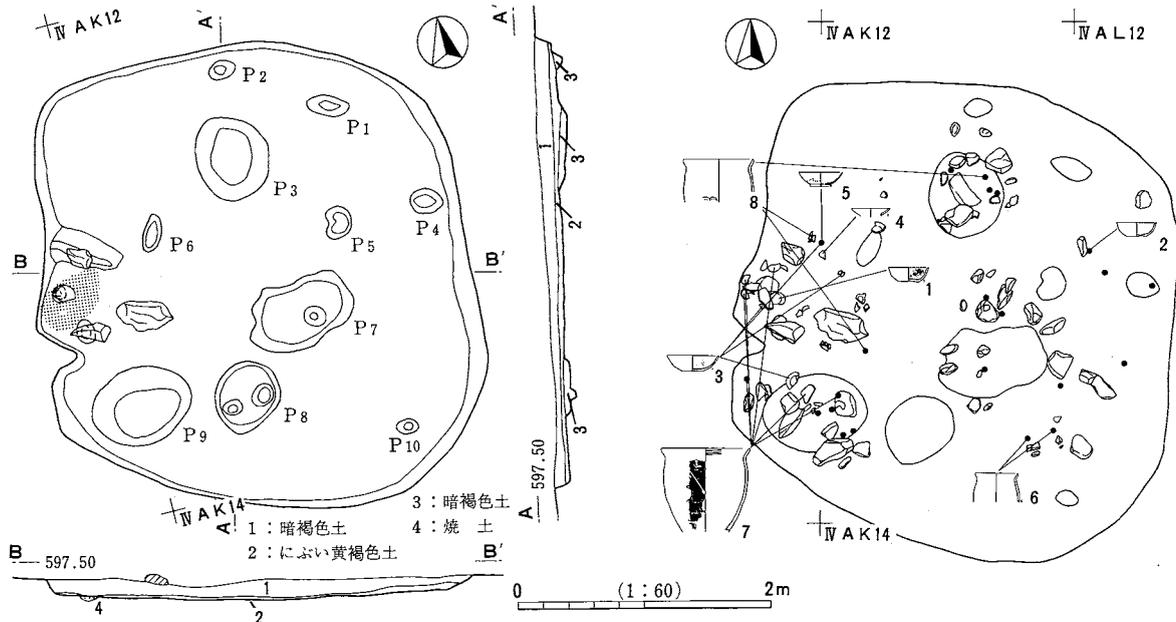
位置：IVA13にある。**検出**：表土剥ぎの際地表下20cmでカマドらしい焼土と土器を検出した。地山のIII A層とIII B層の境界に当たり、III A層の部分に暗褐色土の落ち込みを認め、焼土との位置関係から竪穴住居址の西壁の一部と推定した。焼土を挟んでII C層基調の1層と、それにIII A層が混じった3層に分層した。焼土との上下関係から、3層は貼床で1層が本来の埋土と推定される。**規模・形態**：検出時にほとんど床面まで削平されたため、III A層の部分のみに貼床をもつ住居址の痕跡と判断した。西壁にカマドがあり、主軸はN9°Wあたりを通る。**柱穴**：焼土の両側にあるP₁・P₂は柱穴の可能性がある。**遺物分布**：焼土付近から黒色土器A杯A(第137図1)が出土したのみである。

SB19 (第37・137・138図、PL9)

位置：IVA13・18にある。**検出**：II A層中で暗褐色土の落ち込みと焼土・石組みを検出し、竪穴住居址を想定してサブトレンチにより壁を確認した。プランが明確にならないため、II B層まで掘り下げて確認した。**埋土**：II B層に近い暗褐色土の単層である。**規模・形態**：東西3.38m・南北3.60mを測り、基本的には隅丸方形と思われるが、かなり丸みをもつ不整形である。主軸はN77°W。面積は9.67㎡。**壁・床**：削平のためか壁高は10cm前後と浅く不明瞭である。掘り込んだIII A層にII B層の混じる貼床(2層)を作っており、これを取り除くと凹凸の著しい掘り方となる。**柱穴**：9個のピットのほとんどが2層の下で検出された。P₁・P₂・P₄~P₆・P₁₀は長径20~30cm・深さ5~10cmの楕円形を呈し、規模・形態は柱穴に準ずるが、確実なものは認められない。**カマド**：西壁中央よりやや南に片寄った位置にある。袖石の一部とIII A層を基調とする右袖の袖土が残り、火床には支脚石が立っている。**諸施設**：カマド左わきの南西隅にあるP₁は長径80cm・深さ10cmの楕円形を呈し、礫や土器を出土したため灰溜めと思われる。**遺物分布**：遺物量は比較的多い。床面上の礫が多い部分に遺物も多く、P₁・P₃の上部にやや集中した。カマド周辺からは土師器杯A(4)、黒色土



第36図 SB18実測図

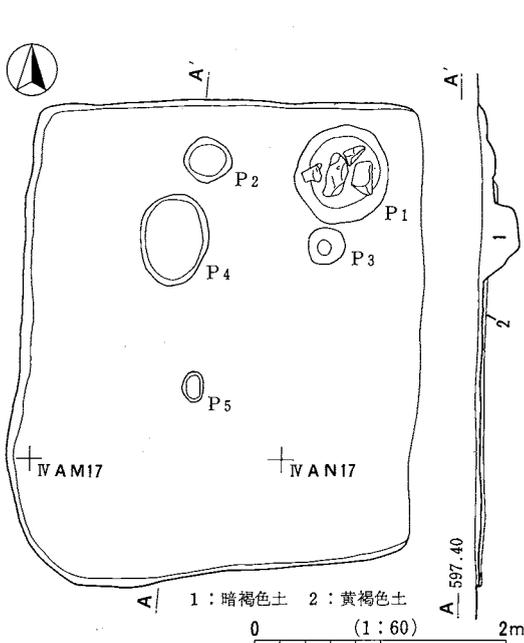


第37図 SB19実測図・遺物分布図

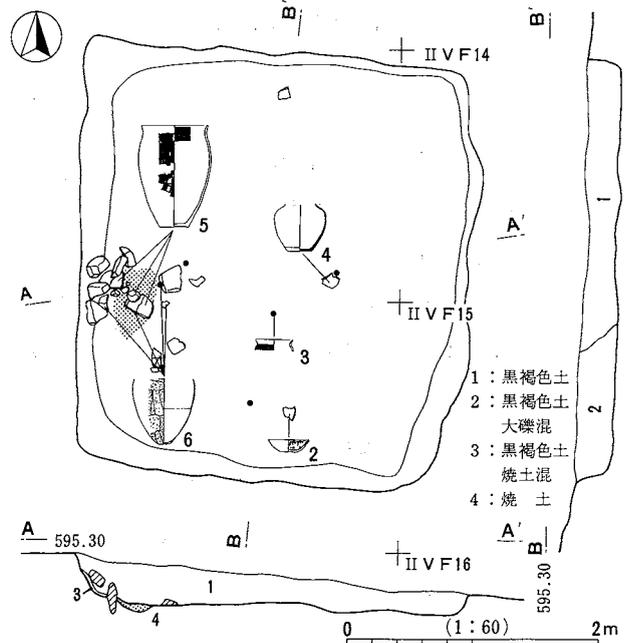
器A杯A(1)が出土した。土師器甕B(8)と黒色土器A杯A(3)はカマドとP₁から、土師器甕D(7)はカマド付近とP₂から出土した。

SB20 (第38・137図)

位置：IVA19・24にある。検出：III A層中から焼土を伴う暗褐色土の落ち込みを検出した。サブトレンチにより壁と床を確認したが、東壁はほとんど削平されていた。埋土：層厚は薄く、II B層を基調とする単層(1層)と思われる。規模・形態：東西3.18m・南北3.85mの長方形を呈し、深さ5cm前後である。主軸はN2°E。面積は10.77m²。床・壁：III A層の掘り方に、これを基調とする層厚3cm前後の貼床(2層)を作っている。壁はほとんど残存しない。柱穴：P₃は北東隅寄りにあり直径30cm・深さ10cm、P₅は中央にあり長径25cm・深さ5cmで、規模的には柱穴の可能性はあるが断定できない。カマド：北壁の中央にあるP₂は浅いくぼみで、焼土を伴う。石材等は残存しなかったが、その位置から火床の痕跡と考えら



第38図 SB20実測図



第39図 SB21実測図・遺物分布図

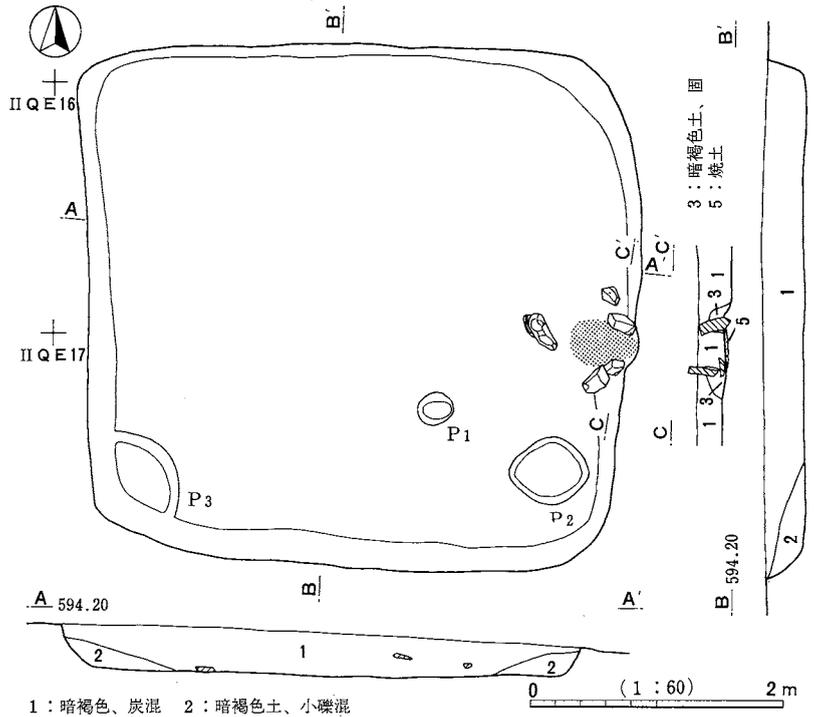
れる。諸施設：P₁は北東隅にあり、直径50cm・深さ約20cmの円形を呈し、礫4個が入っていた。カマドの痕跡P₂との位置関係から灰溜めの可能性が高い。P₂に南接するP₄は長径65cm・深さ25cmの楕円形を呈し、性格は不明である。遺物分布：遺物量は少ない。P₂から土師器甕B（第137図3）、P₄から黒色土器A杯A（1）が出土した。灰釉陶器杯（2）はP₁・P₂から出土した。

SB21（第39・138図、PL9）

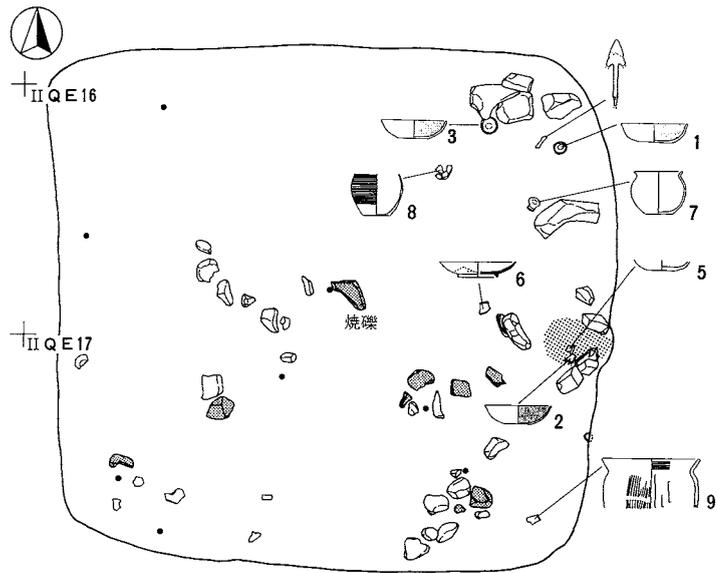
位置：II V17にある。検出：II層中でカマドらしい石組みと土器を伴う黒褐色土の落ち込みを検出し、サブトレンチで壁を確認してプランは容易に把握できた。埋土：II B層を基調とし2分層した。大礫を多量に含む2層が南壁寄りに堆積し、その後礫の少ない1層が大部分を埋めており、自然埋没と思われる。規模・形態：東西3.12m・南北3.42mの方形を呈する。主軸はN83°W。面積は8.11㎡。床・壁：掘り込んだIII A層を床面としている。壁はわずかに外傾して立ち上がる。やや傾斜が急な地点にあるため、山側の西壁高は約35cm、東壁は約25cmを測る。カマド：西壁中央よりわずかに南に片寄った位置にある。火床には厚い焼土があり、支脚石が原位置を保っている。両袖の基部には袖土と思われる灰褐色の粘質土が残存し、煙道にかかる部分には崩落した石材がある。煙道部へは約60度の角度で立ち上がる。遺物分布：遺物量はやや少なく、カマド付近に集中したほか床面に点在していた。カマドからは土師器甕B（5）・C（6）、床面からは黒色土器A杯A（2）、土師器小型甕D（3）、須恵器長頸壺C（3）が出土した。特に5は大形破片が火床上に重なるような状態であった。

SB22（第40・41・138・140図、PL9）

位置：II Q17・22にある。検出：II B層上面で土器片と炭化物を含む暗褐色土の落ち込みを確認した。サブトレンチで壁とカマドを確認したが、北側半分が農道にかかるため2カ年の調査となった。埋土：II B層を基調とする暗褐色土で、礫の量から2分層した。2層は壁際に堆積した三角堆土で、1層はこれを被



第40図 SB22実測図



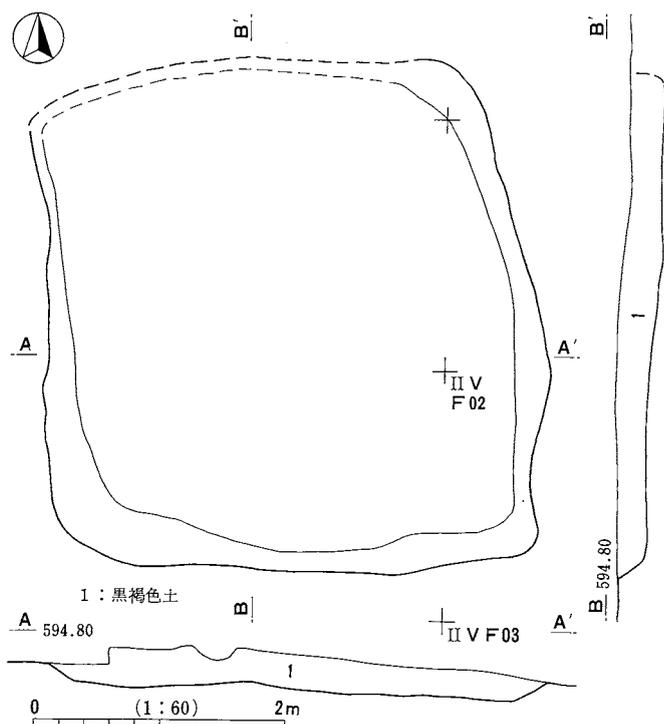
第41図 SB22遺物分布図

覆している。**規模・形態**：東西4.47m・南北4.13mの隅丸方形を呈す。主軸はN90°E。面積は14.38㎡。**床・壁**：掘り込んだⅢA層を床面としている。カマド右わきの南東隅寄りの一部に、貼り固められた層厚3cm程度の貼床がある。壁高は約30cmを測り、やや外傾して立ち上がる。**柱穴**：P₁は中央部の南東寄りにあり、直径・深さ28cmを測り、位置・形態から柱穴の可能性がある。**カマド**：東壁のほぼ中央にある。燃烧部奥の左右の袖石が残り、石を芯に両側を1層と共通の暗褐色土で固めている。火床はややくぼんで煙道部はわずかに壁外へ突出している。**諸施設**：P₁は南西隅にあって、深さ10cm足らずの半円形で、中礫数個が出土した。P₂は南東隅にあり、長径65cm・深さ数cmの楕円形を呈す。この中から遺物は出土していないが、位置・形態は灰溜めにほぼ適合する。**遺物分布**：遺物量は比較的多く、カマド周辺にややまとまっていた。カマド内からは土師器杯A(5)、黒色土器A杯A(2)、手前からは灰釉陶器皿(6)が出土した。北東隅には黒色土器A杯A(1・3)が完形で正位に置かれ、土師器小型甕A・D(7・8)がつぶれて出土した。また、1に接して鉄鏝(第140図6)が出土した。床面には大・中の礫が散在していたが、焼けた礫が混在しており、カマド石を投棄したものと推定される。

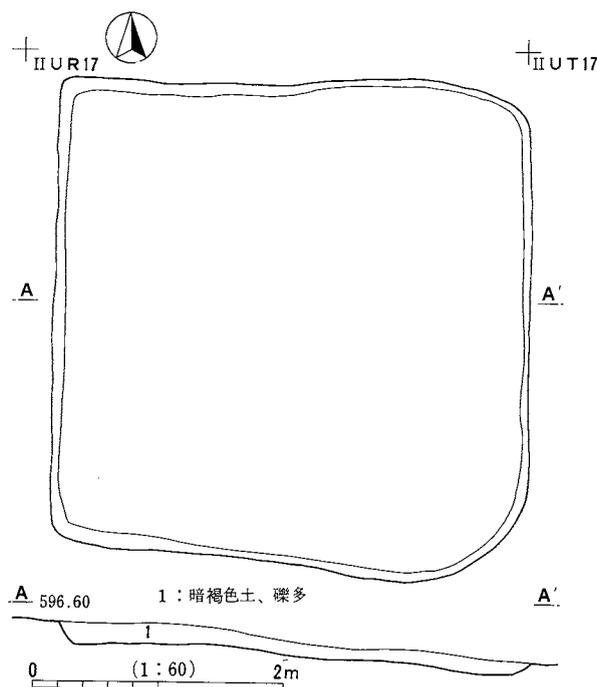
S B 2 3 (第42図)

位置：ⅡV01・02にある。**検出**：ⅢA層上面で黒褐色土の落ち込みを確認したが、不明瞭な部分があった。規模から住居址を想定し、東西・南北方向のサブトレンチで断面観察し床を確認した。地山と埋土が似ている北壁のプランは明瞭にならなかった。

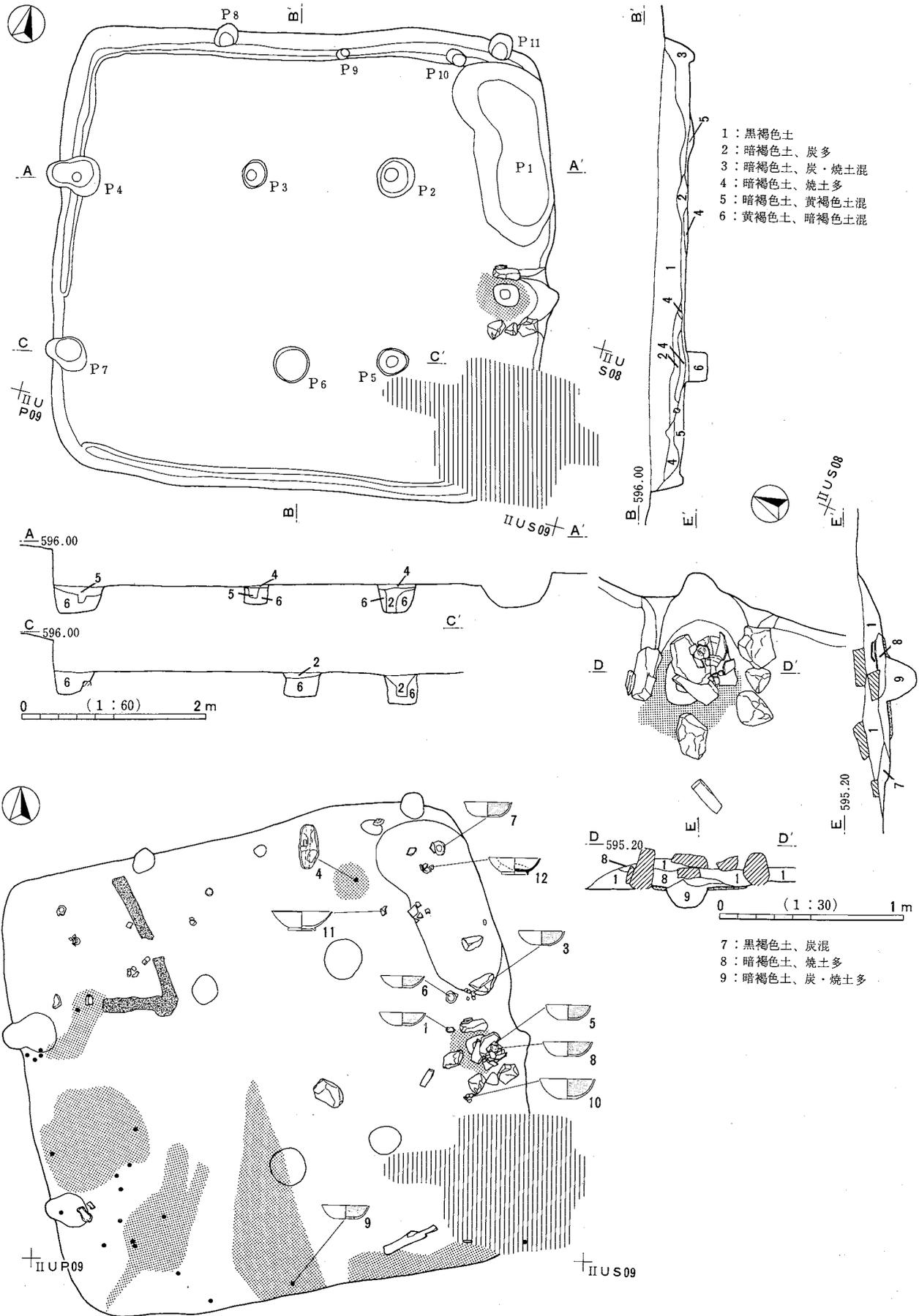
埋土：単層でⅡB層に近いがやや黒みが強い。**規模・形態**：東西3.94m・南北4.00m前後の隅丸方形を呈するらしい。主軸は最も安定している南壁線を基準にすればN0°となる。床面積は11.67㎡前後。**床・壁**：掘り込んだⅢA層を床面としているが、東側にわずかに傾斜している。南壁は外傾し壁高は25cm前後を測るが、東・西壁の傾斜はかなり緩く、北壁は不明である。**柱穴**：南西隅で数個の浅いピットを検出したが、周囲のⅢA層上面で検出されたピットの残存部分の可能性が高く、本址には伴わないものと考えた。**遺物分布**：埋土中から縄文早期の土器片と黒曜石等の碎片、平安時代の土師器片が少量出土したが、図化に耐えない。カマドが確認できなかったことに加えて遺物からも時期を確定しにく



第42図 S B 23実測図



第43図 S B 25実測図



第44図 SB28・カマド実測図・遺物分布図

いが、全体の規模・形態から平安時代の可能性が高いと判断した。

S B 2 5 (第43・138・146図)

位置：II U 25にある。**検出**：II B層下部で土器を伴う暗褐色土の方形の掘り込みを検出して住居址を想定した。サブトレンチの断面観察でプランと床を確認した。**埋土**：II B層を基調とする暗褐色土で、礫を多量に含む。**規模・形態**：東西3.80m・南北3.85mの方形を呈す。主軸はN 0°。床面積は12.60㎡。**床・壁**：掘り込んだIII B層を床面とし東へ傾斜している。壁高は10cm足らずで、特に東側はほとんど残存しない。カマドは検出できなかったが、あったとすれば削平の著しい東壁側と予想される。**遺物分布**：埋土中に少量が散在した。図化できたのは黒色土器A杯A(1・2)のみで、ほかに灰釉陶器椀や須恵器甕がある。南西隅付近からは鉄釘(第146図3)が出土した。このほかに長径20cm前後の礫が散在していた。

S B 2 8 (第44・139・140図、P L 9)

位置：II U 09・10にある。**検出**：表土剥ぎの際II層中でカマドらしい石組みがかかり、前年度調査したS B 16の西壁カマドと予想した。この面ではプランが不明のため、赤く焼けた壁線を追ってプラン確認したところ、S B 16の西に隣接する別個の住居址となった。カマドわきにあけたサブトレンチの所見ではS B 16とは直接切り合わないことが判明したが、同時存在は考えられない。また、掘り下げ中に北東隅で本址の壁面と同様に赤化した中世火葬施設S K 1048を検出した。**埋土**：基本的には上下2層に分層される。壁際から床面直上には暗褐色土に焼土・炭化物が混じる2～5層が堆積し、火災あるいは焼却によるものと思われる。特に炭化物の多い部分(2層)、焼土の多い部分(4層)があり、焼土ブロックは南西部分が厚い。この上部を、II B層を基調とする1層がレンズ状に被覆している。**規模・形態**：東西5.40m・南北5.10mの隅丸方形を呈す。主軸はN 77° Eで本遺跡の平安住居址中、正方位とのずれは最も大きい。面積は23.13㎡。**床・壁**：掘り込んだIII A層を平坦な床面としている。壁の立ち上がりは垂直に近く、西壁高は40cm前後を測る。全周の壁面の上半部は赤化している。東壁と南西隅を除いて、幅10～15cm・深さ3～5cmの周溝がめぐっている。**柱穴**：P₂～P₄とP₅～P₇は3対の支柱穴であろう。P₄・P₇は西壁上から掘り込まれている。これらは直径35～40cmを測り、床面下20～30cmに達し、III A層で埋め戻されている。P₂・P₅には直径10cm強の柱痕が認められる。北壁には壁上から掘り込まれたP₈・P₁₀と、周溝中にあるより小さなP₉・P₁₁がある。**カマド**：東壁中央よりわずかに西に片寄っている。両袖石が原位置を保ち、この間に直径50cmほどの火床がある。この中央部のピットは支脚の痕跡であろう。火床からわずかに浮いて扁平な砂岩、土師器・須恵器破片が出土し、芯材の可能性もある。**諸施設**：P₁はカマド北側の東壁下にあり、南北205cm・東西80cm・深さ約20cmの楕円形を呈する。上部から多くの遺物が出土し、灰溜めと思われる。**遺物分布**：埋土下部の2～5層から多量に出土し、カマドとP₁周辺、西壁付近に集中していた。カマドからは黒色土器A杯A(1・5・8・10)、須恵器甕破片、P₁周辺からは黒色土器A杯A(3・6・7)、灰釉陶器椀(11・12)、土錘(第140図4)が出土した。土器は食器と比較して煮炊具は少量であった。このほか、砥石2点(第140図2・3)、刀子(同9)・鉄釘(同11)が出土した。

3 中世以降の遺構

(1) IIG区中世遺構群 (第45~47図、PL10)

IIG11・12・16・17・21・24区に分布する。便宜的にIIL区遺構群と分割したが、一連の中世遺構群である。これらは小段差の傾斜部から東側の平坦面に展開している。II層中で検出され、暗褐色土の地山と遺構埋土IIA層の土色の差は明瞭であった。本地区の調査は2カ年にわたったため、検出面に多少の高低差があり、調査後に図面上から建物址などと認めた遺構もある。

① 掘立柱建物址

SA11・SB24 (第45図、PL10) : 小段差の直下であり、10個の円形柱穴が南北に並ぶ。柱穴は9間(19.5m)にわたる。直径15~30cm・深さ4~50cmではばらつきがあるが、P₂~P₇はやや削平されたため浅い。P₆は除外すべきかもしれない。埋土は少量の炭が混じるIIA層基調で、柱痕は確認できなかったがP₇は二重の掘り込みである。主軸はN9°Eを通り、P₁~P₅から東へ1m隔てて10cm足らずの段差があり、平坦面をなしている。これにSB24を付したが、柵址SA11と一体の建物址と考えられる。SB24の推定範囲内には長径1.20mの薄い炭化物層、焼土址SF01・30、集石SH11が含まれる。焼土址は直径50~60cmの円形を呈し、赤化部分の厚さは数cm以下である。掘立柱建物址ST01・11、柵址SA12は切り合いか共存か明確ではない。遺物はP₉付近から内耳鍋が出土し、検出面や埋土からも中世と判断された。

ST11 (第45図) : SB24の南に隣接している。直径25~30cm・深さ15~25cmの円形柱穴10個からなる。P₂・P₄・P₅は不整形である。検出できない柱穴もあるが、南北棟の4間(7.00m)×2間(3.00m)の建物址と考えられる。主軸はN2°Eを通り、SA11・SB24とは、ずれる。梁行のP₃・P₇・P₁₁は1.54mの等間隔、東側の桁行は不規則、西側は不明である。南北の妻の外側1mにあるP₆・P₉は棟持柱であろうか。遺物は伴わないが、埋土から中世と判断した。

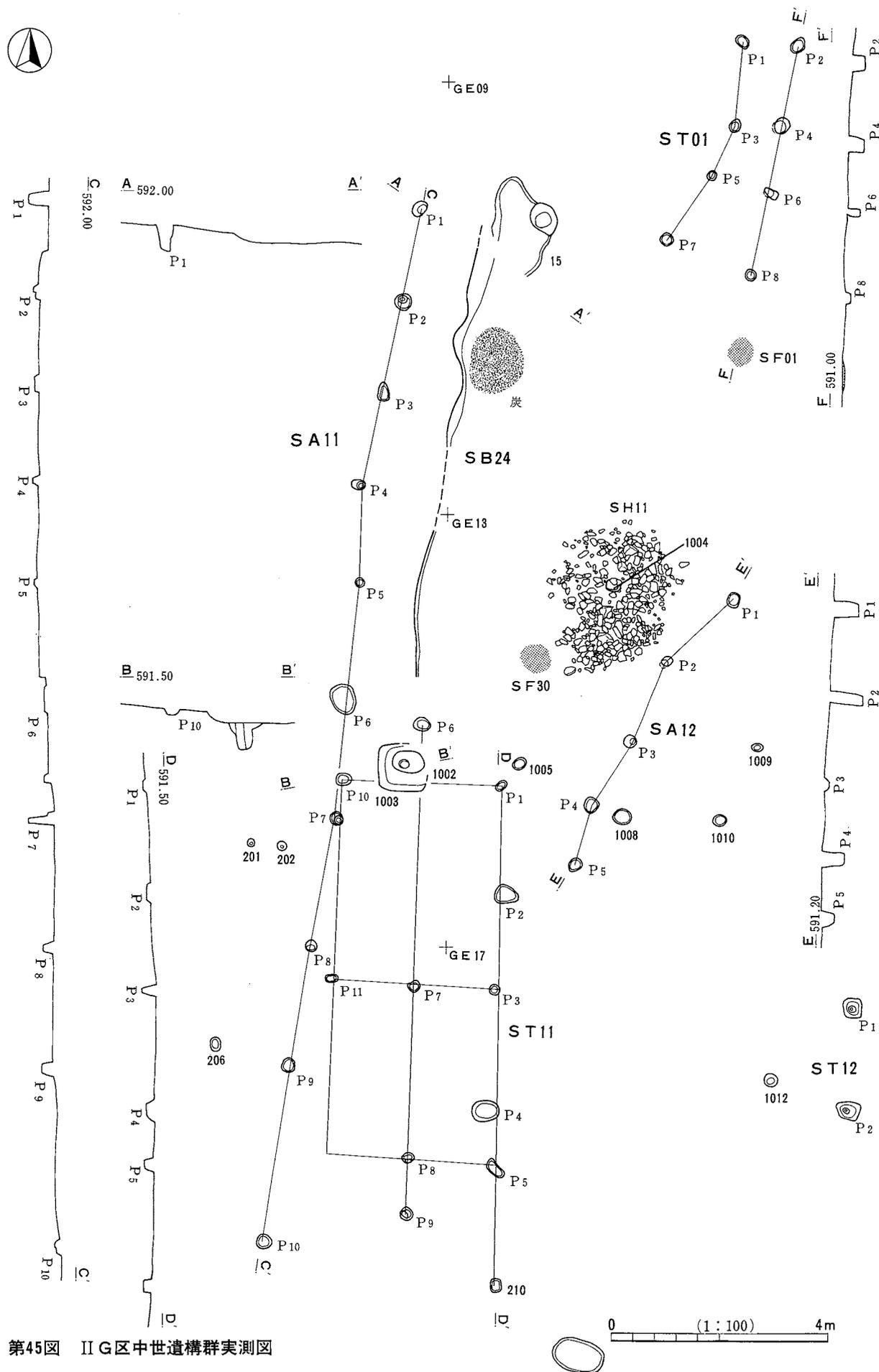
ST01 (第45図) : 4個の円形柱穴が2列に並ぶ、3間×1間の建物址と見られる。東側の桁行P₂・P₄・P₆・P₈は柱筋が通り4.32mを測るが、西側のP₁・P₃・P₅・P₇は不規則である。P₂~P₈の主軸はN12°Eで、SA11に近い。柱穴は直径・深さとも20~30cmで、P₅は7cmと浅く、P₄・P₆は斜めに掘り込まれている。遺物は伴わないが、埋土から中世と判断した。

ST12 (第46図) : ST11の東にある。当初P₁・P₂とP₃~P₆を別個の遺構と考えた。いずれも方形柱穴で、P₁・P₃・P₆の柱筋が通り4.00mの等間隔であること、P₂・P₄が対応することから、東西棟の2間(8.00m)×2間(4.05m)の建物址とした。検出できない柱穴もあるが、柱間は桁行が梁行の2倍を測る。P₁・P₂は径35cm・深さ40cmの方形で、ともに直径約15cm・深さ50cmの円形の柱痕が認められた。ほかの柱穴は径20~25cm・深さ40cm前後で、柱痕は見られない。遺物は伴わず、埋土から中世と判断した。同じ検出面で本址の範囲内に焼土址SF31・32がある。焼土址は長径60~100cmで、赤化部分の厚さは約10cmを測る。

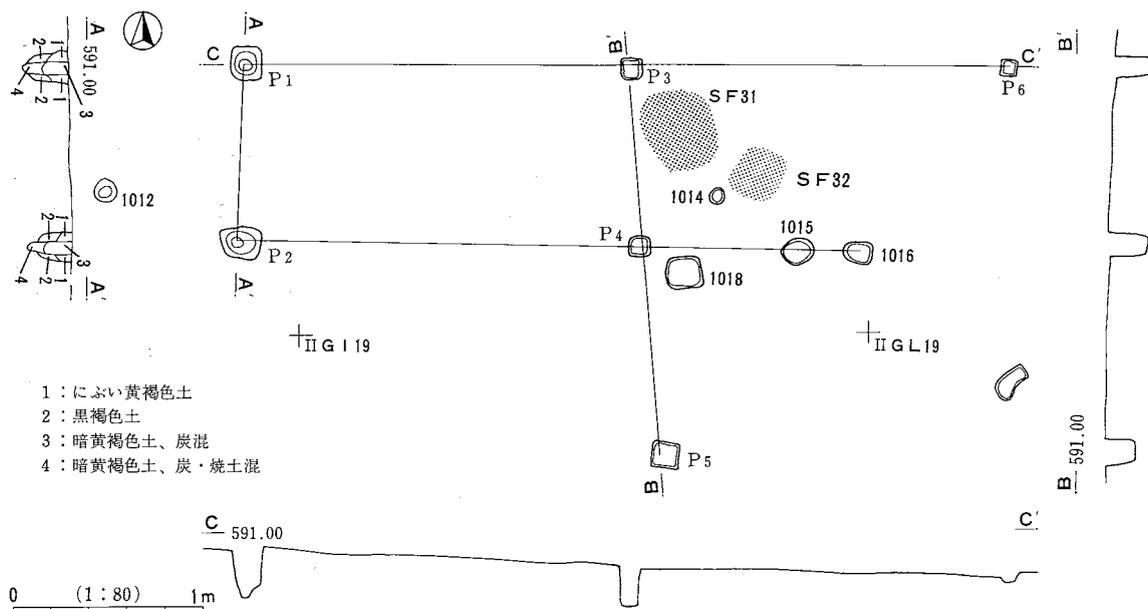
ST14 (第10図) : ST12に隣接し、径25cm前後の浅い4個の方形柱穴からなる。検出できない柱穴があり構造は不明であるが、P₁~P₃は2間(3.84m)でN7°Wを通る。本址に伴う遺物はないが、P₄の東2mの位置で半完形の白磁杯が出土した。

② 柵 址

SA12 (第45図) : SB24の平坦面にある。直径20~30cm・深さ10~60cmの円形柱穴5個が5.76mにわたって乱杭状に並び、主軸はN24°Eあたりを通る。隣接するピットに対応関係は見いだせないが、同規模のSK1005~1010等とつながるならば、建物址の一部の可能性もある。



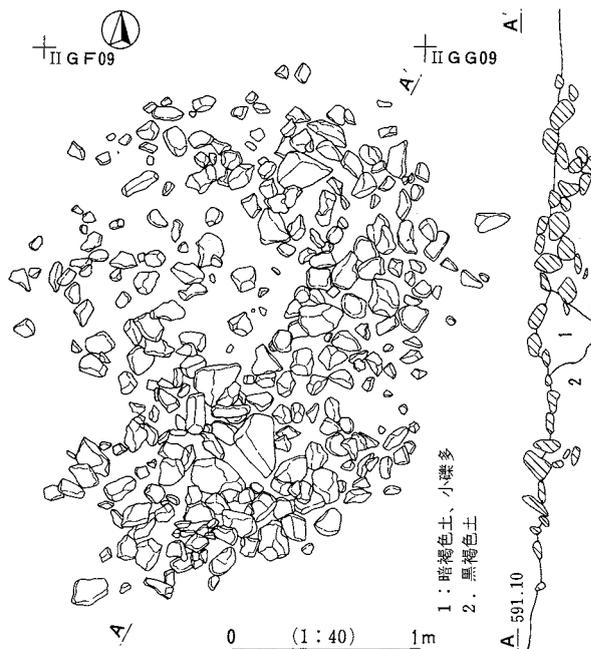
第45図 II G区中世遺構群実測図



第46図 ST12・SF31・32実測図

③ 集石

SH11 (第47図、PL10) : SA11・SB24の平坦面にある。地山に含まれる径約10~20cmの礫が2.5×3.5mの楕円形に分布している。II層中にあるため、掘り方があるか不明である。検出面下20cm前後まで3・4個が重なる部分が見られるが、全体に平面的な分布を示し、中心部では礫が散在状態である。礫自体に被熱の痕跡が見られず炭化物も伴わないため、本址の性格は不明である。遺物はないが中世遺構群と同じ検出面であること、この地点に他の時期の遺構・遺物の分布が乏しいことから、本址も中世と考えた。



第47図 SH11実測図

II G区の中世遺構群には、焼土を伴う建物址が最大5棟は含まれている。これらは明瞭に全体の構造をうかがえるだけの遺存状態をとどめていないが、他の中世遺構より主軸がずれるSA11・SB25・ST01・SA12と、主軸が共通のST11・12・14が見られることから、時期差が想定される。また、ST11が南北棟、ST12が東西棟と推定されるなど、棟方向の異なるものがある。さらにII G25・H22・M02周辺の建物址として扱えないピットも、検出面や埋土から中世と推定されるものがあり、遺構群はより東側へ拡大するものと推定できる。この地区はII L・M区と比較して中世遺物はきわめて少なく、遺構の性格を示唆する資料も乏しい。帰属時期については、遺構に伴わないものの、瀬戸美濃系陶器と輸入青磁の年代から16世紀と考えられるが、ST14付近から1点出土した白磁杯が13世紀の所産のため、中世前期に属する遺構の存在も考慮される。

(2) IIL区中世遺構群 (第48~55図、PL10・11)

IIL1~8・11~13・17区に分布する。本地区の遺構群はG区から続く小段差に沿った東向き斜面に展開している。II層中で検出され、暗褐色土と遺構埋土IIA層の土色の差は明瞭であった。IIL02・06は旧流路に当たるため、II層の堆積が1mに達する部分がある。この部分を東西に切った重機によるトレンチの観察では、掘り込み面に若干の差がある中世遺構が認められたが、平面的にこれを峻別することはできなかった。

① 掘立柱建物址

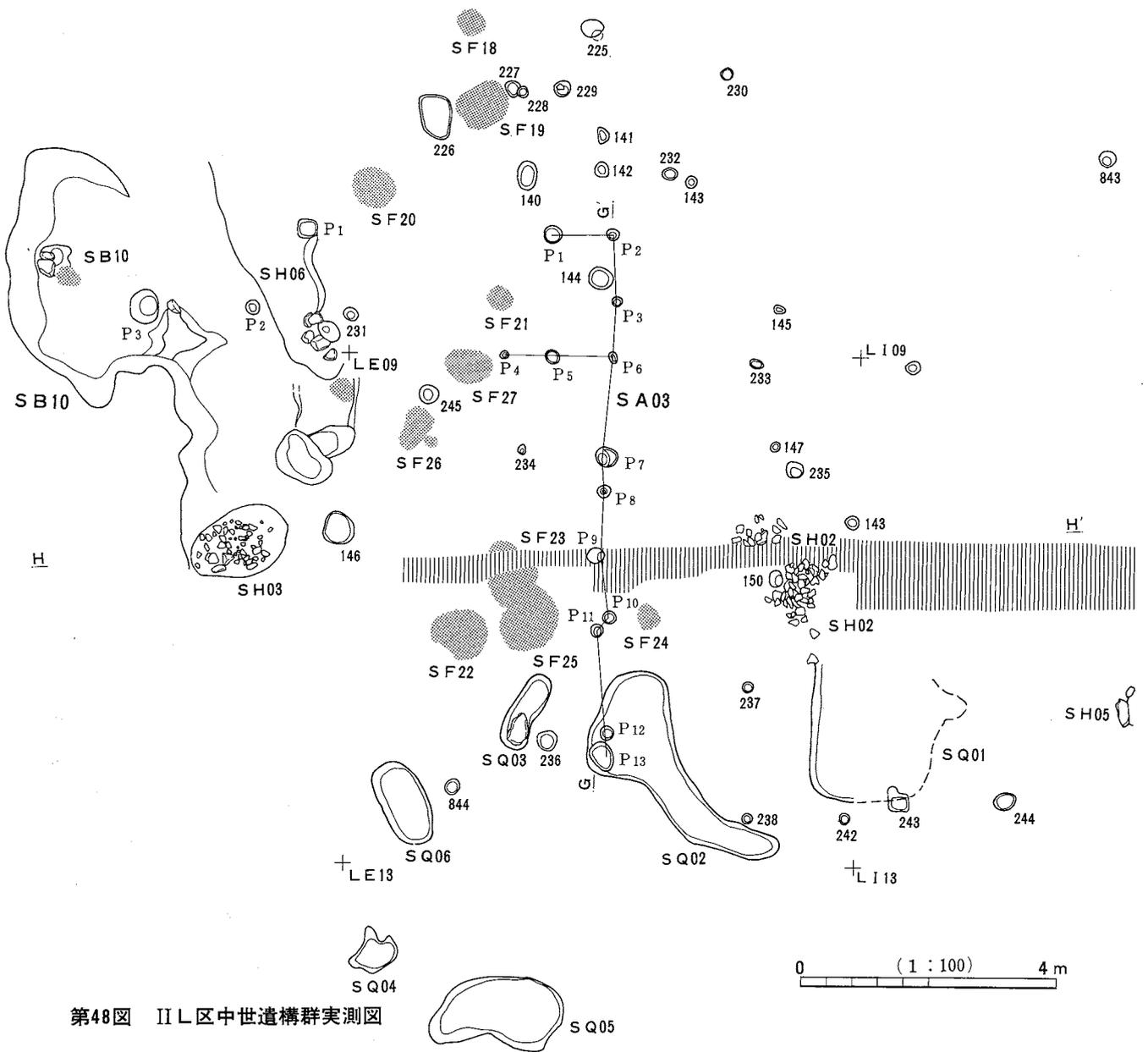
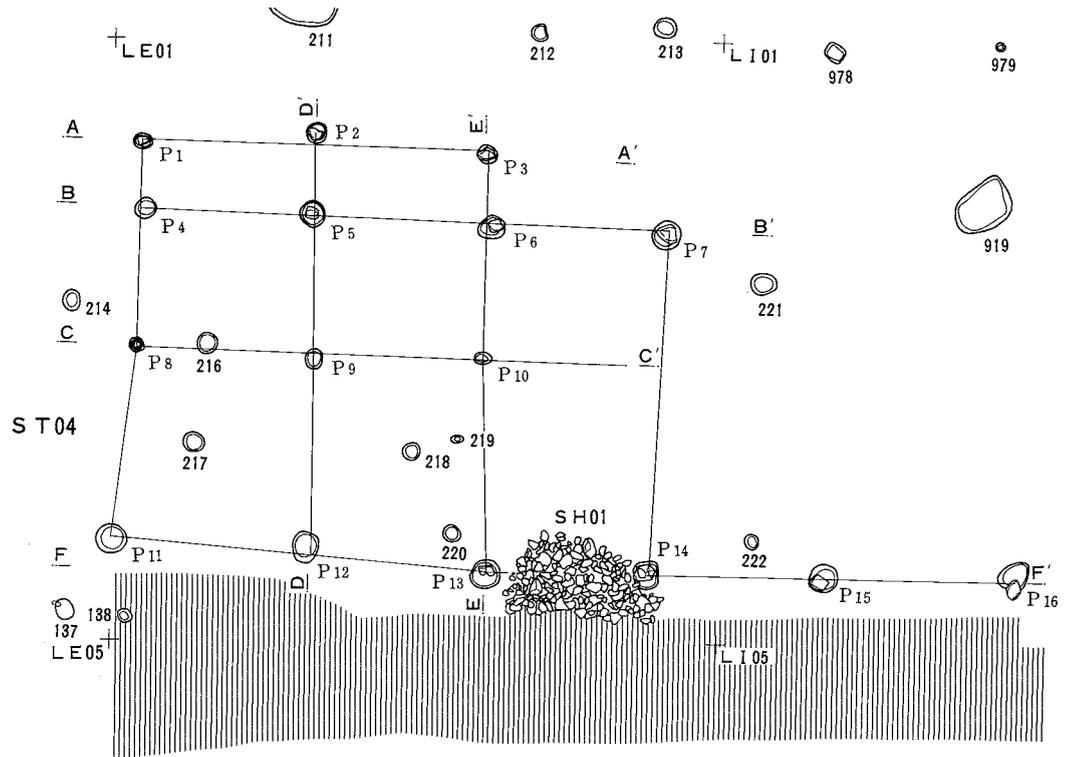
ST04 (第48・50図、PL10) : IIB層上面で検出した。当初、東西に並ぶ大きさのそろった6個の円形柱穴P₁₁~P₁₆を柵と考えた。P₄~P₇等との対応関係から東西棟の6間(11.84m)×2間(4.48m)の身舎の北側に、P₁~P₃の半間の廂か間仕切りをもつ建物址とした。ただし、さらに北側を東西に並ぶSK213・978・979がP₇・P₁₅・P₁₆ともほぼ対応することから、梁行3間の可能性もある。柱筋のよく通るP₁₁~P₁₆の軸はN92°Eとなる。柱穴は南側の桁行P₁₁~P₁₆が直径30~40cmと最も大きく、棟通りのP₈~P₁₀は20cm前後と小さい。P₁~P₃・P₅~P₇・P₁₃~P₁₆は座面に平石をもつ。約4度の傾斜があるため、柱穴の深さは10~50cmと開きが大きいが、底面のレベルはほぼ同じ。P₁₃・P₁₄の間に集石SH01がある。本址に直接伴う遺物はないが、柱穴埋土から中世と判断される。

SA03 (第48・50図、PL11) : ST04の南にある。焼土址SF18~26の分布範囲の東側に多数の小ピットがある。南北に並ぶP₂~P₁₂を当初柵址と考えSA03を付したが、IIB層中の若干低い面で検出されたピットや、東西方向に対応するピットを結んで建物址とした。P₂~P₁₂の間は7.80mを測るが、柱間寸法はふぞろいである。P₂の西側延長上にあるSB10のP₁・P₃の西側の同P₂・P₆の東側のSK233などが本址に含まれるならば、規模はさらに大きくなる。しかしP₁₂・P₁₃がSQ02に切られていることなど、若干の時期差も考慮される。これらの柱穴は直径20cm前後の円形で深さは10~40cmとばらつきが大きい。埋土は炭化物を含むIIA層で、P₈からは直径約10cmの柱痕を検出した。遺物はP₁内部から瀬戸美濃系陶器摺鉢が、P₁₂・P₁₃を切るSQ02から同丸皿・天目茶碗が出土し(第55図)、本址の年代は16世紀半ばごろとされる。

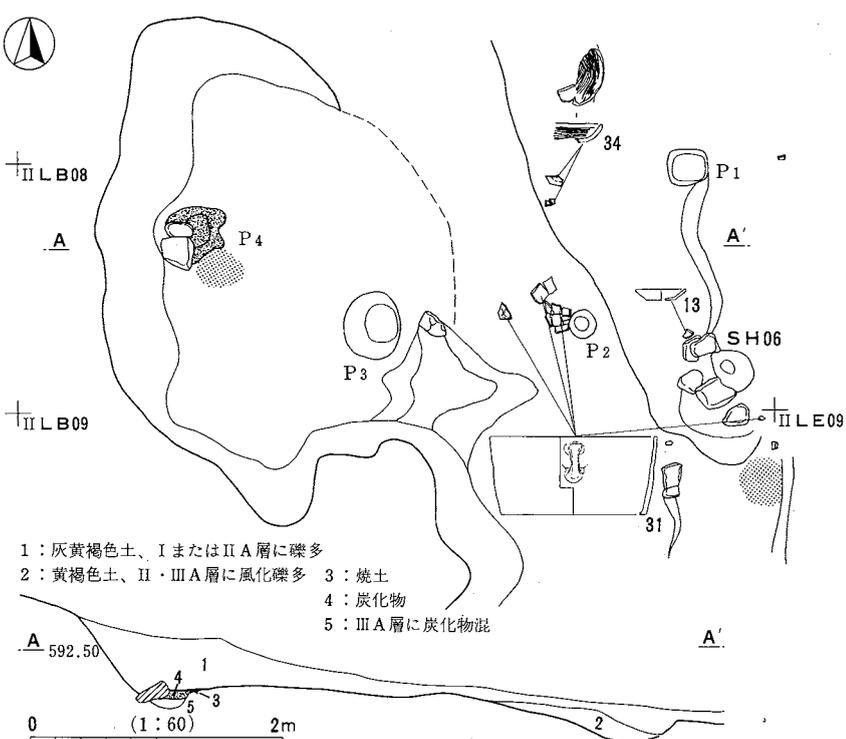
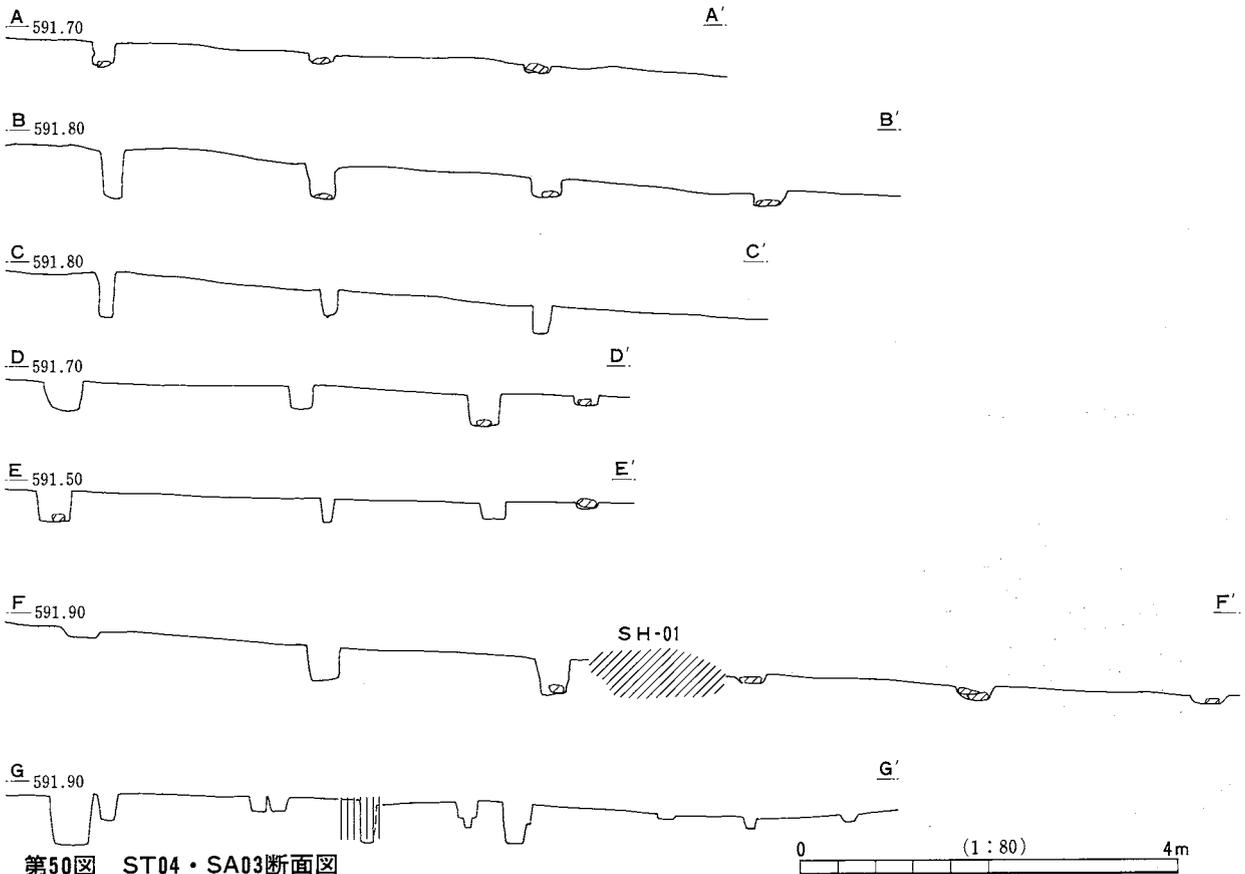
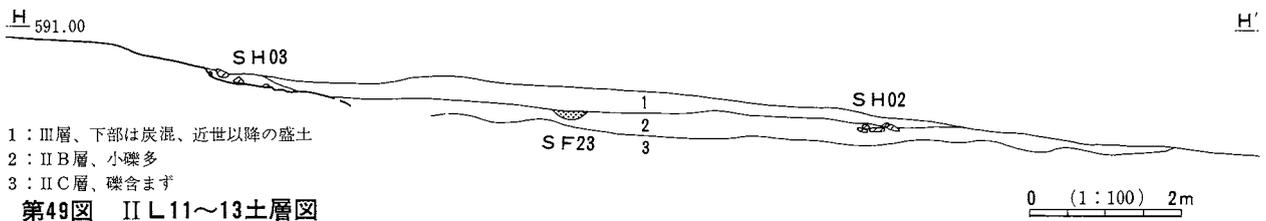
SA02 (第12図) : ST04の東側13mの位置にあり、IIB層下部で検出された。正確に東西に並ぶ円形柱穴4個からなる、3間(5.12m)の柱列である。南北に対応する柱穴は検出できなかった。柱穴は直径40~45cm・深さ30~40cmを測るが、調査年次の異なるP₁は底面のレベルが高く、本址に含めてよいか疑問が残る。P₂~P₄はよくそろい、建物址の残存と考えられる。同じ検出面にSK161・173などの円形小ピットがある。P₁の南側1mの位置に、隣接する焼土址SF33・34がある。焼土は長径が約80cm・層厚10cm前後を測る。周囲に中世遺物は少なく、柱穴埋土から時期を判断した。

② 竪穴建物址

SB10 (第51図、PL11) : 小段差の斜面にあり、III層上面での遺構検出の際に内耳鍋が集中する部分があったため、東西方向のトレンチをあけて遺構検出を試みた。当初地山と思われたIII層の下から炭化物層が検出されて床を確認し、再堆積したIII層(1層)に被覆されたことがわかった。約15度の斜面を東西約3.00m・南北3.90mにわたってIIB層を半円形に掘り込み、ほぼ平坦な床面としている。東側の一部はII・III層の混じった2層を貼っている。西側の壁高は約40cmを測る。柱穴の可能性のあるピットは掘削部分より東側にある。P₁は径30cm・深さ20cmの方形、P₂は直径20cmの円形を呈す。ただしP₁・P₂はSA03のP₂・P₃の西側延長上にあり、本址に属すか不確実である。西壁中央にあるP₄は長径40cm・深さ10cmを測り、炭化物層(4層)が堆積して大礫がのっていた。これに接する床面が一部焼けている(3層)。P₃は長径60cm・深さ30cmで柱穴とは考えにくい。P₁の南側に、周囲に数個の礫を伴うピットSH06があ



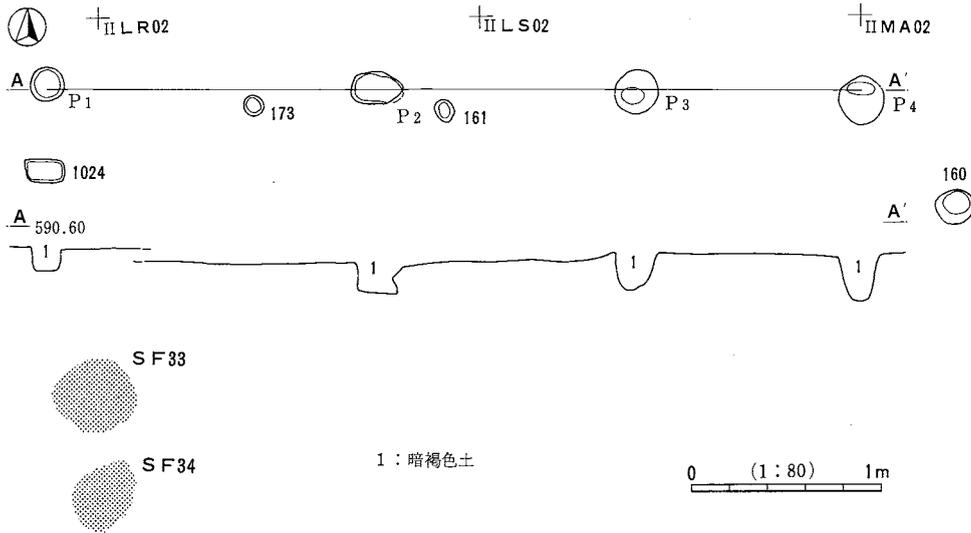
第48图 II L区中世遺構群実測図



るが、本址に伴うかは不明である。掘削部分に遺物はなく、P₂に接して内耳鍋(31)1個分が集中し、ほうろく?破片(34)も見られる。本址は竪穴状の構造で炉を備えているが、埋土中から縄文時代遺物の出土はなく、中世遺構群の一角を占めているため、内耳鍋などが時期を示唆するものと考えた。

③ 集石

SH01(第53図、PL10): ST04のP₁₃・P₁₄の間を占める。II B層上面で検出された。東西2.10mを測るが、南側半分程度はトレンチで切られ現存幅

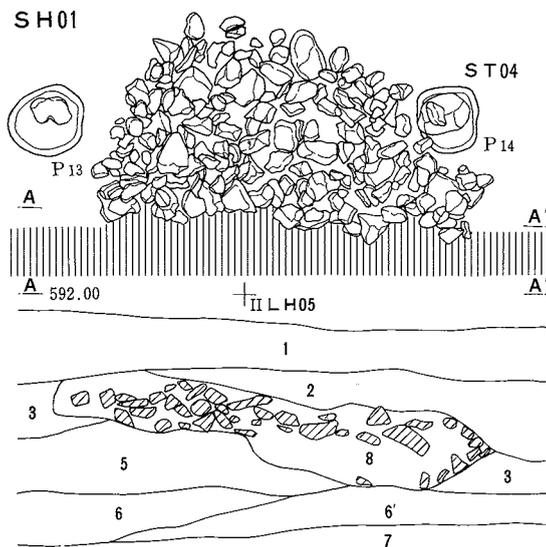


第52図 SA02・SF33・34実測図

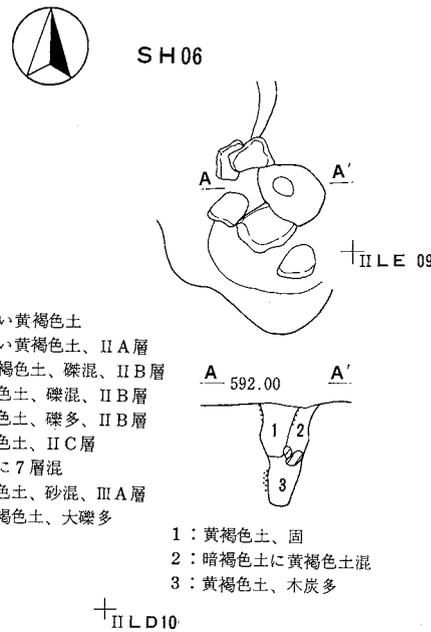
は1.0mで、平面分布はほぼ円形を呈するらしい。礫は最大30cmまでの大きさで密集し、垂直分布は40cmにおよぶ。明瞭な掘り方はなく、礫を含む8層は東に傾斜している。被熱の痕跡は見られず、炭化物・焼土・遺物は伴わない。検出面から中世遺構と考えられ、ST04の付属施設の可能性もある。

SH02

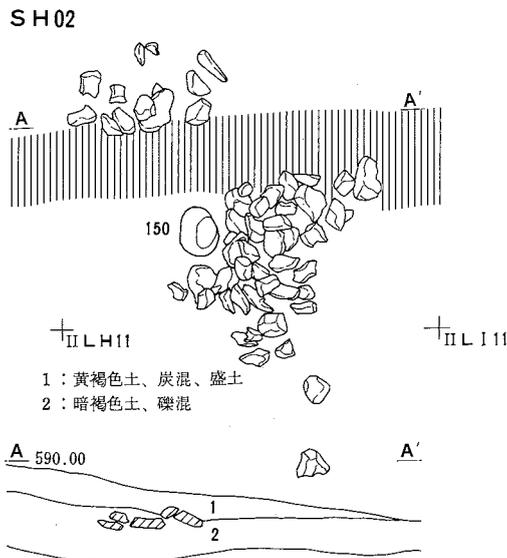
(第53図、PL11)：遺物包含層確認のため東西方向のトレンチをあけたところ、IIB層上部で断面観察された。このため中央部を分断されている。平面分布は長径2m程度の不整形を呈するらしく、垂直分布は30cmの範囲である。掘り方は確認できず、礫は径5~20cm程度の大きさである。被熱の痕跡は見られ



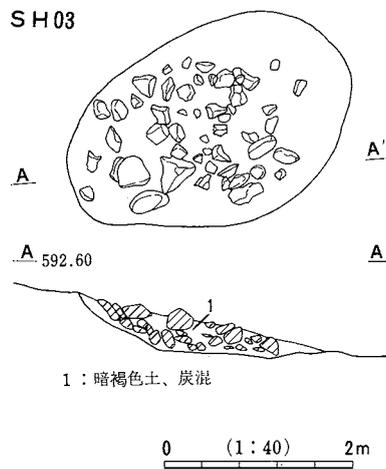
- 1：にぶい黄褐色土
- 2：にぶい黄褐色土、IIA層
- 3：灰黄褐色土、礫混、IIB層
- 4：暗褐色土、礫混、IIB層
- 5：暗褐色土、礫多、IIB層
- 6：黒褐色土、IIC層
- 6'：6層に7層混
- 7：黄褐色土、砂混、IIIA層
- 8：灰黄褐色土、大礫多



- 1：黄褐色土、固
- 2：暗褐色土に黄褐色土混
- 3：黄褐色土、木炭多

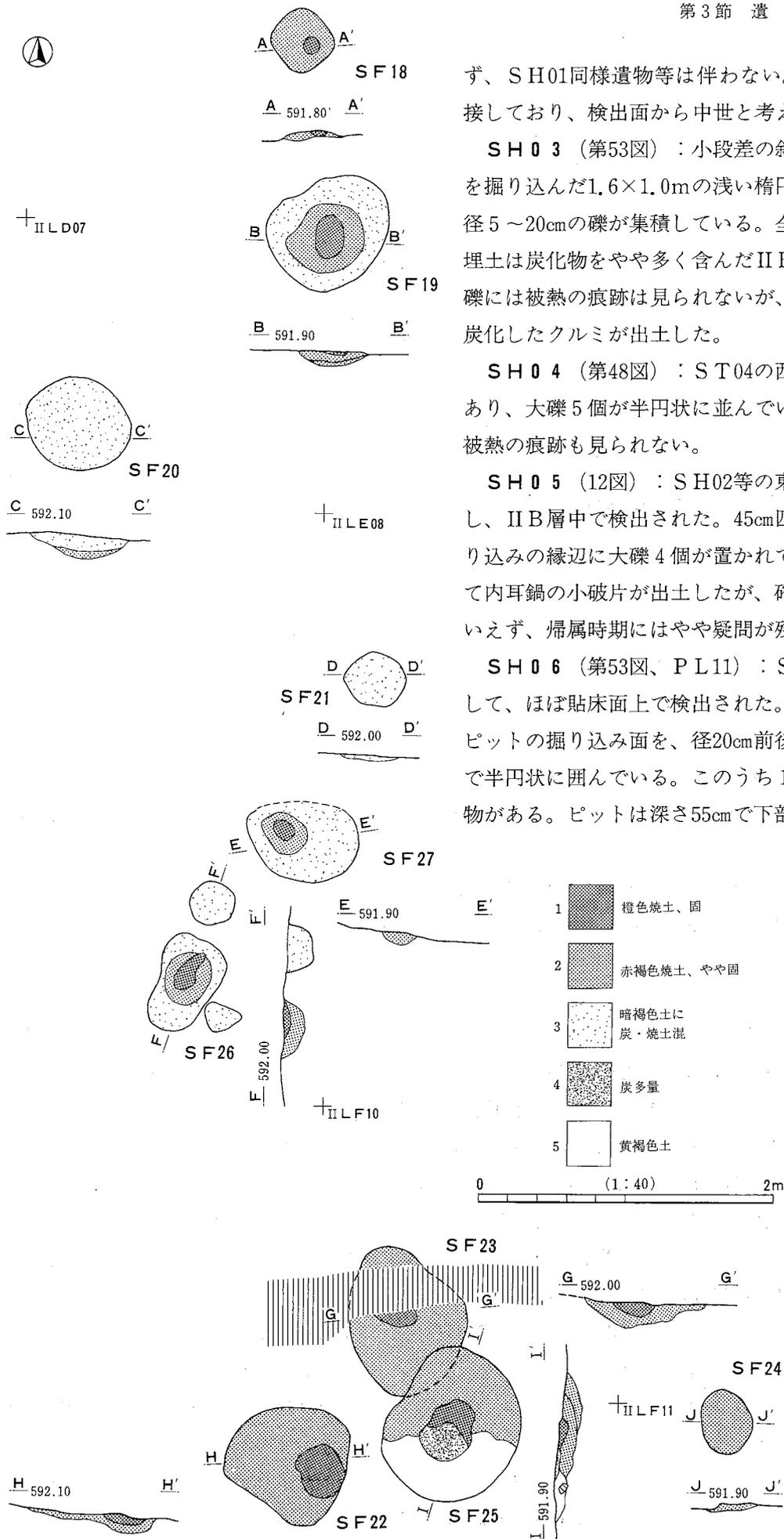


- 1：黄褐色土、炭混、盛土
- 2：暗褐色土、礫混



- 1：暗褐色土、炭混

第53図 SH01・02・03・06実測図



第54図 SF18~27実測図

ず、SH01同様遺物等は伴わない。SK150が本址に接しており、検出面から中世と考えた。

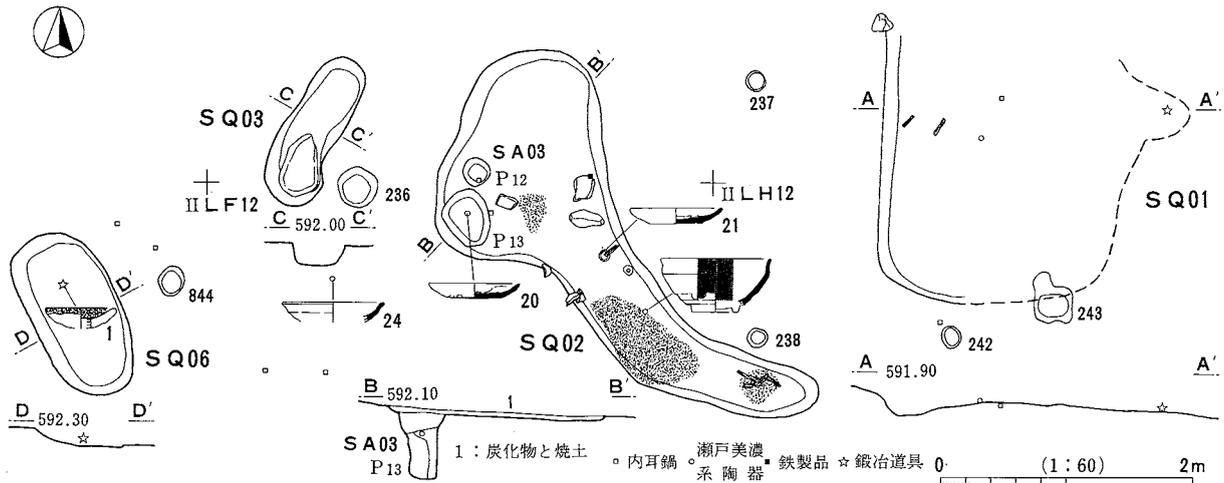
SH03 (第53図) : 小段差の斜面にあり、IIIB層を掘り込んだ1.6×1.0mの浅い楕円形の掘り方の中に、径5~20cmの礫が集積している。全体に東へ傾斜し、埋土は炭化物をやや多く含んだIIB層を基調とする。礫には被熱の痕跡は見られないが、内耳鍋の小破片と炭化したクルミが出土した。

SH04 (第48図) : ST04の西側の小段差斜面にあり、大礫5個が半円状に並んでいる。掘り方はなく、被熱の痕跡も見られない。

SH05 (12図) : SH02等の東側の平坦部に位置し、IIB層中で検出された。45cm四方・深さ数cmの掘り込みの縁辺に大礫4個が置かれている。これに接して内耳鍋の小破片が出土したが、確実な伴出遺物とはいえ、帰属時期にはやや疑問が残る。

SH06 (第53図、PL11) : SB10の東側に隣接して、ほぼ貼床面上で検出された。長径40cmの楕円形ピットの掘り込み面を、径20cm前後の扁平な砂岩5個で半円状に囲んでいる。このうち1個には煤状の付着物がある。ピットは深さ55cmで下部ほど狭く、底部は

直径10cmを測る。埋土はIIA層を基調とし、下半部の3層はしまりがなく木炭を多く含む。上半部の1・2層は硬く、3層との中間には礫が多い。内面は底部近くまで焼け、所々剥落している。本址の南側にも少量の焼土が見られる。同じ検出面で隣接して土器皿や内耳鍋が出土し、本址の時期を示



第55図 SQ01・02・03・06実測図・遺物分布図

唆する。S B10や焼土址群に伴う可能性がある。

④ 焼土址 (第54図、P L11)

II L 07・08のS B10とS A03の間約10mにわたって、II B層上面にSF18～27の10カ所の焼土址が群在している。このうちわずかに検出面の低いS F25は、長径100cmの円形の北半分に赤褐色の焼土(2層)、南半分にII A層と近似した黄褐色土(5層)がある。中央部約40cmはきわめて硬い橙色の焼土(1層)で、炭化物の集中部分(4層)がある。焼土の層厚は12cmを測る。これに隣接するS F22・23は長径100cmで、5層を欠いた2層の焼土の中に1層の硬い焼土があり、層厚は13cm・18cmと深い。S F19・26・27は長径50～75cmとやや狭く、周囲は暗褐色土に炭・焼土粒が混じった3層で、1・2層の範囲はより狭いものである。焼土厚も10cm以下と浅い。これらの焼土址は、II L12から出土した坩堝の破片が示すように、鍛冶炉の炉床の残存部と考えられ、S F25などが比較的遺存状態の良好なもの、S F19などはこれがやや削平されたもの、S F21などはさらに削平された痕跡的なものと見られる。焼土址群に直接伴う遺物はなく、鉄滓も出土しなかった。しかしII L区西半分からは後述のように中世遺物が比較的多く出土し、本址の時期決定の根拠となる。

⑤ その他の遺構 (第55図、P L11)

検出当初、性格がわからなかった遺構である。II L12・17に分布し、斜面部にあるS Q04～06はIII A層上面、平坦部にかかるS Q01～03はII B層上面の検出である。

S Q 0 1 (第55図、P L11) : 東西2.4m・南北2.0m以上の長方形を呈し、深さ3cm程度の掘り込みである。埋土には焼土址群の橙色焼土(1層)に近似する硬い焼土塊と木炭が多量に混じる。遺物には瀬戸美濃系陶器の志野丸皿、羽口の一部らしい焼土塊があり、隣接して内耳鍋破片が出土した。

S Q 0 2 (第55図、P L11) : 長径3.7m・短径0.7～1.7mの弧状の掘り込みで、深さは5cm前後を測る。埋土中にはS Q01同様に焼土と炭が多量に含まれ、特に形状をとどめた木炭が目立つ。西端の底面から2個のピットが検出され、S A03のP₁₀・P₁₁の南側延長上に位置するため、本址に切られたピット(P₁₂・P₁₃)と考えられる。遺物には瀬戸美濃系陶器丸皿・天目茶碗、羽口、鉄器がある。S A03のP₁₃の上部からも瀬戸美濃系陶器丸皿が出土し、本調査区は全調査区中で輸入・国産陶磁器の出土量が最も多い。また、S Q01・02出土の木炭の樹種はクリと同定された(付章第2節参照)。

S Q 0 6 (第55図) : 0.7×1.7m・深さ8cmの楕円形を呈する。埋土はII B層を基調とし、少量の炭が混じる。坩堝の破片があり、隣接して内耳鍋破片も出土した。

SQ03～05は規模が異なるが、SQ06と同じ炭化物混じりの埋土をもつ浅い土坑である。

SQ01～06は、埴埦・羽口の出土や焼土址群の存在から、鍛冶あるいは鋳物の廃棄場所と考えられる。これらの遺構が鍛冶工房とすれば露天で作業を行うはずがないから、SA03およびSKを付した小ピットは上屋を支える柱穴と考えられる。

ST04・SB10と一連の鍛冶関係遺構との確実な共存を示す根拠は提示できず、SQ02とSA03のP₁₂・P₁₃が切り合うなど、若干の時期差もうかがえる。しかし本地区から出土した陶器はすべて大窯製品で、年代は16世紀半ばごろのきわめて限定された時期であり、SQを付した廃棄場からの煮炊具の食器の出土から、工房を営んだ職人の日常生活の場が隣接していたと考えるのが妥当であろう。なお、II L区から鉄滓がまったく出土しなかったため精錬工程を伴った可能性は薄く、鉄鋳を素材としていたものと推定される。

(3) IIM・Q・R区中世遺構群 (第56～59図、PL12)

IIM16・17・21・22、Q05・10、R01・02・06区に分布する。調査区の中では遺物包含層II層の下段分布域に当たる平坦面である。本地区の中世遺構の埋土はII B層に近似し、土色差は不明瞭なものが多かった。用地界にかかっており、地形や表面採集の結果から用地外に遺構が広がることは確実である。採石敷きの仮設道路が通じていたため、遺構の遺存状態は良くなかった。

① 掘立柱建物址

ST02 (第58図) : 2間(1.7m)×1間(1.2m)の東西棟の建物址と思われる。直径40～50cmの円形柱穴5個からなり、深さは10～15cmで柱痕は認められなかった。やや小さいP₂に対応する柱穴は検出できなかった。中心に大きな扁平礫があり、P₃・P₅の中間の、柱穴検出面よりわずかに低いレベルから銭貨8点が集中して出土した。内訳は皇宋通寶・嘉祐元寶・元祐通寶・紹聖元寶・宣和通寶・永樂通寶・鑄写鏹で銭文不読のもの・摩滅の著しいもの各1点である。

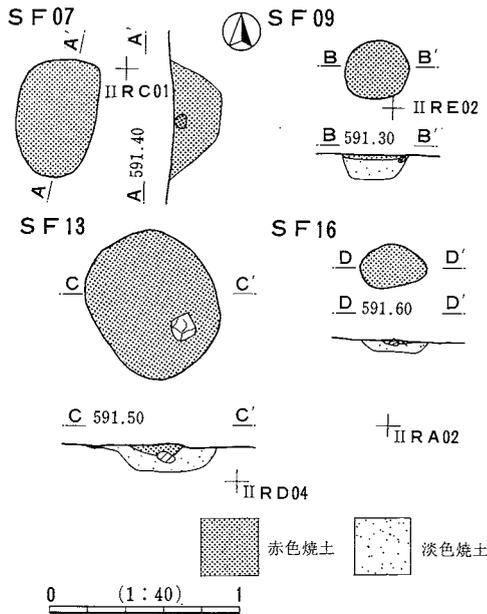
ST03 (第56図、PL12) : 当初はIIIA層上面で検出した暗褐色土のピット群P₁・P₂・P₄・P₅・P₇・P₈を建物址と考えたが、図面上で柱筋の通るP₃・P₆・P₉を含めた。黒色土中の検出は困難で、検出面に高低差がある。2間(4.2m)×2間(4.0m)の総柱と思われるが、柱筋の通りはよくない。遺物は伴わず柱穴埋土は中世以前の遺構と共通するが、古代の掘立柱建物址が調査区内で確認されていないこと、中世遺構群の一角に位置することから中世としたが、疑問の余地は残る。

② 焼土址 (第56・57図、PL12)

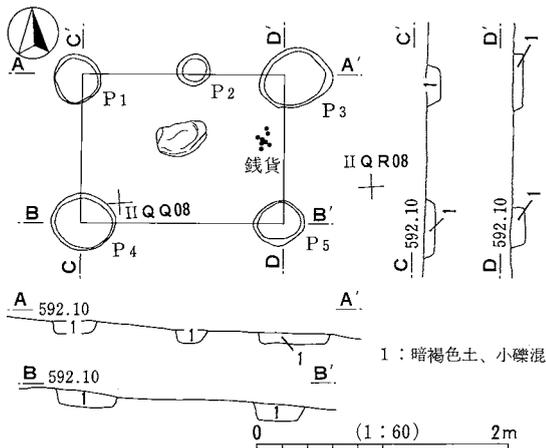
SF02～17・48 : 17カ所がII B層下部で検出された。このうち比較的遺存状態の良かったSF13は、長径74cmの円形の淡色焼土の中央部に暗赤色の焼土がレンズ状にのり、下部はより淡色の焼土となっている。焼土厚は14cmを測る。他の焼土址も上面が比較的赤く、下部は淡色で、焼土厚の最も厚いSF07からごく薄いものまで見られる。遺物はSF10とII R06から羽口が出土し、これらの焼土址群はII L区と同じ鍛冶炉と考えられるが、削平のためきわめて痕跡的である。鉄滓は出土していない。このほか焼土址に直接伴わないものの、分布域内からは土器皿と銭貨の出土が目立った。

③ 井戸址

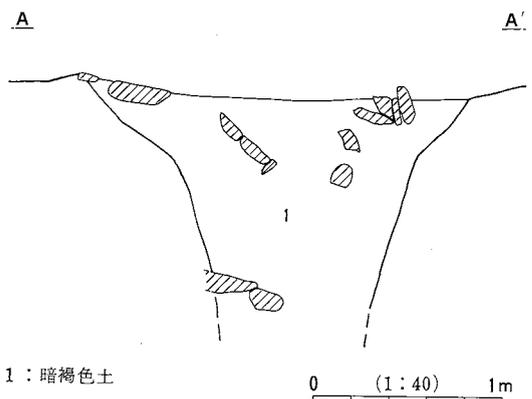
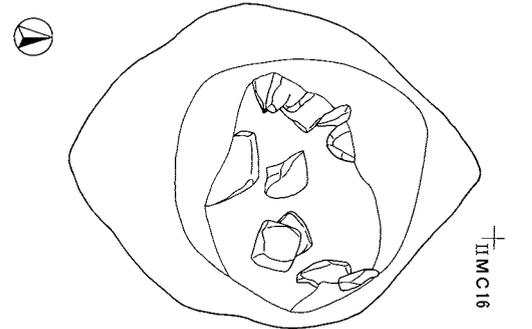
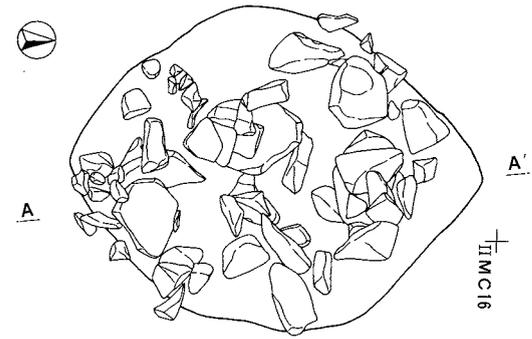
SK151 (第59図、PL12) : ST03の西側に隣接する。暗褐色のII B層上面で検出した。開口部は長径2.2mの楕円形、底面付近は直径0.8mの円形となり、壁面は下部ほど垂直に近いラッパ状を呈する。埋土はII A層またはII B層に近似し、多量の大礫を交え、検出面では集石状を呈していた。検出面下約1.4mで湧水があり、規模・形態から井戸と判断され、廃棄時に礫が投棄されたものであろう。遺物は伴わない。



第57図 SF07・09・13・16実測図



第58図 ST02実測図



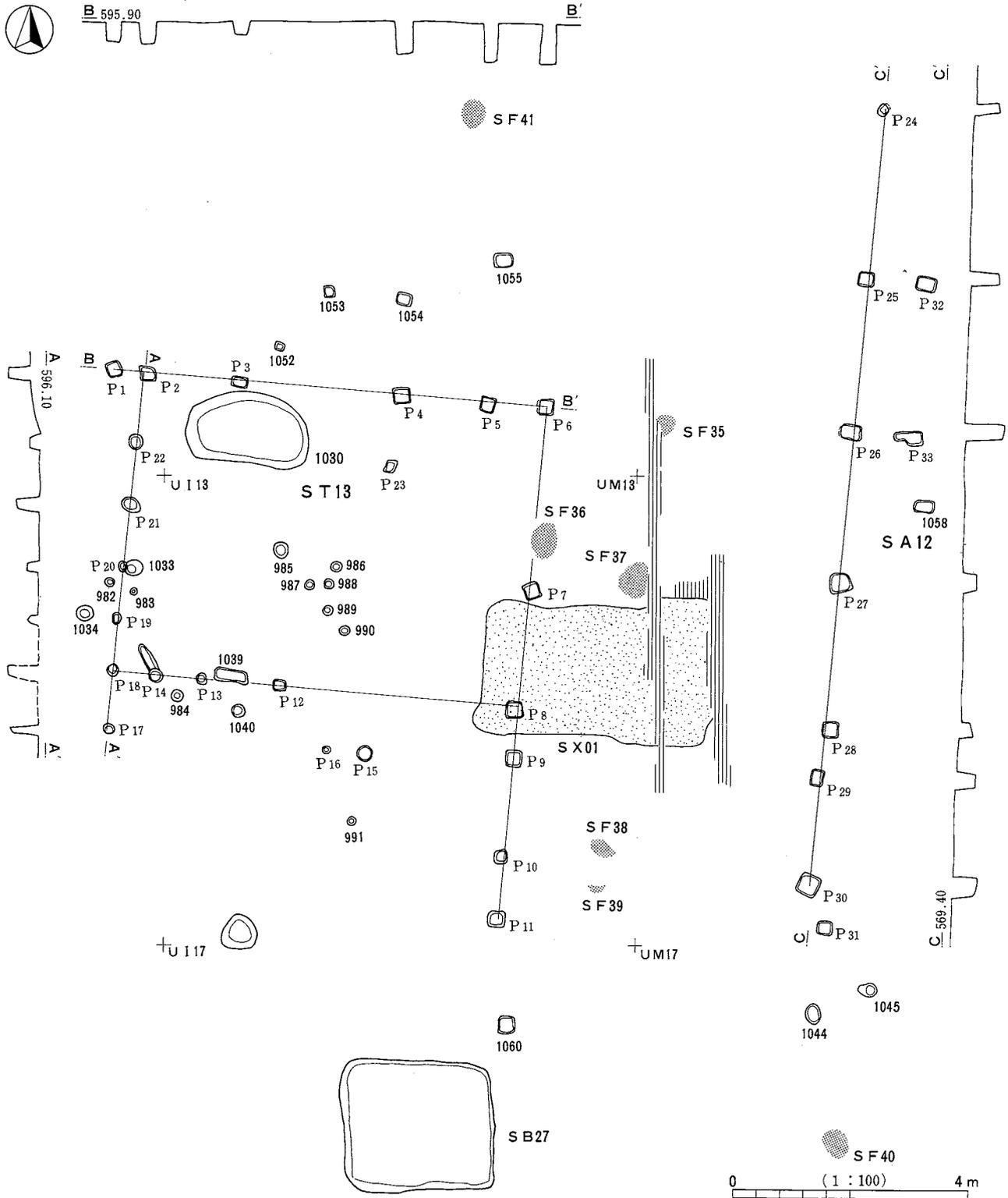
第59図 SK151実測図

なお、本遺跡の地山をなすのは段丘堆積物のIII層であるが、地表下約3mで厚い砂岩層となり、不透水層をなしている。工事の法面でも砂岩層上面からの湧水が観察された。

本地区でもII L区同様の鍛冶炉を検出したが、付属する建物や廃棄場は明らかにならなかった。検出の困難さと後世の攪乱が原因であろうが、東側の調査区外に存在する可能性もある。一方、本地区は中世遺物の分布密度は最も高く、内耳鍋・土器皿が多出した反面、国産・輸入陶磁器はII L区をかなり下回る。また、銭貨は本地区に集中し、特に目立った遺構を検出できなかったII Q05・10に多い点は注目される。

(4) II U区中世遺構群 (第60~62図、P L12)

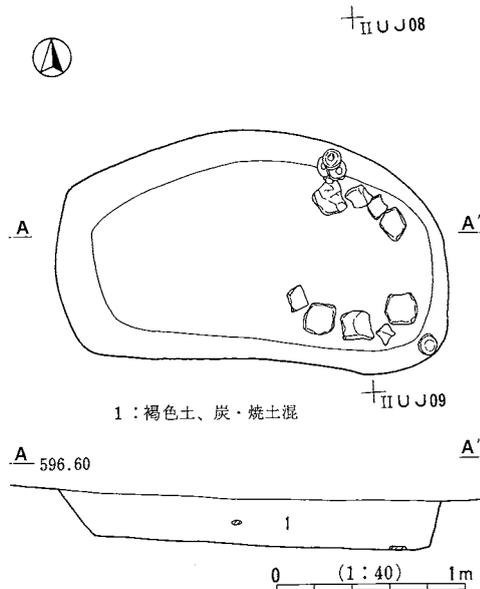
II U区はわずかに東に傾斜した平坦面で、第60図の遺構検出面は西側がII B・C層、東側はII層下部~III A層上面である。中世とした遺構は約10cmレベル差のある2面の検出によって確認されたが、異常な乾燥という悪条件のため、本来第1面にあるピットが第2面で検出されたものも当然あると思われ、図面上で整合するピットを一連の遺構として整理した。第1面検出の遺構はS T13のP₁₂~P₂₁、S K987~992・1030・1034・1039・1040・1044・1045、S F35~39、S X01、S B27、第2面はその他である。



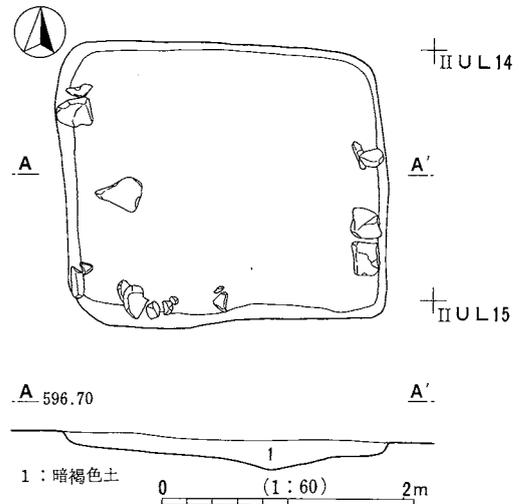
第60図 II U区中世遺構群実測図

① 掘立柱建物址

ST13・SA12 (第60図、PL12) : 当初、東西のピット列P₁~P₆と、南北列のP₇~P₁₁を柵址と考えた。またSKを付したP₁₇~P₂₂の円形ピット列も同じ軸を通り、対応する位置にあるため、これらを1棟の建物址とした。いずれも柱筋はよく通り、東西はP₂~P₆の4間(6.8m)、南北はP₆~P₉の3間(6.0m)、主軸N85°Eの東西棟と推定される。柱間寸法は0.9~2.8mまで長短があり、南側に廂



第61図 SK1030実測図



第62図 SB27実測図

がつく可能性がある。柱穴は、 $P_1 \sim P_{13}$ が長径20~30cm・深さ30~60cmの方形、これ以外は直径20cm程度の円形で、検出が2面にわたる $P_{17} \sim P_{22}$ は深さがふざろいである。内側の柱穴は P_{23} が方形のほか、柱筋が通らないためSKを付した円形のピットである。外側にあるSK1052~1055・1060も方形ピットで、埋土も共通のため本址に付属する可能性が高い。

② 柵 址

SA12 (第60図、PL12) : ST13の柱穴 $P_6 \sim P_{11}$ の5.3m東側に並列し、軸は $N5^\circ E$ を通る。すべて方形柱穴で、長径20~35cm・深さ20~60cmを測る。 $P_1 \sim P_7$ は一直線上に並び、13.3mにわたる。隣接する $P_8 \sim P_{11}$ も一連の柱穴と考えられる。ST13と同じ軸をとおり、 $P_3 \sim P_7$ がきわめてよく対応するため、本址までST13に含めた1棟の建物址となる可能性もある。ただし、この間5mに柱穴が見られないことや、 $P_1 \cdot P_2$ が対応しないため、建物に付属する柵址と考えた。

③ 焼土址 (第60図)

ST13とSA12の間にSF35~39、これらから南北にそれぞれ約5m離れてSF40・41がある。いずれも長径40~60cmの楕円形を呈し、深さ数cmまで赤化している。検出面・分布範囲から建物址・柵址と一連の遺構と考えられる。

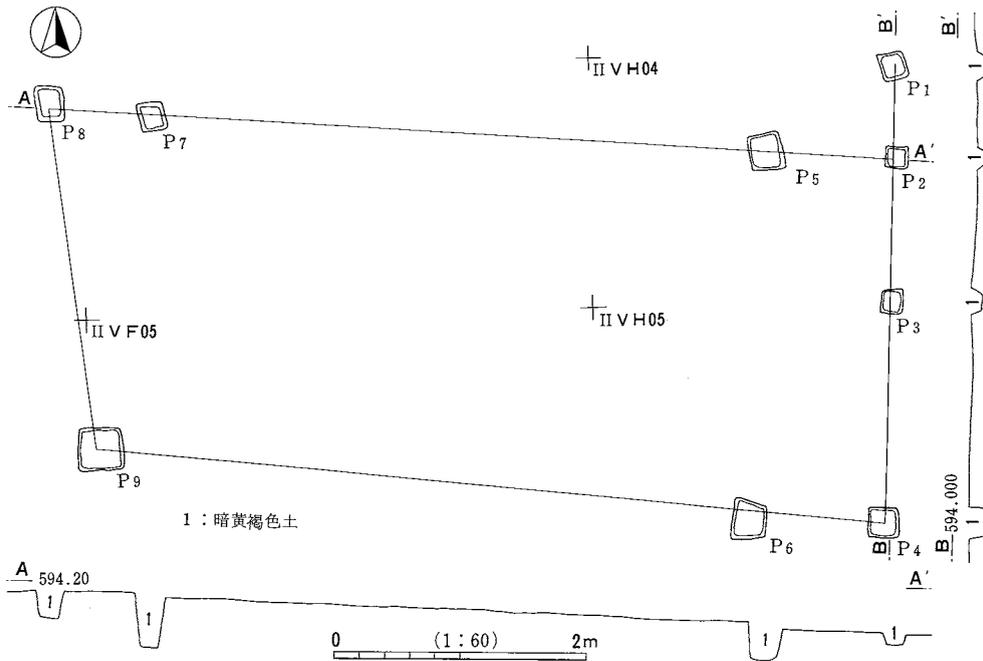
④ 土 坑

SK1030 (第61図、PL12) : ST13の P_3 の南に隣接する。東西に長軸をとる 2.06×1.22 mの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。埋土は褐色土の単層で、ごく少量の焼土・炭を含むが、本址で火を焚いた痕跡は認められない。東壁は垂直に近く立ち上がり、ほかは緩やかである。東側の底面には、壁に沿って8個の扁平礫が並べてある。北壁下には完形の瀬戸美濃系陶器丸皿11枚が下向きに重なっていた。南東隅からは灰釉陶器長頸壺の底部が出土した(第142図)。

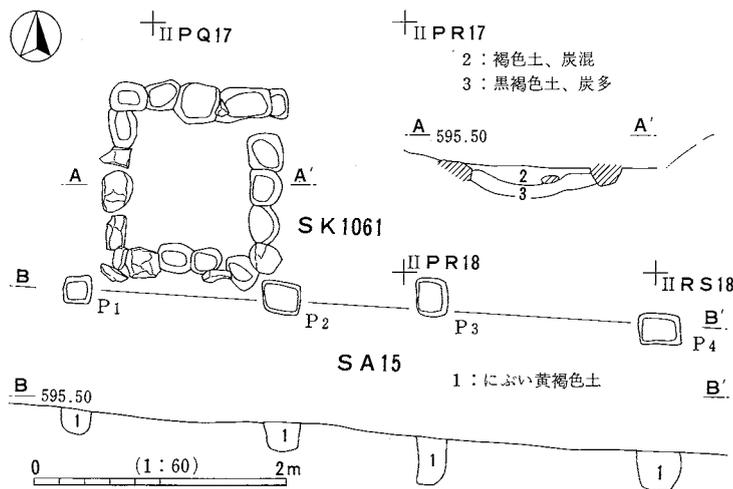
⑤ 竪穴状遺構

SX01 (第60図) : SF36・37の南側に隣接し、ST13の P_8 を被覆していた。東西3.7m・南北2.2mの長方形部分に焼土粒・炭粒が薄く分布し、掘り込みや柱穴は見られない。遺物はない。

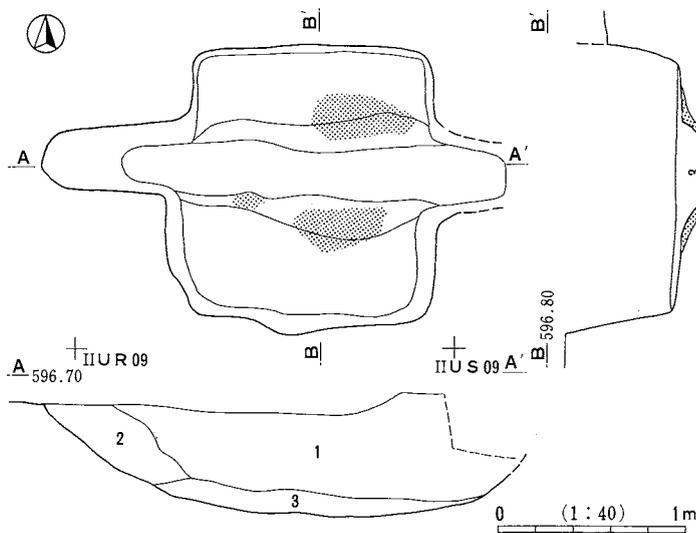
SB27 (第62図) : ST13の南側にあり、埋土は暗褐色土の単層である。東西2.39m・南北2.09mの方形を呈し、中央部は深さ25cmを測るが周囲ほど浅く、壁は緩く立ち上がる。壁際に大礫が見られるが、



第63図 ST09実測図



第64図 SA15・SK1060実測図



1：にぶい黄褐色土、砂・炭混 2：暗褐色土 3：焼土・炭・骨粉

第65図 SK1048実測図

施設や遺物はない。

前述のとおり、これらの遺構群は2面にわたって検出されたため、詳細な共時性の検討は難しい。しかし遺構群が局部的に集中することや、ST13に付属する可能性が高いものが多いため、短時期の一連の遺構群と推定してよからう。SK1030を除けば本地区から遺物はほとんど出土しなかった。SK1030はST13の屋内の土坑と考えられ、瀬戸美濃系陶器丸皿はIIL区のSQ01出土と同時期の大窯製品で、遺構群の年代の唯一の根拠となる。焼土址群は、SA12が柵とすれば露天、ST13の東壁をなすとすれば屋内に位置することとなる。これらがIIL区の焼土址群と同様なものなら、SX01はSQ01などと同じ廃棄場の可能性がある。

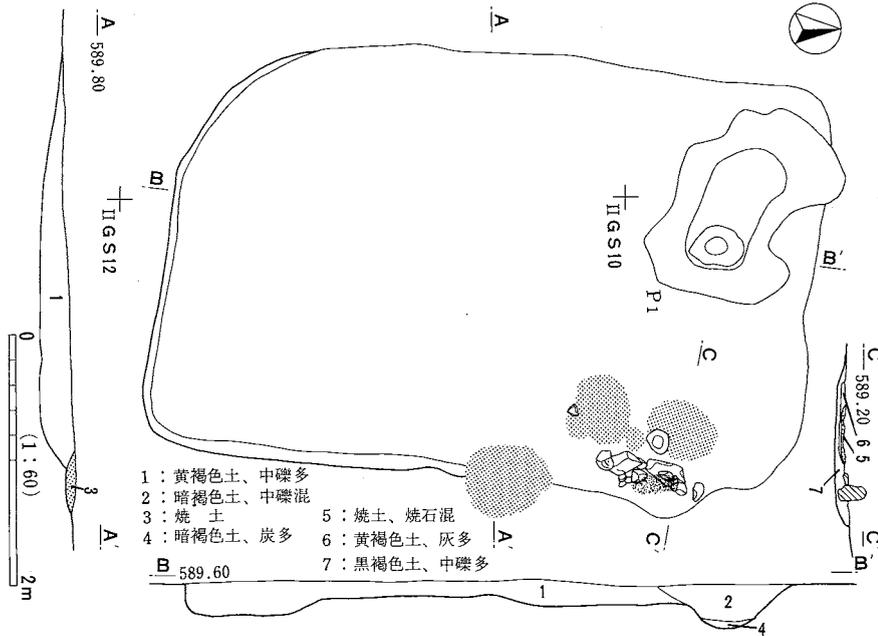
(5) その他の遺構

① 掘立柱建物址

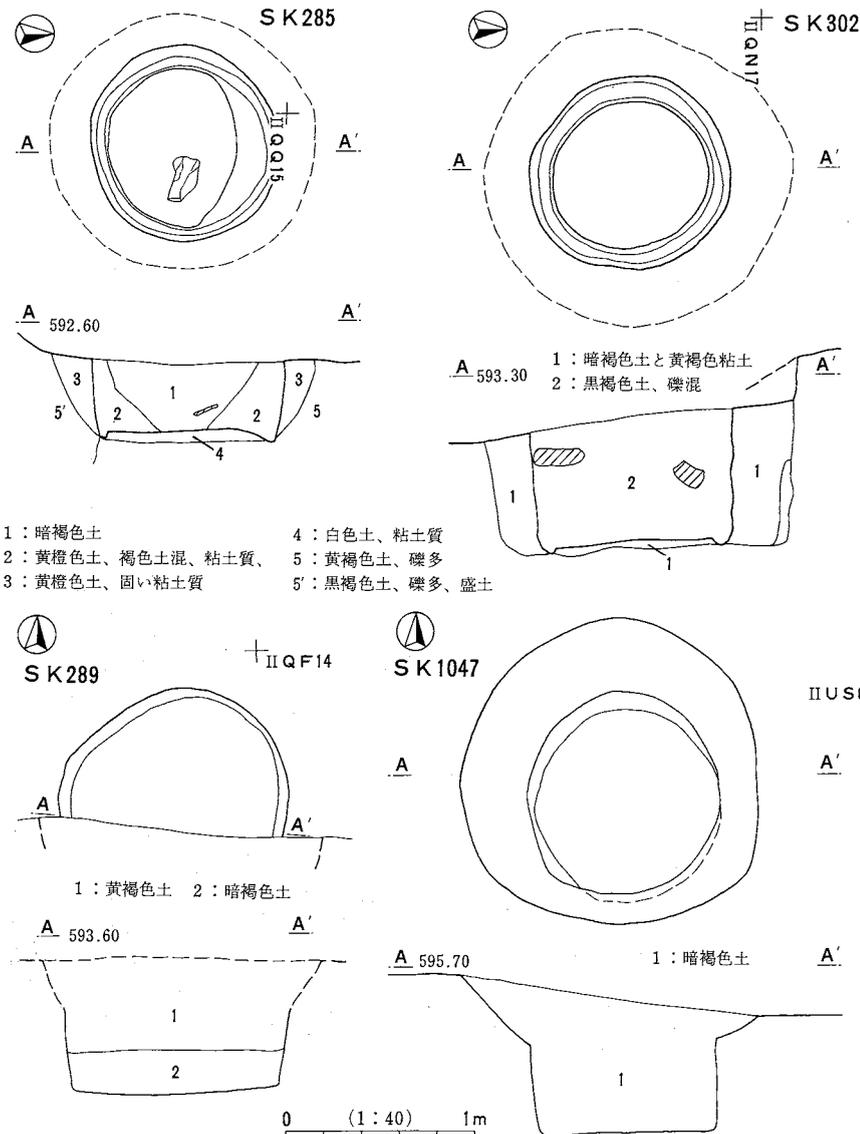
ST09 (第63図) : II V 02・03・07・08にある。小グリッド掘り下げの際、II B層中で黄褐色土のピットを検出し、図面上で1棟に整理した。長径20~30cm・深さ10~30cmの方形柱穴9個からなり、2間(6.24m) × 2間(2.92m)の東西棟と推定される。1間の寸法が長いP₅~P₇・P₆~P₉の間は検出できなかった可能性がある。東西軸はN85°Wを通り、ST13と同じ。本址の南にST08、南東にST07があるが、やや不規則な配置で、円形柱穴である。

② 柵址

SA15 (第64図、PL13) : IIP24・25にあり、IIIA層上面で検出した。長径20~30cm・深さ20~35cmを測る東西4個(4.64m)の方形柱穴からなる。埋土はIIA層を基調とし、柱痕は認められなかった。本址の北側、P₁・P₂の間にSK1061がある。IIIA層を掘り込んだ1.0m四方、深さ約30cmの方形土坑の縁に、人頭大の礫約20個を埋め込んで囲むが、地表下30cmたらずのため、表土剥ぎの際に礫の大部分を除去してしまった。埋土は2分層でき、上層(2層)は少量の炭化物を含み、下層(3層)は径1.0cm大の小斑状に多量の炭化物を含んでいる。2層上面から瀬戸美濃系



第66図 SB01実測図



第67図 SK285・289・302・1047実測図

陶器の鉄釉丸皿が出土し、17世紀前半の所産である。

③ 火葬施設

SK1048 (第65図、PL13) : II U10にあり、II B層上面から掘り込まれ、SB28の南東隅を切っている。東西1.44m・南北1.52mを測る方形の燃烧部の東西に突出部があり、この全長は東側が攪乱を受けているものの2.44mを測る。突出部は約35度の傾斜で立ち上がる。燃烧部は垂直に掘り込まれ、深さ60cmで平坦面を作り、突出部を結ぶ中央部はさらに溝状に掘り込まれている。壁面は赤化し、溝状部はレンガ状に焼けている。溝状部から平坦面上には骨片を含む灰層(3層)があり、II A・B層基調の1・2層が堆積している。骨片は細片約100個で、鑑定の結果、800~900度で火葬された成人1体分のごく一部である(付章第3節参照)。このほか、3層中から焼けた銭貨4点の残欠が出土した。

④ 家屋址

SB01 (第66図、PL13) : II G15にあり、III A層上面で検出された。南北5.15m・東西3.3mの黄褐色土が見られるが、竪穴状の構造ではなく、土間の貼床のようである。北東隅に炭と3カ所の焼土があり、赤化した砂岩の石組みを伴う。北西隅には不整形の掘り込みがある。遺物は焼土部分から西条焼と思われる鉢が出土し、近世末ごろの家屋の一部と思われる。

⑤ 野溜め (第67図、PL13)

SK285 (II Q20) ・ **289** (II Q17) ・ **302** (II Q24) ・ **1047** (II U10) : 4基がある。SK285・289・302は遺跡中央部を東西に横切る農道に接し、SK1047はこれから南に分かれた道に接している。検出面はII層上面であるが、上部は削平されている。SK1047はIII A層を掘り込んだ直径90cmの円筒形の穴で、上部はラップ状に開いている。SK289は底径135cmとやや大きいのが、同じ構造である。SK302はIII B層を掘り込み、直径162cmの掘り方に黄褐色土(1層)を貼っている。この内法は162cmを測り、平坦な底面の周囲がわずかに深く、桶の痕跡であろう。SK285も同じ構造である。遺物はSK1047から近世末期の染付磁器が出土した。4基とも規模・形態は共通し、農道に接しているが、粘土を貼るか否かは掘り込んだ地山が礫層か砂層かの違いによるものであろう。



向六工遺跡の現況(高速バス坂北停留所)

第4節 遺物

1 縄文時代の遺物

(1) 土器

①土器分類の概要

今回の調査で出土した縄文土器には、早期末葉を主体に、押型文土器から後期前半までがあり、次のように分類した。

第I群 押型文系土器

第II群 条痕文系土器群

第1類 絡条体圧痕文が施される土器

第2類 条痕文が施される土器

第3類 縄文が施される土器

第4類 無文の土器

第5類 東海系土器

第6類 その他の土器(刺突文・沈線文・側面圧痕文・捺糸文)

第III群 中期の土器

第1類 五領ヶ台式並行期の土器

第2類 加曾利EⅢ・Ⅳ式土器

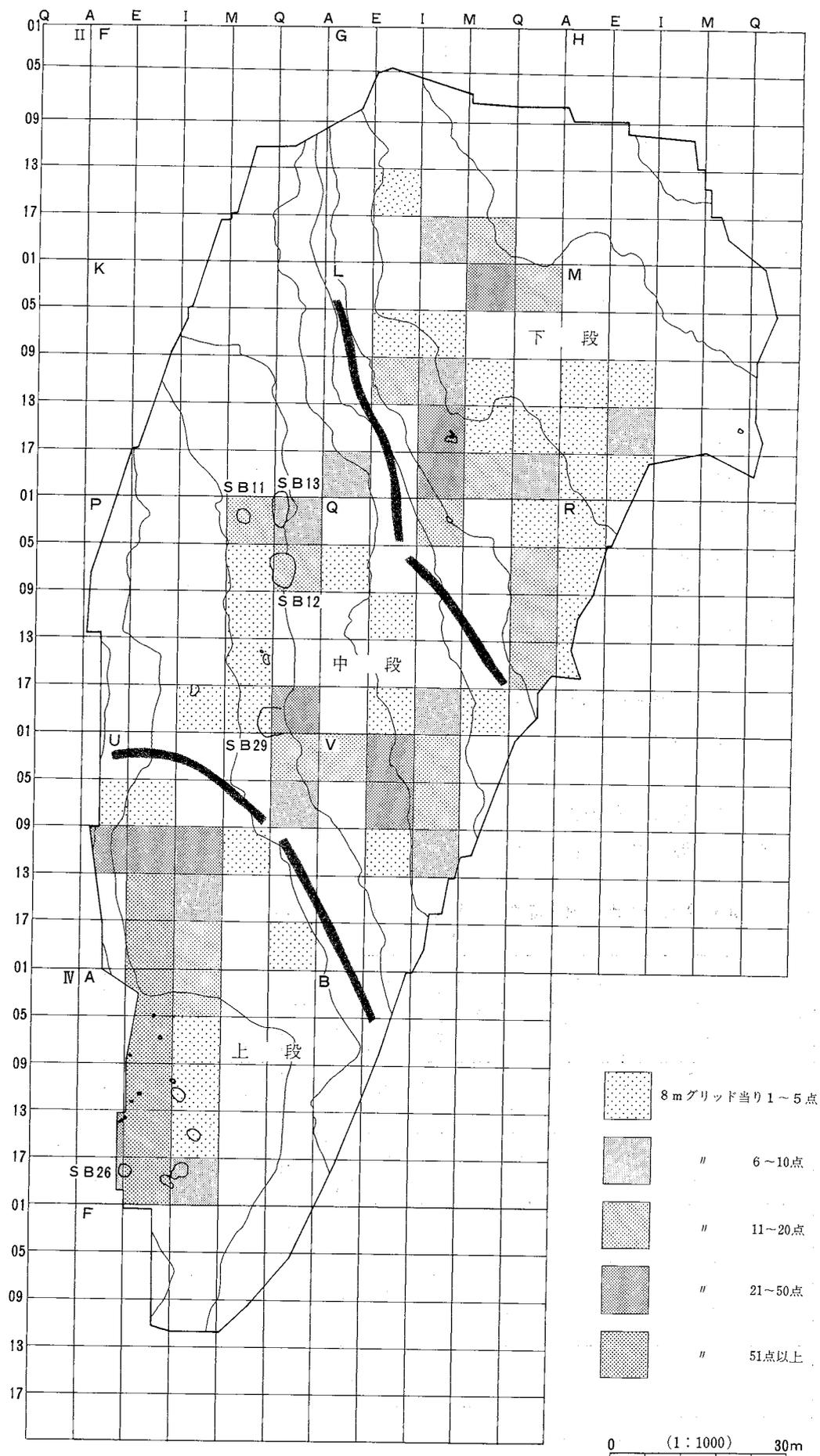
第IV群 後期の土器

第1類 称名寺式土器

第2類 堀之内1・2式土器

第5表 地区別縄文土器出土点数一覧表 条痕文のうち、内・外面一方が剥落して両面条痕文と判別不可能の資料を含む場合*を付した

分類	I群 押型文	II群 条痕文系												III群 中期	IV群 後期	III・IV群小計	備考 (遺構)							
		1 絡条体圧痕文		2 条痕文				3 縄文			4 無文	5 東海系	6 その他					無織維不詳	含織維不詳	II群小計	1 五領ヶ台式	2 加曾利EⅢ・Ⅳ式	1 称名寺式	2 堀之内1・2式
		内外面	外面	内面	小計	外面縄文	内面条痕	小計																
II G		1	4	*8	*13	25							2	3	31		4			7	11			
II L		7	39	*10	*23	72	1		1	1			17	77	175	7	17	1	4	29				
II M		2	6		*5	11								3	5	21		1			1			
II Q		6	15	*6	*6	27	3		3	1			1		27	65		1			1	S K330を含む		
II R			3	1	1	5									1	6		4			1	5		
下段小計		16	67	25	48	140	4		4	2			1	22	113	298	7	27	1	12	47	計345点		
II L		1													7	8								
II P		1	6	5	*7	18		1	1	3				1	42	66					1	1	S B11・12・13・29を含む	
II Q			1	2	*3	6									6	12								
II U		3	3	*2	1	6				2				2	15	28								
II V		6	12	*11	*15	38	10	3	13	1			6	57	121	2	1	24			27			
中段小計		11	22	20	26	68	10	4	14	6			9	127	235	2	1	24	1	28	計263点			
II U		28	57	*51	*22	130	8	12	20	6	5	3	3	123	318		1	1	2	4				
IVA	7	110	131	96	43	270	31	45	76	57	7	5	1	183	709					1	1	S B26・S H・S Fを含む		
上段小計	7	138	188	147	65	400	39	57	96	63	12	8	4	306	1027		1	1	3	5	計1039点			
表面採集			2		*1	3	1		1					1	6					1	1	計7点		
合計	7	165	279	192	140	611	54	61	115	71	12	10	35	547	1566	9	29	26	17	81	総計1654点			



第68図 縄文早期土器分布図

以上のうち、出土土器の約95%を占める第II群土器については、第2・3類を外側・内側施文の別に分類した。また、第6類にはごく少数出土した数種の土器を便宜的にまとめたが、これ自体が類をなすものではない。胎土・焼成の状態などから第II類に属すると思われるが、摩滅や細破片のため分類不可能な資料については繊維の有無を観察し、「無繊維不詳」・「含繊維不詳」とした。

②土器の分布と出土量

上記の分類にしたがって集計したのが第5表である。集計は大小にかかわらず破片を1点とし、同一個体の場合も破片数で示した。また、遺構出土土器は、その遺構の位置する中地区(8mグリッド)に含めた。この方法で調査区内の土器の出土量を示したのが第68・69・70図である。第2節2において基本土層について述べた際、遺物包含層II層が等高線に平行して上・中・下3段にわたって帯状に分布していることにもふれた。調査区全体の第I・II群土器、すなわち、縄文早期の土器分布を示した第68図はこのことを明瞭に表している。第5表は、北東から南西へ3段の分布帯に分けて大地区(40mグリッド)名で土器の出土点数を示したが、例えばIIQ地区の場合北東側が下段分布帯、南西側が中段分布帯に含まれ、この間に土器が出土しなかった中地区が介在する。以下に各々の分布帯に含まれる中地区名と遺構をまとめておく。

下段分布帯 II G17・19～21・23～25、L01・03～05・07・08・12～15・18～20・23～25、M11・12・16・17・21・22、Q03(S K330)・05・10・15・20、R01・06・11・16

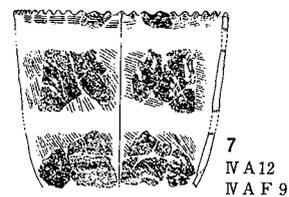
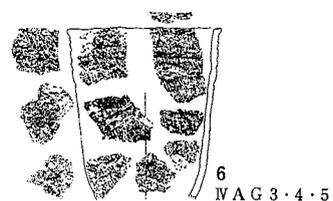
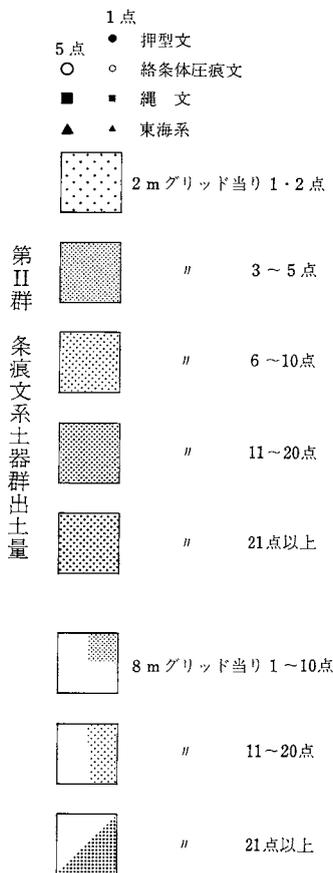
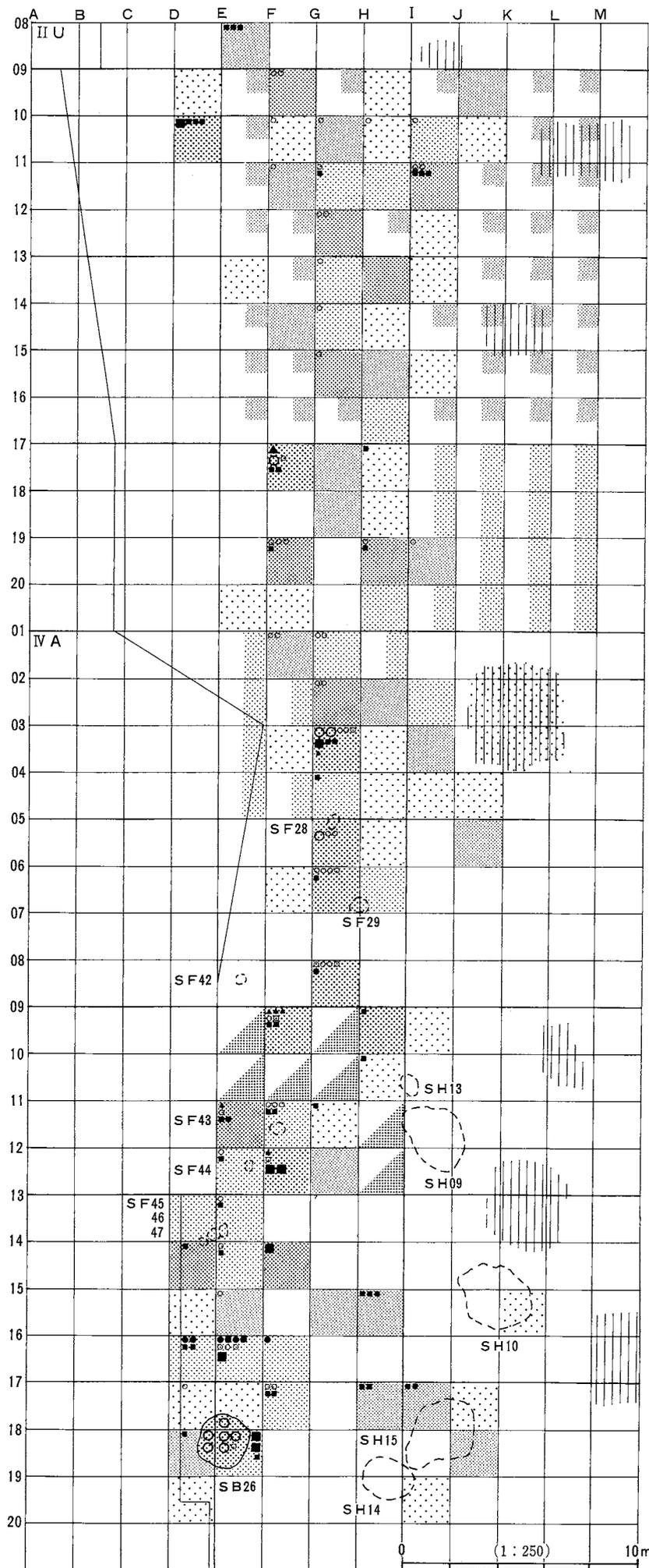
中段分布帯 II L21、P04(S B11)・05(S B13)・09・10(S B12)・14・19・23・24(S B29)・25、Q06・12・22～24、U05・09・10・14・25、V01～03・07・08・12・13

上段分布帯 II U06・07・11～13・17～19(S K1062)・22・23、IVA02・03・07(S F28・29・42)・08・12(S F43・44)・13(S H09・13)・16(S F45～47)～18(S H10)・21・22(S B26・S H14)・23(S H15)

調査区全体からの土器の出土量は1,654点を数え、分布帯別の出土量は下段が345点(20.9%)、中段が263点(15.9%)、上段が1,039点(62.8%)、表面採集7点(0.4%)である。時期別の出土量は第I群7点(0.4%)、第II群1,566点(94.7%)、第III群38点(2.3%)、第IV群43点(2.6%)で、第II群の占有率が圧倒的である。分布の特徴としては、第I群は上段、第III群第2類と第IV群第2類は下段、第IV群第1類は中段に多い傾向が見られ、これらの少数出土土器も子細に見れば特定の中地区に集中している(第70図)。これらの土器は第II群とは出土量とともに時期の開きが大きいいため、遺跡全体が縄文早期末葉の単純相と見られる。また、全体の60%以上を占める上段は第II群が98.8%を占め、早期末葉の中で時間幅をもつものの、調査区全体の中でも特に良好な資料群と認められる(第69図)。ただし、いずれの地区でも層位的に時期を分離できる出土状態ではなかった。

③第II群土器の分布

第3節1で縄文時代の遺構について述べ、S B11・12・13・26の5軒の住居址とも第II群土器を伴ったことにふれた。このうち、上段にあり、厚い崖錐堆積に覆われたS B26からは第1類の完形個体や第3類の内側条痕文土器が出土し、隣接する小地区(2mグリッド)からの出土土器は少量のため、遺構一括資料と認めてよいものであろう。中段に分布するほかの住居址からは少量の細破片が出土したにすぎず、内外面に条痕文を施された第2類を主体に第1類が伴うらしいことを把握できたにとどまる。これらの住居址は現地表面から浅いレベルで検出されたため、耕作の影響を被っていることが予想され、隣接する中地

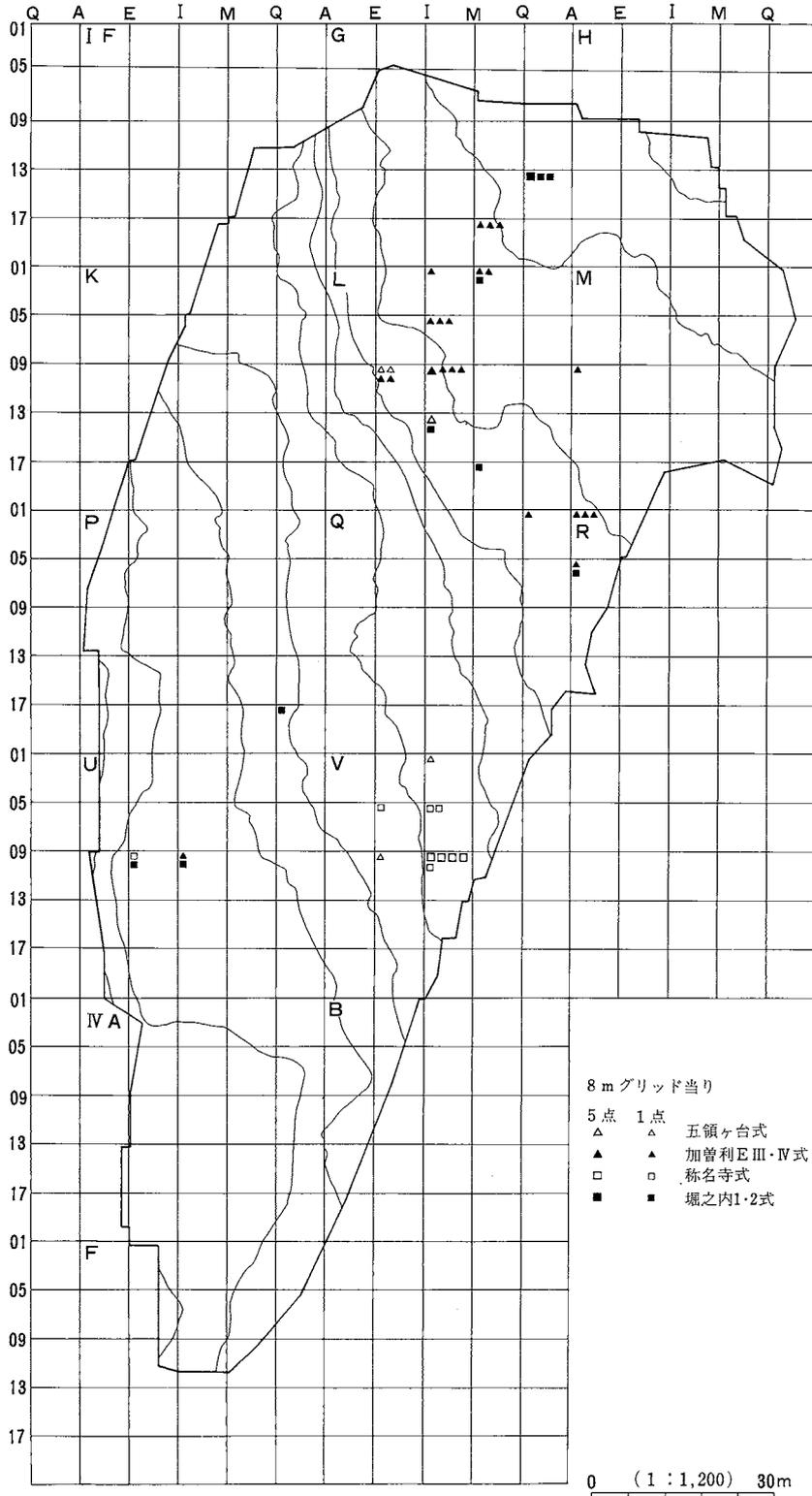


第69図 II U・IV A区縄文早期土器分布図

区からの出土土器もきわめて少なかった。

縄文時代に属する焼土址と集石はすべてIVA区西半部に分布するが、住居址S B 26以外は遺構が平面的な構造のため、伴出する遺物を特定できなかった。この地区から多量に出土した縄文早期土器の平面分布状態を表したのが第69図である。少量の第I群の押型文土器はIVAD・E・F16に集中している。第II群土器が最も濃密なのはIVA 2・7・12・17区で、焼土址の分布とほぼ重なっている反面、耕作の影響もあるのか集石の周囲は希薄である。図上復原した個体の分布は、第II群第1類の6と第5類の8がIVAG 3・4、第1類の2・5と第5類の7がIVAF 9周辺に集中していた。

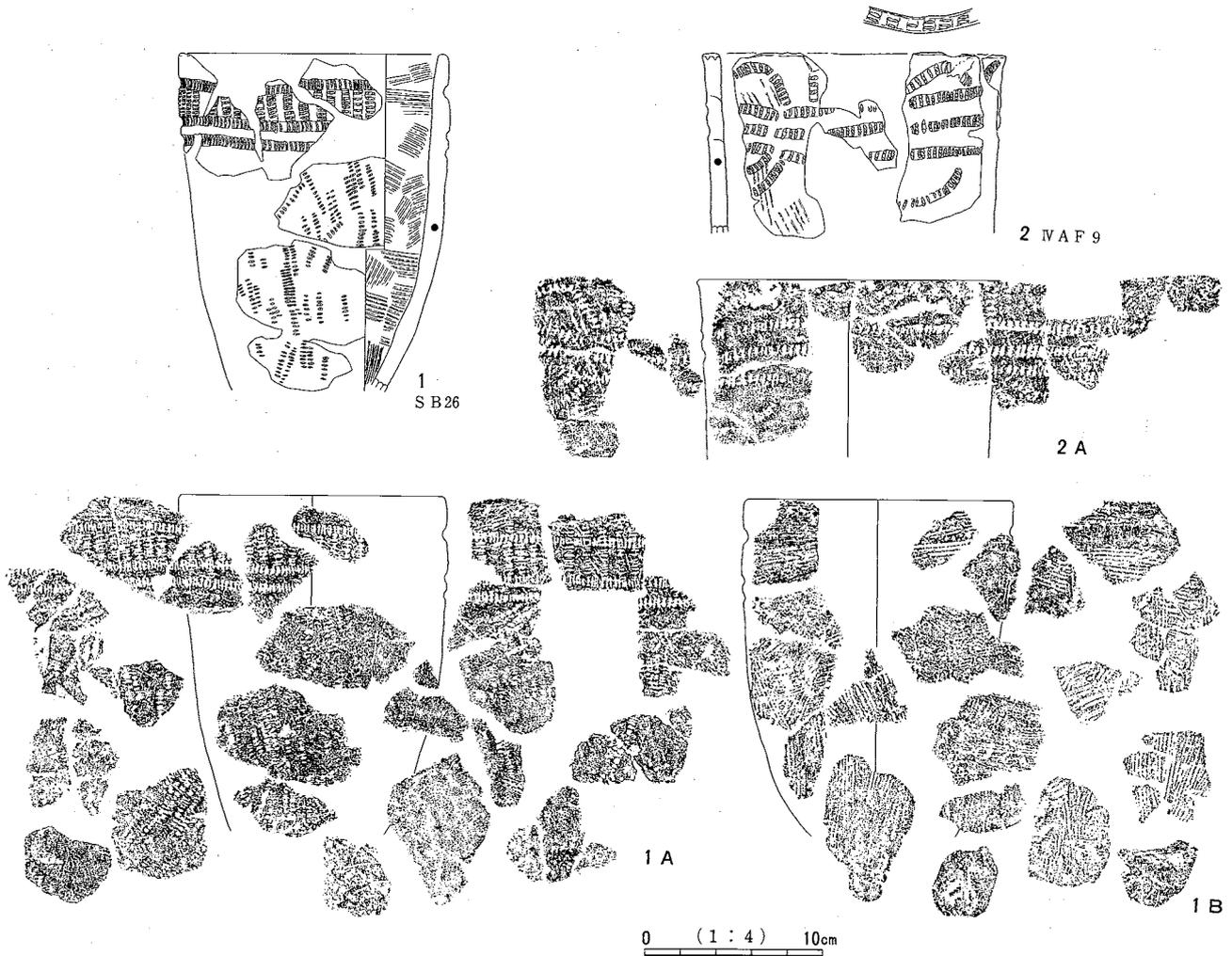
これに対して、IIU区はIVA区と連続した帯状の分布を示すものの、密度はやや低く図上復原できる程度の資料も認められない。また、遺物出土地区のIIIA層上面は浅いくぼ地を呈し、遺構は検出されなかった。このことから、IIU区はIVA区で生産活動を営んだ



第70図 縄文中・後期土器分布図

人々のゴミ捨て場のような空間と考えられる。

3カ所の分布帯における第II群第1～4類の比率は、下段が16：140：4：2、中段が11：68：14：6、上段が138：400：96：63となり、下段に比較して中・上段では第2類の条痕文土器に対する第3類の縄文土器の比率が著しく高いことがわかる。第4類の無文土器も同じ傾向を示す。また、第2類に対する第1類の比率も中・上段が高く、絡条体圧痕文の出現頻度に差が見いだせる。第5類の東海系土器は上段のみ確

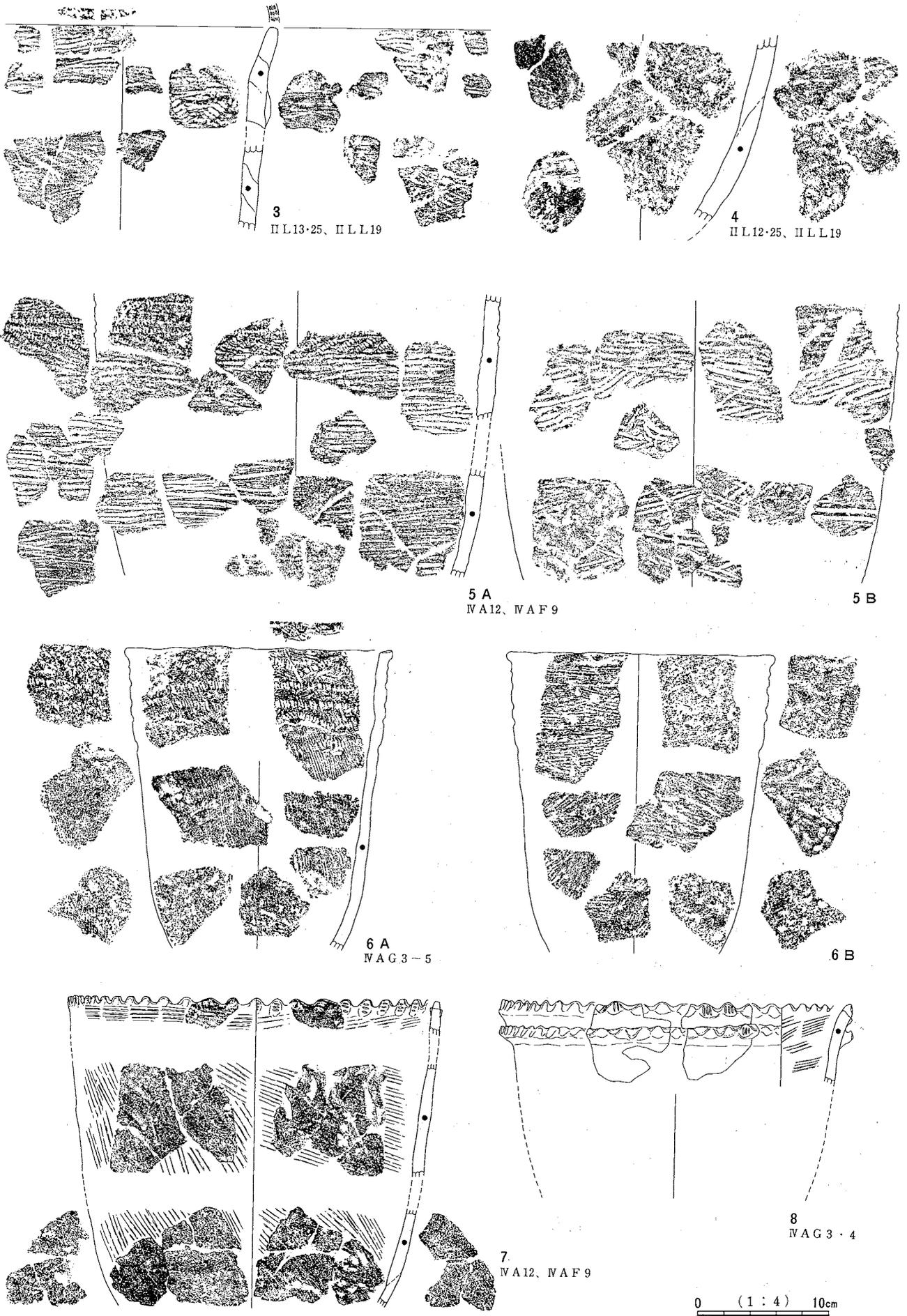


第71図 縄文土器実測・拓本図(1)

認できた。第2類の条痕文の施文部分が内外面・外面・内面のいずれかについて比較すると、下段が67：25：48、中段が22：20：26、上段が188：147：65となる。外面のみ・内面のみ施文の資料には他の面が観察不可能のものが含まれているため、内外面施文の比率は実際にはこれより高いものと思われる。さらに条痕文系土器の条痕文は一般に外面施文が卓越することを考慮して、内面のみ施文の資料を内外面施文に加えれば、下段は内外面施文の比率がかなり高く、これに比較して上段は外面のみ施文の比率が内外面施文により近いものと推定される。ここでは第5表から読み取れる特徴を指摘するにとどめ、絡条体圧痕文の文様意匠や条痕文の種類などの検討は、後に行うこととする。

挿図の順序は、最初に図上復原した資料をまとめ、次に遺構出土資料を置いた。遺物包含層出土資料は下段・中段・上段の順にまとめ、各々の分布帯の中は原則として分類の順に配列した。資料の説明は遺構、分布帯の順に行う。

なお、実測図・拓本図の縮尺については先に例言でふれたが、縄文土器の挿図中で用いた記号には、次のようなものがある。胎土中に繊維を含むものは、多少にかかわらず断面の中に「・」を入れた。内外面を採拓した拓本図は、断面の向かって左側に外面、右側に内面を表示し、内面が観察不可能の場合、断面図の向かって左側、外面が観察不可能の場合、右側に「△」を付けた。図上復原した資料は、外面の拓本



第72図 縄文土器実測・拓本図(2)

はA、内面の拓本はBを、番号の横に付けた。

④遺構出土の土器

SB11 (第73図9~12)

9は第II群第1類で、口唇部に絡条体を深く押圧している。外面に浅い条痕文が施される。10は第2類で、外面に斜位の細かい条痕文が残る。11・12は器面の剥落が著しい。

SB12 (第73図13~15)

15は第II群第1類で、外反する口縁部付近に条の細い絡条体圧痕文が横位に施文されている。14は第2類で、外面に貝殻と思われる縦位の条痕文が施される。13は第4類で、軽い擦痕状のナデが見られる。

SB13 (第73図16・17)

17は第II群第2類で外面に細かい条痕文が見られ、16は摩滅している。

SB29 (第73図18~25)

19は第1類で、わずかに絡条体圧痕文が見られる。18・20~23は第2類で、22・23は同一個体である。18は内外面、20は外面、21~23は内面に横位または斜位の条痕文がある。24は第4類で、内外面ともナデ調整、25は内面がナデ調整されている。

SB26 (第71図1、第73図26~34、PL14・15)

1・26・28は第II群第1類である。1は口径15cm・現存高20cmの砲弾形を呈し、丸みのある尖底となるらしい。口唇部は円頭状で、横位に深く押圧した絡条体圧痕文で口縁部文様帯の上下端を区画した後、この間を縦位に密に充填している。胴部には浅い押圧の絡条体圧痕文で、やや乱雑ながら縦長の菱形文を構成している。絡条体の原体には細い1段の条を用いている。内面は上半部には横位、それ以下には縦位の絡条体条痕が施されている。器壁はやや厚く、細かい砂と少なめの繊維を含み、鈍い黄褐色を呈する。26・28は口縁部破片である。26は角頭状の口唇部から斜位の絡条体圧痕文を施し、この下は横位にめぐららしい。28も口縁部文様帯の下端部と思われ、斜位の絡条体圧痕文が見られる。30~33は第2類で、33は内外面、そのほかは外面が摩滅して内面のみに細かい条痕文が施されている。27・29・34は第3類である。29は底部付近で、外面には縄文RLが施され、一部羽状となっている。器面が乾燥しないうちに施文したためか、やや不明瞭ながら、原体は多条縄文と思われる。内面には細かい条痕文が施される。27・34は多条縄文のLRで、内面に29と同様の条痕文が見られる。これらの第2・3類土器は橙褐色または暗褐色を呈し、胎土には比較的多く砂を含み、特に粗粒の石英が目立つ。

SK40 (第73図35)

第II群第2類で、外面に粗い条痕文が施され、内面には虫食い状の繊維痕が見られる。

SK330 (第73図36~39)

36・37は第II群第1類で、角頭状の口縁部に沿って横位の太い絡条体圧痕文が施される。36には隆帯が伴うらしく、内面には条痕文が見られる。38・39は第2類で、粗い条痕文が施される。4点とも砂を多く含み、37~39は粗粒の石英が目立つ。

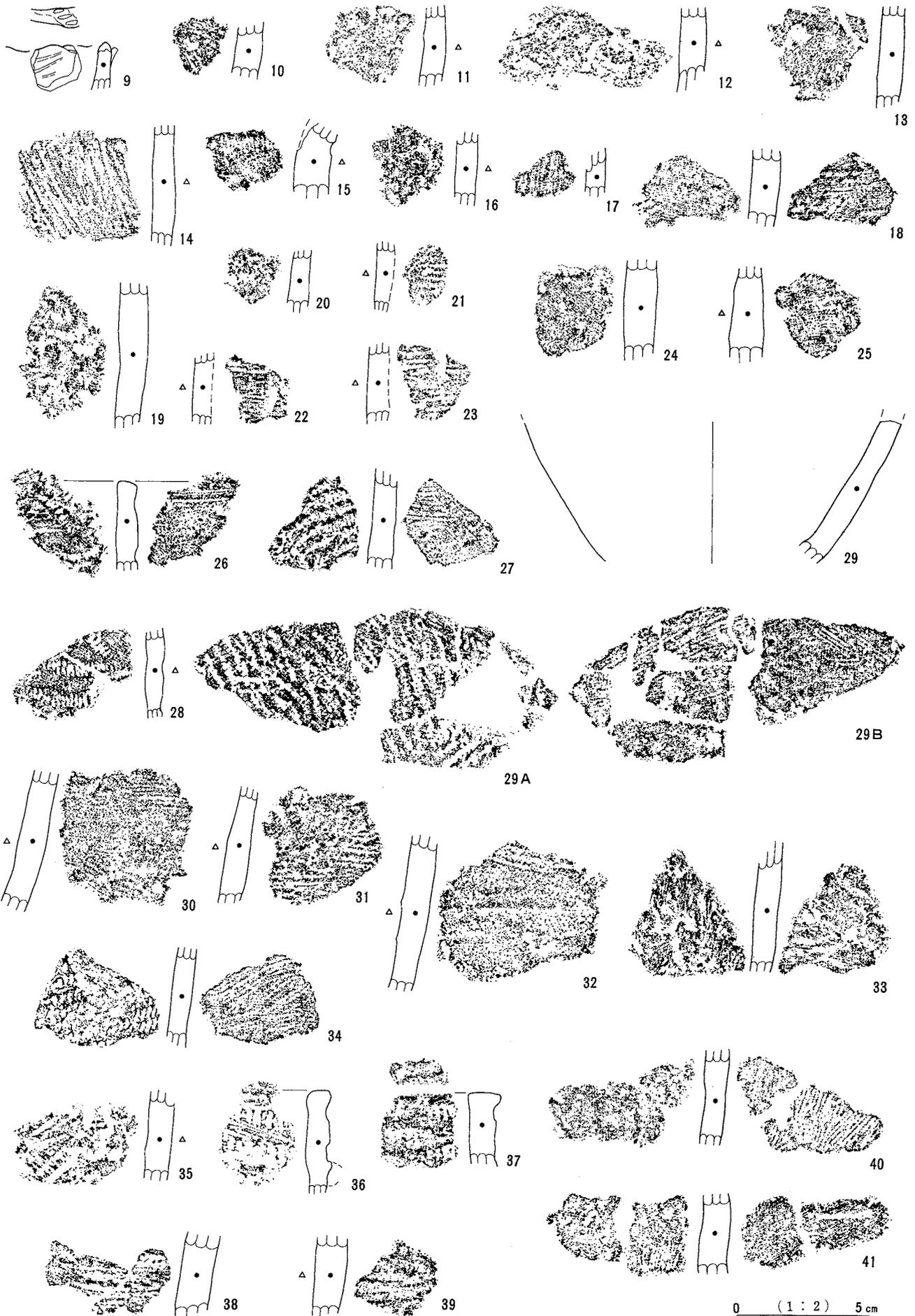
SF46 (第73図40・41)

同一個体らしく第II群第3類で、外面に縄文、内面に細かい条痕文が施されている。

⑤下段分布帯出土の土器

第II群 (第72・74・75図、PL14・16)

第1類 (第72図3、第74図42~50)



第73図 縄文土器拓本図(3)

(9 ~ 12 : S B 11、 13 ~ 15 : S B 12、 16 · 17 : S B 13、 18 ~ 25 : S B 29)

(26 ~ 34 : S B 26、 35 : S K 40、 36 ~ 39 : S K 330、 40 · 41 : S F 46)

3・42～45は隆帯をもつものである。3は器壁がきわめて厚い大形の土器で、口縁部はわずかに外反し、口唇端部に絡条体圧痕文が施される。幅広で低い隆帯が口縁部下にめぐり、隆帯上には交互に傾きを変えて強く押圧した、太い絡条体圧痕文が施されている。これより上は、内外面とも粗大な横位の条痕文が施され、胴部は条痕文が目立たない。42は高い隆帯がめぐり、この両わきに弧状の絡条体圧痕文が施される。隆帯より上には斜位の絡条体圧痕文が施され、内外面とも絡条体と思われる条痕文がある。43は比較的高い隆帯をもち、これを絡条体で縦位に深く刻む。内面には粗い条痕文がある。44の隆帯も同じように刻まれている。45は隆帯のわきに絡条体圧痕文が施される。46は鋸歯状に浅く施文される。47は縦位、48・50は横位に深く施文される。49は浅い横位密接施文である。これらは内外面に粗い条痕文が施され、暗褐色を呈している。

第2類 (第72図4・第74図53～61、第75図62～82)

4・53～63は内外面に条痕文が施されたもの、65～69は外面、64・70～82は内面に施されたものである。全体に器壁が厚く器面の調整が粗雑で、暗褐色または赤褐色を呈する。条痕文は粗いものが多く、貝殻条痕主体と思われるが、繊維の含有量が多くほとんどの器面が荒れているため不明瞭である。58～63・67などは絡条体条痕と思われる。外面の条痕文は横位または斜位に施されている。4は第1類の3と隣接したグリッドから出土し、器壁の厚い大形土器である。丸底に近い尖底と思われ、3と同一個体の可能性もあるが、色調が異なる。64は円頭状、67は角頭状の口唇部を呈し、54は口縁部が外反する。

第6類 (第74図51・52)

51は細い竹管状の施文具による刺突文が2列並ぶ。52は内外面に貝殻条痕文を施し、ヘラによる截痕状の刺突文がめぐっている。これより上は器壁が薄い。暗褐色を呈し、胎土には繊維が少なく白色砂粒が目立つ。

第III群 (第75図、P L16)

第1類 (第75図83～85)

85は波状口縁の波頂部で、2条の沈線が沿っている。時期比定には確信がもてないが、砂を多く含んだきわめて粗い胎土である。84は内湾した波頂部で、半截竹管内面による平行沈線で器面を埋めている。五領ヶ台式末期に並行する北信に多い土器である。83は外面無文の浅鉢で、口縁部内面に爪形文をめぐらしている。

第2類 (第75図86～90)

86は加曾利E III式の深鉢胴部で、縦位の磨消縄文が施される。87は櫛状施文具による縦位の条痕文をもち、86と同じころと思われる。88～90は加曾利E IV式の深鉢で、微隆起帯の方形区画内に縄文を施すものである。88・89は口縁部、90は胴部である。

第IV群 (第75図91・92、P L16)

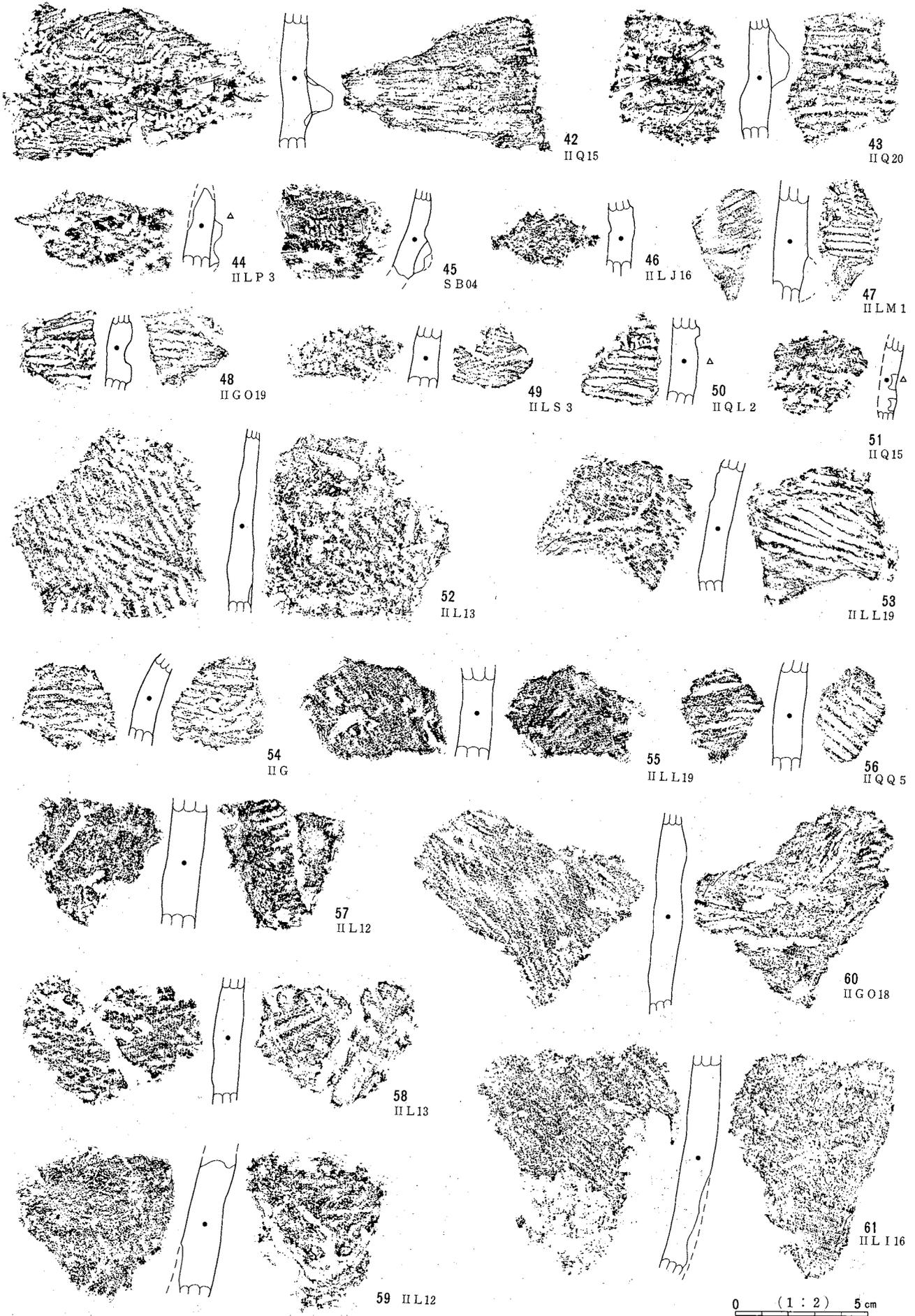
2点とも第2類に属す。91は磨消縄文で渦巻状の文様を描く堀之内1式の鉢である。92は細い沈線で円文を描くらしく、堀之内2式の注口土器と思われる。

⑥中段分布帯出土の土器

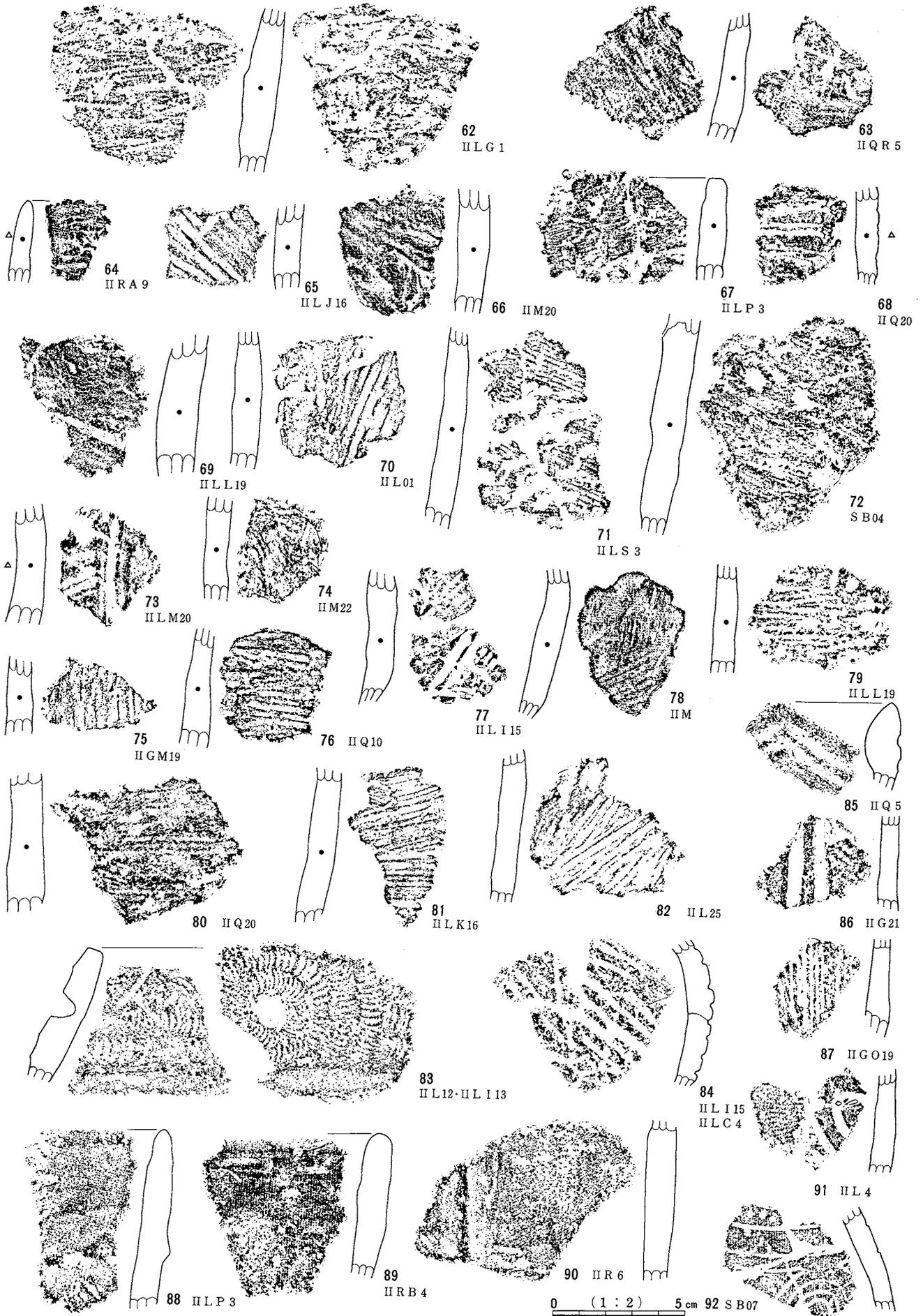
第II群 (第76図93～111、P L17)

第1類 (第76図93～99)

93・94は隆帯がめぐり、このわきに絡条体圧痕文が沿う。93は隆帯より上に斜位、94は隆帯より下に横位に絡条体圧痕文が施文される。95は口縁部に小突起があり、口唇端部に絡条体を押圧する。口縁下には斜位に絡条体圧痕文を施している。96は横位、97は斜位、98は傾きを変えた斜位、99は縦位密接の絡条体



第74図 縄文土器拓本図(4)



第75図 繩文土器拓本図(5)

圧痕文が施される。これらは器壁がやや薄く、小破片のため文様構成は不明であるが、絡条体はいずれも細めで浅く押圧し、98は特に細い撚紐を絡めている。96の外面に細かい条痕文が見られるほか、条痕文は観察できなかつた。

第2類 (第76図100～102・104・105)

100・101は内外面に絡条体と思われる条痕文が施される。102は外面に貝殻、内面に絡条体による条痕文が施される。104は器壁が厚く胴下部と思われ、外面はランダムな方向から条痕文を施し、内面はナデ調整している。105の内面は粗い条痕文である。これらは下段の第2類より繊維の含有量は少ない。

第3類 (第76図106～111)

106は外面に節の不明瞭な縄文、内面に絡条体条痕文を施す。107は細かい条痕地文の上に縄文を施す。108はRL、109・111はLRの縄文が施される。110は付加条縄文である。これらは器壁が薄く、106・108・111は繊維の量がきわめて少ない。107・109・111は繊維が観察できなかつた。109・110は焼成がよく、時期が下る可能性がある。

第6類 (第76図103)

103は器壁がやや厚く、外面に斜位の撚糸文が施され、内面は粗雑なナデ調整である。繊維は少なく、細かい白色砂粒が目立つ。

第III群 (第76図113・114)

113は外側に張り出す底部で、第1類に属す。114は加曾利E III式の深鉢胴部で、縦位の磨消縄文が施され、第2類に属す。

第IV群 (第76図112・115～119)

116～119は第1類に属す。116・117は同一個体で、沈線で描かれた帯状の文様の中に列点が施される。118も同様であろう。119は磨消縄文をもち、無文部に刺突が見られる。これらは称名寺II式である。112は細めの沈線が斜位に施され、115は無文である。便宜的に本群に含めたが、時期決定しかねる。

①上段分布帯出土の土器

第I群 (第81図252～257、PL19)

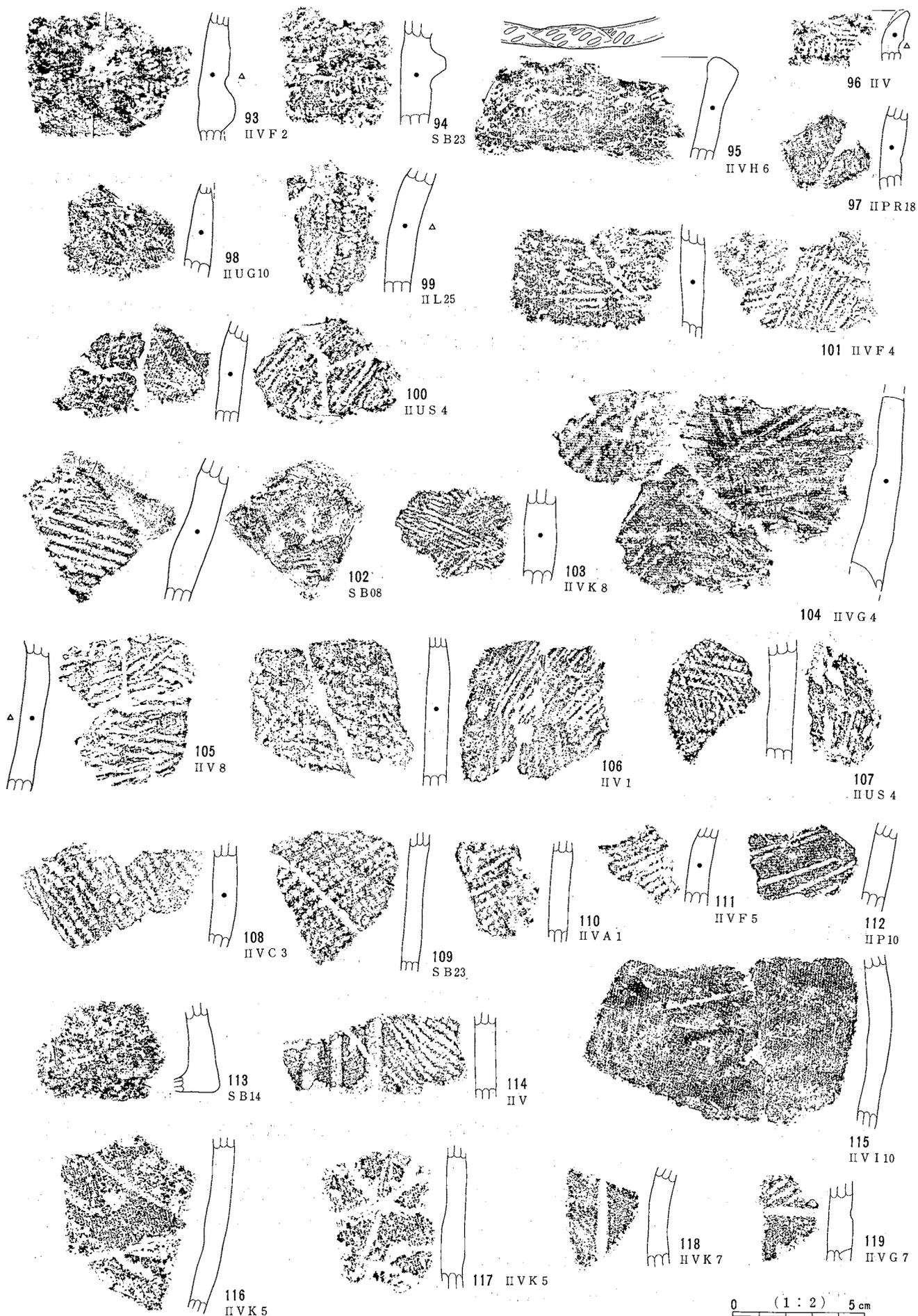
すべて楕円押型文で、横位密接施文されている。楕円文は米粒大で、252以外よく整っている。253・255は少量の繊維を含み、同一個体の可能性がある。橙褐色を呈して焼成は良い。細久保式である。

第II群 (第71・72・77～81図、PL14・15・17～19)

第1類 (第71図2、第72図5・6、第77図120～第78図153・155～157・159・160)

120・121は隆帯をもつ。120は隆帯の両わきに絡条体圧痕文を施し、これより上は間隔をあけた縦位、下は横位の線状に施文するらしい。121は低く細い隆帯で、これより上は鋸歯状に絡条体圧痕文を施文する。

5・122～127・131～137・152は絡条体圧痕文で口縁部文様帯を区画し、この中に縦位・斜位・鋸歯状・弧状の絡条体圧痕文を施すものである。5は推定胴部径約30cmの大形土器で、幅狭の区画内には絡条体圧痕文を縦位に充填し、下端区画の下には斜位に施文している。内外面とも粗大な条痕文が横位に施される。器壁は厚く白色砂粒を多く含み、繊維は目立たない。122は口唇端部に絡条体を押圧する。123は口縁部がわずかに外反し、端部は薄い。上下2条ずつの区画内に斜位の絡条体圧痕文を施す。内面には明瞭な絡条体条痕を施す。124・125は直立する口唇端部に絡条体を押圧し、この直下から文様帯を区画する。124は区画内に2条平行の鋸歯状文を施し、125は斜位に充填する。126は縦位に充填した後、鋸歯状文を重ね、内面に細かい条痕文が見られる。127は外反する口縁部で、区画内に2条平行の鋸歯状文を施し、内



第76図 縄文土器拓本図(6)

面に粗い条痕文が見られる。131は1段の条の太い絡条体を用い、区画線より上は横位の弧状に施文している。132・134・136も同様な原体を用い、似た構成をとるらしい。133はきわめて細かい条を密に絡めた絡条体を斜位に密接施文している。135・137は浅く横位弧状に施文している。152は短く外反する口縁端部に刺突文を施し、2条の区画線の下には斜位に施文するらしい。

2・6・128～130は口縁部文様帯の中段に絡条体圧痕文を1～3条めぐらせ、この上下に鋸歯状・X字状・弧状に施文するものである。2は推定口径17cmの口縁部が直立する深鉢で、角頭状の口唇端部に絡条体を押圧する。3条の横位絡条体圧痕文より上は下向き、下は上向きの半円形に絡条体圧痕文を施文している。原体は長い軟軸に1段の条を絡めたものである。外面はナデ調整されて不明瞭な条痕文がまばらに見られ、内面は摩滅している。繊維はやや少なく、暗い黄褐色を呈する。6は推定口径20cm、現存高約23cmの直線的に開く深鉢である。角頭状の口唇端部には絡条体が押圧され、外面がわずかに肥厚する。2条の横位絡条体圧痕文の上下に、緩い鋸歯状の絡条体圧痕文が施され、下段は2列である。外面は縦位、内面は横位の絡条体条痕文が施される。繊維を多く含み、器面の剥落が著しく、暗褐色から橙褐色を呈する。130は短く外反する口唇部と横位絡条体圧痕文の狭い区画に、絡条体圧痕文をX字状に施文する。128・129も同様と思われ、129は1条の横位絡条体圧痕文を挟んで上下にX字状文が施される。

これらのほかは、文様帯部分の破片と思われるものの構成が不明である。138～142は細い絡条体を用いる。138は2段以上の狭い区画内に縦位施文する。139は3条の横位絡条体圧痕文の上下に斜位・縦位・弧状の施文を行う。141は縦位の弧状施文の組み合わせ、140・142は縦位・横位施文を重ねている。143は外反する口縁部で、太い絡条体圧痕文を縦位に浅く施している。外面は絡条体条痕文、内面は貝殻条痕文が施されている。144は明瞭な条痕地文の上に横位弧状の絡条体圧痕文を施す。145は細い原体の弧状施文である。146・147・148は斜位施文で、147には内外面に条痕文が施される。149・150は同一個体で、太い条の絡条体を横位に重層施文する。151は細い条の絡条体を横位重層施文し、内外面に絡条体条痕文が施される。153・157は口縁部付近と思われ、横位の条痕地文上に横位施文されている。155は横位の直線的な浅い施文である。156は3条、159は1条の横位施文である。160は条の間隔のあいた原体を深く押圧する。

これらの絡条体圧痕文を施された土器は、条痕文をもつものが少なく、内面はナデ調整されたものが多い。観察できた条は1段が多く、特に細めものは観察できなかった。胎土に繊維の含有は少なく、砂を比較的多く含み、暗褐色を呈する。144・151は黒褐色を呈し、石英が目立つ特徴的な胎土である。

第2類 (第78図168～176・179～第80図216)

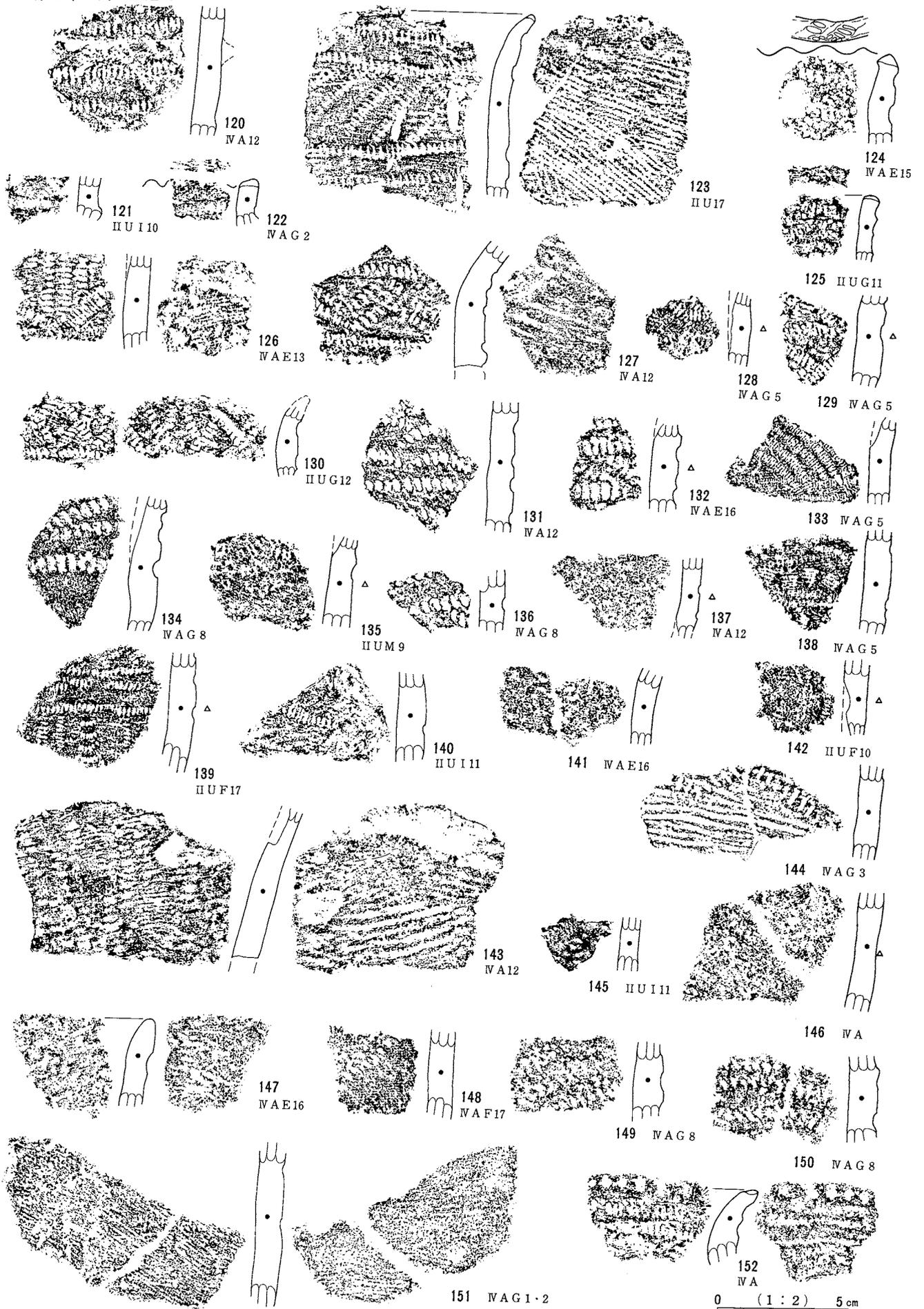
168～176・183～188・193～199は内外面に条痕文を施されたものである。179～182・189～192は外面に条痕文が施され、内面は観察不可能なものである。200～209は外面のみ条痕文を施されたものである。210～216は内面に条痕文が施され、外面は観察不可能なものである。

条痕文土器は次の3種に大別できる。

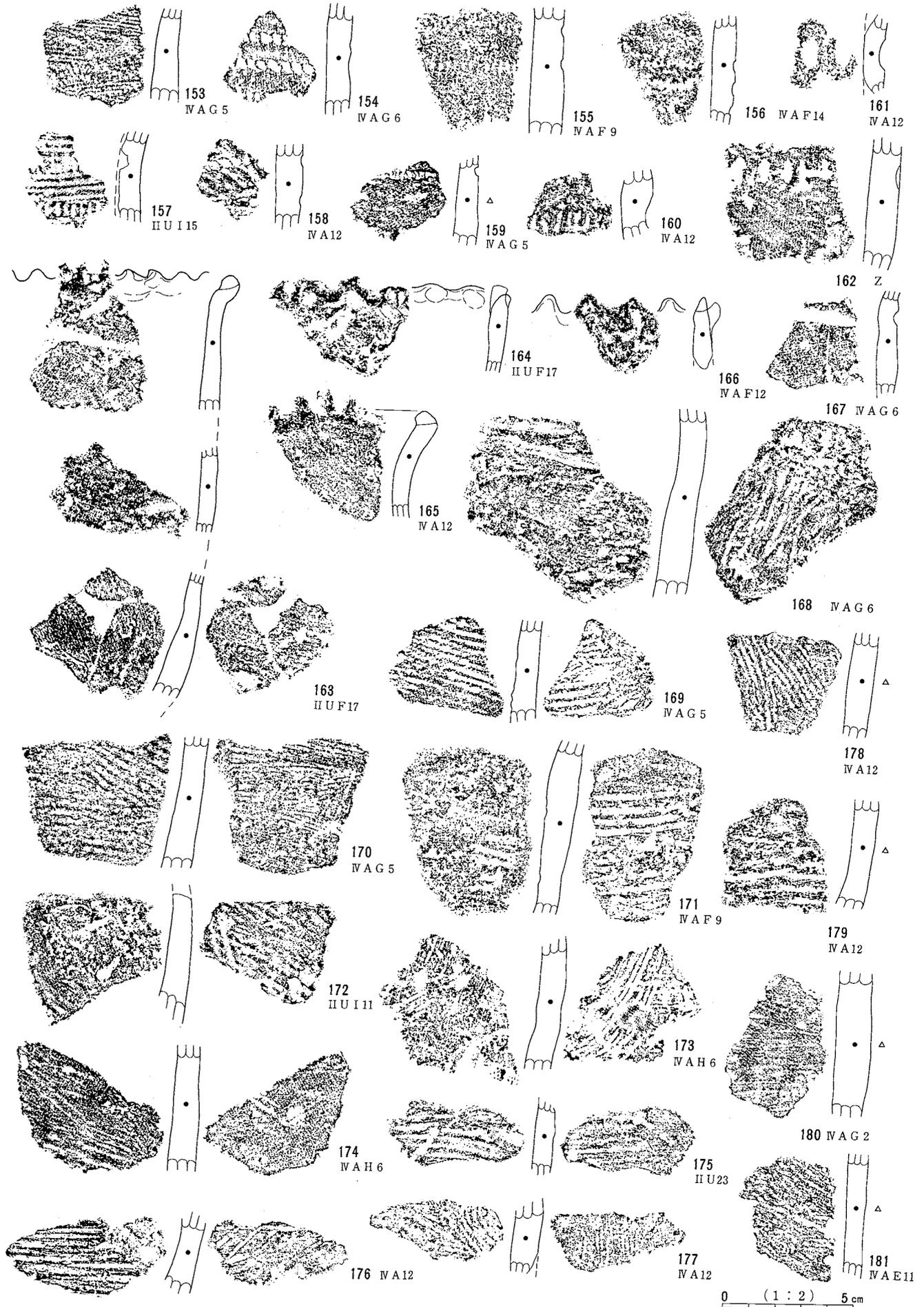
- a種：器壁が厚いものが多く比較的少量の繊維を含み、貝殻条痕を含む粗大な条痕文が施されるもの。
- b種：器壁は厚いもの、薄いものがあり、主に絡条体による条痕文が施されるもの。
- c種：器壁が薄いものが多く繊維は少量で、条の細い絡条体あるいは木口状の施文具と思われる細かい条痕文が施されるもの。

条痕文の原体については、条痕施文後ナデ調整されたり、程度の差はあっても器面が摩滅・剥落して観察しにくいものが多いため、特徴の明瞭なもの以外は推定にとどまる。

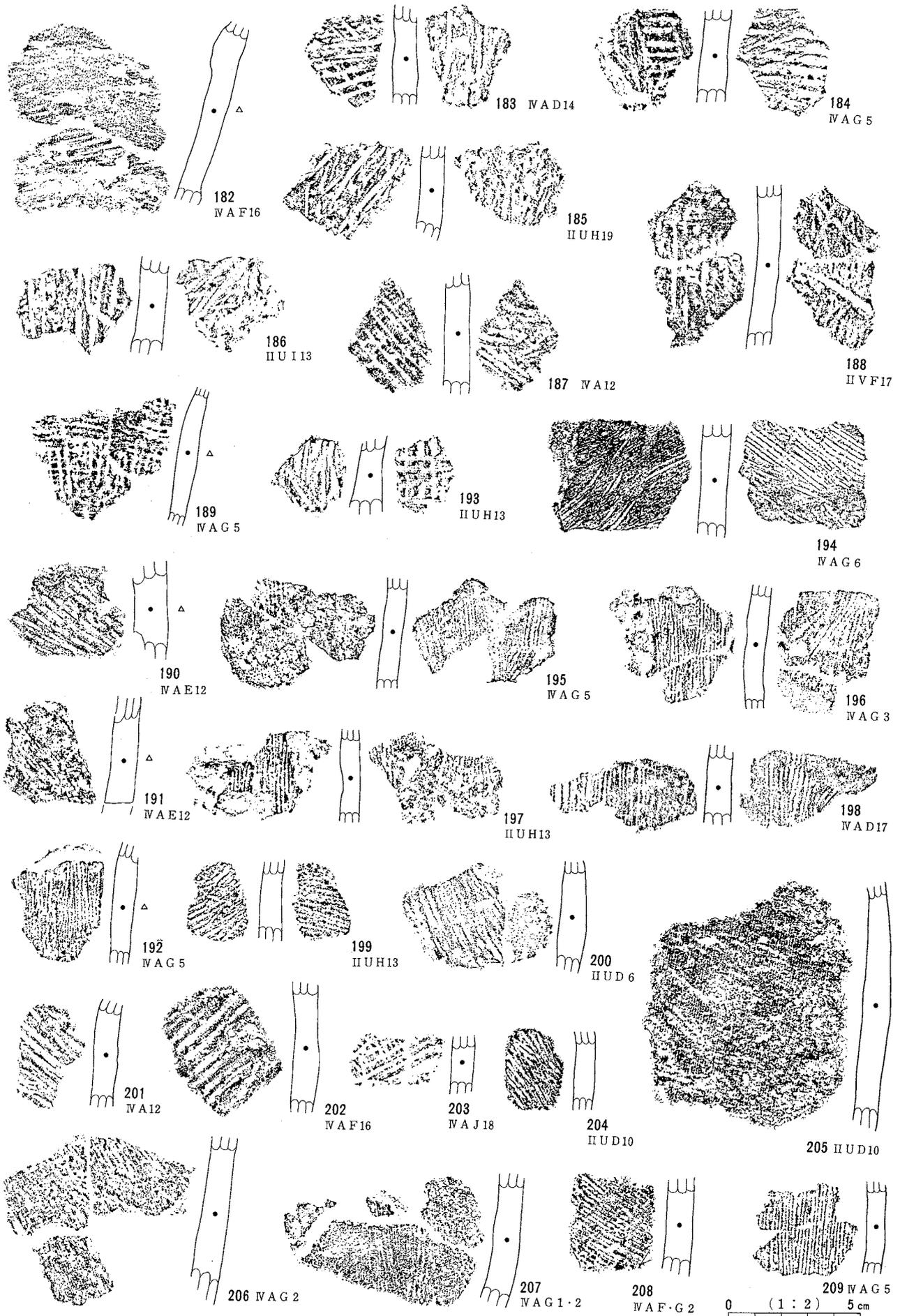
a種は外面の条痕文では168～173・175・176・181～188・190・193・200～202、内面のみ観察できた条痕文では210～212が該当する。170の内面条痕文は外面と異なり、b種に該当する。施文方向は横位・斜位が多い。183～188・193はランダムな方向から乱雑に施文され、184などは文様効果を意図している可能



第77図 縄文土器拓本図(7)



第78図 縄文土器拓本図(8)



第79図 縄文土器拓本図(9)

性もある。これらの条痕文は単位が不明瞭で、半截竹管や棒状の施文具も考えられる。180は器壁が厚くa種の作りと似ているが、擦痕状の条痕文をとどめる。

b種は外面の条痕文では174・189・191・194・199・203～208、内面のみ観察できた条痕文では213～216が該当する。施文方向は斜位が多く、187・203は斜めに交差し、189は縦・横である。

c種は192・195～198・209が該当する。施文方向は内外面とも縦位が多い。胎土に石英が目立ち、暗褐色あるいは黒暗褐色を呈するものが特徴的である。

第3類 (第80図217～第81図242・244)

217～235・237は内面に条痕文が施されるもの、236・238～241は内面に条痕文が施されないもの、242・244は内面が観察不可能なものである。縄文原体は2段のLRが多く、器面が乾燥しないうちに施文している。221・231などは多条縄文の可能性がある。224・226・227は羽状である。238は角頭状の口唇端部に絡条体圧痕文が施されている。内面の条痕文は、218～231・235・237が第2類のb種、232～234がc種に該当する。橙褐色または暗褐色を呈し、胎土は石英などの砂粒を含み、第2類b・c種と似ている。

第4類 (第81図247)

II群に属す無文土器は図化に耐えるものが少ない。247は外面が平滑に仕上げられ、内面は粗雑な横ナデが施されている。胎土は繊維が少なく白色の細粒砂が目立ち、表面は鈍い黄褐色、断面は黒褐色を呈する。1類の134、2類の194、6類の捺糸文245などと胎土・色調はきわめて似ている。

第5類 (第72図7・8、第78図163～166)

7は直線的に立ち上がる深鉢で、推定胴径約28cmを測る。口唇端部は丸棒状工具で上から押圧されて小波状を呈し、波頂部内面には絡条体が軽く押圧されている。口縁部外面には横位条痕文が見られ、胴部は条痕をナデ消しているようである。内面には擦痕状の条痕が施される。胎土には繊維がやや多く、粗粒の長石・石英が目立つ。暗褐色を呈し、比較的焼成はよい。8は推定口径26.5cmを測る深鉢である。外反する口唇端部を上から、小波頂部を外面から、交互に押圧する。口縁下に高い隆帯がめぐり、同様の交互押圧が施される。この押圧には絡条体が用いられているが、器面の剥落のため不明瞭である。内面に横位条痕文が見られる。胎土には粗粒の長石・石英を多量に含み、表面は鈍い黄褐色を呈する。

163～166は口唇端部に交互押圧が施されるものである。器形は7に近く、比較的器壁が薄い。165は口縁部が外反し、口唇部はへら状の工具で刻みが施されている。いずれも条痕文は目立たず、ナデ調整や擦痕が認められ、胎土・焼成は7と似ている。これらは上の山式に通ずる特徴を備えている。

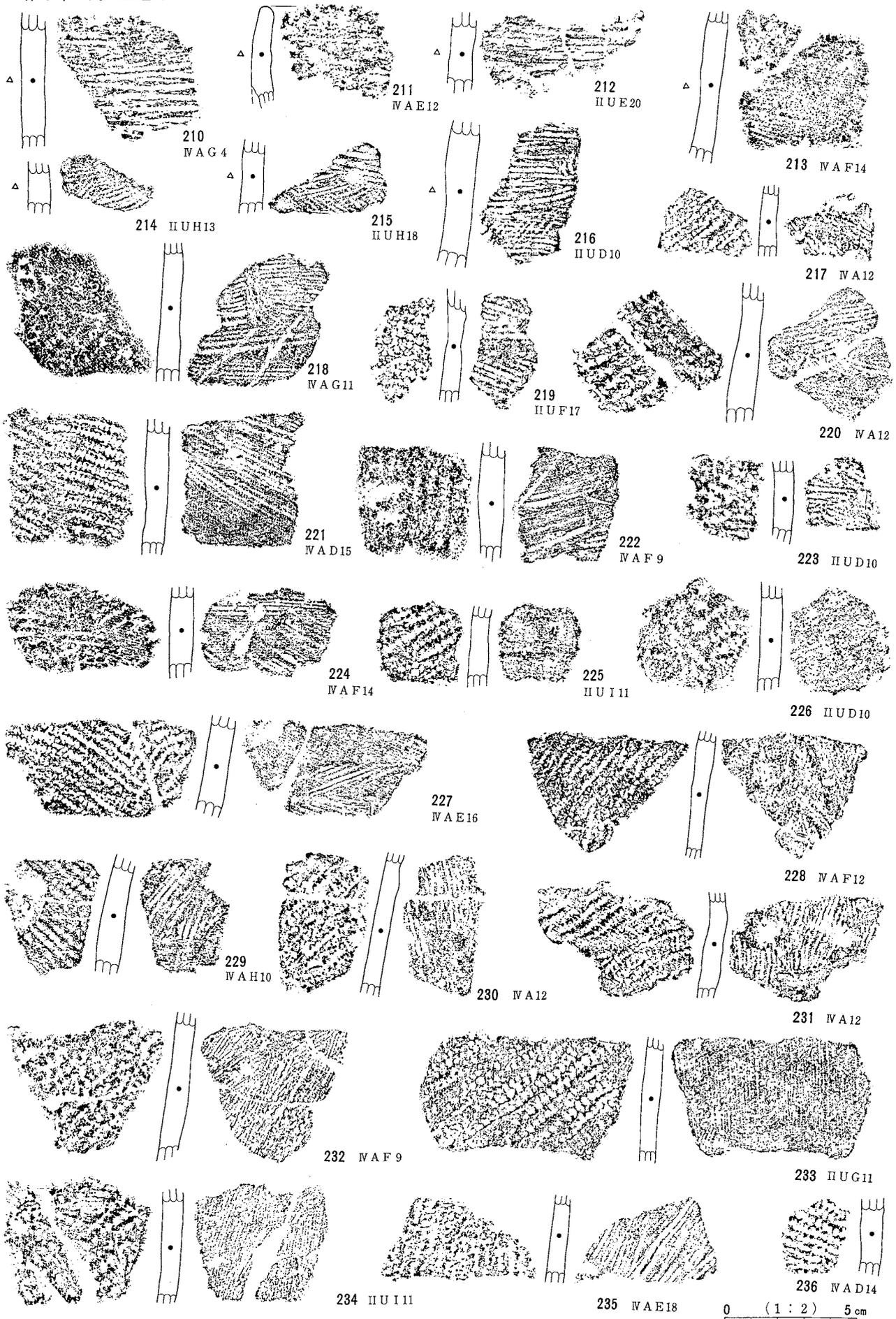
第6類 (第78図154・158・161・167・177・178、第81図243・245・246)

154・155は1段の縄の側面圧痕文である。154は横位3条のうち下1条は絡条体圧痕文と思われる。158は捺糸地文である。161は胴部にへらで縦位に刻まれた、大きな列点文がめぐり、出土地点が同じ第5類の166と同一個体の可能性が高い。167は太い横位沈線が施され、器面はナデ調整される。胎土は繊維が少なく、白色細粒砂を含み、暗褐色を呈する。

177・178・243・245・246は捺糸文を施された土器で、図示したほかに数片が確認されたにすぎない。いずれも斜位に施文され、観察不可能の178以外、内面に第2類b・c種の条痕文が施される。243はきわめて細い条の原体である。245・246は同一個体で器壁が厚く、246には補修孔がある。胎土は繊維が少なく、177・178は石英が目立ち、243・245・246は白色細粒砂を含む。

底部 (第81図248～251)

250・251は同一個体で、丸みのある尖底である。外面は横ナデ調整され、わずかに絡条体圧痕文が見られるため、第1類の底部である。内面には大粒の絡条体が反復押圧されている。繊維を挟んで粘土を貼り合わせ、器壁は厚い。248・249は小さな平底に近い。250・251は白色砂粒、248は粗粒の石英、249は小礫



第80図 縄文土器拓本図(10)

を含む。

第IV群 (第81図258・259・261、P L19)

258は第1類で、口縁部をめぐる帯縄文から横長のJ字文が4単位描かれるらしい。259は第2類で、沈線で渦巻文が描かれる堀之内1式の鉢である。261は縄文を施され、焼成はよい。正確に時期比定しがたい。

⑧表面採集の土器 (第78図162、第81図260、P L16・18)

162は161と同じ第II群第6類に属す、列点文を施された土器である。へら状施文具で垂直に刺突され、器壁は厚く白色砂を含む。260は第IV群第2類の堀之内1式の鉢で、頸部に沈線がめぐり、要所に刺突文が施される。

⑨第II群土器の編年的位置付け

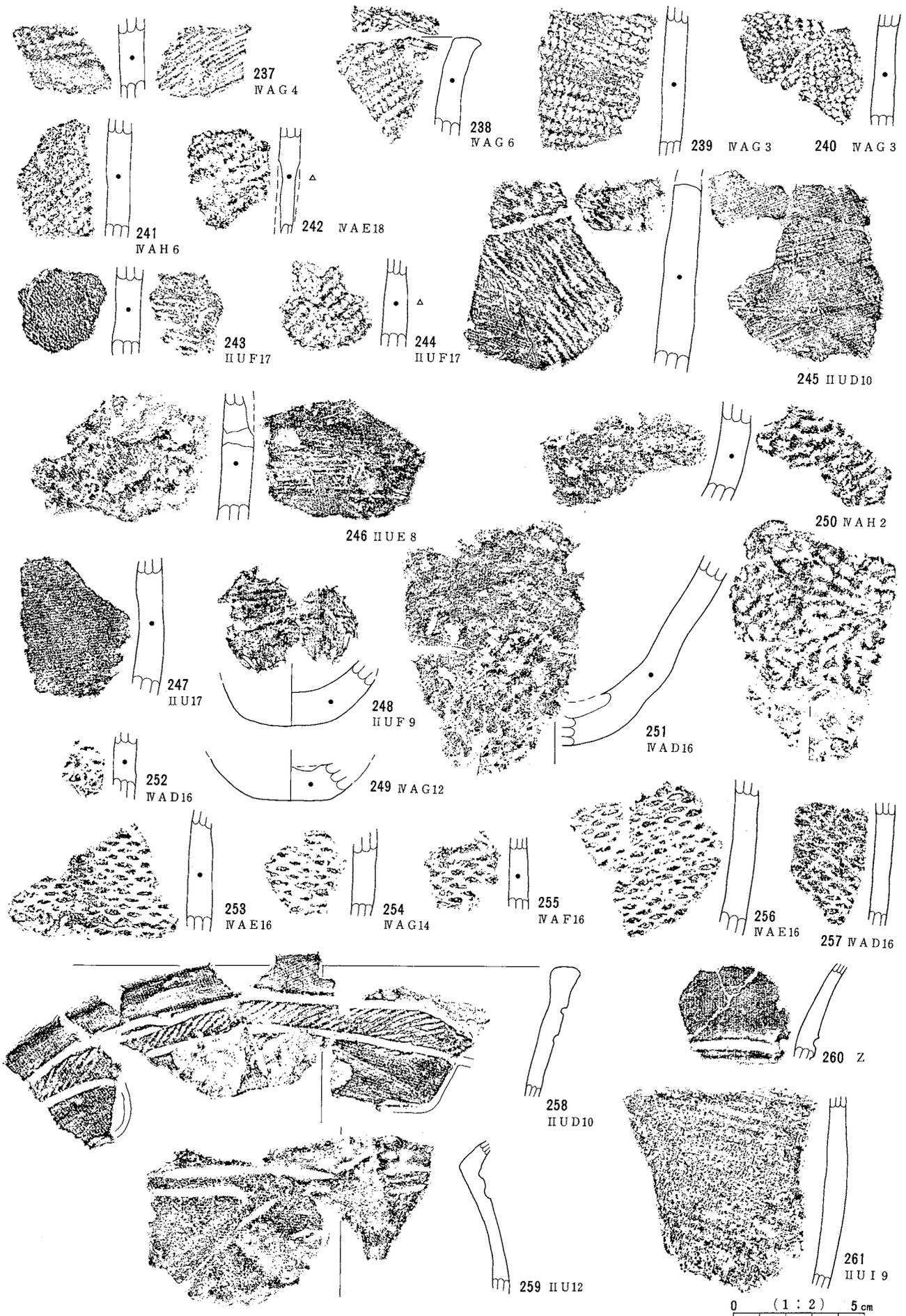
当初の分類に沿って資料を説明してきたが、出土土器の95%を占める第II群土器は、各類の中にもいくつかの種別が認められた。ここでは長野県の縄文早期末葉土器の研究成果に基づいて、類・種相互の編年的位置の把握を試みたい。

本遺跡では第2類の条痕文は分類可能な土器の主体を占め、第1類の絡条体圧痕文を施す土器の内・外面、第3類の縄文を施す土器、および第6類に含めた捺糸文を施す土器の内面にも施文されているため、第1～3・6類の並行関係を示す指標となり得る。長野県では、茅山上層式以降の早期末土器編年は、伴出する東海系土器を基準としている。条痕文自体の変遷は、おおむね上の山式段階は内外面に貝殻条痕が施され、入海I式段階に絡条体条痕に転化が進み、入海II式～石山式段階には、文様をもつ土器の器面にはナデ調整が施され、条痕文は見られなくなる。この時期に絡条体による捺糸文地文の土器が現れ、次の石山式～天神山式段階には地文としての捺糸文施文が確立し、縄文施文土器が伴出してくるといわれる〔百瀬1989〕。

第2類a種は貝殻条痕を含む粗大な条痕文で、内外面に施文したものが多く、上の山式段階までの比較的古い時期と思われる。第1類では3・4・5などが該当し、内外面に施文している。第3類、第6類外面捺糸文の土器の内面に施文した例は見られない。b種は主に絡条体条痕文と思われるもので、入海I式段階を中心とするらしい。第1類では6・123の内外面、1の内面に施文されている。第3類の内面施文はほとんどがb種で、外面捺糸文の245などにも施文されている。c種はいわゆる刷毛目調整に近いもので出土量は少なく、第3類の232・233などの内面に施文されている。また、a種は内外面に施文されたものが大部分を占めるのに比較して、b・c種は内面に施文が認められないものがやや多い。

以上のことから、条痕文を指標として、第2類a種条痕文土器と第1類3・4・5などの絡条体圧痕文土器で構成される古段階と、第2類b・c種条痕文土器と第1類1・6・123などの絡条体圧痕文土器、第3類の縄文土器、第6類の捺糸文土器で構成される新段階に大別できる。この時期区分は条痕文の種別のみでなく、器壁の厚さや胎土の類似、SB26で第1類の1と第2類の29が共伴したことからも裏付けられる。また、第5表からうかがえた上・中段と下段の第2類の内外面施文の多少や、第3類の比率の違いは時期差ととらえてよく、下段分布帯はほぼ古段階で占められているとみなされる。

第5類の東海系土器はすべて図示した。口唇端部とこの下にめぐる隆帯に絡条体で交互押圧を施した8は、上の山式の特徴をよく備えている。そのほかの土器もほぼ上の山式か、下っても入海I式に比定される特徴をもつ。また、第6類とした下段出土の52は内外面に貝殻条痕文が施され、截痕状の刺突文が1列めぐり、粕畑式の可能性が高い。これらは第1・2類に比較して器壁が薄く、52以外は条痕文が目立たな



第81図 縄文土器拓本図(11)

いが、東海地方からの搬入品とは認めがたい。

前述の早期末条痕文の変遷と東海系土器の伴出から、a種条痕文を指標とする第II群土器の古段階は、おおむね粕畑式・上の山式並行期と推定される。一方b・c種条痕文を指標とする新段階には東海系土器の伴出が認められないが、撚糸文がきわめて少ないことと、第1・2・3類の大部分が内面に条痕文を施文されていることから、入海II式を下らない時期と推定される。

第II群土器は、第2類を指標とすれば新旧2段階に区分され、第5類では3または4型式にわたると推定される。第1類は県内では量的に安定し、在地系土器としては唯一文様意匠をもつため編年の指標となるが、その変遷は必ずしも明らかになっていない。低隆帯上に絡条体圧痕文を施文する3は、埼玉県下段遺跡第III群第3類や、茅野市高風呂遺跡43号住居址に類例が見られ、茅山上層式または粕畑式が伴出している。5は上の山式を伴出した塩尻市竜神平遺跡の土器に類似する。a種に近い条痕文を施され、隆帯をもつ42・43や、底部内面に絡条体を押圧した251は古段階でも新しい時期に属すと思われる。内外面にb種の絡条体条痕を施された6・123は東海系土器の共伴例が知られないが、入海I式段階ごろと思われる。外面に条痕文を施さない1・2はより新しい傾向を示し、縄文・撚糸文を地文にもつ絡条体圧痕文土器は認められなかった。1の胴部文様は絡条体圧痕文による縦長の菱形文で、県内では他に例を知らない。そのほか、X字状に施文する129・130、繊細な絡条体を用いた124・125・133・138・139などは本遺跡では新しい段階に属すものと思われるが、小破片に見られる文様要素から時期決定はできかねる。口縁部文様帯には、絡条体圧痕文で上下を区画する5・123・127・152・1、中段の横位絡条体圧痕文の上下に施文する2・6・130、隆帯がめぐる3・42・93・120などの系統がある。早期末の絡条体圧痕文土器については、第5節で改めて検討したい。

第II群土器の新段階は第3類の外面縄文・内面条痕文の土器が特徴的で、一部に異方向施文が見られる。入海II式～石山式を伴った岡谷市膳棚B遺跡は撚糸文で占められ、石山式～天神山式を伴った梨久保遺跡では、撚糸文に代わる新しい要素として、条痕文をもたない羽状縄文土器が出土している。絡条体圧痕文土器に縄文施文の土器が伴うことはすでに予想されているが、石山式段階以前の縄文施文土器は県内では明確な例が知られていない。第6類とした縄の側面圧痕文154・158も注目されたことがなく、あわせて第5節での検討課題としたい。

(2) 石器

① 概論 (第6表)

調査にて得た資料は合計28,689点におよぶ。このうち26,834点が石器製作に伴い石屑として弾き出された資料で、1,809点が道具として認定できた石器である。その内訳は1,227点(68%)が狩猟をつかさどる石鏃であり、470点が調理・加工用の刃器類で、合わせて全体の94%を占める(第6表)。器種組成など石器群の内容から設定できる文化的な位置付けは、狩猟・採集の段階にある。出土土器の95%を早期末葉の土器群が占め、5軒の住居址からは石器も伴出しており、ほぼ該期の所産と考えられる。

以下、出土資料につき報告するが、記述は6つの項目について実施した。

1)材質、2)製作法、3)分類(形態的類別・機能的類別)、4)法量(大きさ)、5)遺存状態、6)出土状況・出土地区(遺構)である。

第6表 石器組成表

	総数	母岩		石屑		狩猟具		漁撈具	採集具	
名称		原石	石核	剥片ほか・両極	石槍・石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	打製石斧	
数量	28,689	27	119	26,592・96	1・1,227	1			35	

	調理具			加工具		加工痕有		水晶	
名称	磨石類	台石	石匙	刃器・使痕	磨製石斧	石鏃	大形	小形	原石
数量	26	2	67	31・372	12	35	34	12	62

※3)機能的類別についてはルーベ(Vixen×2.3)にて全資料を、実体顕微鏡(Nicon SMZ2で×40、SMZ10で×100)にて石鏃・石鏃・刃器を観察した。6)出土地区の呼称は土器の分布(帯)と同一とする。

② 原石 (第82~84図、第85図1~3、PL21)

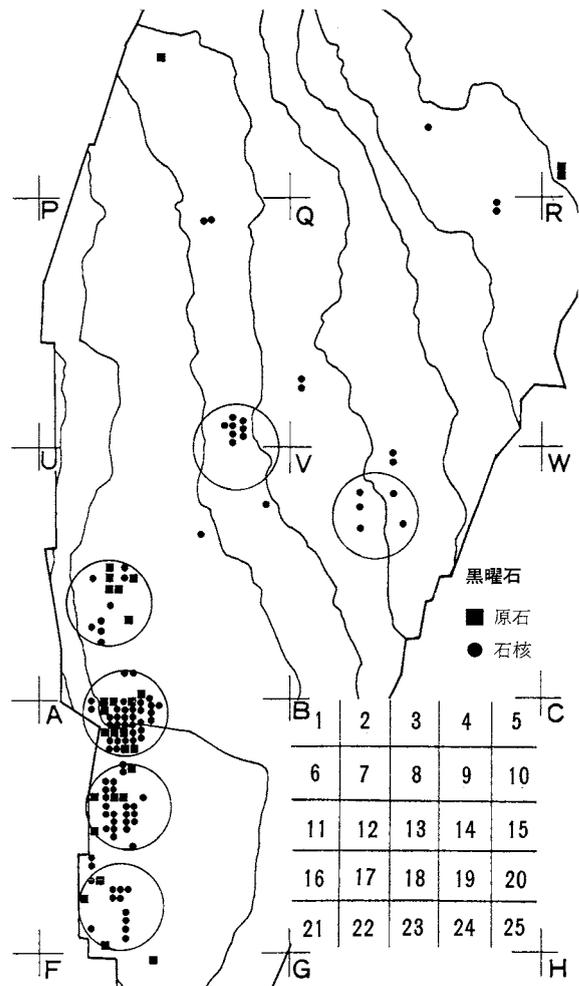
剥片剥離に供される原材で、一度も剥離作業の実施されていない資料。自然面(風化面)に覆われた転石で、総数27点を収集した。形状には規則性がなく、卵形から棒状のものまで多種におよぶ。すべて黒曜石材で法量は平均値2.3×3.6×1.8cm、14.8gを計測。出土はすべて遺構外でIIU区~IV A区に分布し、特にU12・A2に局所的に集中する。

③ 石核 (第82~84図、第85図4~10、第132図16、PL20・21)

剥片の剥離生産を主目的とした個体群で、少なくとも一回以上剥離作業が実施された資料。総数119点を収集。石質別内訳は黒曜石104点、チャート13点、頁岩2点である。法量平均値は黒曜石2.2×2.6×1.4cm、8.1g、チャート2.5×3.1×1.0cm、8.6g、頁岩2.5×4.6×1.2cm、13.2gを計測。剥片剥離は自然面または節理面を打面とし、以下2種の方法に基づき実施される。

第1種-原石から直接剥片剥離を行うもの(4~6・16)。

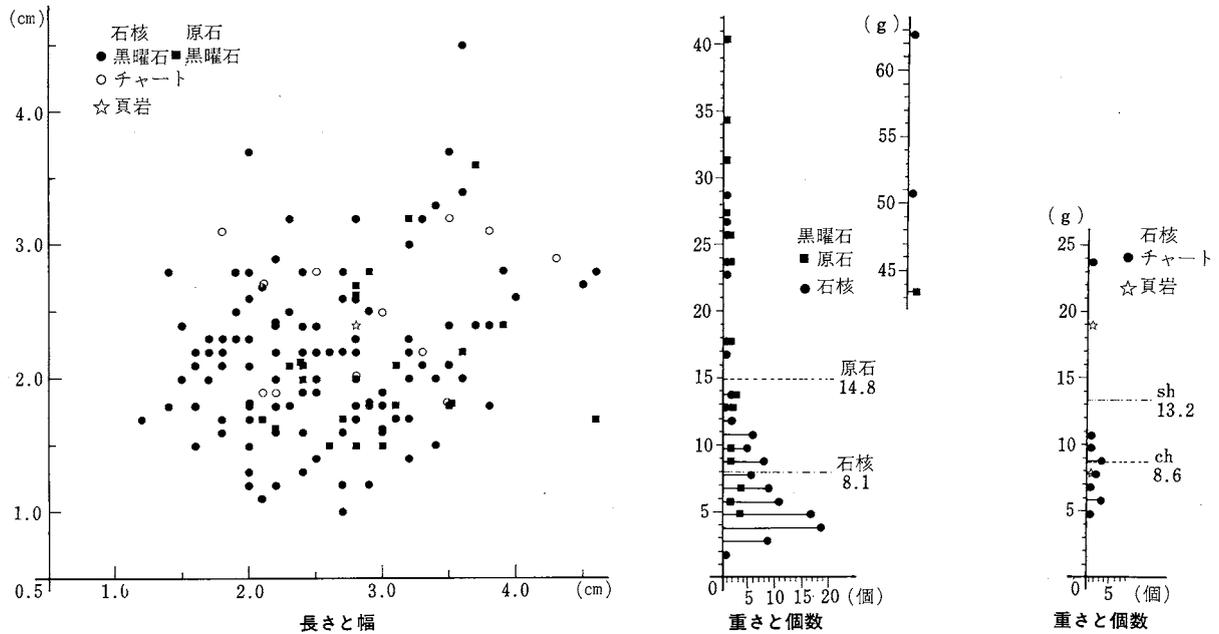
第2種-原石または石核から剥片を剥離し、これを石核として剥片剥離を行うもの(7~10)。



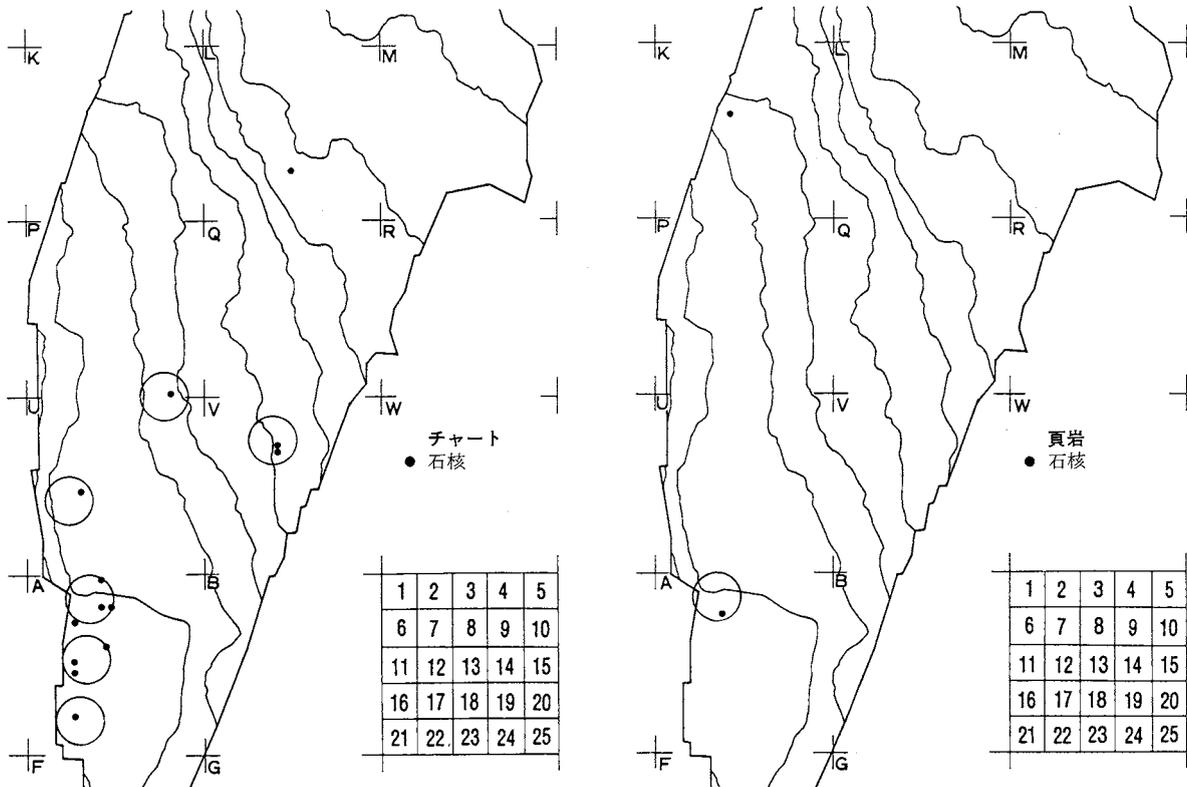
第82図 原石・石核出土分布図(黒曜石)

打面は90度ないしは180度に転移し、2面または3面で構成される。打面転移に伴う作業面の拡大は石核の表裏2面に限定され、剥離回数はいずれも10回を下回る。

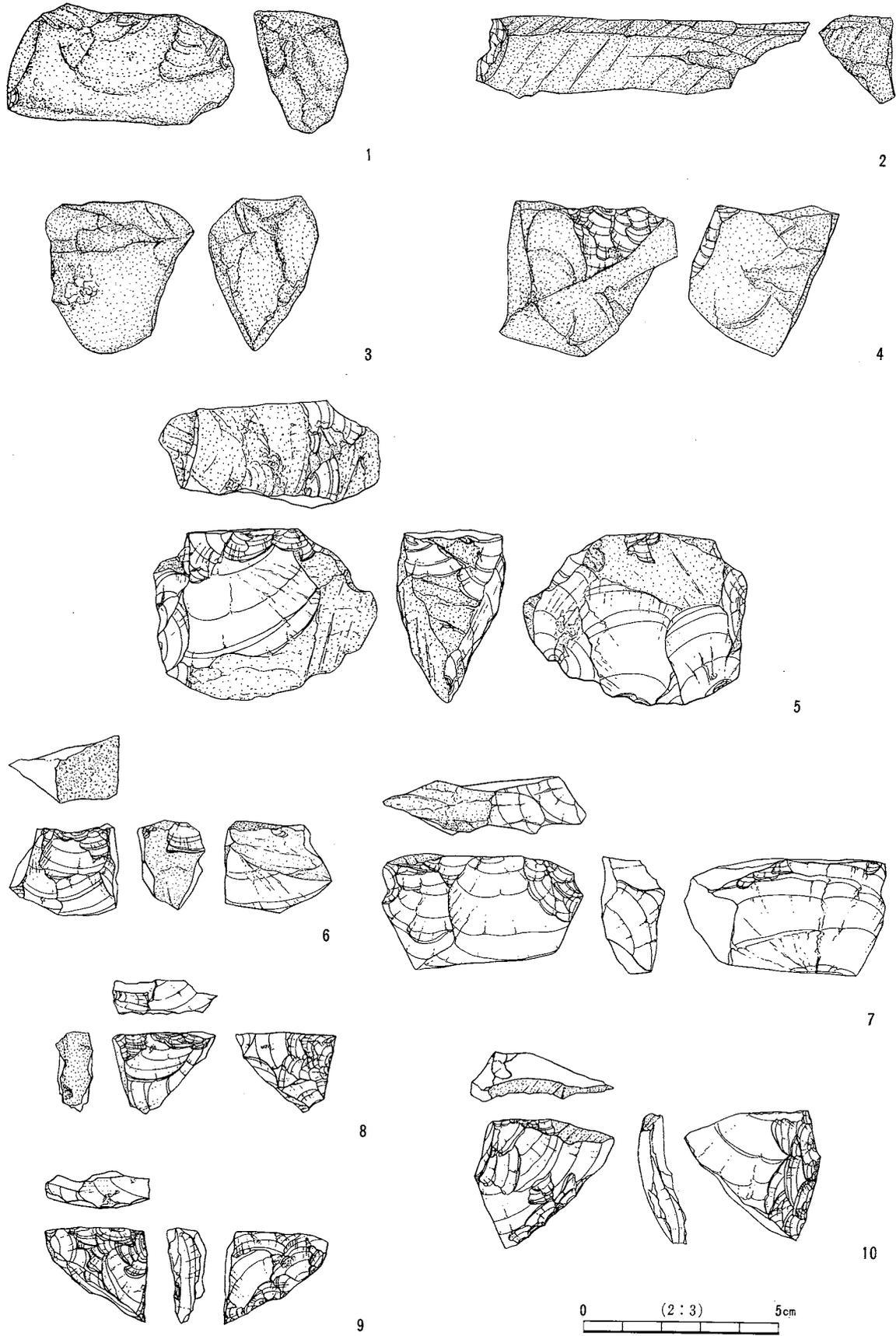
出土は大半が遺構外でIIU~IVA区に分布する。黒曜石材はA2・12に局所的に集中し、遺構内でSB11から2点、SB29から8点確認されている。チャートおよび頁岩はIIA区7・12付近に散在する。



第83図 原石・石核法量相関図



第84図 原石・石核出土分布図 (チャート・頁岩)



第85図 原石・石核実測図

④ 剥片・碎片 (第86~93図、第131図11、第7・8表、PL21)

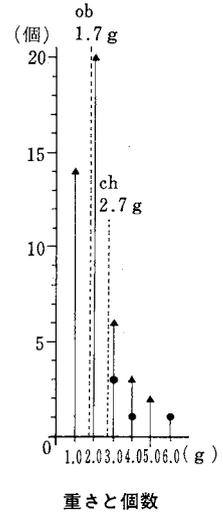
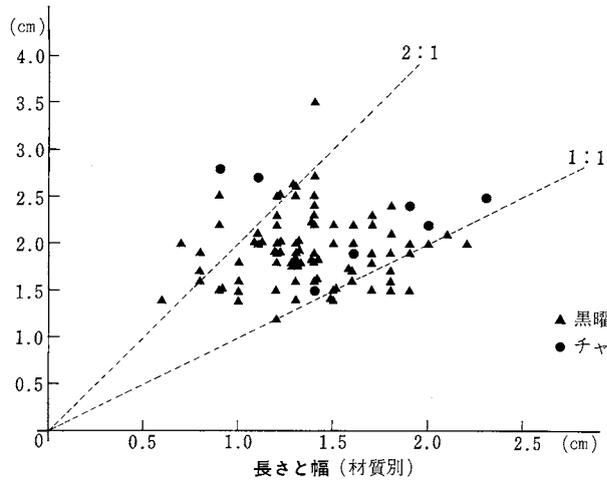
剥片剥離作業において加工の施される属性を担った対象を剥片とし、これが剥離される過程に産出された製作に不適な資料を碎片とする。製作途上での出現時期あるいは素材部位を考慮し、2種4類に区分。原石の表皮が片面2分の1以上認められる剥片を1種、表皮が2分の1以下の剥片を2種とする。各々で両極剥離痕を有する剥片をA類、石鏃製作に関する素材用剥片をB類として抽出。剥片A類については石核または楔としての位置付けも可能であり、ほかと区別し分布図・グラフを作成した。

A類総数96点を収集。石質別内訳は黒曜石88点・チャート8点である。チャート材は石核数13点に対し出現率が62%と高い。法量平均値は黒曜石1.9×1.4×0.7cm、1.7g、チャート2.3×1.6×0.7cm、2.7gを計測。使用後の形状変移は上下両端部形の組み合わせにより類別した。

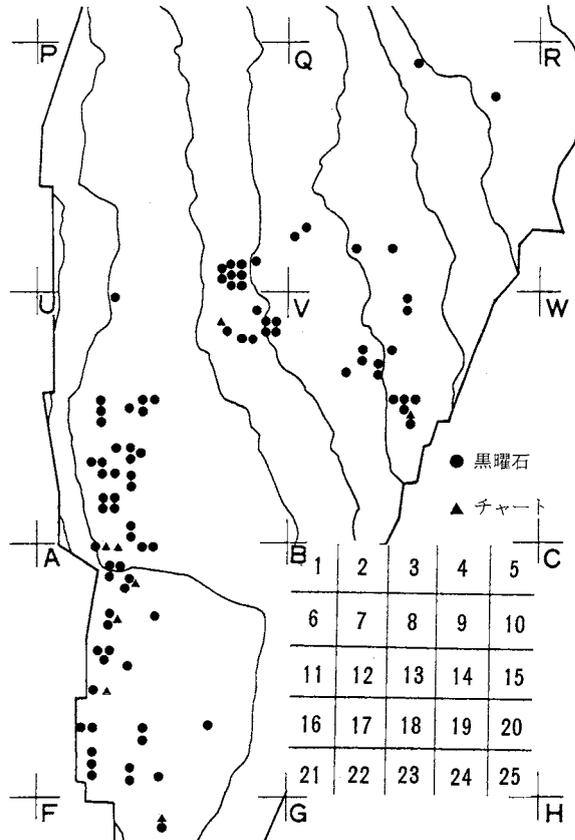
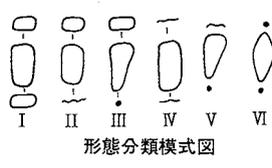
I類(面と面)・II類(面と線、1)・III類(面と点、2)・IV類(線と線、5・11)・V類(線と点、3・4)・VI類(点と点)。

法量では面を属性とする資料が幅に、点を属性とする例が長さに対し優位に相関する。

出土は大部分遺構外からでII P~V・IIU~IVA区に分布し、特にP24・25、U5・12・17・22、V7・13、A2・12に集中が認められる。遺構内では黒曜石材がSB26から2点、SB29から5点出土している。剥片1種(3761点、8)・剥片2種(1337点、9)・剥片B類(893点、10~13)・碎片(20601点、6・7)については、遺構別・地区別の



第86図 剥片A類法量相関図



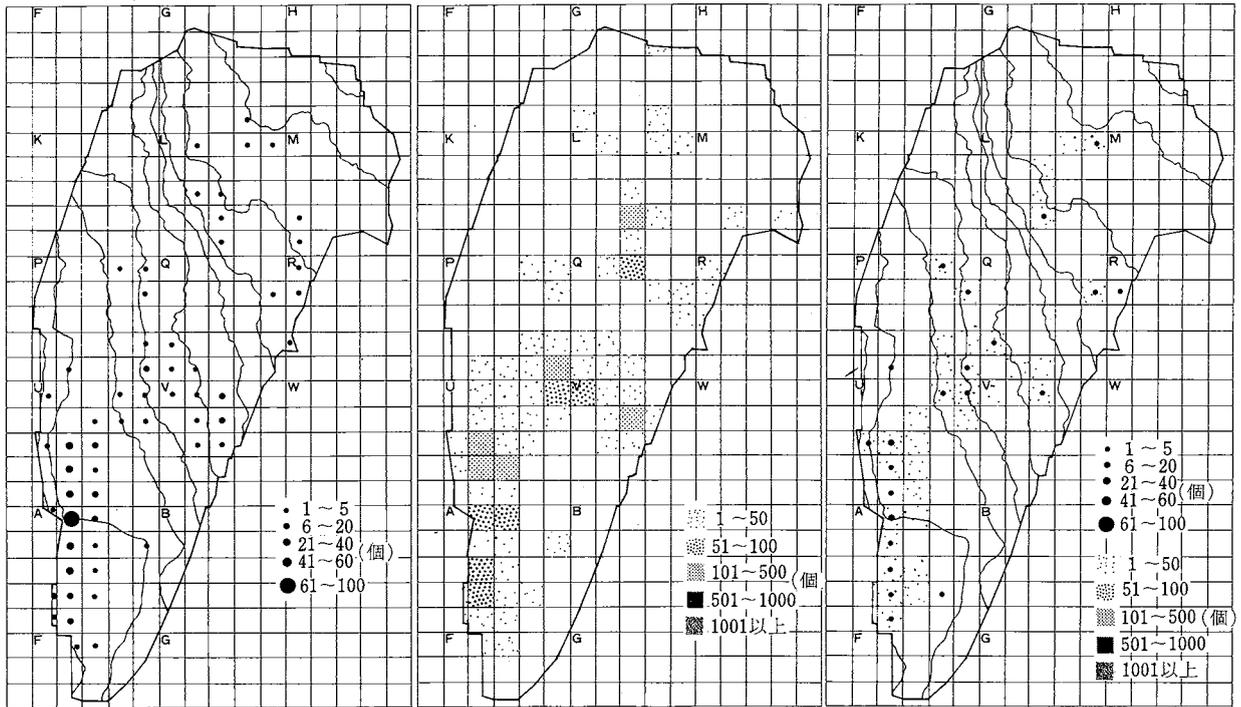
第87図 剥片A類出土分布図

第7表 剥片A類形態別出土数

形状型	I	II	III	IV	V	VI	他	計
黒曜石	0	5	1	2	0	0	0	8
チャート	3	25	5	42	5	7	1	88

第8表 剥片A類属性表

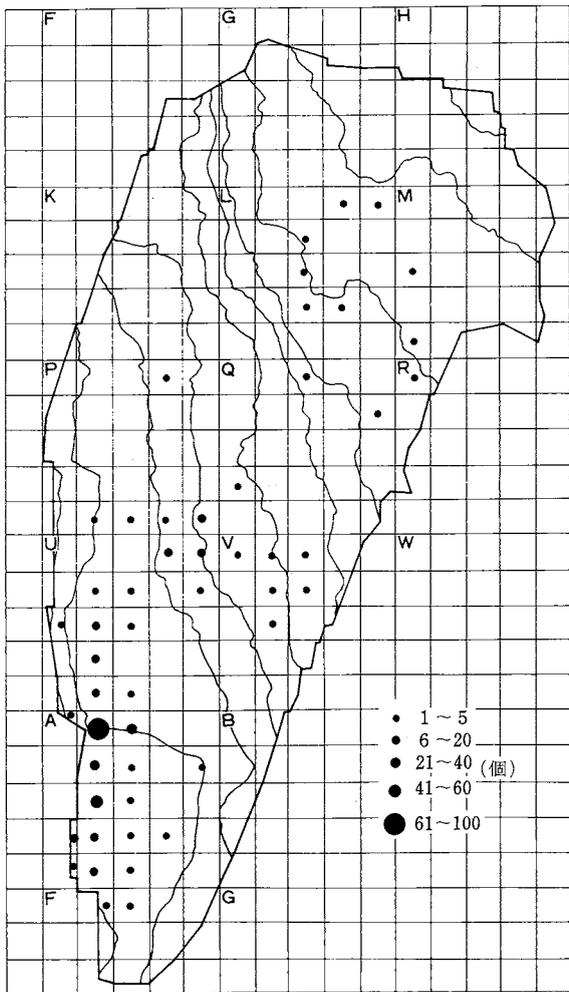
平均値	法量(全体値)				計上数	法量(全体値)				計上数		
	チャート					黒曜石						
属性分類	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>
I	-	-	-	-	-	2.4	1.5	0.8	2.6	3		
II	2.2	1.7	0.8	2.8	5	1.9	1.5	0.8	2.1	25		
III	2.8	0.9	0.7	1.5	1	1.8	1.2	0.8	1.4	5		
IV	2.2	2.0	0.7	3.2	1	1.9	1.3	0.6	1.5	42		
V	-	-	-	-	-	1.7	1.3	0.7	1.4	5		
VI	-	-	-	-	-	2.0	1.1	0.6	1.3	6		



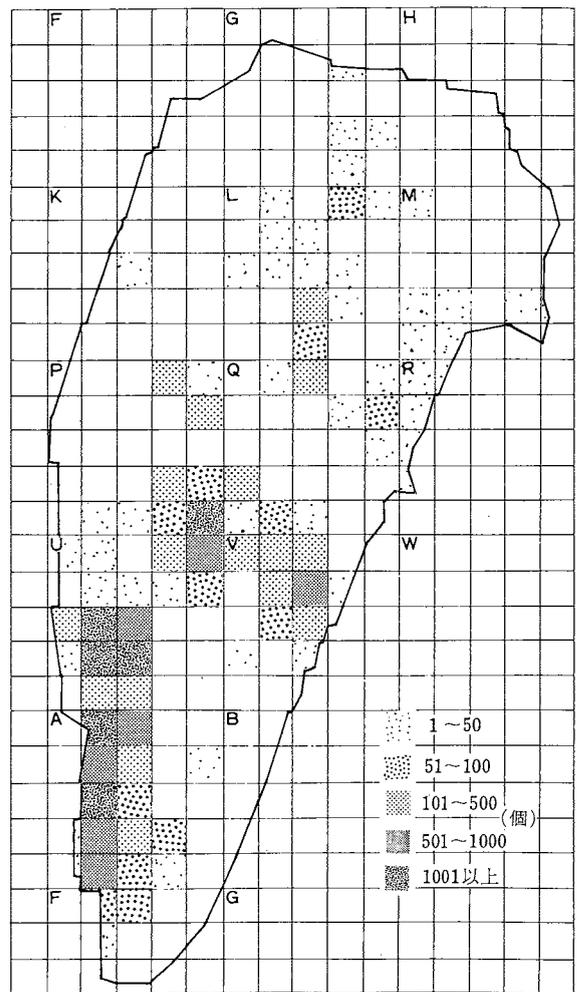
第88図 剝片B類分布図(チャート)

第89図 その他分布図(チャート)

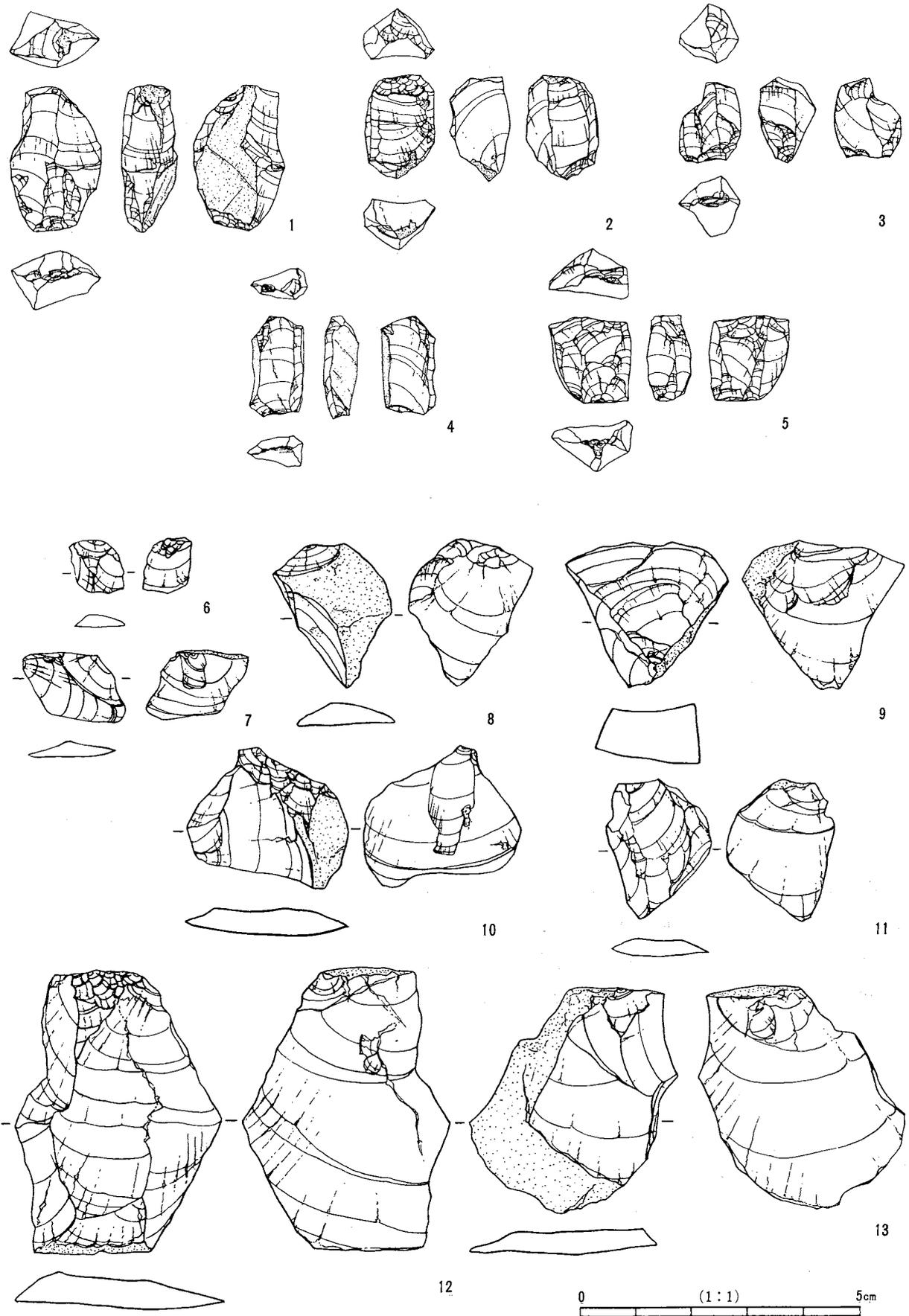
第90図 剝片B類・その他分布図(頁岩)



第91図 剝片B類出土分布図(黒曜石)



第92図 その他出土分布図(黒曜石)



第93図 剝片・碎片実測図

出土数表を作成。剥片B類ではIVA区に60個以上の集中があり、上段・中段・下段とも均等に分布する。他類はIIU・IIV・IVA区に分布し、特にP25～U5、V8、U12～18、A2、A12～22に集中が認められる。

⑤ 石 槍 (第102図91)

刺突・殺傷が想定できる資料。頁岩製1点収集。表裏面には平坦で奥行き深い剥離が施され、全体が木葉形を呈する。出土はQ10からである。

⑥ 石 鏃 (第94～102図、第130～132図、第9表、PL20・22)

刺突・殺傷が想定できる資料。製品968点・失敗品259点、計1227点を収集。火成岩を主体とし黒曜石913点・チャート302点・頁岩11点・安山岩1点である。

形態的視点から基部が無茎のI類735点と有茎のII類10点を大別し、細別は基部形状に基づき実施した。

I A類—平らで直線的な基部を呈するもの(61点、12～20、SB12-3、SB26-1)。

B類—基部が内湾するもの。えぐりが浅く全長の6分の1以下で、脚部の開き角が120度以上をB1類(429点、21～62、SB11-1・2、SB12-1・2、SB26-2～5、SB29-1～6)とし、えぐりが深く開き角120度以下をB2類(236点、63～77、SB26-6・7、SB29-7)とする。

C類—I類中で、特徴的な別の要素が加わるもの(9点、80～85)。基部に小さな米粒状のえぐりを施す例(4点、81・82)、研磨を施す例(2点、80・81)、脚部が鋏形状に張り出す例(4点、83・84)、丸く張り出す例(1点、85)がある。

II A類—平らで直線的な基部を呈するもの(6点、86～88)。

B類—基部が内湾するもの(4点、89・90)。

以上のほか、形状不明223点がある。

上記類別を補佐する側辺部の形状は、外湾するa類(23～26・28・35・48・63～65・67・77・81・82・85・87・88・SB11-1・SB12-1・SB26-2・3・SB29-1)、直線的なb類(12～15・18～22・27・29・30・36～40・49～53・66・68～76・80・83・84・86・89・SB11-2・SB12-3・SB26-1・4～7・SB29-3・6・7)、内湾するc類(54・90)に区別でき、側辺先端部が屈曲し先細るd類151点(16・17・31～34・41～47・55～62・SB12-2・SB29-2・4・5)に類別した。脚部先端形は三角形が主体である。

機能的側面は使用による先端部の損傷・装着痕跡・付着物について観察した。機器は実体顕微鏡(×100)の各適応倍率を使用し、実測資料90点につき実施。結果35点(39%)に装着を考えさせる痕跡が確認できた。先端部の損傷は明瞭ではないが、先端が丸く変形した例(35・78・79)や先端および側辺部を局部的に調整し先細り状を呈した例(側辺部形態d類)が存在する。

法量については類型別に第9表に平均値を提示した。個別には長さ2.0cm(1.0cm×2)を超えるものを大形、1.0cm前後を小形に数値上区分できた。

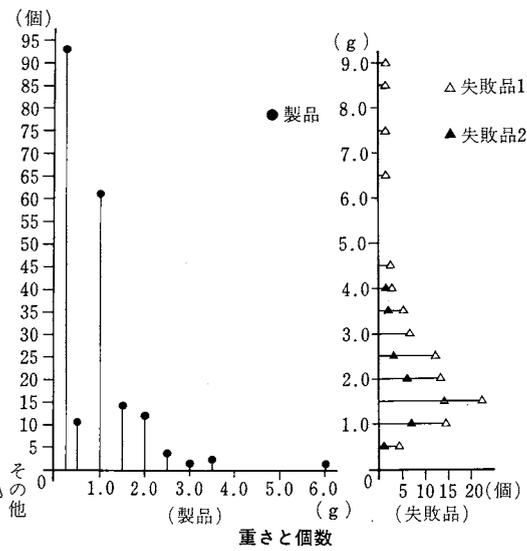
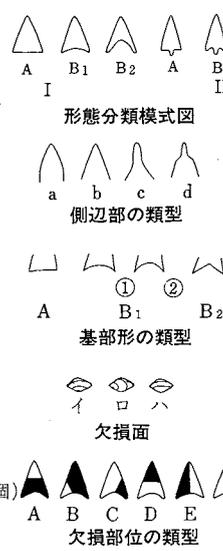
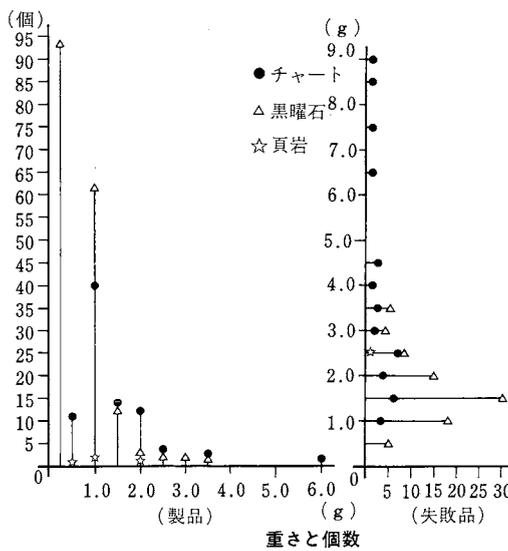
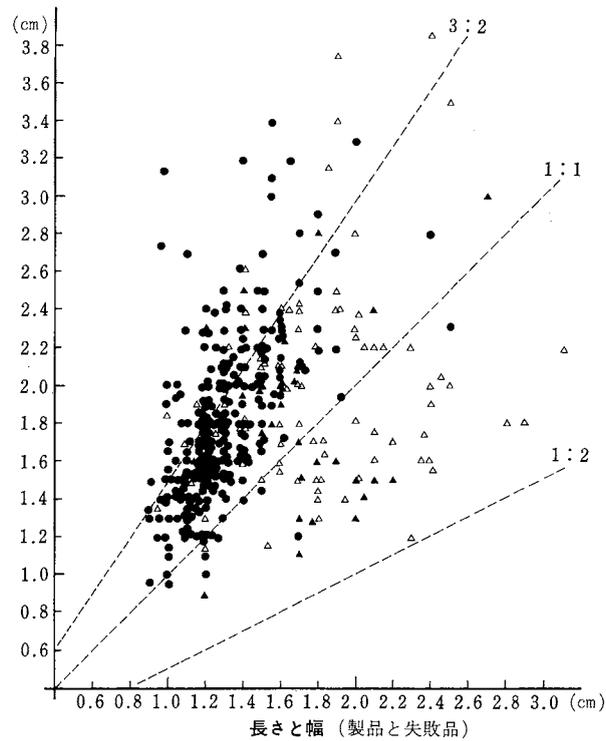
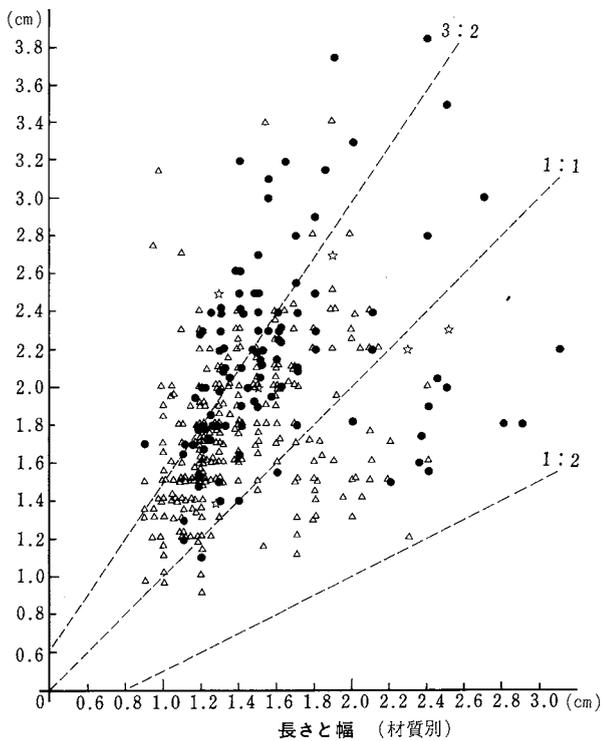
形態的類別から除外した資料に、技術的に製作途中の失敗品と考えられる例がある。製作の進行度合いにより細別し、素材の全体成形時に留まる資料を失敗品1(178点、1・SB11-4・SB12-4・SB13-1・2)、成形後、基部の意識的作出のある資料を失敗品2(81点、2～11・SB11-3・SB29-8)とした。

欠損は部位としてBが、状況でハが多く、欠損率は84%である。

出土はIIU・V区、IVA区、上段と中段に分布。特に黒曜石製はU17に局所的な集中が認められる。

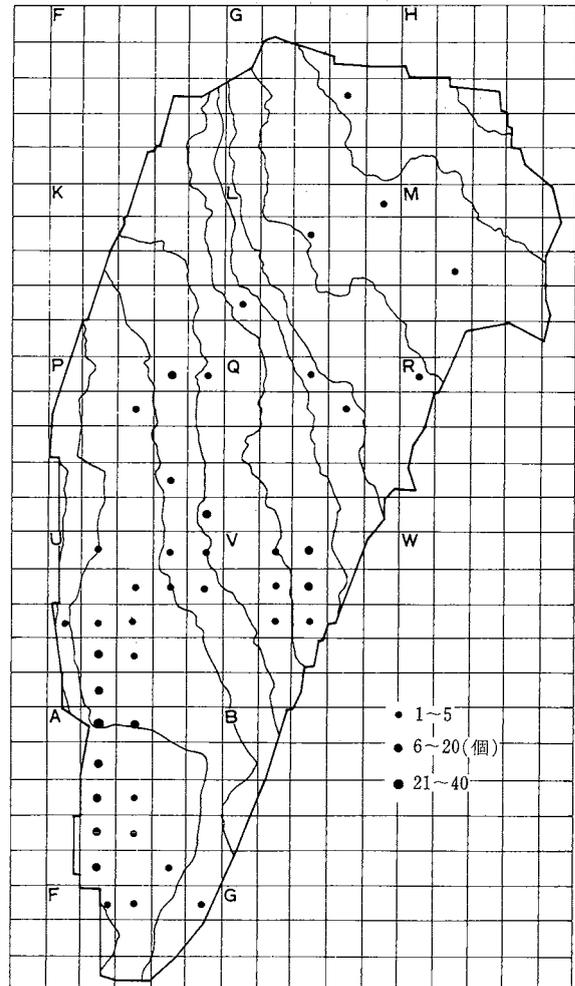
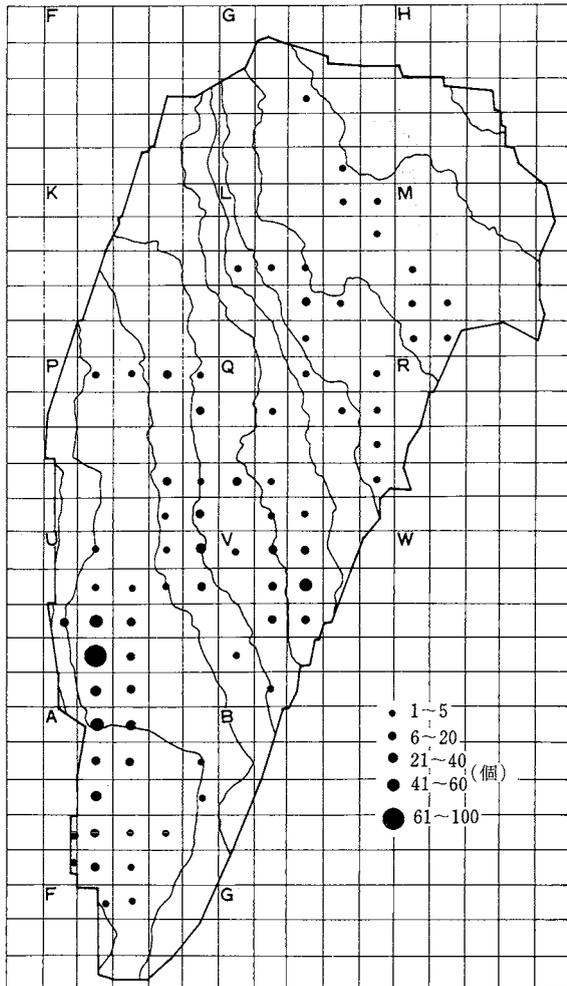
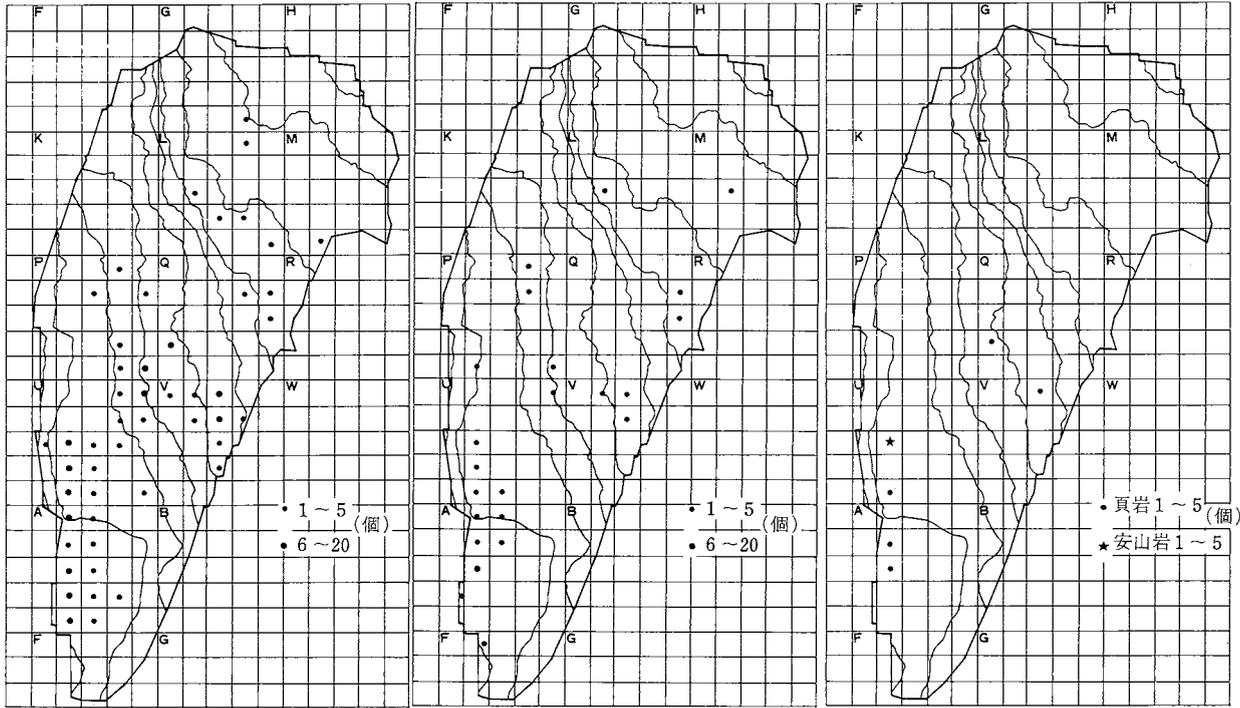
第9表 石鏃属性表

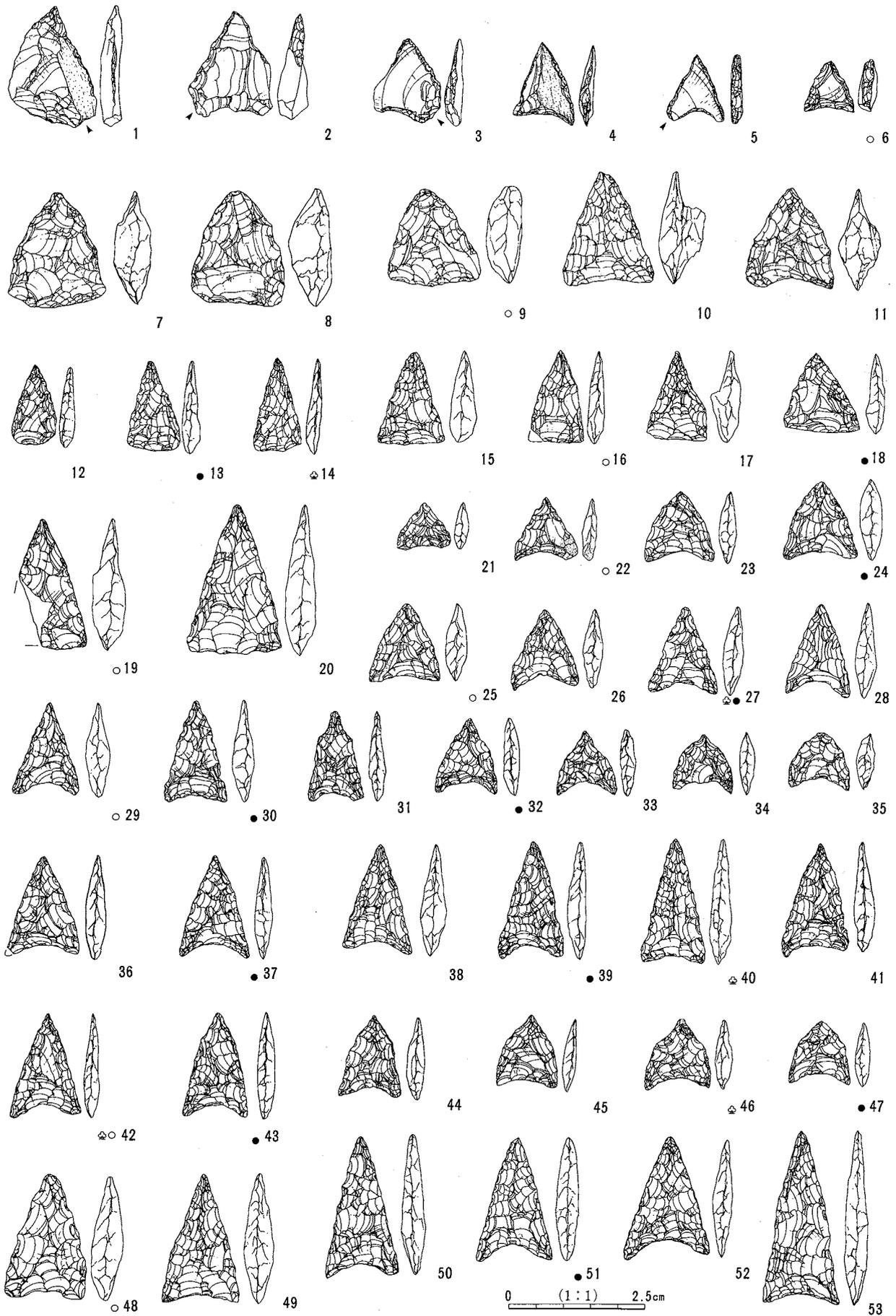
平均値	法量(全体値)				計上数	基部形の数				側辺部形の数				素材		欠損状況の数						自然面	総数			
	属性類	長さ<mm>	幅<mm>	厚さ<mm>		重さ<g>	A	B1①	B1②	B2	a	b	c	d	縦長	横長	A	B	C	D	E			F	イ	ロ
I A	18.6	13.1	4.8	1.00	22	60	0	0	0	38	0	17	5	10	12	18	19	0	0	3	2	8	6	25	2	61
B 1	17.3	12.7	4.0	0.62	147	0	245	174	0	236	3	76	109	34	54	139	166	0	1	10	6	96	47	167	9	429
B 2	19.2	13.1	4.0	0.61	59	0	0	0	234	160	3	36	36	4	8	84	126	1	1	3	2	43	46	126	3	236
II	29.5	16.3	4.2	1.49	2	3	6	1	0	5	0	4	1	0	1	4	2	0	0	0	5	1	0	8	0	10
失敗1	19.7	18.6	6.2	2.00	97	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	178
失敗2	19.3	16.6	5.9	1.54	27	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	81



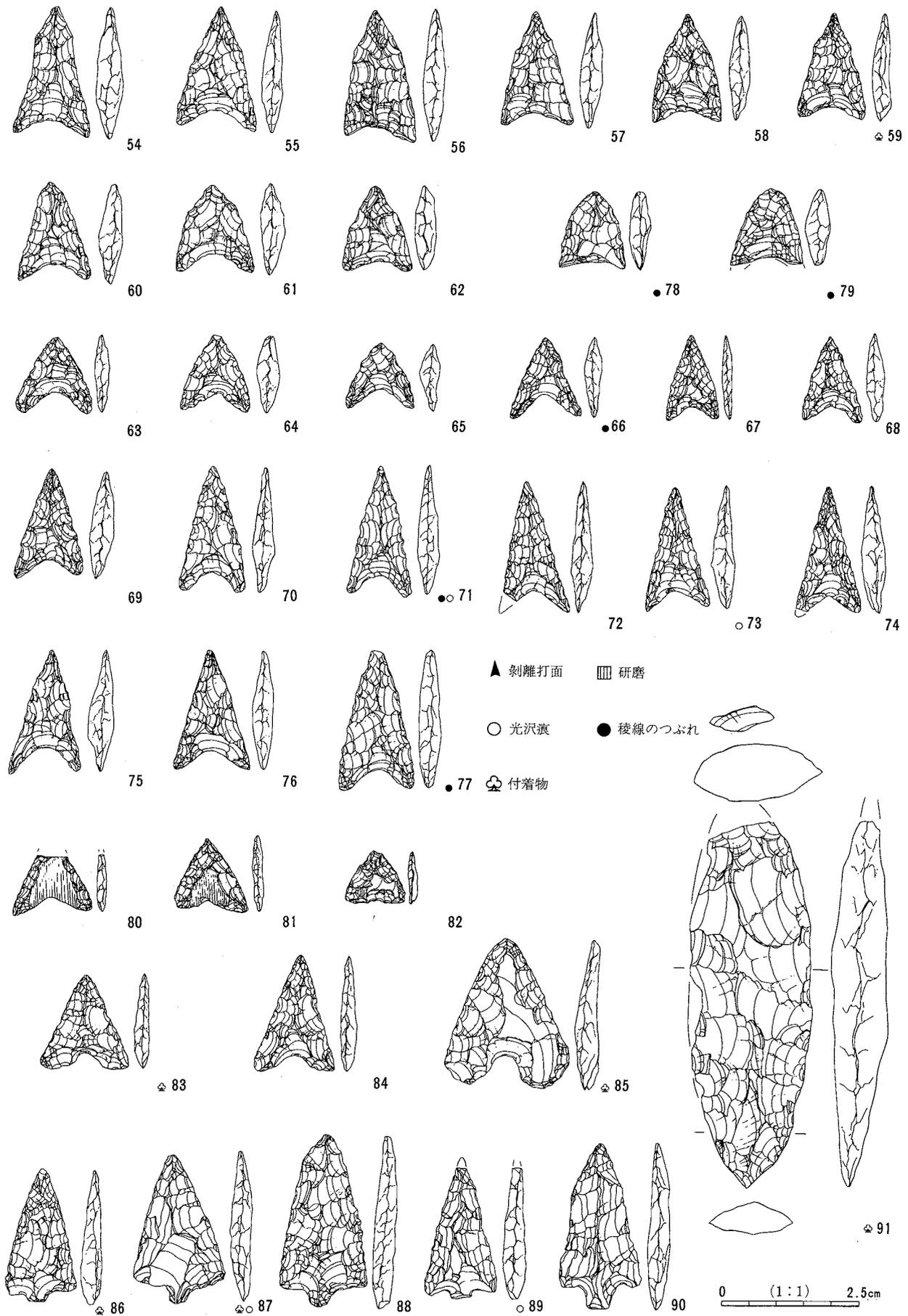
第94図 石鏃法量相関図(材質別)

第95図 石鏃法量相関図(製品と失敗品)





第101図 石鏃実測図(1)



第102図 石鏃実測図(2)

⑦ 打製石斧 (第103~107図、第10表、P L23)

大形の打製石器で、主に掘削などの作業が想定できる資料。堆積岩を主体とし粘板岩14・砂岩9・頁岩7・安山岩5、計35点を収集。製作法は剥片を剥取し、敲打成形するものに限られる。形態の類別は全体形とその構成要素(頭部・胴部・刃部)の形状に基づき実施した。概括し全体形を類別すると4類5細別となる。

A類-全体の形状を長方形に整えるもの(12点、1~4)。

B類-半月形(B1類)に整えるもの。B1類を基本形とし、1側辺のえぐりが強いものをB2類とする(B1類1点、6、B2類11点、7~12)。

C類-三角形に整えるもの(3点、13~15)。

D類-瓢形に整えるもの(1点、16)。

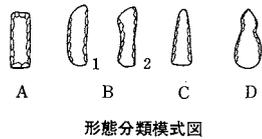
ほか、不明なもの7点がある。

頭部の形態には、素材剥離時の縁辺をそのまま残す例と加工成形する例があり、両者を区別することなく類型化すると4類。直頭状の1類(1点、5)、尖頭状の2類(3点、13~15)、円頭状の3類(4点、1・6・7・16)、斜頭状の4類(3点)である。刃部形は使用状況を反映し、類別は使用後の形状変化を示す。直刃1類(2点)、尖刃2類(1点、9・15)、円刃3類(12点、1・3・7・8・11~13)、斜刃4類(7点、2・6・10・16)に類別できる。刃部の作出は原則的に剥離時の片面・片刃(b類、8点)を利用するが鋭利な刃部を残すものが少なく、使用および刃部の再生を経て両面・両刃(a類、14点)と変化したものが大部分である。また、自然面の残存状況では頭部または全面におよぶ例が主体。各形態類別と全体形との相関は第10表に示す。

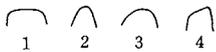
第10表 打製石斧属性表

属性分類	法量(全体値)				計上数	(機能部値)		使用痕跡					刃部平面形				断面形		頭部形			
	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>		刃幅<cm>	刃部角<度>	長さ<cm>	幅<cm>	刃角<度>	型		1	2	3	4	a	b	1	2	3	4
											摩	線										
A	13.2	5.2	1.8	180	1	5.1	14	1.8	3.9	55	7	5	2	0	4	2	6	2	1	0	1	2
B2	0	0	0	0	0	5.7	14	2.7	4.6	45	10	8	0	1	5	5	6	5	0	0	0	1
B1	8.4	5.4	1.2	75	1	3.7	20	3.0	3.4	44	2	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0
C	13.2	5.5	1.3	90	1	5.6	12	3.3	4.1	34	0	0	0	0	1	0	1	0	0	3	0	0
D	9.8	7.7	2.3	155	1	7.8	19	3.5	7.1	52	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0

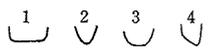
属性分類	素材			自然面							欠損状況								総数	
	縦	横	不明	a	b	c	a・b	b・c	a-c	側面	1	2	3	4	5	6	7	8		完形
A	1	8	3	1	0	0	0	0	1	0	0	2	1	2	3	2	0	1	1	12
B2	0	9	2	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	4	4	2	0	0	0	11
B1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
C	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	3
D	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1



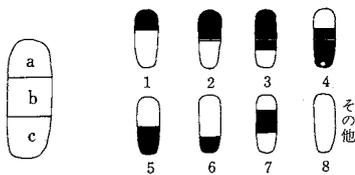
形態分類模式図



頭部の類型

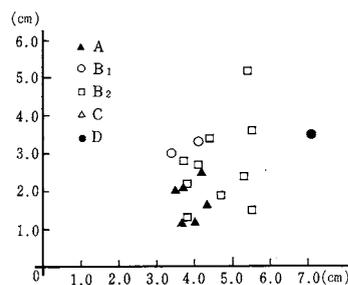


刃部の類型

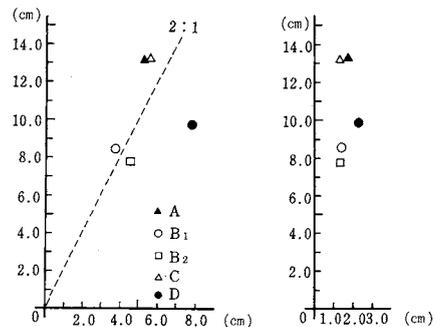


自然面の位置

欠損部位の類型



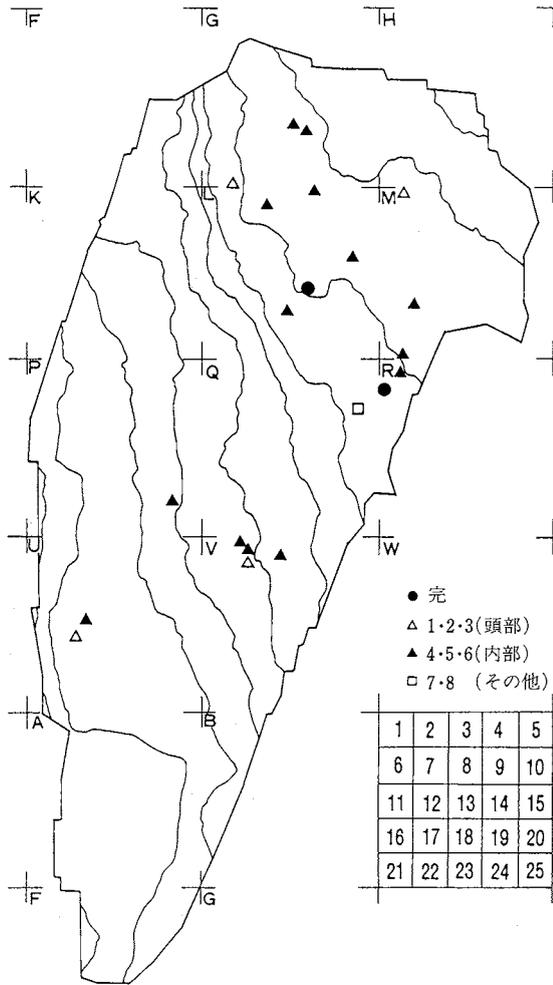
使用痕の長幅



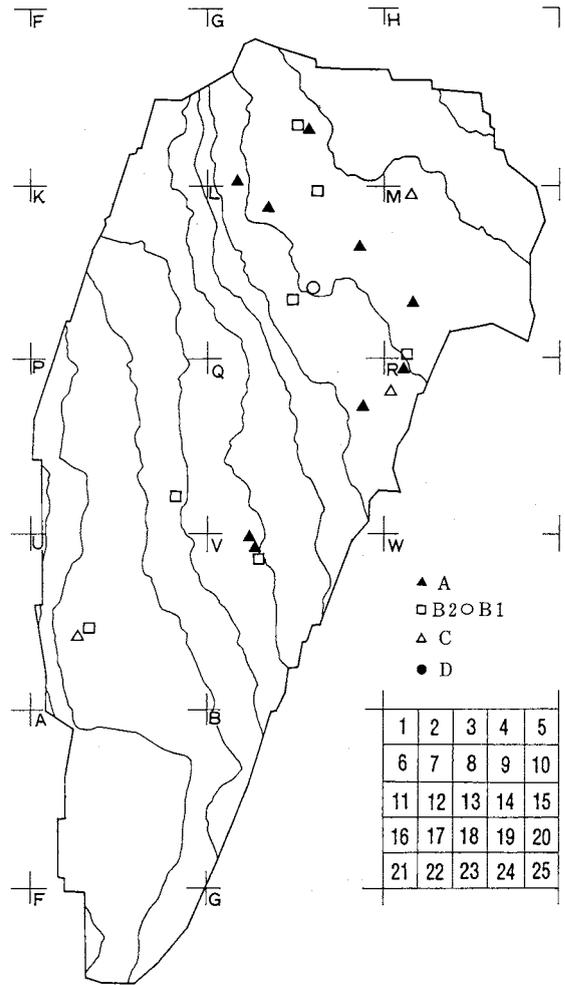
全体の長さ & 幅

全体の長さ & 厚さ

第103図 打製石斧法量相関図



第104図 打製石斧出土分布図 (欠損別)



第105図 打製石斧出土分布図 (形態別)

機能的視点では刃部に摩耗・線状痕を、基部(胴部・頭部)に装着痕を確認する。観察はルーペを使用し全資料に対して実施。倍率は×5・×20とし、結果19点(約54%)に摩耗痕が観察できた。発達した線状痕は刃縁に直行し、D類1点のみ50度前後の開きを示す。摩耗痕の範囲では大きさの点でD・C・B・A類と序列し、瓢形のD類が最も長く、幅広い。また、B2類とD類は刃部角が他よりも大きく、A類とD類では刃角が大きい。特にA類では上下両端部の使用例3点が存在する。

法量については第10表に各形態別の平均値をまとめた。従前の分類ではAとBが短冊形、Cが撥形に相当する。欠損状況では圧倒的に刃部破片が多いが、C類には頭部の残存率が高い。

出土はすべて遺構外でII G・L・RおよびIV区、中段から下段に分布している。

⑧ 磨石・凹石・敲石 (第108~111図、第112図1~22、第130・131図、第11表、P L 20・24)

スル・タタクなどの作業が想定できる資料。特徴的で頻繁な用法に基づき磨石・凹石・敲石を類別した。総数26点を収集。堆積岩を主体とし砂岩19点・安山岩4点・閃緑岩2点・花崗岩1点である。製作法は河原石をそのまま使用する1種(19点)と、素材縁辺部に敲打痕を伴うもの2種(6点)がある。

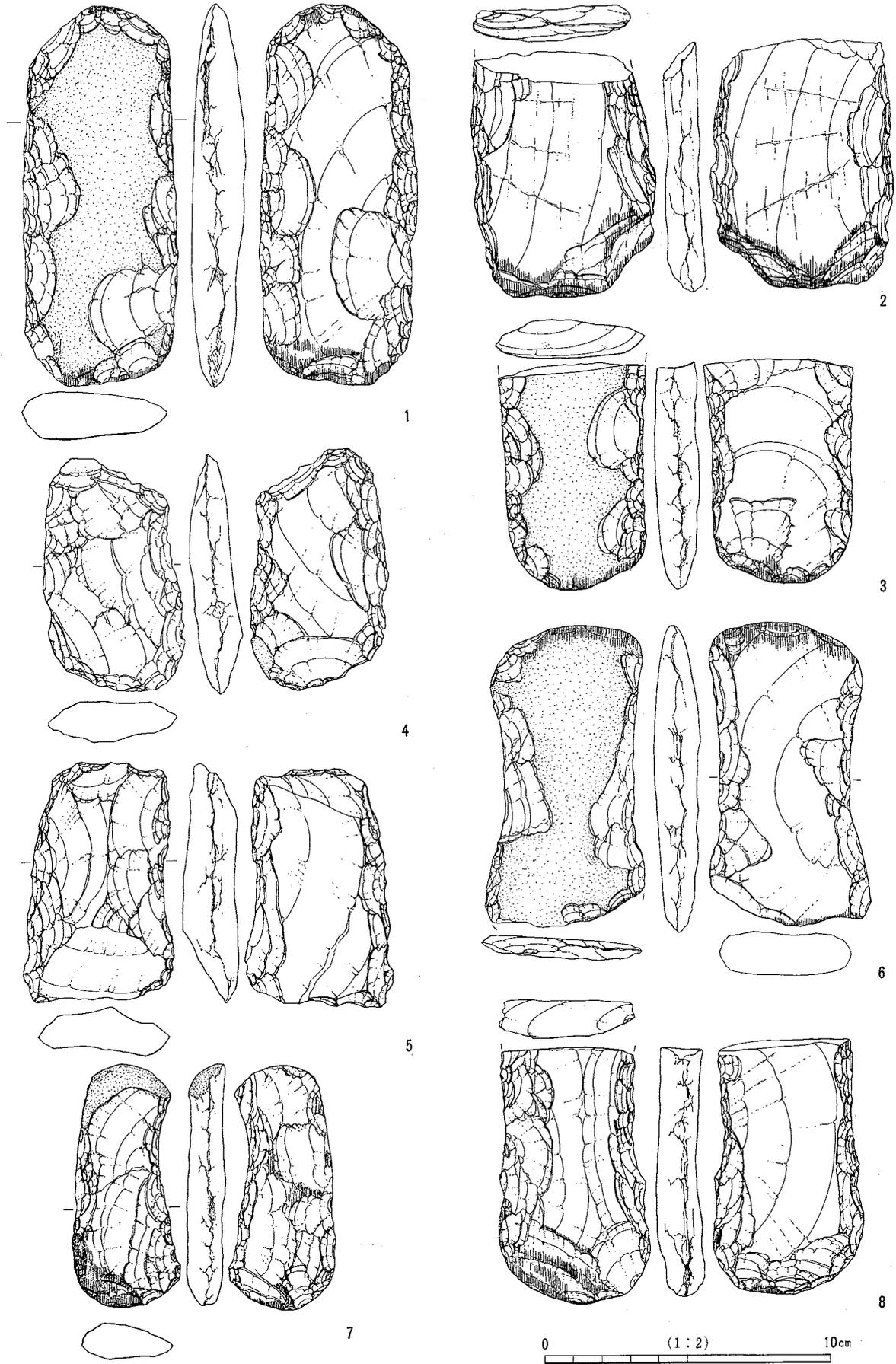
形態的視点から類別を行うと、3類6細別となる。

A類—円形で扁平を基本とするもの(1A類5点、1・2・4・21・SB26-12、2A類3点、3・7・12)。

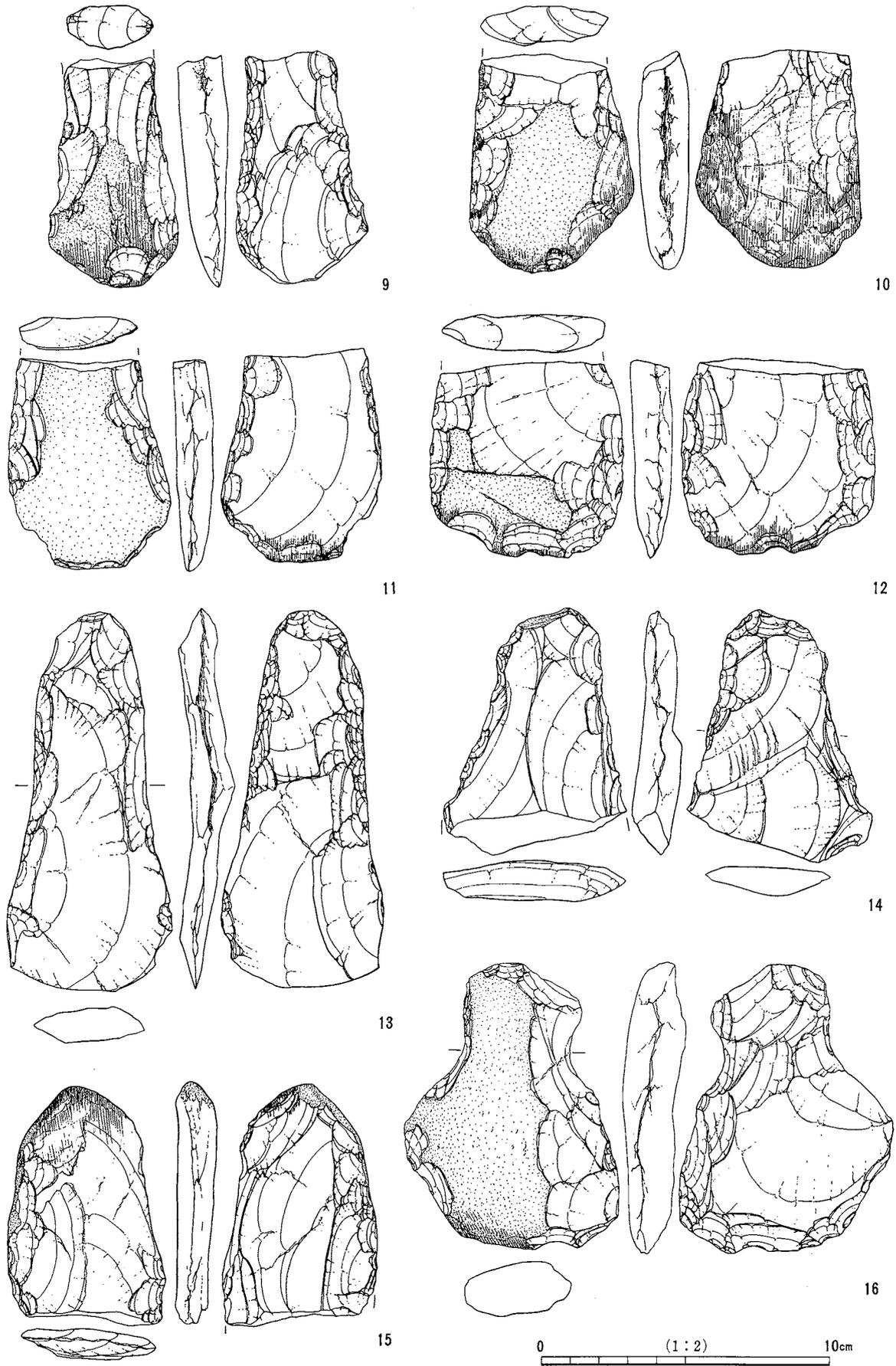
B類—楕円形を基本とするもの(1B類3点、5・6・SB11-9、2B類3点、9・10・11)。

C類—長楕円・長方形を基本とするもの(1C類1点、8)。本類中に特殊磨石10点(2C類14~22・SB26-13)を含む。

ほか敲石1点(13)がある。



第106図 打製石斧実測図(1)



第107図 打製石斧実測図(2)

機能的視点からの類別は、スル・タクの2大別7細分が可能。観察はすべてルーペを使用し、×5・×20とする。この段階で使用面の不確かな11点(総数外)は除外した。

摩耗面

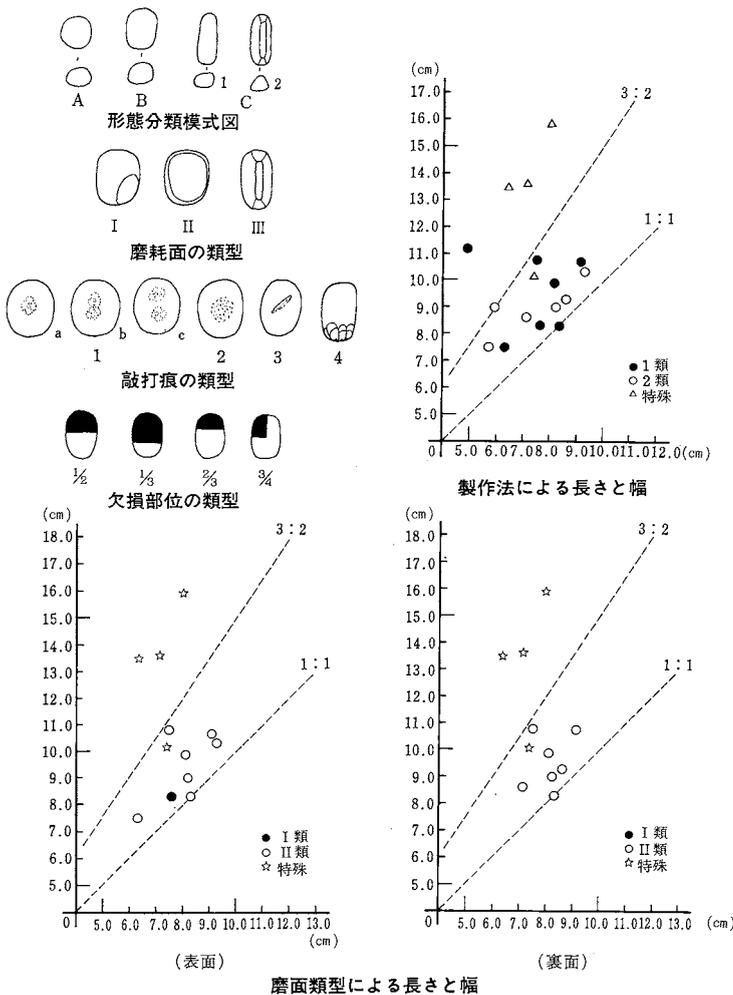
I類—使用面が部分的な1カ所に限られるもの。範囲は230cm²で単純表面積の56%である。運動方向はほぼ単一で、面の転移は原則として認められない(3点、2・4・21)。

II類—使用面が面全体に広がるもの。範囲は306cm²で単純表面積の60%である。運動方向は長軸と20~40度前後の開きが主体。面の転移は表裏転換のかたちで行われる(表17点、1・3・5~7・14~20・SB11-9、裏17点、3・5・6・9・12・14~20・SB26-12)。

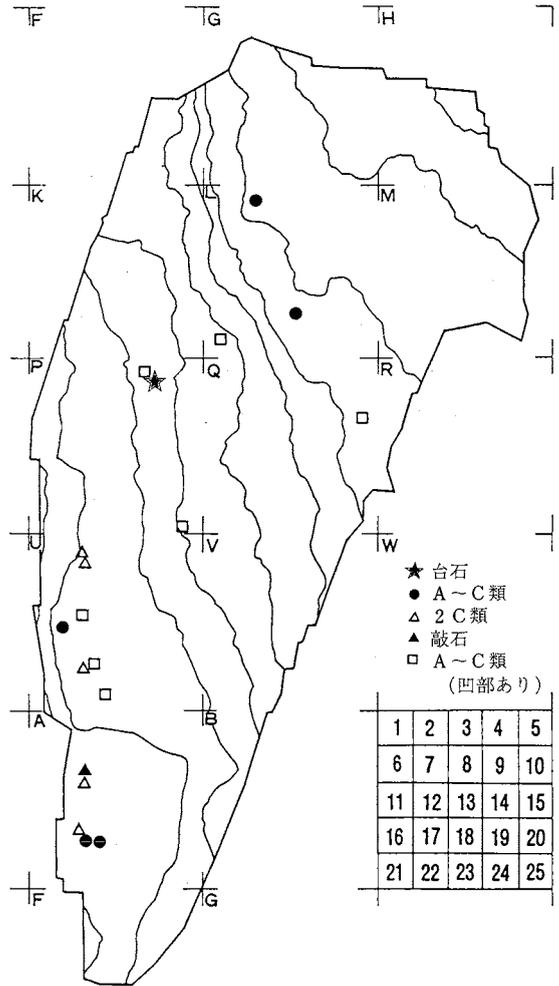
III類—極度な一側面使用が認められるもの。特殊磨石(9点、14~22・SB26-13)。

第11表 磨石・凹石・敲石属性表

平均値	法量(全体値)				計上数	摩耗面・表			摩耗面・裏			摩耗面・側			敲部形状(表)				敲部形状(裏)				敲部側面				欠損状況				総数
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		I	II	III	I	II	III	I	II	III	1	2	3	4	1	2	3	4	1/2	1/3	1/4	1/5	完形				
1A	8.8	7.7	4.4	375	3	3	2	0	0	1	0	-	-	-	2	0	0	0	1	0	2	0	2	1	1	0	0	3	5		
2A	9.5	8.7	4.0	427	3	0	2	0	0	2	0	-	-	-	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	3		
1B	9.7	8.0	4.4	465	3	0	3	0	0	3	0	-	-	-	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	3		
2B	8.4	6.2	4.9	292	3	0	0	0	0	1	0	-	-	-	2	0	1	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	3	3		
1C	11.2	4.9	4.5	370	1	0	0	0	0	0	0	-	-	-	2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1		
2C	14.3	7.2	4.8	565	3	0	8	0	0	8	0	0	0	9	0	1	1	0	-	-	-	-	8	5	0	0	0	4	9		
	10.1	7.4	7.6	660	1	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	-	-	-	-	1	0	0	0	0	1	1		
敲石	11.1	9.5	8.0	910	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1		



第108図 磨石・凹石・敲石法量相関図



第109図 磨石・凹石・敲石出土分布図

敲打痕

1類—小さな粒状の単位(0.1~0.5cm)が集合し、凹部を形成するもの。花卉状に広がり浅い1a(表6点、9・10・12、裏3点、11・12)と2カ所以上にわたり連結した1b(表1点、SB26-12)、独立した1c(表1点、8)がある。固定的な使用部はタタク・ワル作業の受け手が想定できる。

2類—アバタ状を呈するもの(表3点、5・6・8・9・11・13・14・16~19・SB11-9)。乱雑な痕跡はタタク・ワル作業の持ち手を想定。

3類—細長い溝状のもの(表4点、8・9・11・15、裏3点、8・21・SB11-9)。タタク・ワル作業の受け手を想定。

4類—小剝離痕を伴うもの(1点、10・20・21)。タタク・ワル作業の持ち手が想定される。

以上の属性および作業の想定は独立したものではなく、大多数は併用あるいは転換した使用結果を示す。総体的に摩耗面の発達度は弱く、敲き部が顕著。3類が主で機能的には敲き具が中心と考えられる。C類には磨耗面の発達が著しいが、他類と痕跡上の差異は確認できなかった。

法量の平均値は第11表に示したが、厚さの点で各類とも5.0cm以下である点、使用后あるいは使用時の数値として特筆できる。

欠損状況ではほとんどが完形品であるが、C類では大半が2分の1欠損の資料である。

出土はIIU区およびIVA区、上段に分布。この点は剥片剝離作業に関連する資料と状況を同じくする。

⑨ 台石(第112図23、第130図10、PL20・24)

スル・タタク(ツブス)などの作業が想定でき、置いて使用された資料。火成岩である閃緑岩2点が収集された。両者とも河原石をそのまま使用し、形態は方形の崩れた形態を呈する。

機能的にはスル・タタク作業で、広範囲にわたり摩耗面(II類)が認められる。表面積は大きなもので685cm²を計測するが、皿状にくぼむことがないため容量は少ない。使用部は局所的ではなく、手の運動としては大きな上下あるいは回転の運動が想定できる。

法量はそれぞれ56.5×40.5×9.3cm、31.8kg(第130図)と20.0×21.6×6.5cm、4.5kg(第112図)である。2点のみであるため平均化はあまり有効ではないが、厚さの点で8.0cm前後と一致した値を示す。

欠損はなく、2点とも完形品である。

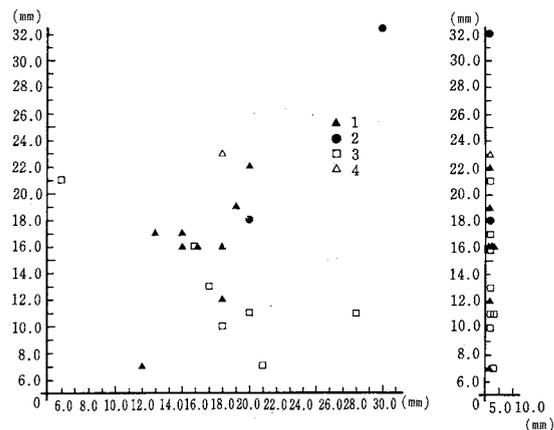
出土はSB11床面から1点、遺構外IIP区・中段から1点である。

⑩ 石匙(第113・114・117・118図、第12表、PL20・25)

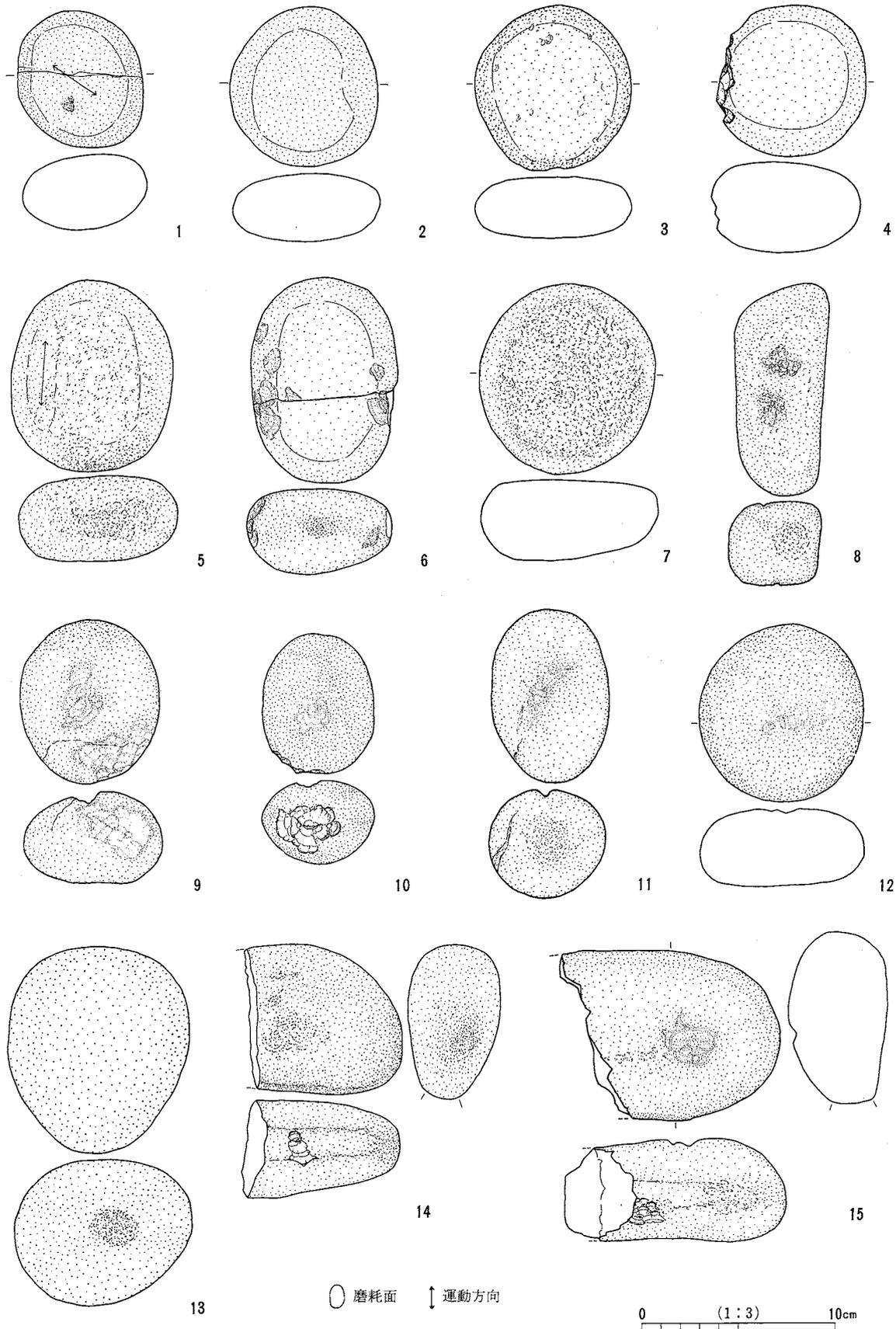
切る・掻く等の作業が想定でき、茎部(つまみ部)を有する資料。堆積岩を主体としチャート25点・頁岩8点・黒曜石34点、総数67点である。製作法は大きめの剥片を素材とし加工を施すもので、茎部のみ作出する1種と全体に整形加工する2種に大別できる。茎部は全長の2分の1以上あるものを大(8点、13~15)、それ以下を小とする。茎部の作出位置により類別を行った。

A類—刃縁に平行(延長上)して茎部が作出されるもの。いわゆる縦形(37点、1~6・SB26-9・10・SB29-15)。

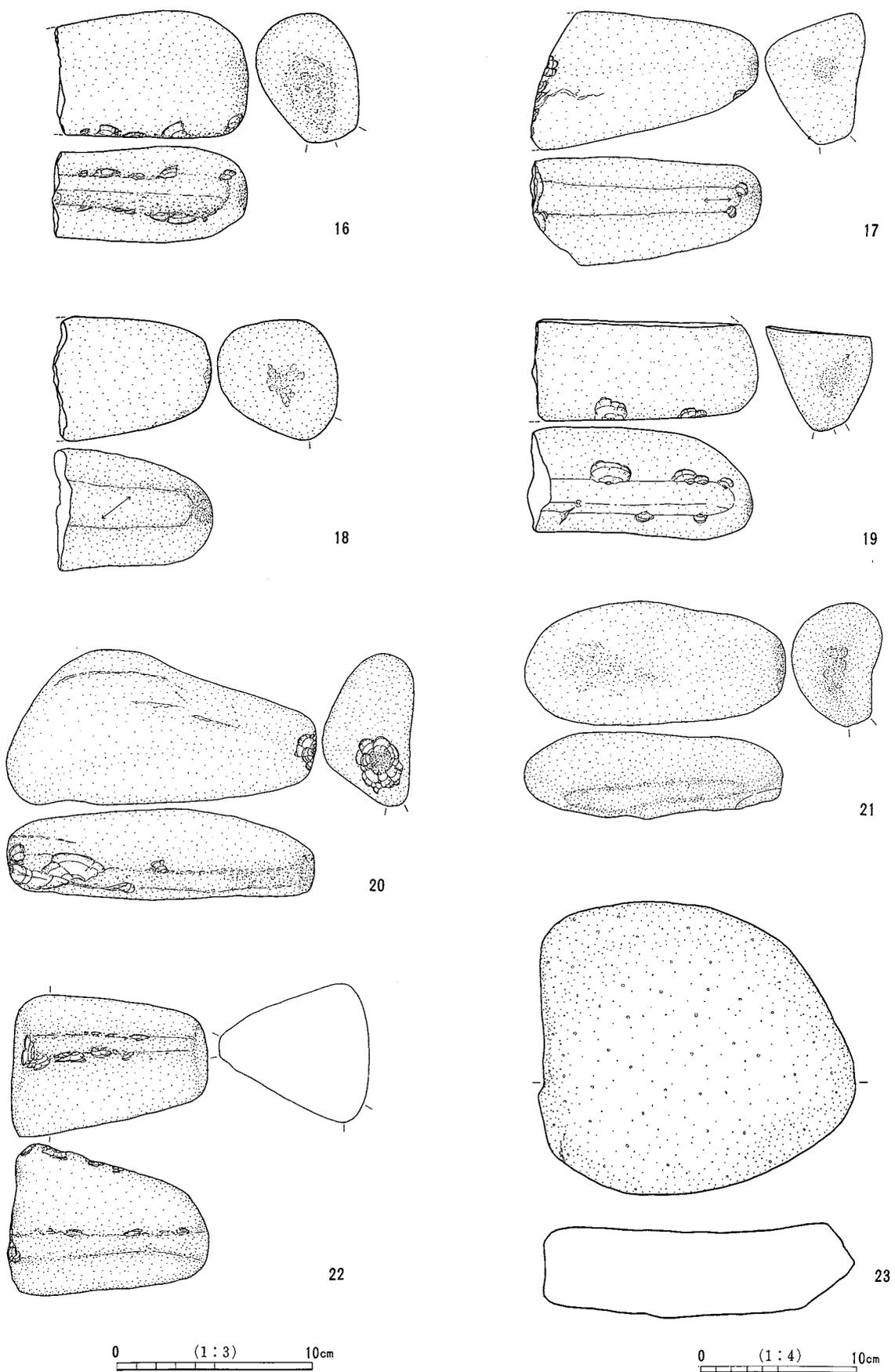
B類—刃縁に直行(対峙)して茎部が作出されるもの。いわゆる横形(15点、14~20)。



第110図 敲打痕の長さ・幅・深さ



第111図 磨石・凹石実測図(1)



第112図 磨石・凹石(2)・敲石・台石実測図

C類-45度前後で斜めに作出されるもの(8点、7~13・SB11-8)。

このほか不明7点がある。

刃部の形態は直刃・外湾刃が主体。刃付けは両刃と片刃がほぼ同数で、刃角はいずれも30~40度内である(第12表)。

機能的側面の観察は実体顕微鏡を使用し、全資料に対して実施。倍率は×100までとし、結果31点(46%)に使用と考えられる痕跡を確認した。痕跡には光沢と稜線のつぶれ二者が認められたが、対象物については判断がつかなかった。作図中抜き出した刃部の記号部分が痕跡の範囲に相当する。また第117図7と第118図15の資料については、試験的に走査電子顕微鏡にて×150まで観察を行い、併せて元素解析を実施した。詳細は第5節(3)に記す。

法量については形態的類別に見合う差異は認められなかった。詳細は第12表に示した。

出土はIIU区12~18、IVA区2・7・12を中心とし上段に集中、中段には散在している。形態別・材質別に分布差は認められない。

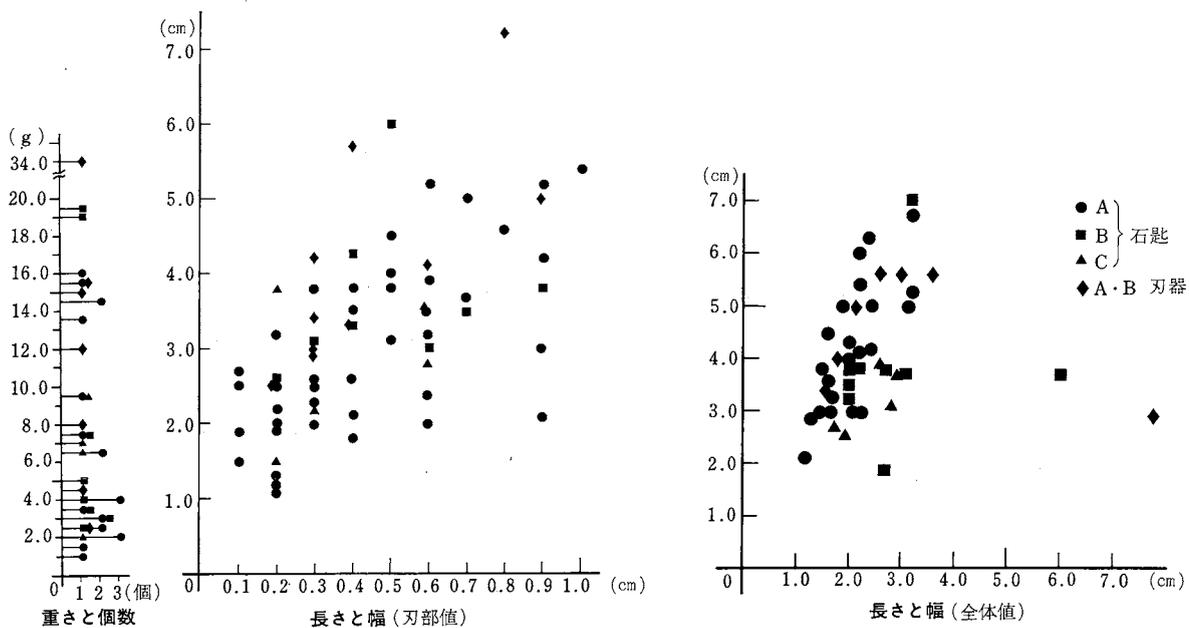
① 刃器(第115・116・118・119図、第12表、PL20・25)

項目中提示した器種以外で、刃部を有し切る・搔く等の作業が想定できる資料。刃部に加工を施す例(2種・スクレイパー)と刃つぶれ・刃こぼれ等のある例(1種・使用痕跡を留める石屑)を包括する。前者は黒曜石14点・チャート9点・頁岩6点・安山岩2点、総数31点である。後者は黒曜石318点・チャート45

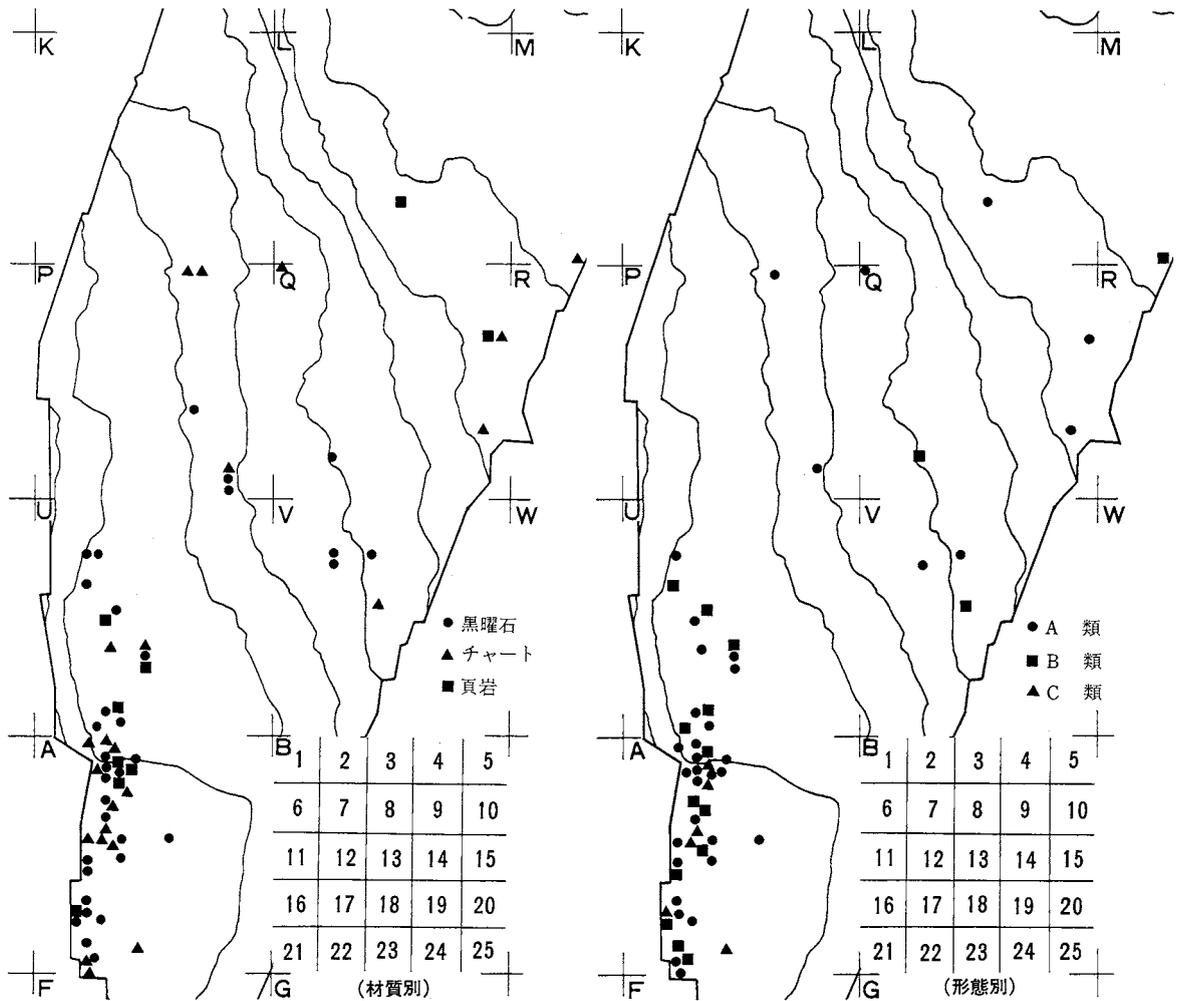
第12表 石匙属性表

属性分類	法量(最大值)	法量(最大值)				計上数	刃部					総数			
		長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>		刃角	刃長<cm>	刃幅<cm>	平面形			断面形		
										外直	内片		両		
石匙	A	4.2	2.1	0.7	6.1	22	37	3.1	0.5	10	16	2	17	13	37
	B	3.8	2.9	0.7	7.2	9	35	3.6	0.5	8	5	2	5	10	15
	C	3.2	2.4	0.7	5.1	5	31	2.7	0.3	3	5	0	2	5	8
刃器	A	3.7	2.5	0.8	8.2	16	48	3.8	0.4	-	-	-	13	4	20
	B	2.3	1.7	0.6	3.0	11	63	1.7	0.4	-	-	-	11	0	11
小形	C	2.0	1.8	0.6	2.0	285	-	1.4	0.2	-	-	-	-	-	290
	D	2.0	1.7	0.6	1.7	79	-	1.0	0.2	-	-	-	-	-	82

複刃の場合は2回計上



第113図 石匙・刃器法量相関図



第114図 石匙出土分布図

点・頁岩 8 点・安山岩 1 点、総数 372 点である。

2 種の資料につき、技術形態的視点から類別を行うと 2 類。

A 類—素材の長辺に平行し、緩斜度の刃部を作出するもの (20 点、21~24・S B 29-14)。

B 類—素材の長辺に直行し、急斜度の刃部を作出するもの (11 点、27~32・S B 11-7・S B 29-12~14)。

1 種につき、機能的視点から類別を行うと 2 類。

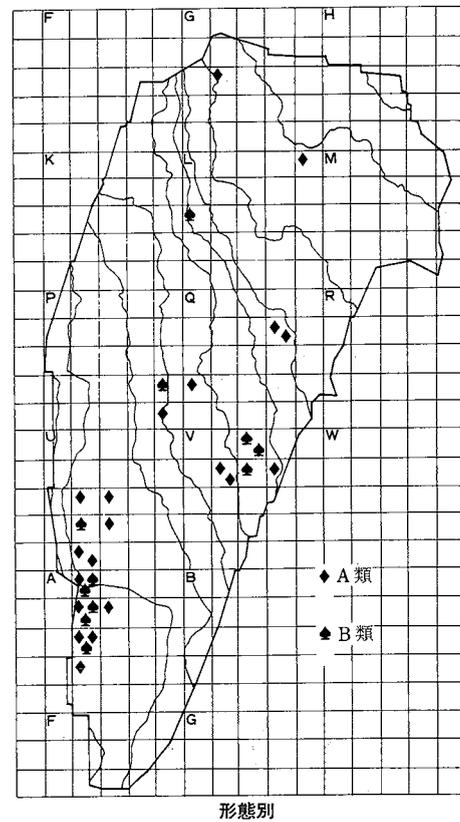
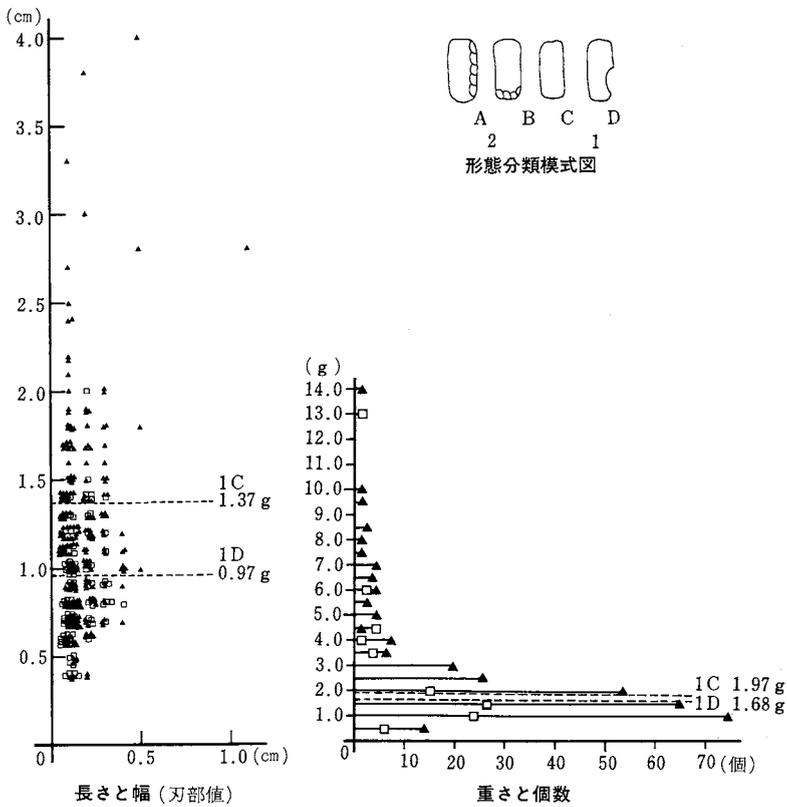
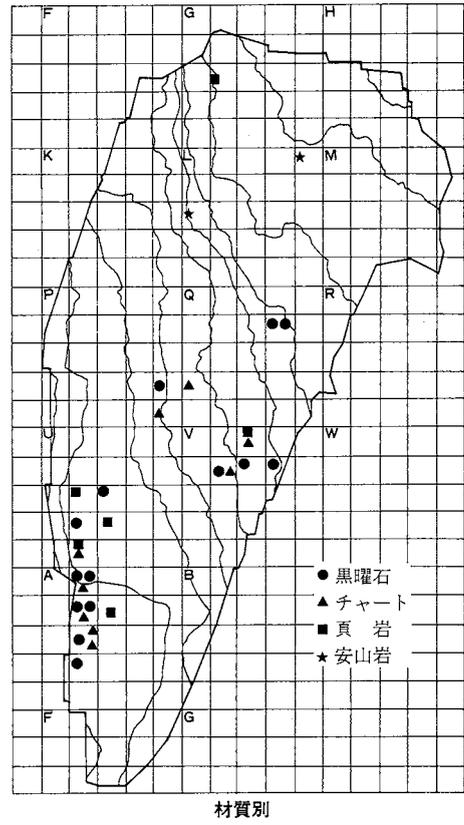
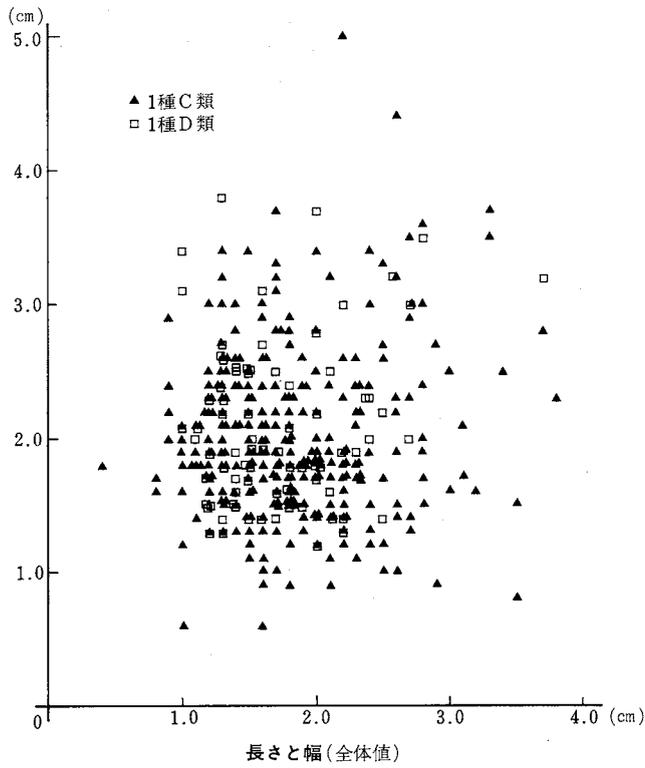
C 類—基本的には加工を施さず、素材の縁辺を刃部とするもの (290 点、S B 11-6・S B 12-6・S B 29-10)。

D 類—加工を施さず、抉入状の刃部となるもの (82 点、25・26・S B 12-7・S B 26-8・S B 29-11)。

刃部の形態は A 類に直刃、B 類に外湾刃が主体。刃付け (刃部断面形) は大部分の資料が片刃で、基部では剥片剥離打面をそのまま残す無加工品が主体である。

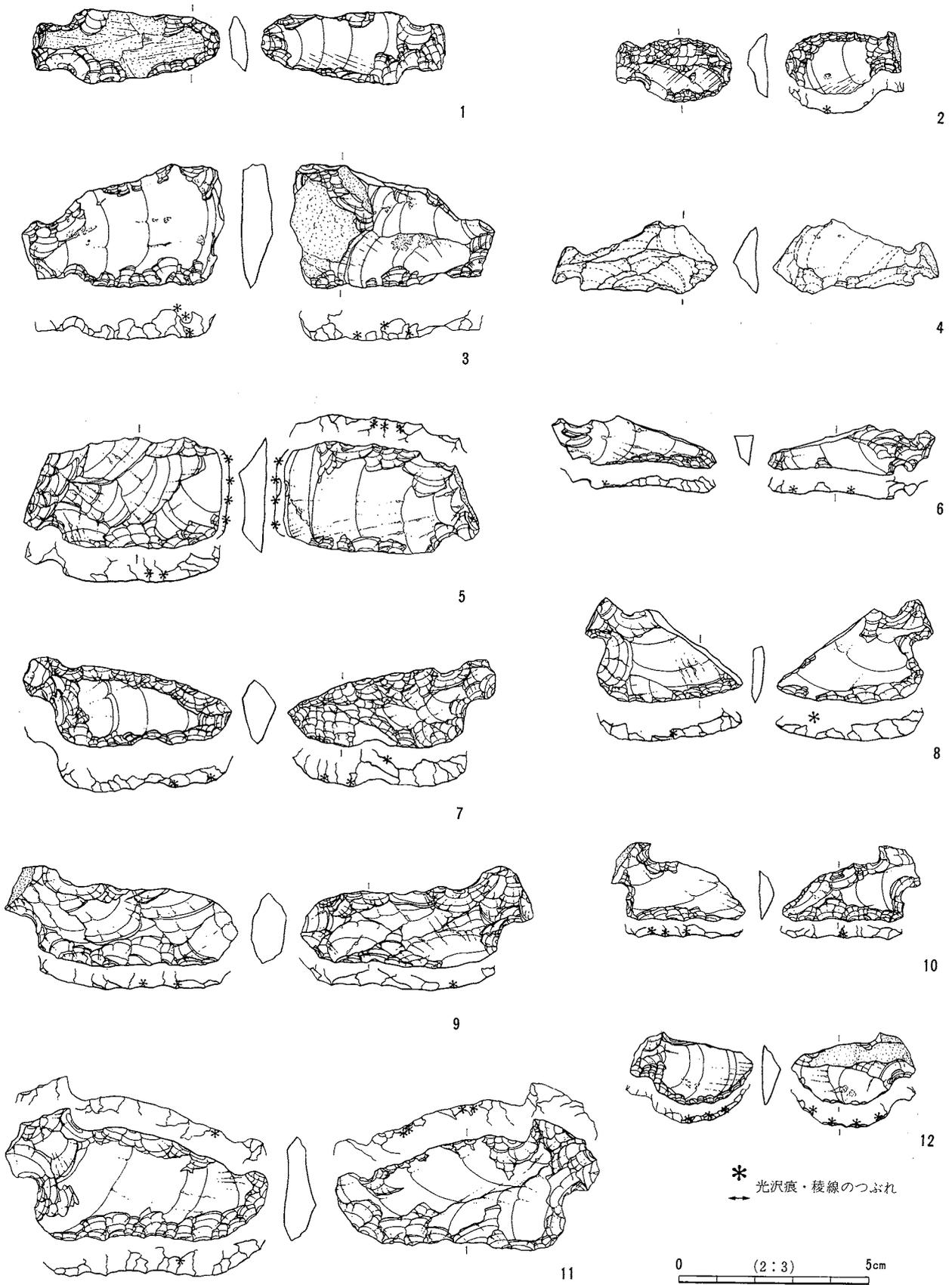
機能的視点の観察は実体顕微鏡を使用し、石匙同様に行った。結果光沢痕跡および稜線のつぶれを確認したが、対象物の推定には至らなかった。2 種は全資料中 25 点 (81%) に痕跡を確認した。1 種については、肉眼で確認できる刃つぶれ状の痕跡の有無にかかわらず、すべての石屑類 (26,592 点) に対して×40 (SMZ-2) にて実施した。倍率が低く、資料が黒曜石であることから、精度の点で課題が残るが、372 点 (1.4%) の資料に使用痕跡を認めた。作図は石匙と同法である。

分量では 2 種 A 類が重さの点で石匙と区分でき、刃角では 10 度前後の開きがある。2 種 B 類は長さと同

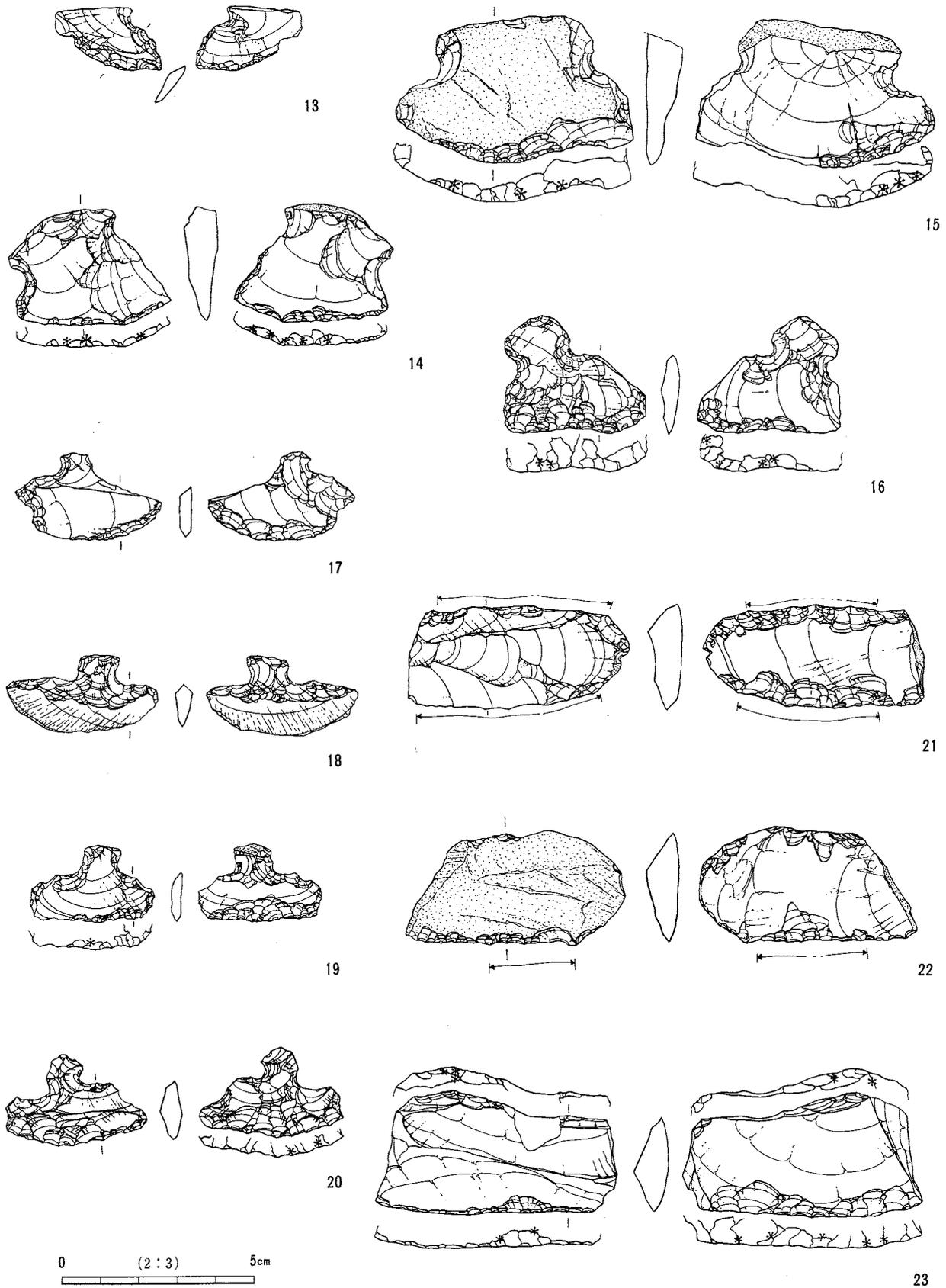


第115図 刃器法量相関図

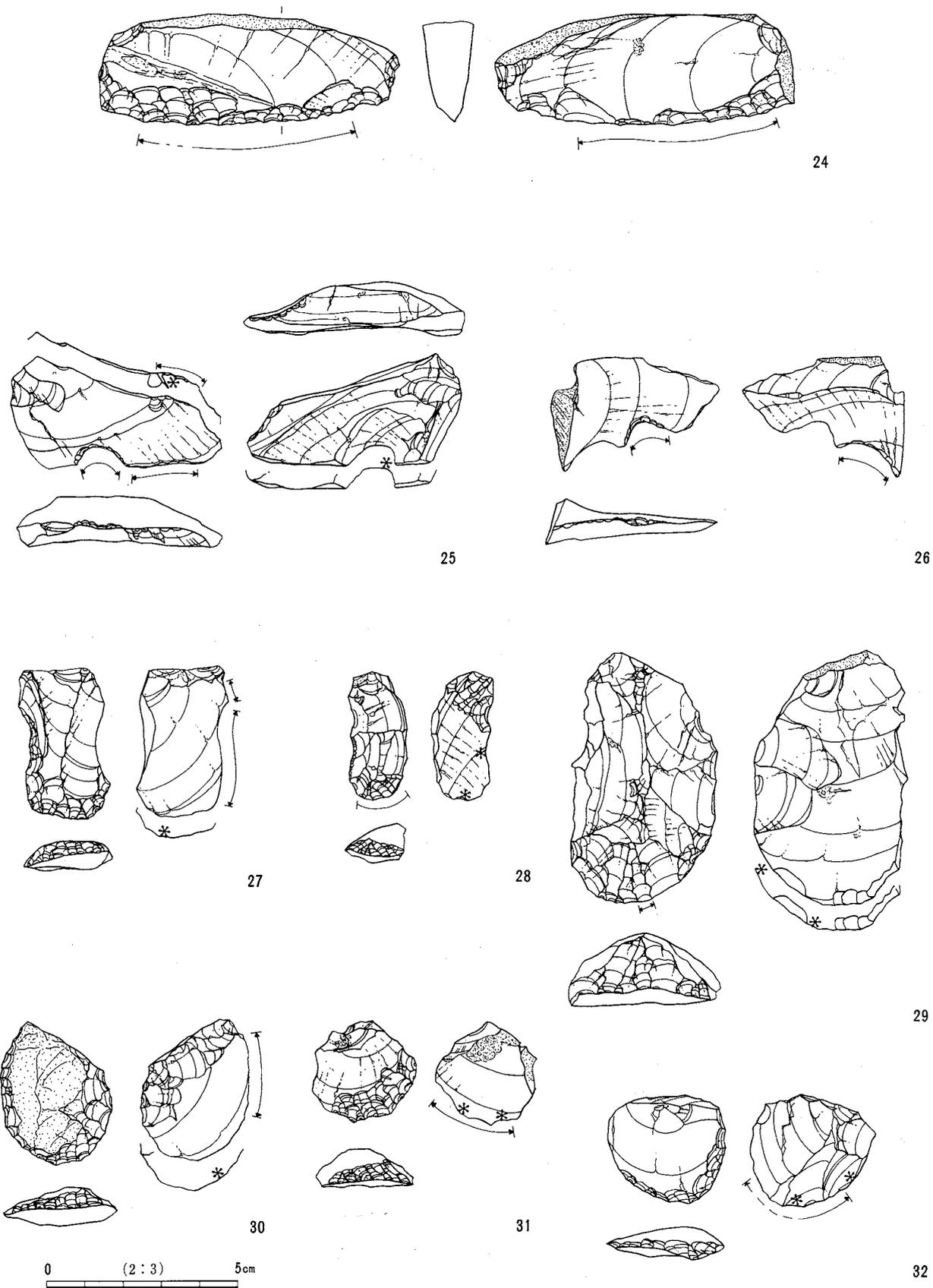
第116図 刃器2種出土分布図



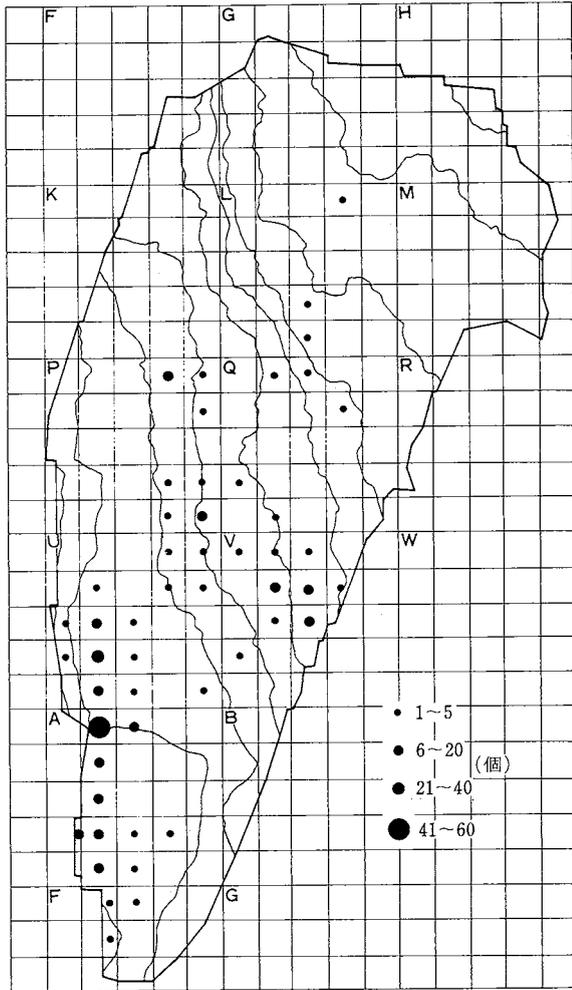
第117図 石匙・刃器実測図(1)



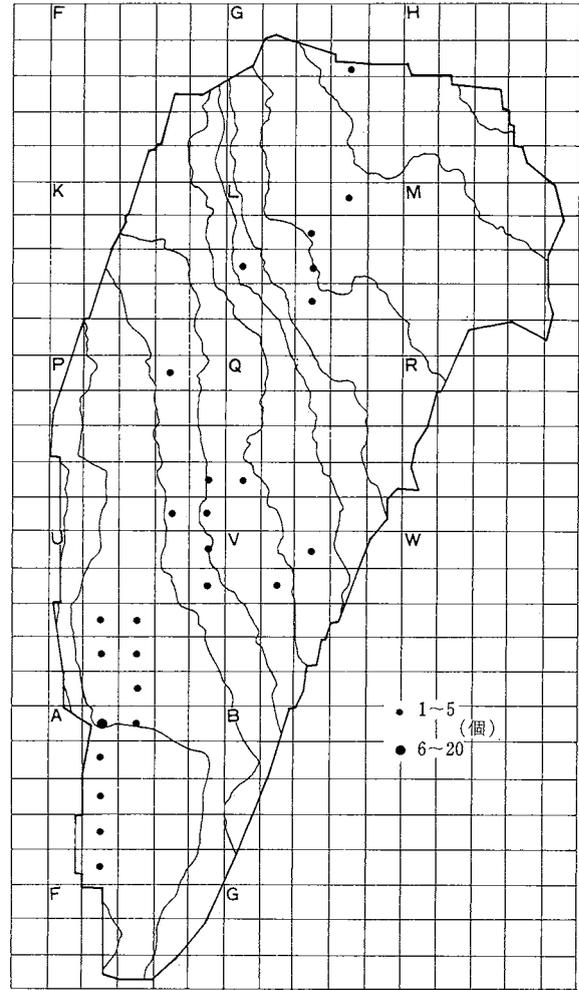
第118図 石匙・刃器実測図(2)



第119図 石匙・刃器実測図(3)



第120図 刃器1種出土分布図(黒曜石)



第121図 刃器1種出土分布図(チャート・頁岩・安山岩)

さの点で1種に近い値を示し、刃角は60度以上で他類と隔たりがある。1種はいずれも3.0cm以下と小さく、頁岩・チャート・黒曜石の順で小さな値を示す。頁岩は黒曜石のおよそ2倍の値を示す。

出土はII P区24・25、V区7～13の中段、U区12～22、IVA区上段に集中して分布する。形態的な分布差は特に認められない。

⑫ 磨製石斧(第122～124・132図、第13表、PL20・26)

伐採・切断の作業が想定できる資料。火成岩を主体とし蛇紋岩11点・泥岩1点、計12点である。製作は河原石を粗く剝離し研磨の工程をとる。側面部は研磨により形成され、外見的には擦り切り様を呈する。

形態的類別は全体形とその構成要素(頭部・胴部・刃部)の形状および大きさの属性に基づき類別した。

大形A類—全体を台形状に整え、最大厚で2cmを超えるもの(1点、1、失敗品1点、8)。

中形B類—大形A類と同義で法量として一回り小振りなもの(4点、2～5)。

C類—全体を長方形に整えるもの(1点、7)。

小形D類—中形B類と同義で法量として一回り小振りなもの(1点、SB29-17)。

E類—全体を三角形に整えるもの(1点、6)。

このほか、表面の剝落など形態不明3点がある。

頭部形態では2類。直頭状を呈する1類(3点、7・8)と尖頭状の2類(5点、1・2・5・6・SB29-17)である。刃部の形態は1類円刃(4点、1・2・4・6・7)と2類斜刃(2点、3)があり、刃部の作出は表裏面のいずれかに偏りのある両刃。基部横位断面形は凸形が主体。各類別と全体形との相関は前項

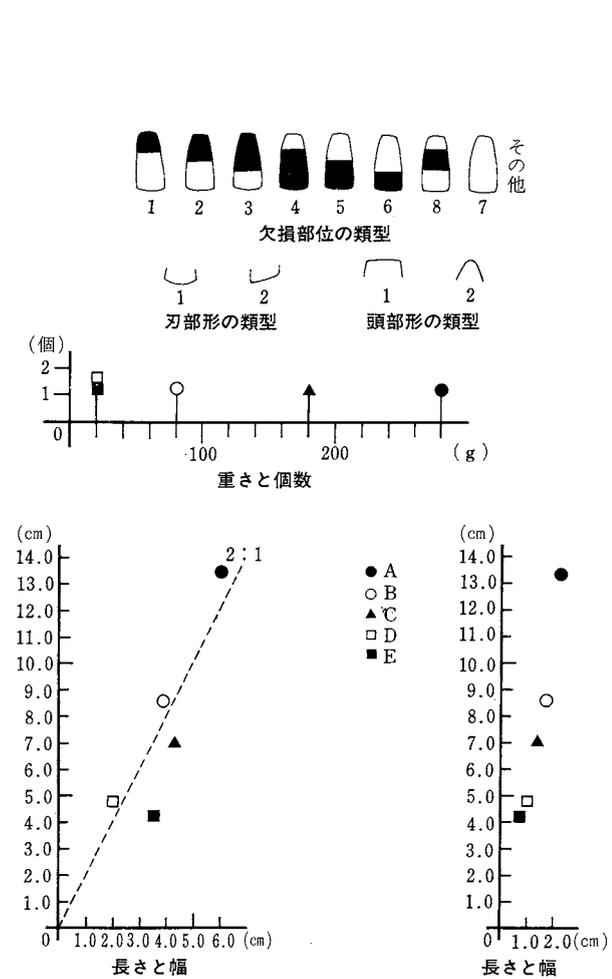
および第13表に負う。

機能的視点では刃部に摩耗・線状痕を確認した。観察はルーペと顕微鏡を使用し、倍率は×5・20、×100までとした。結果刃部6点中5点(83%)に痕跡が確認できた。作図中スクリーン部分・実線(刃部のみ抽出し実測)の表現が使用痕およびその範囲である。対象物の推定には至らなかったが、刃の衝撃が少なく線状痕の発達弱い点から考えると、硬質よりは軟質の対象物が、大きな破壊力よりは軽度の作業が予想できる。線状痕の入射角はA・B・D・E類で刃部と斜位(60度前後)に、C類ではほぼ90度に発達している。摩耗の範囲は長さでA類が1.0cmを超え、ほかはいずれもそれ以下の値を示し、幅では中形で3.0cm前後、小形では1.0cm前後の値を示す。

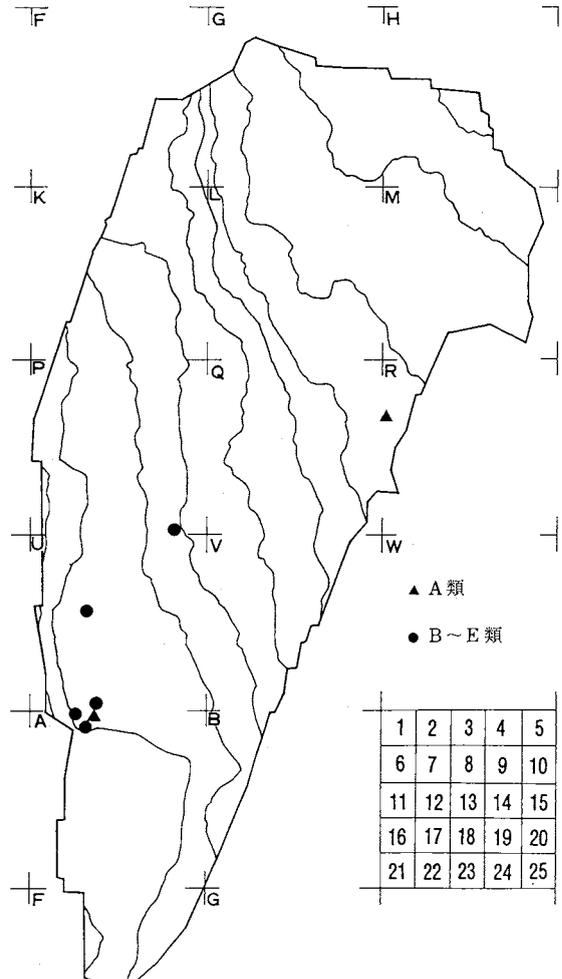
法量については第13表に形態別の平均値を提示した。長さ12.0cm前後を大形、8.0cm前後を中形、4.0cm前後を小形とした。A・B類が縦斧に、C～E類が横斧に相当すると考えられる。欠損状況では刃部・頭部とも半々で、完形率も高い。

第13表 磨製石斧属性表

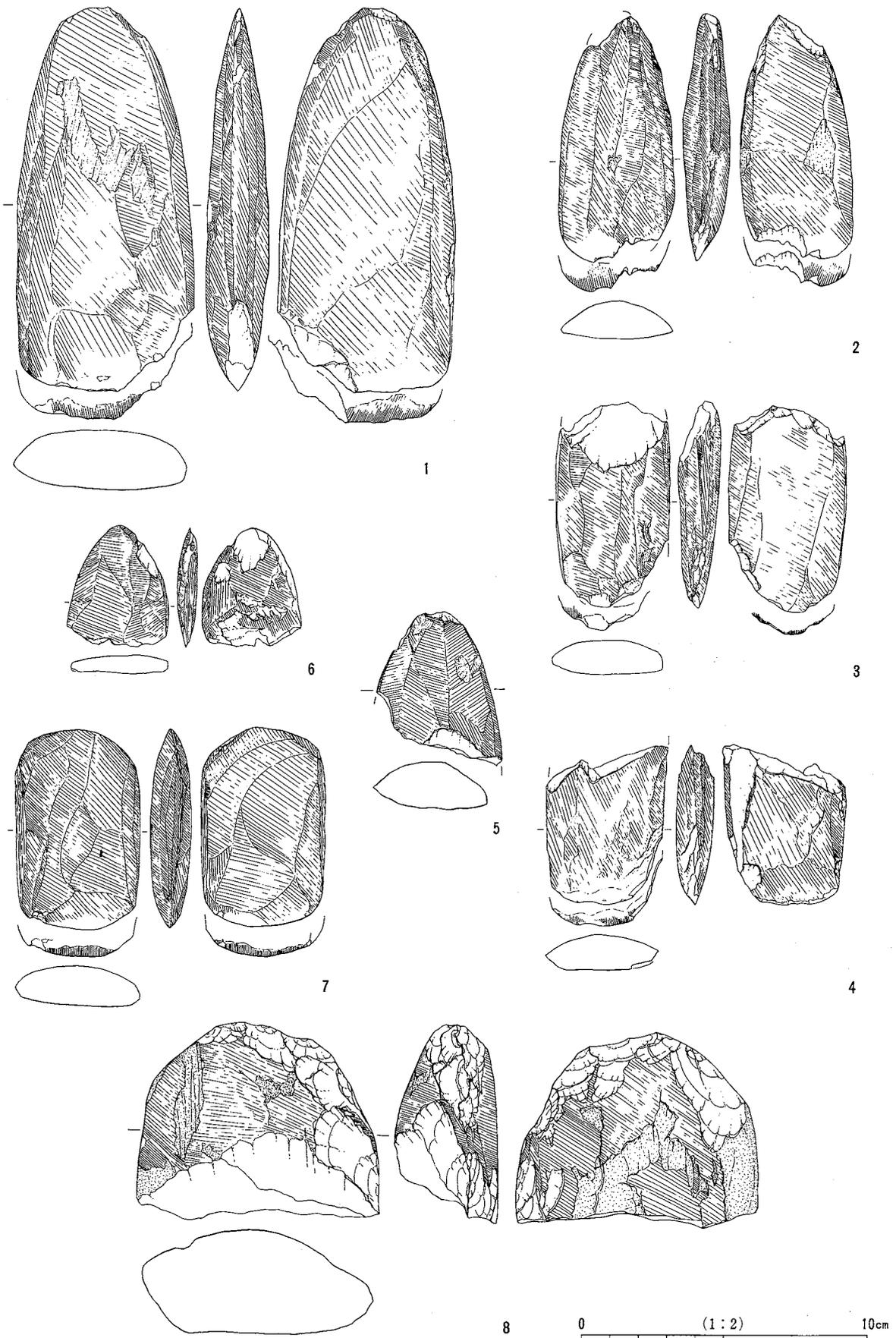
平均値	法量(全体値)				計上数	(機能部値)			使用痕跡			刃部平面形		頭部形		欠損状況								総数			
	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>		刃幅<cm>	刃部角<度>	長さ<cm>	幅<cm>	刃角<度>	型摩	線	装着	1	2	1	2	1	2	3	4	5	6		7	8	完形
A	13.4	6.1	2.2	275	1	—	9	1.3	—	68	1	1	—	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
B	8.6	3.9	1.7	65	1	3.5	12	0.5	3.3	59	2	1	—	1	1	1	1	1	0	0	0	0	2	1	0	0	4
C	7.0	4.3	1.4	70	1	3.8	9	0.4	3.6	68	1	1	—	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
D	4.8	2.0	1.0	12	1	1.2	10	0.6	1.4	37	1	1	—	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
E	4.2	3.6	0.7	20	1	3.5	15	—	—	38	0	0	—	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
失敗品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	—	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3



第122図 磨製石斧法量相関図



第123図 磨製石斧出土分布図



第124図 磨製石斧実測図

出土はIV A区2、上段部に局所的に集中する。

⑬ 石 錐 (第125~130図、第14表、P L20・26)

刺突・穿孔作業が想定できる資料。総数35点。堆積岩を主体とし、チャート21点・黒曜石13点・頁岩1点である。製作は原則的に石鏃と同法の剥片剥離および調整加工による。加工部位に基づき大別2種、機能部のみ加工する第I種、全体を加工する第II種に区別した。

形態的視点から類別を行うと5類。

I種1類—素材縁辺の一部にのみ調整を施すもの(2点、1・2)。

2類—素材の長い2側辺にわたり剥離を施すもの(9点)。素材の特徴を壊すことなく加工し、先端機能部と基部の区別が明瞭な2A(7点、3~5)と不明瞭な2B(2点、7)に区別できる。

II種3類—素材全体に加工を施し、先端機能部と基部の区別が明瞭なもの(1点、6)。

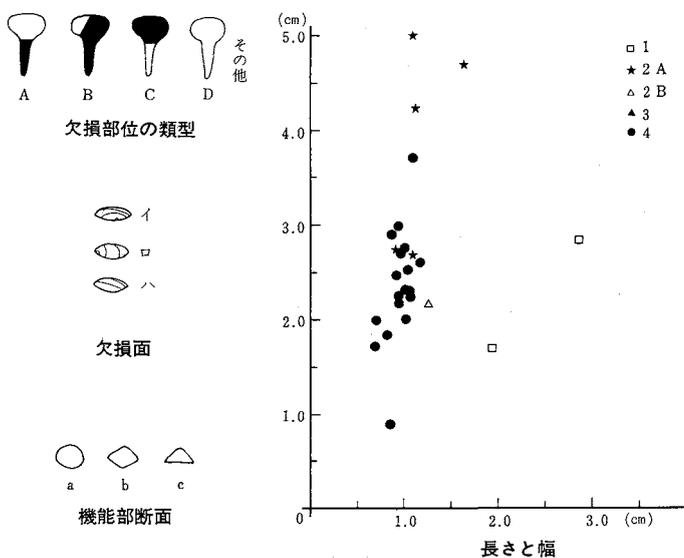
4類—先端と基部の区別がなく、両端の尖ったもの(23点、8~15)。本類中には石鏃を半分に分ったような形態的に異質な例3点が含まれる(15・SB11-5・SB12-5)。

以上のほか、石鏃I B類の欠損品を石錐に転用した例1点(16)がある。

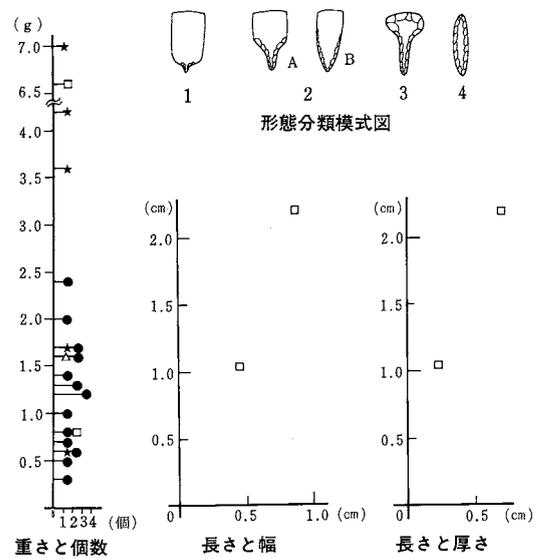
刃部断面形は菱形b(23点、2・3・7~10・12・13・15)と三角形c(4点、1・4・5)がある。円形aはbが使用によって摩耗した状態と考えられる。

第14表 石錐属性表

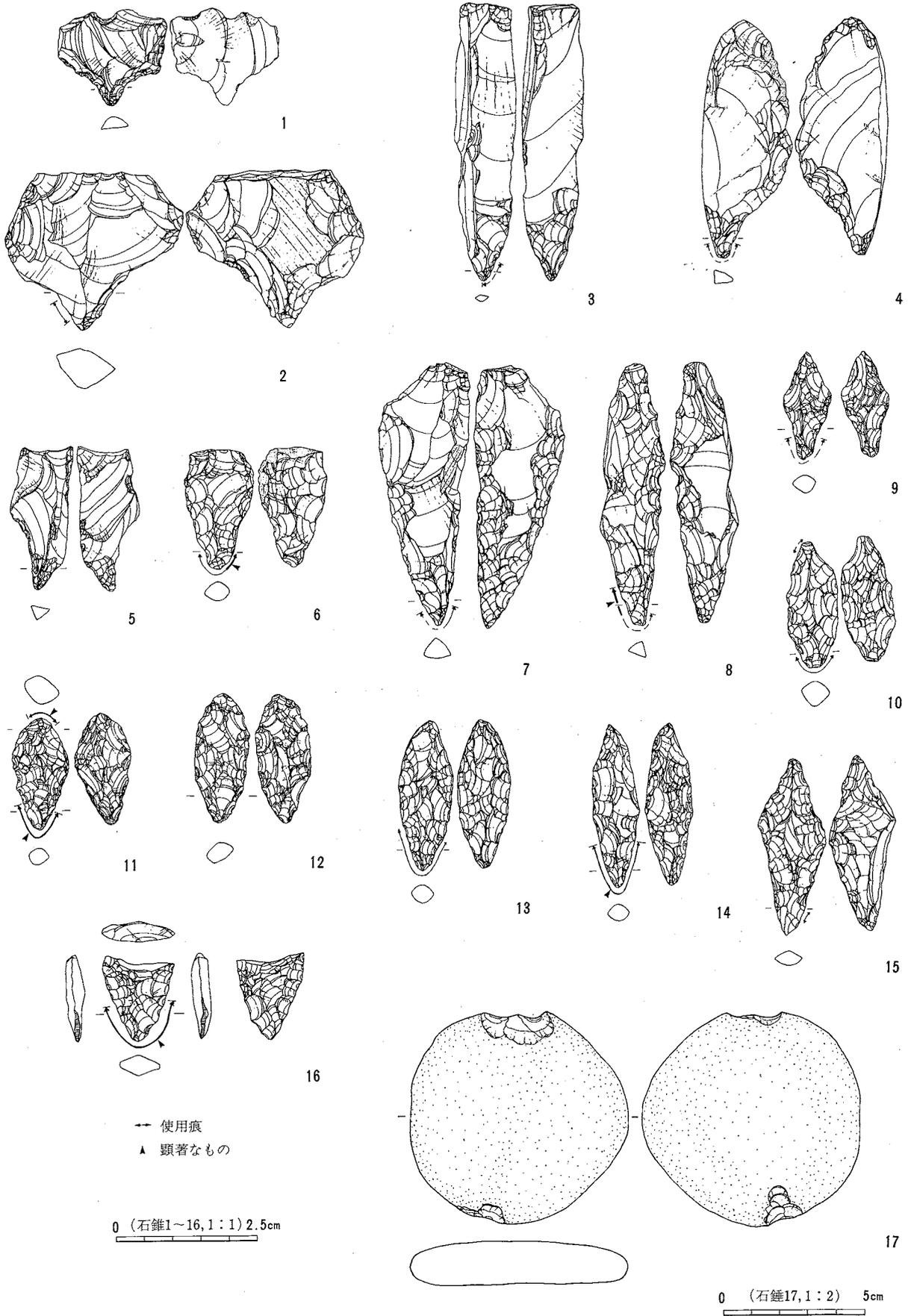
平均値 属性 分類	法量(全体値)				(機能部値)			計 上 数	断面形			欠損部位				欠損状況			素材剥片		総 数
	長さ <cm>	幅 <cm>	厚さ <cm>	重さ <g>	長さ <cm>	幅 <cm>	厚さ <cm>		a	b	c	A	B	C	D	イ	ロ	ハ	縦	横	
1	2.3	2.4	0.7	3.7	16.2	6.7	4.6	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
2A	4.0	1.2	0.7	3.7	—	—	—	5	0	4	3	2	0	1	0	2	1	0	3	4	7
2B	2.2	1.3	0.5	1.6	—	—	—	1	1	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	2
3	—	—	—	—	—	—	—	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1
4	2.4	0.9	0.6	1.3	—	—	—	18	5	17	0	3	0	0	2	0	5	0	2	5	23



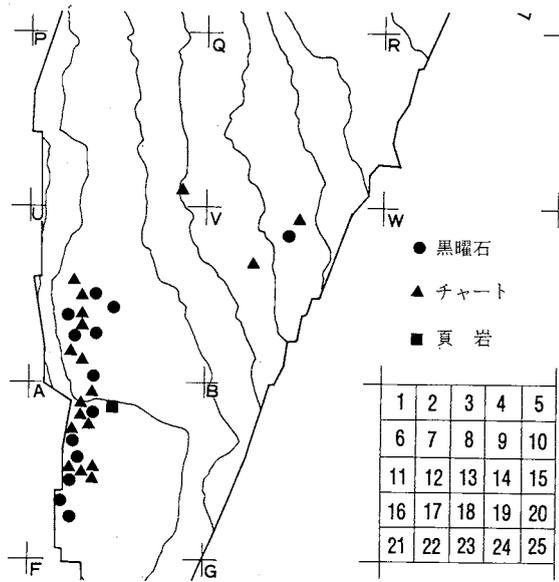
第125図 石錐法量相関図



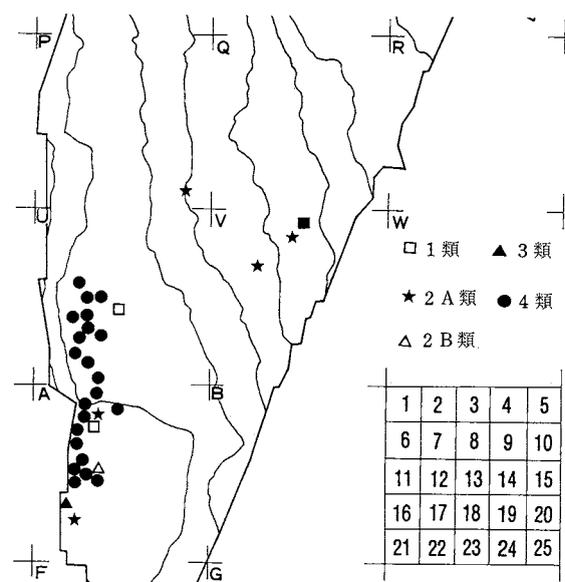
第126図 錐部の法量相関図



第127図 石錐・石錘実測図



第128図 石錘出土分布図 (材質別)



第129図 石錘出土分布図 (形態別)

機能的視点からの観察は実体顕微鏡を使用し、実測資料16点に対して行った。倍率は×100までとし、結果13点に使用痕跡が観察できた。使用痕には明瞭に発達した摩滅(実測図中の実線)と部分的で不明瞭な摩滅(点線)があり、線状痕を伴う例(矢印)も確認できた。装着痕跡については確認できなかった。刃部は片端に限定される例と両端に認められる例(10・11)があり、大部分の資料が前者である。欠損は先端部を欠くAが60%で最も多く、欠損断面では表裏面からの作用による事故(欠損状況口)が大半である。

法量全体値では長さ・厚さ・重さの点で1類と2a類が、幅の点で1類が区別できた。

出土はIIU区・IVA区、上段部に集中し、中段部IIV区には1類の資料がわずかながら分布している。

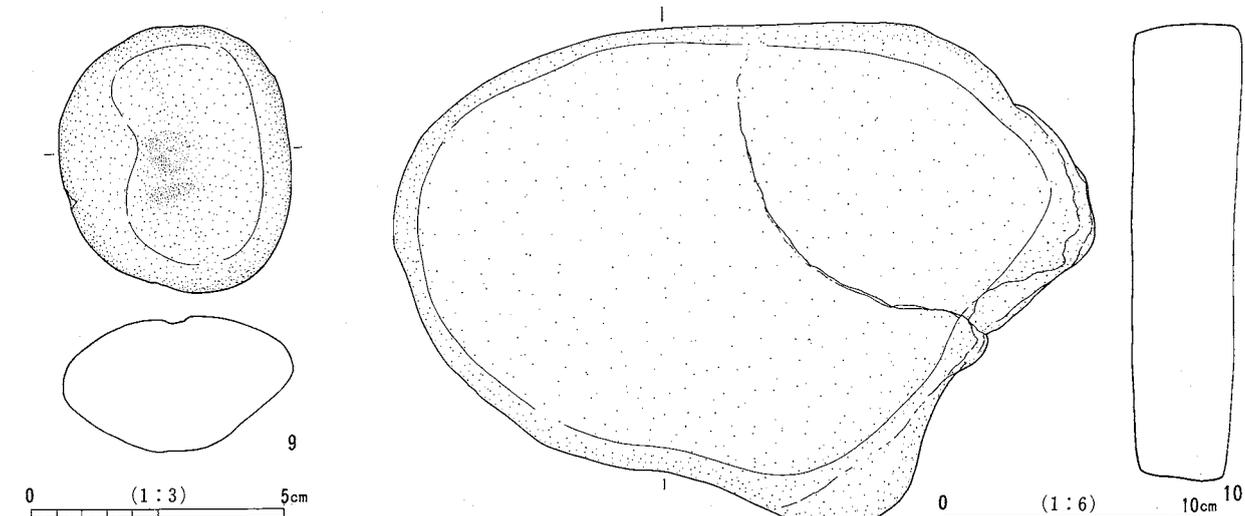
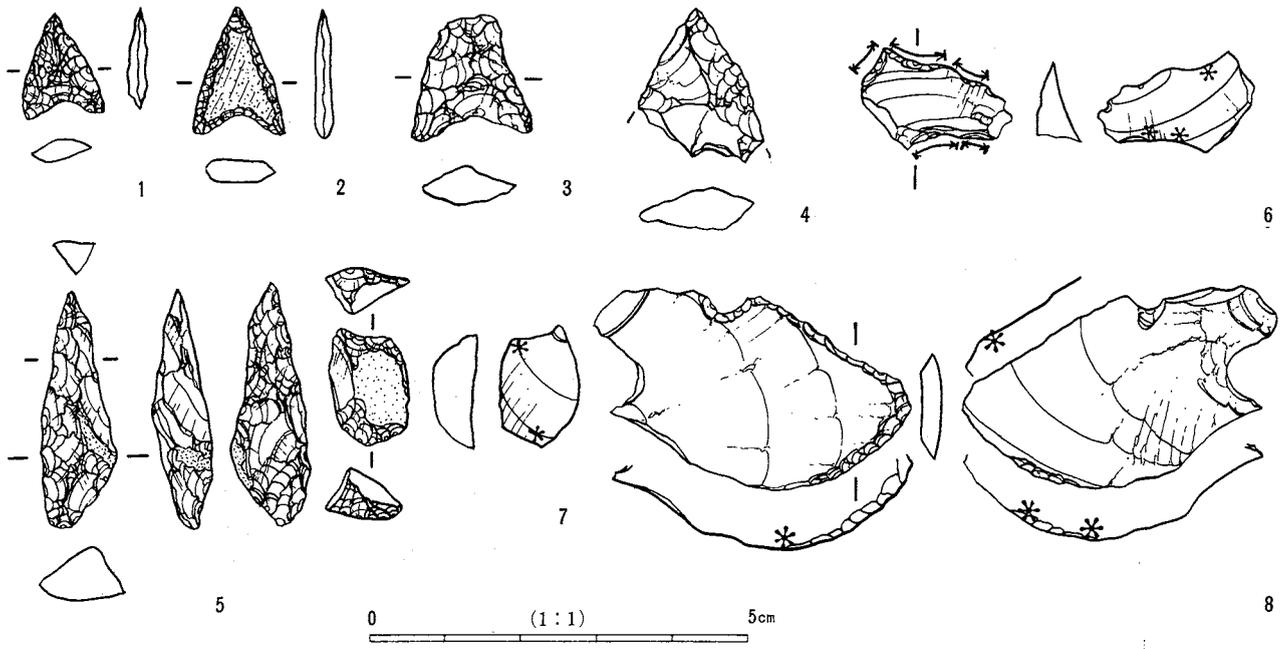
⑭ 石 錘 (第127図17)

紐掛けが予想できる部位を有し、錘としての用法が想定される資料。砂岩製ではさみ打ちによる打ち欠き錘1点がある。円形を呈し、法量7.6×7.8×1.5cm、123gを計測する。紐掛け部全周値は16.0cmを測る。IVA区17・2層から単独出土である。

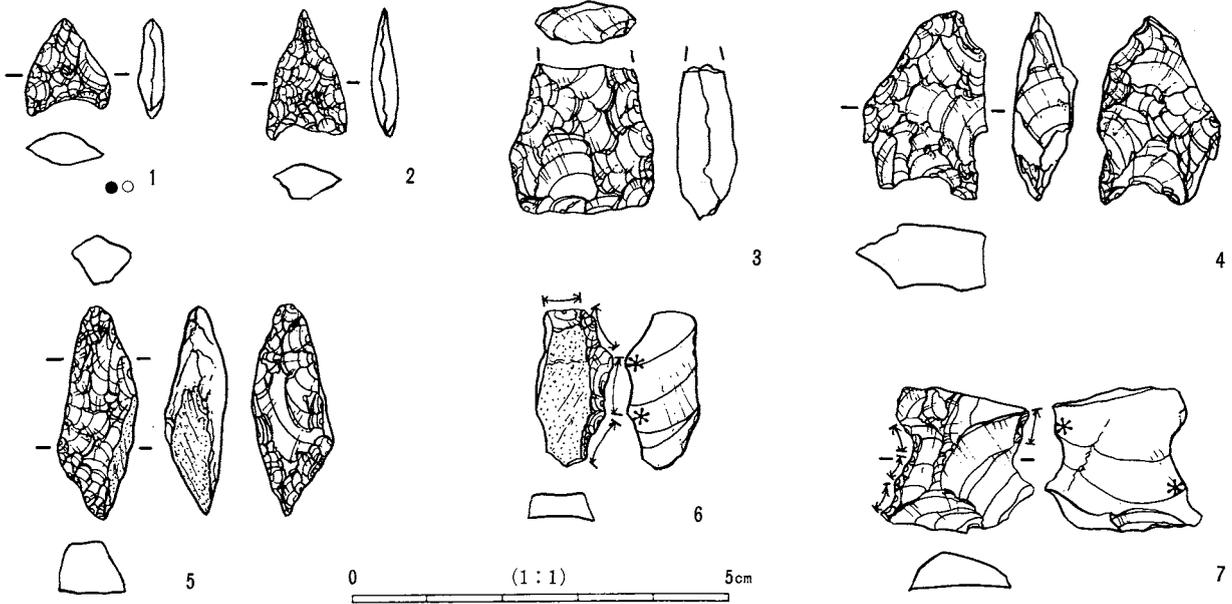
⑮ 加工痕跡を留める石屑

剥片剥離を伴う道具製作に関し、遺跡内にて行われたであろう生産行為の結果として出現した資料で、器種として認定が困難な例を一括した。この場合打製石斧などの大形品を製作する際に出現する個体群(A群)と石鏃など小形品を製作する際に出現する個体群(B群)を類別した。A群はすべて34点、B群は12点ある。材質と製作技術的な視点から、A群中明らかに打製石斧製作に関連する資料は2点、刃器製作に関連する資料は6点ある。これらを抜いた26点が用途不明資料となる。B群では石鏃製作に関連すると想定される資料が8点、対象器種が想定できない資料が4点ある。両群とも器種別総数外としておく。

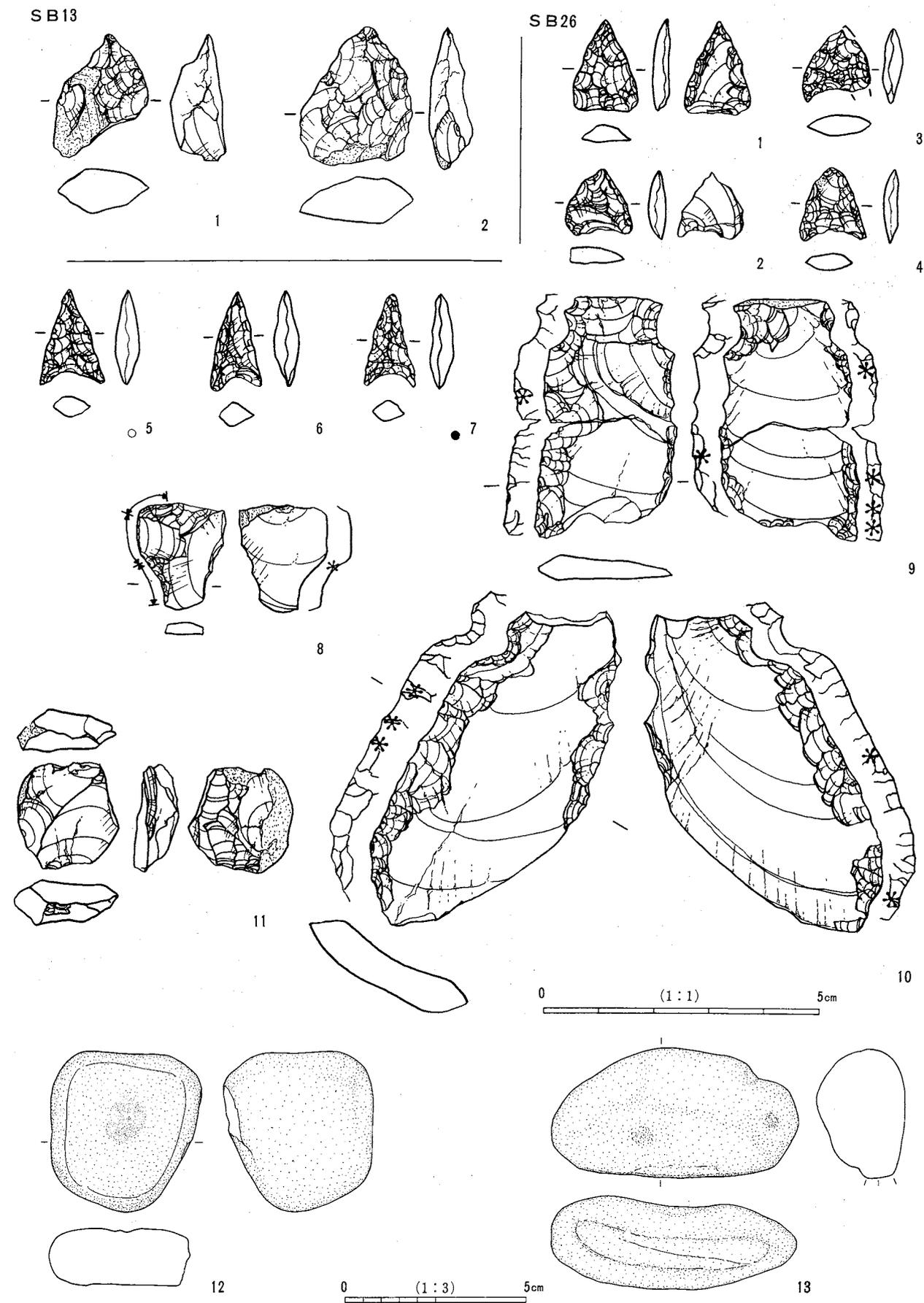
SB11



SB12

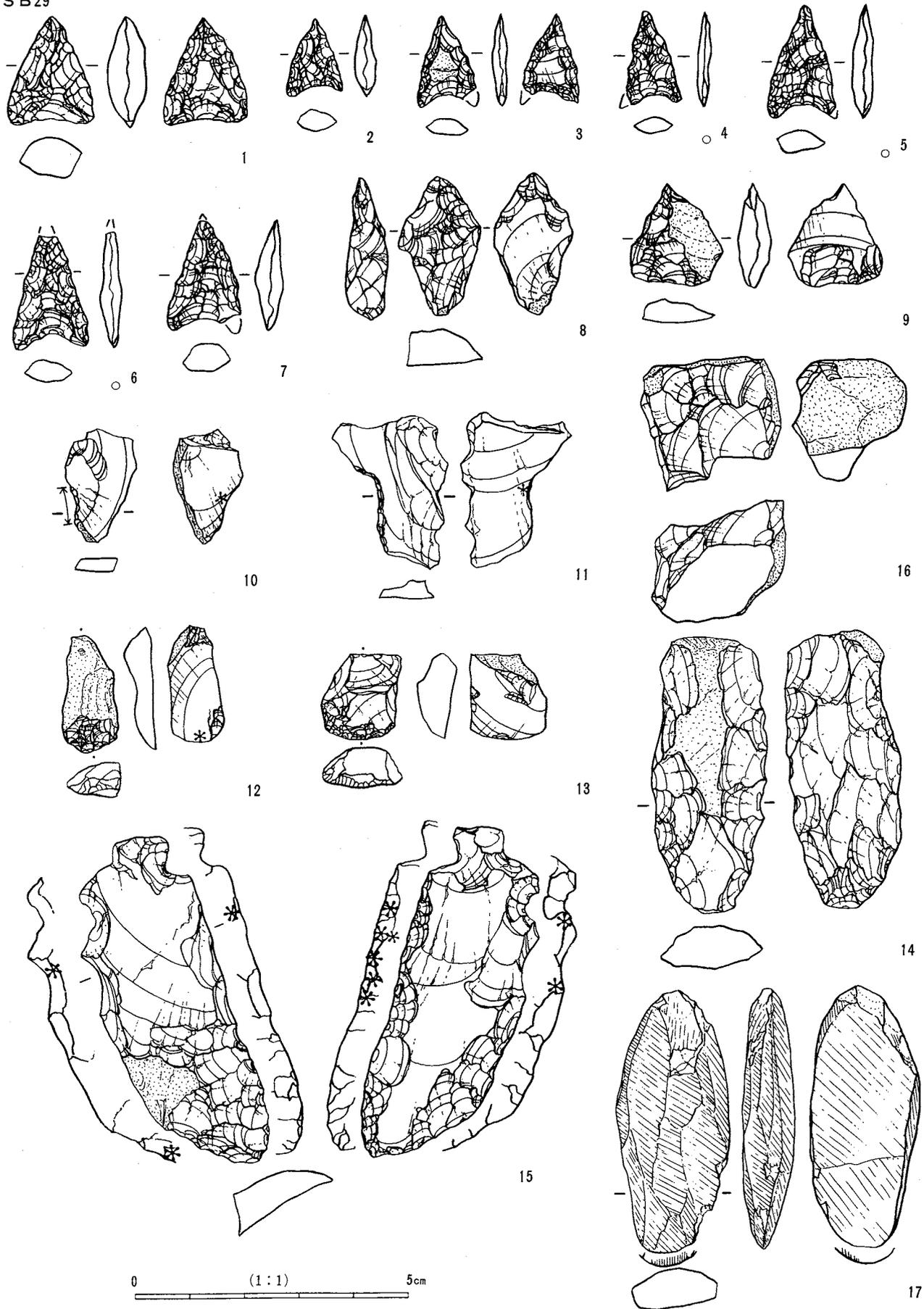


第130図 遺構出土石器実測図(1)



第131圖 遺構出土石器実測図(2)

SB29



第132図 遺構出土石器実測図(3)

第15表 石器観察表(1)

原石・石核

番号	法 量 (最大値)				打 面				作 業 面								剥離技術	自然面 (素材)	石 材	分類	出土地点	備 考	
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	状態	調整有	転移有	数	状態	調整有	転移有	数	角度	長さ (cm)	幅 (cm)								
1	3.2	5.7	2.1	43.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	転石	黒曜石	原石	I1U12G-12		
2	2.3	8.3	1.6	25.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"	I1A12E-11		
3	3.6	3.7	2.7	34.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"	I1A7G-8		
4	2.8	4.6	4.1	50.6	自然面	-	-	-	1	自然面	-	-	-	104	1.6	2.1	直接	"	"	1種	I1A3J-3		
5	4.4	5.6	2.8	62.6	剥離面	-	-	○ 180°	2	"	-	-	○ 180°	2	102 127	3.6 2.6	4.4 5.3	"	"	"	"	I1A17G-16	
6	2.2	2.8	1.6	9.0	自然面	-	-	-	1	"	-	-	-	102	1.0	1.5	"	"	"	"	I1A7H-6		
7	2.4	5.2	1.3	23.1	剥離面	-	-	-	1	剥離面	-	-	-	100	3.1	3.0	"	剥片	チャート	2種	I1A7G-6		
8	2.6	2.0	0.8	3.8	自然面	-	-	○ 90°	2	"	-	-	○ 90°	2	102 103	1.2 1.1	2.0 1.5	直接	"	黒曜石	"	I1A12F-9	
9	2.6	2.7	0.9	4.0	剥離面	-	-	○ 90°	3	"	-	-	○ 90°	2	102 100	1.2 1.2	2.2 1.6	"	"	"	"	I1A12F-12	
10	3.2	3.5	0.7	7.9	節理面剥離面	-	-	○ 90°	3	"	-	-	○ 90°	2	140 110	1.4 0.8	1.8 1.3	"	"	チャート	"	I1A2H-4	
132-16	2.3	3.1	2.0	11.1	自然面	-	-	○ 90°	2	自然面	-	-	-	110	1.8	1.7	"	転石	黒曜石	1種	S B-29		

剥片A

番号	法 量 (最大値)				打 面 (上)				打 面 (下)				表 面				裏 面				剥離技術	石 材	分類	出土地点	備 考
	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	有無	形状	形	有無	形状	形	剥離面有	剥離面数	剥離面向	形状	剥離面有	剥離面数	剥離面向								
1	2.6	1.4	1.0	3.4	○	剥離面	面	-	-	線	剥離面	○	4	2	剥離面	○	1	2	はさみ打ち	黒曜石	II	V7 E-7	自然面あり		
2	1.8	1.3	1.0	1.9	○	"	"	-	-	点	"	○	2	1	"	○	2	2	"	"	III	Q22 F-17			
3	1.4	1.0	0.9	1.2	○	節理面	線	-	-	点	"	○	2	2	"	○	1	2	"	"	V	Q10 Q-5			
4	1.8	1.0	0.5	0.8	-	-	点	-	-	線	"	○	2	2	"	○	2	2	"	"	V	A22 E-17	自然面あり		
5	1.5	1.4	0.8	2.0	○	剥離面	線	-	-	"	"	○	3	2	"	○	3	2	"	チャート	IV	U4 P-3			
131-11	1.9	1.7	0.7	2.2	-	-	線	-	-	"	"	○	3	3	"	○	3	3	"	黒曜石	IV	S B-26			

剥片・碎片

番号	法 量 (最大値)				打 面				作 業 面				剥離技術	自然面	石 材	分類	出土地点	備 考	
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	有無	形状	数	角度	形状	剥離面有	剥離面数	長さ (cm)							幅 (cm)
6	0.8	0.8	0.2	0.2	○	自然面	1	110	剥離面	○	3	-	-	-	○	黒曜石	碎片	V13 K-10	
7	1.2	1.5	0.4	0.6	○	剥離面	1	110	"	○	2	-	-	-	○	"	"	V13 K-10	
8	2.5	2.0	0.4	1.8	○	自然面	1	110	自然面	-	-	-	-	-	○	"	剥1種	V13 K-10	
9	2.3	2.6	1.0	5.3	○	"	1	110	剥離面	○	1	-	-	-	○	"	剥2種	V 9トレ	
10	2.1	2.8	0.5	3.2	-	-	-	-	"	○	1	-	-	-	○	"	剥3種	V1 D-1	
11	2.4	1.9	0.4	1.7	○	剥離面	1	102	"	○	2	-	-	-	-	チャート	"	A18 I-16	
12	5.1	3.6	0.7	11.5	○	自然面	1	100	"	○	3	4.3	1.6	-	○	"	"	V8 J-5	
13	4.1	3.0	0.8	9.2	○	"	1	102	"	○	1	3.5	2.3	-	○	"	"	A12 E-11	

石 鏃

番号	法 量 (最大値)				機 能 部								装着痕跡		基部形態	側面部形態	欠損部位	素材剥片	自然面	石 材	分類	出土地点		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	挟り長 (mm)	挟り幅 (mm)	茎長 (mm)	使用痕跡	再生	痕跡	付着	遺構名								取上番号		
1	2.1	1.5	0.4	1.10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	無	-	-	先	-	黒曜石	失1	A2 H-4	364	
2	1.6	2.0	0.5	1.40	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	-	-	"	-	チャート	失2	A12 H-10	366	
3	1.2	1.5	0.3	0.60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	-	-	"	-	黒曜石	"	A3 J-2	365	
4	1.6	1.2	0.3	0.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	"	-	-	"	-	"	"	A12 E-12	139	
5	1.3	1.1	0.2	0.27	7.0	7.0	2.0	8.0	-	-	-	-	-	-	"	B ₁	b	"	横	"	"	A17 E-16	225	
6	1.0	1.0	0.3	0.24	5.0	7.0	1.0	9.0	-	-	-	-	-	○	"	"	"	"	"	"	"	A8	129	
7	2.3	1.8	0.8	2.57	12.0	15.0	-	-	-	-	-	-	-	-	"	A	a	"	"	"	"	L18 K-14	24	
8	2.1	1.7	1.0	2.19	11.0	14.0	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"	"	"	"	チャート	"	U8 G-15	576
9	(1.9)	1.8	0.7	(1.89)	11.0	14.0	-	-	-	-	-	欠	○	"	"	"	"	"	"	"	"	"	V8 M-6	231
10	(2.1)	(1.7)	0.8	(1.86)	12.0	12.0	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"	"	"	"	"	"	V8	286
11	2.0	(1.8)	0.8	(1.55)	10.0	13.0	2.0	12.0	-	-	-	-	-	-	"	B ₁	a	"	"	"	"	"	V8 I-6	202
12	1.5	0.9	0.3	0.33	8.0	6.0	-	-	-	-	-	-	-	-	"	A	b	完	縦	黒曜石	1A	U8 I-8	342	
13	1.7	1.0	0.3	0.42	7.0	6.0	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"	"	横	"	"	"	U4 O-3	305
14	1.7	(0.9)	0.2	(0.33)	8.0	6.0	-	-	-	-	-	-	-	○	"	"	"	"	"	チャート	"	U12 G-12	381	
15	1.8	1.2	0.5	0.76	8.0	7.0	-	-	-	-	-	-	-	○	"	"	"	"	"	"	"	"	U22 H-17	594
16	2.5	(1.5)	0.6	(1.40)	8.0	7.0	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"	"	"	黒曜石	"	A17 F-16	217	
17	1.7	1.2	0.6	0.78	7.0	6.0	-	-	-	-	-	-	-	○	"	"	"	"	"	チャート	"	A17 G-15	227	
18	1.3	(1.7)	0.4	(0.52)	8.0	10.0	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"	"	"	黒曜石	"	A2 I-1	29	
19	2.5	(1.3)	0.7	(1.11)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	"	"	"	"	"	"	"	"	U17 G-14	527
20	2.9	1.8	0.6	1.93	14.0	11.0	-?	-?	-?	-	-	-	-	○	"	"	"	"	"	チャート	"	A17 F-14	228	
21	1.0	1.0	0.3	0.17	4.0	7.0	-	-	-	-	-	-	-	-	"	B ₁	"	完	"	黒曜石	IB ₁	A18 I-16	243	
22	1.2	1.3	0.3	0.20	7.0	9.0	-	-	-	-	-	-	-	○	"	"	"	"	"	"	"	"	V7 H-5	188
23	1.4	1.4	0.4	0.47	6.0	10.0	-	-	-	-	-	-	-	-	"	"	"	"	"	チャート	"	A21 D-18	248	
24	1.5	1.3	0.4	0.57	8.0	10.0	1.0	10.0	-	-	-	-	-	○	"	無	"	"	"	黒曜石	"	V8 I-6	240	
25	1.6	1.3	0.4	0.43	8.0	11.0	1.0	10.0	-	-	-	-	-	○	"	"	"	"	"	"	"	"	V6 A-15	277

第19表 石器観察表(5)

刃器

番号	法 量(最大値)				背(棟)部		刃 部						自然面(素材)	石 材	分 類	出土地点		備 考		
	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>	加工	数	刃 主 角	刃長<cm>	刃幅<cm>	型	平面形	使用痕跡有無				加工	遺構名		取上番号	
130-5	1.2	2.0	0.6	1.1	-	複	58	0.7	0.1	片刃	内	○	-	○	横長	黒曜石	C	SB-11	-	
-7	1.5	1.0	0.5	0.8	-	2	43	1.0	0.4	#	円・内	○	-	○	縦長	#	B	#	-	
-6	2.1	1.0	0.4	0.8	-	複	65	0.8	0.2	#	内	○	-	○	#	#	C	SB-12	-	
-7	1.8	2.0	0.6	2.0	-	#	67	0.8	0.1	#	#	○	-	-	#	#	D	#	-	
131-8	1.9	1.6	0.5	1.2	-	#	73	1.1	0.2	#	#	○	-	○	#	#	#	SB-26	-	
132-10	1.9	1.3	0.4	0.7	-	1	65	0.8	0.1	#	#	○	-	○	横長	#	C	SB-29	-	
-11	2.8	1.8	0.6	1.8	-	1	70	1.5	0.2	#	#	○	-	-	縦長	チャート	D	#	-	
-12	2.1	1.0	0.6	1.0	-	1	38	1.0	0.6	#	円	○	○?	○	#	黒曜石	B	#	-	
-13	1.5	1.4	0.7	1.4	-	1	68	1.3	0.3	#	#	-	-	○	#	#	B	#	-	
-14	5.0	2.1	1.1	11.7	-	?	-	-	-	両刃	直	-	-	○	-	チャート	A?	#	-	

磨製石斧

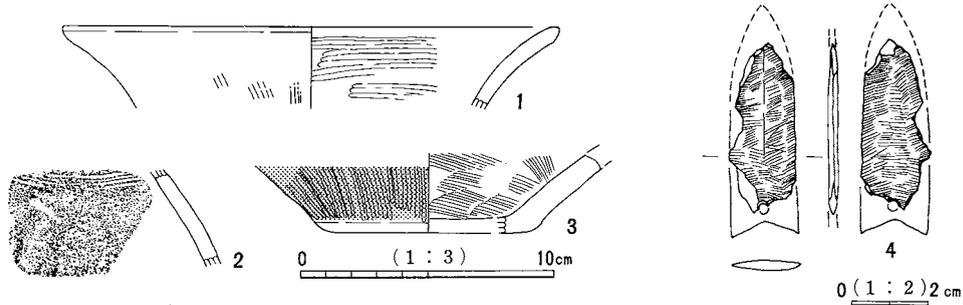
番号	法 量(最大値)				刃 部			使用痕跡			頭部平面形	装着痕跡	敲打痕跡	欠損部位:状況	自然面	石 材	分 類	出土地点		備 考	
	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>	刃幅<cm>	刃部角<度>	平面形	長さ<cm>	幅<cm>	刃角<度>								型	遺構名		取上番号
1	13.4	(6.1)	2.2	(275)	-	9	2	1.3	-	68	摩線	2	-	-	7	口	蛇紋岩	A	A 2 H-01	2	
2	8.6	(3.9)	1.7	(65)	-	10	2	0.4	-	51	#	2	-	-	7	ハ	#	B	A 2 G-2	5	
3	(7.3)	4.0	1.5	(50)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	ハ	#	B	A 2 F-1	6	
4	(5.6)	4.2	1.3	(40)	3.5	14	3	0.5	3.3	66	摩	-	-	-	6	ハ	泥岩	B	U23	7	
5	(5.4)	4.3	1.7	(50)	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	ハ	蛇紋岩	B	U22 H-20	4	
6	4.2	3.6	0.7	20	3.5	15	2	-	-	38	-	2	-	-	-	-	#	E	U12 G-10	9	
7	7.0	4.3	1.4	70	3.8	9	2	0.4	3.6	68	摩線	1	-	-	完	-	#	C	U17	8	
8	(7.0)	8.5	3.7	(300)	-	-	-	-	-	-	-	1	-	○	1	ハ	○	A	排土中	1	失敗品
132-17	4.8	2.0	1.0	12	1.2	10	3	0.6	1.4	37	摩線	2	-	-	完	-	#	D	SB-29	17	

石 錘

番号	法 量(最大値)				打 面		機 能 部				使用痕跡	断面形態	欠損部位:状況	自然面	素材剥片	石 材	分 類	出土地点		備 考	
	長さ<mm>	幅<mm>	厚さ<mm>	重さ<g>	有無	形状	調整側	数	長さ<mm>	幅<mm>								厚さ<mm>	遺構名		取上番号
1	17.0	19.3	4.0	0.8	○	自然面	片面	1	10.4	4.5	2.2	○	c	-	○	縦	黒曜石	1	U13 J-12	11	
2	28.4	28.5	9.0	6.6	○	剥離面	#	1	22.0	8.8	7.0	○	b	-	-	横	チャート	#	A 7 H-5	12	
3	50.0	11.0	7.8	3.6	○	#	両面	1	-	-	-	○	b	-	-	横	#	2A	V 7 F-7	2	
4	42.4	11.3	5.6	4.2	-	-	#	1	16.0	6.3	4.7	○	b	-	○	横	#	#	V3 SB-14	10	
5	26.6	10.8	8.5	1.7	○	剥離面	#	1	-	-	-	-	b	-	-	縦	黒曜石	#	A17 F-16	1	
6	21.7	12.5	5.4	1.6	○	#	#	1	-	-	-	○	a	-	○	-	チャート	3	A12 H-10	5	
7	47.0	16.2	13.4	7.0	○	自然面	#	1	-	-	-	○	c	-	○	縦	#	2B	U22	8	
8	47.2	(12.7)	8.8	(4.1)	-	-	#	1	-	-	-	○	b	F	口	縦	#	4	A 2 H-2	32	
9	8.9	8.4	5.5	0.7	-	-	#	1	-	-	-	○	a	-	-	-	黒曜石	#	U17 F-13	30	
10	21.8	9.2	6.8	1.4	-	-	#	1	-	-	-	○	a	-	-	-	チャート	#	U17 G-13	15	
11	20.3	10.0	6.6	1.2	-	-	#	2	-	-	-	○	a	-	-	-	黒曜石	#	A12 F-9	16	
12	23.0	10.0	6.6	1.3	-	-	#	1	-	-	-	-	b	-	-	-	#	#	U17 F-15	23	
13	27.1	9.7	6.4	1.6	-	-	#	1	-	-	-	○	a	-	-	-	チャート	#	A12 H-10	26	
14	29.0	8.6	0.6	1.3	-	-	#	1	-	-	-	○	a	-	-	-	#	#	U22 G-18	13	
15	(31.2)	(12.0)	6.7	(1.8)	-	-	#	1	-	-	-	○	b	F	口	-	#	#	A 7 G-4	33	
16	14.0	12.0	3.2	0.6	-	-	#	1	-	-	-	○	a	B	イ	-	黒曜石	他	U17 F-13	-	石錘再利用
130-6	30.1	10.0	8.0	1.8	-	-	#	1	-	-	-	-	b	-	-	-	#	4	SB-11	-	石錘?
-5	27.5	11.0	7.0	1.7	-	-	#	1	-	-	-	-	-	-	-	-	#	#	SB-12	1	#

石 錘

番号	法 量(最大値)				機 能 部				素 材 自然面	製作 技術	欠損 部位	石 材	分 類	出土地点		備 考
	長さ<cm>	幅<cm>	厚さ<cm>	重さ<g>	長さ<mm>	幅外<mm>	幅内<mm>	深さ<mm>						遺構名	取上番号	
17	7.6	7.8	1.5	123	160	10.0	4.0	1.0	礫	打欠	完	砂岩A	-	AG-17	1	



第133図 弥生土器・石器実測図

2 弥生時代の遺物

(1) 土器 (第133図1～3)

1～3は箱清水式に属す壺である。1は強く外反する口縁部で、10%程度の破片である。外面は縦刷毛目を施した後横ナデする。内面は横ナデしている。内外面とも摩滅し、わずかに赤彩痕が認められる。2は肩部破片で、楕描き横線文が施されている。3は底部で、外面には縦へう磨き、内面には斜めの刷毛目が施されている。外面に赤彩が残り、底面は薄い。いずれも砂粒を含み、黄褐色を呈して、焼成はやや不良である。

1はII L 25、2・3はII L F 02の出土で遺構に伴わない。弥生土器が出土したのはII L地区のみで、ほかに同一個体を含めて10片足らずがある。

(2) 石器 (第133図4)

4は有孔磨製石鏃である。先端と基部を欠損し、長さは推定約6cmである。幅1.8cm・厚さ0.2cmを測り、側縁は摩滅している。粘板岩製である。IVA03のS B17埋土中から出土した。このほかに有茎石鏃が出土し、縄文時代として扱ったが、最も新しい時期の土器としては堀之内2式が確認され、有茎石鏃の帰属時期と一致するかどうか問題を残す。あるいは弥生中期に属す可能性もある。

上記の土器と磨製石鏃は出土地点がかなり離れ、時期が異なるため関連性は薄い。

3 平安時代の遺物

(1) 焼物

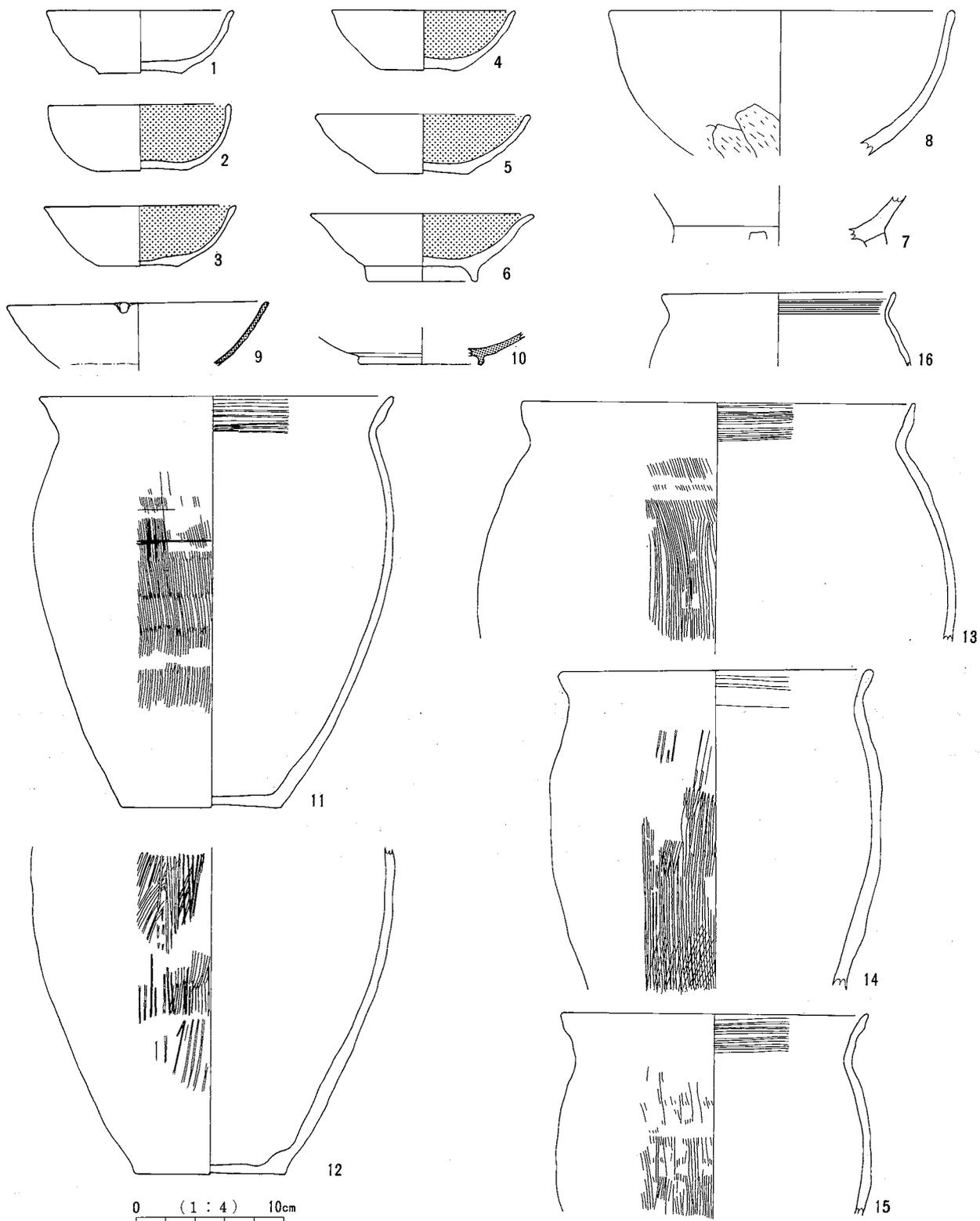
古代の遺物は、遺構をみてもほとんど重複がなく、遺物からみても、短時間の資料と思われる。以下、遺構ごとに遺物について説明をしていくが、その前提について簡単に述べておきたい。

器種分類については、量が多い食膳具については、埋文センターが行った松本平の調査の成果に基づいて行う。焼物の種類についても同様である〔原ほか1989、小平ほか1990〕。以下の遺構ごとの説明では、図示した遺物のみ説明になるが、遺構単位の用途別、焼物別、器種別の出土量については、第25表に示した。参照されたい。なお、今回は遺構単位に分類を行ったが、それは当時のその遺構(例えば住居)で使用されたそのままを示しているのではなく、住居が廃絶され、その際、あるいはその後にくぼ地に廃棄されたり、自然の力で入りこんだすべてを、それぞれに区別できないため一括としてとらえている。また、遺構の調査所見をみる限り、埋納あるいは生活時の出土状況を示している例はない。

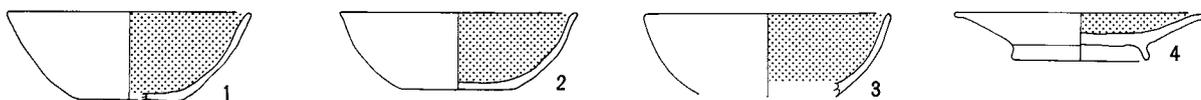
S B 02 (第134図、P L 27)

食膳具を中心に比較的多くの遺物が出土している。1は土師器杯A II、2～5は黒色土器A杯A IIであ

SB02(1~16)



SB04(1~4)



第134図 古代土器実測図(1)

る。7・8はいずれも土師器鉢で、8は体部下半を縦方向のヘラケズリで仕上げられており高台は付かないと思われ、7は透かしが入られる比較的高い高台をもつであろう。9・10は灰釉陶器で、9は輪花が施される椀、10は皿Bである。煮炊具(11~16)は、16のロクロ調整の小型甕を除くと、ほかはハケ調整の長胴甕である。このほか図示しないが須恵器等が出土している。

S B 03

ほとんど遺物は出土していない。わずかに土師器杯Aの破片が見られる程度である。

S B 04 (第134・135図、P L 27)

量的には多くないが、食膳具・貯蔵具が見られる。1~4は黒色土器Aで杯A II(1~3)、皿B(4)がある。5は須恵器の甕で、外面は斜めのタタキが見られ肩部で方向を変えている。内面は、当て具痕がヨコナデで消されている。

S B 05 (第135図、P L 27)

量的には少ない。1は土師器杯A II、2は黒色土器A杯A II、3は杯A Iである。4・5は灰釉陶器皿Bで典型的な三日月高台を有する。

S B 06 (第135図、P L 28)

食膳具・煮炊具が比較的多く出土している。1は土師器杯A II、2~9は黒色土器杯A IIである。10は土師器の無台皿で、底面はロクロケズリで仕上げられており、松本平には見られない器種である。11・12は灰釉陶器皿Bで、口縁端部は玉縁状に仕上げられる。13・14は土師器長胴甕で、口縁内面には横方向のハケ調整が施され、外面は縦方向のハケ調整の後横方向のナデで仕上げられる。15・16は体部下半を縦方向のヘラケズリによって仕上げる長胴甕であるが、いわゆる武蔵型甕と異なり器壁は薄くない。

S B 07 (第136図、P L 28)

遺物の出土量は少ない。1は黒色土器A杯A II、2・3は椀であり、4は灰釉陶器の小型の椀である。5は長胴甕の底部で、ヘラケズリによって仕上げられており、いわゆる武蔵型の甕と思われる。

S B 08 (第136図、P L 28)

遺物の出土量は多く、器種も豊富である。1は土師器杯A II、2~5は黒色土器A杯II、6は椀である。7は外面にカキメが施されるロクロ小型甕、8は長胴甕で外面のハケ調整は粗雑で横方向のナデで消されている。9は須恵器の長頸壺で、体部上半と高台部を欠損している。

S B 09 (第136図)

煮炊具の出土量が多いが、図示できるものは少ない。1~3は黒色土器杯A II、4は外面を口縁までカキメを施すロクロ小型甕、5はハケ調整の土師器長胴甕である。

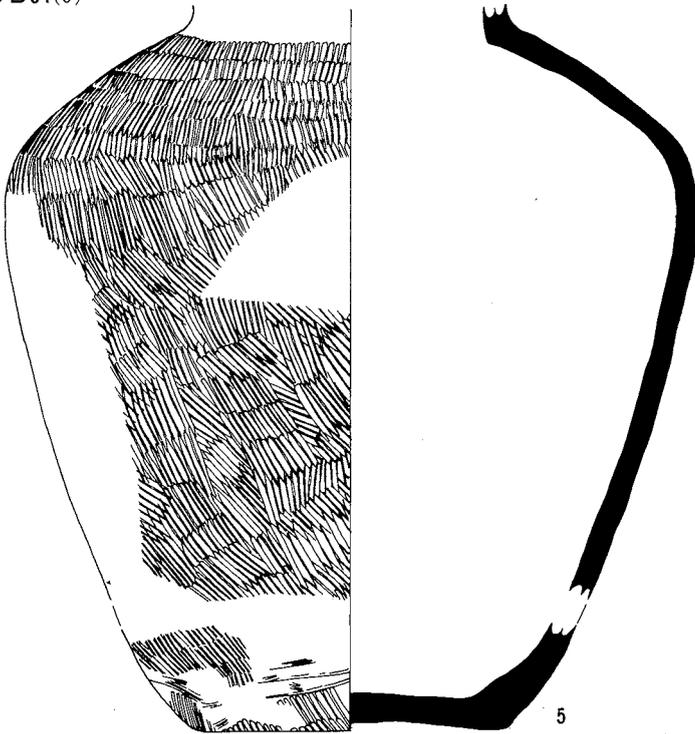
S B 14 (第136・137図、P L 28)

遺物の出土量が比較的多く、器種も豊富であり、食膳具の中で、須恵器の占める比率が当遺跡の中で比較的高いことが特徴である。1~3は須恵器杯A IIで、1・2は青灰色をした硬質の焼成で内面の底部周囲に強いナデが入られるのに対し、3は灰白色で黒斑が見られ軟質の焼成である。4・5は黒色土器A杯A II、6は椀、7は皿B、8は片口が付けられる大形の無台の鉢で体部下半は斜めのヘラケズリで仕上げられる。9・10は灰釉陶器皿Bで、口縁端部が玉縁状に仕上げられる。12~15はロクロ調整の小型甕で、カキメが外面に施される例(12・14)と、ない例(13・15)がある。16はハケ調整で仕上げられた長胴甕である。11は灰釉陶器小瓶、17は須恵器長頸壺、18はいわゆる須恵器凸帯付四耳壺である。

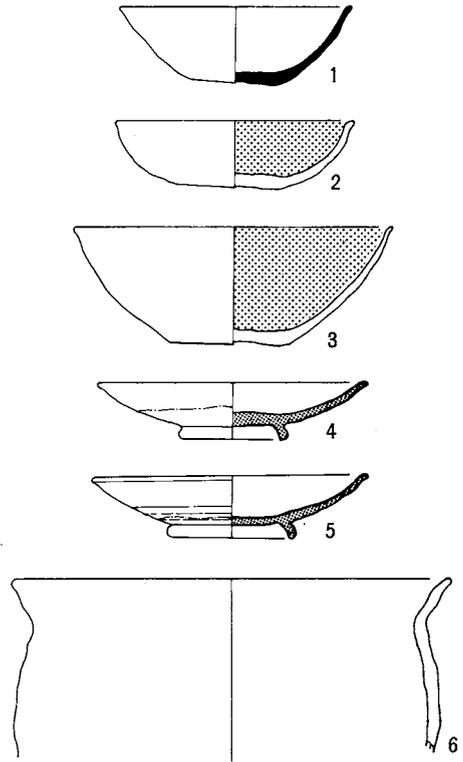
S B 16 (第137図、P L 28)

遺物の出土量は少ない。1は黒色土器A杯A Iで底部およびその周囲をロクロケズリで仕上げられており、2は椀である。3は灰釉陶器皿Bである。

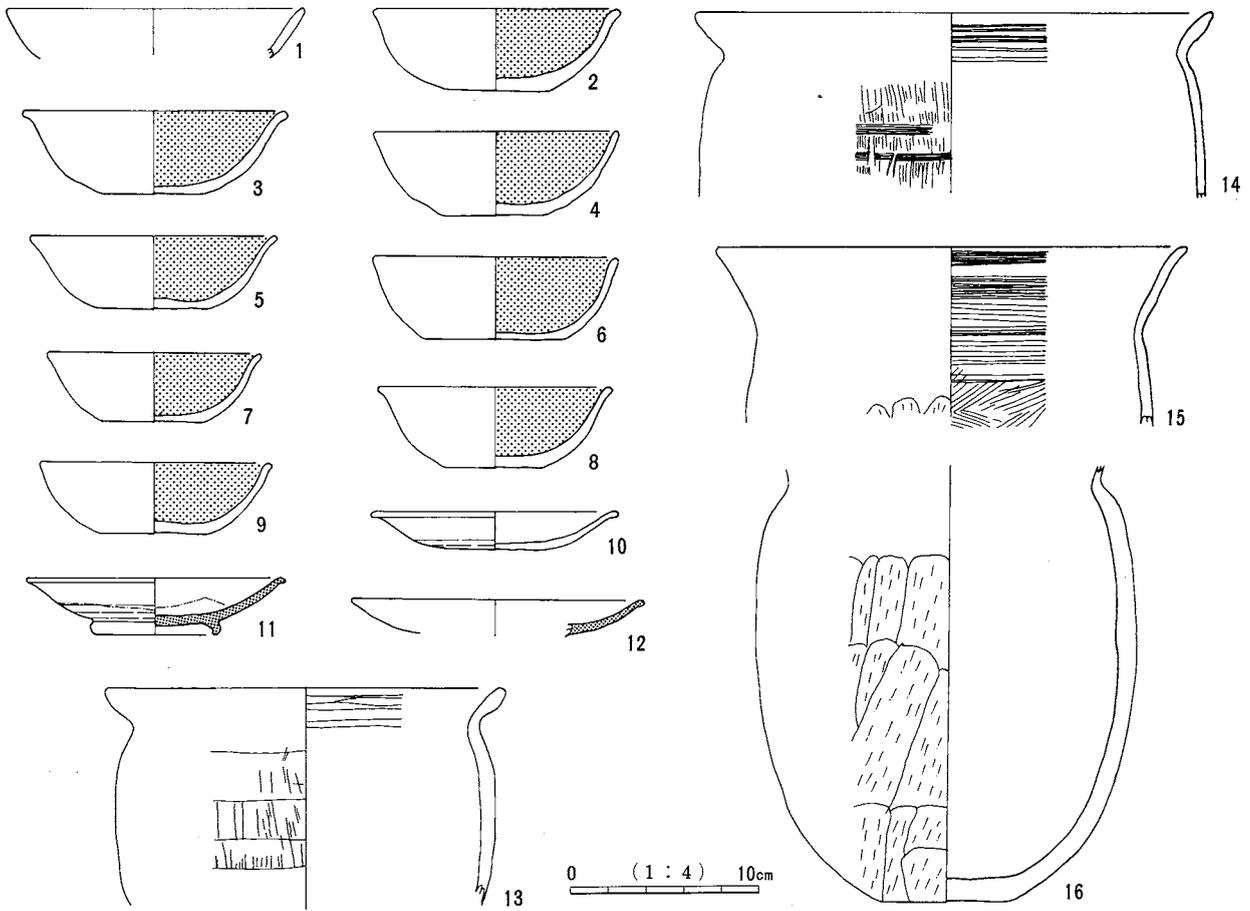
SB04(5)



SB05(1~6)

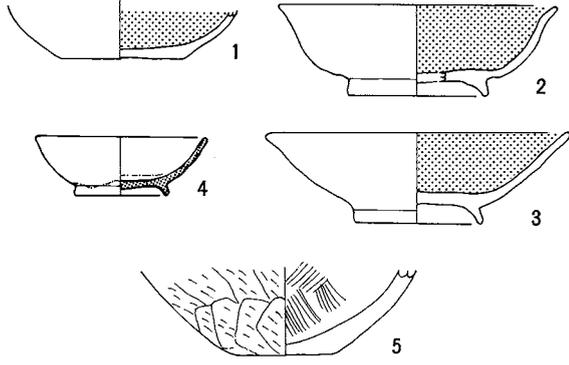


SB06(1~16)

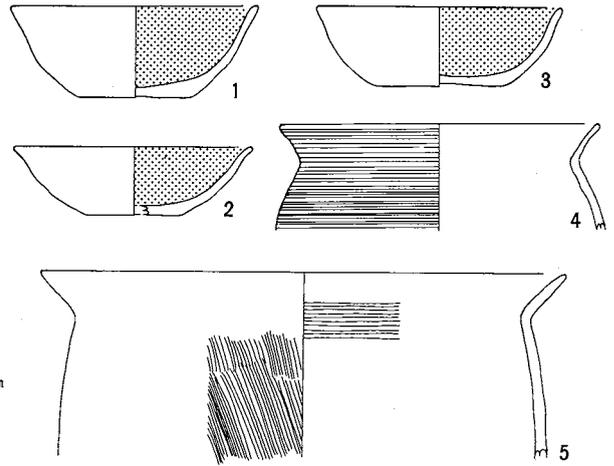


第135图 古代土器実測図(2)

SB07(1~5)

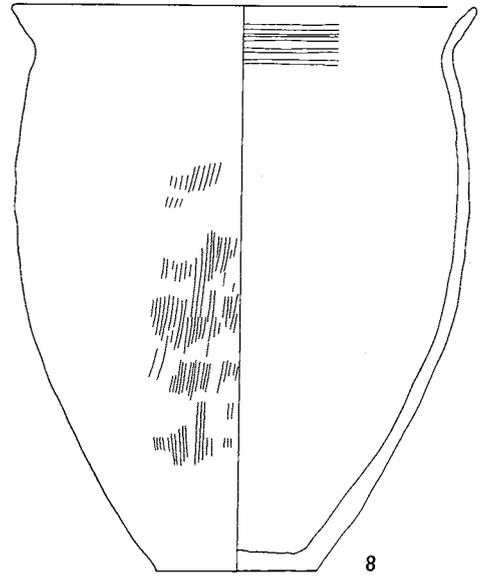
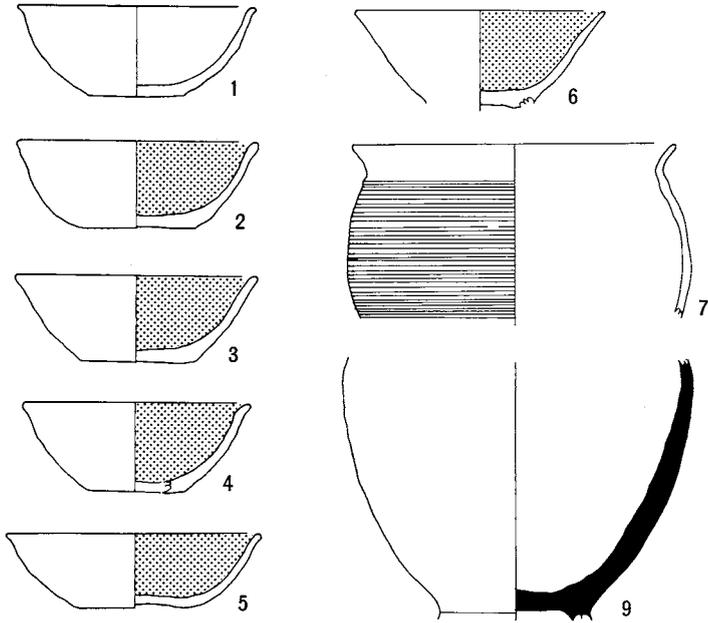


SB09(1~5)

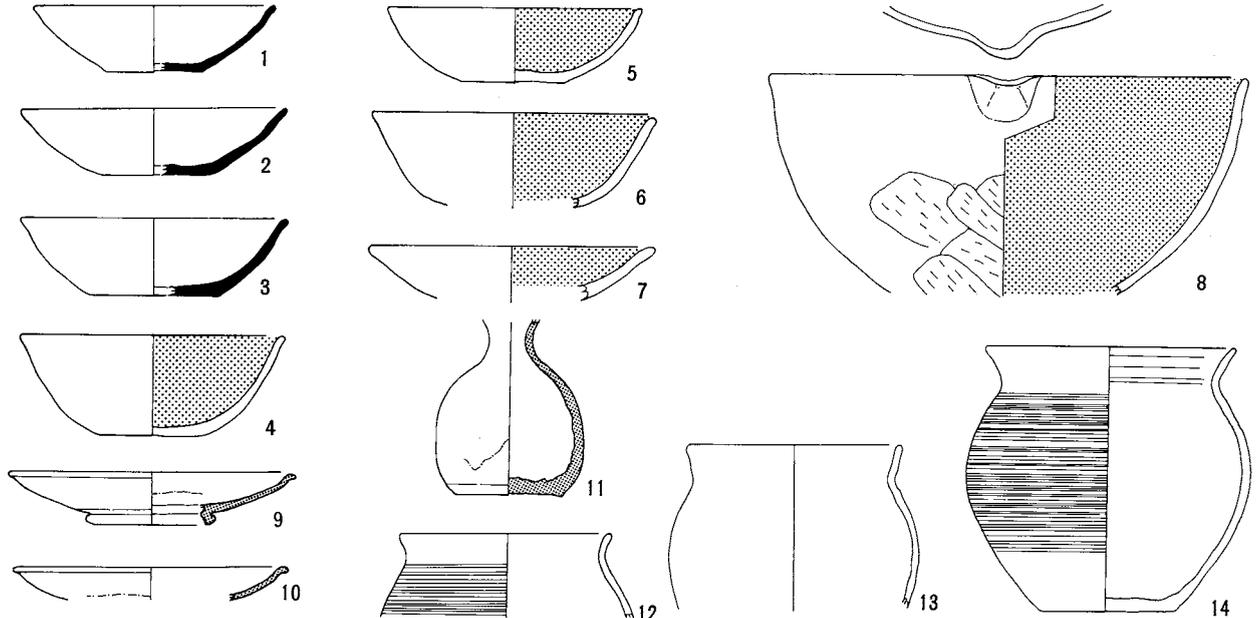


0 (1:4) 10cm

SB08(1~9)



SB14(1~14)



第136図 古代土器実測図(3)

S B 17 (第137図、P L 28)

比較的遺物の出土量が多い。黒色土器Aには、杯A II (1~3・6)、杯A I (4・5)、椀(7)、高台の付けられない皿(8)がある。13は土師器の軟質の焼成の小形の耳皿である。9・10は灰釉陶器の椀、11・12は皿Bである。14・15はロクロ調整の土師器小型甕で、外面にカキメを施す例としない例がある。

S B 18 (第137図)

遺物の出土量が少ない。1は黒色土器A杯A IIである。

S B 19 (137・138図、P L 29)

食膳具と煮炊具の出土量が多い。黒色土器Aは杯A I (3)と杯A II (1・2)があり、4は土師器杯A IIである。5は灰釉陶器椀で口縁端部が玉縁状に仕上げられ、6はロクロ調整の小型甕である。7・8は長胴甕で、7はハケ調整の後粘土がはられ粗いナデ調整がなされ、8はロクロ調整の後体部下半を縦方向のヘラケズリで仕上げる。

S B 20 (第137図、P L 28)

遺物の量は少ない。1は黒色土器A杯A II、2は灰釉陶器椀である。3はハケ調整の長胴甕で、ハケの単位は粗く太い。

S B 21 (第138図)

1・2は黒色土器A杯A IIである。このほか図示しないが食膳具として、皿Bと鉢がある。4は須恵器長頸壺で、底部周囲をロクロケズリで仕上げている。5はハケ調整で仕上げた長胴甕、6は体部が薄く仕上げられる、いわゆる武蔵型甕である。

S B 22 (第138図、P L 29)

比較的多量の遺物が出土している。1~4は黒色土器A杯A II、5は土師器杯A II、6は灰釉陶器皿Bである。8は外面にカキメを施すロクロ調整の小型甕、9はハケ調整の長胴甕でハケの単位が大きく粗い。10は甑の底部で、端部が肥大し外面を横方向のヘラケズリ、内面を横方向のハケ調整で仕上げている。

S B 23

遺物の出土量が少なく、図示できるものはない。

S B 25 (第138図)

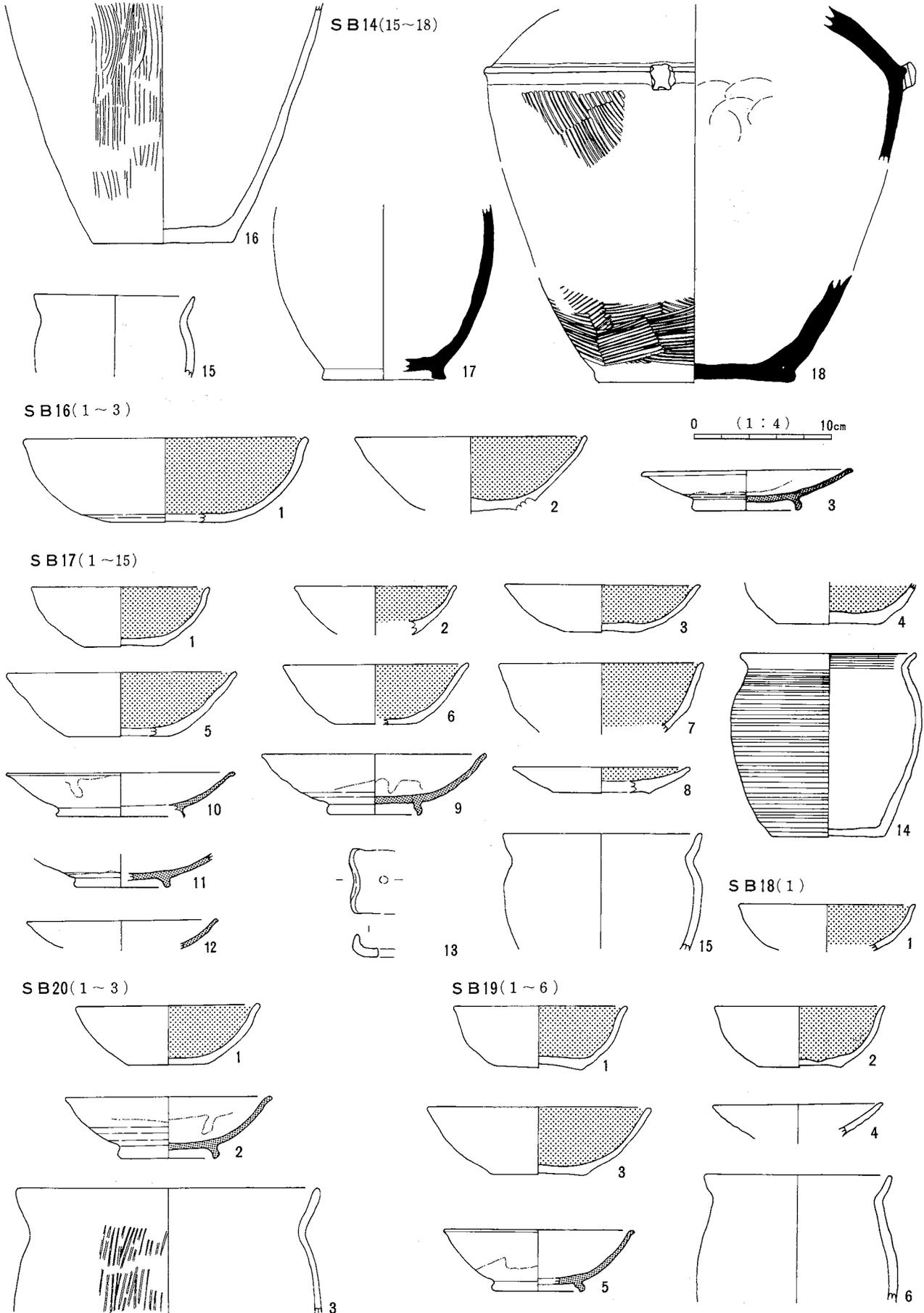
遺物の出土量は少ない。1は黒色土器A杯A II、2は皿Bである。

S B 28 (第139図、P L 29)

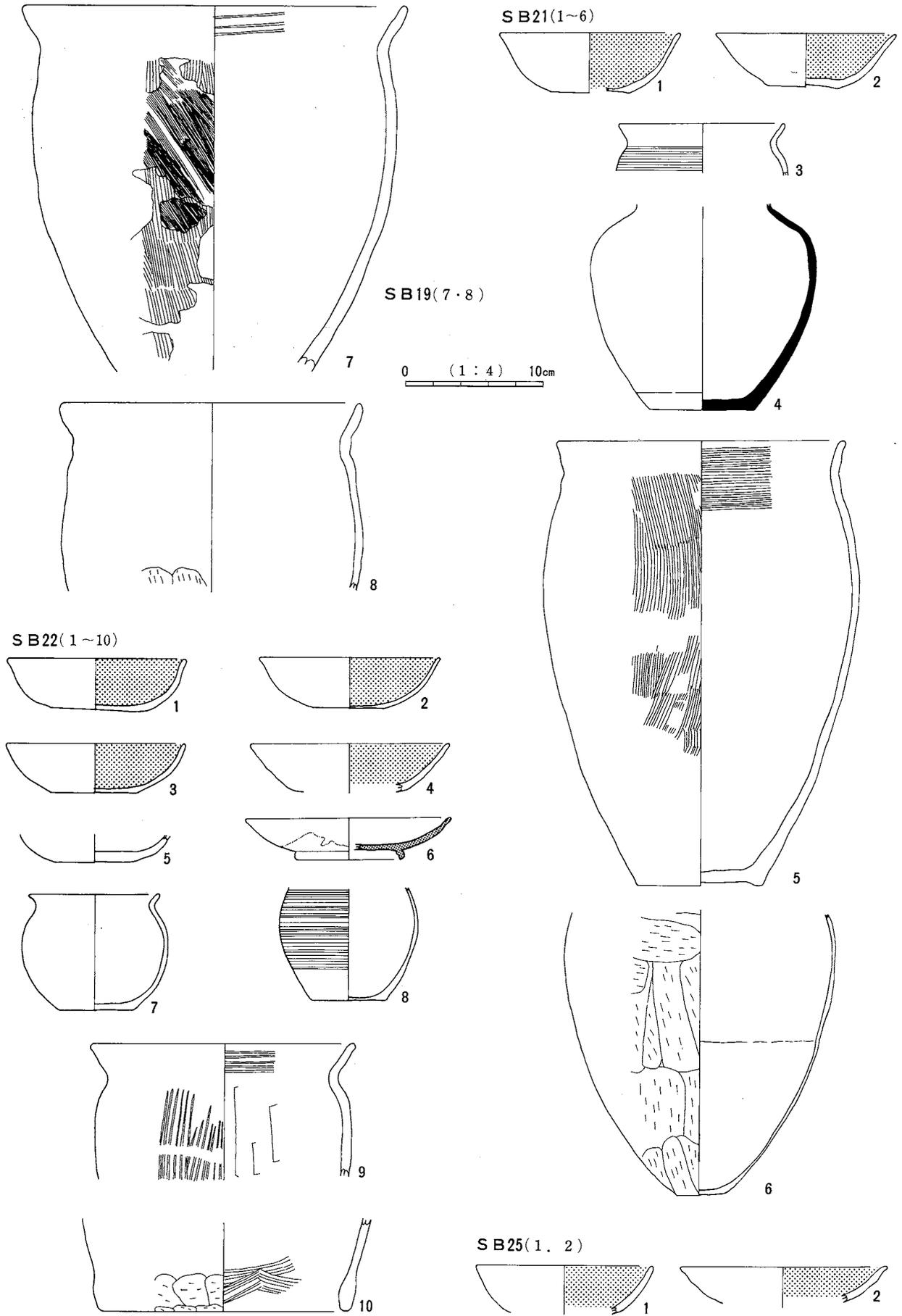
遺物の出土量が最も多く、上面に構築された中世火葬墓(SK1048)の遺物も含めてみていく。1~9は黒色土器杯A II、10は杯A Iである。11・12は灰釉陶器椀、13は皿Bである。14はロクロ調整の小型甕で、外面にカキメが施される。

遺構外出土 (第139図、P L 29)

1・2は須恵器杯A IIで、焼成は硬質で青灰色をしており、内面の底部周囲に顕著なロクロナデが入られる。3~5は黒色土器A杯A II、6は椀である。7はロクロ調整の外面にカキメが施される。8は上半部がヨコナデで消されるハケ調整の長胴甕、9は縦方向のナデで仕上げられる長胴甕である。10は須恵器短頸壺、11は凸帯付四耳壺の頸部である。

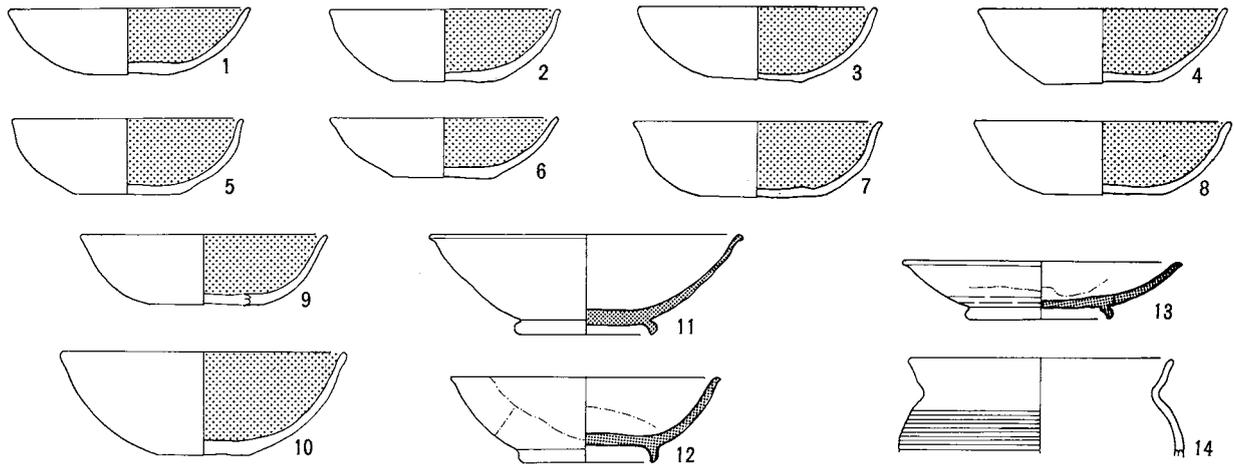


第137図 古代土器実測図(4)

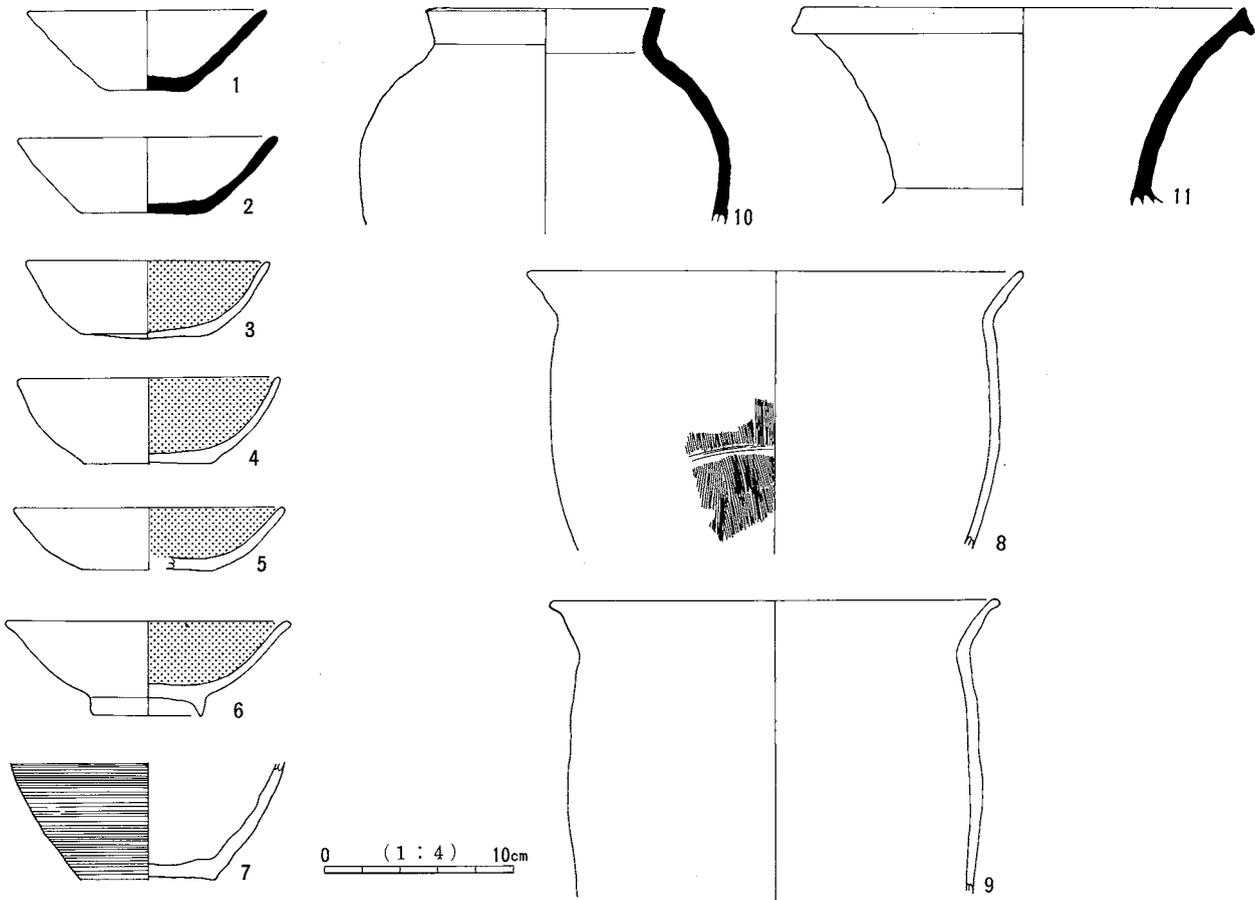


第138図 古代土器実測図(5)

S B28(1~14)



遺構外(1~11)



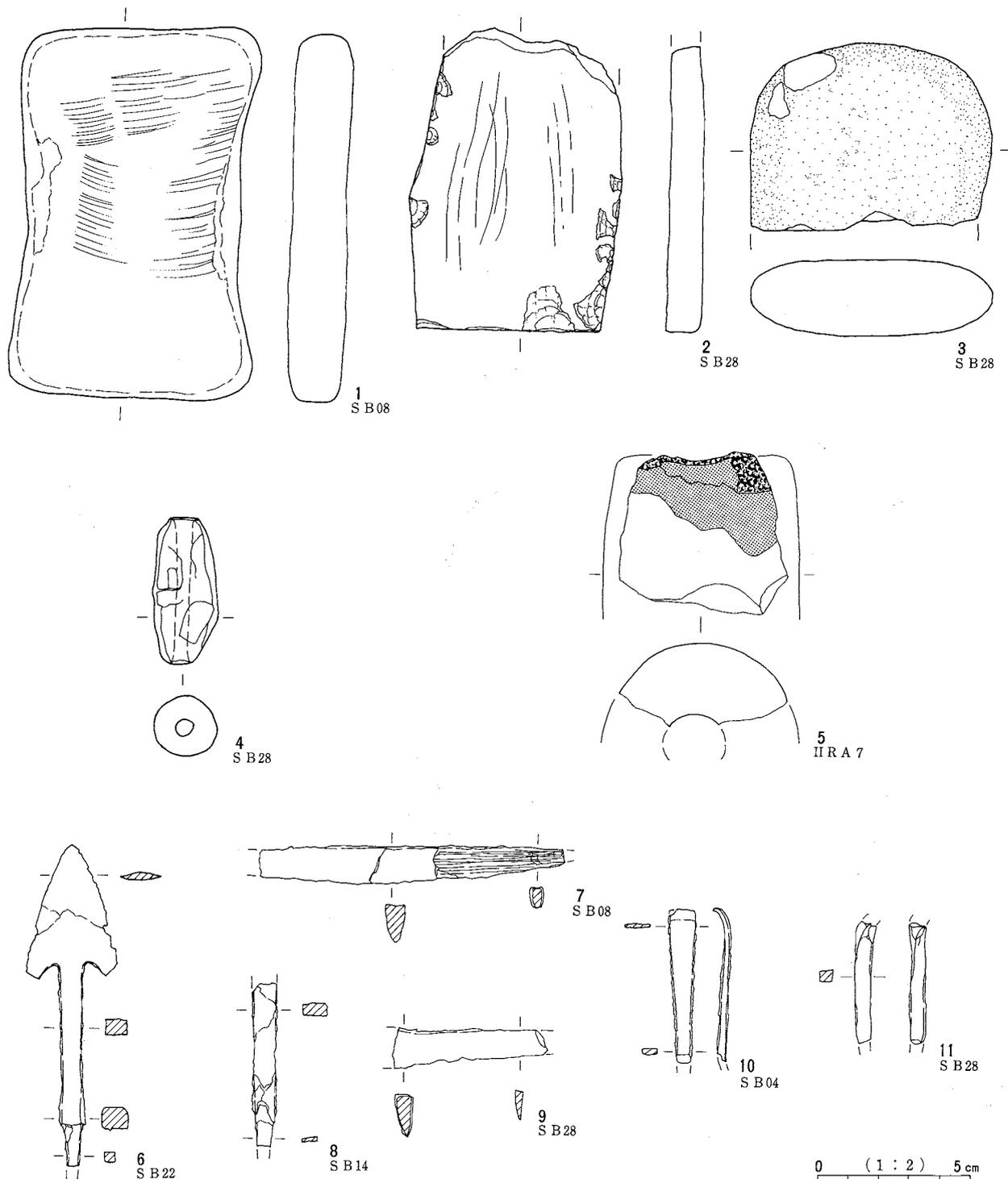
第139図 古代土器実測図(6)

(2) 石製品 (第140図)

1はS B08のカマド付近より出土した砥石で、砂岩の河原石の片面を研磨してある。2・3は同じく砂岩製の砥石で、前者は摩耗が著しく断面長方形を呈しており上下を欠損している。後者は河原石で、片面をわずかに研磨しており、加工部分は少ない。

(3) 土製品 (第140図)

4は、S B28より出土した土錘で、全長5 cmを測り、断面は直径2 cmほどの円形で、5 mmの穴が貫通し



第140図 古代石製品・土製品・鉄製品実測図

ている。5は遺構外より出土した羽口で、外径7cm、内径2cmを測り、先端部には溶着物が付着している。

(4) 鉄製品 (第140図)

出土量は少なく、これといった特徴は認められない。

6・8は鉄鏃である。6は基部の大半と逆刺先がわずかに欠損し、篋被部(頸部)が比較的長い。8は基部で上下を欠損している。7・9は刀子で、7は柄部に一部木質が残っており切先を欠損している。9は身部と柄部の境で大部分を欠損している。10は鎚鉤状の工具と考えられ、先端部を潰し、扁平で平面台

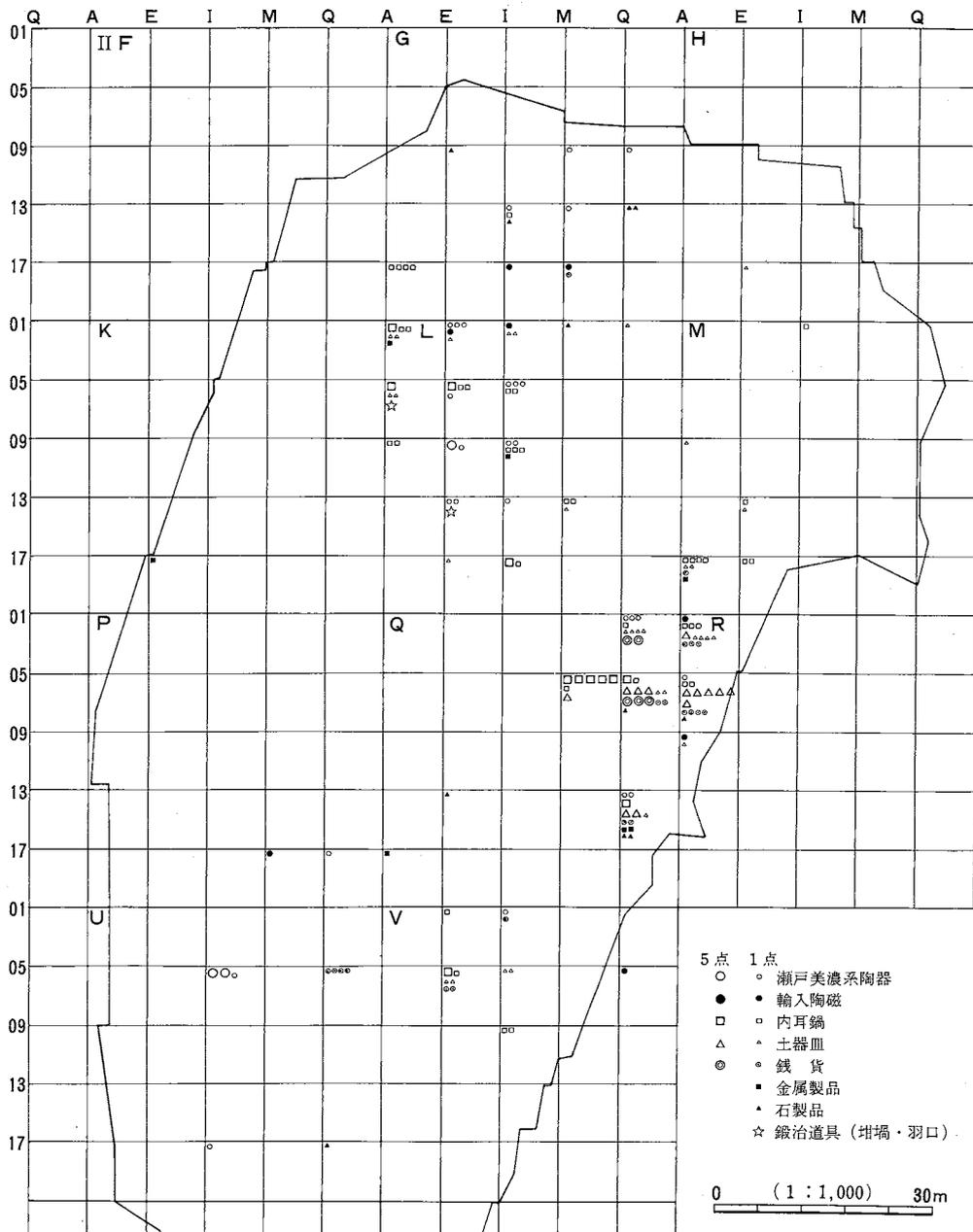
形の刃を造り出している。11は断面方形の釘で、下部と頭部を欠損している。第146図3は大形の釘である。

4 中世以降の遺物

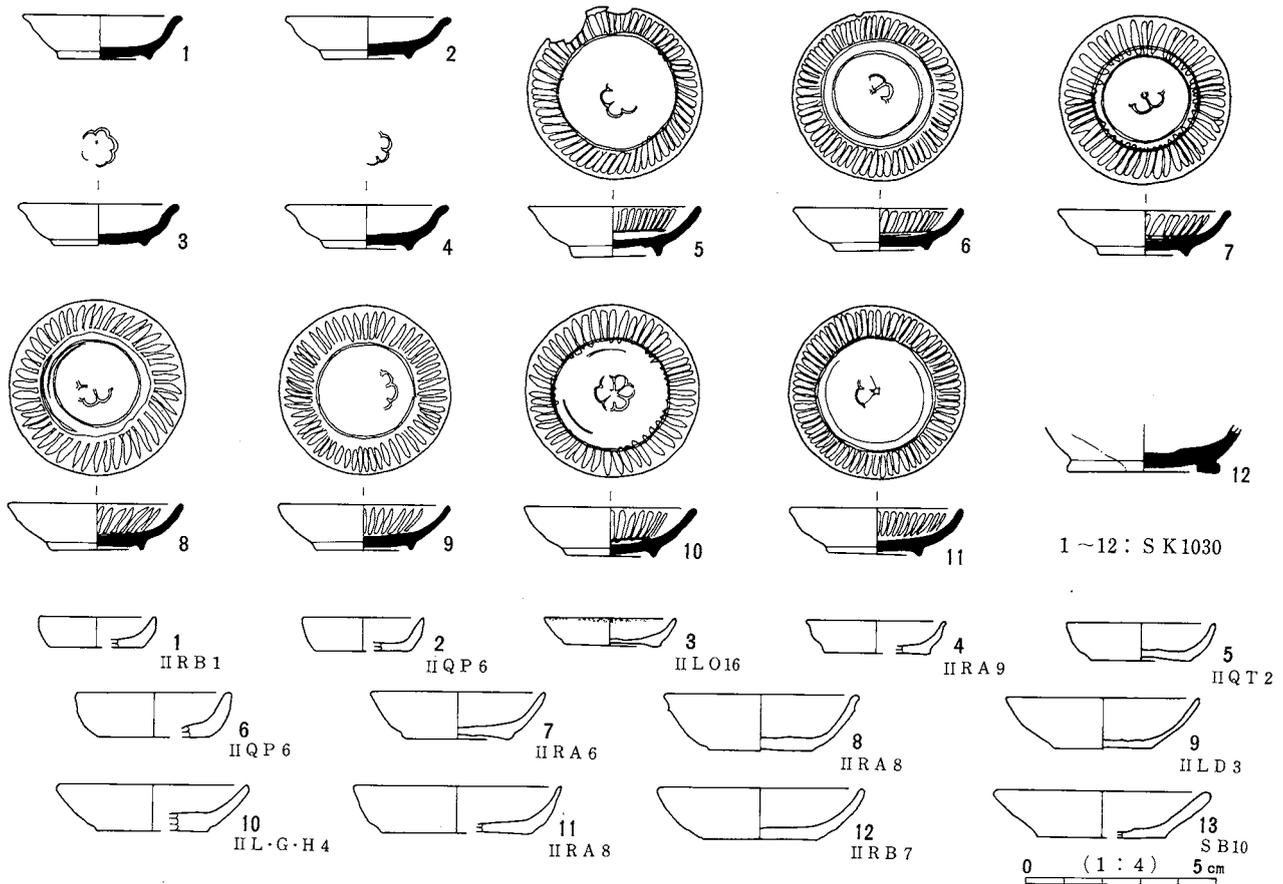
遺物の分布は、第141図に示すとおりで、遺構の集中する部分にやはり大きく三群に分かれて集中する。この片寄りが、生活の中あるいはその周囲への廃棄活動と関係があることは疑いない。種類別の分布の片寄り等はほとんど認められないが、ST02(IIQQ07)の部分に銭貨が集中することが注目される。

(1) 焼物

確実に遺構に伴った例は、わずかにSK1030しかない。他の遺構からの遺物は量的にも少なく、それも埋納と考えられる例はなく、埋没時の入り込みであろう。焼物の種類別に取り上げることにする。



第141図 中世遺物分布図



第142図 中世土器・陶器実測図

① 遺構出土の焼物

S K 1030 (第142図)

掘立柱建物 (S T13) の施設の一部と考えられ、遺物がまとまって出土したため、混入・廃棄の可能性より、一括埋納された可能性が高い。しかし箱等の痕跡は認められていない。その時期が建物の遺棄時か、生活時かははっきりしない。

1～11は完形の瀬戸・美濃系陶器の丸皿で、伏せて重ねられた状態で出土している。いずれも黄味がかった灰釉が底部外面を除き全面に施釉されており、大窯期前半、16世紀前半の所産と思われる。1・2は無文、3・4は中央に「かたばみ」のスタンプが押され、5～11も同様にスタンプが押され周囲を丸ノミで花卉状に彫り込んでいる。これらは法量の規格も統一されており、同一時期に同じ窯で生産された可能性が高い。12は灰釉陶器長頸瓶の底部で、平安時代の所産と考えられ、なんらかの理由で入り込んだと思われる。

このような埋納遺構は、県内の中世では類例が少なく、塩尻市柿沢東遺跡で同様に大窯期の陶器を伴った例がみられるのみである〔塩尻市教育委員会1982〕。

② 土器皿 (第142図)

比較的多くの土器皿が出土しているが、全体の形態がわかる例は少ない。また形態復原ができた例も小破片が多く、法量の数値等も正確とはいえない。胎土はいずれも混入物が少なく、焼成も良好である。成形・調整は「手づくね」はなく、いずれもロクロ調整で底部に糸切痕を残している。法量からみると、口径は大きく10～11cm (8～13)、9～10cm (6・7)、7cm以下 (1～5) の大中小の3種類に分けることが

可能である。3は口縁にススが付着しており、灯明皿として使用されたと思われる。

時期的には松本平の成果から、「手づくね」が存在していないことから、14世紀以後と考えられ、伴出する陶磁器の年代とは矛盾しない。

③ 輸入陶磁器 (第143図)

14～17は龍泉窯系青磁の碗である。14・15は底部で、16は口縁に雷文帯を施し、17は線で幅の狭い蓮弁を描く小碗である。18はほぼ全容のわかる口禿の白磁、19は白磁皿である。年代的にみると、やはり14・15世紀代に位置し、ほかの土器・陶磁器と矛盾しない。

④ 瀬戸・美濃系陶器 (第143図)

出土量は多いが、前述したS K 1030出土品を除くと、いずれも破片で全体が復原できる例は少ない。

20・21は緑がかった灰釉が施された古瀬戸の緑釉小皿である。22・26は鉄釉の天目茶碗であり、大窯前半期と思われる。23は鉄釉、24・25・28・29は灰釉が施された丸皿で、いずれも大窯期の所産と思われ、29の内部には「かたばみ」がスタンプされる。30は大窯期の摺鉢、27は鉄釉の仏花瓶である。時期的にはS K 1030出土品を含めて、古瀬戸後期から大窯前半期の製品が多く、15・16世紀代に位置づけられる。

⑤ 内耳鍋・ほか (第143図)

31は内耳鍋で、口縁は強いヨコナデを3条入れほぼ直立し、体部は垂直に立ち上がる。外面にはススが付着する。時期的には、口縁の外反がほとんどないことから16世紀代と考えられる。内耳鍋は破片が多数出土しているが、全体の形態がわかる例は少ない。32は内耳質のほうろく状の器で、内外面にまばらに横方向のヘラミガキが施されている。33はいわゆる内耳形の「ほうろく」で、器高5cmと浅い。32・33は江戸時代と考えられる。

⑥ 近世陶磁器 (第143図、P L 32)

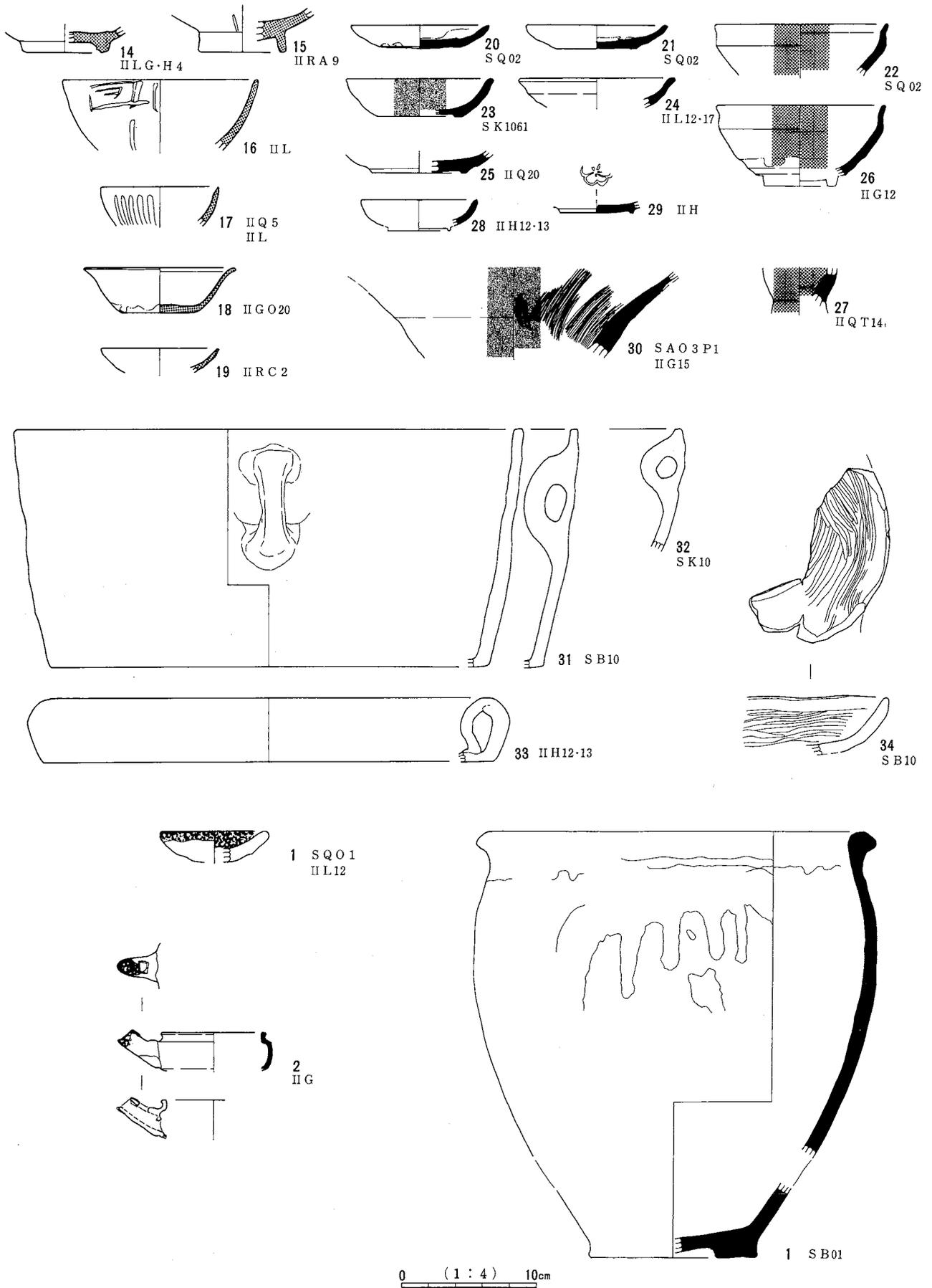
1 (S B 01出土) は近世末の西条焼と考えられる甕で、粗雑な混入物の多い胎土で外面に鉄釉が全面に施された後、灰釉が流し掛けされる。このほか、瀬戸・美濃系陶器の陶器・磁器、伊万里の磁器、在地産の摺鉢が出土しているが、遺構に伴うものはない。時期的には、17・18世紀代もみられるが、ほとんどは19世紀代である。S B 01は建物の土間の部分と考えられ、このほかにも削平されてしまっているが、いくつかの建物が江戸時代末期から明治時代にかけて存在していた可能性がある。

(2) 鍛冶道具 (第143図)

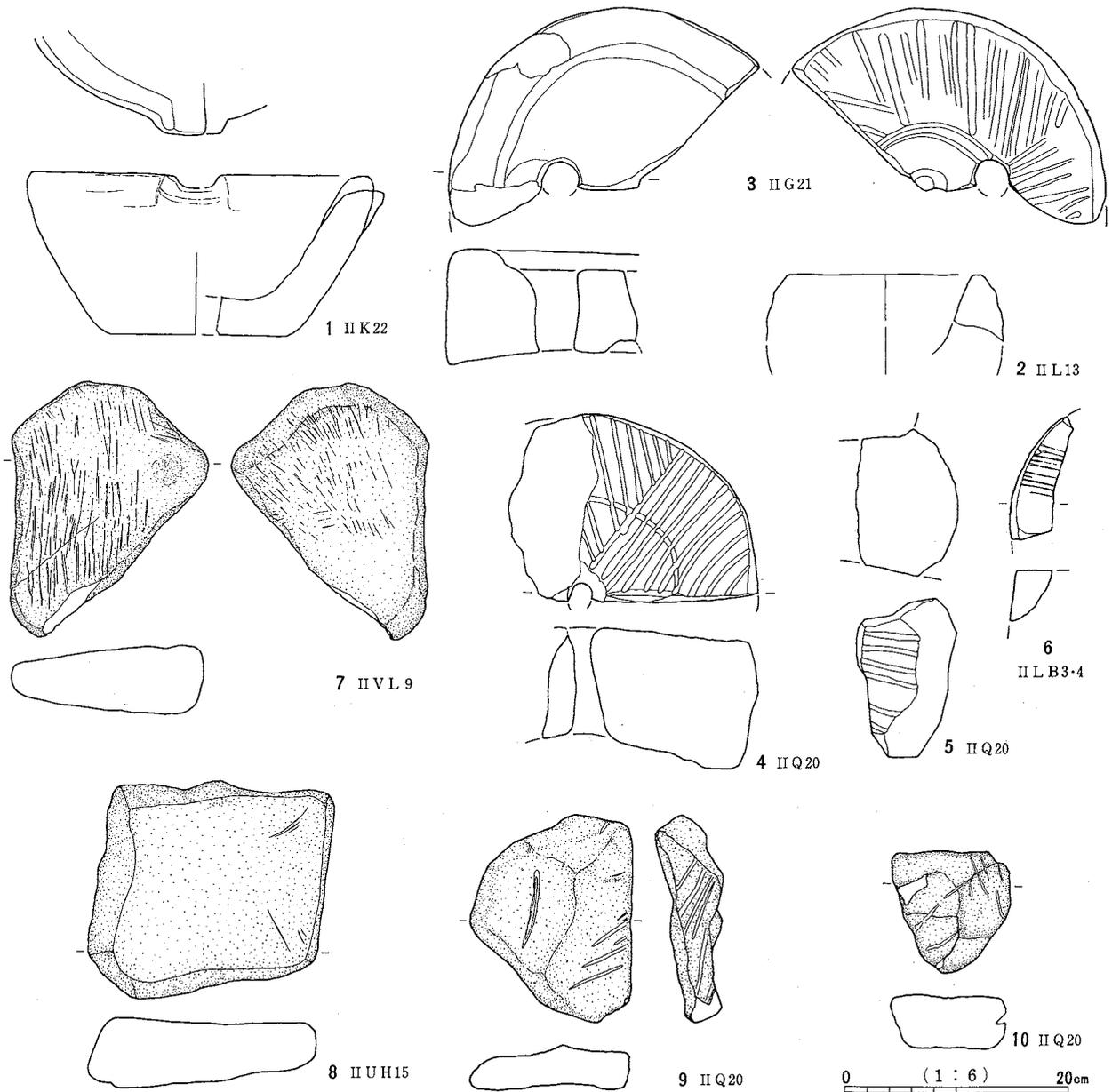
1は口径8cmを測る、坩堝と考えられる小形の皿状の土製品である。内面には溶着物が全面に厚く付着している。2は類例はほとんどないが、急須形の注ぎ口をもち、内部付着物が認められることから、鑄造の際に溶解物を流し込む道具と考えられる。このほか羽口がいくつか出土しているが、いずれも細片であり図示できないが、出土地点については、遺構の項でふれてある。

(3) 石製品 (第144・145図)

第144図1は片口が方形に削り出される珠洲系摺鉢と形態が類似した石鉢で、口径30cm程度を測る。2は口縁が内湾する石鉢で、体部は厚く内面は摩耗している。これらの石鉢は、珠洲系摺鉢が分布する千曲川流域に多く分布する。3～6は安山岩製の摺鉢で、6以外は上白である。



第143図 中世以降土器・陶磁器・鍛冶道具実測図

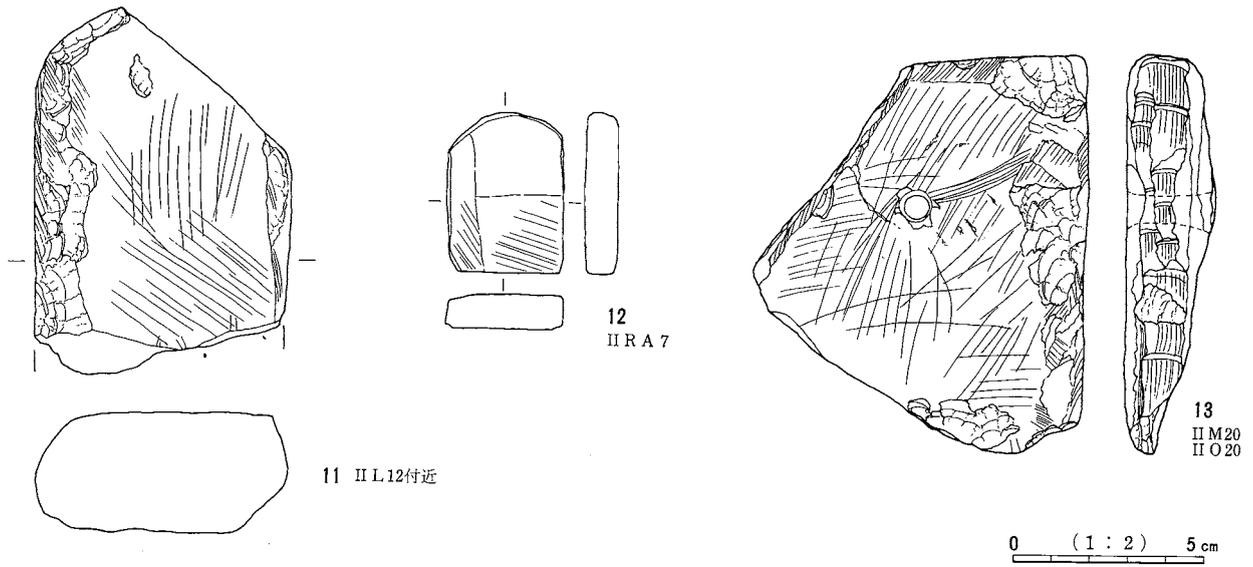


第144図 中世以降石製品実測図(1)

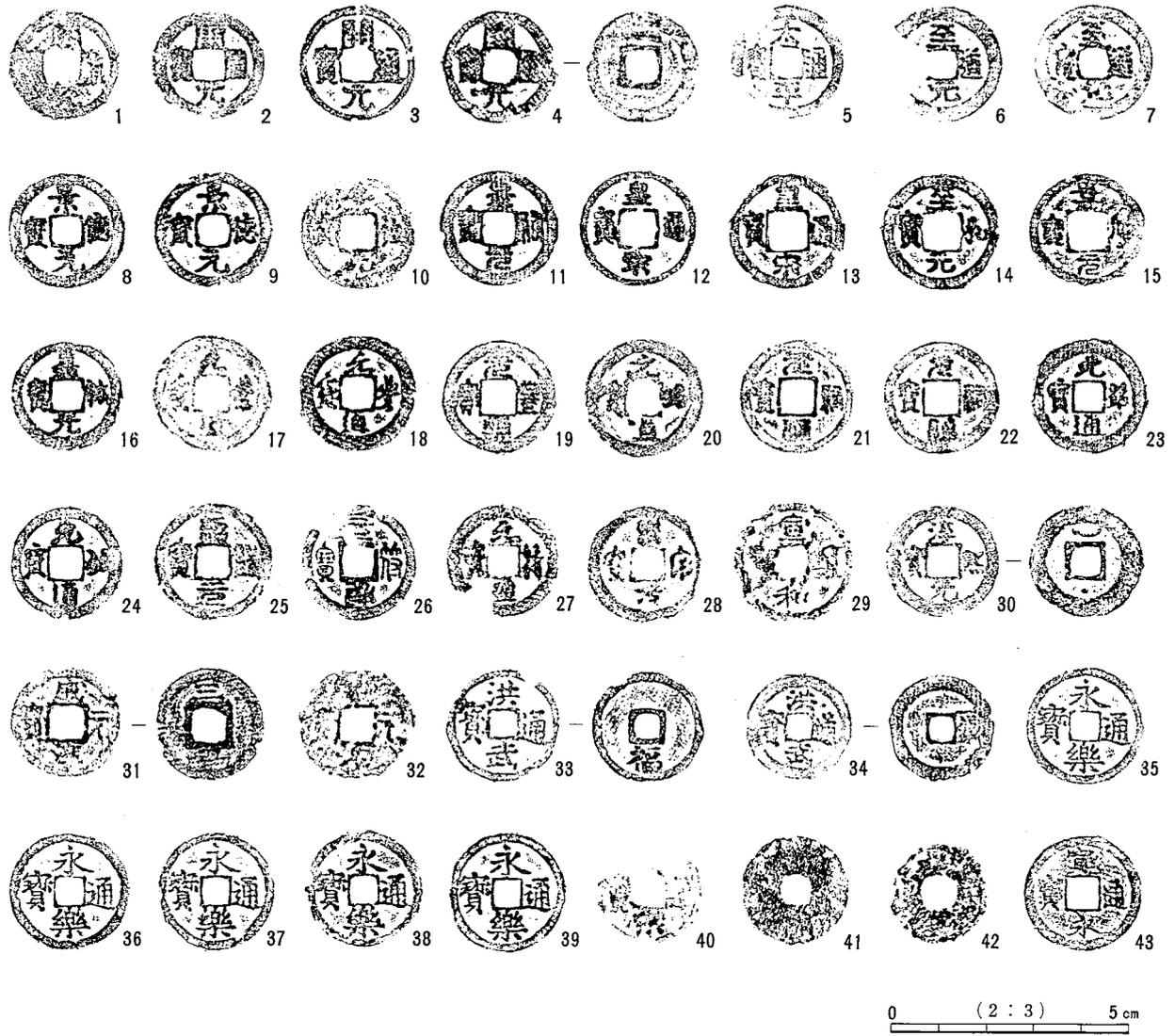
7～10は比較的大形の砂岩製の砥石で、自然面を多く残しており、片面のみを研磨している。線状痕を残している例もみられる。第145図11・12は粘板岩製の砥石で、丁寧に研磨されている。13は滑石製の研磨された薄い板状の製品で、直径5mmほどの穴が開けられている。中世の温石の可能性はある。

(4) 鉄・銅製品 (第147図)

8・14は銅製品、ほかは鉄製品である。1は断面方形の金具で、鐸あるいは鈴の舌の可能性が高い。2は断面方形の釘と思われる。4は断面方形の棒状で、火箸の可能性はある。5は断面方形で片側の端部は



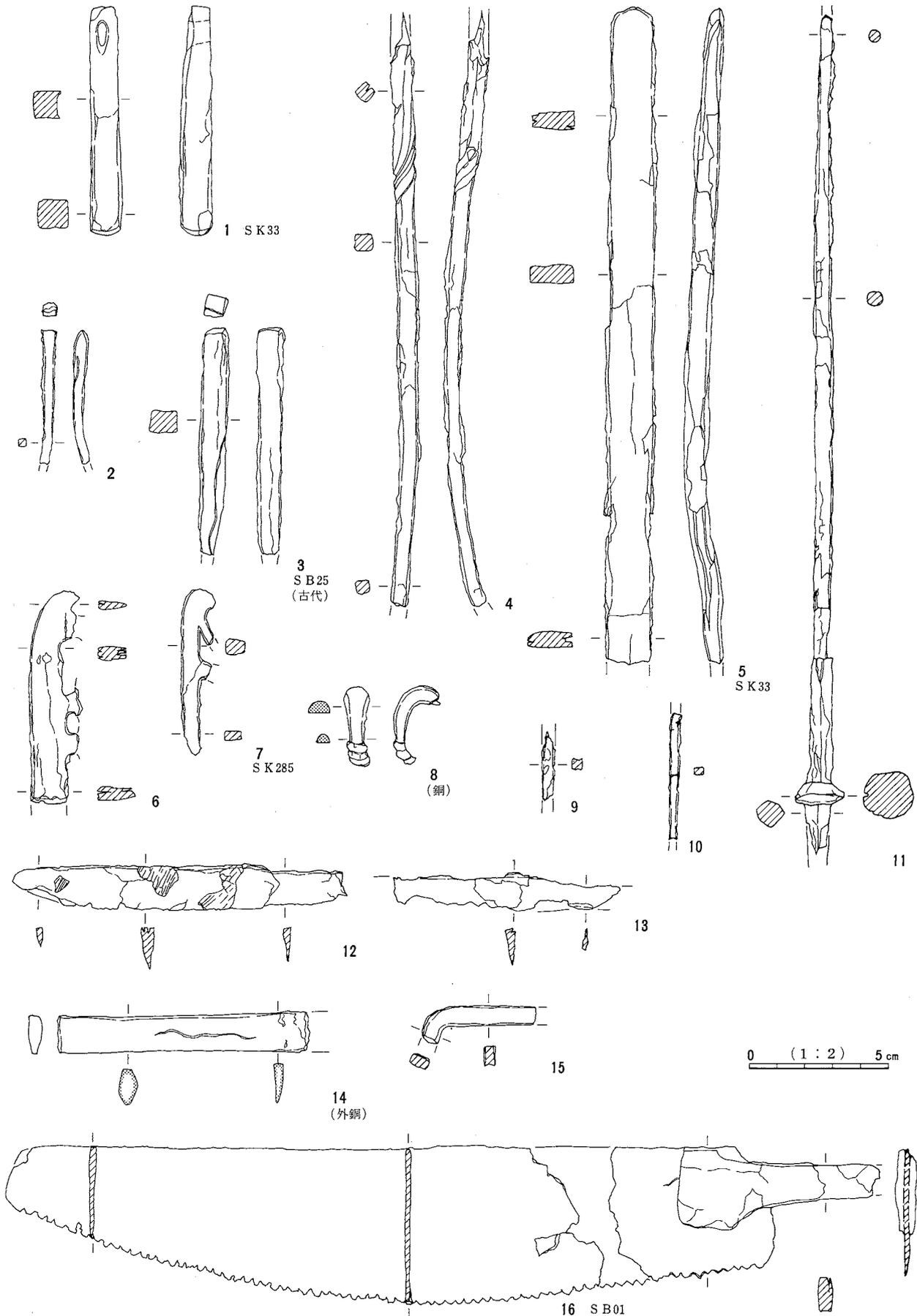
第145図 中世以降石製品実測図(2)



第146図 錢貨拓本図

第20表 銭貨一覧表

No.	出土地点	層位	貨幣名	書体	初鑄年	径	重量	備考	台帳No.
1	IIQS-03	II	開元通寶		621	23.2		わずか欠損	6
2	IIMC-19	II	〃		〃	23.4		〃	15
3	IIQR-07		〃		〃	24.2	2.75	完形、穿が左へ33°ふれている。	44
4	IIQR-07		〃		〃	23.8		略完形、背面上部に「-」	46
5	IIQS-02	II	太平通寶		976	24.2		4/5残存	7
6	IIQQ-06	II	至道元〇	真	995	24.6		3/4残存「至道元寶」	26
7	IIRA-03	II	至道元寶	〃	〃	24.7	2.75	完形	29
8	IIVE-07		景德元寶	〃	1004	24.2	2.35	〃	48
9	IIR-6		〃	〃	〃	24.0	2.20	〃	50
10	IIRA-06	II	景祐元寶	〃	1034	23.8	2.45	〃 摩滅orさびでやや不鮮明	17
11	IIQR-07		〃	篆	〃	24.5	2.00	〃	45-②
12	IIRD-01	II	皇宋通寶	真	1039	24.6	2.80	〃 穿が37°左へふれている。	13
13	IIQQ-07	II	〃	〃	〃	24.2		周縁欠損	22
14	IIRB-06		至和元寶	〃	1054~1055	24.2	3.05	完形、穿が33°左へふれている。	35
15	IIQQ-07	II	嘉祐元寶	篆	1056	24.3		周縁2/3欠損	23
16	IIVF-07		〃	真	〃	23.2	2.75	完形	49
17	IIQS-03	II	元豊通寶	〃	1078	24.5	2.80	〃	3
18	IIRA-07		〃	〃	〃	24.2	2.15	〃 穿が25°左へふれている。	30
19	不明		〃	篆	〃	23.7	3.25	〃	32
20	IIQT-02	II	元祐通寶	真	1086	24.5		略完形、肌に穴があく、腐食か	8
21	IIRC-02	II	〃	篆	〃	24.0	3.05	完形	16
22	IIQQ-07	II	〃	〃	〃	24.0	2.80	〃	20
23	IIQ-20		〃	真	〃	24.3	3.45	〃	36
24	IIQR-07		〃	〃	〃	23.5	2.00	〃	42
25	IIQQ-07	II	紹聖元寶	篆	1094	24.8	2.50	〃	18
26	IIQ-20		元符通寶	〃	1098	24.3		一部欠損	37
27	IIGO-20		〃	真	〃	23.5		〃	47
28	IIQS-03	II	聖宋元寶	篆	1101	25.0		略完形	2
29	IIQQ-07	II	宣和通寶	真	1119	24.5		一部欠損、破碎して10数分断	24
30	IIQS-03	II	淳熙元寶		1174	23.5	3.15	完形、背面上部に「-」、下部に「〇」	5
31	IIQS-07	II	咸淳元寶		1265	23.5	1.40	完形、背面上部に「三」	28
32	IIQQ-07	II	〇〇〇寶			23.5		摩滅甚だしい。「元」が右に見えるので南宋銭か。	21
33	IIQP-05	II	洪武通寶		1368	23.6		わずか欠損、背面下部に「福」	1
34	IIQS-03	II	〃		〃	22.2	3.20	完形、背面右に「一銭」	4
35	IIQT-02	II	永樂通寶		1408	24.7	2.80	完形	9
36	IIQT-02	II	〃		〃	25.0	2.85	完形	10
37	IIQT-02	II	〃		〃	24.7	2.60	完形	11
38	IIQQ-07		〃		〃	24.4	2.40	完形	19
39	IIQR-07		〃		〃	24.8	3.40	完形	45-①
40	IIV-3	表	〇宋〇寶					2/3残存、下は「宋」か	31
41	不明	II				25.0	2.30	無文、鑄写鑑か。	12
42	IIQQ-07	II				20.0	1.25	輪あり、銭文不読、鑄写鑑。	25
43	7トレンチ	II	寛永通寶			24.2	2.55	完形	27
44	IIQR-07		〇困〇〇			23.7		一部欠損、押圧によりゆがむ、「宋」らしくも見える。	43
45	不明	II	〇〇元寶			2.42	1.90	完形だが、中ほどよりU字に折曲がる。	14
46	SK1048							5mm以上の細片(溶塊)3ヶ	38
47	SK1048							(現物不明、溶塊の細片)	39
48	SK1048							13.5mmの溶塊1ヶ	40
49	SK1048							20mmの溶塊1個と細片5個	41

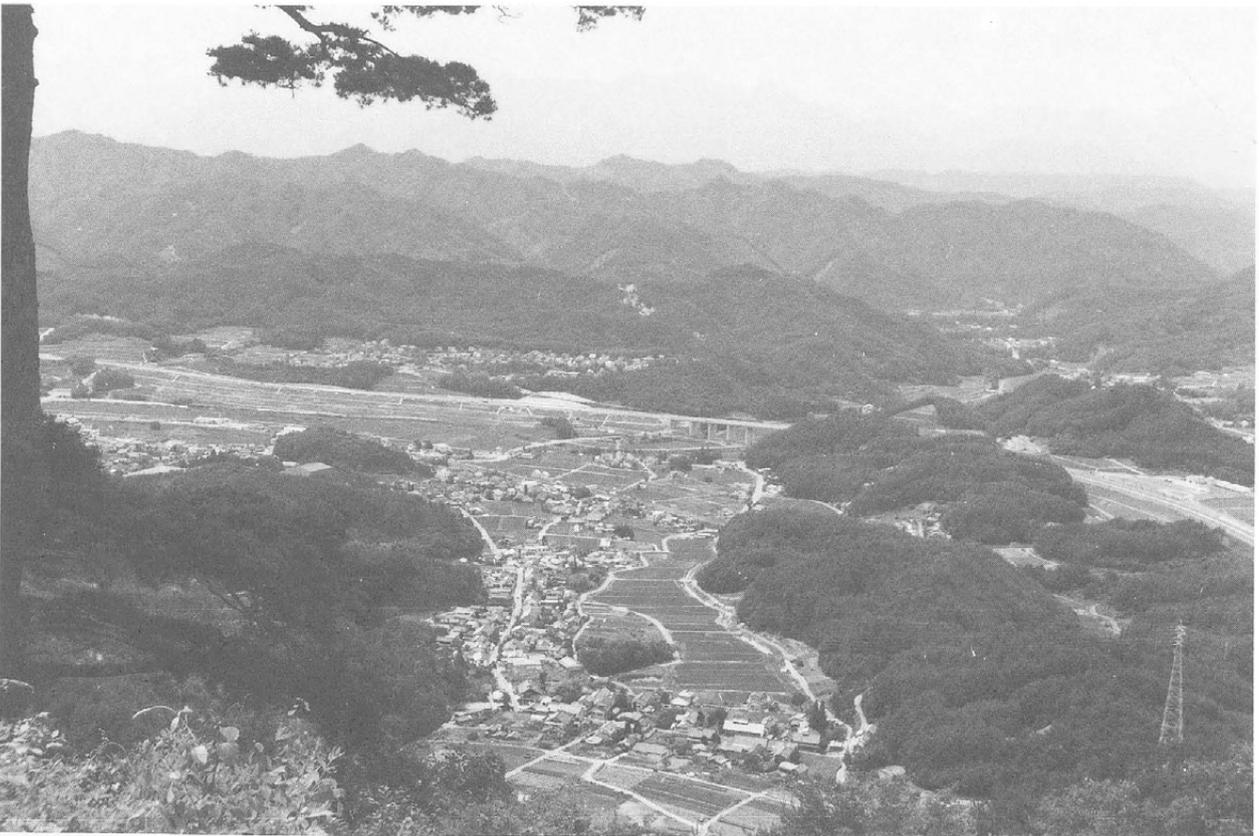


第147図 中世以降鉄・銅製品実測図

丸く仕上げられており、長大であるが用途は不明である。6・7は板等に貼付ける飾金具の可能性はある。8は断面が蒲鉾状で大きく湾曲しており、把手の可能性が高い。9・10は細い棒状であるが、用途は不明である。12・13は刀子で破損が著しい。14は内側に断面長方形の鉄製品が入り、周囲を板状の青銅製品で包んでおり、小柄の柄部の可能性はある。15は断面方形の棒状の鉄製品で用途は不明である。16は「木の葉」形の鋸で、柄部が厚く付けられており、遺構の時期から近世末と考えられる。

(5) 銭貨 (第146図・第20表)

調査区域全域にわたって、多数出土しているが、東群に最も集中する。遺構では、火葬墓(S K1048)より4枚がまとまって出土しているが、被熱して溶着しており貨幣名は不明である。棺桶等に六道銭として入れられ、そのまま拾骨される際に残されたと考えられる。そのほかは遺構外からの出土である。すべて唐代の開元通寶から明代の渡来銭で、初鑄年は最も新しい永樂通寶で1408年であり、陶磁器の年代と矛盾していない。



青柳城から見た向六工遺跡周辺の現況

第5節 成果と課題

1 縄文時代

(1) 第II群縄文早期末葉の土器群

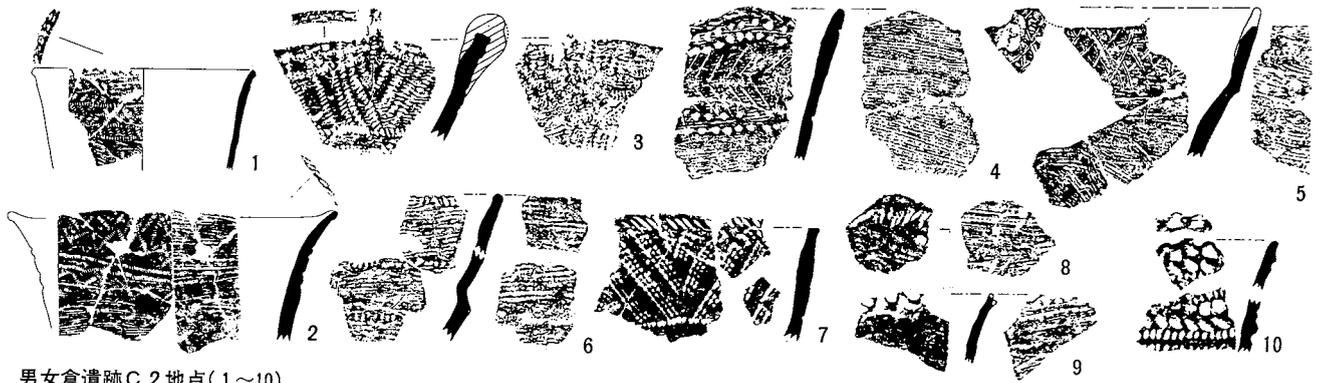
第4節1において、第II群とした縄文早期末葉の土器の編年的位置付けを試みた。その大別は、第2類a種の貝殻条痕を含む粗大な条痕文を内外面に施文する条痕文土器と、同種条痕文を施す第1類の絡条体圧痕文土器で構成される古段階と、第2類b・c種の絡条体条痕と刷毛目状の条痕文土器、同種条痕文を施すものを含む第1類の絡条体圧痕文土器、第3類の外面縄文・内面条痕文の縄文条痕文土器、第6類の少量の捺糸文土器などで構成される新段階である。遺跡の継続時期にほぼ間断がないものとして、東海編年では古段階は粕畑式・上の山式期、新段階は入海I式・II式期におおむね対比できるものと考えた。これを模式的にまとめれば、第21表のようになる。ここで問題となるのは、第5類とした東海系土器がほぼ上の山式に限られ、入海I・II式を伴っていないために新段階の時期が不明確な点と、従来知られている長野県内の早期末葉土器群の中に、縄文条痕文土器の存在が明らかになっていない点である。前節と重複する部分もあるが、これらの点について、絡条体圧痕文系土器編年の基準とされる資料を見直しながら検討してみたい(第148・149図)。

長野県では縄文早期の絡条体圧痕文土器はかつて子母口式に比定されていたが〔信濃史料刊行会1956〕、有明山社大門北遺跡において早期末から前期初頭に位置付けられ〔樋口1969〕、見直しの端緒となった。その後、和田村男女倉遺跡C₂地点の調査結果から、絡条体圧痕文土器を含む第5類土器を、茅山下層式との親縁性から早期後葉でも末に近い段階に位置付けられた〔笹沢1975〕。この一群は、1970年代末から1980年代前半にかけて盛んに議論された子母口式存否論や早期末編年論のなかでしばしば取り上げられてきた〔安孫子1982、毒島1983〕。1983年には中部・関東地方の早期末・前期初頭の土器群が集成・検討され、東海系土器に対比させた変遷の見通しがついた〔神奈川考古同人会1983〕。これ以降、岡谷市梨久保遺跡〔会田1986〕・膳棚B遺跡〔百瀬1988〕、茅野市高風呂遺跡〔守矢1986〕で住居址に伴う資料が報告され、諏訪盆地と松本盆地南部の資料から絡条体圧痕文系土器の変遷がたどれるようになった〔長野県史刊行会1988、児玉1988、百瀬1989、宮下1989〕。さらに、隣県の新潟県〔小熊1988〕、埼玉県〔金子1989〕、山梨県〔浅利1990〕でも絡条体圧痕文土器が報告・検討されている。また男女倉遺跡C₂地点第5類土器は、あらためて茅山上層式段階に位置付けられている〔中沢1991、金子1991〕。

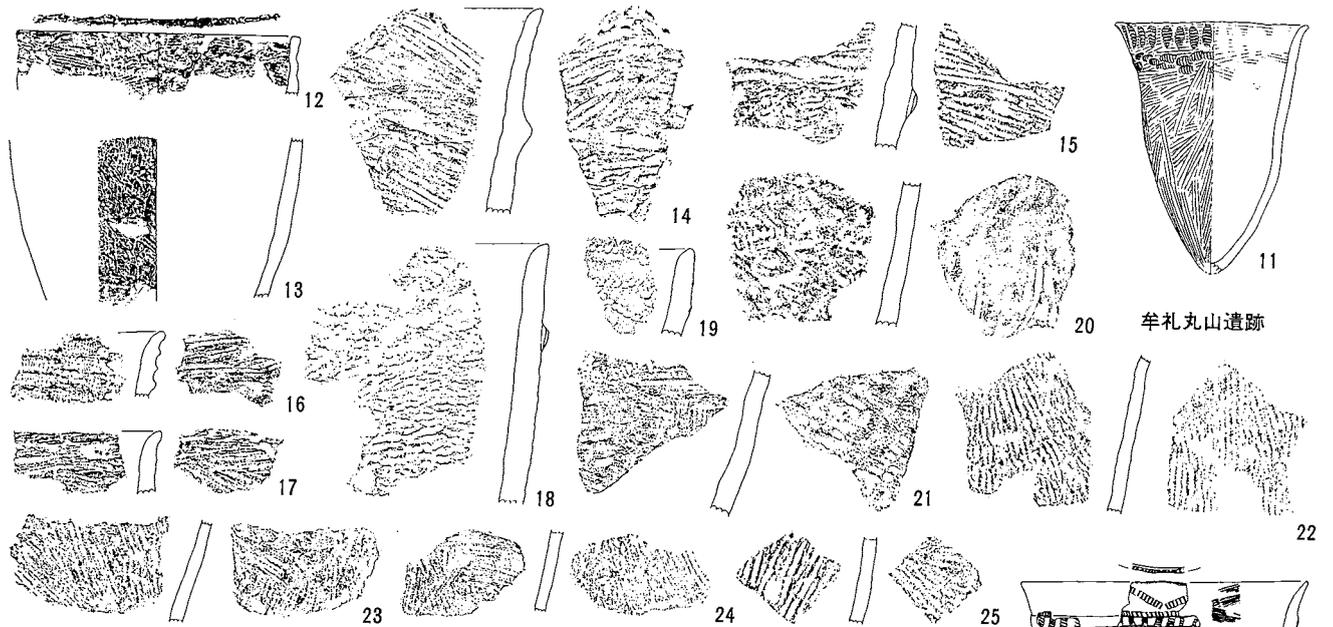
今日、長野県の早期末絡条体圧痕文土器は茅山上層式段階までさかのぼれる。前述のとおり男女倉遺跡C₂地点第5類(第148図1~10)の絡条体圧痕文土器は、同遺跡SK11またはSK15からの出土状態と〔中沢1991〕、東北南部の常世II式との型式学的な検討から〔金子1991〕、茅山上層式段階といわれている。一方、古手に属すといわれている牟礼村丸山遺跡の完形資料(第148図11)はいまだ類例を見いだせない。

第21表 第II群土器模式分類表

段 階	推定時期	第1類	第2類 条痕文			第3類	第5類	第6類	
		絡条体 圧痕文	a種	b種	c種	縄文	東海系	捺糸	側面 圧痕
古段階	粕畑式	a 種 条 痕	内 外 面 施 文	∴ 内 面 施 文 や 減	∴ 内 面 施 文 や 減	∴ 内 面 b ・ c 種 条 痕	∴	∴	内 面 b 種 条 痕
	上の山式								
新段階	入海I式	b 種 条 痕	∴	∴	∴	∴	∴	∴	∴
	入海II式								

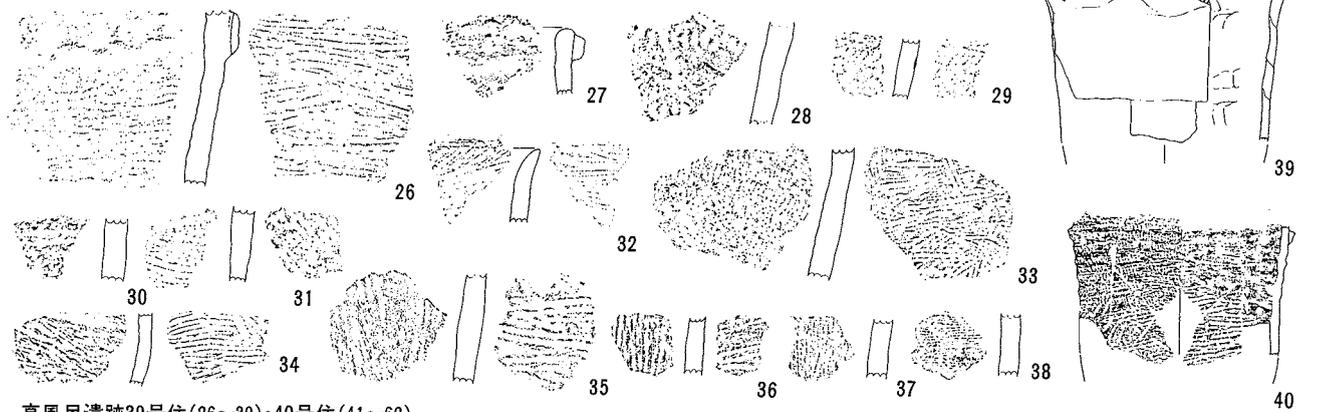


男女倉遺跡C 2地点(1~10)

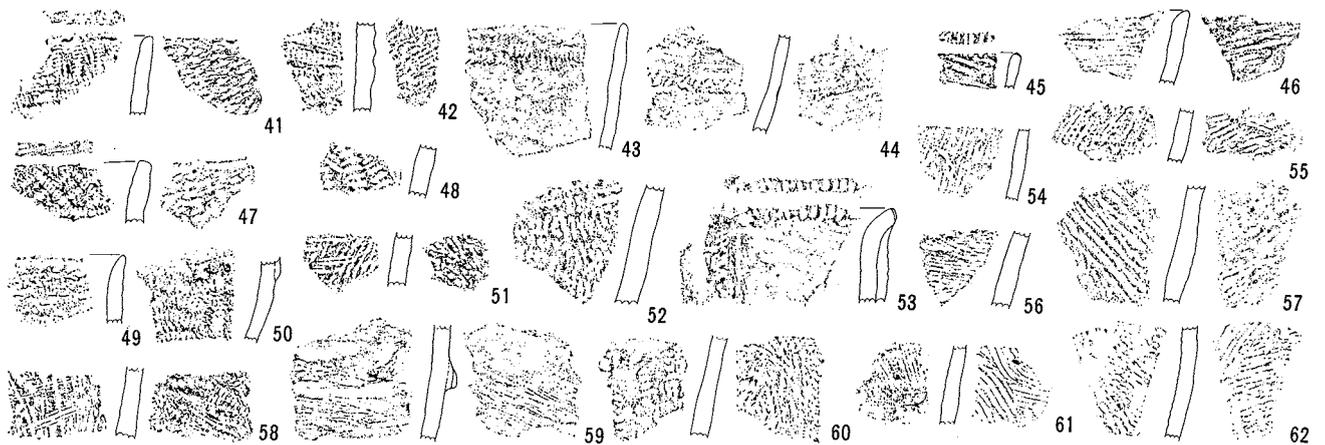


牟礼丸山遺跡

高風呂遺跡43号住(12~25)



高風呂遺跡39号住(26~39)・40号住(41~62)



第148図 長野県の絡条体圧痕文系土器(1) (1・2・11~13・39・40は1:8、3~10は約1:5、他は1:4)

高風呂遺跡43号住居址（第148図12～25）は茅山上層式でも古段階の土器、39号住居址（第148図26～39）では粕畑式を伴出して、この段階の基準となる。貝殻条痕を主体に絡条体条痕を伴い、内外面に施文されている。このうち低隆帯をもつものは埼玉県下段遺跡第Ⅲ群第3類にも見られ、向六工遺跡の第1類3はこれに対比される。絡条体圧痕文は横位・山形などに施文され、装飾性が少ないものである。39は39号住居址埋土上部の集石から出土し、住居址には伴わない。県内では粕畑式の出土例は多く、千曲川流域にも分布する。松本市北原遺跡〔島田1985〕では明確に遺構に伴わないものの、絡条体圧痕文土器とともに、出土した条痕文土器の約20%を、ほぼ粕畑式に限定される東海系土器が占めている。ただし、高風呂・北原遺跡とも男女倉遺跡C₂地点に対比できる資料が少ない点に問題を残す。

高風呂遺跡40号住居址（第148図41～62）は39号住居址を切っている。貝殻条痕と絡条体条痕が施文され、絡条体圧痕文は縦位・横位・X字状・密接施文など装飾的で、口縁部内面にも見られる。爪形文土器を伴うが、編年上の位置ははっきりしていない。向六工遺跡第Ⅱ群古段階の一部に共通するものがある。

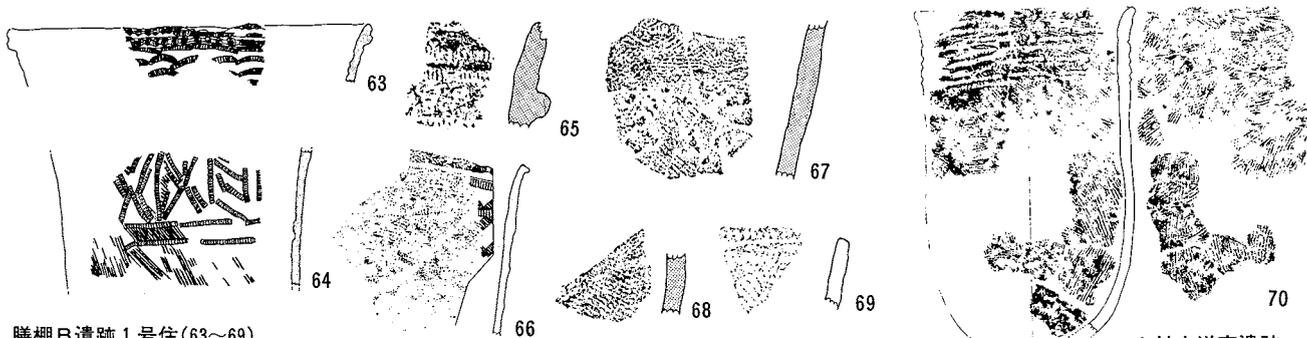
上の山式段階では遺構共伴例は知られていない。塩尻市八窪遺跡〔百瀬1989〕からは上の山式に近似する特徴を備えた土器と、非装飾的な絡条体圧痕文土器が出土した。他型式を交えずに絡条体圧痕文を共伴した例として、塩尻市竜神平遺跡〔百瀬1989〕があり、八窪遺跡に後出し、文様の多段化、多様化傾向が指摘されている。向六工遺跡第1類5はこれに対比される。このほか男女倉遺跡C₂地点、茅野市金山沢北遺跡〔小林1981〕、岡谷市海戸・丸山遺跡〔戸沢1973〕出土土器の一部がこの段階に属すると思われるが、他型式を交えるためははっきりしない。

入海Ⅰ式段階では遺構共伴例も単純時期の遺跡も知られず、塩尻市竜神遺跡周辺出土土器が提示され〔百瀬1989〕、装飾性の増加、口唇端部の肥厚、貝殻条痕から絡条体条痕への転化が指摘されている。これに基づいて向六工遺跡第1類6・123などをこの段階に位置付けた。このほか塩尻市堂の前遺跡〔百瀬1985〕や高風呂遺跡にこの段階の資料があるといわれる〔百瀬1989〕。

膳棚B遺跡1号住居址（第149図63～69）では撚糸地文を施し、内面をナデ調整する絡条体圧痕文土器と入海Ⅱ式～石山式の過渡的な特徴を備えた土器が共伴した。遺跡全体でもこの2型式に限られ、同じ特徴をもつ絡条体圧痕文土器を出土し、条痕文は少数である。鱗状・X字状など文様意匠が多様化し、装飾的である。向六工遺跡出土土器には撚糸文土器が少量含まれているが、いずれも内面に条痕文が施され、膳棚B遺跡と共通するものは見られない。このことから第Ⅱ群新段階の下限は膳棚B遺跡まで下らない時期、すなわち石山式かそれに近い段階の入海Ⅱ式以前と考えられる。

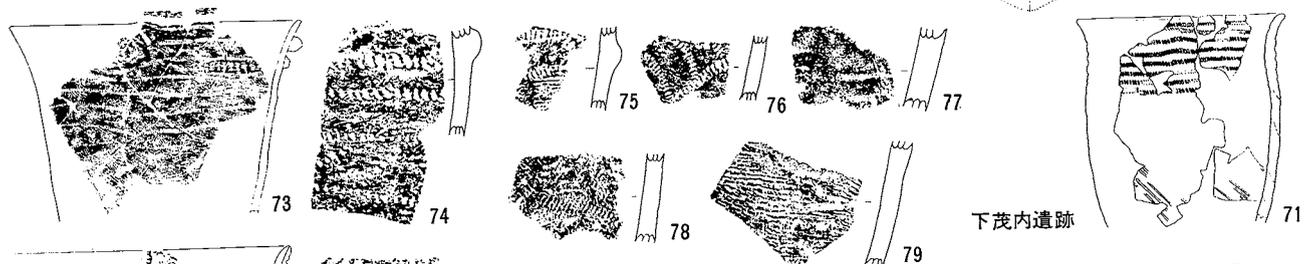
梨久保遺跡23a・b・75号住居址（第149図73～142）では撚糸地文を施し、内面をナデ調整する絡条体圧痕文土器が出土した。口縁部の隆帯が特徴的で、絡条体圧痕文は文様意匠がやや簡略化して横位施文が目立つ。同じ住居址内から隆帯をもつ縄文施文土器も多量に出土し、羽状縄文を構成するものが多い。東海系としては石山式・天神山式が出土し、天神山式の量が多い。報文では早期末の東海系土器・絡条体条痕文土器と、絡条体圧痕文土器の大部分・撚糸文および縄文施文土器を時期区分しているが、少数の東海系土器を主体に1時期を構成するとは考えにくく、撚糸地文の絡条体圧痕文土器とは共伴とみてよいと思われ、膳棚B遺跡に続く時期に位置付けられる。松本市坪ノ内遺跡〔島田1990〕の土器集中区からは梨久保遺跡と同時期の絡条体圧痕文土器、撚糸文および縄文施文土器が出土し、少数の入海Ⅱ式・塩屋式が含まれているため、多少時期幅がある。向六工遺跡第3類は縄文条痕文土器であり、梨久保・坪ノ内遺跡の縄文施文土器とは原体や羽状縄文の点でも、内面調整の点でも異なり、ほかに共通するものは見られない。

ここまで絡条体圧痕文土器を伴う県内の代表的遺跡と向六工遺跡を比較し、第Ⅱ群土器の編年的位置を確認してきた。この結果、入海Ⅰ式前後の段階は現状では資料的制約から明確に時期区分できないものの、おおよその時期幅を確認できた。しかし、第3類の縄文条痕文土器に比較し得る資料は見いだせなかつ

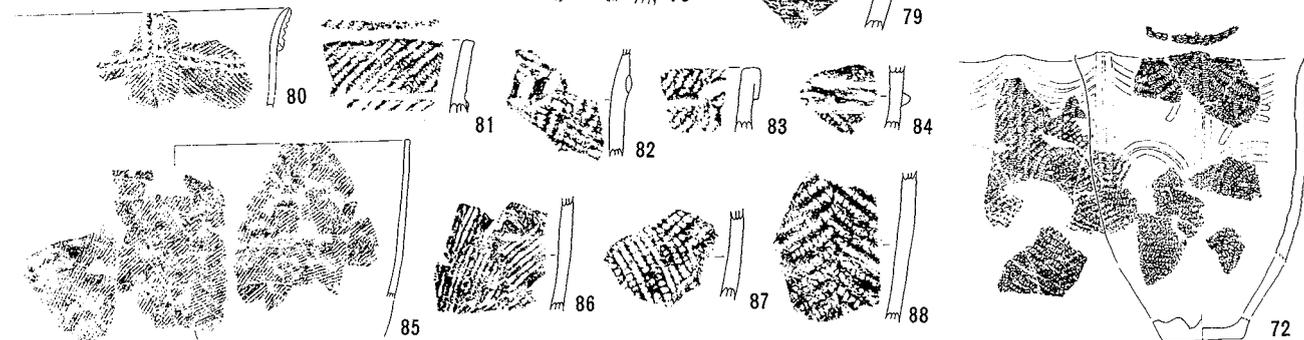


膳棚B遺跡1号住(63~69)

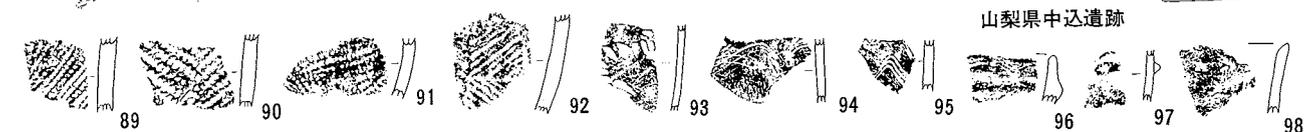
上林中道南遺跡



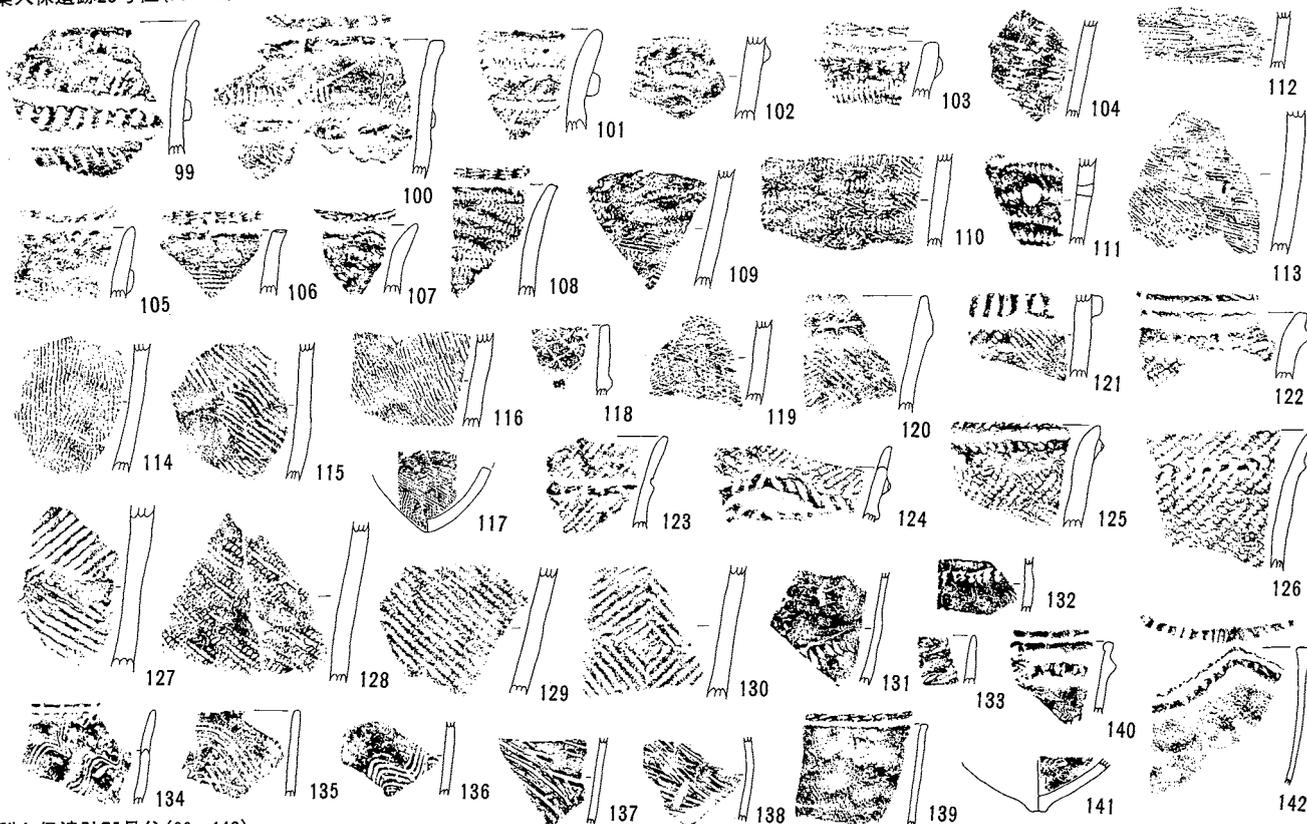
下茂内遺跡



山梨県中込遺跡



梨久保遺跡23号住(73~98)



梨久保遺跡75号住(99~142)

第149図 長野県の絡条体圧痕文系土器(2)

(63・64・66・70~73・80・85は1:8、他は1:4)

た。仮にSB26における絡条体圧痕文土器との共伴関係を無視しても、ほとんど条痕文を伴わない膳棚B遺跡や梨久保遺跡の資料群に介在させる余地は認められない。このことは、向六工遺跡SB26を含む第II群新段階の土器群の一部が、これまで未確定の時期に位置する可能性を示唆する。

早期後葉の縄文施文土器は東北地方で発展したもので、中部・関東地方の前期初頭土器群の成立に強い影響をおよぼしていることは周知のとおりである。向六工遺跡の第3類縄文条痕文土器は、多条の原体を含む斜縄文に少数の異方向施文の縄文を伴い、SB26で共伴した胴部に縦長の菱形文を描く絡条体圧痕文土器(第71図1)は注目される。このような文様構成は下段遺跡第IV群第1・2類土器(金子1989)と一脈通ずるもので、報文では早稲田5類や東北南部の土器群との関連が指摘されている。したがって、第6類の側面圧痕文土器も含めて、先に想定した向六工遺跡第II群新段階の時期は、東北地方から東海地方におよぶ土器群の比較検討によって確定される課題である。縄文条痕土器第III期(相原1985)に属す福島県松ヶ平A遺跡(鈴鹿1984)には、側面圧痕文とともに口縁部にX字状の文様が沈線で描かれた土器があり、縦位の隆帯を伴う例も見られる。花積下層式成立直前の、縄文条痕土器群第IV期(相原1985)とされる福島県の大畑G式(馬目1975)は、早稲田5類並行という説もあり(林1982)、位置付けには不確定要素をもつが、縄文・撚糸を地文とし、幅広の口縁部文様帯に米字状文や弧線文を描く。向六工遺跡より後出の、膳棚B遺跡1号住居址の絡条体圧痕文土器には同様の意匠がみられ、明科町ほうろく屋敷遺跡(大沢1991)にはこれに縦位の突起をもつ例がある。これらは前段階の鋸歯状文やX字状文の系統から理解することもできるが、撚糸文・縄文施文とともに、その出自を並行期の東北系土器に求められるであろう。山梨県中込遺跡(浅利1990)の縄文地文に絡条体圧痕文で弧線文が描かれる土器(第72図)は、茅野市御座岩岩陰遺跡(宮坂1966)・よせの台遺跡(宮坂1978)に類例があり、やはり東北系統の文様とみられる。これらは梨久保遺跡の段階であろう。

石山式~天神山式段階の梨久保遺跡・坪ノ内遺跡では多量の縄文施文土器が出土したが、おそらく膳棚B遺跡の時期の前後に、在来の条痕施文の絡条体圧痕文土器から、中道式に代表される縄文尖底土器への転換が始まり、早期終末には東北地方で醸成されてきた羽状縄文土器が急速に波及したものであろう。それらの縄文施文土器の位置付けは、中道式の定義や早期と前期の区分と不可分の問題であり、なお慎重な検討が必要である。

これまで眺めてきた長野県の絡条体圧痕文系土器の変遷を概観してみよう。絡条体は文様を描くには融通のきかない原体のためか、時期が異なっても文様意匠に顕著な変化が見られない傾向がある。このような理由から文様意匠の変化はさておき、地文の変化に着目して3大別し、模式的ではあるが東海系土器の諸段階に当てはめてみる。古段階は粕畑式・上の山式段階で、貝殻条痕文を含む粗大な条痕文を内外面に施文する時期である。中段階は入海I式・入海II式段階で、絡条体条痕文を内外面に施文する時期である。新段階は石山式・天神山式段階で、撚糸文を外面のみに施文する時期である。向六工遺跡第II群古段階がここでいう古段階、新段階が中段階に、それぞれ相当する。古段階は県内に広く分布する鶴ヶ島台式以来の貝殻条痕文の伝統を受け継ぎ、関東・東海地方の土器分布圏とも重複している。中段階には絡条体という単一の施文具で文様意匠・地文を施し、関東地方とは異なる、絡条体圧痕文主体の土器群を生み出す。貝殻使用の衰退と粕畑式以降の東海系土器の分布の減少は連動しているようであり、自立性の強い時期といえる。新段階は、在地の伝統を残しながらも条痕手法から撚糸文という回転手法に移行し、東北地方を核とする羽状縄文土器の生成という汎東日本的な動向に歩調を合わせる。

このような東北系土器群への接近という動向の中で、向六工遺跡の縄文条痕文土器は新段階到来の第一波といえるが、膳棚B遺跡に縄文施文土器が見いだせないため、梨久保遺跡の段階への連続性に問題を残す。これについては資料の充実待つほかないが、松本盆地の最北端に位置し千曲川流域にも近い向六工

遺跡は、諏訪盆地周辺より東北の情報が届きやすかったというような、地理的な要因も考慮される。

この後、県南は塩屋式の分布圏に取り込まれて中越式の成立基盤をなす。県北には中道式の祖形あるいは古段階の土器が主体的に分布し、この段階の絡条体圧痕文は隆帯や突起・口唇部への押圧などの装飾要素として残存し、間もなく終息すると予想される。

(2) 縄文早期末葉の遺構と集落

今回の調査で検出された縄文時代の遺構には、住居址5軒、焼土址8カ所、集石5基、土坑7基がある。住居址はすべて早期末の条痕文土器を出土し、該期に属することは明らかである。前項で検討したとおり第II群土器には多少の時期幅があるが、上段分布帯にあるSB26が新段階でも縄文施文土器を伴う新しい時期に比定されるほか、少量の遺物からは詳細な時期を知りえない。他の4軒は中段分布帯にあり、土器分布の点からも古・新しいずれの段階に属すか明確ではない。焼土址と集石は上段分布帯のIVA区にあり、この地区からは多量の遺物を出土したが、個々の遺構に伴う遺物は特定できない。土坑については、下段分布帯にあるSK329・330・333が周辺出土土器から第II群古段階に属すると思われる。各種遺構の同時性は必ずしも明らかにならないが、ここでは住居址を中心に縄文早期末の集落について検討してみたい。

住居址の分布は、中段にあるSB11・12・13が5m前後の距離をもって接近し、SB29は南へ約20m離れる。上段にあるSB26の付近には焼土址、集石が分布し、視覚的には中段・上段2群の遺構群とみることが出来る。ただし、中段は地形の改変や耕作のため遺構の遺存状態はよくなく、本来は焼土址や集石を伴っていた可能性がある。また住居址が検出されなかった下段も遺物の分布範囲は上・中段を上回る。これらの遺構・遺物分布から、各々の分布帯を一つの生活空間と想定すれば、その範囲は2,000㎡前後となる。

住居址の形態はSB11・26が小形の円形、SB12・13が大形の楕円形、SB29が隅丸方形を呈し、SB29以外はきわめて浅い掘り込みである。いずれも地床炉をもつ。柱穴と思われるピットは、SB12・13が中軸上の片寄った位置にある炉の周囲に数個、SB11・29には不規則に2・3個あり、SB26には認められない。SB12・13は重複の可能性も否定できないが積極的な根拠はなく、1軒と考えた。遺物はSB26に多かったほかはごく少量である。ただし、いずれの住居址も黒曜石等の碎片を多数出土し、SB11は台石を備えている。これらのことから、住居の規模・形態にかかわらず屋内外で火が使用され、食物加工や石器製作等の活動が営まれていたことが推定される。

集石の性格については、外見上被熱の痕跡が認められなかったことから、いわゆる集石炉と断定はできないが、墓とは考えにくく、一種の調理施設と推定するに留めておく。

次に長野県内の縄文早期後葉の住居址と本遺跡の住居址を比較してみる。第22表は県内の条痕文系土器の時期に属す住居址を集成したもので、本遺跡を含めて現在31軒が確認されている。これらは、確認できる土器型式としては鶉ヶ島台式から塩屋式までを出土し、茅山上層式・粕畑式までの前半段階と、それ以降の後半段階に大別してみる。前半段階では、望月町浄永坊〔福島1984〕・塩尻市堂の前〔百瀬1985〕・茅野市高風呂〔守矢1986〕・宮田村元宮神社東〔土屋1971〕・飯田市中島平〔佐藤1977〕の5遺跡である。形態は楕円形を主体に円形、長方形があり、規模は長径4～5mを中心として、3m以下の小形もみられる。柱穴は数や配置が不規則なものが多く、4本の支柱穴か壁柱穴がめぐる二者がみられる。炉は中島平遺跡の石囲炉が唯一の例である。堂の前遺跡7号住居址は長径13mの大形住居址として注目される。重複として報告されている元宮神社東遺跡2・4号住居址は、大形の長方形の2号住居址のプラン内のほぼ半分を占めて方形の4号住居址がある。床面の深さは4号が深い土器型式・埋土には差がないようで、柱穴は4号住居址のみにある。この例は向六工遺跡のSB12・13の炉・柱穴のあり方と共通し、1軒の住居址でも、上屋のかかる部分とない部分、あるいは低い屋根のかかる部分をもつような構造も推定される。

後半段階に属するのは、岡谷市膳棚B〔百瀬1988〕・梨久保〔会田1986〕・茅野市駒形〔宮坂1961〕・南箕輪村北高根A〔山岡1973〕・高遠町宮の原〔林1977〕・カゴ田〔友野1978〕の6遺跡である。規模・形態に顕著な変化はないが、塩屋式を出土する住居址の過半数が地床炉をもっている。向六工遺跡の5軒の住居址はすべて地床炉があり、入海Ⅱ式を下らない時期と思われる、県内で竪穴住居址内に炉をもつ集落としては初現的な例となる。また前半段階には炉がみられないから、向六工遺跡のSB26以外の4軒の住居址の時期は、第Ⅱ群土器でも新段階に属す可能性が高いと考えられる。後半段階の住居址で注目されるもう一つの点は、台石をもつ例があることである。向六工遺跡SB11の台石は重さ30kgを超えるもので、一種の遺構ともいえる。台石を備える住居址は、原村阿久遺跡第Ⅱ期〔笹沢1982〕や豊丘村田村原遺跡〔酒井1974・佐藤1983〕など、前期前葉に多くみられ、向六工遺跡は古い例となる。住居址内の炉と台石は前期に連なる要素であり、屋内の暖房や照明の確保と作業施設の固定化は住居の機能の強化を意味し、定住化の現れでもあろう。今回の調査によって、条痕文系土器群の後半段階からこれが確実にみられることが明らかになった。向六工遺跡は、ほぼ全面的な調査によって早期的な小集落の姿を現したが、前項で検討した縄文条痕文土器とともに、遺構の面でも前期への胎動が感じられる。

第22表 長野県の縄文早期後葉住居址一覧表

遺跡・住居址番号	所在地	出土土器	規模	平面形	炉	柱穴	備考
浄永坊 1住 " 2住	望月町 "	茅山下・上層 "	500×415 500×	楕円形 "		7	
向六工 11住 " 12住 " 13住 " 26住 " 29住	坂北村 " " " "	絡条体圧痕文 " " " "	250×200 550×250 594×260 220×220 445×400	" 不整楕円形 長楕円形 円形 隅丸方形	地床炉 " " " "	2 5 6 3	台石
堂の前 3住 " 5住 " 7住 " 10住 " 6住	塩尻市 " " " "	鶺鴒ヶ島台、絡条体圧痕文 " " 条痕文 鶺鴒ヶ島台、茅山下層 " " 茅山上層	250×250 1300×400 530× 290×290	円形 " 長楕円形 長方形 円形		壁柱穴多数 12 6 3	3・5号→7号→10号→6号 周溝、小ピット多 "
膳棚B 1住	岡谷市	絡条体圧痕文、入海Ⅱ式	460×450	不整形			
梨久保 23a住 " 23b住 " 75住	" " "	絡条、石山、天神山他 " "	550?× 600× 680×505	長方形? 方形? 不整長方形		4以上 3以上 8	台石 23a・bは重複
高風呂 39住 " 40住 " 43住	茅野市 " "	絡条体圧痕文、粕畑 " " "、茅山上層	432×355 260×220 540×460	楕円形 不整円形 長方形		4、壁柱穴 4、壁柱穴	炉は中央のくぼみか 39住と重複
駒形 1住	"	塩屋、前期初頭	430×370	隅丸長方形	地床炉	4、"	
北高根A 9住 " 10住	南箕輪村 "	塩屋 天神山、縄文	595×520 780×605	不整形 楕円形		5 1	
宮の原 1住 " 7住	高遠町 "	塩屋 "	420×390 411×353	不整円形 不整長円形	地床炉? " ?	4 2	壁中外ピット9、台石2 小ピット
元宮神社東 1住 " 2住 " 4住	宮田村 " "	鶺鴒ヶ島台～茅山上層 " "、粕畑、入海Ⅱ 茅山下層、粕畑、上の山	390×280 790×570 450×300	小判形 長方形 隅丸方形	灰堆積?	6 4 17	周溝内小ピット多 2住と重複
カゴ田 114住 " 228住 " 316住	飯島町 " "	天神山、塩屋、神ノ木台 " "、"、" "、"、"	340×300 410×410 395×295	円形 " "	地床炉 " "	壁外? " 2	周溝 この他2軒
中島平 20住	飯田市	茅山	300×270	楕円形	石囲炉	4	

参考文献

- 会田 進ほか 1986 『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
 相原淳一 1985 「縄文条痕土器の諸問題について」(『赤い本』2)
 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」(『考古学雑誌』76-1)
 青木 修ほか 1991 『二股貝塚』知多市教育委員会
 浅利 司ほか 1990 『中込遺跡』山梨県教育委員会
 安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討」(『東京考古』1)
 磯部幸男ほか 1965 「知多半島先端の縄文早期末～前期初頭の遺跡群」(『古代学研究』41)
 上田典男 1983 「縄文時代焼礫集積遺構の形態的把握」(『物質文化』41)
 小熊博史 1989 「縄文時代早期終末における絡条体圧痕文土器の一様相」(『信濃』III・41-4)
 神奈川考古同人会 1983・1984 「縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」(『神奈川考古』17・18)
 金子直行 1989 『下段遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第87集
 金子直行 1991 「茅山上層式土器の再検討」『埼玉考古学論集』
 工藤竹久 1989 「縄文尖底系土器様式」『縄文土器大観』1
 児玉卓文 1988 「長野県内出土の絡条体圧痕文土器をめぐって」『第2回縄文セミナー 縄文早期の諸問題』
 小林秀夫ほか 1981 「金山沢北遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その3』
 近藤尚義ほか 1992 「下茂内遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』2
 酒井幸則ほか 1974 『田村原遺跡』豊丘村教育委員会
 笹沢 浩ほか 1975 「C₂地点」『男女倉』和田村教育委員会
 笹沢 浩ほか 1982 「阿久遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5』
 佐藤甦信ほか 1977 『伊賀良中島平』飯田市教育委員会
 佐藤甦信ほか 1983 『田村原遺跡』豊丘村教育委員会
 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料』第1巻(上)
 島田哲男ほか 1985 「北原遺跡」『松本市赤木山遺跡群I』松本市教育委員会
 島田哲男ほか 1990 『松本市坪ノ内遺跡』松本市教育委員会
 鈴鹿良一 1984 「松ヶ平A遺跡(第2次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告VI』福島県文化財調査報告書第129集
 谷沢良光 1977 「縄文時代早期末葉の遺構と土器編年(1)・(2)」(『史館』8・9)
 檀原長則 1985 『上林中道南遺跡』山ノ内町教育委員会
 塚本師也 1988 『鹿島脇遺跡』栃木県埋蔵文化財報告第93集
 土屋長久ほか 1971 「元宮神社東遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡宮田地区』
 戸沢充則 1973 「原始・古代の岡谷」『岡谷市史』上巻
 友野良一ほか 1978 『カゴ田』飯島町教育委員会
 中沢道彦 1991 「所謂「男女倉C式土器」雑感」(『信濃考古』120)
 長崎元広 1979 「中部地方における縄文前期の竪穴住居」(『信濃』III・31-2)
 長崎元広ほか 1984 「長野県における縄文集落の変遷」『シンポジウム 縄文時代集落の変遷』
 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』
 林 謙作 1982 「縄文早・前期の土器—北海道南部・東北地方」『縄文土器大成』1
 林 茂樹ほか 1977 『高遠宮の原遺跡』高遠町教育委員会
 樋口昇一ほか 1969 『有明山社』松川村教育委員会
 広瀬昭弘ほか 1978 『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』牟礼村教育委員会
 福島邦男 1984 『竹之城原遺跡・浄永坊遺跡・浦谷B遺跡』望月町教育委員会
 毒島正明 1983 「子母口式土器研究の検討(上)」(『土曜考古』7)
 馬目順一 1975 『大畑貝塚調査報告』いわき市教育委員会
 宮坂虎次ほか 1978 『よせの台遺跡』茅野市教育委員会
 宮坂英式 1961 「縄文早期終末住居址—茅野市駒形遺跡出土」(『信濃』III・13-8)
 宮坂英式ほか 1966 『蓼科』尖石考古館
 宮下健司 1989 「東海条痕文系土器様式」『縄文土器大観』1
 宮本長二郎 1985 「縄文時代の竪穴住居—長野県」(『信濃』III・37-5)
 百瀬忠幸ほか 1985 『堂の前・福沢・青木沢』塩尻市教育委員会
 百瀬忠幸ほか 1988 「膳棚B遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』1
 百瀬忠幸ほか 1989 「八窪遺跡」ほか『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2
 守矢昌文 1986 『高風呂遺跡』茅野市教育委員会
 守矢昌文 1990 『芥沢遺跡』茅野市教育委員会
 山岡栄子 1973 「北高根A遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—南箕輪村その1、その2』

(3) 石器群の個別的研究

① 原石と石核

剥片剥離には核と剥片の2種の素材を準備する。ただし、後者であっても剥離法は核素材と変わることなく、最終的には残核として残り、基本的に石鏃製作へは移行しない。いずれの素材も得られる剥片は非常に小形で、石鏃の大きさを強く規定している。残存する原石が15g前後であることは、入手段階での材料が予想外に小さなものであった可能性を考慮することができる。表面を覆う風化面の存在を考えると、転石状態での材料を想定することもできる。

② 剥片A類

はさみ打ちによる両極剥離痕のある剥片に対し、上下両端部の形態から6つに類別したが、利器として抽出できる属性は確認できなかった。石鏃の製作過程に本類が用いられた痕跡は認められないので、剥片剥離に伴う資料(石核)を想定しておく。仮に石核として位置付けられるなら、早期前半とほぼ同様な剥離技術の系統を考慮することができる。

③ 石鏃

材質は黒曜石が全体の74%を占める。早期末葉、東北南部や関東地方の諸遺跡がチャートや流紋岩あるいは安山岩などの材質を主体的に使用してくるのと対照的である。形態的には無茎の凹基式(I B類)が主体で91%、側辺部の形では外湾するa類が中心となり60%を占める。基部のえぐりが浅く爪形を呈するB 1類は、東北南部から中部・関東地方にかけて条痕文土器群とともに分布する型式であり、向六工にはそれが約6割存在し、時期的地域的に、ほぼ該当している。ただし鏃先端部の形状が乳房状を呈したd類が26%あり、その意味付けが問題となる。形態的に相似した資料を重ね合わせると、基部形はもとより幅に至る属性まで、規格品的な同一性が認められるのに対し、機能部としての長さ(註1)、そして側辺形だけが異なる。このことから単純に類推すれば、ひとつには使用に伴う作り直し(再生)を挙げることができる。石鏃の大小にかかわる属性差が、再生行為の一要素として表現されている(三上1990)のであれば、d類のような変形が再生結果であることも十分予想できる。ただし向六工では、先端から側辺にかけてのみ調整加工が施されるのであり、再生が肯定できるのであれば、石鏃は矢柄に装着された状態で再生されたことになる。大きさには大・中・小があり、総体的に小形である。重量の点でも縄文時代は1.0g前後が一般であることからすれば、0.5g前後の数値はかなり小さい。石鏃が再生を経た最終的な形態で、使い込まれた石器として残存することも事実だが、弓矢以外に吹き矢などの飛び道具を想定してもよいのではないだろうか。この場合、平基無茎のI A類と有茎のII類は側辺形におけるd類の出現率(10%以下)と重量(1.0g以上)の点で、I B類とは用途的に区別される可能性も指摘できる。

④ 打製石斧

形態は短冊形が中心で、狭義の短冊A類と半月形B類が半々出土している。B類はA類に比べて小さく、軽い点で法量的に区別できる。機能部としても刃角で10度ほど小さく、使用痕跡では長さ(幅)で1.0cmほど大きな値を示し、用法上の差異が指摘できる。撥形C類はすべて頁岩製で、短冊形の大部分が砂岩製であるのと対照的である。短冊と撥形の大きな差異は機能部の特徴にあり、刃の角度で撥形が20度小さく、使用痕の長さで撥形は2.0cmほど大きい。ただし使用痕の幅にはほとんど差異が認められない。磨耗の激しい短冊形に比べ、撥形の使用痕跡の発達度が弱いことも特徴である。瓢形D類は1点のみ出土しており、使用痕の長さ・幅とも大きく、他類から逸脱している。しかも使用線状痕の方向は刃縁に50度前後の開きを示し、他類が90度前後の開きであるのと違いが認められ、装着法あるいは用法の差異が指摘できる。分布は中段・下段部に集中し、石鏃や石屑とは明らかに異なりを示す。この地点は遺構・遺物が確認されず、生産域の可能性を示すところでもあり、石斧の形態・法量・石材が縄文時代中期の特徴に類似する点を加

味するならば、本器種の時期的な位置付けは単純に早期末葉とはいえないかも知れない。すなわち早期末葉の向六工人以外の人の手による可能性が考えられるのである。

⑤ 磨石・凹石・敲石

形態は円形・楕円形を中心とする縄文時代通有なA・B類と棒状のいわゆる特殊磨石と呼ばれるC類である。特に後者は中部高地において縄文時代早期の所産〔八木1970、小林1988〕とされており、今回の調査で後半期条痕文系土器群中での存在がより濃厚となった。ただし前半期の遺物が数点出土しているので、位置付け(註2)については再度検討していく必要がある。特殊磨石は狩猟を主体とする段階に存在し、狩猟形態の転換をもって消滅を云々することが可能であるが、前半期と系統的に類似した石鏃生産が行われている本遺跡に、この器種が存在することは妥当なことかも知れない。磨石の摩耗面は全体的に表面を使用するII類がA・B類に限定され、C類は側面の一部を局所的に使用するIII類が主体である。III類は面の長幅が3:1から3:2の間にあり、面構成は1面ないしは2面で構成される。II類とIII類は外見的に区別できても、摩耗面の観察から区分することはできない。敲打面はくぼみの発達した1類に、台石的な使用を予想し、堅果類を割る作業を想定した。この時手にした敲き具が2類のアバタ状に発達した例であろう。3類は溝状に発達している点から、置いて台石的に使用したもので、主に石器の敲打・剝離の使用が想定できる。小剝離痕を伴う4類は敲き具としての位置付けが可能である。縄文時代ではこれら4類が必ずしも一元的なものではなく、複合して使用される石器であるが、本遺跡の場合は複合というよりも分離している状況が強い。特に3類が数量的には卓越している。

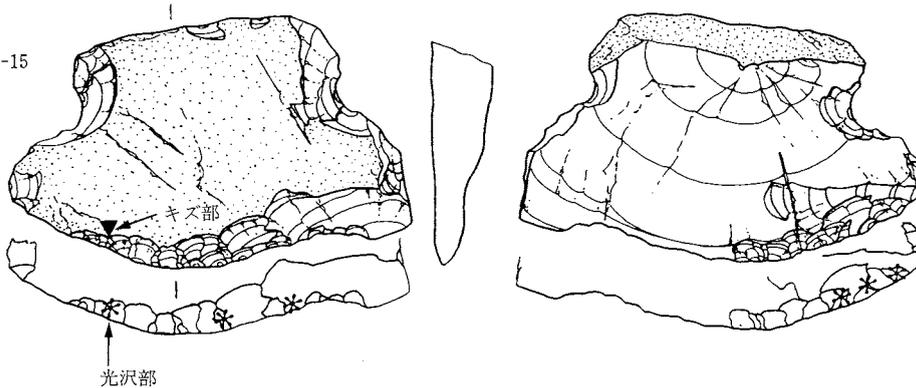
⑥ 台石

皿部が明瞭に形成されたいわゆる石皿の類は出土していない。扁平な河原石または全体を簡単に成形した例のみ認められた。SB11で確認された50cm以上の長さで30kgを測る資料は、表面のほぼ全体が使用され、摩耗面は良く発達したII類である。皿部が発達しないのは、用法または頻度の差によるものと考えられる。また敲打痕の発達は明瞭ではない。

⑦ 石匙

形態は縦形A類が約半数を占め、横形B類・斜めC類がこれに加わる。縦形は東北地方に主体的に分布する形態で、向六工のそれが数的に卓越する様は、当該地域との生業上の関連を予想することができる。B類の一部(茎部の大きい資料例)とC類は、一般的に早期末から前期前半に県中・南部を中心に盛行してくると考えられ、向六工では20%ほど存在している。また、前期後半に盛行する他のB類(茎部の小さな資料例)も20%弱が認められた。これら3形態の差異は、A類とB類では全体の長さ・幅・重さの点で区別でき、特にB類の刃長においては0.5cmほどA類よりも長い。刃角ではC類が最も小さく、刃部平面形ではB類に外湾刃が多い傾向がある。ただし厚さの点ではA～C類とも一致した値を示している。顕微鏡観察は使用痕跡の有無と使用箇所(痕跡の確認箇所)を可能な限り検討した。実体顕微鏡(×100まで)では痕跡を確認することが難しく、表裏面に残る光沢痕、刃縁の刃つぶれを認め得るにとどまり、使用の方向・度合い・対象物の推定には至らなかった。今回2点の資料に対し、試験的に走査電子顕微鏡による使用痕の確認と元素分析を実施したのでまとめる(第150図)。

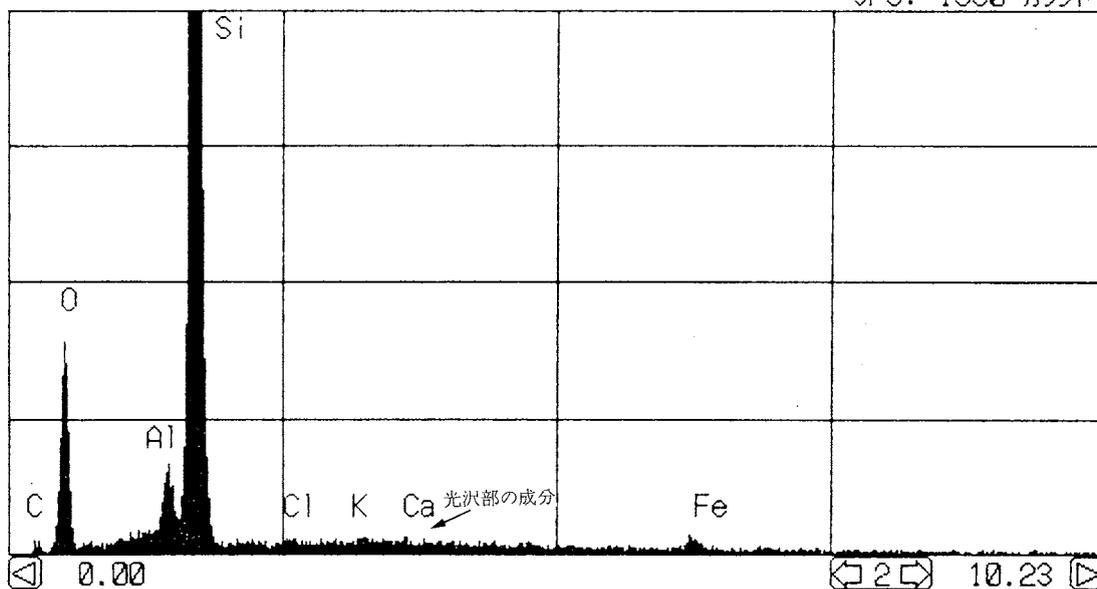
試料
第118図-15



1: EMR-1 (母材)

測定時間: 100 s
92/08/20

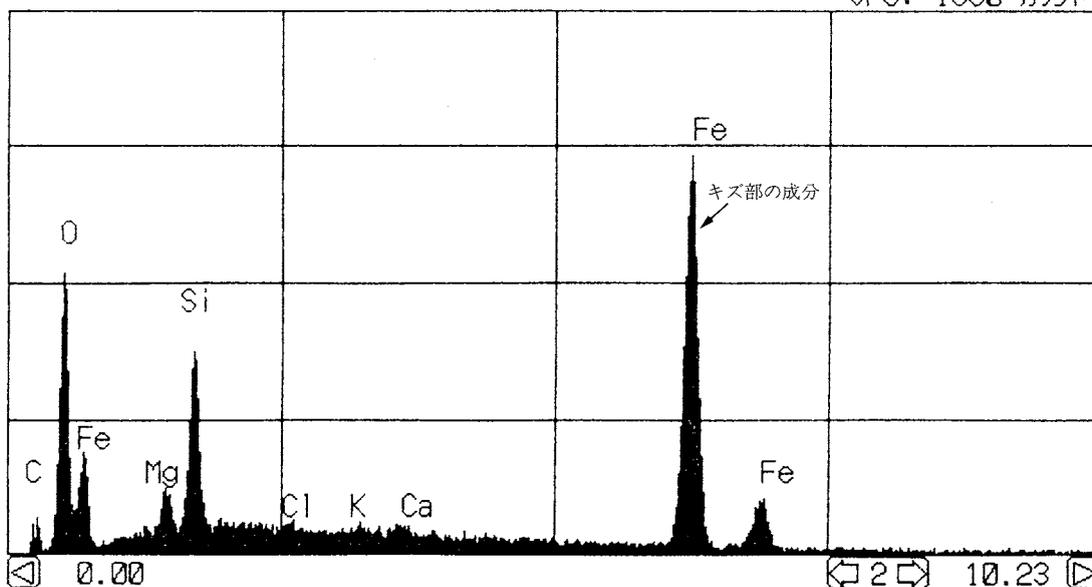
UFS: 1560 カウント



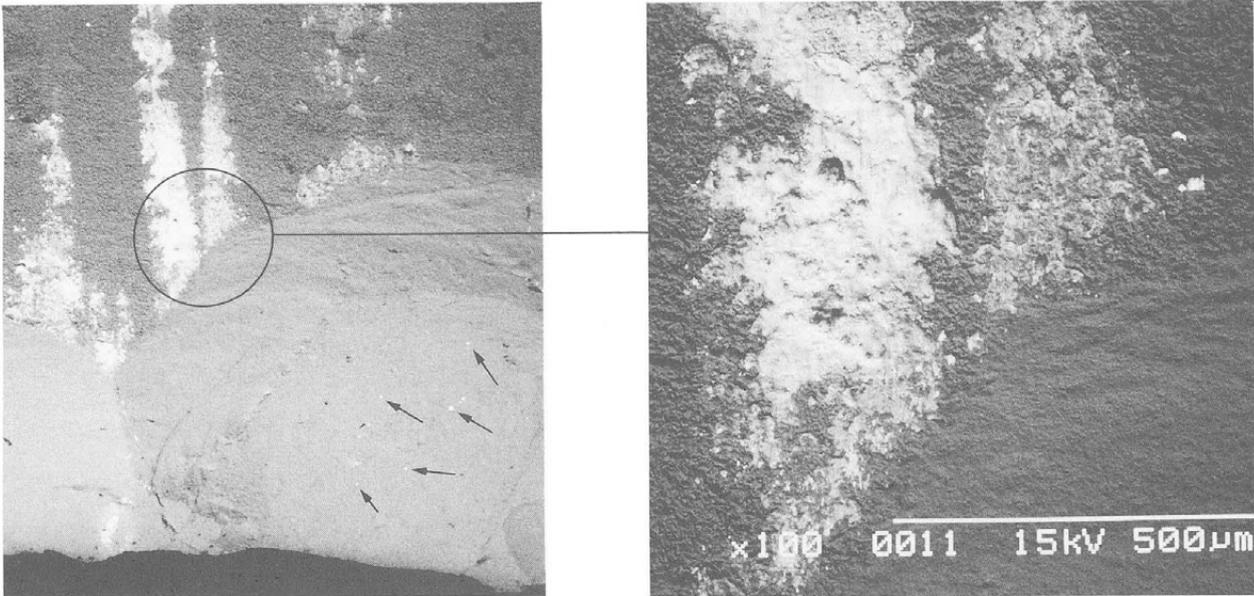
1: EMR-1 (キズ)

測定時間: 100 s

UFS: 1560 カウント



第150図 石器の本体および付着物の元素分析グラフ

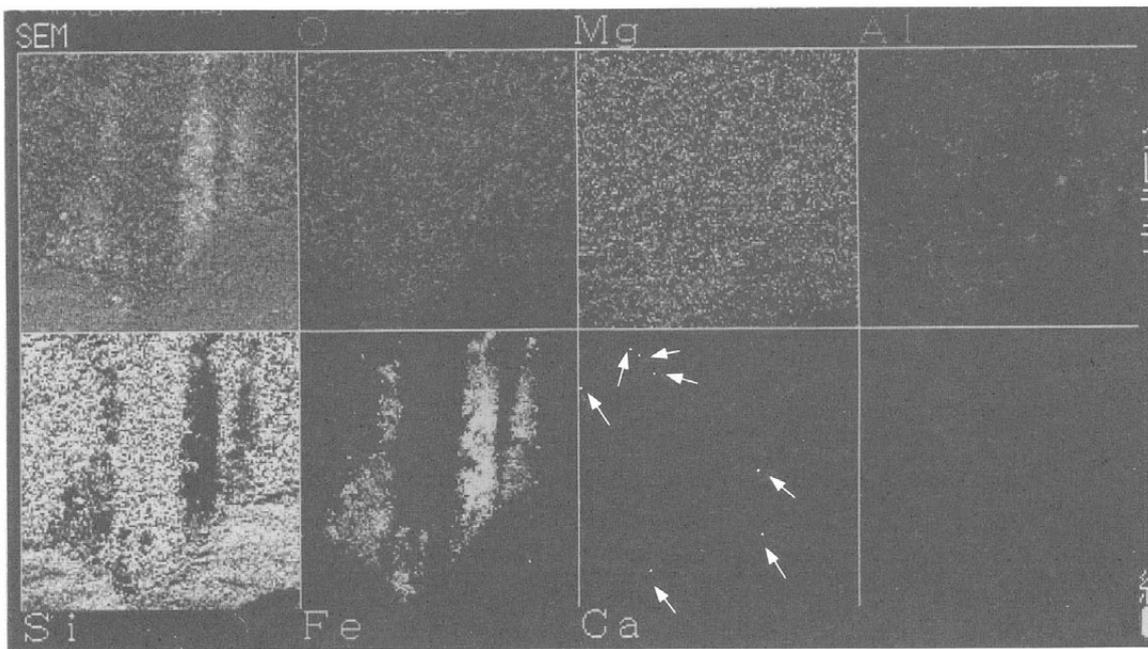


(○はキズ、↑は使用光沢痕?)

(キズ部の拡大)

走査電子顕微鏡組成像

X線計数時間：50ms
分 解 能：128×128



(キズ部の元素)

(光沢部の元素)

走査電子顕微鏡元素分析像

観察資料 石匙2点……………第117図No.7、第118図No.15

機 器 走査電子顕微鏡 (JSM-5400LV)、EDXスペクトロメータ

観察倍率 観察×20、EDXシステム×100・×150

結 果 1. 観察

実体顕微鏡で推定した光沢痕と同一場所に、斑晶状の痕跡を確認する。使用痕を

考えたいが、低倍率（×20）でもあり存在の追認に留まる。

2. 分析

斑晶状の痕跡を含め、2×2mm範囲で観察・分析する。チャートの主構成元素であるケイ素（Si）が大部分を占め、試料に付着した土の成分と考えられるマグネシウム（Mg）・鉄（Fe）の分布が観察できた。キズ部にはFeが反応し、発掘以後の痕跡であることも判明した。課題である痕跡部分についてはきわめて微量ながらカルシウム（Ca）が反応した。初の試みであり比較データに欠けるが、好意的に解釈すれば骨のような物質が想定できる。今後十分な検証を要するが、有効となれば使用痕研究に一石を投じることとなる。

⑧ 刃器

本器種は刃部の作出方法に基づき大別した。すなわち刃部の作出が加工による例（2種）と加工しない例（1種）である。形式的には2種をさらに緩斜度な刃部を呈するA類（削器）と急斜度な刃部を呈するB類（搔器）に区別し、1種を使用痕跡を留める石屑類と類別する。A類は重さと刃角の点または茎部の有無で石匙と区別できるが、大半の属性は一致し、総合的に見れば機能上区分することはできない。B類は属性値からすると、小形1類に近い数値を示すが、刃角で63度を計測し石匙や刃器A類とは20度近い開きを示している。1種は類別の視点が使用の痕跡のみを留める点にあり、製作された刃部ではないので技術形態的にこれを類別することはしない。今回は従来の肉眼鑑定をやめ、試験的に顕微鏡観察を実施したのでまとめる。

観察試料	すべての石屑類（剥片・碎片）26,592点
機器	実体顕微鏡Nicon SMZ2, 照明Nicon Fiver Optic Light
観察倍率	×40
方法	試料の縁辺部を中心に表裏面を観察（薬品による洗浄は実施していない）。
結果	372点、全資料の1.4%に相当する資料が抽出できた。実際には抽出された資料の大半が、肉眼で刃つぶれ状の痕跡を縁辺部に確認した例であり、そうした痕跡を見いだせない縁辺部での確認はほとんどできなかった。今回の観察方法では機器が落射型の顕微鏡ではなく照明装置が十分でなかったこと、倍率が低いこと、薬品洗浄ができなかったことなど問題点もあり、加えて対象が黒曜石であったこと、観察時間が十分確保できなかったことなどの課題も多かった。結果、刃器1類の抽出は不十分であった。

⑨ 磨製石斧

大形剥片を磨き成形する。側面部（折り取り断面?）も良好に磨かれるので、外見的には擦り切り石斧様で、扁平な「半定角式」とも呼ぶべき形態を呈する。全面平らに研磨せず、研磨の単位面を残して完成されている点も含め考えると、縄文時代では特有な在り方である。石斧の縦位断面は両刃を呈するが、定角式のように左右が対称ではない。横位断面が強い凸形を呈する点も特徴である。形態的には刃形・頭部形ともに円形が主体。第124図7のように全体が長方形（短冊形）を呈し、頭部の縦位断面が刃部のように尖る例もある。頭部に使用痕跡は確認できなかったが、今後注意を要する資料である。大きさには3段階（大・中・小）を設定したが、数の上では中形が多い。大形A類には1点失敗品が存在するが、他類は

いずれも製品に限られる。法量以外でも使用痕跡の長さの点でA類は1.0cmを超え、他類は0.5cm前後である。ただし、使用痕の幅・刃角では両者ほぼ一定のようである。

⑩ 石 錐

形態では棒状で両端の尖った4類が全体の66%を占め、機能部側面を大きく加工していく2類が26%ある。基部まで加工を施す3類はわずかに1点であり、剥片の一部に加工を施した1類は意外に少なく9%程度にとどまる。中部高地での4類の盛行は関東地方同様に晩期にあると考えていたが〔町田1990〕、早期後半に量的に安定しているとなれば、該期以降に少なからず出土してくる点や前期後半に比率の高まる一部の地域性に対し考察の視点を与えてくれる。機能的には摩耗・線状痕が確認でき、回転穿孔の存在を想定できる。しかし同形で同質材でありながら、痕跡が発達している例とそうでない例、線状痕までが確認できる例があり、使用頻度ばかりでなく、用法や対象物の違いを予想できる。また、4類の生成は回転もみきり運動の発達と関連があると考えているが、痕跡からは判断がつかなかった。両端を使用した例が存在する点を考慮すると、装着交代による利点をいかした類なのかも知れない。

⑪ 石 錘

石製の錘が1点だけ出土。大形で123gを測る打ち欠き石錘である。出土はIV A区の2層からであり、時間的位置付けは土器量からすると早期後半と考えられる。当地域の縄文時代では非常に古い段階の資料となり、用法などが課題となる。大きさなど法量の点では、縄文時代中期初頭から前半の要素と近似しており、下段に分布する打製石斧の位置付けや中期土器の存在を含め検討の余地は残っている。

註

1. 石錐の機能部値は本体の横位断面から先端までの値で計測。断面は基本的に重心を通る線分により設定する〔町田1991〕。
2. 部分的に極度な摩耗面を稜線上に形成する特殊磨石は、地域的には時間差が存在する。例えば、東北地方北部では後期後半(十腰内式期)にもこうした磨石が出土してくる。また、早期後半の関東地方南部には、類似した摩耗面を持つ抉入磨石〔戸井1982〕も存在する。
3. 報告文作成に際し、観察法および計測法は拙稿〔町田近刊〕に基づき、記載法については本文概観で述べたとおりである。観察法のうち、③分類(機能的類別)に関する項目は、今回から機器を使用し試験的に実施した。観察は段階的に1.ルーペ(Vixen×2.3・コクヨメタルホルダー×20)、2.実体顕微鏡(Nicon SMZ 2=×40・SMZ 10=×100)を使用し、その有効性については以下にまとめた。3月刊行となった北村遺跡報告文〔長野県埋蔵文化財センター1993〕は、整理の関係で向六工以後となり、これに顕微鏡の高倍率化・拡大映像装置などを加えて観察を行った。

石器の種類	機器の種類と倍率		実体顕微鏡		凡 例
	Vixen < 3	メタルホルダー < 20	< 40	< 100	
石錐・石錘・刃器・石匙・使用痕有る石屑	△	○	○	◎	△ どちらでもよい ○ よい ◎ よりよい
打製石斧・磨製石斧	○	◎	○	△	
石錘・磨石・敲石・台石・砥石	◎	△	—	—	

(4) 石器群の総合的研究

① 製作技術

向六工遺跡で確認された石器の原材は、組成率の85%を黒曜石が占めるように、大部分を遺跡遠隔の地に求めている。製作の在りようは、1.居住地での製作が主体、2.採集地で製作、3.製品あるいは半製品を手に入れるの3者がある。小形の剥片石器(石鏃・石錐・刃器の一部)は1の過程を、大形の剥片石器(打製石斧)と礫核石器(磨石類・台石・砥石・石錘)は2の過程をとると考えられる。磨製石斧(蛇紋岩製)と刃器(頁岩製)は2または3の過程をとると予想できるが、2である場合は遠隔地での製作が想定される。以下に出土状況および分布状態から製作についてまとめる。

小形の剥片石器……………堆積岩である黒曜石を使用。

星ヶ塔・和田峠で採集された原石(註4)を居住域に持ち込み、剥片剥離を実施する。原石および石核の法量は鶏卵Sサイズ以下で、製作器種(石鏃)とその大きさを推定できる。遺跡内での石屑分布は径16m範囲に6カ所の集中が認められ、これを任意にくくと集中区1~6が設定できる(第82図)。1~6の集中区は製作場あるいは廃棄場のいずれかであると考えられるが、③の項で述べるように製作場を想定しておきたい。黒曜石以外の石材、具体的には良質の頁岩は周辺にて獲得することができず、新潟などの県外材が予想される(註5)。遺跡内に製作痕跡を留め得ないことも事実で、器種化する刃器の大部分は製品または剥片素材の状態を持ち込まれていたと考えられる。一方、在地材であるチャートを主体的に使用する器種には石錐が挙げられ、石屑の分布は黒曜石と同様な傾向を示している。

石器には石鏃・石錐・石匙・刃器の類がある。

大形の剥片石器……………堆積岩である砂岩・粘板岩・頁岩、火成岩である蛇紋岩を使用。

遺跡周辺の河川敷にて採集された原石を、その場で剥離・加工し、製品段階で居住域に持ち込む。遺跡内には大形剥片の類が34点出土し、明らかな製作関連資料はわずか8点、残り26点が性格不明な資料である。硬砂岩を使用した打製石斧(A類・短冊形)は形態・法量的には縄文時代中期後半に盛行してくる型と類似し、出土地点が下段部に集中する点、刃部のみ破片である点から別時期(あるいは別集団)の製品である可能性が指摘できる。課題は早期後半にどのような打製石斧が存在していたかであるが、明確に比較できる資料が中部高地にはない。頁岩製のC類・撥形などはその候補となりそうであるが、同時期の武蔵野台地で確認されている資料とは製作法・形態に違いが認められる(註6)。残念ながら本器種については時間的な位置付けの点で保留とせざるを得ない。磨製石斧は白みがかかった色調(風化?)の蛇紋岩製で該期には比較的良好に認められる型である。石材は遺跡周辺では求められないので、製作の在り様は2ないし3が予想できる。大形A類に失敗品が1点あるが、砥石は確認されていない。

石器には打製石斧・刃器・磨製石斧がある。

礫核石器……………堆積岩である砂岩、火成岩である安山岩・閃緑岩を使用。

遺跡周辺の河川敷あるいは地山にて採集された原石を、直接使用する。したがって、遺跡内には製作の際に出現する石屑類が存在せず、すべて製品で占められている。極度な一面を使用する2種C類(特殊磨石)は形状が他類と異なり、原材の選択が明らかにある。擦面の発達度も著しく、整形加工の存在も予想されるが痕跡は認められない。台石は2点とも扁平な河原石(閃緑岩)である。石錘は砂岩製で法量的に大形な打ち欠き錘である。中期初頭の例に類似するが、1点のみの出土であり、用途および時間的な位置付けには課題が残る。

石器には磨石・凹石・敲石・台石・石錘がある。

② 器種の形態と時期(第23表)

石器個々の特徴が時間的にどのような前後関係を示すのか、千曲川水系の遺跡中で比較してみると、

第23表 縄文早期石器組成変遷表

区分		石器 様相	狩猟 漁撈 採集			調理・加工					加工			生業 段階			
時期	遺跡		石 鏃	石 錘	打 斧	磨 石	特 磨	台 石	(刃器)			剥 A	石 錐		磨 斧	砥 石	
									石 匙	削 器	搔 器						
早期	前半	1)	○	?		○		○					○				1
	中頃	?		○	?		○										?
	後半	向六工 2)			?					◎				◎		?	2
前期				?	?		?								?		

向六工遺跡の石器に認められる要素 { 1) の要素 (古い要素○)、2) の要素 (向六工の要素◎) }
組成量

1) 前段階からの継続、2) 新しい段階を構成・次段階の萌芽に区別して考えることができる。以下、数量的に主体となる器種についてまとめる。

1) の様相……………石鏃・磨石 (含、特殊磨石)・台石・削器・搔器・刃器

2) の様相……………石匙・石錐

各様相の主体的時期については、1) の要素が早期前半の末 (早期中ころ・沈線文土器群の遺跡は資料不足であり、押型文期後半の遺跡と比較)、2) の要素が早期末葉に該当する。

③ 使用場と廃棄場

出土石器の大半は遺構に伴わない資料である。出土状態については細かにふれることはできないが、分布上読み取れ、予想できる事柄についてまとめておく。

狩猟をつかさどる道具は石屑の集中区1～6とほぼ一致した分布を示す。石屑、すなわち石核を中心とした剥片・破片の分布は上段 (くぼ地) および中段部 (平坦地) にあり、住居址とは位置を明らかに異にする。石鏃の分布が合致している点は、製作ないし廃棄場所の可能性を考えると、再生行為を仮定した側辺形 (d類) の存在を加味すれば、再生・交換の場でもあったと推定することができる。製作に伴う石屑の廃棄が特定場所に限定されるのは、縄文時代前期以後と考えているので [町田1992]、ここでは製作に伴う置き去り状態として場を想定し、石屑の集中区1～6を製作場ととらえ、石鏃の分布を考えたい。

石錘は打ち欠き例1点のみ出土し、使用あるいは廃棄の過程を考察するには至らなかった。

採集をつかさどる道具は、根茎類を予想できる打製石斧と堅果類を予想できる磨石・台石類に分布の違いが認められた。打製石斧は下段部に総数の約6割が集中し、そのうちの71%が刃部破片であった。特に短冊形A類には両端部の使用が認められ、頭部が刃部化した例が多い。石屑の集中区1～6と分布が異なるのは残され方に違いがあり、刃部が大多数を占めるといふ点から推測すれば、使用場である可能性が高い。形態的には縄文時代中期の特徴を示し、場合によっては向六工の主体的時期以外での生産場 (収穫の場) であった可能性も考えられる。

磨石・台石類は石屑とほぼ同様な分布を示し、製作あるいは生産に伴うものと判断できる。大部分の資

料が完形であり、使用後の置き去りが想定できる。厚さ5.0cmはひとつの使用限界値とも考えられるが検討を要する。

加工をつかさどる道具には磨製石斧・石錐・石匙・刃器がある。磨製石斧は上段IVA区に集中する。欠損率では約半数が完形またはほぼ完形であり、刃部と基部の残存率は同数程度である。使用痕は約8割の資料に認められた。刃角は使用後の数値を示すものと考えられるが、大形・中形で50度以上、小形で30度以上がひとつの基準となる。刃部の角度を研ぎ直しの限界値とした場合、その基準値を超えると機能的に能力が減少し廃棄へと進むものと予想できるが、磨製技術を駆使した石器であるだけに再利用のない点、疑問が残る。また、砥石は1点も出土せず、石斧の整形や研ぎ直しが、この地でどの程度実施されていたものか推測はおよばない。

石錐は石屑や石鏃に見られたような中段・下段への分布がほとんどなく、1～5に局所的に集中する。形態的類別にみる2a類の半数が中段部から出土している以外は、特に片寄り認められない。欠損では刃部の残存が約半数を占め、使用場所が遺跡内にあることを示唆している。

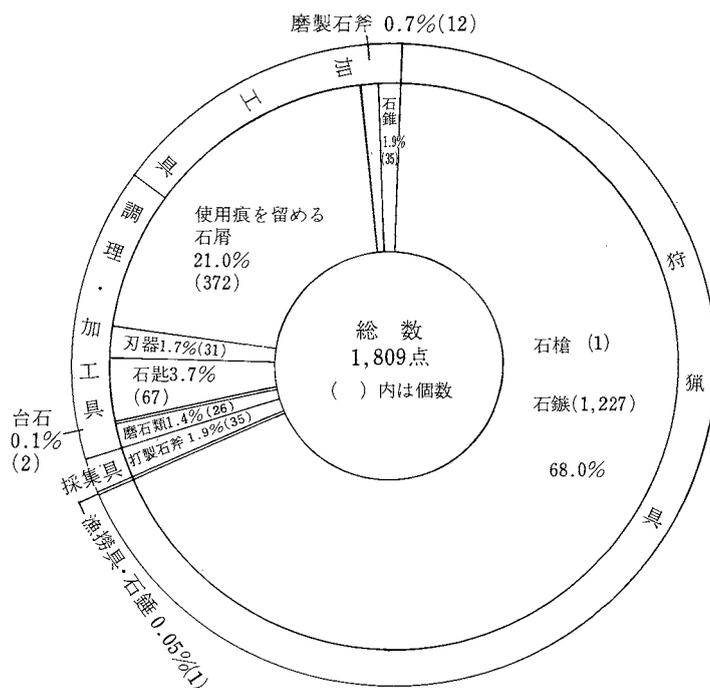
石匙も上段部1～5に局所的に集中し、形態的類別では中段・下段部にB類（横形）が主体的に分布する。資料の60%が完形であるが、使用痕が約半数に確認できることから、使用後の姿を想定する必要がある。刃角は30度が最終の基準値のようである。

刃器は上段・中段部に主体的に分布し、形態的類別に合う片寄りは認められない。97%が完形品であり、欠損が廃棄の基準となっていないことがわかる。使用痕跡は低倍率（×40）でその有無を確認したが、使用の方向や頻度（痕跡の発達度）から廃棄の基準を探ることはできなかった。削器とされる2A類は刃角40度以上をひとつの基準とし、搔器とされる2B類は刃角60度以上を最終値としている。また、1類は刃幅がいずれも0.2cmと他類よりもかなり小さく、刃部の再生は基本的には実施されないため、廃棄は作業の終了又は機能の衰退などに伴う使い捨て行為を予想できる。

④ 石器の組成 (第151図)

個別的に扱ってきた器種を石の道具総体・組成としてまとめ、向六工人の労働内容について考えてみる。従来の組成論に基づき、石器の遺跡内残存数量比（第6表）から生業活動を推定すると、狩猟具が全体の68%、採集具が3.4%を占め、生業の大部分を狩猟活動で担っていたことがわかる。狩猟具は石鏃と石槍の総数をもって計上したが、失敗品として位置付けた一群259点を引き算しても54%を占める。数量上採集具が石鏃に次ぐのであるが、狩猟具に対する割合はわずかに20分の1程度である。

採集具には根茎類を対象としたであろう打製石斧が約6割、堅果類の調理加工用と考えられる磨石・台石の類が約4割ある。比率からすると根茎類に関連する石器が多いように考えられるが、形態的特質や使用場所・廃棄の仕方に違いが認められ、単純には数量比較はできない。むしろ、その時間的位置付けが明確化しない時点では、組成率への合算・削除の二者を用意する必要



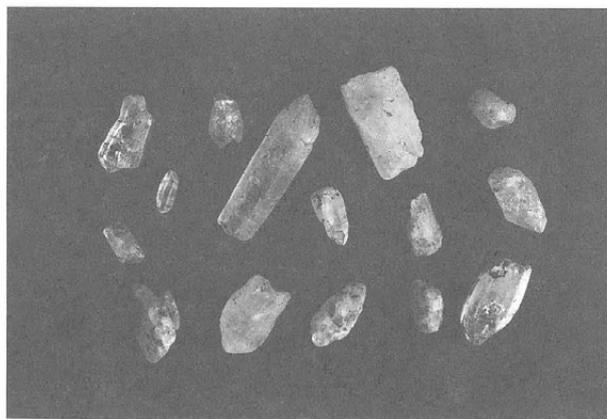
第151図 石器組成グラフ

があらう。

漁撈活動を予想することのできる石器は、石製の錘1点のみの出土であり、具体的には活動そのものの推定復原はできない。以上3つが直接食料獲得に関係する活動用具と考えられ、石器総数の約7割を占めている。ただし解体や加工に用いられたと想定できる石匙や刃器を、それらの活動中に含めると、比率はさらに高くなる。本遺跡では刃部の観察から、石匙および刃器の一部を動物や魚類の解体具に位置付けたが、詳細な分析はこれからである。

食料獲得以外で直接生産にかかわる道具として工作具がある。磨製石斧・石錐・刃器の一部が相当し、全体の2.5%を占める。このうち石錐の比率約2割は組成中でも高率で、機能部の観察から骨または木に対する穿孔作業が想定できた。磨製石斧は一般に木の伐採や加工に用いられたとされるが、粗悪で軟質な蛇紋岩製で、小さな枝や骨などの半截・加工に適した例と考えることができる。刃器および使用痕を留める石屑は使用痕跡として木などの加工を想定したが、今後高倍率での観察追究が必要である。

一方、向六工では間接的な生産活動の道具?として提示できそうな石(水晶の結晶体62点)が出土している。仮に祭祀的行為にかかわる道具であったとすれば、全体の3%も占めることになり、狩猟採集民の精神的側面を考察していく手だてとして注意されよう。



水晶の結晶体

さて、向六工遺跡の場合、上述の組成論の展開に対し論じておかなければならない戦略がある。それは遺跡の性格を考究する上に、避けることのできないノイズ、すなわち文化遺物の混合である。本遺跡のように時間差を持ち得た文化遺物、特に数時期にまたがる土器・石器が出土している場合、道具の組成は必ずしも同一時間内での使用を意味するものとならない。ことに調査の対象が広範囲におよぶ時には、土地そのものの使用に時間差・集団差が生じていることを常に仮定しなければならない。今回遺跡を上段・中段・下段と区分したが、一部の石器に分布上の差異が生じた。個別的な検討から形態的・技術的に後出と判定できそうな器種は、早期末葉の組成中にはあまり見ることのない、いわゆる打製石斧であった。石器の所属年代を系統的に説明することは、前提として器種ごとに地域的な属性偏差を整理しなければならないが、これの完成されない現在にあって、疑わしい資料を限定的に器種組成中に投じてしまうのは、いかがなものだろうか。器種の個別的な検討なくして組成論を独り歩きさせてしまうことは避けねばなるまい。このような視点から遺跡の性格を捉え直してみると、1. 狩猟または漁撈を中心とし、わずかな採集活動を伴う居住域としての性格と、2. 根茎類の採集を対象とした生産域としての性格が複合していると解釈することができる。1を縄文時代早期末葉に、2を中期後半から後期にかけての場と設定することが可能である。また、狩猟具である石鏃中には有茎式鏃が存在しており、晩期ないしは弥生時代の所産となれば、該期での狩猟場としての位置付けも加えることができる。文化遺物の混合を石器の研究から遺跡論として整理する方式を、今後検討していく必要があるあらう。

⑤ まとめ 一向六工人の生産活動一

石器総数の過半数におよぶ石鏃の出土は、向六工の人々が狩りを主体とした狩猟民であった証である。その対象が動物であったのか魚類であったのか不確かな部分も残るが、少なくとも動物性タンパクを主たる栄養源としていたことは確かなようである。0.5g前後の超軽量石鏃からすれば至近距離で、あるいは強い矢毒を用いての狩猟が予想できるが、吹き矢鏃などの形態も考慮してみる必要があるかも知れない。

いずれにしても、サルなどの小型獣や鳥類、魚類など身近な生き物を対象としていたと考えることができる。石器以外の罾猟の併用については痕跡を確認できなかったが、石鏃でイノシシなどを捕らえたのであれば、追い込みなど工夫された猟法が想定できよう。

採集活動を磨石・凹石・台石の出土量をもって推定すると、ごくわずかな寄与率となる。磨石・凹石などの果皮割り・製粉の道具と縄文時代通有とされたアキ抜き法〔渡辺1975・1982〕が密接に結びついているのであれば、少なくとも磨面観察における使用痕の未発達、敲打部類型に見る1・2類の数的稀少、台石の稀少と皿部の未発達などは、さしずめ製粉作業の過少を表現したものであろう。ただし、植物性タンパク源を云々する場合、狩猟民がどのような植物質食料の調理法を持っていたのか、いかなる道具を用いたのか、十分な配慮が必要である。該期まで存在する磨石2種C類（特殊磨石）の用法も含めて検討課題である。

一方、工作などの面では、全面研磨された磨製石斧に大・中・小3つのランクが確立し、木や骨などの加工・細工が実施されていたと考えられる。大形では樹木の伐採を想定できるが、属性から推察すれば小木が対象で、簡単な切り倒しや枝払い的作業であろう。石錐からは刺突・穿孔作業が想定でき、木や骨など動植物遺体の加工が考えられる。両端のとがったII種4類はねじ切り運動が推定でき、全体の過半数が存在するが、押し切り運動のI種1類は量的に稀少であった。

ところで、狩猟生活をしてきた向六工人たちの2次的生産は遺物として表現されていないものだろうか。今回61点も収集された水晶の結晶体（平均6.9g）から精神的側面を解釈することは難しいが、少なくとも無加工な状態で集落内に存在していたことは事実であり、今後類例の増加をまって解釈の方法を考えていくべき資料であろう。

最後に、長野県の縄文時代早期を生業論（註7）から考えてみる。石鏃・搔削器を多用し動物質食料の獲得を主とした段階からの変革、すなわち1期。搔削器の技術系統的な量産が終了し、石錘を伴い、動物質食料の獲得が多様化していく段階（動物と魚貝類）をもって幕開けし、「?期。遺跡が不明確で文化遺物の組成化が困難な時期」、2期。石鏃・石匙を用いた動物質食料の獲得が形成され、磨製石斧・石錐などの工作具が発達していく段階に区分することができる。以後2期は完成された姿として前期初頭へと突入していく。向六工はまさに2期に相当し、石器個々の発展段階で細かに示せば、②で提示した2)の様相（第22表）として理解することができる。

向六工遺跡の石器残存組成率が示されたことにより、長野県の狩猟採集民の生業が、大まかではあるが2期まで段階設定できるようになった。2期の直前およびこれの解体する前期前半～中ごろ以降の生業段階の調査・研究がこれからの課題である。

註

4. 黒曜石の産地推定（付章第1節）によれば、八ヶ岳山麓の星ヶ塔および和田峠産出と考えられる。遺跡と採集地は直線距離にして38kmほどある。
5. 良質の頁岩（珪質頁岩）は中部地方北部では、新潟県の第三紀中新世・七谷層とその相当層に含まれ、分布域での直接採集が予想されている〔中村1986〕。
6. 国分寺恋ヶ窪南遺跡〔小菅1987〕では、早期末葉の住居埋土中から打製石斧数点が出土している。礫核素材で大形・鈍重である。12号住居址の接合資料は、重量にして447gを計測する。
7. 中部地方では縄文時代早期石器群の全体像をつかむことが難しい。時期的に限定され、かつ石器を多く伴出する遺跡が極端に少ないからである。また、石器の器種にも片寄りが認められ、これを同一地域内での遺跡の構造差として解釈することも一考であるが、現状では追究が十分ではない。今回の段階設定は、こうした中での代表的な遺跡を指標としており、石器の消長に少々の無理がある。

参考文献

- 阿部芳郎 1992 「縄文時代早期における植物質食料加工石器の在り方と生産活動」(『信濃』第44巻第9号)
- 角張淳一 1992 「(2) 石材からみた移動・交易・社会構造」『城之腰遺跡』御代田町教育委員会
- 小薬一夫 1983 「縄文時代早期後半における石器群の様相」(『研究論集II』) 東京都埋蔵文化財センター
- 小菅将夫 1987 「石器」『恋ヶ窪南遺跡発掘調査概報I』国分寺市教育委員会
- 小林康男 1978 「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学』
- 小林康男 1988 「(2) 石器第III章第3節」『一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』塩尻市教育委員会
- 斉藤幸恵 1987 「第6章 押型土器文化の石器群とその性格」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』岡谷市教育委員会
- 戸井晴夫 1982 「挟入磨石について」『神谷原II』八王子市資料刊行会
- 中村由克 1986 「野尻湖・信濃川中流域の旧石器時代遺跡群と石器石材」(『信濃』第38巻第4号)
- 町田勝則 1990 「石錐について思うこと」(『信濃』第42巻第10号)
- 町田勝則 1991 「(2) 石器 大岡村聖沢遺跡表採の資料について」(『長野県考古学会誌』第61・62号)
- 町田勝則 1991 「遺跡に残された道具について」(『第45回日本人類学会・日本民族学会連合大会発表要旨』)
- 町田勝則 近刊 「石器研究法一報告文作成に関する観察・記録法①」(『長野県埋蔵文化財センター10周年記念論文集』)
- 三上徹也 1990 「縄文石器における「完成品」の概念について」(『縄文時代』第1巻)
- 八木光則 1977 「いわゆる『特殊磨石』について」(『信濃』第28巻第4号)
- 山崎 丈 1986 「第2節 向山遺跡における縄文時代早期末葉石器群の様相」『向山遺跡』東久留米市教育委員会
- 渡辺 誠 1975 『縄文時代の植物食』
- 渡辺 誠 1982 「採集対象植物の地域性」(『季刊考古学』創刊号)
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1989 「(2) 鳥林遺跡」『長野県埋蔵文化財センター 年報6』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—北村遺跡』

2 平安時代

筑北盆地は、古墳は何基か調査されており、すでに平安時代以前から開発が進められていたことが知られている。しかし平安時代の集落が本格的に調査されるのは、今回がはじめてといても過言ではない。

そこでここでは、比較的資料の多い焼物類について、若干の考察を行い、その後集落について考えてみたい。

(1) 焼物

① 時期

今回の調査で、実年代を推定できる資料はない。住居址から比較的多くの灰釉陶器が出土しており、それより年代を推定してみたい。灰釉陶器の年代について、1960年代から1980年代前半の研究は大きく変動がみられ、さかんに論争が生産地と消費地で行われた。現在は下火となり、ほぼ両者の大きな隔たりを埋めるかたちで、前川要・斉藤孝正両氏の研究で代表されるかたちとなっている(註1)。前者の研究にしたがってみたい。出土した灰釉陶器は、後述するように、東濃産光ヶ丘1号窯式がほとんどである。その年代は、9世紀後半が当てられており、大半の遺構に灰釉陶器が出土していることから、伴出遺物も9世紀後半という年代が与えられると思われる。このことから、平安時代の集落の継続した時期も、調査された範囲についていえば、半世紀と短い時期である。

② 焼物の種類と組成

筑北地区はその地理的位置が、松本平と善光寺平の中間に位置しており、興味深い資料である。種類としては、黒色土器A・B、須恵器、土師器、灰釉陶器があり、同時期の松本平の集落と比較して変わりはない。ただし、緑釉陶器が出土せず、この点は向六工遺跡の古代集落のランクが、それほど高くなかったことを物語っているようである。

食膳具

最初に焼物の特徴について概観したい。

黒色土器Aは、ロクロ調整の土師器の内面をヘラミガキで仕上げ黒色処理をしている。ヘラミガキは、口縁部の最大1cmまでを横方向へ、それより下部を中央に向かって放射状に施しており、その単位は明確に把握できるほど粗雑に仕上げる例もある。土師器は、すべてロクロ調整で、内面を除けば焼成・仕上げともに黒色土器Aと変わらない。須恵器は、本来の硬質で還元炎焼成される一群と、灰白色軟質で黒斑をもって焼成される一群に分けられ、後者の量が多い。以上は、いずれも広義の在地生産品と考えられ、その特徴は松本平と同じである。灰釉陶器は、断面白色で混入物の少ない胎土をしており、東濃産と考えられ、施釉方法はハケ塗りがほとんどである。また、高台が断面三日月状の形態が多い点、端部が若干玉縁状を呈する例が多いことから、光ヶ丘1号窯式と考えられる。

次にその組み合わせについて見てみたい。遺構別に量的に区分すると第152図のようになり、その比率は第153図のようになる。出土量の多い遺構を見るかぎり、黒色土器Aが80%と圧倒的に多く、次に土師器と灰釉陶器が続くが遺構ごとのバラツキが多い。また、須恵器の割合は非常に少ない。この焼物の組み合わせを松本平の吉田川西遺跡の資料(第154図)と比較してみたい。その中の光ヶ丘1号窯式を伴うSB111段階(SB102・111)の在地産(土師器・黒色土器A・須恵器)の比率は、向六工遺跡とほとんど変わらない。このことから、松本平とその組成は同じと考えられる。また、灰釉陶器では、松本平に比較して絶対量は少ないが、他の焼物との比率は同じ傾向を示すといえる。

次に器種について見てみたい。種類の比率については第26表に示すとおり、これによれば杯Aの出土量が最も多いため、それのみを取り上げることにする。

最初に形態であるが、3種(土師器・黒色土器A・須恵器)の形態とも松本平とは大きな違いはなく、調整技法もほとんど変わらない。しかし焼物の組成の変化は、松本平では時期を決定する上で大きな指標となることがわかっているため、次にその構成について見てみたい。当遺跡の比較的多くの杯Aが出土した遺構の比率は、第155図のようになる。これを吉田川西遺跡の杯Aの焼物の種類構成の変化(第156図)と比較してみると、SB144段階からSB111段階へと変化する段階(SB102・111)の構成と共通する点が多い。黒色土器はその比率を維持し、逆に須恵器がその比率を減じ、土師器が徐々にその量を増大させる段階である。後で述べるように、杯Aの法量も共通しており、向六工遺跡の資料はSB111段階(松本平7期)の前半段階に並行すると考えられる。また、前述したように、その段階に東濃産光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器が搬入され始めており、この点も矛盾しない。次に黒色土器A杯の法量について見てみたい。口径と器高を、ほぼ口径縁が180度以上残っている場合(第157図)、180度未満の場合(第158図)の二者に分けると、後者はやはりその集中度が低いが、完形により近い前者は、口径12.5cm前後、器高4cm前後に集中し、松本平の杯A IIの規格と一致する。

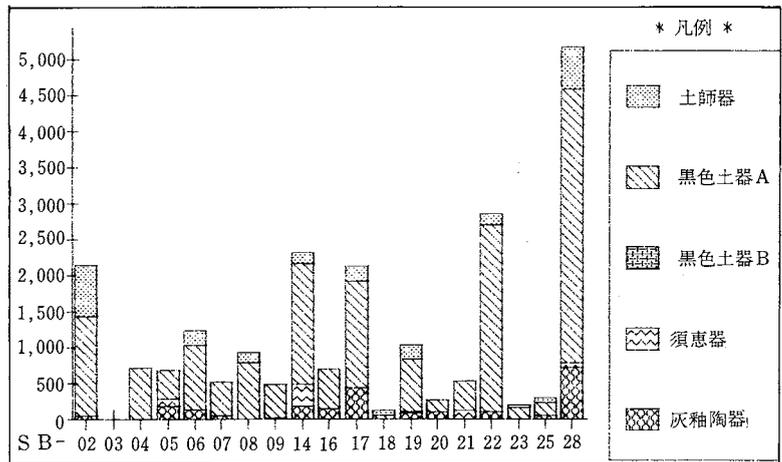
以上をみるかぎり、食膳具の様相は松本平とほとんど変わらないことがわかる。

煮炊具

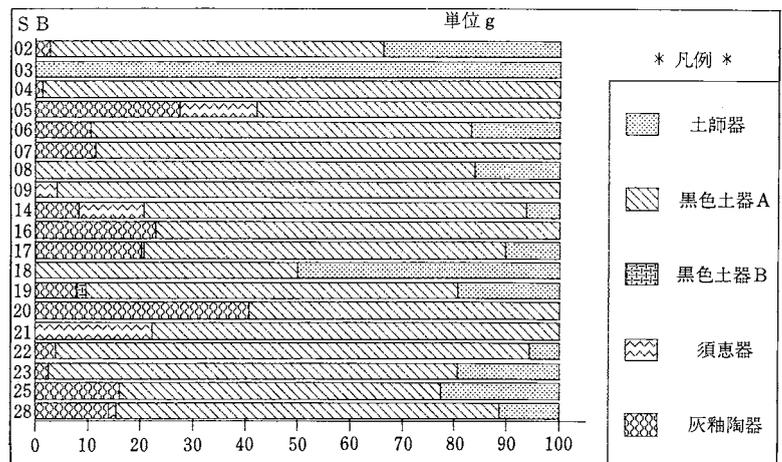
煮炊具は、土師器である点が変わりがない。その遺構ごとおよび全体の比率は、第24表に示すとおりである。器種的にみると、長胴甕と小型甕の2種で構成され、北信で見られるような鍋の出土はない。長胴甕は、ハケ調整の甕が主体で、体部全体をヘラケズリによって仕上げる武蔵型甕が若干加わる点も、やはり松本平と変わらない。しかし、北信地方で主体となるロクロ甕がある程度の遺構に一定量存在する点は注目される。小型甕は、すべてロクロ調整であり、カキメを残す例と残さない例の二者がみられる。

貯蔵具

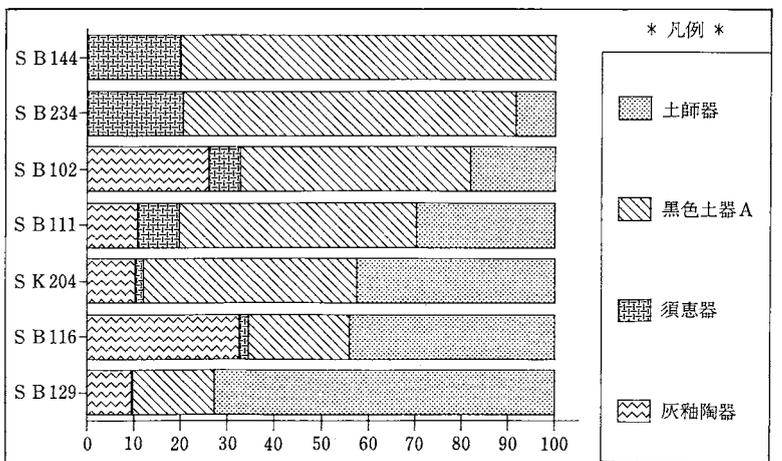
貯蔵具には、須恵器と灰釉陶器の2



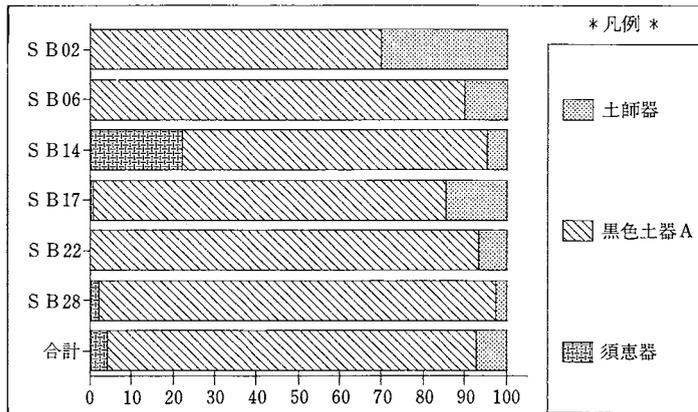
第152図 遺構別食膳具出土量



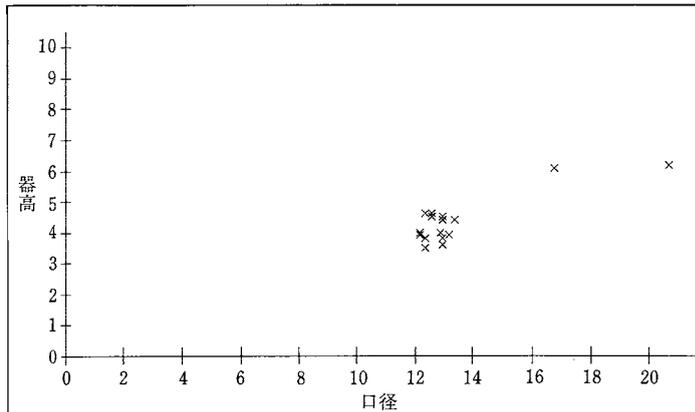
第153図 遺構別食膳具組成



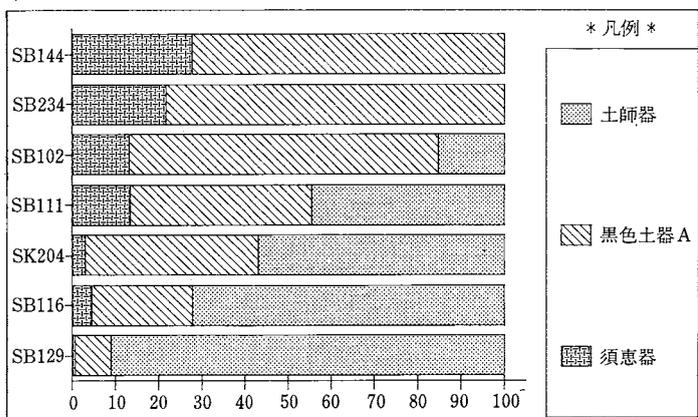
第154図 吉田川西遺跡時期別食膳具組成



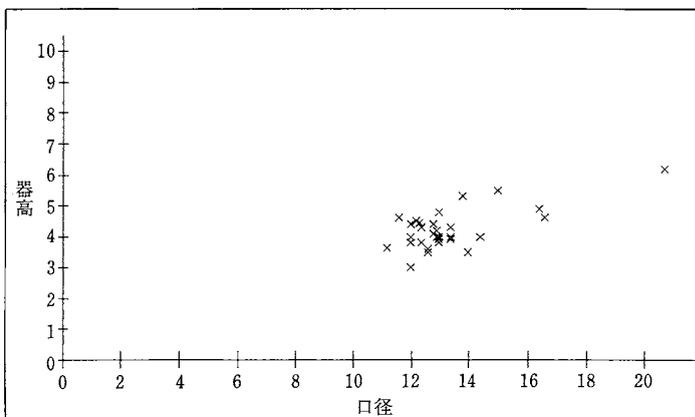
第155図 遺構別杯A種別組成



第157図 黒色土器A杯A法量分布(口縁180度以上)



第156図 吉田川西遺跡時期別杯A種別組成



第158図 黒色土器A杯A法量分布(口縁180度以下)

第24表 遺構別煮炊具組成表

(単位 g)

遺構	土師器				小型甕				釜	甌	不明	合計
	ナデ	ハケ	ケズリ	ロクロ	ナデ	ハケ	ケズリ	ロクロ				
SB02		4,550	220	150								4,920
SB03												0
SB04				40							40	80
SB05				270							40	310
SB06		1,760	1,220	510								3,490
SB07		390						380			160	930
SB08		2,200						140			40	2,380
SB09		710	220	40				200			180	1,350
SB14		1,980		580				1,220		40	640	4,460
SB16		30						250			30	310
SB17		180		150				870			140	1,340
SB18				170				140				310
SB19		1,290		920				100				2,310
SB20		460									170	630
SB21		1,910	410					40				2,360
SB22		190						520		140	730	1,580
SB23								180				180
SB25		60						30				90
SB28		840		470				370				1,680
合計	0	16,550	2,070	3,300	0	0	0	4,440	0	180	2,170	28,710
		21,920			4,440				0	180	2,170	28,710

種類の焼物が見られる。その比率は、前者がほとんどで、後者は2%以下と少ない。灰釉陶器の比率は食膳具の10%前後を占めるのに対してかなり低い点が注目される。須恵器の焼成は、食膳具に見られる灰白色軟質は見られず、従来の硬質な焼成が維持されている。

まとめ

以上、焼物についてみてきたが、筑北地方の特色を導き出すのは難しい。平安時代において、この地域は更級郡から筑摩郡にかわる時期であり、当初は北信的要素を多く持つことが予想されたが、煮炊具の中にロクロ甕の比率が高い点など結びつきが考えられる以外、松本平に非常に近い様相であったのは意外であった。

註

1. 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』III)
橋崎彰一・斎藤孝正 1982 「猿投窯編年の再検討について」(『愛知陶磁資料館研究紀要』2)

参考文献

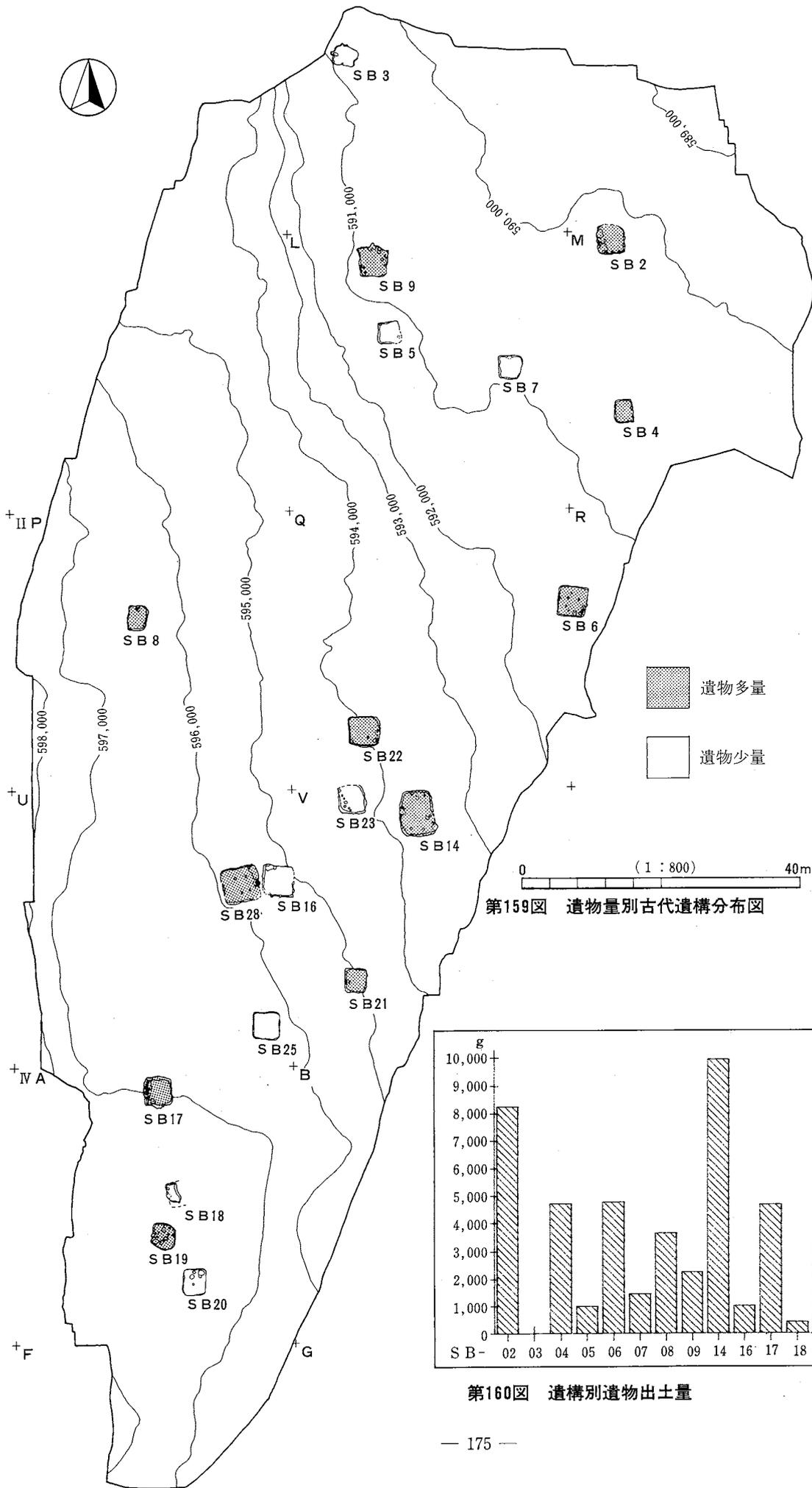
- 小平和夫ほか 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1 総論編』
原 明芳ほか 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2 吉田川西遺跡』

(2) 集 落

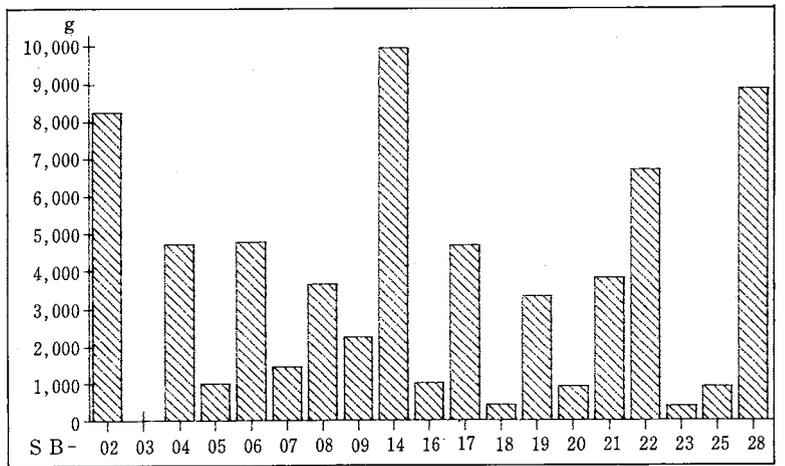
検出された遺構は、竪穴住居址がほとんどであり、土坑・掘立柱建物址・墓等はみられない。竪穴住居址の遺存状況は悪く、いくつかは斜面に位置しているのが要因と考えられるが、壁が全体に遺存していない場合もいくつかある。本来集落を構成する要素の全体を把握しているとはとてもいえず、竪穴住居址の配置に主体を置くことになる点は容赦願いたい。範囲的には、集落が形成されていたと考えられるテラスを、ほぼ前面にわたって調査している。

時間的にみると焼物の項で述べたように、9世紀後半代の比較的短時間で形成され、消滅した集落と考えることができる。ただし、SB16と28は近接しており、19軒の竪穴住居址が同一時期に存在していたとは考えられない。本来ならば、ここで遺物を基準に、遺構を時期別に分け、住居の配置を考える必要があるが、焼物に時期差は認めることはできず、その作業はできない。

そこで、他のいくつかの要素で集落内部を分析してみよう。まず、遺物の出土量は、第160図に示すとおり、住居址の規模に比例しておらず、1,000g前後以下と2,000g以上に大きく分けることが可能である。近接するため当然時期差が考えられるSB16と28は遺物量に大きな差がある。若干飛躍的ではあるが、すべての遺物が廃棄されたという前提にたつと、古い段階の住居の廃絶後のくぼみにはそれ以後継続して生活が営まれたとするならば、多量の廃棄物が入るはずである。一方、最後の段階の竪穴住居のくぼみには当然生活時の廃棄物はないはずであり、埋没時に周囲から遺物が埋土とともに入ったとしか考えられず、出土量も少ないと考えられる。このことから、完全に2時期に住居が建て替えられたとは当然考えられないが、大きく新旧を2つに分けることが可能である。これによって住居址群を分けたのが第159図である。その竪穴住居の配置は、新旧ともにほぼ同じ位置で散在するように分布しており、テラス内で大きく位置を替えているとはいえない。また、恣意的に北群と南群にまとまりをつくることもできるが、その必要はないと考えられる。それならば、この10軒前後(徐々に立替えが行われたとしたらさらに数は少なくなるが)をそのまま一つの単位としてとらえることが可能であろう。集落内部について床面積で住居の規模をみると、第3節2のとおり、SB14が24.76㎡、SB28が23.13㎡と他より突出して規模が大きい。この2軒が、



第159図 遺物量別古代遺構分布図



第160図 遺構別遺物出土量

また時期差をもって存在していた場合は、1軒が集落の核となっていた可能性が高い。ただし、この2軒は、松本平の該期の集落（北方・三の宮・下神・吉田川西遺跡）の核となっている100㎡近くの住居と比較すると規模は小さく、集落の有力者の力の差があらわれていると思われる。それは遺物の面からも、焼物の項で述べたように緑釉陶器などの特殊な遺物がほとんど本遺跡から出土していない理由ともなる。

(3) 集落の盛衰

この集落は形成が9世紀後半で、衰退も10世紀に入るか入らないかの時期で、長くても50年程度の継続と考えられる。

最初にこの集落の形成の経緯について考えてみたい。この地に9世紀以前の遺物はほとんどみられず、居住域として利用されていなかったのは明白であり、このあたり一帯の開発はなされていなかった可能性が高い。9世紀後半の状況を松本平にみると、それまで下神遺跡に代表されるように、消滅・衰退するような集落と、松本市北方遺跡に典型例をみるように新たに形成される集落もある。また、集落内部の構成の点では、それまでの比較的規模の均一な住居の様相から、大きな住居を中心に規模の小さな住居が周囲に展開するように、大きな変化がみられる。集落間にも、緑釉陶器の量などで差がみられ、力の格差が広がったと思われる。また、集落の立地も塩尻市俣原遺跡のように、山麓地など新たな地に展開する状況もみられ、10世紀に本格化する。このように9世紀後半から末にかけては、古い秩序が解体し新たな秩序が形成される段階と考えられる。向六工遺跡もこの混乱した時期に、開発が始まり終末を迎えており、その大きな動向と無縁でなかったと思われる。

3 中世以降

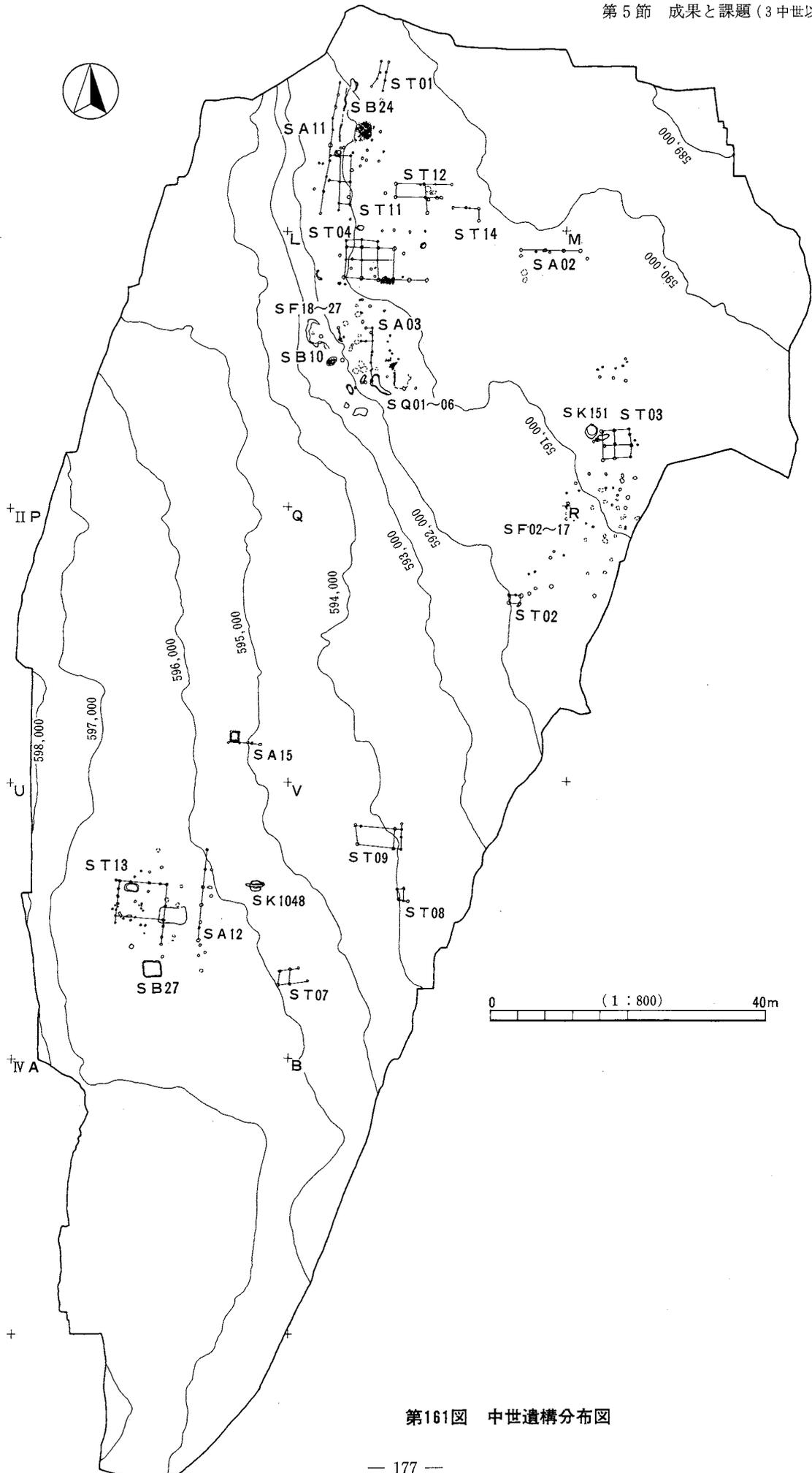
本遺跡の立地する河岸段丘上の平坦面は、10世紀初頭まで集落が営まれた後、遺物の内容と分布から、それ以降11～14世紀代の間は、焼物等を消費する生活の場として利用されなかったようである。次に集落が現れるのは、その成立の背景は不明であるが、15世紀代のことである。そしてこの集落は、16世紀末には解体することとなる。しかし、集落解体以後も江戸時代末期に再び生活の場として利用され、明治時代の早い時期に耕作地となってしまいが、この時期の明確な遺構は残存していない。そこで、本項では中世後半段階の集落にしぼって取り上げることとする。

15～16世紀の遺構としては、少数の掘立柱建物址と多数の柱穴群、竪穴、柵址が見られる。溝等の区画は検出されていないが、視覚的に大きく北・東・南の3群のまとまりとしてとらえることは可能である。この遺構群はそれぞれ30～50mの間隔をもって分布している。また陶磁器の年代と分布から、時期的にはそれほど差がなく、3群が並存していた可能性が高い。

各群の内容を見ると、いくつかの掘立柱建物址が抽出できたが、さらに多数の柱穴群で構成されており、確認できた以上の建物の存在が予想される。また、柵址とした遺構以外にも、列状に分布するピットもあり、より多くの柵がめぐっていたことであろう。これらの遺構をそれぞれの群ごとに整理してみると、以下のようなになる。

第27表 群別中世遺構一覧

種別 群	掘立柱建物址	竪穴	柵址	火葬場	鍛冶場	井戸
北群	ST04 ST11 ST01	◎ST12 ST14	SB24	SA02	SF18～27	
東群	◎ST03				SF02～17・48	SK151
南群	ST13 ST07	ST09	SB27 SX01	SA15	SK1048	



第161図 中世遺構分布図

これを見るかぎり、各群は基本的には主屋・納屋・倉庫（掘立柱建物）、作業小屋・倉庫（竪穴）、周囲を区画する柵で構成されており、一つの生活の単位と考えることができそうである。その構成内容の違いは、各群の質の差に起因するのだろう。とくに、北・東群は焼土址が複数存在したり、羽口等も出土しており、鍛冶に携わる遺構の可能性が高い。南群も同様に焼土址があるものの、鍛冶道具が出土していないため、積極的に鍛冶関係遺構とはみなせないが、一概に否定もできない。このことから、向六工遺跡の中世集落は、何らかのかたちで鍛冶を生業の一つとしていた可能性がある。ただし、鉄滓の出土量がごく少ないため、専門的ではなかったか、あるいは季節的な作業であったと推定される。また、井戸は東群のみにあるため、「集落の井戸」として存在した蓋然性が高く、3群がそれぞれにまったく独立していたのではなく、ある程度の結びつきをもっていたと考えられる。このようにみると、柵で区画されるような3群の独立した生活単位が、緩やかな結びつきをもって成立していた中世の村と理解できよう。

なお、墓に関係した遺構は火葬場1カ所があるのみで、納骨した遺構、土葬した墓はみつかっていないため、墓域は異なった場所に求められたと解釈すべきであろう。ただし、火葬は集落内で行われており、埋葬とは異なった意味をもっていただと考えることもできる。

第6節 小 結

これまで、今回の調査で検出された遺構・遺物を説明し、考察を加えてきたが、最後に若干の補足をしながら時代をおって遺跡の変遷をながめてみる。

最初に向六工遺跡に人跡をとどめるのは縄文早期・細久保式の時期で、IV A区の南西部から少数の楕円押型文土器が出土した。この時期には東条川の下刻は進行しておらず、現在遺跡の南限を画す溪流も遺跡範囲内を流れ、水辺の小集落であったと推定される。

早期末葉・条痕文土器の時期に至って段丘全面が生活の場となり、上・中・下段にそれぞれ内容の異なる遺構・遺物が分布する。下段は遺構がほとんど検出されなかったものの、茅山上層式期を含む古い段階の生活空間となる。上・中段には新しい段階の土器も多く、5軒の住居が営まれ、とくに上段には焼土址・集石もあり、多量の土器・石器が残される。住居址の形態にはバリエーションがみられ、すべての住居址が地床炉を備え、台石をもつものがある点は前期前葉と共通する。土器は絡条体圧痕文系土器で占められ、わずかに東海系の上の山式を伴い、古段階の編年の位置付けの根拠となる。新段階には東北起源の縄文条痕文土器が伴い、東海系土器が認められないものの、県内の既知の資料や東南北部との検討から入海II式を下らない時期を推定した。石器は総数の過半数におよぶ石鏃に象徴されるとおり、狩猟具を主体とすることから生業の中心は狩猟活動が担い、堅果類を対象とした採集活動がこれを補っていたようで、わずかに漁撈活動が予想される。石鏃・石匙等の動物質食料に係わる狩猟・解体具と、磨製石斧・石錐等の工作具をもつ本遺跡の石器組成は、前期初頭へと継承されていく。また石鏃と石匙の主体的な形態は東北地方と共通する。以上のことから、炉・台石を備えた住居址のほか、東北地方の要素をもつ土器・石器群は、早期から前期への生産活動全般の転換が顕在化し始める様相を示すものと評価でき、これらの点を明らかにできたことは特筆される成果である。

早期以降は空白期を経て、五領ヶ台式・加曾利E III・IV式・称名寺式・堀之内1・2式が中・下段から散発的に出土した。この時期の遺跡の内容は明らかではないが、早期末葉には少ない打製石斧が下段から集中して出土し、中期後半に盛行する型と類似することから、根茎類を採集した生産域という性格が想定される。

弥生時代としては磨製石鏃1点と箱清水式土器10片足らずが出土し、筑北に多い中期の磨製石器のみを

出土する遺跡に新たな1例を加えることとなった。

古代では、時期不明確なものも含めて19軒の住居址が検出された。これらは東濃産光ヶ丘1号窯式のみ
の灰釉陶器を出土し、継続時期は9世紀後半50年足らずの期間に限定される。遺構分布と遺物出土量の多
寡から、この間に数回の建て替えが行われたと推定される。住居址の規模は、恣意的に分ければ3m級・
4m級・5m級の3者に分けられ、規模に応じて柱の配置が異なるらしい。SB18・23を除く17軒の床面
積の平均は12.62㎡となる。隣接しているSB16・28は5m級でともに床面積が20㎡を超える住居で、集
落の中核的存在と考えられ、直径30cm以上の支柱穴が明瞭である。4m級では壁上または壁際の直径10数
cm程度の柱穴が上屋を支えたようである。3m級では柱穴がみられないものが多いが、SB03のように細
いが深い柱穴をもつ例もあり、柱穴が不要だったと即断はできない。カマドの位置は西壁7・東壁5・北
壁4例で、分布には片寄りがない。カマドわきにはいわゆる灰溜めをもつ例があり、確実なものはむかっ
て左側5・右側3例で、土器とともにカマド石材を灰溜めに投棄した状態のものが目立った。遺物には鉄
鏃・土錘がみられることから狩猟・漁撈活動も推定され、動物質食料の調理には灰溜めでおき火も利用さ
れたことであろう。稲作に不適な本遺跡のような古代山村の主な生業は、雑穀や麻の栽培と考えられてい
るから、散在する住居址の空間地は畑地と推定される。

本遺跡の古代の焼物の様相は、松本平とほとんど変わらないことが明らかとなったが、煮炊具には北信
地方で主体となるロクロ甕が遺構によって一定量みられた。当時の筑北は更級郡に属し、向六工遺跡付近
に東山道の支線が通じていたという説があるが、多少ともこのことを反映しているのかもしれない。

11世紀以降の空白期を経て、15・16世紀には中世集落が現れる。掘立柱建物址を主体とするため遺構の
遺存状態はよくなく、集落の全体像の復原は難しいが、主屋・納屋・倉庫・作業小屋・柵で構成される3
群の生活単位が推定された。この集落は、専門的ではないにせよ鍛冶を生業の一つにしていたことが明ら
かになった。遺跡と関連するのかわからないが、隣接地に「鍛冶屋」の屋号をもつ家があり、明治時代
までは工房が残っていたというから注目される。

本遺跡の範囲内に岩殿寺の参道が通じ、山門があったという伝承があるため当初から注目されたが、こ
れを立証する根拠は見いだせなかった。ただし、中世の職人が城下・門前に定着するようになるのは、武
器・武具の需要の高まった戦国期といわれるから、甲越戦争を経て青柳氏が滅亡する時期に鍛冶を営む集
落が本遺跡に存続していたことは、岩殿寺山門の傍証となる可能性がある。文献からこの間の事情をうか
がうことはできないが、本遺跡の中世集落の動静は、青柳氏や岩殿寺の興亡と決して無関係ではなかつた
であろう。

縄文時代・古代・中世とも、さらに検討すべき課題と成果がえられたが、思いつくままに記して結びに
かえることとする。

第4章 ^{じゅうに}十二遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は、東筑摩郡坂北村字十二3,264を中心に所在する。JR篠ノ井線坂北駅の北東約500mに位置し、標高は608～623mを測る。東方の青柳城跡から延びる尾根の山間部にある、ほぼ五角形を呈する南東向きのくぼ地地形である。このため日照は良いものの、眺望に欠ける。県教育委員会文化課による分布調査では石鏃の出土が記されているが、遺物は少量で範囲・内容は明確にはなっていない。用水はなく、現状は大部分が畑地で、谷底は天水利用の水田が営まれるが、かつては全面が桑畑だったという。調査対象地全面が下り線筑北パーキングエリアの建設予定地を占める。調査開始時には、すでに対象地の中央部約5,000㎡は瓦用の粘土採掘のため、調査不可能の状態であった（P L36）。

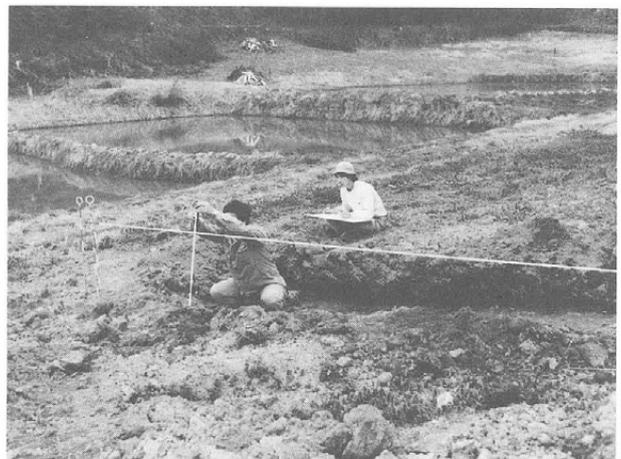
2 調査の概要

調査対象面積は当初26,500㎡が予定されていたが、範囲が不明のため、まず試掘調査を行うこととした（第162図）。その方法は、対象地全域にかけて25m間隔で等高線と直交する方向に、幅1mのトレンチ11本を設定し、重機で掘り下げながら遺構・遺物を確認するものである。この調査は昭和63年4月中旬から下旬に実施し、調査研究員4名が担当した。この結果トレンチは総延長約740mとなり、拡張した部分も含めて1,500㎡を掘り下げた。地表から地山までは平均30cmと浅く、トレンチャーによる深耕の痕跡が著しかった。一部に小穴や風倒木痕がかかったのみで、遺構・遺物は検出されなかった。また、表面採集でも縄文時代の石器と近世の陶磁器を少量得たのみであった。このため土層断面を実測して試掘を終了し、面的調査にはかからなかった。

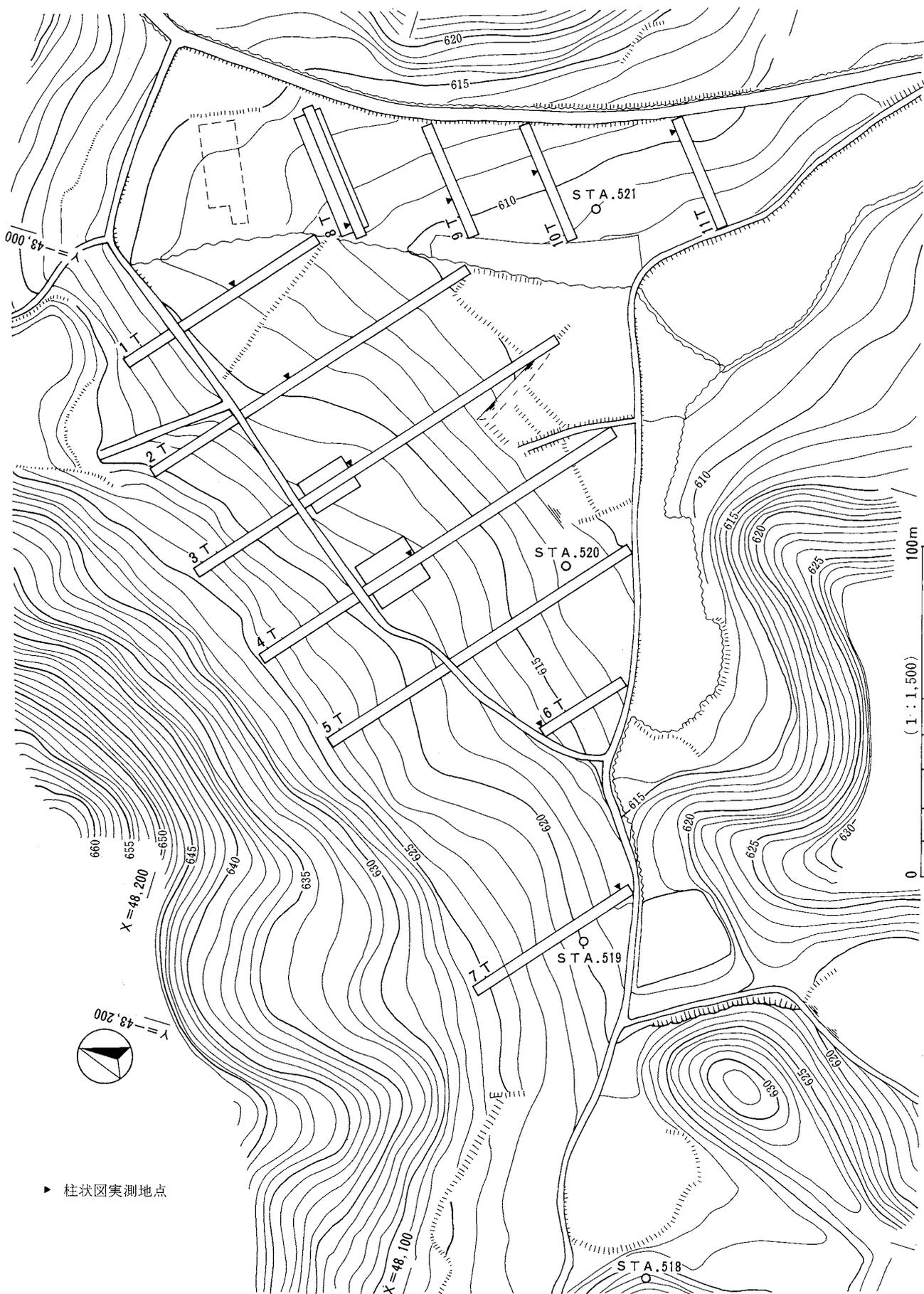
3 調査の経過

昭和63年度

- 4月14日 機材搬入、テント設営。トレンチ設定して重機による掘り下げ開始。
- 4月18日 小穴が数個かかるが、遺構なし。
- 4月19日 トレンチ掘り下げ続行。小穴を検出した3・4トレンチ、石器を採集した8トレンチを拡張するが遺構・遺物なし。重機作業終了。
- 4月20日 3・4トレンチを精査したが、風倒木痕を確認したのみ。トレンチ断面を精査。実測準備。
- 4月25日 土層断面実測。調査地全体を表面採集。
- 4月28日 全体撮影後、機材を撤収し、試掘終了。
- 5月 図面・写真整理。遺物洗浄・注記。

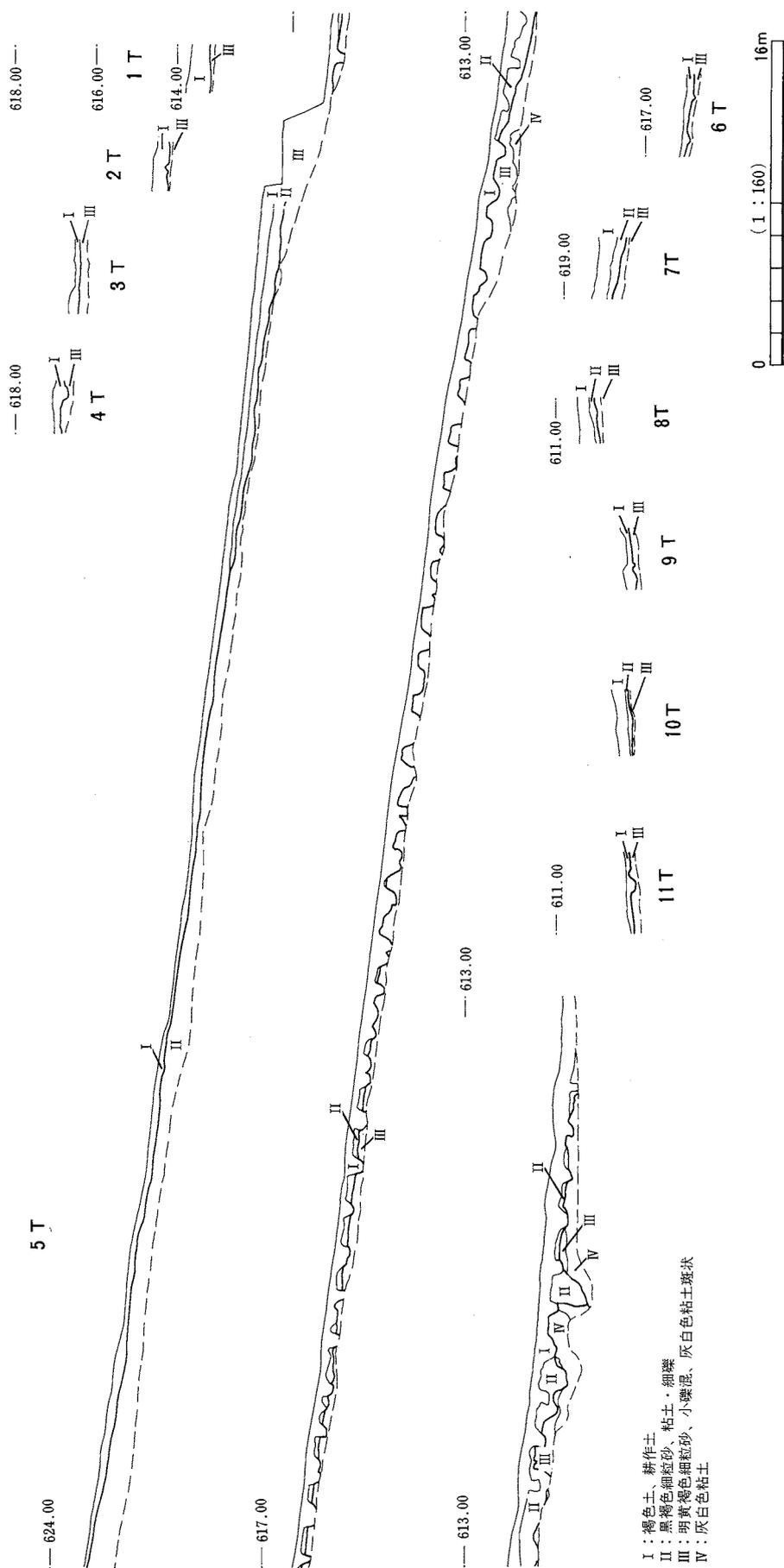


トレンチ断面実測作業（昭和63年4月）



▶ 柱状図実測地点

第162図 調査区全体図



第163図 土層図

第2節 基本層序と地形形成

本遺跡は、麻績川と東条川に挟まれた、尾根の山間部のくぼ地にある。麻績川の現河床が西南西方向であるのに対して、このくぼ地はほぼ南方向の延びを示しており、更新世後期の先行河川が残した流路跡で、風の通り道（ウインドギャップ）的地形を呈している。このくぼ地は、周辺が狭小な平坦山嶺で、山嶺との比高も乏しく、集水域がないため、わずかに崖錐性堆積物や腐植物に埋積された地域である。北側は麻績川の攻撃によって急崖となり、河床からの比高は約50mほどの高さにある。くぼ地の傾斜面は南斜面で日当たりは良いが、水不足と背後の急崖、土地の広がり狭いことなどが生活場所としては短所である。

第163図には、調査地中央部を北西から南西に切る第5トレンチの土層断面図と、他のトレンチ各1カ所の柱状図を示した。表層の基本土層は次のとおりである。

- I 層：褐色。耕作土。
- II 層：5 Y R 3/2 黒褐。細粒砂。多孔質で径5～10mmの円礫を含む。スコリア・炭を少量混入。粘性ややあり、乾燥すると硬くしまる。
- III 層：10 Y R 7/6 明黄褐。細粒砂。層厚10～40cm。多孔質で径数～30mmの礫を含む。スコリア・炭少量混入。黄色砂と灰白色粘土が斑状とな

I：褐色土、耕作土
 II：黒褐色細粒砂、粘土・細礫
 III：明黄褐色細粒砂、小礫混、灰白色粘土斑状
 IV：灰白色粘土

る部分がある。

IV 層：N7/1灰白。粘土。グライ化。厚い。

このうちIII・IV層が地山に当たり、湖底堆積の砂・粘土層が隆起・侵食され、表面が土壌化したと推定される。

第3節 遺物

第164図1・2は第8トレンチ付近で表面採集された。1は打製石斧で、板状の粘板岩を素材とする。長さ5.8cm、厚さ1.5cmで、刃部に最大幅があり、3.9cmを測る。頭部は丸く、側縁は直線的で摩耗している。刃部は片刃状の直刃で、再生のためか、短身である。2は緻密な安山岩の特殊磨石で、上端の欠損は新しい。平面・断面とも三角状で、直線的な稜には微弱な摩耗を認める。

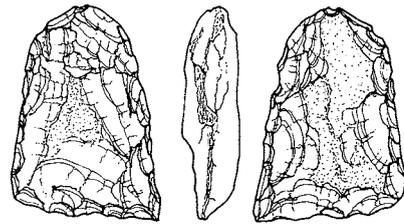
図示できなかった遺物としては、チャート破片、火鉢を含む内耳質土器、近世後半の瀬戸美濃系御深井釉・鉄釉陶器、染付の破片10数点が採集された。

第4節 小結

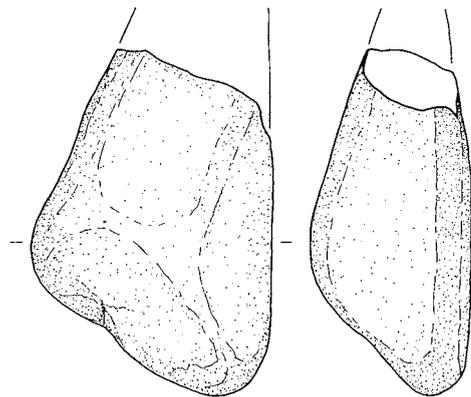
当初から内容不詳の本遺跡であったが、試掘確認や表面採集の結果から、希薄な遺物散布地という性格が明らかになり、面的調査は不要という結論に至った。山間くぼ地というやや特異な立地、きわめて水を得にくいという条件を考慮すれば、集落の成立が困難なことは当然であろう。攪乱のため調査不可能だった部分を加味しても、継続的な集落の可能性は低い。少量の出土遺物からあえて遺跡の内容に言及するなら、特殊磨石の存在は縄文時代早期という年代を示唆し、さらに憶測すれば押型文土器に伴う可能性が高い。おそらく通過性のキャンプ地や狩猟・採集地といった、痕跡をとどめにくい小規模遺跡であった可能性がある。

筑北山地と隣接地の縄文早期遺跡は、第5図の範囲内では24遺跡が知られ、大半が押型文期に属す。その分布は、麻績村の聖湖周辺と一本松峠、更埴市の千曲高原にわたる三峯山一帯と、大岡村・麻績村にわたる聖山頂北東一帯に集中している。これらは標高700~1,200mの高所に位置し、これより低位の遺跡としては麻績村小学校敷地・仏岩岩陰、坂井村安養寺窪の3遺跡がある。筑北山地南部では、本遺跡に近い向六工遺跡のほか、本城村上手山遺跡が知られるのみである。遺跡の片寄りは分布調査の実施状況を反映する面もあろうが、これまで空白だった地域にわずかでも縄文早期人の足跡を見いだした点を評価したい。

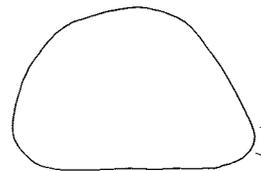
近世の遺物はやはり少量ながら、18世紀以降にまともまっている。本遺跡に集落があったという記録はなく、明治初期の絵図では青柳村に含まれ、遺跡付近には現麻績村の桑山村へ通ずる道路が見られることから、この往来や農作業の際に陶磁器がもたらされたものと考えられる。



1



2



0 (1:3) 5 cm

第164図 石器実測図

第5章 ^{のぐち}野口遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は、東筑摩郡麻績村字入田1,053ほかに所在し、JR篠ノ井線聖高原駅の南西1.7kmの位置である。高速道路線としては、筑北パーキングエリアと麻績インターチェンジの中間に当たる。

四阿屋山の支脈、鍋山北麓の扇状地から麻績川左岸の野口段丘の集落一帯が遺跡とされてきた。眺望は北に開けて聖山を仰ぎ、背後には青柳城を見上げる。遺跡の中心は現集落といわれ、内耳鍋の出土なども知られたが、範囲・内容は不詳であった。今回の調査対象地は遺跡推定範囲の上限に当たる、標高650m前後の北向き斜面である。調査地中央を四阿屋山の支脈が分断しているため、東・西2地区の調査となった。両地区とも現況は水田と畑地であるが、戦前は一面桑畑だったという（P L37）。

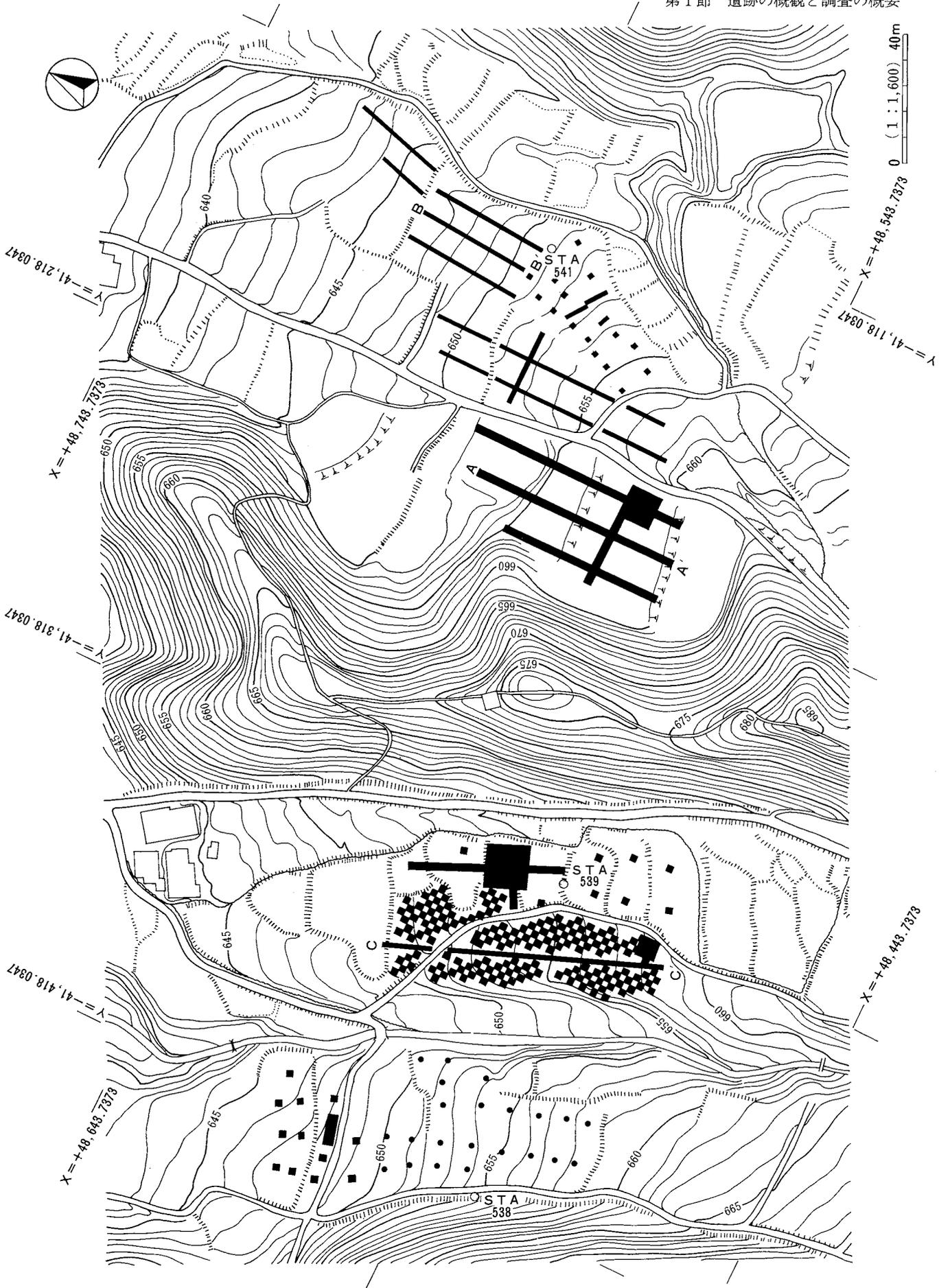
2 調査の概要

遺跡範囲が不明のため、本調査に先立つ昭和62年3月、県教委文化課による試掘が西地区で行われ、中央部を北流する溪流の左岸は遺構・遺物が皆無であり、右岸で古代の火葬墓らしい遺構が確認され、9,700㎡が調査対象面積となった。本遺跡の調査は同年7月8日から10月13日に行われ、8名の調査研究員が担当した。この間、7月下旬から9月下旬まで、1～5名の作業従事員の参加を得た。道路が狭いためプレハブが搬入できず、テントを設営して現場基地とした。

まず、範囲不明の東地区について、用地買収済みながら作付けが認められているという条件下で、7月上旬に試掘を行った。これには地形・地目に応じて任意に設定したトレンチ（幅1m）・テストピット（1×1m）を人力で掘り下げる方法をとった。試掘により、東地区の果樹園部分には遺構がなく、遺物も希少という結論を得た。7月下旬には西地区の水田部分と、青柳城関係者の伝承地、字「泰殿屋敷」を試掘した。西地区の畑地は地山まで30cm足らずと浅いため、人力によるトレンチと、市松状の2mグリッド掘り下げとし、水田部分のみ重機を用いた。西地区の遺構の住居址2軒、土坑2基の調査が終了し、タバコと稲の収穫を待って9月中旬から再び東地区の試掘に移り、人力と重機でトレンチをあげ、土坑1基を調査した（第165・167図）。

測量基準杭は日本道路公団の中心杭、西地区のS T A 539+00（X=48,543.7573、Y=-41,318.0347）を東西両地区共通の基準点として、他の視準可能な中心杭から座標北を算出し、40mの大グリッドを設定した。ただし、グリッド呼称は東・西別々とし、調査対象地にかかる大グリッドのみに、北からA、B、C……を付した。この結果、S T A 539+00は西地区のH A 01となり、東地区のK A 01の座標は（X=48,522.9413、Y=-41,257.4474）となった。遺構の測量には2mグリッド杭を設定し、トレンチ・テストピット位置の測量は光波測距儀によった。水準測量は西地区ではS T A 538+80（655.136m）、S T A 539+00（655.152m）、東地区ではS T A 540+00（657.321m）、S T A 540+80（652.720m）などを基準とした。

遺物の取り上げは2mの小グリッド単位とした。



第165図 調査区全体図

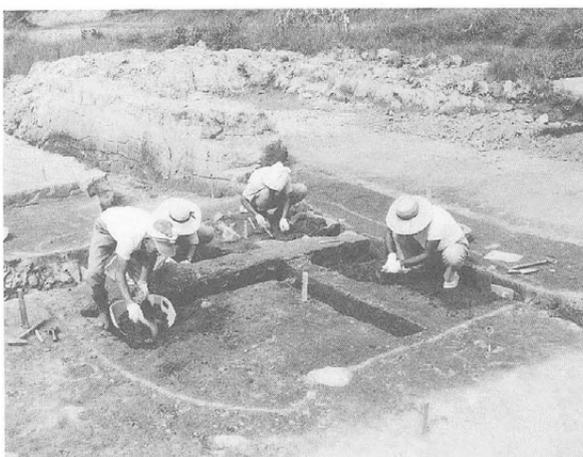
3 調査の経過

昭和62年度

- 7月8日 機材搬入。西地区にテント設営。東地区の果樹園にテストピット・トレンチ設定。掘り下げ着手。
- 7月10日 筑北高速道事務所中沢所長・高野調整課長、道路公団豊科工事事務所田中庶務課長視察。
- 7月21日 東地区トレンチ掘り下げ終了。遺構なく遺物少量。西地区にテストピットをあげトレンチ設定。
- 7月22日 東地区土層断面実測。西地区草刈り。
- 7月27日 本日より作業従事員5名参加。西地区の面調査部分杭打ち。試掘続行。毛涯副知事視察。
- 8月7日 内耳鍋等出土。重機で桑の抜根、水田の試掘。
- 8月19日 土層断面精査と実測準備。遺物少なく疲労感大。
- 8月25日 平安時代住居址2軒検出。一同士気上がる。
- 8月26日 住居址掘り下げ。さらに鉄滓を伴う土坑検出。
- 8月31日 麻績村平田教育長ほか教育委員視察。
- 9月3日 遺構調査。SB02は遺物多く周溝を確認。
- 9月7日 5日麻績村教委の要請あり、10～12時に調査と並行で現地説明会。平日ながら115名見学。
- 9月9日 SB02周溝に石蓋伴う。東地区試掘杭打ち。
- 9月14日 西地区遺構調査。東地区トレンチ掘り下げ着手。
- 9月21日 西地区SK01で火葬骨と蔵骨器を再確認。
- 9月29日 東地区トレンチ精査。水田部分を重機で試掘。
- 9月30日 松塩筑事務所小口調査研究員、地質・地形指導。
- 10月1日 SB02周溝が暖房設備と判明。新聞社取材。
- 10月2日 SB02追加精査。東地区で炭化物・土坑検出。
- 10月8日 西地区調査終了。東地区土層実測。SK03調査。
- 10月12日 東地区調査終了。全景撮影。機材・テント撤収。
- 10～12日 遺物洗浄・注記・復元・実測。図面・写真整理。
- 63年3月 トレース・図版作成・仮収納。



グリッド掘り下げ（昭和62年8月）



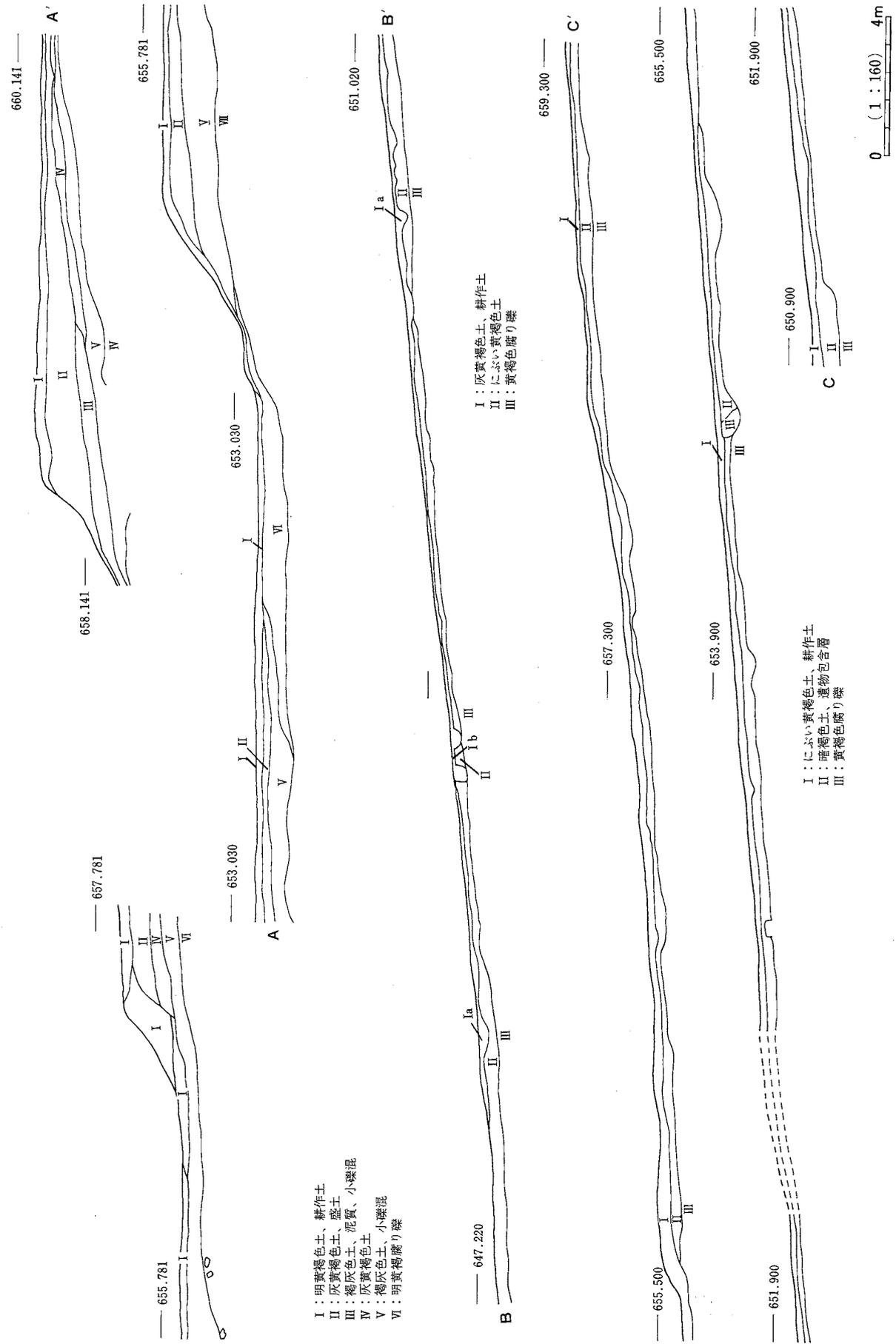
SB02掘り下げ（昭和62年8月）

第2節 基本層序と地形形成

本遺跡は、谷底平野を南西流する麻績川左岸の野口段丘上部に立地する。ここは、更新世後期後半に形成された最低位段丘に属する岩石段丘部と、西ノ沢など小溪流の侵食谷に沿って開けた傾斜面である。後背山地からの崩積土（崖錐性堆積物・地すべり堆積物）や押し出し堆積物（扇状地性堆積物・土石流）に覆われているが、堆積物のいずれかの区別はむずかしい。

周辺山地は、低山性の尾根で集水域が狭く谷も浅いため、水に不足しており、可耕地のほとんどは畑地利用である。また、三方を山に囲まれた山懐に立地するが、北に開いているため、冬季の季節風が吹き込みやすく、寒気にさらされることが多い。

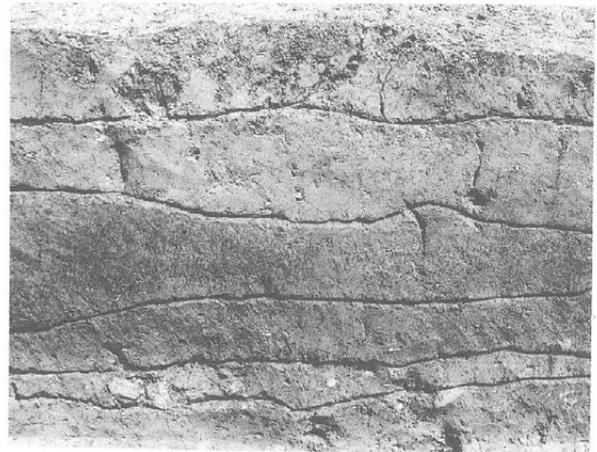
次にトレンチの所見に基づいて、東西2地区の表層地質を概観する（第166図）。東地区は扇側部中央が高いカマボコ形の扇状地を呈する。この高まりを畑地、山麓の低地部を水田に利用している。水田部分（A-A'）は地形の改変があり、I層の耕作土とII層は盛り土である。III層は円礫を含む泥質土で、級化構造が見られる。IV層は細粒砂ないしシルトで礫は少なく、風化碎屑物である。V層は小円礫を含むシルトでグライ化し、分解しない植物質が混じるため、開田前は湿地であったことを示す。VI層は風化した砂岩を母材とする亜角礫層で、麓屑堆積物である。



第166図 土層図



西地区Cトレンチ断面



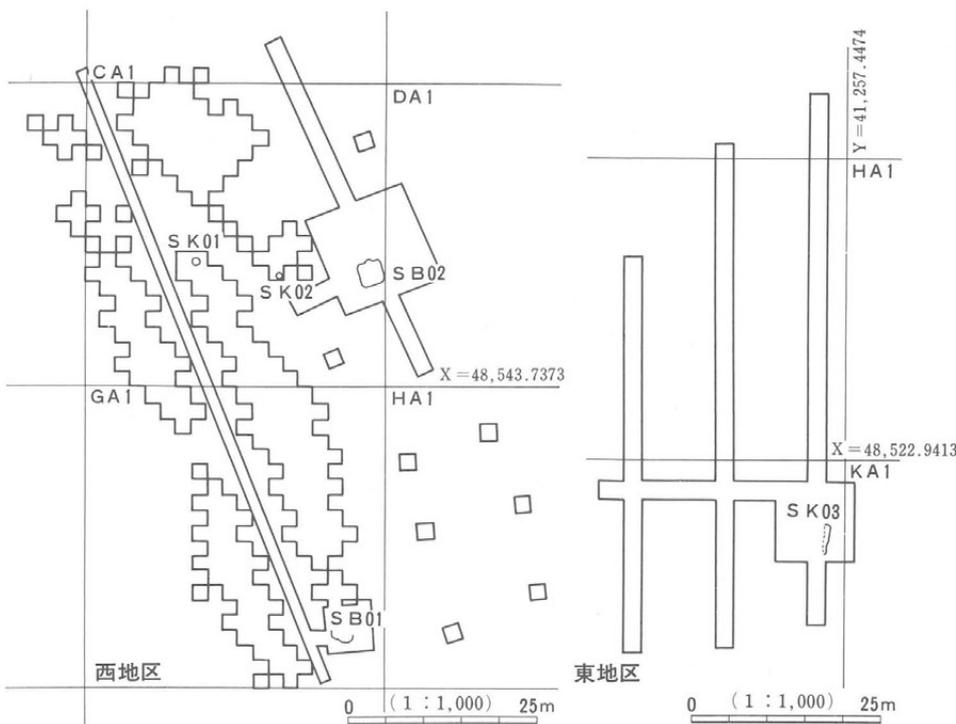
東地区Aトレンチ断面

畑地部分 (B-B') は単純で、西地区 (C-C') と共通し、5度前後の傾斜をもつ。I層は耕作土で、暗褐色のII層が灰色化したものである。II層は風化砂岩を母材としたシルト質の腐植土で、遺物包含層である。III層はいわゆる腐り礫層で、遺跡の地山層に当たる。堆積物の量は、谷が深い東地区の方が多い。

I・II層の出土遺物には縄文時代後期、平安時代、中・近世のものがあり、層位的には時期による上下関係は認められなかった。また、遺構はすべて平安時代に属し、いずれも検出面は畑地部分のIII層上面、あるいはそれに相当する風化した砂岩の黄褐色土層であるが、II層から掘り込まれていることは確実に思われる。

第3節 遺構

1 平安時代の遺構



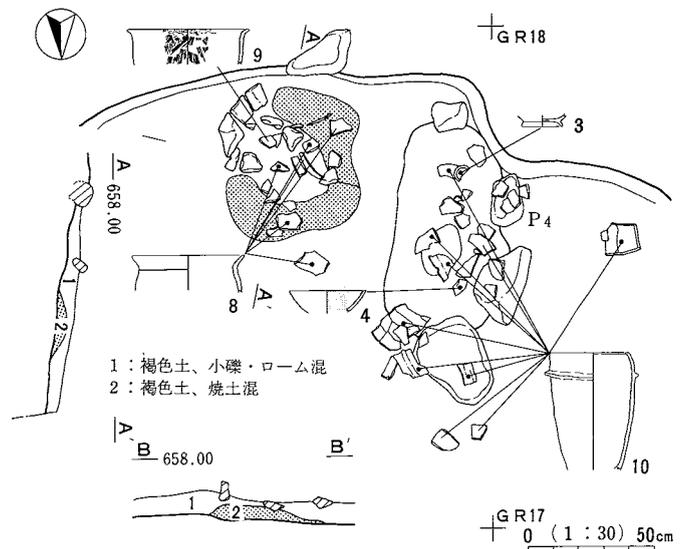
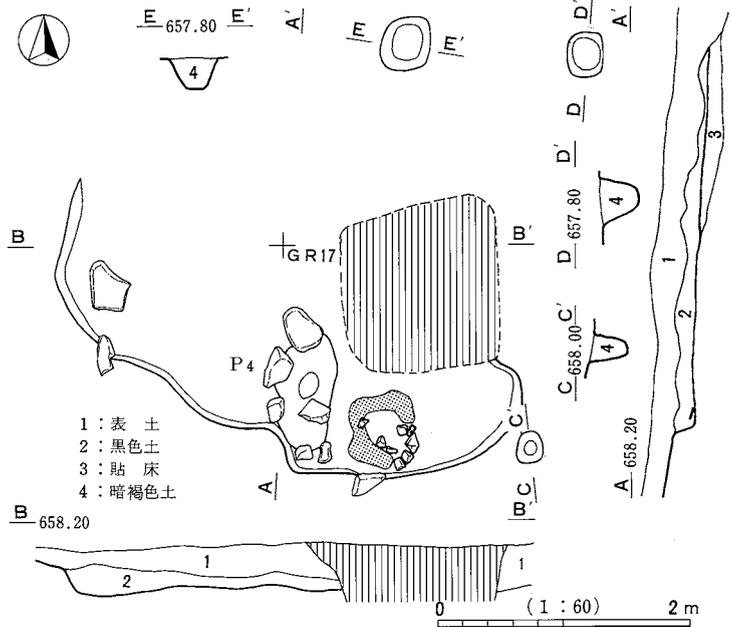
第167図 遺構分布図

(1) 竪穴住居址

SB01 (第168・173図、PL39)

位置：西地区のQ17にある。検出：グリッド掘り下げの際に土器片が集中して出土し、III層上面で黒色土の落ち込みの一部を確認したため、拡張してカマドを確認した。カマドの前には県教委文化課による試掘坑がかかっている。埋土：黒色土の単層で、耕作がおよんでおり薄い。規模・形態：北向き斜面にあるため南壁しかプランがわからず、東西約3.9mを測る。壁

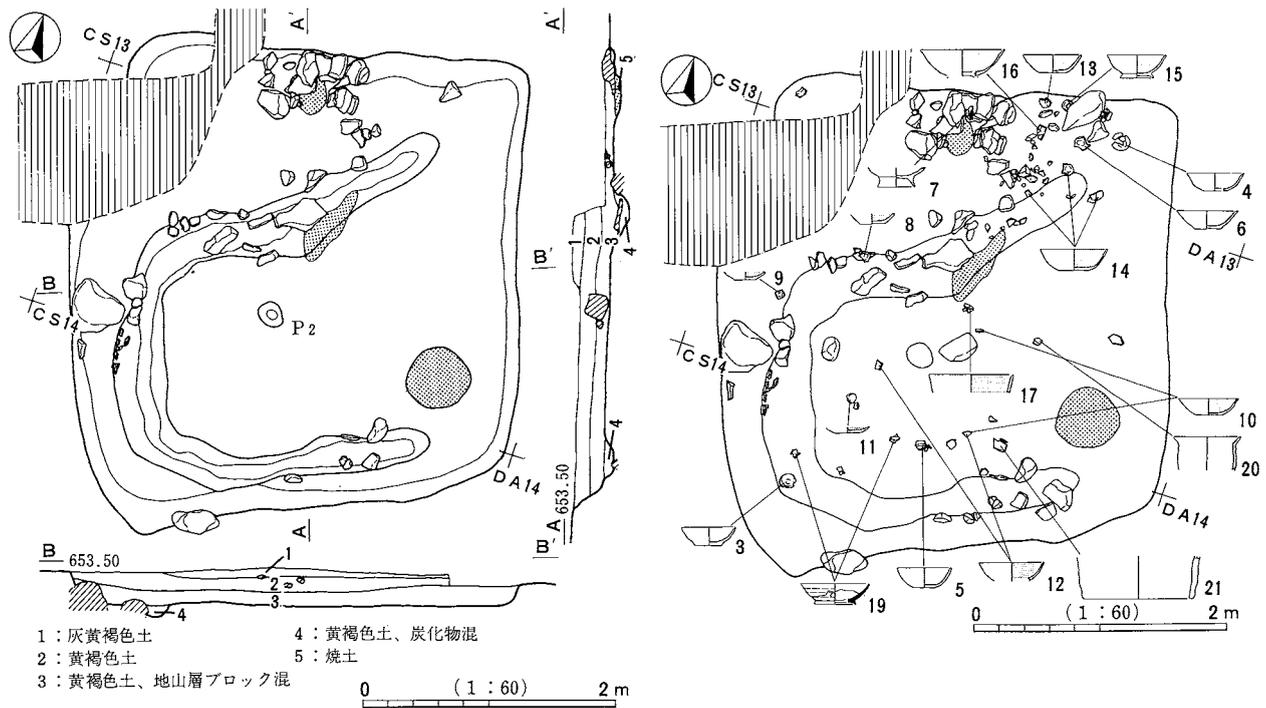
線がゆがんでいるため不整形らしい。主軸はおよそN67°E。床・壁：南側では掘り下げた地山をそのまま床面とし、北側は暗褐色土を用いた貼床となる。南壁は壁高10～15cmで緩やかに立ち上がる。柱穴：南東隅の壁外にあるP₁が柱穴と思われる。南壁付近に当たると推定されるP₂・P₃も規模・形態から柱穴の可能性はあるが、壁内・外は不明である。カマド：南壁のやや東寄りにあり、拳大程度の礫が散在し、袖は原形をとどめない。火床は平坦で、ドーナツ状に焼土が残る。諸施設：カマドの右わきに長径80cm・深さ10cmを測る楕円形のP₄があり、カマド石と思われる礫や土器が出土し、いわゆる灰溜めピットと思われる。遺物分布：カマドとP₄付近の床面およびピット内に土器と礫が集中した。カマドからは土師器甕B(9)・D(8)、P₄からは土師器椀(3)・羽釜(10)・黒色土器A杯A(4)が出土し、羽釜は多数の破片が接合して、半完形に復原できた。時期：隣接する遺構が認められないため、出土土器はすべて本址に伴うと考えられ、10世紀後半と判断される。



S B02 (第169・170・173図、P L 38)

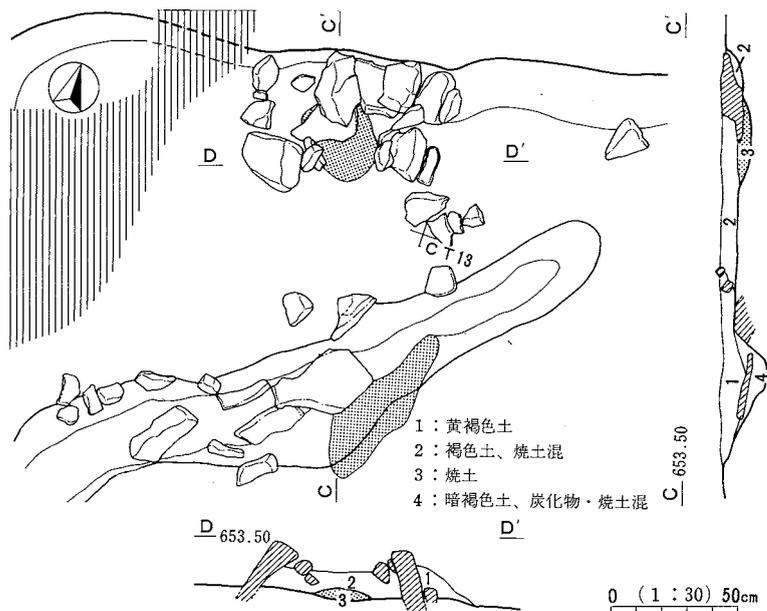
第168図 SB01・カマド実測図・遺物分布図

位置：西地区C15・20にあり、S B01から北方に約50m隔たる。検出：水田部分に試掘坑をあけたところ、まとめて土器が出土したため重機で拡張した。この際トレンチが西壁の一部を切り、試掘坑のかかった北壁は多少削平された。地山面でマンガン沈着の著しい黄褐色土の落ち込みを認めた。埋土：3層に分層できた。ほぼ水平堆積を示すが水田耕作の影響があり、堆積過程は明らかでない。規模・形態：南北3.5m×東西3.4mの方形で、主軸はN19°W。床・壁：掘り込んだ地山を床面とする。最も低い北東隅と最も高い南西隅では約20cmの比高差がある。壁高は30cm前後で、外傾して立ち上がる。西壁には地山層に含まれる大礫が露出している。柱穴：床面中央のP₂は深さ5cm程度で判然としませんが、壁内外を精査してもほかにピットは検出できなかった。カマド：北壁中央にあり、袖石はほぼ原位置を保つ。左・右袖とも埋め込んだ安山岩の平石と拳大の礫を芯にするが、袖土は識別できなかった。右袖前の礫も火熱で割れており、袖石と思われる。燃焼部には天井材と思われる平石2枚が落ち込んでいた。火床には厚さ約6cmの焼土がある。諸施設：北東隅からカマドの前を通り、西壁・南壁に沿ってコの字状に溝がめぐり、幅18～45cm・深さ10～20cmを測り、溝壁には地山に含まれる大小の礫が露出して凹凸がある。幅・深さとも最大のカマド前の部分には、安山岩の平石1枚が蓋状にかけられている。この部分は溝壁が硬く焼け、周囲には



第169図 SB02実測図・遺物分布図

焼土が散在し、炭化物も多かった。溝の埋土には住居址埋土より炭化物がやや多く含まれ、西壁付近には炭化材の一部が残存した。溝は延長約6m、底面の比高は最大22cmを測る。床面の南東隅には、この溝の端部から30cm離れて、直径50cmの円形に焼けた部分がある。赤化した部分は深さ約5cmに達する。遺物分布：カマドの右側には食器が集中し、完形品を含む土師器杯A（4・6）、黒色土器A杯A（13・14）・椀（15・16）がある。カマド石の上から土師器椀（7）が出土し、カマド構築材として用いられた可能性がある。こ



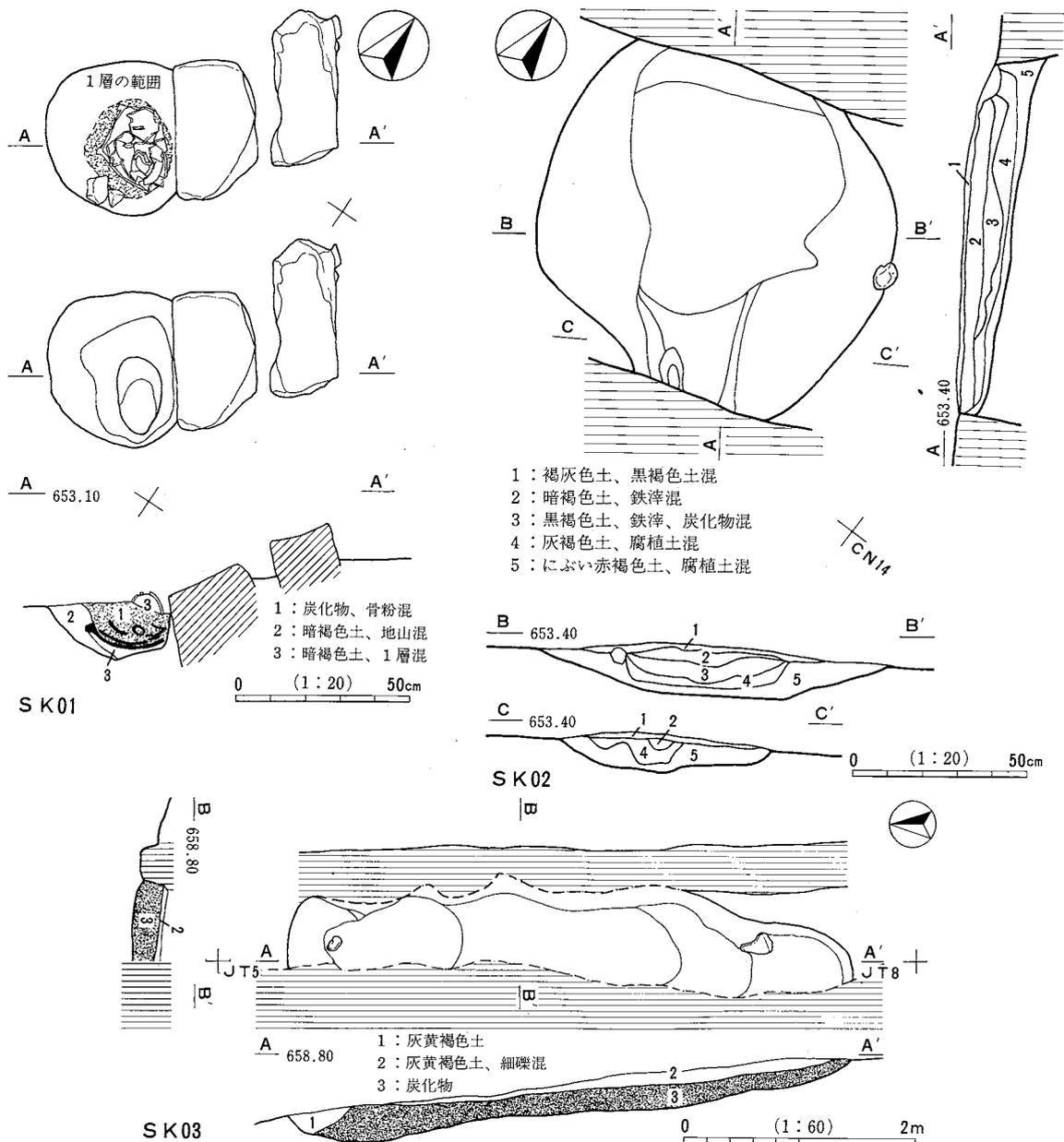
第170図 SB02カマド・溝実測図

のほか床面から多少浮いた状態で比較的大きな破片が散在し、土師器杯A（4・5）・小型甕A（20）・甑（21）、黒色土器A杯A（8～12）・椀（17）、灰釉陶器椀（18・19）があり、煮炊具は少量であった。時期：出土土器から、10世紀前半と考えられる。

(2) 土坑

SK01（第171・173図、P L39）

位置：西地区C12にある。検出：県教委文化課の試掘で確認された。地表下30数cmの地山上面で、骨粉・炭化物を含む暗褐色土の落ち込みが明瞭に検出された。規模・形態：長径43cm・短径37cmのほぼ円形で、深さ22cmの鍋底状を呈する。南壁は地山に含まれる径40cmの大礫で、掘り方が見られないため、埋め込ま



第171図 SK01・02・03実測図

れたものではない。埋土・遺物分布：底面近くに須恵器甕（3）が半分に分れて内面を上に向け横転した状態、その上に須恵器長頸壺A（2）、さらに埋土上部に黒色土器A杯A（1）が底を上に向けて出土した。土器3の上であり、土器2を含む埋土（1層）は骨粉と炭化物を交える。骨は細片10数片ですべて焼かれた人骨である。確実に部位を同定できたものはなく、形質・性別は不明ながら、乳幼児のような若い個体ではない（付章第5節参照）。時期：出土土器から9世紀と思われる。所見：火葬骨と須恵器壺・長頸壺、土師器碗各1点を出土した本土坑は、古代の火葬墓と考えられる。ただし、土器が壊れて集積されたような状態であること、人骨がきわめて少量だったこと、それにもかかわらず骨片と炭化物を含む埋土が土器の中にとどまっていたことから、深耕などの際に掘り返された本土坑が、火葬骨を伴っていたため、破損した土器がすぐに原位置に埋め戻されたものと推定される。

SK02（第171・173図、P L39）

位置：西地区C19にある。検出：グリッド掘り下げの際、II層下部で、炭化物を多く含んだ褐色土の落ち

込みを確認した。南北両端を深耕によって切られている。**規模・形態**：東西100cm・南北103cm以上の不整楕円形らしい。深さ15cm。III層を掘り込んで皿状を呈し、底面は焼けておらず、北端には小さな段がある。**埋土・遺物分布**：5層に分層できる。2・3層は多量の鉄滓を含み、土師器と羽口破片を少量交える。4層は植物の薫製土が混じり、5層はIII層に近い。鉄滓は4.3kgあり、分析の結果、砂鉄を原料とする鉄塊をたたいて製品に仕上げる過程で発生した鍛冶滓と推定された（付章第6節参照）。**時期**：少量の土師器片から、平安時代と考えられる。**所見**：羽口・多量の鍛冶滓を出土したものの、土坑自体が焼けていないことから、鍛冶炉の残存部とは考えられず、鉄滓を廃棄した土坑と推定される。

SK03（第171・173図、PL39）

位置：東地区J10にある。**検出**：水田部分の遺構確認のため重機でトレンチをあけたところ、断面に、土器片の混じる炭化物層が現れたため周辺を拡張し、第166図A-A'のV層の灰褐色土上面で検出した。このため西半分は削られ、東側は上端部を暗渠が切っているほか、切り盛りによって上部を削平されているらしい。**規模・形態**：南北4.8m・東西0.9m以上で、検出面からの深さは30cm前後である。北向き斜面にあり、長軸はほぼ北を向き、傾斜度は約8度を測る。側壁は外傾して立ち上がり、底面にはわずかな段差がある。**埋土・遺物分布**：埋土は基本的には2層に分層され、上層2層の灰褐色土はかなり削平され、下層の3層は炭化物層で焼土を交えず、底面も明瞭に焼けた形跡は見られない。炭化物層の中には少量の炭化材が含まれていた。遺物は上・下層とも少量含まれ、下層からは土師器杯A・甕B、黒色土器碗Aが出土した。**時期**：少量の遺物ながら9世紀と推定される。**所見**：攪乱が著しいため遺構の全容が不明ながら、およその形態と炭化物の埋土から、「焼土坑」とも呼ばれる炭焼窯の可能性が高い。

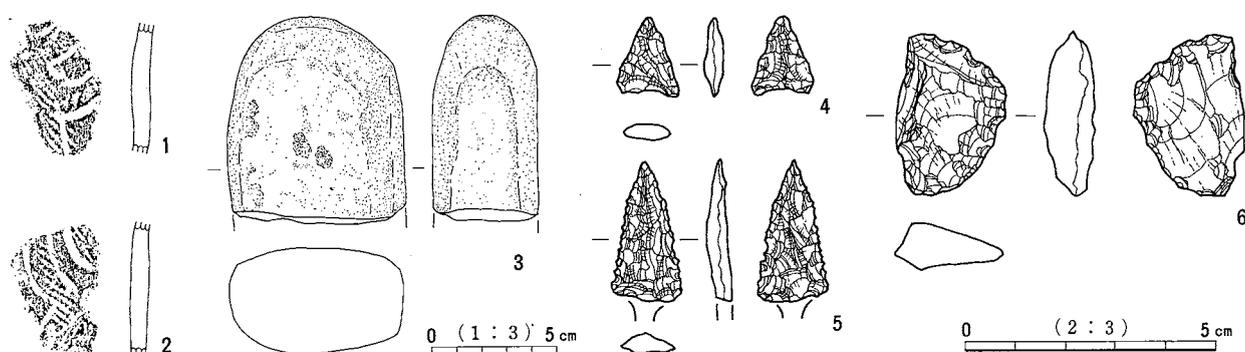
第4節 遺物

1 縄文時代（第172図、PL41）

縄文時代の遺物はすべて遺構外の出土で、4・6は東地区、その他は西地区である。

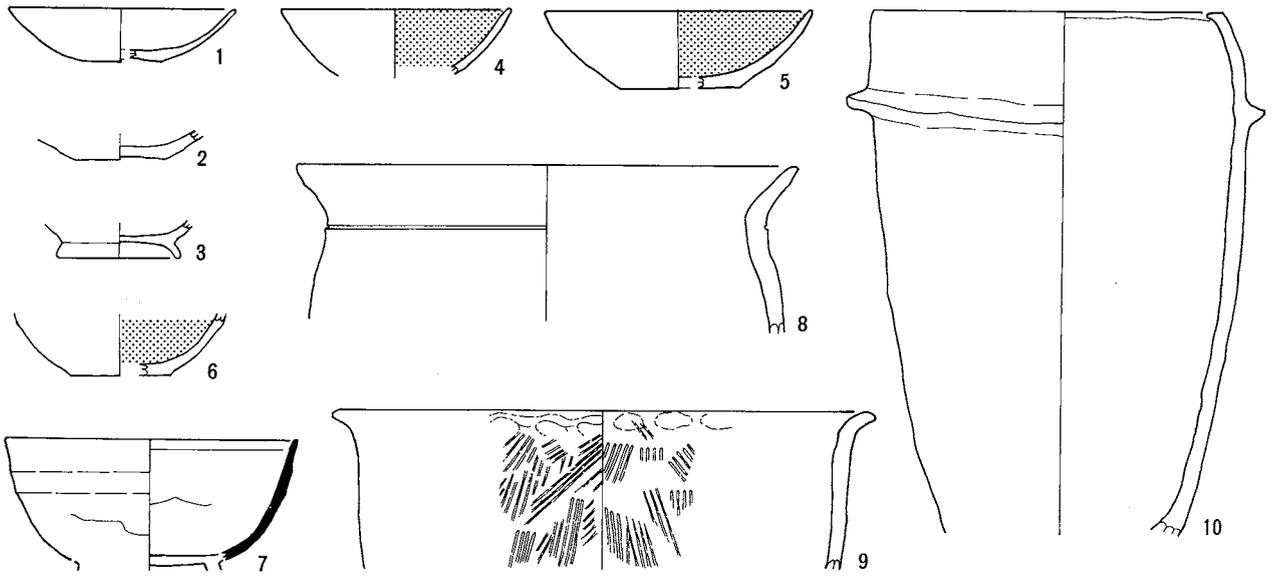
1・2は称名寺I式新段階に属し、同一個体と思われる。深鉢の胴中位の破片で、器厚はやや薄い。無文部と幅の等しい、曲線的な帯状の磨消縄文が描かれている。地文はLRである。

4・5は石鏃で、黒曜石製である。4は小形で、浅い凹基の無茎石鏃である。5は長身の有茎石鏃で、先端部が狭まる形態を呈する。縦長剥片に斜行剥離を施し、鋸歯縁状に仕上げている。6は珪岩のスクレーパーで、3分の1程度を欠損するが、周縁を刃部としている。3は楕円形の磨石で、一端を欠損する。図示した面にはアバタ状痕が見られ、1側縁は特殊磨石のように平坦な磨面となっている。

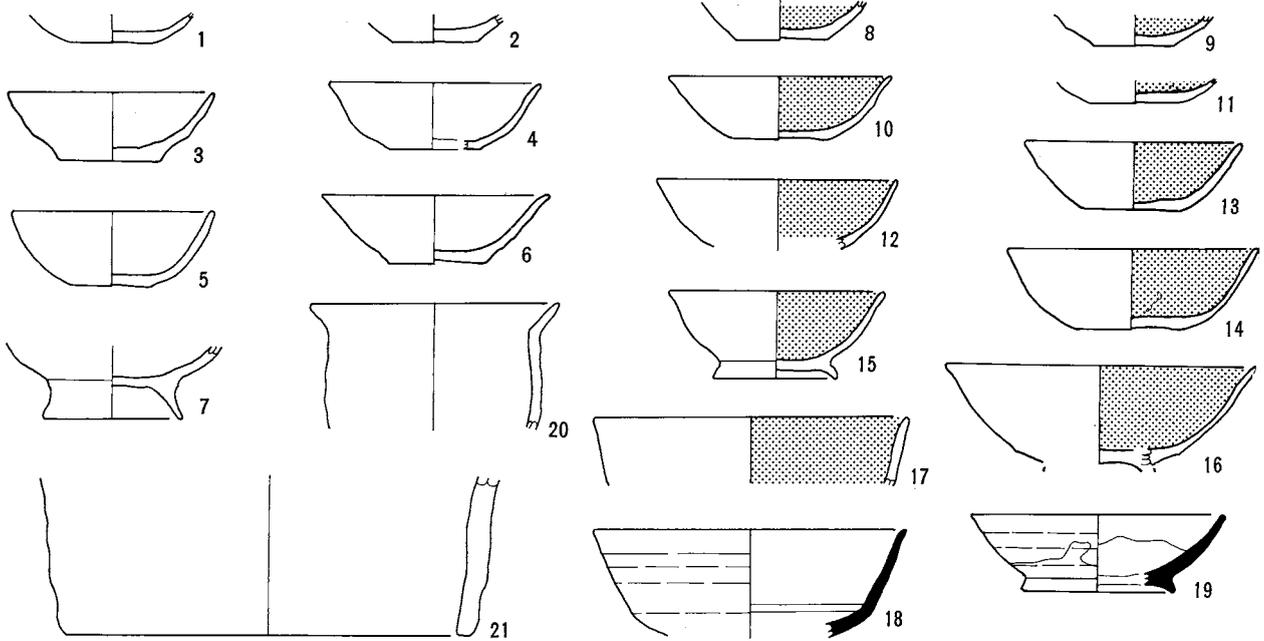


第172図 縄文土器拓本・石器実測図

SB01 (1~10)



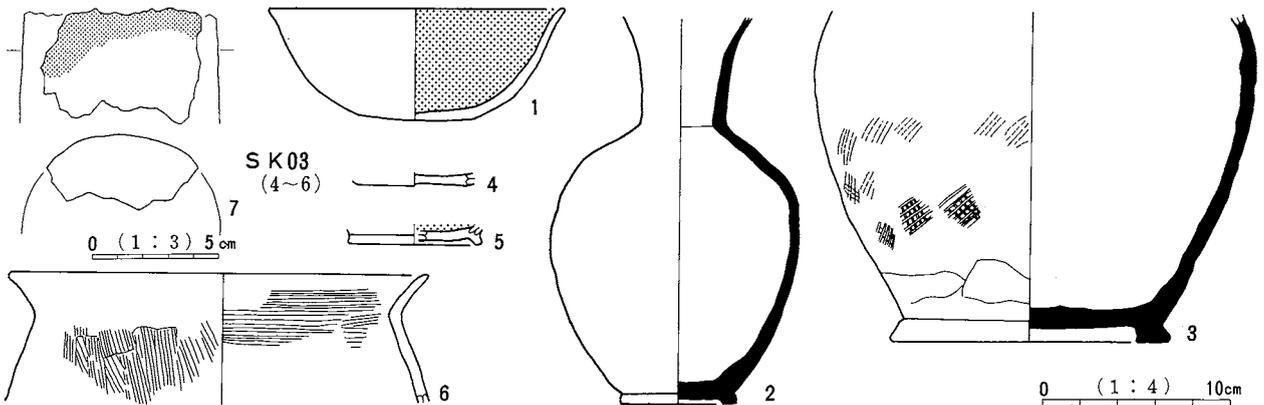
SB02 (1~21)



SK02 (7)

SK01 (1~3)

SK03 (4~6)

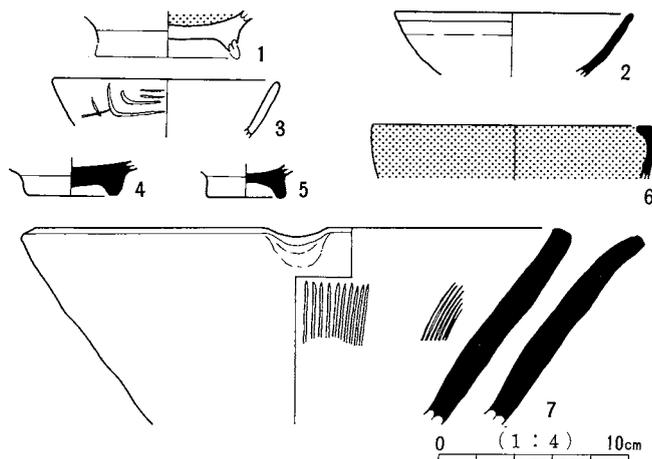


第173図 古代土器・土製品実測図

2 古代・中世

SB01 (第173図)

1・2は土師器杯A II、3は椀で、いずれも糸切り痕を残しており、硬質の良好な焼成である。4～6は黒色土器A杯A IIで、内面のヘラミガキは粗雑である。8は体部下半をヘラケズリするいわゆる「武蔵型甕」、9はやや口縁を外反させ粗雑なハケ調整で全体を仕上げる長胴甕である。10は、口縁をやや内湾させ、比較的体部の長い羽釜である。7は灰釉陶器の口縁内部に一条の沈線が入れられる深椀で、東濃産虎渓山1号窯式と思われる。



第174図 古代・中世土器・陶磁器実測図

SB02 (第173図)

1～6は土師器杯A II、7は比較的長い高台をもつ椀である。いずれも硬質で良好な焼成で糸切り痕を残している。8～17は内面のヘラミガキのはっきりしない黒色土器Aで、8～14は杯A II、15は小椀、16は椀である。20はロクロ調整によって仕上げられた小型甕、21は上半部を欠損しているが羽釜形の甕の可能性が高い。18・19は東濃産灰釉陶器で、前者は内面腰部に一条の沈線を巡らす深椀である。いずれも、大原2号窯式と思われる。

SK01・02・03 (第173図)

1～3は火葬墓と考えられるSK01より出土しており、いずれも完形に復原できることから、埋納された可能性が高い。1は黒色土器A杯A IIで、底部をロクロヘラケズリによって再調整している。2は口縁部を欠損しているが、ほぼ完形の在産の須恵器長頸壺である。3は須恵器の甕、あるいは凸帯付四耳壺の体部下半で、外面のタタキは消されている。時期的には、黒色土器A杯A IIより、9世紀前半と考えられる。

4～6はSK03より出土しており、4は黒色土器A杯A II、5は椀、6はハケ調整が施された長胴甕である。7はSK02より出土した羽口の破片で、外径10cmを測る。

遺構外 (第174図)

1は黒色土器A椀、2は灰釉陶器の東濃産大原2号窯式の椀であり、いずれも平安時代後半である。3は雷文帯をもつ青磁の小椀で15世紀代と考えられ、4・5は18世紀代の瀬戸美濃系陶器で灰釉が施される。6も同じく鉄釉が施される香炉である。7は珠洲系の片口の付く摺鉢で、内面に9条の卸目が付けられており、下半は摩耗している。時期的には、口縁の形態より13～14世紀と考えられる。

第5節 成果と課題

1 オンドル状施設をもつSB02について

今回の調査で検出された住居址2軒、土坑3基はすべて平安時代に属す遺構である。このうちSB02は北壁にカマドをもつ1辺3.5m前後の竪穴住居址で、出土遺物には大原2号窯式期の灰釉陶器を含み、10世紀前半に位置付けられる。この時期の住居址としては一般的な規模・形態であるが、石蓋を伴い、内面が焼けたコの字状の溝は類例が見出せない施設である。これについては、調査中にオンドルであるとの指摘を受け(註1)、新聞紙上や埋文センター年報にその概要を公表してきた。しかしながらその後の調査においても同様の遺構の検出はなく、野口遺跡と渡来人とを直接結びつける根拠もないため、その性格を疑

間視する声もある。本節ではS B02の溝をオンドルとする視点から検討してみたい。

日本で調査されたオンドル遺構としては、滋賀県穴太遺跡（弥生町地区）の「特殊カマド」と呼称されるS X22が最も著名で、確実な例である（第174図3）。報文では国内外の関連遺構との比較検討が加えられているため、本稿も多くを引用した。この遺構は7世紀前半に属し、厚さ30cmの盛土部分に石組みで築かれている。構造は焚き口、支脚石をもつ燃焼室（カマド本体）、焚き口に向かって左側につき、途中で折れ曲がる煙道からなり、上部は削平されて天井石は残らない。この遺構は百濟時代の扶蘇山城内第3竪穴建物址例と類似し、炊事兼暖房用の発達段階のオンドル遺構といわれる〔青山1989〕。その後、穴太遺跡S X22は礎石建物に、ほぼ同時期のS X24は切妻大壁住居に伴うオンドルで、渡来人の所産とされている〔花田1992〕。

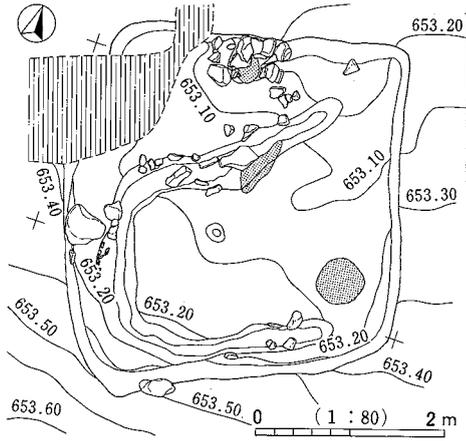
これに関連する長い煙道をもつカマドには、6世紀の例として神戸市郡家遺跡、7世紀の例として京都府綾部市の由良川左岸の青野遺跡・青野南遺跡・綾中遺跡、右岸の味方遺跡、舞鶴市桑飼下遺跡等がある。郡家遺跡では、6世紀初頭の住居址のカマド煙道は粘土を盛り上げて築かれ、焚き口から直角に壁にぶつかり、そこからL字形に折れて壁伝いに外へ出ている例がある。6世紀後半の住居址では煙道はトンネルで、壁外へ出て折れ曲がっている（第174図4）。由良川流域の遺跡では7世紀前半に「青野型住居跡」と呼ばれる特殊な住居が盛行し、竪穴住居の一角を掘り残してカマドを築き、L字形に折れ曲がる長い煙道がつくものである（第174図5・6）。ただしこれらがオンドルであるかどうかは検討が必要である〔申1993〕。

岡山県山陽町門前池東方（小片山）遺跡では、6世紀後半の竪穴住居に表面が黒くすすけた溝が伴い、トンネル状の煙道として暖房用に使われていたといわれる（註2）。

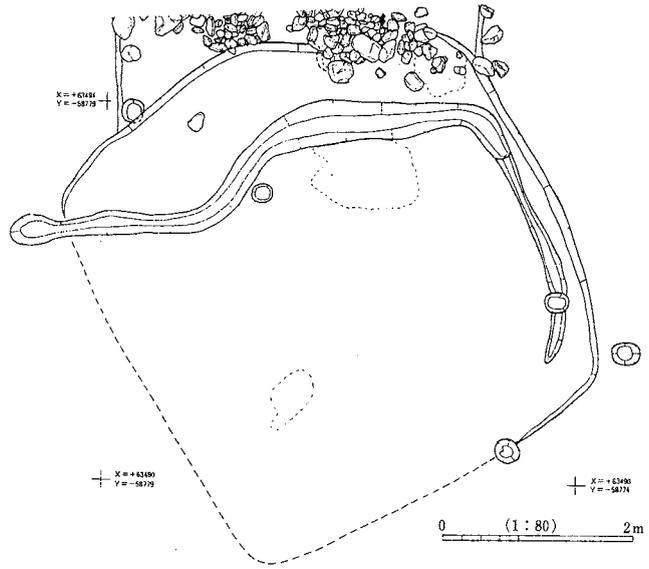
穴太遺跡例とその他の諸例との相違点としては、穴太遺跡以外はすべて竪穴住居に伴うことと、穴太遺跡が石で構築されているのに対してその他は土で構築されていることである。共通点は長い煙道をもつことと、炊事兼用ということで、時期的にも6世紀から7世紀前半までの比較的限られた年代に納まる。

野口遺跡例は竪穴住居に伴い、溝がカマド付近にあるとはいえ、明らかに分離しているため煮炊きの用をなさず、以上の例とは異なるタイプとみられる。また時期的には3世紀も下り、分布の点でも畿内から隔絶し、東国唯一の例である。この類例としては、大町市南入日向遺跡6号住居址を挙げることができる（第174図2）〔島田1992〕。これは9世紀後半の竪穴住居で、北東隅にあるカマド前を通して東壁際から西壁外に向かう溝があり、この溝内には所々焼土粒・炭粒がある。カマドは痕跡のみであったが、溝に接する床面の一部は焼けている。報文ではオンドルの可能性にふれておらず、周溝とも見られるが、野口遺跡例と構造が類似し時期も近いと、検討を要する例である。

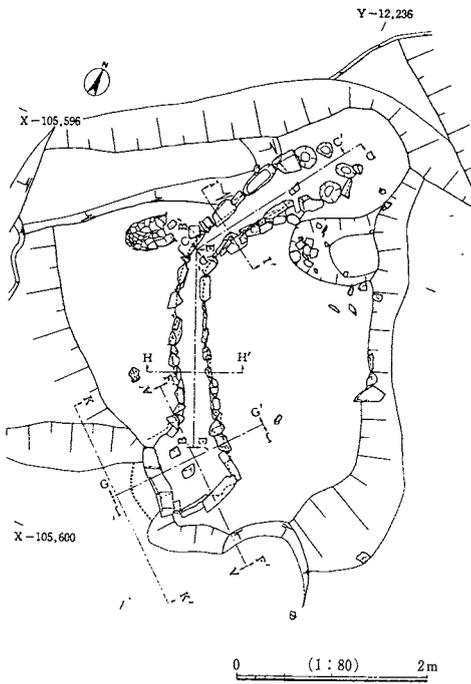
オンドルは朝鮮半島北部の高句麗の版図に属す地域で、初期鉄器時代に出現したといわれる。高句麗にオンドルが一般化するのには7世紀であり、渤海に受け継がれ、高麗時代の12～13世紀ころに朝鮮南部地域に伝わり、李朝時代後期に至って朝鮮半島のあらゆる住宅にオンドルが設けられるようになったといわれる〔中西1989、申1993〕。野口遺跡S B02の時期は朝鮮半島北部では統一新羅の末期から高麗初期、また渤海の後期に当たる。この時期のオンドルは床全体を暖める形式ではなく、土間の一部に煙道を通したものと考えられているから一脈通ずるものはあるが、資料が乏しいことと筆者の能力的限界から具体的な比較検討は控える。オンドルは一般に焚き口、または焚き口を兼ねたカマド、炕道（煙道）、熱を伝えるオンドル石（蓋石）、煙突等の要素から構成される。野口遺跡例の場合、炕道には石を用いず、地山を掘り込んだ溝であり、方形竪穴の形態に適應させたためかコの字状を呈する。オンドル石は焚き口部と思われるカマド手前に1枚残るのみで、当初からそうであったのか、他の部分は取り去られたのかは明らかではないが、住居址内から平石の破片も出土しなかったため、部分的に石を用いていた可能性が高いように思われる。炕道は末端付近が浅くなり、この先にある焼土も性格がわからず、煙突の痕跡は認められなかった。この



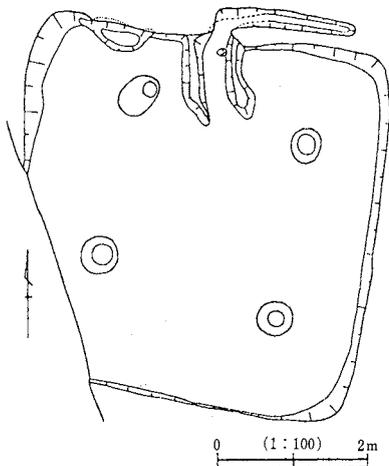
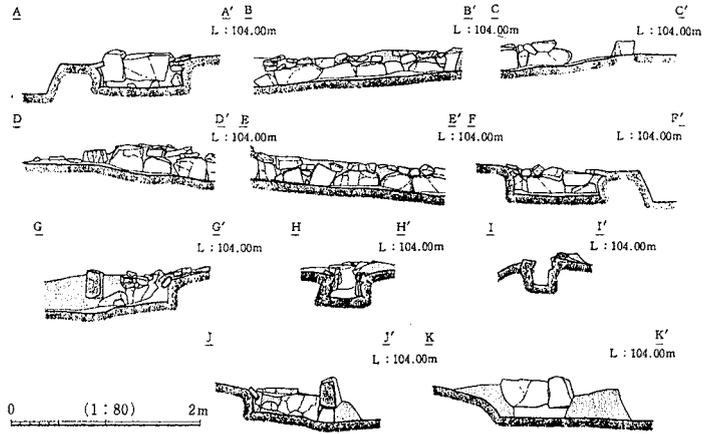
1 野口遺跡 S B 02



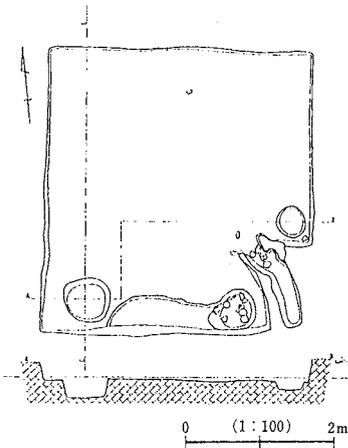
2 南入日向遺跡 6号住居跡



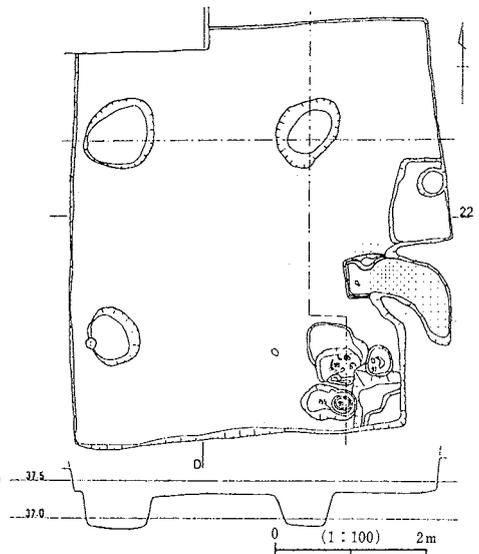
3 穴太遺跡 (弥生町地区) S X 22



4 郡家遺跡城ノ前地区
第24次調査 S B 06



5 綾中遺跡 S B 8102



6 青野遺跡第5次調査 S B 8103

第175図 オンドル・関連遺構 (4~6は〔青山1986〕より転載)

ようにオンドル一般の構成要素とは異なる点が多いが、しいてオンドルの構造形式に当てはめればL字形単炕道の変形と見ることができる。

では野口遺跡S B02の溝を暖房施設として用いるならば、どのような方法があったであろうか。最も火熱を受ける焚き口部のみに蓋石を置き、炕道に石をかぶせなかったとすれば板材を用いた可能性があろう。また煙突を必要としなかったとすれば、住居内に煙が充満しない程度の焚き方であろう。このような前提に立ち、焚き口部がカマドの手前であることを考慮すれば、カマドのおき火を蓋石の下に入れ、板材が燃えない程度に煙をめぐらして床の周囲を暖める方法が推定される。ただし、炕道に石を用いず、地山を掘っただけの湿気を帯びた溝の中を通った煙が天井の板を暖める方法では、ほとんど輻射熱を利用することはできず、きわめて実用性に乏しい施設と考えざるを得ない。

野口遺跡例がオンドルとすれば、出現の背景には渡来人が関与しているのであろうか。これについて思い出されるのが、第2章でふれた坂井村の安坂古墳群の存在で、野口遺跡からの距離は約3.5kmある。この古墳群は現在7基の積石塚方墳からなり、山腹にある1・2号墳は竪穴式石室を備え5世紀代の築造、山麓にある3・4号墳は後期古墳である。『日本後紀』延暦16年(797)3月17日条「信濃国の人、外従八位下前部綱麻呂に姓を安坂と賜う」は、渡来系氏族に定着地の地名を姓として与えた記事で、この「安坂」は坂井村安坂に比定されている。「前部」は高句麗の5部の一つであるから、綱麻呂は高句麗人であったわけであるが、定着年次は不明である。安坂3・4号墳の築造時期が7世紀ころとしても野口遺跡S B02とは約3世紀間の開きがあり、ただちに高句麗系氏族とオンドルを結びつけることはできない。仮に渡来人の末裔が長期間にわたって故国の伝統を継承したと考えても、筑北地方では現在古墳時代集落の存在は不明であるから、説得力に欠ける。古代信濃の渡来人はほとんど高句麗系といわれ、積石塚古墳の出現との関係が議論されてきたが、渡来人の定着地といわれる地域の古墳時代集落の調査例を見ても今日までオンドル遺構は知られていない。また、発掘調査の進んでいる松本平の古代集落からも発見はない。このことから、現状では筑北の古墳時代集落からオンドル遺構が検出される可能性はきわめて低いものと思わざるを得ない。したがって、野口遺跡に関して安坂古墳群と『日本後紀』の記事は状況証拠にはなるものの、オンドル=渡来人という図式は簡単には成り立たない。

ここまで野口遺跡S B02の溝をオンドル遺構として検討してきたが、日本国内の既知の資料には同じタイプがなく、東国では唯一例で最も新しい時期に属すること、朝鮮半島の例とはかなり異なる要素をもつこと、暖房施設としては必ずしも有効とはいえないこと、単純に渡来系氏族とは結びつけられないことなどを指摘できた。類例のない遺構のためはなはだ不十分な検討結果となったが、オンドルとしてはきわめて在地化した形態といえそうである。今後の発掘調査の進展によって同様な遺構の発見を期待するとともに、主柱を礎石上に載せる工法等、外来建築工法の移入の問題として検討される必要がある。また、渡来人との関連性が見いだしにくいならば、在地で自生的に発生する可能性がないかどうか問題となろう。筑北の民俗例として、冬季の炭焼き小屋ではおき火を床下暖房とすれば朝まで暖かいという話を耳にしたことがある。オンドルの原理とは異なるものの野口遺跡例の使用法と通ずるものがあり、興味もたれる。ひるがえって、もし野口遺跡例がオンドル遺構でないとすればどのような性格の遺構なのか、今は答をもち合わせていない。

註

- 1、奈良国立文化財研究所(当時)の宮本長二郎氏より、遺構写真からオンドル遺構との教示をえた。
- 2、これを報じた1993年2月28日付『山陽新聞』の記事によれば、九州にも検出例があるという。

参考文献

- 青山 均 1989 『穴太遺跡(弥生町地区)発掘調査報告書』大津市教育委員会
 伊藤友久 1992 「集落遺跡に係わる建築構造」(『信濃』Ⅲ・44-4)
 桐原 健 1989 『積石塚と渡来人』
 高 正龍ほか 1992 「朝鮮半島」『古墳時代の甕を考える』埋蔵文化財研究会
 島田哲男 1992 『南入日向』大田市教育委員会
 申 鉉東 1993 「初期鉄器時代に出現する暖房施設・オンドル」『朝鮮原始古代住居址と日本への影響』
 中西 章 1989 「オンドルの起源」『朝鮮半島の建築』
 長野県史刊行会 1988 『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』
 花田勝広 1992 「渡来人の集落と墓域」(『考古学研究』39-4)

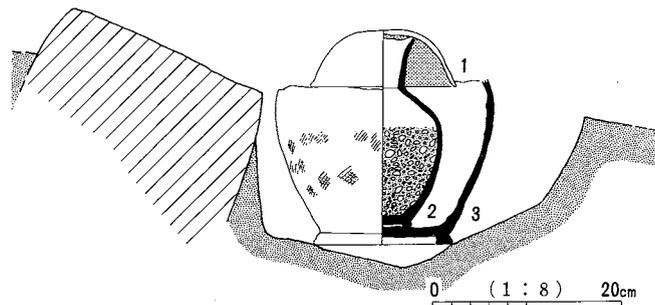
2 SK01・02・03について

上記の3基の土坑はいずれも平安時代に属す遺構であるが、それぞれ性格は異なっている。すでに第3節(2)で述べているが、ここで若干の補足を行う。

SK01は直径40cm前後の掘り方の中に須恵器壺(3)・長頸壺(2)・黒色土器A杯(1)が折り重なった状態で出土し、少量の火葬骨を伴ったことから、破壊された火葬墓であることを推定した。時期は9世紀前半である。図示した3個体以外に土器が出土していないことと破片がすべて接合したことから、これらが本来埋納されていた状態を、第175図に推定復原してみた。肩部から上を欠損した3を外容器とし、2に火葬骨を納め、1を2の蓋と考えてみた。または1・2の上に3を逆位にかぶせた可能性も高い。ただし、古代の焼き物の蔵骨器は短頸壺が主流である。SK01の場合、2を副葬品としても、1は3の蓋にはならず、3に納骨すれば直接火葬骨に土をかけることになり、推定に無理があろう。2が口唇部のみ欠損している点については、意図的なものかどうかは不明である。また、これらの土器が本来この位置にあったとすれば、掘り方の大きさから3の外側を覆う容器はなかったと思われる。

長野県内の古代の火葬墓は、現在8例が発掘調査されているのみで、偶然の機会に出土したものは6例知られている(百瀬1987)(註1)。発掘調査例には、尾根で区切られた斜面に立地する岡谷市の大久保B遺跡1・2号墳墓、膳棚B(白山)遺跡1号墓、大洞遺跡1号墓と、集落内にある塩尻市吉田川西遺跡SM01、更埴市五輪堂遺跡2号火葬墓・平田遺跡2号火葬墓、明科町ほうろく屋敷H6号住居址埋土中などがある。これらの時期は、大久保Bが8世紀前半、ほうろく屋敷が11世紀後半のほか、既出の6例も含めてすべて9世紀代に属す。吉田川西遺跡例は須恵器長頸壺を蔵骨器として、直接埋納している。野口遺跡例は墳墓の構造や副葬品は必ずしも明らかではないが、尾根に画された北向き斜面の平坦部に立地し、2軒の住居址の時期は10世紀代であること、遺構外や表面採集遺物にも9世紀前半代の遺物が含まれていないことから、集落から離れて単独で存在した可能性が高い。本遺構は小規模の土坑に焼物の蔵骨器のみ埋納することとあわせて、9世紀前半の火葬墓のあり方をよく示している。

SK02は直径1mをやや上回る浅い楕円形土坑で、羽口と4.3kgの鍛冶滓を出土した。土器は小破片のため、平安時代の中での詳細な時期は知りえない。土坑自体が焼けていないことから、鉄滓の廃棄穴と思われるが、住居址には鍛冶に関連する施設・遺物は見られ



第176図 SK01推定復原図

なかった。SK03は東地区唯一の遺構で、攪乱やトレンチのために全容は不明ながら、長さ5m以上・幅1m以上で、等高線に直交し約8度の傾斜をもつ掘り込みである。かなり削平されているが深さ30cm前後を測り、埋土の下層は焼土を交えない炭化物層である。少量の土器から時期は9世紀と思われる。この種の遺構は長野県内では「焼土壙」として報告されている。塩尻市の東側山麓部では比較的まとまって検出されており、竜神平1～7号、青木沢1号、八窪1・3号の焼土壙の調査例がある。遺物を伴わないためC¹⁴年代測定によって9～12世紀とされる〔百瀬1988〕。報文では長さ3m前後より大きく平面形が長方形のA類と、2m前後より小さいB類に分類されている。A類には煙道の有無があり、さらに床面に溝や小ピットをもつものがあるという。また、A類には焼土を交えるものが見られるが、B類には焼土は認められないという。野口遺跡例は形態はA類に属するが、焼土が認められない点ではB類の特徴をもつ。ただし、塩尻市内の諸例はほとんどが等高線の方に長軸がとおるため、傾斜がない。更埴市清水製鉄遺跡では10世紀後半の製錬炉・鍛冶炉合計44基のほか、「炭焼成土坑」26基が検出された〔青木1992〕。この遺構は、長さ1.5m・幅70cm・深さ40cmほどの楕円形ないしは長方形をなし、壁面は酸化し底面には炭層が見られるという。これらの遺跡は斜面に立地するが、平野部の遺跡でも検出例があるという。清水製鉄遺跡例は、遺構名称が示すとおり用途が明らかであるが、竜神平遺跡例等は製炭用の可能性があるものの、必ずしも明らかではない。野口遺跡例も用途は明らかではないが、一般にいわれるように製炭用と考えておきたい。全体が明らかでないのは惜しまれるが、時期がほぼ確実な1例であり、さらに検討がのぞまれる。

註

1. 古代の墳墓と焼土壙については、原 明芳氏から多くの教示をえた。

参考文献

- 青木一男 1993 「清水製鉄遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報9』
- 小平和夫ほか 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1 総論編』
- 遮那藤麻呂 1984 「日本各地の墳墓—中部・北陸」『仏教考古学講座』第7巻
- 百瀬久雄ほか 1987 「大久保B遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1—岡谷市内』
- 百瀬久雄ほか 1988 「竜神平遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2—塩尻市内その1』
- 原 明芳ほか 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2 吉田川西遺跡』

第6節 小 結

今回の調査では、平安時代の住居址2軒・土坑3基と、縄文後期土器・石器、中世・近世陶磁器少量が検出され、数量的には必ずしも豊富な成果とはいいがたい。しかしながら、オンドル状施設をもつSB02、火葬墓SK01、焼土坑SK03といった類例の少ない古代の遺構ばかりであり、多くの課題を提起することとなった。これらの遺構については前節で検討してみたが、いずれも結論には至っていない。ことにSB02については溝をオンドルとした場合にどのような使用法があるか、発生の背景が考えられるのか、可能性を模索してみたにすぎない。畿内から遠く、かつ時期が新しいことから、オンドルと見るには異論もあり、安坂古墳群とも直接的には結びつけられないため、ただちに渡来人がもたらした文物とはいえず、広範な視野から慎重な検討を必要とする。

これより一時期古いSK01にかかわる集落が調査区と隣接した野口遺跡の範囲内にあるのか、それとは離れた別の地点にあるのか明らかではない。おそらくこの被葬者は、9世紀に麻績盆地を開発した富豪層

の一人なのであろう。

S K03は東地区にあり、断定はできないが炭焼窯と推定した。時期は9世紀で、西地区の集落よりやや古い。あえて関連性を求めるなら、鉄滓廃棄土坑のS K02の存在から鍛冶に用いた炭の生産の可能性が考えられる。

野口遺跡の中心部は現在の野口集落内と推定されており、耕作による攪乱を考慮しても、わずか2軒の住居址を検出した調査区は、遺跡の山側の縁辺部に当たると思われる。7・8世紀と11世紀の追葬が確認された武士塚古墳以外に、古代遺跡の発掘がなかった麻績盆地では初めての調査例となり、部分的とはいえ古代の山村のありさまを明らかにできたことは重要な成果である。

本遺跡は青柳城の南麓に位置し、調査区の南西端には字「泰殿屋敷」の一部がかかる。伝承によれば、「泰殿屋敷」は青柳城とかかわる人物の屋敷で、主は女性であったという。試掘の結果、この地点からは遺構・遺物とも確認できなかった。しかし、13～14世紀の播鉢や15世紀の青磁から、本遺跡西地区が中世集落を含むことが明らかになった。中世の筑北は、甲越戦争のはざまにあって動乱の時代であった。ことに青柳城はしばしば戦乱の舞台となり、そのたびふもとの集落に戦禍が及んだことは想像にかたくない。発掘の結果は中世集落の内容にまで言及できるものではなかったが、今後の地域史研究の一助となることを期待したい。



野口遺跡現地説明会（昭和62年9月）



野口遺跡周辺の現況

第6章 ^{こし}古司遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は、東筑摩郡麻績・坂井村境に位置し、調査範囲は麻績村字さいくわん4,472-1を中心とする。麻績川が東西流から南西流に曲流する、谷底平野の幅が最も広がった、左岸の小規模な段丘上である。この地域は北に面し、前方の谷筋がほぼ南北方向のため、冬季の季節風である冠着おろしや番場おろしを正面から受けやすく、積雪もあり、寒気が一段と厳しさを増す。背後の南方には四阿屋山や城山の山すそが迫る。遺跡地とされた大半は水田で、山麓部は現古司集落である。高速道路用地内はすべて水田であった。JR篠ノ井線が麻績川と並走し、対岸には麻績神明宮を擁する宮本集落を望む（P L42）。

2 調査の概要

本遺跡は、当初14,500㎡が調査対象面積とされ、弥生時代の集落遺跡と予測された。しかしこの一帯は伏流水が非常に多く、地下数10cmも掘ると水がわき出すといい、また対岸の弥生時代集落である立石遺跡より一段低いため、遺跡の存在に不安がもたれた。したがって、まず予定地の全面にテストピットを設定し、試掘調査を行うこととした。この調査は昭和62年4月下旬から5月上旬に実施し、調査研究員4名が担当した。調査方法は、東西約220m・南北約60mの路線内に、東西方向の中心杭を基準に10m間隔で2×2mのテストピット22カ所を設定し、さらにそのテストピットを軸に南北方向へ10m間隔のテストピットを配した。ただし、南北列に関しては未買収地や用水路を避けるため、必ずしもこの配置にならない。結果的にテストピット70カ所、280㎡を掘り下げた（第177図）。この間、地元から数名の作業従事員の参加を得、すべて人力による。

テストピットは1～1.5m、あるいは2m以上の深さまで掘り下げたが、地下水がわき、かつ砂層と泥炭質層の互層となっていることが確認でき、遺構は皆無であった。遺物は打製石斧や銭貨など少量で、土層や地形の状況から、古代の居住地としては不適當と推定された。この結果本調査の必要性が危惧されたため、地質専門の調査研究員に古地形・古環境の復原を依頼するとともに、県教育委員会ならびに県遺跡調査指導委員会に事後の対応を諮った。地質調査の詳細は後述するが、端的にいうと調査地は中世以前は湿地帯という所見を得た。こうした調査の結果に基づいて上記の指導を受け、居住地や生産地を含めた遺跡の可能性はきわめて低いという結論に達し、本調査は見送った。

3 調査の経過

昭和62年

4月20日 筑北地区最初の調査に当たり、道路公団豊科工事事務所、麻績・坂井村教育委員会も列席し、発掘開始式を行う。テレビ局の取材があった。テストピット設定、掘り下げ開始。

4月24日 H-2の黒色泥炭層から打製石斧出土。この層を縄文時代相当として層序の相対年代を一応把握する。土層は泥炭質で深く、湧水のため掘り



発掘調査開始式（昭和62年4月）



第177図 調査区全体図

下げは難航する。

- 4月27日 松塩筑調査事務所の小口徹調査研究員に地質調査を依頼。付近一帯の古環境・地形形成過程について助言を得る。
- 5月1日 作業従事員による全テストピットの掘り下げ作業を終了。
- 5月6日 HO、H-2、H-3、G-1の断面精査と実測、写真撮影
- 5月11日 土層サンプリング、全体図作成、全景写真撮影を行い、調査をいったん中止する。
- 5月21日 県遺跡調査指導委員森嶋稔氏、県教委文化課原係長ら視察。後日、調査打ち切りを決定。
- 6月 図面・写真整理。遺物洗浄・注記。



試掘作業(昭和62年4月)

10~12月 遺物実測。図面トレース・図版作成等。

63年3月 原稿執筆。いったん収納。

第2節 表層地質と地形形成過程

1 地形・地質の概観

本遺跡周辺の地形は、山地・扇状地・段丘面・(河川)に大雑把に区分できる(第180図C)。山地は主に第三系の砂岩や泥岩から成り、急峻な地形を呈す。扇状地には古司や山秋の小規模なもの、山崎や宮本の中規模のもの、麻績や楡窪の大規模なものがある。段丘面には安坂川と永井川下流域に見られる高位のI、

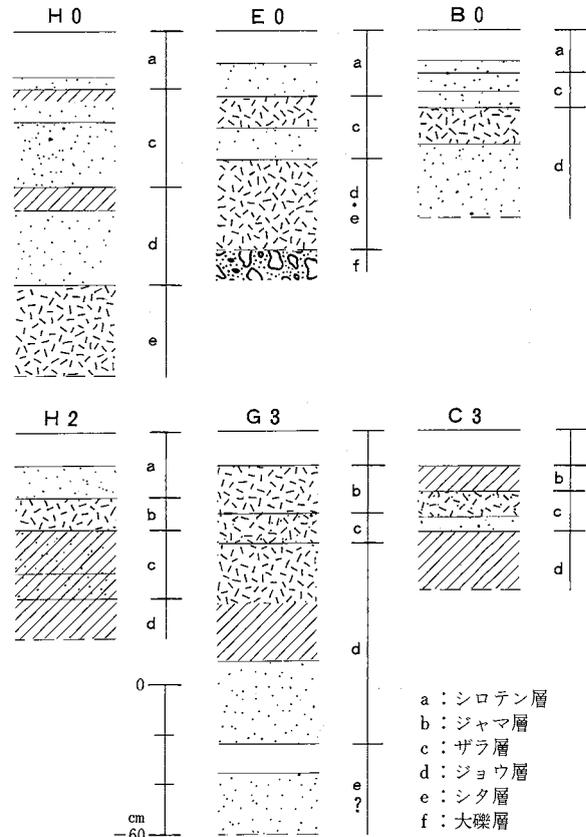
麻績川流域に見られ本遺跡の立地する中位のII、最も新しいIIIの3面がある。河川は安坂川と永井川が合流して麻績川となるが、かつて聖高原駅付近に麻績扇状地の発達によって閉塞部が生じ、麻績川がダムアップされ、後にこれが破堤して河道周辺の侵食が始まったと考えられる。

2 遺跡の表層地質

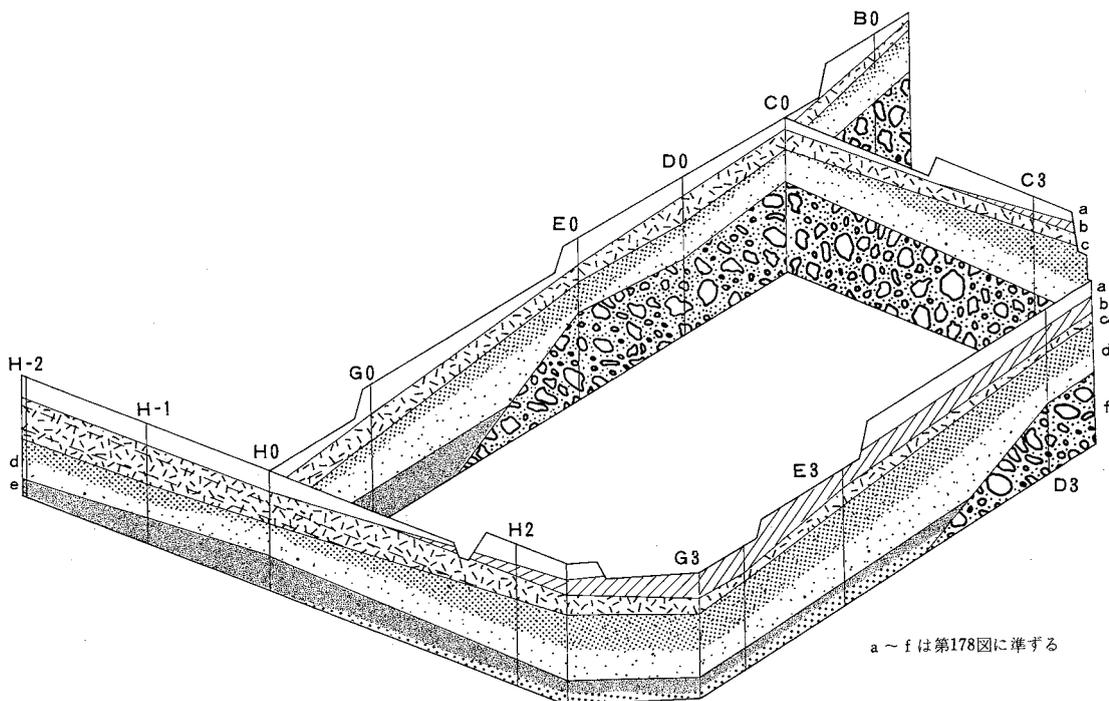
(1) 各土層の性質 (第178・179図)

a、シロテン層 (仮称) 最上位層で、多くは耕土化されたり削平される。主として細砂から成り、細礫を混入する淘汰の悪い堆積物である。細礫の中には周辺山地から供給された砂岩片が含まれ、これが白く目立つため“シロテン”とした。水田により鉄とマンガンが集積し、特にマンガンは斑状～結核状で湿田の影響が現れている。下限には中礫や河成砂の挟在がしばしば見られ、下位層との堆積の断絶を推測できる。本層は全体に北西方に緩く傾斜し、麻績川にかかわる堆積物と考えられる。なお、上面の水田区画は現地形に調和的である。

b、ジャマ層 (仮称) 淘汰の良いシルトから成り、泥炭化している。上部に水酸化鉄の沈着が見られるが、鉄分の多い地下水がシロテン層との境界部を多く通過したためと思われる。本層は南半に発達し、北方に層厚を減じて中心杭付近で消滅する。この点、本層が楔状に堆積したか、後に北半を削りさ



第178図 土層柱状図



第179図 パネルダイヤグラム

れたか、古司扇状地付近を調査しない限り明確な解答は得られない。なお、本層を含む下位層の上限には、水田土壌の痕跡は認められない。

c、ザラ層（仮称）シルト～中砂から成る単層の集合体。全体の傾向として、下部から上部へ粒度を細かくし、中間に薄層を挟在する。下限付近は必ず中砂層となり、石英粒を多量に含み水酸化鉄により弱く汚染されている。また、多くの場合アシやヨシの痕跡と思われる細身のタカシコゾウを密に含み、この傾向は北西部に顕著である。層厚は北西方に厚く、南方へ極端に薄くなる。また、東方へ分布高度を徐々に上げる傾向がある。最も厚い北西部では、上部が細粒、下部が粗粒のセットが3単位見られ、上部のシルト～細砂は腐植化傾向にある。上部と下部の境は漸移し、流速が徐々に衰えては植物が繁茂する湿原となり、流水に覆われてはまた静かな環境に戻るという繰り返しを表す。南部の薄層部は多くが中砂から成り、全体に腐植している。ザラ層堆積中は常に水際にあつて堆積量が少なく、継続して植生があったことを推測できる。南部のテストピットは水没のため調査が不能だったが、耕土下はすぐに本層の最下端層が出現するという。地形的には段丘面Ⅲに属し、より上位層が存在しない可能性が高い。したがって、少なくともジャマ層堆積後の新しい侵食面と考えられる。

d、ジョウ層（仮称）上部がシルトの泥炭層、下部が細砂から成り、下部から上部へ漸移する。しばしば下半は酸欠のために溶脱しており、低湿の環境下に長くあったことを想起させる。太身のタカシコゾウを粗に含んだり、植物繊維を混入したりする。本層は下位の大礫層の傾斜に沿って傾いて堆積し、下部の細砂層にラミナが発達する箇所もある。また、H-2で本層上部下限から打製石斧が出土した。出土位置が層理面でないこと、上位に落ち込みや攪乱が見られないことから原位置を保つものと思われる。

e、シタ層（仮称）主としてシルト層から成る粘性の強い泥炭。下部は細砂層に漸移する。植物繊維を含み、下半または全体が溶脱する。本層の層厚等の詳細は不明だが、上部の泥炭層が北方へ厚くなる傾向がある。

f、大礫層 東方のテストピットの比較的高いところで観察される淘汰の悪い円礫層で、本地域の基盤をなすものと思われる。東から西へ緩やかに傾斜し、E列付近で急激に高度を下げて地下深部に没する。分布状況は明らかではないが、上面の傾き具合から考察して、古司遺跡付近が本層分布の西限と思われる。

（2）堆積環境

本遺跡の土層をグルーピングすると、下位より①礫層、②粗粒・細粒のセット層、③シルトの薄層（ジャマ層）、④淘汰の悪い砂の4区分が可能である。

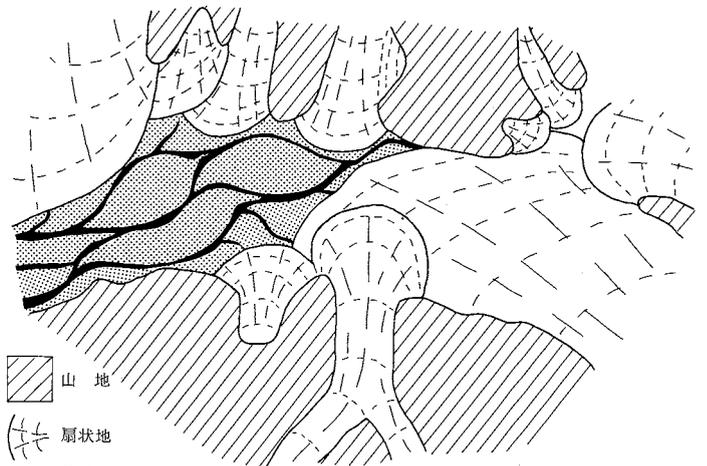
①は扇状地堆積物の本体に当たり、土石流堆積物であろう。おそらく楡窪周辺の最高位段丘面か扇状地の埋没扇端部と思われる。現在見られるいわゆる“沖積扇状地”の多くは、最終氷期の最盛期から後氷期の増温期（18,000～7,000年B. P.）の間にその骨格が形成されたらしいことを考え合わせると、本遺跡の基盤もこのころに形成されたと思われる。

②は本遺跡で観察される土層の主体を占める。単層やラミナが見られ、低地へ向けて傾斜していることから、扇状地前面を埋積した前置層様の堆積物と考えられる。これらの堆積によって扇端部は完全に埋没し扇状地前面が平坦地化されたと思われるが、このような前置層様の堆積が行われた背景として「閉じられた水域」、すなわち池または湖の存在が予想される（ここではプールと呼ぶ）。本地域では、地形・地質概観で推察した聖高原駅付近の閉塞部が、プール形成の主因となった可能性が高く、プールの範囲は段丘面Ⅱの分布域と整合すると考えられる。また、プールであった時期はジョウ層から打製石斧が出土していることから、縄文時代を含むかなりの期間であったと思われるが、その下限をどこまでさかのぼることができるか正確なところはわからない。

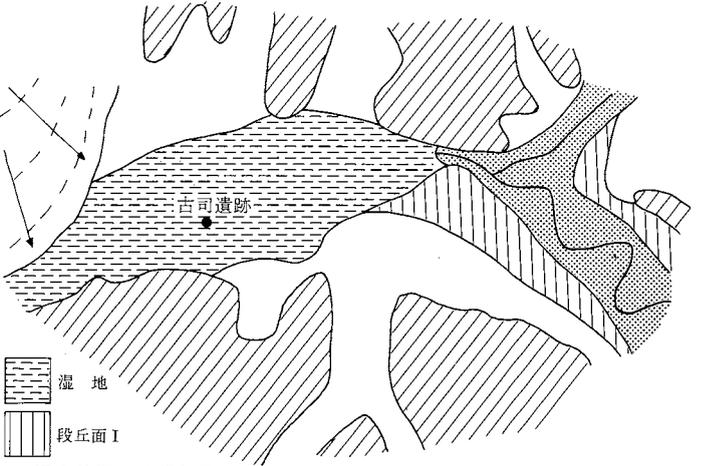
③は平坦面形成後に上面を薄く覆った頂置層相当層と考えられる。湿原として最も安定したところに堆積したもので、後の削剝を受けない限り段丘面II上を被覆していると思われる。

④は下位の堆積物とはまったく異なる環境下に堆積している。層相から推定すると氾濫性または泥流性の乱流堆積物であろう。前者ではそれまでのプールから古麻績川が出現し、その氾濫が考えられる。後者では上流側で密度の低い泥流が発生し、本地域一帯の平坦面にシート状に広がって堆積したと考えられ、この場合まだ古麻績川は出現していなかったと思われる。すでに述べたようにシタ層からジョウ層にかけてプール内は平坦化され、ジャマ層堆積期には平坦面は安定している。シロテン層はジャマ層の側方を切って北西方に低く堆積しており、事前に本遺跡の北西方向にくぼ地が存在しない限り、シロテン層のような乱流堆積物の側方傾斜堆積を説明できない。したがって、シロテン層が堆積するころには古麻績川は出現していたと考えられる。

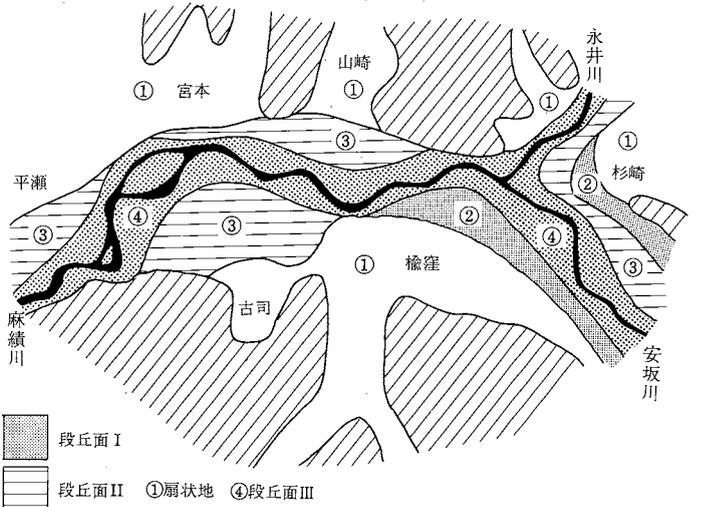
では、プールから古麻績川への環境の変化はいつごろか。明確な根拠がなく、はなはだ心もとないが、以下の理由により中世中ごろと考えたい。シタ層・ジョウ層・ザラ層上部およびジャマ層は泥炭化したシルトが主体であり、堆積に多くの時間が費やされている。また、歴史時代で1400年代と1700年代に小氷期があって、この間日本では降水量が多かったとの説が知られており、全国的に洪水が多発したそうである。確かに他の地域、例えば松本盆地や西日本でも中世と近世の河川の堆積物は厚く、上記の説にはうなずけるものがある。本地域の河川の増水期は2回、すなわち古麻績川出現時のプール溢水から破堤にかかわる増水、それにシロテン層堆積にかかわる増水が考えられる。特に前者の増水は上流からの多量の河水の恒常的な流入があったことが予想され、当時この一帯に近世的な村が形成されていたら想像をはるかに越える被害が生じただろう。こうした場合、おそらく免税などの措置がとられたはずで、その経緯等については文書や伝承に残されていると思われる。さらに近世の土木技術からすれば、当然ジャマ層上の湿田は開田がなされていたはずで、麻績谷随一の広々とした平坦面であるがゆえに条里状の方形区画の水田が営まれていたはずである。しかしながら、ジャマ層上限に水田土壌の痕跡はなく、水田区画は現地形に調和している。したがって、古麻績川の出現は中世後期以前、



A ~縄文早期頃



B 縄文前期～中世初頭



C 中世～近世

第180図 遺跡周辺の地形形成過程

ジャマ層の離水（プールの消滅）はそれより前の中世中ごろと考えられる。

3 地形形成過程（第180図）

① 最終氷期から縄文早期ごろまで

周氷河作用により山地は著しく削剝を受けて岩層が小谷を埋め、さらに増温期に入ってこれらの岩層や風化碎屑物が下流へ運ばれ、緩急の扇状地およびこれらの合流体が形成された。古司遺跡付近はその端部に位置する。

② 縄文前期から中世初頭まで

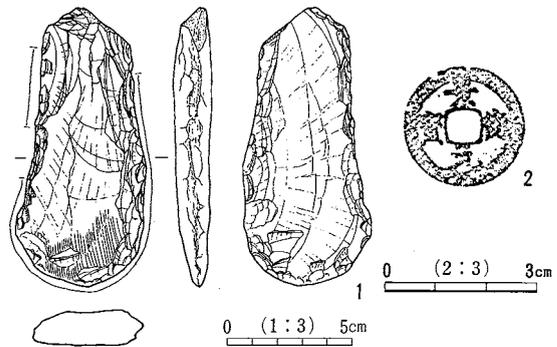
麻績扇状地の発達に伴って聖高原駅付近に閉塞部が生じるとともに、永井川と安坂川による流水と浮流物質が滞って本地域はプールと化した。シルト～中砂を緩慢に堆積し、時に流水に覆われながらアシやヨシなどが生い茂る湿原が広がっていた。

③ 中世から現在

中世の小氷期に入って降水量が増し、プールは溢水してやがて閉塞部が破堤した。この結果古麻績川が出現し、段丘面IIが形成された。当初は川底も高く、上流からの豊富な流水は破堤部に集中し、本地域で古麻績川を蛇行させ、段丘面IIを側刻して河川域を広げた。その後麻績川の氾濫によるシロテン層が段丘面II上を覆った。開田はそれ以降のことである。現在に至るまで破堤部が広がるにつれて麻績川は下刻を開始し、蛇行曲率を小さくしながら河道の安定化が図られた。やがて川底が下がり、河川域も狭まって段丘面IIIの形成をみる。

第3節 遺物

縄文時代としてはH-2のIII層から打製石斧1点が出土し層序年代の唯一の根拠となった（第181図1）。輝石安山岩の横長剥片を素材とする、撥形の完形品である。円刃を呈し、摩滅が著しく表面には擦痕がある。ほかにVから黒曜石破片が1点出土した。古代では、BO・HOのII層、X1から摩滅した土師器・須恵器の小破片が出土した。中世では、K2のII層から同一個体の内耳鍋10数片、YのII層上部から景德元宝（第181図2）1点が出土した。表面採集の遺物には、拳骨茶碗、染付茶碗、長石釉・鉄釉陶器片があり、18世紀以降の所産である。



第181図 石器実測図・銭貨拓本図

第4節 小 結

弥生時代の集落址として期待された本遺跡であったが、調査の結果、当地はかつて湿地帯で、人々の住めるような環境ではなかったことを確認するとどまった。以前本遺跡で採集されたという弥生時代遺物は、おそらく調査地南側の山麓出土と思われ、遺跡の中心もそちらと推定される。希薄な遺物散布地であったことを確認し、地形形成過程を明らかにして本地区の調査を終了したが、今後は麻績川右岸の弥生時代集落、立石遺跡に対して、左岸の古司遺跡の中心地が明らかになることを望みたい。

第7章 ^{ね おいり}子尾入遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は、東筑摩郡麻績村字子尾入5,442を中心に所在する。三峯山(1,131m)の南麓、標高690m前後の地点で、一本松トンネルの麻績側坑口に当たる。本調査区は坂井村の山崎集落へ下る南北方向の峡谷で、眺望・日照を欠く。現状はカヤや雑木が繁茂する荒地となっているが、約20年前までは畑・水田が営まれ、段状の地形に名残をとどめる。谷の中央に細い水路が走るが、飲用には適さないという(PL43)。

2 調査の概要

遺跡の内容が不詳のうえ、立地条件から推測して遺構・遺物が多出するとは考えられないため、試掘確認を行ったうえで本調査の方法を検討することとした。この調査は昭和62年4月下旬から5月上旬にかけて行い、調査研究員4名が担当した。現場は水道の仮設や通勤に難があるため、作業従事員の協力は得なかった。また、到底人力による掘り下げは無理で、重機によるトレンチ調査とした。

トレンチは幅2mとし、地形に合わせて調査区の中央を切る南北約200mのトレンチ1本(A)と、これに直交する東西50~80mのトレンチを約25m間隔で6本(B~G)設定した(第182図)。設定方法は、測量基準点として日本道路公団の中心杭、上り線STA581+00(X=51,251.9781、Y=-38,525.2610)と、同STA582+00(X=51,341.9410、Y=-38,481.6910)の値から座標北を算出し、基準高は後者の杭高691.325mを用いた。この結果、掘り下げたトレンチは総延長610m、調査面積は1,400㎡となった。遺構は確認されず、少量の遺物が出土したにとどまり、地質的な所見からも面的な調査は不要と判断されたため県教育委員会文化課、県遺跡調査指導委員会に諮り、土層断面を実測して調査を終えた。

3 調査の経過

昭和62年

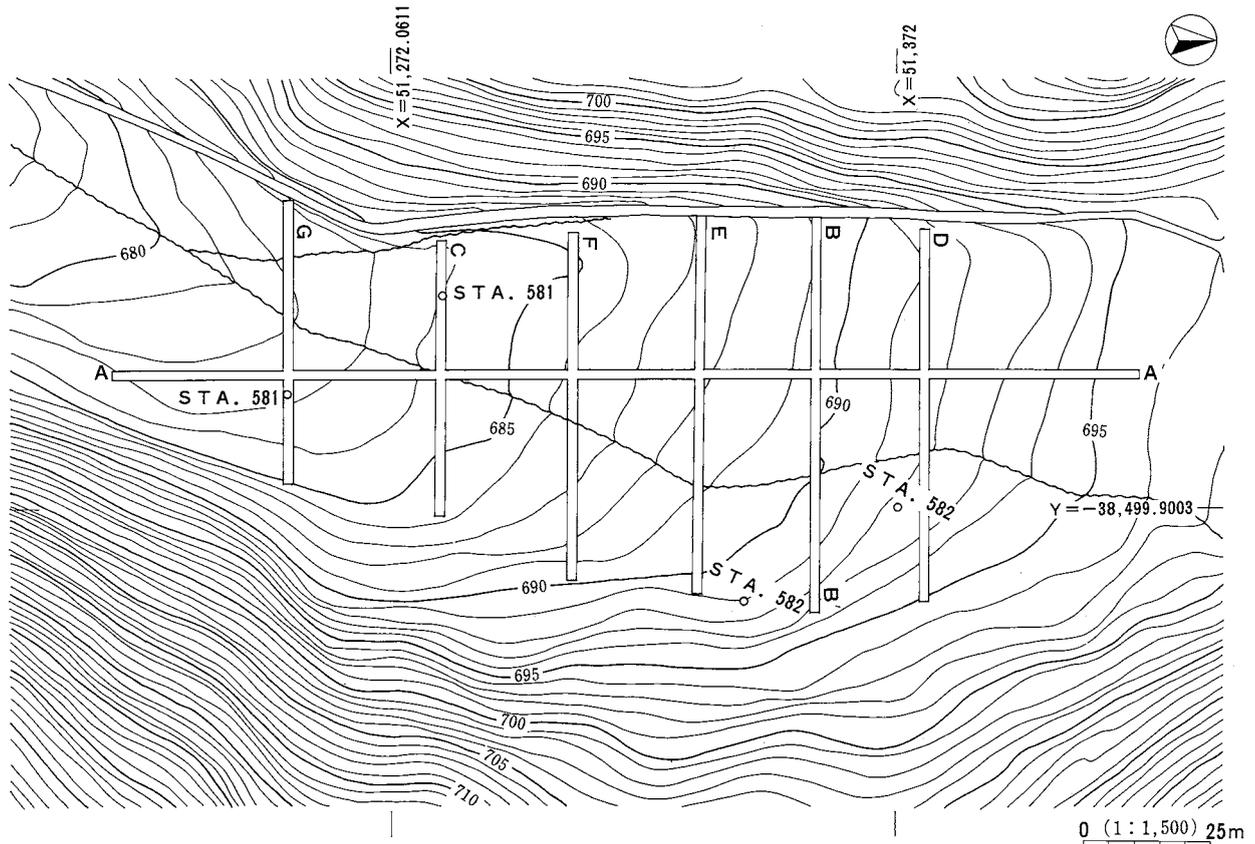
- 4月23日 東西・南北にトレンチ設定。草刈り。
- 4月27日 重機によりトレンチ掘り下げ開始。
- 5月1日 遺構・遺物なくトレンチ3本追加。
- 5月6日 トレンチ掘り下げ完了。
- 5月7日 土層断面を清掃し、実測に着手。
- 5月8日 土層実測を続行。重機で危険箇所を埋め戻す。
- 5月11日 Aトレンチで土器・石器片を採集。
- 5月18日 雨と湧水のため、トレンチの排水に終始する。
- 5月21日 土層実測を続行。森嶋稔氏、県教委文化課原係長ら視察。面的調査は不要と判断。
- 5月26日 Aトレンチで大型打製石斧を採集。
- 5月27日 土層実測を完了。機材を撤収し調査終了。
- 6月2日 トレンチの残り部分を重機で埋め戻す。
- 6月 遺物洗浄・注記。図面・写真整理。
- 10~12月 遺物実測。図面トレース・図版作成等。
- 63年3月 原稿執筆。いったん収納。



試掘作業(昭和62年4月)



断面精査(昭和62年5月)



第182図 調査区全体図

第2節 基本層序と地形形成

本遺跡の所在する三峯山南麓は、第三系の砂岩や礫岩を基盤とする。調査地点は大峰面群の侵食平坦面を解析した先行河川の流路跡で、南北方向に開口した谷地形をなし、周辺山地からの崖錐や上流部からの土石流など、粗粒堆積物に埋められている。この狭い谷は浅く粗粒堆積物は透水してしまい、水が得がたい。調査地点の表層の基本層序は、次のとおりである（第183図）。

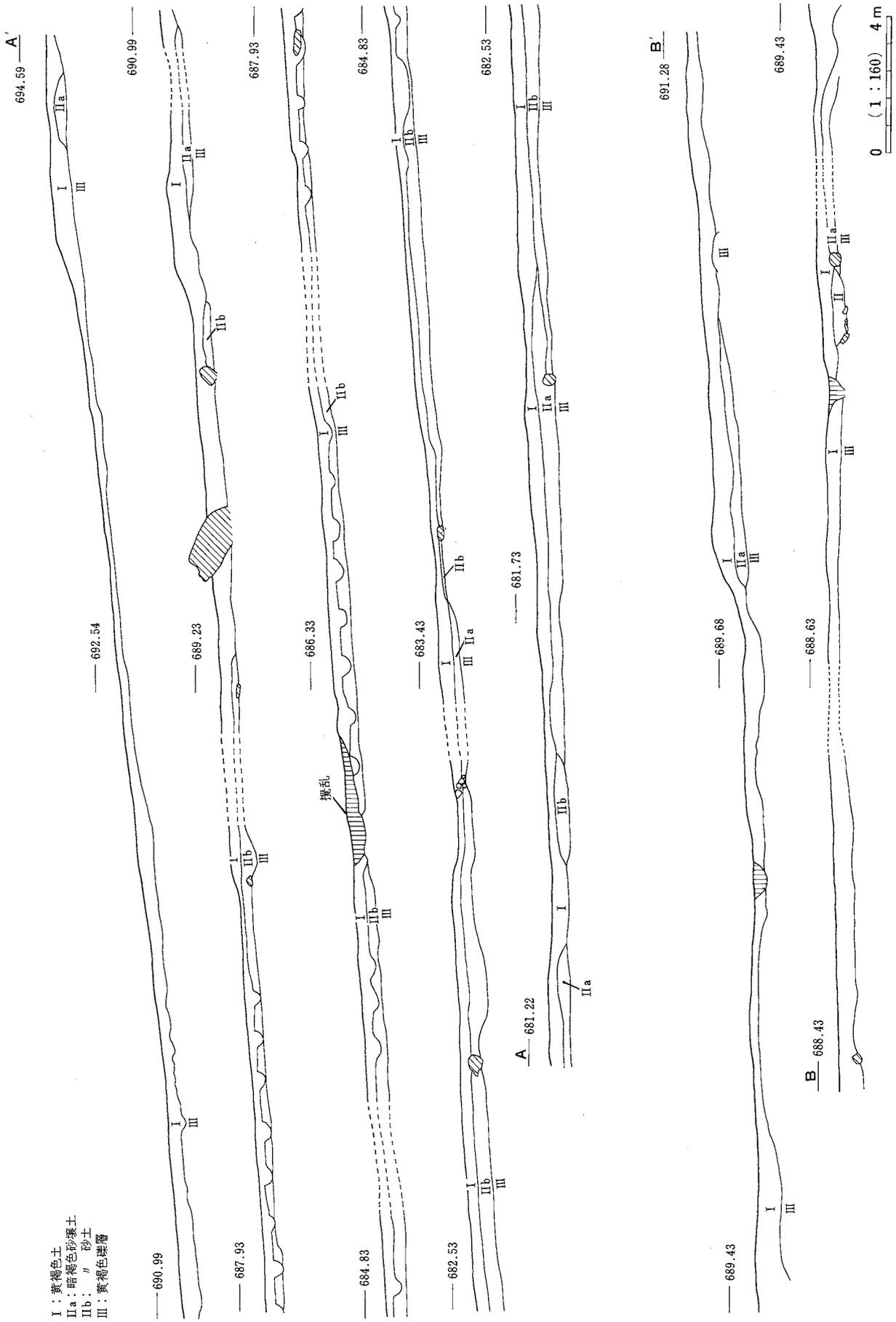
I 層：黄褐色腐植土。耕作土。植物根が多く入り込んでいる。

II a 層：暗褐色砂壤土。II b 層より風化が進んでいる。

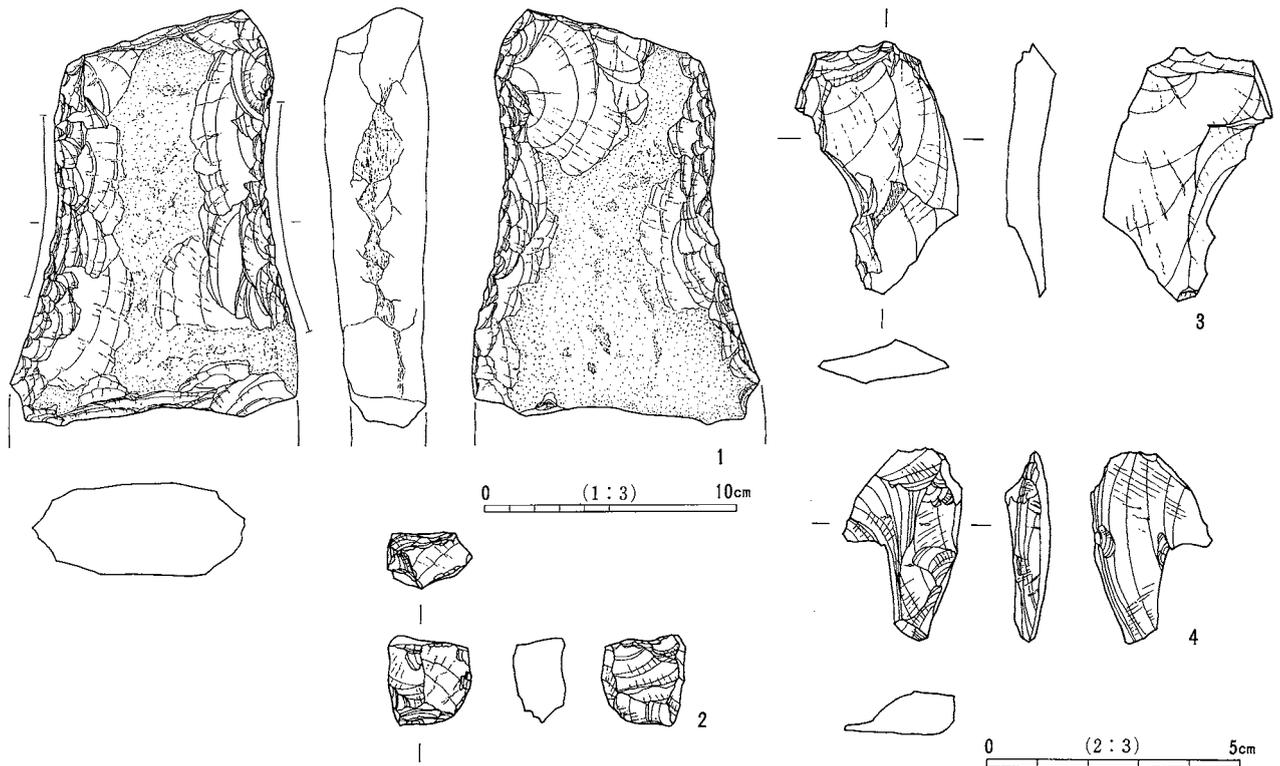
II b 層：暗褐色砂壤土。III層由来の風化礫を多く含む。

III 層：黄褐色礫層。砂岩または礫岩のいわゆる腐り礫層。基盤層が風化で粘土～土砂化した部分。

II層は土壤のB層、I層はA層に相当する。II層は調査区の中では均等な堆積を示さず、地表からIII層までが浅い場合、II層を欠く部分が多い。また、耕作や抜根による凹凸がII層上部を攪乱している。南北のAトレンチは100分の7.5ほどの勾配をもつ。北側ほど急傾斜で地表からIII層まで30～50cm、南側は緩傾斜でIII層まで80～100cmに達する部分もある。この部分ではII層は厚く泥質となる。また、東西のBトレンチは100分の4ほどの勾配で西に傾く。斜面下方のCトレンチは100分の3.3ほどの勾配で西に傾き、東側ではIII層まで120cmに達する。東西トレンチ断面にはいくつかの埋没した沢が露呈し、晴天下でも湧水がある。II層中にはIII層上面に接して多数の大礫が見られるが、河道の定まらない流路の土砂流出で残存したものであろう。また、調査区から100mほど南で谷幅が狭まり、傾斜を強めて山崎の扇状地を形成している。このため調査区南側は滞水しやすく、しばしば雑木の生い茂る湿原となったと推定される。



第183图 土層図



第184図 石器実測図

第3節 遺物

図示した石器はいずれもAトレンチII層の出土である。第184図1は打製石斧で、頭部と刃部を欠損するが現存長16.5cm、最大幅11.4cmを測る大形品。輝石安山岩の転石を素材とし、両面の中央に広く自然面を残す。側縁からの剥離で成形し、入念に刃潰しされている。いわゆる撥形に属し側縁はわずかに内湾する。2は硅岩の石核で多方向から剥離され、下端は潰れている。3・4は剥片である。3はホルンヘルス。縦長で表面上端には細かい剥離痕をもつ。表面の一部に縦方向の擦痕が見られ、石器の欠損部分の可能性がある。4は黒曜石。横長で表面は多方向から粗雑に剥離される。裏面の剥離は側縁で階段状をなす。

図化にたえなかった遺物には内耳鍋、美濃大窯期の灰釉皿、近世の地元産らしい鉄釉陶器がある。

第4節 小 結

今回の調査では遺構は検出されず、縄文時代、中世末～近世の遺物が少量出土したにすぎない。険しい山地を背後に控え、日照にかけ閉ざされた狭い谷は居住には不向きで、縄文時代の狩猟・採集地としても、遺跡として痕跡をとどめないものと思われる。本調査区の拠点となる遺跡は、かつて遺物が出土したという北側の平坦地、現在果樹園となっているあたりであろう。また、中・近世の遺物は、山崎集落から一本松峠の往来や、山仕事のさいにもたらされたのであろう。